DreamBaseball～ポケモンたちが野球するよ！～

オレンジ色のエース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤｒｅａｍＢａｓｅｂａｌｌ～ポケモンたちが野球するよ！～

【Ｎコード】
Ｎ６８４０Ｍ

【作者名】
オレンジ色のエース

【あらすじ】
あのポケモンたちが野球にチャレンジ！
どんなドラマが待っているんでしょうか。ハラハラドキドキワクワクの物語が今プレイボール！

第1話：「ある女の子のほのぼの自己紹介」の巻（前書き）

はじめまして！内容は短いですが、第1話を作成しました。
ではＤｒｅａｍＢａｓｅｂａｌｌ～ポケモンたちが野球するよ！
～のプレイボールです！

第1話：「ある女の子のほのぼの自己紹介」の巻

「今日はいい天気だわ～。こんな日は何かいいことがありそうだわ～。」

ホント、今日は青空が見渡す限りに広がって、お日様もポカポカあたたかい…。

あたしはピカチュウ。“きのみ”集めのピクニックが大好きな女の子なの。
色んな所に行ってたくさん“きのみ”を集めて、みんなで美味しいお料理を作ってお食事会をするの。

それでね、今日も友達とピクニックをする約束になっているのよ。

ちなみにあたしたちが住んでいるのは、“ポケモンカントリー”と言う場所。ここは“あさひタウン”“ゆうひタウン”“にじタウン”“まんげつタウン”“ながれぼしタウン”という5つの町があるんだけど、どこでも晴れてそうで絶好のピクニック日和だわ。

友達が待っているのは、あたしの住む“あさひタウン”の真ん中あたりにある自然公園なの。遅れ無いように急いで行かなくちゃ。

第1話：「ある女の子のほのぼの自己紹介」の巻（後書き）

第1話完成です！

ピカチュウ：「何これ！野球と関係無いじゃない！」

作者：「ちょっと最初のうちはこんな感じかな。君の友達の事もあるし」

ピカチュウ：「終わり方中途半端なのは？」

作者：「次は主人公の登場なのさ！」

ピカチュウ：「ガーン！ショック！あたしじゃないの！？（号泣）」

作者：「いきなりへこんだよ…大丈夫か（汗）」

第2話：「休日は平和で楽しく……？」の巻（前書き）

ごきげんななめなピカチュウはほっといて、第2話プレイボール！

ピカチュウ：「なんて作者なの…」

第2話：「休日は平和で楽しく……？」の巻

「もう、遅いなあ～ピカっちは～」

ここは、あさひタウンの自然公園。今日は、友達のピカっちことピカチュウときのみ集めをする約束何だけど……。

「まあいいじゃないカゲっち。ピカっちが遅れるなんていつものことじゃない。」
「そりゃ～いつものことだけどさ～……」

僕は思わずため息をした。ちなみに僕はヒトカゲ。みんなからは、“カゲっち”と呼ばれているんだ。

隣で僕と話しているのは女の子のチコリータだ。彼女も“チコっち”と呼ばれているんだ。

僕ら3匹は小さい頃からどういうことか、不思議と友達になり、特に争いごとをしない仲良し組となっている。

そして僕ら3匹は今年中学に入学したばかりだ。「カゲっちくん！チコっちちゃん！待たせてごめんね！」

やっとピカっちが来たみたいだ。

まあチコっちの言う通り、彼女が遅れるのは、いつものことなんだけど……。

「おはようピカっち。さて、3匹とも揃ったみたいだし、きのみ集めにいこうか」

「うん！たくさん集まるといいわね。」

僕ら3匹は、きのみ集めに出発した。

そして、出発してから約1時間。僕らは、目的地に着いた。

僕らがきのみ集めをするのは、あさひタウンの隣町、ゆうひタウンとの間にある小高い丘が特徴の“おかのもり”という場所だ。

さ～てと、今日もたくさん集めるかな。ピカっちもチコっちも始めたみたいだし。

「ここにオレンのみがたくさんあったよ～」

「モモンのみ、カゴのみ、それにナナシのみがあったわ～」

「クラボのみとキーのみもみ～つけた！」

僕も含めて2匹とも順調にきのみ集めがはかどっているようだ。みるみるうちにきのみの山が出来ていく。

「ちょっと休憩しない？僕疲れてきちゃった……」

集め始めてからどれくらいの時間が過ぎたんだろう。さすがに疲れた僕は2匹に聞いてみた。

「今何時なの？」

チコっちが聞いている。ピカっちは自分の腕時計を見ている。

「あれ？もう1時じゃない。もうこんな時間だったのね。」

「え！？そんなに時間経っていたの？どうりで疲れたワケだ。」

どうやらたくさんきのみを集めているうちにお昼を過ぎていたようだ。僕とチコっちはその場で座り込んでしまった。

でも、ピカっちはまだ元気があり余ってるらしく、『どうしてそんなに疲れているの？』というような顔で僕たちを見ている。

「もうこれくらいでいいんじゃない？持って帰るの大変だと思うよ。」

僕はきのみの山を指差して、ピカっちに聞いてみた。僕たちが背負って来たリュックで果たして持って帰ることができるだろうか？

「確かに……。あたしたち知らない間にこんなに集めていたのね。」

チコっちも少し苦笑いだ。まあ3匹でそんな量を集めたから当然か。でもピカっちはなぜか困った顔をしている。

「ウ～ン。もうちょっと集めたいんだけど…ダメかしら？」

え！？まだ集める気でいたんかい！

さすがに僕とチコっちはそんな答えが返って来るとは思わず、驚きの表情を隠せない。

「まだ集めるの？あたしお腹も空いてきたし、それにリュックの中に全部入らなくなっちゃうよ？」

チコっちがピカっちにそうやって聞いてみた。

「確かにそうね……。……分かったわ。お昼ご飯食べたらあさひタウンに帰りましょう」

と、ピカっちは答えてくれた。でも、ピカっちは本当はもっときのみ集めを続けたかったようだ。ちょっと残念そうな表情をしている。

まあ、いつも彼女はきのみ集めが楽しくてしょうがないんだろうな。（実際楽しそうにニコニコとしているのも見たことあるし。）

無理矢理納得させられた感じだ。『ちょっとだけかわいそうなことをしてしまったかな。』とか思ったのは僕だけだろうか？

でもこれ以上きのみを集めたら、とても持ち帰るなんて出来ないし。ここは納得してもらわないと困る。

そういえばお腹空いてきたな。お母さんが作ってくれた弁当食べよう。僕はリュックから弁当を取り出した。ピカっちも、それからチコっちも　弁当を取り出した。

「いっただきます」

僕ら3匹は弁当を食べはじめた。

「そういえばさぁ。カゲっちとピカっちは、もう部活とかって決めたの？」

しばらくしてチコっちが弁当を食べながら僕たちにそんなことを聞いてきた。

「部活かぁ～。まだ決めてないなぁ」
「あたしもまだ決めてないわ」

僕もピカっちもそう答えた。

「チコっちは決めたの？」

ピカっちはチコっちに聞いた。何かやりたいことがあるんだろうか？

「いや。まだ決めてないわ」

チコっちもまだ決めてないようだ。

僕らが入学したあさひポケ中学では、何か部活をしなければならない。

僕らが悩んでいるのはそのためである。

「そういえばさぁ。聞いた話なんだけど、明日学校で放課後に部活の公開をするそうだよ。」

僕はそんなことがあったことを思い出した。

「じゃ、その時に3匹で見てみましょうよ。」

チコっちは提案をした。僕とピカっちの返事はもちろんＯＫである。

それから２０分位が経った。

「さて、そろそろ帰ろうか2匹とも」

「そうね。今日もたくさんきのみ集めたし」

「でもやっぱり足りないかもしれないわ」

ピカっちはまだきのみが足りない足りないと言っている。　だが、僕とチコっちは半ば無視して集めたきのみをリュックに入れ始めた。

げ！やっぱりギリギリだ。きのみ集めるのやめて良かった。

あのきのみの山は相当の量だった。僕らのリュック（大きさは僕らのたかさを考えて想像して下さい。）で、ビチビチだ……。

「お……、重たい……。」

試しに僕が持ってみたが、これじゃ支えるのがやっとだ。

チコっちやピカっちは女の子なのでなおさらこれを持てないのは目に見えている。

これではしかたがないので、きのみを3分の1ほど置いていくことにした。

さすがにピカっちもこの時ばかりは何も言わなかった。むしろ申し訳なさそうな表情をしている。

ちなみに余談だが、僕はこの時自分がリザードだったら確実に荷物持ちをさせられただろうなと若干恐怖感を覚えた。

チコっちにいたっては、

「ヒトカゲくんで無理ならしょうがないわね」

とわざとニックネームで呼ばず、しかもすごい嫌な笑顔で僕をみていた。

さてきのみを置いてきて軽くなったことだし帰ろうかな。

……ん？なんだ？このズッシリ感は。しかもしっぽの辺りがずいぶんと重いぞ……。

不安な気持ちになった僕は後ろに振り返った。そして見てはいけないものを見てしまった……。

「やっぱり荷物持ちなの？」

しかもしっぽにひっかけるかフツー。

「しっぽの炎で燃やさないでね」

ピカっちがそんなことを言った。さっきかわいそうだとかって思って情けをかけたのに。

「いやだ！いやだ！自分たちで持って帰ってよ！」

僕は半分泣きながら2匹の荷物をしっぽから降ろした。

……何だよ2匹ともキャハハって笑っているぞ。

「ゴメンね。ジョーダンよ。カゲっちって、ホントにダマされやすいわね。オマケに泣き虫だし」

さ……最悪だ……この2匹。しかもいちばん痛いところ突かれた

し。

……ハァ。僕だけテンションがた落ちで帰るのってどうよ。

ともかくそんなこんなで、あさひタウンに帰ってきたのは夕方だった。

「また明日。学校でね」

僕ら3匹はそれぞれ家に帰った。こうして僕らの休日は終わった。

第2話：「休日は平和で楽しく……？」の巻（後書き）

第2話完成です。

ピカっち：「それで誰なの？主人公」

カゲっち：「それは、何を隠そう僕なんだ！」
ピカっち：「ふ～ん」
カゲっち：「な……何さ？ちゃんとビックリしてよ」

ピカっち：「ゴメンね。何かダマされやすくて、泣き虫のキミじゃイメージつかなくて……」

カゲっち：「そこまで言うことないじゃん（半泣）」

作者：「またへこんでいるのがいるぞ。何か不安になってきたぞ（汗）」

第3話：「月曜日の朝はドタバタだ！」の巻（前書き）

2匹もへこんでいるから不安だ。（汗）
でも、第3話プレイボールです！
2匹：「……」

第3話：「月曜日の朝はドタバタだ！」の巻

ピカっちとチコっちにいじられてしまい、僕にとって災難な休日（？）も終わり、今日からまた一週間が始まる……。

そう、今日は月曜日なのだ。僕、月曜日の朝ってニガテなんだ……。

「イタッ！起きるからメガトンパンチするのやめて～！」

て、叫ぶのは僕。

月曜日の朝からメガトンパンチは相当なテンションダウンだ……。

「全く……。カゲちゃんは……。もう中学生何だから、少しは自分で起きられるようになりなさい！」

なんて朝から説教するお母さん。人間界的に言えば、♀のリザードンである。

僕のお母さんは、基本的には心配性ですごく優しいけれど、ひとたび怒らせると“メガトンパンチ”で、相手をＫＯしてしまう事が

ある。

「もう、早く朝ごはん食べなさい。そうじゃないと遅刻するわよ」

確かに部屋の時計は、８時を指している。８時３０分までが登校時間だから、かなりギリギリだ。

僕は急いで朝ごはんを食べ、急いで学校の準備をして、家を出発した。お母さんも、

「気をつけて行ってらっしゃい」

と、優しい笑顔で見送ってくれた。

学校へ向かう途中に、ピカっちとチコっちに会った。

「ハァ……。ハァ……。おはよう……。ピカっち。チコっち」

「おはようカゲっちくん。何かすごく息切れしているけど、大丈夫？」

ピカっちが優しく声をかけてくれる。

「全く……。カゲっちも朝ニガテよね。ピカっちもそうだけど。何でニガテなのか分からないわ」

チコっちが、あきれた感じでそう言った。僕は笑ってごまかした。ピカっちも恥ずかしいのか、少々顔を赤くしながら苦笑いした。

例の仲良し3匹組はそのまま仲良く話をしながら、学校へ向かった。

「そういえば、きのみってどうしたのさ?」

昨日やっとの思いで、持ち帰ったあのきのみたちのその後を聞いてみた。

「あの後ね、パパがさぁ、きのみジュースにするかって言って、何かプロのポケモンさんへ頼んだみたいなの」

ピカっちの家は、きのみを使った料理店なのだが、その店主であるピカっちのお父さんでも他のプロのポケモンに頼むほどのジュースらしい。

「そうなの。じゃあそのきのみジュースが早く出来るといいわね」

「うん！パパ頑張ってねって言ったら、楽しみにして待っているんだよなんて言ってくれたわ。あたしなんて、ワクワクして寝られなかったわ」

いや、ピカっちだけではない。僕とチコっちもなぜかワクワクと楽しみになってきた。

と、そう言っているうちに学校に着いた。

僕ら3匹組は、昔からクラスが別れた事は無く、このあさひポケ中学でもやっぱり同じクラスだ。

『こればかりはもうミラクルなんだよな…。まあ、3匹とも一緒の方がいいに決まっているけど』

僕は1年2組の教室の自分の席で考えていた。

『でも、席まで隣同士っていうのはちょっと出来すぎてるかも。なんかの漫画じゃあるまいし……』

なんてボーッとしているうちに朝のあいさつをしていたらしく、ピカっちがそっとその事を僕に教えてくれた。

へえ～……。どうりで僕だけ座っているワケだ……。って！立ってあいさつでしょ！あいさつ！

慌てて立とうとした僕だったが、そのときに足を机の脚に勢いよくぶつけてしまった。

かなり痛く苦しい表情になってしまった。これであいさつなんて出来るかなぁ。

……あれ？何か様子がおかしいぞ？なんでみんな座っているんだ？

辺りをキョロキョロとする僕。するとピカっちが、そんな僕に真っ赤な顔つきで教えてくれた。

「もう！カゲっちくんってば！朝礼は終わったのよ。早く座って」

僕はクラスメイトの笑い者になっていた。教室全体が笑い声で包まれる中、僕はぶつけた足の痛みをこらえ、１匹座った。

なんでワンテンポずれたんだ？これじゃただ足ぶつけただけじゃ

ん……。

ピカっちとチコっちは、あきれた感じで頭を抱えている。

「全くカゲっちてば～。昔から、おっちょこちょいなんだから」

ごめんなさい2匹とも！どうも月曜日の朝はニガテなもの　なんで。いつもよりおっちょこちょいな僕を許して下さい！

まあ、こんな風にドタバタしている僕はほっといて、簡単にクラスを紹介しておこう。

まず、担任の先生だが……。キュウコン（♂）先生だ。担当は国語だ。きっと解りやすいんだろうなぁ。

クラス自体はそんな大きく無く、２５匹だ。まだ話したこと無いポケモンたちがたくさんいる。

僕ら3匹組の席の
位置は、僕が縦に5列並ぶ机の真ん中の先頭。つまり扉から見ても、窓から見ても3列目。

こんな場所でドタバタしてたら、相当目立っただろうなぁ……。

ピカっちは僕の右隣。窓側から2列目の先頭。チコっちはピカっちの後ろにいる。

当然この位置にいたら、おしゃべりはできないし、おまけに授業で先生に当てられやすいのは目に見えている。

しかし、僕も含めピカっちもチコっちもあまりおしゃべりしないほうなのだ。

だが、問題点はある。それは、僕がさっきみたくドジをすると、たちまち笑いの的になるのだ。

ピカっちたちはそれが不安だったようで、先ほども「やっぱり…。」とため息まじりでつぶやいていた。

さて、簡単に話をしていたらキュウコン先生が今日の予定を話をしていたぞ。

何と言っても今日は部活の紹介があるからな。周りもきっとどんな部活があるか楽しみだろう。僕たち3匹組もかなりワクワクしてきた。

この時、僕たちはまだあんな物語が始まるとは、夢にも思わなかった。

第3話：「月曜日の朝はドタバタだ！」の巻（後書き）

作者：「第3話完成だ！パチパチパチ！」

カゲっち：「なんか僕って相当ダメダメ主人公じゃない？ひどすぎる～！（泣）」

ピカっち：「あたしなんてやっぱり主人公じゃないわ～！（泣）」

作者：「2匹ともとうとう泣いちゃった…。不安だ（汗）」

第４話：「ニコニコ笑顔のトゲチック」の巻（前書き）

チコっち：「……？何で２匹とも泣いてるの？」

作者：「もちろん！初めての僕の作品に登場できているから！」

チコっち：「あ！なるほどね～」

作者：「ようやく笑顔なポケモンが来てくれた。ほっとしたから第４話プレイボール！」

第4話：「ニコニコ笑顔のトゲチック」の巻

ドタバタとした朝のホームルームの中でキュウコン先生が話を始めた。

「みんなも知っているようにあさポケ中では、何か部活動に所属しなければならない。みんなは何かやりたいことがあるのかな？」

教壇の先生が教室全体を見渡している。みんな反応はそれぞれだ。すでにやりたいことがあるポケモンは首を縦にふるし、僕ら3匹組のようにやりたいことが見つからないポケモンは首をかしげるような反応を見せる。

先生はそのまま話を続ける。

「首をかしげた生徒はまだやりたいことが見つからないのかな？でもまだ焦ることは無いぞ。そんな君達はきっと新しい発見ができる可能性があるからな」

クラスメイト全員がキュウコン先生に注目する。

「これはみんなに言えることなんだ。やりたいことが見つからない生徒は自分が知らない世界を知るチャンスかもしれない。やりたいことがある生徒は、自分が得意な分野で新たな発見ができる可能性があるし、もっと自分を磨くことができる可能性があるからな」

そして先生は最後にこう話した。

「中学生になったばかりでいろんなことに不安や期待があるかもしれないが、こういう時こそ、チャレンジ精神を持ってほしい。今日は3、4時間目の授業を使って、体育館で部活動の紹介が先輩たちからある。そして放課後には、直接部活動の様子を見学があるからじっくりと考えればいいだろう。これで先生からの話は終わるけど、何か質問はあるかな?」

何匹かの生徒が手を挙げて質問をする。そしてキュウコン先生がその質問に答えていった。

やがて朝のホームルームが終わり、キュウコン先生が教室を出ようとしたその時だった。

先生はふと思い出したように、

「ヒトカゲ君。あまりぼーっとしていたらダメだぞ。大事なことを聞き落として恥をかくことがないようにな」

ごめんなさい先生。以後気を引き締めます。

最後の最後でダメ押しをされてしまった……。

僕はその言葉を聞いたときに、キュウコン先生にかなり目を付けられたような気がした。

朝のホームルームが終わった後、僕はやれやれとやや緊張感から解放された気分になった。

1時間目の授業の準備をしていると、誰かが話しかけてきた。

「ヒトカゲ君だったけ?今ちょっといいかな?」

ん?誰が話しかけてきたんだろう?初めて聞く声だ。

「いいよ。ちょうど授業の準備が終わったところだし」

初めて聞く声の主は僕の席の前に立っていた。結構なスマイルで僕の方を見ていた。

「おはよう。僕はトゲチックって言う名前なんだ。新しい発見があるなんてキュウコン先生がいたけど、早速見つけたよ。君、鮮烈なデビューを飾ったね」

彼はニコニコして僕を見ている。そしてオマケに、

「君みたいなポケモンといたら楽しそうだね。友達にならない？」

なんて言ってきた。なんだかよく解らないけど、彼はとてもにぎやかそうな性格をしてそうだ。

「いいよ。えっと……トゲチックくんだったけ？僕ってそんな印象を植え付けていたんだね。まあ……これからよろしくね。」

僕はなんかまたガッカリした感じの口調で軽く彼にあいさつした。そして、

「後で僕の友達を紹介するから、また来てくれない？」

と、彼……トゲチックくんに聞いてみた。トゲチックくんはここでも満面の笑顔で、

「え！？ヒトカゲくんの友達に？いいよ。会ってみたいなぁ～」

その時、ちょうどチャイムが鳴った。

トゲチックくんは慌てた様子で、自分の席に戻っていった。

1時間目の授業は数学だった。担当はオオスバメ先生。自己紹介の中で先生いわく、

「私は授業中の私語や居眠り等は決して許しませんからね。もし発見した場合は私の“つばめがえし”によるお仕置きがありますからね」

……ということらしい。そのあとは授業のシステムなんかの紹介

があった。そういうことをしていると、あっという間に授業時間は終わった。

1時間目の授業の後に、僕は隣のピカっちとその後ろのチコっちに、先ほどのトゲチック君のことを話した。そしてトゲチック君が会いたがっていることも話した。すると、

「もちろんいいわ。あたし達もトゲチック君に会ってみたいし」

と、了解してくれた。
2匹と話していると、ニコニコ顔の彼が現れた。そして、

「ヒトカゲくん！君の友達に会いにきたよ～」

と、あい変わらずにぎやかな様子で僕に声をかけてきた。

「やあ。トゲチックくん。僕の友達を紹介するよ。僕の隣にいるのは、ピカチュウ。ニックネームは、“ピカっち”だよ」

トゲチック君はピカっちを紹介された後、彼女にニコニコしながら、

「はじめまして！僕はトゲチック。これからよろしくね」

と、握手しながら軽くあいさつした。

「こっちこそよろしくね。トゲチックくん」

と、ピカっちも満面の笑顔で彼にあいさつした。
僕は続けて、

「そしてピカっちの隣にいるのは、チコリータ。ニックネームは“チコっち”だよ」

と、チコっちを紹介した。トゲチック君はここでも明るいニコニコで、

「これからよろしくね」

と、あいさつした。

こうして僕たち3匹組は、トゲチック君という新しい友達を加え、仲良し4匹組となった。

ちなみにトゲチック君は、この時ついでにピカっちに向かって、

「僕にも何かニックネーム付けて欲しいなぁ～」

て、おねだりするように聞いた。

「もちろんいいわよ。そうね～……。なんてニックネームにしようかな～？」

ピカっちはかなりお悩みのようだ。余談だが、僕とチコっちのニックネームも彼女が付けたものだ。そしてピカっちのニックネームを僕たちが付けたのだ。

「“チック”。そうだわ！“チック”くんって名前はいいんじゃないかしら？。」

ピカっちはそう言ってトゲチック君に提案した。彼はそれを聞くと、今日初めて笑顔じゃ無くなった。

「“チック”……。なかなかいいね！じゃあこれから僕のこと、“チック”って呼んでね～。」

少し考えていたようだが、何事も無かったように、またいつものような笑顔で答えた。ピカっちもすごく嬉しそうだ。

まあこんな風にトゲチック君……チックは、僕らと仲良くなった。

2時間目の授業は社会だ。担当は……、

「はじめまして。エアームドです。これから楽しく世界のことを学んで行きましょう」

全然楽しくなさそう……。あの～めっちゃ目が死んでますよ……エアームド先生。

教室全体がそんなような空気に包まれた。エアームド先生は延々と授業のシステムを話していたが……。ハッキリ言って眠い……！

数学の授業は緊張感たっぷりだった1年2組の教室が、今じゃだらけてしまっている。果たしてこの授業について行けるだろうか？かなり不安だ……。

チャイムがやがて鳴り、やっとこのだらけた時間から解放された。やれやれ、ほんとによかった。

ん？次の時間は部活の紹介があるぞ。そう思うとワクワクしてきた～。キュウコン先生の言う通り、新しい発見があるといいな～。

第４話：「ニコニコ笑顔のトゲチック」の巻（後書き）

作者：「…？なんでみんな今にも怒りそうなの？（汗）」

チコっち：「ウソつかれたから！（怒）」

カゲっち：「もっといいキャラにして欲しいから！（怒）」

ピカっち：「主人公にして欲しいから！（怒）」

作者：「もうちょっとなごやかにしたかったのになあ～。次回から不安だ（汗）」

第5話：「僕のテンションかなりアップかも！」の巻（前書き）

作者：「ようやく投稿できたよ」

カゲっち：「それはよかったね～」

作者：「あれ？ずいぶんごきげんだね？」

カゲっち：「チックのおかげだよ。うれしくなったんだよ」

作者：「ん？何か彼がいいムードにしたんだね。ほのぼのと平和になったので…」

カゲっち：「第5話プレイボール！」

第5話：「僕のテンションかなりアップかも！」の巻

トゲチック君…“チック”君と仲良くなったことで、ようやく月曜日の朝がマシになったと思ったら、エアームド先生の授業でテンションがた落ちな僕たち。

でもそんな僕たちの運命が大きく変わるなんて、この時誰が思っただろうか？

それは3、４時間目の部活動紹介で起こった。

２時間目終了後、僕たちがテンションがた落ちの最悪な気分のなか、ふと思い出したようにチコっちが、

「そういえば、次の時間って部活動紹介の時間だよね。あたし達にぴったしの部活動があるといいわね～」

なんて言ってきた。その時はおそらく救いの言葉だったのだろう。僕たちは４匹とも笑顔が蘇った。

……待てよ？なんかおかしな一言があったと思ったの僕だけか？

『あたし達』ってどういう意味だ？

まさかとは思うけど、僕たち『４匹組みんな同じの部活になるといいね～』とかって意味では無いだろうな。

そんな僕の心配をよそにピカっちが、

「あたし達って昔から何でも３匹で行動してたから、部活も３匹揃ってなきゃなんだか変な気分だわ」

と、彼女なりの考えを話した。

「もう！僕の事も忘れないで。４匹でしょ？」

と、チックも話す。そうそう。これからは４匹だからね。

「カゲっちくんもそう思うでしょ？」

「…へ？…僕？僕は…」

ここで3匹と違うこと言ったらまずいよな。

「……も、もちろんだよ。みんな一緒のほうが楽しいからね。はは……」

多少作り笑いになったが、ピカっちも笑顔で、

「やっぱりカゲっちくんもそう思うでしょ？絶対みんな一緒のほうがいいよ！」

そう簡単に４匹とも納得するような部活なんて見つかるかな？すごく不安だ……。

３時間目開始のチャイムが鳴り、僕たち４匹組はそれぞれ自分たちの席に座った。そして、キュウコン先生が教室に戻ってきた。

「きをつけ～！礼！」

あいさつを済ませ、キュウコン先生が話を始めた。

「とうとうこの時が来たな。みんなが新しい発見をする時が。部活動紹介は体育館で行われる。先輩たちが新1年生のために一生懸命考えてくれているはずだから、私語をせずにちゃんと聞くように。それじゃみんな廊下に並んで体育館に行くぞ」

キュウコン先生の簡単な話を聞いた後、僕たちは教室前の廊下に並び、体育館に向かった。

体育館は歓迎ムードに満ちあふれていた。

すでに体育館にいた2、3年生の先輩たちが、僕たち1年生のことを惜しむこと無く温かい拍手で迎えてくれた。

1年生が全員揃って割り当たっている席に座ると、拍手も収まった。そして司会担当のニドリーノが静かに、

「みなさんこんにちは。これからあさひポケ中学校部活動紹介を始めます。」

と、手短にあいさつした。

「まず始めに、生徒会長のお話です。生徒会長のリザードンさんお願いします」

『え!?リザードンが生徒会長なの!?』

なぜだか分からないけど、僕は感激していた。やっぱし自分がいずれそうなる姿だからかな?とにかく感激だ!

……と僕が勝手に盛り上がる中、リザードンが静かに話し始めた。

「新1年生のみなさんこんにちは。生徒会長のリザードンです。みなさんは、ついこの間に中学生になったばかりで、まだ学校生活に慣れてないかも知れません。」

と、優しい笑顔で僕たちの方を見ている。僕はその笑顔を見ると、目を輝かせながら、ますます感激してしまった。

『僕もあんなリザードンになりたいなぁ〜』

と、思いながらリザードンさんの話を聞いていた。

「僕もあまり上手なことは言えませんが、僕たちの部活動紹介をご覧頂いて、少しでも参考になれば、それで嬉しいです。ではこのあたりで僕の話を終わります」

話が終わると、体育館全体が拍手の音に包まれた。
僕は、人一倍大きく拍手をした。
そして一言……。

「僕、あのリザードンさんがいる部活に入る……！絶対に！」

なんて、心に強く誓った。おそらく今までの人生で最大の決意だろう。なぜだか勝手に熱く燃えている自分がいた。

さて僕がそんな風に勝手に熱く燃えていたその時、体育館全体が突然暗くなった。かなりの生徒が驚いていたようだ。

そして次の瞬間、愉快なＢＧＭが流れてきた。体育館は何かのコンサート会場のように慌ただしく舞台が設置された。その状態が数分間続いた。

ＢＧＭが少しずつ音量を小さくしていき、体育館の舞台の中央目掛けてスポットライトの光が当てられた。そしてその位置には、例のニドリーノが立っていた。

「さあ！新１年生のみなさんお待たせしました。僕たちあさひポケ中学校へようこそ！この学校には他校にも自慢出来る様々な部活動があります。先輩達が自分達の部活動をたくさんＰＲしていくので、ぜひ最後までご覧下さい！」

いよいよ部活の紹介が始まるようだ。どんな部活があるのか楽しみだ。

「まず最初にバスケ部のみなさんよろしくお願いします。」

ニドリーノがそう言うと、バスケ部の先輩たちが登場してきた。

バネブー、キノガッサ、ワカシャモ、それにドゴームまでもいた。

「みなさんはじめまして！僕たちは毎日元気がありすぎて困るほど活動的なバスケ部です。僕はキャプテンのバネブーです！」

確かに。このメンバーだけでも分かるような気がする。

「今から、ドリブルを行った後にシュートも決めたいと思います。」

そう言うと、バスケ部の先輩たちがドリブルを始めた。そしてキャプテンのバネブーからシュートを決めて、その場にいた先輩たち全員がシュートを決めた。

体育館全体に拍手が響く。そして最後に、

「ぜひ、バスケ部に遊びに来て下さい！ありがとうございました！」

バスケ部の紹介の後にサッカー部、卓球部、柔道部、水泳部、バトミントン部、テニス部、陸上部などと部活が次々と紹介された。

だが、僕が目を輝かせるほど勝手に憧れを抱いた、あの優しい笑顔の持ち主であるリザードンさんが登場することはなかった。

……一体どの部活にいるんだろう？

僕の疑問はそのあとにすぐ解決することとなった。

「次に野球部のみなさんお願いします。」

司会担当のニドリーノがそう言うと、野球部の先輩たちが集まり、そして左右1列に並んだ。

ラグラージにバクフーン、ラプラスにジュプトルといったポケモンたちに……、

……いた！僕が目を輝かせるほど感激し、そして勝手に憧れを抱く要因となったあの優しい笑顔の持ち主である、あのリザードンさんが……！確かに野球部の先輩たちの中にいたのだ！

「新1年生のみなさんこんにちは！僕たちは“熱い気持ち”がモットーの野球部です。今年は3年生がいないという厳しい状況ですが、部員どうし明るく楽しく大好きな野球を練習しています。新1年生のみなさん！僕たちと野球しませんか？キャプテンラグラージはじめ、部員一同待っています！」

ラグラージが野球部のＰＲを終えたあと、野球部の先輩たちが礼をした。

僕はあのリザードンさんの姿を確認すると、ますます感激し憧れも抱いた。

野球部の紹介の後も部活の紹介は続いたが、僕の耳（イラストだと見当たらないけど……）に届くことは無かった。

まだ入部が決まったわけでもないのに、あのリザードンさんと毎日部活をしたら楽しいだろうな。とか、野球するための道具を揃えないとなあ。とか、ピカっちたちに説得してみんなで入部しようとか、とにかく余計なことを考えていた。

部活の見学が放課後できるはずだから、４匹全員揃って野球部を見学しようかな～。

この時からもうすでに少しずつ運命が変わり始めたことに僕たち４匹組はまだ気づくことはなかった。

第5話：「僕のテンションかなりアップかも！」の巻（後書き）

チック：「やった～！初登場だ～！」

作者：「やあ！カゲっちを元気にしてくれてありがとう」

チック：「だってこのままのテンションだと、5回持たないでしょう？野球は9回まで行うスポーツだからね」

作者：「ありがとう！感激した！」

チック：「ところで最近ポケモンやってる？僕ちゃんとメンバーに入ってるよね」

作者：「ここ1ヵ月全くやってません……」

チック：「やっぱし……。みんなにそれ話したら、悲しむよきっと。ちゃんと育ててよ。作者さんにはそれしか才能がないんだから……」

作者：「ごめんなさい（泣）」

第６話：「いよいよ部活の見学だ！」の巻～その１～（前書き）

カゲっち：「次はいよいよ部活の見学だ～！」

ピカっち：「早速第６話プレイボールです！」

第6話：「いよいよ部活の見学だ！」の巻～その1～

僕が恐らく人生最大の決意をした、部活動紹介も全部の紹介が終わった。

……と、言っても約半分はほとんどマイワールドにいたせいで、全く耳に入ってなかったのだが……。

何はともあれ、全部の紹介の後にあさひポケ中学校のフーディン校長先生の話があった。

「新1年生のみなさんこんにちは！今回の部活動紹介はどうでしたかな？みなさんもご存知の通り、あさひポケ中学では必ず部活動に所属するルールとなっています。何故そんなルールなのか今から理由を話しましょう」

校長先生はその理由を話し始めた。

「必ず部活動に所属する理由……それは、生徒のみなさんに他人を思いやる気持ちや強いチームワークを築いてほしいという狙いがあるのです」

思いやりの気持ちや強いチームワーク……。でもそれだけではな

さそうだ。さらに話は続く。

「それだけの理由では部活動では無くても築けることでしょう。では、部活動ではならない理由とは何でしょう?それは、部活動を通してさらに困難に立ち向かう強い気持ち、今の自分の壁を越えるチャレンジ精神を持ってほしいという狙いがあるのです」

今の自分の壁を越える強い気持ちや困難に立ち向かうチャレンジ精神……。

果たして今の僕にそんな気持ちが存在するだろうか?

……答えはＮＯだろう。何せ、さっきまでマイワールドにいたくらいだから。

そして最後に校長先生はこう締めくくった。

「生徒のみなさんには、自分の中の新しい発見をしてほしいものです。では、これで私の話を終えたいと思います」

校長先生が話を終えると、全校生徒全員が礼を行った。そして司会担当のニドリーノが、

「これで、あさひポケ中学校部活動紹介を終わります」

と、最後を締めくくった。僕たち新1年生を含め、全校生徒が体育館から退場した。

さて、部活動紹介の後、僕たち4匹組は昼休みにまた1年2組の席の周りに集まった。

そして、僕は集まった後にある相談をした。

「みんな。今日の部活動紹介で見学したい部活って見つかった?」

今日の放課後に実際に部活を見学できるので、みんなに見学したい部活を聞いてみたのだ。

少しの間沈黙が続いたが、先に僕の質問に答えたのはチックだった。

「僕は、吹奏楽部を見学したいなぁ～……」

なるほど、吹奏楽部か……。ニコニコ笑顔のチックにはぴったしだろう。

そして次に答えたのは、チコっちだった。

「あたしは、美術部が一番見学したいわ。みんなも絶対気に入ると思うわ。間違いなくね」

……なんだ？その不敵な笑顔は……？　同じ笑顔でも、チックとはワケが違うでしょ？絶対に。

チックとチコっちがそれぞれ笑顔で、自分の希望する部活を答える中、ピカっち1匹だけがしょんぼりした顔つきだった。そして一言、

「チコっちちゃんもチックくんもちゃんとやってみたい部活を決めているのね。カゲっちくんも決めたの？」

僕はチックたちとは違い、真剣なまなざしでピカっちの質問に答えた。

「僕、野球部に入りたいんだ！絶対に譲れないよ！」

ピカっちとチコっちがかなり驚いた顔をしている。ムリもないと思った。

昔からおっちょこちょいで、だまされやすくて、ドジをふみやすいこのダメダメな1匹のヒトカゲが、今までにないほどの真剣な気持ちで決心したことを、ここまで強い気持ちを込めて喋ったのだから。

「やっぱり4匹みんな一緒なんてなかなか難しいのね……。みんなやりたいことバラバラじゃない」

ピカっちはため息混じりで残念そうにそう言った。まあ……正確にはピカっちはまだ迷っているようなので、3匹の意見なのだが……。

「な……何もそこまで落ち込むこと無いよピカっち！とりあえず放課後の部活の見学をしてからゆっくり考えようよ！ねえ、みんな！」

僕なりの励ましでピカっちを元気にしようとした。

４匹組みんなが同じ部活になりたい気持ちは僕にもよくわかる。
今までずっと仲が良かった僕たちが突然バラバラに行動するのは、僕だって寂しい。
きっとピカっちだって僕と同じ気持ちのはずだと思う……。

あれこれ相談するうちにいつのまにか５時間目の授業の時間となった。

僕たちはそれぞれ自分の席に戻って授業の準備をした。
だが、ピカっちは相変わらずしょんぼりした顔つきだった。そして僕に一言、

「カゲっちくん。今日の部活の見学してみんなが帰ったときに話があるの……。良かったら聞いてくれないかしら？」

僕は笑顔で、

「いいよ。何か困っているなら」

ピカっちの話って何だろう？やっぱり部活の話かな。

話しているうちに授業が始まった。教科は国語だった。そして、担当の先生は……え！？キュウコン先生なの！？

「みんなの授業を担当することになって、先生は大変うれしく感じている。みんなが解りやすいように授業を進めるから、わからないことはどんどん質問してくれ」

キュウコン先生はそう言うと、ニコっと笑った。

今日の他の授業同様に、この授業もシステム紹介などで授業時間が終わった。

キュウコン先生は授業の後、

「そのまま帰りのホームルームをするからな。簡単な連絡だけするぞ」

先生の連絡内容は部活の見学のことだった。簡単にまとめると、こんな感じだ。

?部活の見学は、実際に活動を体験できる。

?見学時間は6時まで。（帰りのホームルームは2時45分まで）

?くれぐれも先輩たちに迷惑かけない。

「この3点だけ守り、部活動を見学するように。ではまた明日」

そのあとあいさつして、僕たち4匹組は早速見学に向かった。

「ねぇ、最初はどこから見学するの～？」

チックが話しかけてきた。

「そうね～……。とりあえずあたしたちがやってみたい部活から見ていきましょうよ」

チコっちがそうやって答えた。確かに、その方法が一番確実だと僕も思った。

「そうすれば、ピカっちだってやりたい部活がきっと見つかるはずよ」

と、この４匹組の中でただ１匹だけ迷っている様子のピカっちに対してチコっちが言った。

「元気出してピカっち。のんびり決めればいいじゃない」

「そうよね。悩んでいても仕方ないものね。ありがとうチコっちゃん」

かすかにピカっちに笑顔が戻ってきた。やっぱりこの４匹組には笑顔が一番だよね。

最初に見学する部活はチックの希望する部活、吹奏楽部に決まった。

この学校は４階建てなのだが、音楽室は４階にあった。早速中に入って見学するかな～。

「みなさん吹奏楽部へようこそ！ゆっくり見学していって下さいね」

部長のプクリンがそういうと、僕たちに早速楽器を渡しはじめた。

……？（汗）

「早速楽器の練習をするよ～♪まず最初は音階の練習からだよ～♪」

……へ？……も、もしかしてこの瞬間強制的に入部が決定したのですか？かなり不安なんですけど……。

「ヒトカゲくん！君はどうしてドとミを間違えるの？やる気あるの？」

……あの～。いきなり僕より大きいバイオリン渡して、いきなり音階通りに楽器鳴らすなんて至難の技なんですけど……。やる気どうのこうのの問題じゃないかと……。

「フルートって楽しいね！吹奏楽部楽しい！」

チックはかなり満足そうだ。

しかし部長のプクリンはかなりイライラしている様子なんですけど……。どうして？

「なかなか上手にならないね～。プクリンガッカリ！！君たちは入部試験失格！！！」

……はあ！？にゅ…入部試験だったの！？

さっき『ゆっくり見学していって下さいね♪』とか言ってたのに。

しかも5分で失格なのかい！

なんてギャーギャー騒いだところで、かなり“わるあがき”のようなので、僕たちはしかたなく別の部活に見学することにした。

「はあ～……。僕、吹奏楽部に入部したかったのになぁ～……」

チックはかなりショックを受けたようだ。

「しょうがないよチック。他の部活を見にいこうよ。ほら～。そんな暗い顔しないの」

チコっちが励ますが、こりゃ立ち直るのに時間かかりそうだ。

「そうだよね～♪きっといい部活見つかるよね～。頑張って見つけるぞ～！」

……げ！もう元気になった！立ち直るの速すぎ！

次に僕たちはチコっちの希望する部活、美術部の見学に向かった。

第6話：「いよいよ部活の見学だ！」の巻～その1～（後書き）

チック：「あの吹奏楽部普通じゃないね……（汗）」

チコっち：「次は美術部の見学！楽しみだわ！」

第7話：「いよいよ部活の見学だ！」の巻～その2～（前書き）

チコっち：「今回は美術部の見学ね。ワクワクするわ～♪」

カゲっち：「部活の見学シリーズ第2弾として……」

チック：「第7話プレイボール！」

第7話：「いよいよ部活の見学だ！」の巻～その2～

謎の吹奏楽部の見学（？）を終えた僕たち4匹組が次に向かった場所は、1階にある美術室だった。

と言うのも、次はチコっちの希望する美術部の見学をすることにしたのだ。

「美術部ってみんなにも合うと思うわ。だってこのあたしが気に入った部活だもの！」

……一体キミはどこからそんな自信が出るくるんだ？

「でもさっきのような入部試験があるような部活だったらみんな気に入らないだろうね～」

チックがそう冷やかした。チコっちが少しだけチックを“にらみつけた”。

「チックくん。あんなことがあったのに悲しくないの？」

ピカっちが心配そうに彼に尋ねた。

「ちょっと悲しかったけれど、もう大丈夫だよ。だってせっかくピカっちたちと友達になれたからさぁ、やっぱりみんなと一緒にいたいもん。あんな部活なんて僕入りたくないよ」

チックはそう笑顔で答えた。

……そうだよね。チックだって僕たちの友達だもんね。やっぱりみんなと一緒にいたいんだね。

さて、チックが僕たちと一緒の部活に入部したいことがわかったところで、ちょうどよく美術室に着いたぞ。本当に美術部がまともだといいんだけど……。

僕たち４匹組が息を飲む。なぜだか解らないけど緊張してきた。みんな表情が硬くなっている様子だ。４匹みんなが互いに顔を合わ

せてから声を揃えて、

「3、2、1……。せーの！」

と、美術室の扉を開けようとしたその次の瞬間！！

「いらっしゃ～い♪美術部へようこそ～♪」

と、いきなり美術室の中から勢いよくガラガラと扉が開いた。

しかしそれだけならよかったのだが、運の悪いことに僕たち４匹全員が扉を開けようとしたもんだから、勢いよくガラガラと扉が開いた瞬間にみんなその場でだんご状態で倒れて閉まった。

『いたたた……』

僕たちみんな扉の前でＫＯされてしまった。

美術室から出てきたカクレオンだけは、『あれ？どうして倒れてるの？』なんて顔をしていた。

さて、そんなドタバタ劇場はそのあたりて終わりにして、僕たちは早速美術部を見学することにした。

「みんな絵を描くのは好きかい？」

カクレオンがおもむろに僕たちに聞いてきた。

「ぼ……僕はちょっと……」

と、僕が答えようとしたときに……。

……グサグサグサ！

……何だこの冷たい視線は？

って美術部の先輩たちが僕を白い目で見ているぞ……。

おまけにここにももう一匹白い目のポケモンがいるし……。

僕の反応を見たカクレオンが残念そうに、

「はぁ～。それじゃキミたちはここに何しに来たんだい？冷やかしかい？」

と、バカにしたような顔で僕たちに言った。

……ひ、冷やかしって、そこまで言うこと無いでしょうが！！僕たちはただ見学にきただけだぁァァァァ！

僕は一番嫌いで許せないことをされたものだから！美術室で“だいもんじ”を繰り出してしまった！僕の後ろにいたピカっち、チコっち、チックはダメージは全く無かったけど、僕の前にいたカクレオンや美術部のメンバーはその場でＫＯ状態になった。

「カゲっちくんてば、気持ちが高ぶるとこうなっちゃうんだから～。困っちゃうわね～」

クスクスとピカっちが笑っている。

「でも、あたしはそんなカゲっちって好きだわ」

……初めてだ！この小説始まってこんなうれしい一言を聞いたの

！僕は照れながら、

「そうかな～？ついつい気持ちが熱くなったよ」

あんな細かいことで……なんて思われるかもしれない。
でも何も事情を聞かないで、冷やかしなんて言われたら読者のみなさん許せるだろうか？
誰がそんな部活に入りたいと思うだろうか？

「やっぱり部活は楽しいところがいいよね。僕も吹奏楽部が嫌になったのもそれが理由なんだ」

チックが一言話してくれた。そうだよ！みんな一緒の部活に入るなら楽しいところじゃないとね。

「あたしもまだ迷っているけど、他のポケモンをバカにするような部活なんて入りたくないわ。みんなの笑顔が見られなくなるなんて嫌だわ」

……チックとピカっちはチコっちの方を見ている。『こんな部活に入りたいの？』と言いたそうな顔をしながら。

「あたしもガッカリだわ。部活動紹介のときは魅力感じてたのにこれじゃひどすぎるわね」

チコっちも本当は嫌な気分だったようだ。そして一言、

「カゲっちごめんね。不愉快な思いさせちゃって……。ついつい悪乗りしちゃって……。」

それに対して僕は、

「気にしないでよ。チコっちが僕をいじるのはいつものことだからさ。そうじゃなかったらチコっちらしくないよ」

それを聞いたチコっちは不機嫌そうに、

「まあ！じゃああたしはカゲっちにいつもあんな感じだっていうの！？」

僕は笑いながら、

「ジョーダンだよ。チコっちはすごく優しい女の子だよ。」

って答えた。チコっちは相当うれしかったのか、

「本当!?あたしカゲっち大好き!」

と、答えた。昔からこんな風にやり取りしてきた僕たちだった。
自然とみんな笑顔がこぼれた。

「それじゃ、次の部活に見学しにいこうか~♪」

と、元気よく美術室を出発しようとしたその時、

「その前にここを掃除していきなさい!」

顧問のドーブル先生が僕たちに掃除道具を渡した。

……あ〃。そういえば“だいもんじ”でちょっとばかし美術室壊

しちゃったんだ……。

その後僕はみんなに文句を言われながらも、みんなに手伝ってほしいとお願いした。そのおかげでなんとか、無事に4匹組全員で掃除することができた。

……でもかなりテンションダウンだ。せっかくいい雰囲気だったのに。

僕は暗い顔で、他の3匹は不機嫌な顔で、次の部活に見学しなきゃならないと思ったら、ますますテンションダウンだ。

「もしかして次の部活って野球部？」

僕はみんなに確認するように聞いた。

「そうね。あたしの希望した美術部とチックの希望した吹奏楽部は見学したし……、残っているのは野球部だけね」

と、チコっちが答えた。

……吹奏楽部も美術部も見学とはとてもじゃないけど言えない。

吹奏楽部は謎の入部試験があって、まさかの不合格に終わり……。
（当然の結果か？）

美術部は残念ながら楽しく部活を見学が出来るような雰囲気では無かった……。（美術に関心ないポケモンをバカにするような雰囲気で、見学はわずか2分で終了）

そういった意味では2匹とも自滅したような感じがする。

僕が憧れを抱いたリザードン先輩がいる野球部にほぼ決定した……。ような雰囲気になっている。

「とりあえずグラウンドにいってみよう！」

僕たちは早速僕の希望する野球部の見学に向かった。

第7話：「いよいよ部活の見学だ！」の巻～その2～（後書き）

ピカっち：「結局これが結末なのね……。（汗）単調すぎて読者のみなさんガッカリじゃないかしら？」

カゲっち：「感想とか見るとさ、僕のダメダメが面白い方たちが多いんだよね……。僕ってなんなの？（泣）」

チコっち：「カゲっち！いよいよ野球部の見学だよ！元気出して！」

チック：「やっと野球の話だね～♪ワクワクするよ」

第8話：「野球部の見学はドタバタすぎる！（汗）」の巻～その1～（前書き）

カゲっち：「い……いよいよこの時がキター！（笑）」

作者：「ビックリした～！どこの俳優さんなんだいキミは？」

ピカっち：「それにしてもタイトル長いわね（汗）」

チック：「とりあえず読んでみようよ！」

チコっち：「第8話プレイボールよ！」

第8話：「野球部の見学はドタバタすぎる！（汗）」の巻～その1～

なぜかワクワクしちゃうな～♪
オープニングからこんなにテンション高いの初めてかも知れない。
なぜこんなにテンション高いかと言うと、

「次はカゲっちくんがあれほど楽しみにしていた野球部の見学ね。
他の2つの部活が全然ダメだったから、今回こそちゃんとした部活
の見学がしたいわね」

そう！ピカっちの言うとおり次は野球部の見学なのだ。あのリザ
ードン先輩と話せるかも知れないと思うと……感激しすぎて“オー
バーヒート”しちゃうかも！

と、またマイワールドに入って勝手な想像を続ける僕を含めた4
匹組はその野球部が活動するグラウンドにやって来た。

「かなり広いね～。」

チックが率直な感想を言ったが、4匹全員の感想かも知れない。
だって後でキュウコン先生に聞いた話だと、ここの広さは500M
四方の広さらしいのだ。（人間界にもしかしたらこれ以上の広さの
グラウンドがあるかも知れないが……。）

ここのグラウンドで野球部、サッカー部、陸上部、テニス部、バトミントン部が活動しているようだ。

「野球部はどこかな～？」

僕たちが野球部を探していると……、

……ゴツン！！

「きゃ！！」

何かがチコっちにぶつかったようだ。

ピカっちが慌ててチコっちのところへ近づく。

「チコっち大丈夫？一体何がぶつかったのかしら？」

本当に何がぶつかったんだろう？

「いたたた……。何これ？野球ボールじゃない！何でこんなところに……」

確かに野球ボールだった。まあ、チコっちにケガが無くてよかった。

「野球部の先輩たちに文句言っちゃうわ！かわいいレディーが傷ついたらどうしてくれるの！？ってね！」

……か、かわいいレディーって……。

こりゃ野球部の先輩たちもやっかいな相手を作ってしまったな～……。

こうなるとチコっちはかなりうるさくて止められないんだよな……。

チコっちが野球部に文句を言っていると、

「ごめんね～。びっくりさせちゃって。誰もボールに当たらなかったかい？」

と、慌てた様子でジュプトルがこっちに近づいて来た。

「……あ、あたしにぶつかりました……。」

……？

何なんだこのチコっちの変貌ぶりは……？さっきまであんなにぎゃーぎゃー騒いでいたのに……。

「え！？キミのようなかわいい女の子にぶつかっちゃったの？チコリータちゃん怒っているでしょう？」

うん。さっきまでかなり文句言ってましたよ。かわいいレディーがどうのこうのってね。

「……い、いえ。そんなことありません。」

……へ？

「あ……あたしこそ悪いんです。ちゃ……ちゃんと前を見て無かったので……」

……前を見て無かったって……。

キミね、ボールは上から落ちて来たんだよ？

「と、とりあえず保健室でちゃんとケガを診てもらったほうがいいんじゃ……」

いや。ケガより突然態度が変貌した理由が僕としてはかなり知りたいんですけど……。

「だ……大丈夫です！本当に……。それより野球部はどのあたりで活動しているんですか？」

あれ？なんでチコっちがこんなに野球部に興味深々なんだ？

「え！？キミもしかして野球部希望なの？だったら僕についてきて！」

……あの～ジュプトル先輩。話の途中で悪いんですけど、入部希望は僕ヒトカゲで……、その一目惚れして顔が真っ赤のチコリータはさっきまで美術部希望だったんですよ……。

なんて僕が心の中でかなりチコっちにツッコミを入れていたら……、あらら？あの２匹だけが先に行ってしまったぞ！

ピカっち！チック！そんな目を点にしている場合じゃないよ！僕たちも追いかけないと！

……そして、誰かあの暴走チコリータを止めなければ！

僕たち3匹も暴走チコリータを急いで追いかけた。

追いかけること約3分。僕たちはジュプトル先輩と暴走チコリータが倉庫らしい所で停まっているのを見つけた。

「はぁ……はぁ……。やっと停まってくれた」

……どうやらここが野球部が活動している場所みたいだ……。そ、それにしても疲れた……。

「おや？君たちも後を追ってきたの？」

僕たちに気付いたジュプトル先輩がそう言った。

「はい！僕は野球部の入部を希望するヒトカゲです！そこにいるチコリータは僕の友達です！」

僕は目を輝かせてそう答えた。

「え！？チコリータちゃんの友達なの？」

……がくっ！驚くのそっちかい！野球部希望はどうでもいいんかい！

と、僕がズッコケそうになっていると……、

「野球部の見学なら自由に行っても構わないぜ」

と、奥のほうからバクフーンが登場した。

「俺の名前はバクフーン。よろしくなヒトカゲ」

「は……はい！よ……よろしくお願いします！バクフーン先輩！」

「アハハハ。そんな緊張しなくていいぜ。俺のことは“ラッシー先輩”でいいからな。バクフーン先輩だと調子狂うし……。とにかく同じほのおタイプどうしがんばろうぜ！」

と、ガッチリ握手をした。

「そっちにいるトゲチックとピカチュウはヒトカゲの友達なのか？」

ラッシー先輩が言う。

「はい！チコリータも含めて僕たち４匹は仲良し４匹組です！みんな同じ部活に入部することにしているんです」

と、軽く４匹組を紹介した後に、

「よろしくお願いしますラッシー先輩！あたし、みんなから“ピカっち”って呼ばれています」

ピカっちが笑顔であいさつした。続けてチックも、

「僕もみんなから“チック”って呼ばれています！よろしくお願いします！」

と、元気いっぱいにあいさつした。

「2匹ともニックネームがついているんだな！俺も呼ばせてくれ！よろしくなピカっち！チック！」

2匹ともラッシー先輩は握手した。

「あ！ヒトカゲくんも“カゲっち”って呼んでいます！チコリータちゃんも“チコっち”って呼んでいます！」

と、僕と暴走チコリータのニックネームもピカっちは紹介した。

「そうなのか！カゲっち～なんで黙っていたんだよ～！俺ニックネームで呼ぶほうが気に入っているんだぜ～♪」

ラッシー先輩が笑顔で僕のことを腕で突いてくる。

「気に入った！カゲっちたち仲良し４匹組たちに、わが野球部のメンバーを紹介してやるぜ～♪ついて来なよ」

ラッシー先輩が笑い飛ばして僕たちを案内してくれることになったのだが……。

「ん？チコっちだけなんで“ジュジュ”のところにいるんだ？」

ふと気付いたようにラッシー先輩が僕に聞いてきた。

「え？ジュプトル先輩は“ジュジュ”って言うんですか？」

僕はラッシー先輩に聞いた。

「ああ。俺たち野球部はニックネームで呼び合うのが伝統になっているからな」

へぇ～。珍しい伝統だな。

「それより俺の質問に答えてくれよ。」

ラッシー先輩はかなり知りたそうだ。

「簡単に言うと“恋の病”なんです。今彼女は“メロメロじょうたい”です」

僕は半分あきれた感じで答えた。その答えを聞いたラッシー先輩は、目が点になってしまった。

「こ……恋の病？よっぽどこうかばつぐんだったのか。まあ、ジュジュは昔からかなりモテモテだったらしいからな」

と、納得の表情だ。

「とりあえずジュジュも連れていかなきゃな……」

ラッシー先輩はジュジュ先輩と暴走チコリータを連れてきた。

「ジュ……ジュジュ先輩かっこいい……。」

あ～あ。完全にマイワールドだよこのポケモンは……。

「みんな。遅れたけどよろしくね。僕はジュプトル。“ジュジュ先輩”と呼んでね」

と、あいさつした。

「は……はい！ジュジュ先輩！あ……あたし野球をがんばります！」

……へ？今キミ、かなり爆弾発言したよ？

「それはうれしいね。いつでも待っているからね」

ジュジュ先輩が笑顔で答えた。それを見た暴走チコリータはＫＯされてしまった。

……それにしても彼女はどこまで暴走する気でいるんだろう？

作者さんも“暴走チコリータ”と何度書いたことだろうか？

そしてこの後、無事に下校できるだろうか？かなり不安だ……。

何はともあれ、僕たちはラッシー先輩とジュジュ先輩の案内のもと、野球部の見学をスタートした。

第8話：「野球部の見学はドタバタすぎる！（汗）」の巻～その1～（後書き）

カゲっち：「あれ？リザードン先輩は？」↑目が点

作者：「まだ登場しないよ～。これ以上書くと暴走しそうだからけることにしたんだ」

ピカっち：「チコっちちゃんが大変なことになっているわ」

チコっち：「ジュ……ジュジュ先輩……。かっこいい」↑メロメロじょうたい

チック：「早く次回が読みたいなぁ……」

第9話：「野球部の見学はドタバタすぎる！（汗）」の巻～その2～（前書き）

カゲっち：「今回は話が長めなんだね」

作者：「うん。張り切って書いたよ。かなり読みにくいかも……（汗）」

ピカっち：「じゃ、野球部見学編パート2スタートするわよ！」

チック：「気になる第9話プレイボール！！」

第9話：「野球部の見学はドタバタすぎる！（汗）」の巻～その2～

ラッシー先輩とジュジュ先輩という2匹の先輩の案内で、野球部の見学をすることになった僕たち4匹組。

一体どんな活動をしているのかな～？　もうワクワクしすぎてテンション上がりっぱなしだ～♪♪

「ところで、カゲっちたちは他の部活はなんか見学したのか？」

ラッシー先輩が話しかけてきた。

「はい。吹奏楽部と美術部を見学しました。でもおかしな部活でしたよ？」

僕はちょっとあきれた感じで答えた。

「アハハハ。吹奏楽部と美術部はこの学校でもかなり変な部活として有名だからな。俺も話聞いてビックリしたぜ」

ラッシー先輩が大笑いしている。

どうやら不可解な入部試験をする吹奏楽部と、美術に興味がないポケモンをバカにする美術部は、先輩たちの中でもかなり有名らしい……。

「それでもあんな部活に入部するポケモンがいるからな。あいつら、新入生には結構優しいんだぜ。ちよっと好きなことに熱い奴らなんだぜ」

さらにジュジュ先輩も続けて言う。

「まあ、何かに熱中できるのは僕も悪くないと思うよ」

またラッシー先輩が言う。

「俺たちも人のこと言えないしな。いわゆる野球バカってやつだ」

……なるほど。僕たちから見るとおかしな部活だったかも知れないけど、前向きに考えると、そういう見方もできるんだ……。

僕はただただ感心するばかりだった。

「おい！ラッシー！ちゃんとベース持ってきたのか？」

いきなり誰かがラッシー先輩に話しかけてきた。口調からして怒っているようだが……、

「あ！わりぃ～～。持ってくるの忘れた～～。ごめんなラージ」

ラッシー先輩はその先輩に対して、“ラージ”と呼んだ。

「全く……。ラッシーに頼まなきゃよかった……。これじゃ練習にならない……」

頭を抱えて、“ラージ”先輩はぼやいていた。

「……ん？ところでそこの４匹は……？見慣れないけど……。あ！もしかして見学者なの！？」

ふと僕たちに気付いたのか、さっきと違ってかなりうれしそうにしている。

「お、俺はラグラージだ。野球部のキャプテンだぜ。“ラージ先輩”って呼んでくれ！よろしくな～！」

ラージ先輩は自己紹介しながら、その場でジャンプした。

「お……おい！うれしいのはわかるけど、ジャンプするな～～！」

ジャンプしている間、“じしん”が発生していた。

「きゃあ！カ、カゲっちくん助けてぇ～！あたし“じしん”嫌いなの！」

と、ピカっちは泣きながら僕に抱きついてきた。

ぼ……僕もかなり怖い……。

ジュジュ先輩もチコっちに抱きつかれているようだ。
そして、大丈夫だと励ましている。

「そうかな？僕は何とも思わないけど？」

と、このメンバーの中でただ1匹だけひこうタイプであるチックだけは、ケロっとしている。

その後、ラージ先輩がジャンプをやめたのは、僕たちがKO状態になった後だった。

「ピカっち。もう“じしん”は止まったから大丈夫だよ」

ピカっちはまだ僕に抱きついて泣いていた。

「ぐすん。ホントに？すごく怖かったわ……」

ピカっちは周りを見渡した後、僕から離れてゆっくりと立ち上がった。そしてニッコリ笑って、

「カゲっちくん。守ってくれてありがとう♪」

と、僕に言った。

「そ……、そんな。僕は何もしていないよ」

実際僕も放心状態だったし……。

僕はちょっと照れながら、ピカっちが笑っているのを見ていた。

「ごめんなみんな。俺、うれしくなると、ついついジャンプしちゃうんだ」

ラージ先輩が僕たちに謝った。するとラッシー先輩が、

「んじゃかわいい後輩を怖がらせた罰として、ベース持って来いよ」

と、ラージ先輩に言った。

「ＯＫ！お安い御用だ！すぐ持って来てやるぜ！」

と、ラージ先輩が倉庫の方へと、姿を消してしまった。

……でもラッシー先輩。その役目は先輩のはずじゃ……。

なんて言うと面倒な事になりそうなので、僕はそのまま放っておくことにした。

「さあ着いたぜ。俺たちが活動している野球場に」

へえ。ここが野球場かぁ～。グラウンドの中の一部分を高いフェンスで囲っているみたいだ。扉があるから、ここから入るんだろう。

扉を早速開いてその中を進むと、確かに野球場が目の前に広がっていた。

「ここは“外野”だ。芝生があるからな。あの土の部分が“内野”になっているんだ。内野で少し盛り上がっている部分が、ピッチャーが投げるところ、“マウンド”だ。ちなみに、マウンドから真っ正面に少し歩いた所に“バッターボックス”があるんだ。まあ、正確には１８．４４ｍとかって言うけど、そこまで細かいことは気

にしなくていいぜ。バッターボックスの後ろのフェンスは、“バックネット”って言うから覚えてくれよ」

一つずつ丁寧にラッシー先輩が僕たちに教えてくれた。

「あれ？ラッシー先輩。なんでグラウンドにもう一つマウンドとバッターボックスがあるんですか？」

僕はラッシー先輩にこの謎を聞いた。　その言葉にラッシー先輩はちょっと笑っていた。

「アハハハ。もう一つの謎のマウンドとバッターボックスの正体か……。いいか、あそこは“ブルペン”と言って、ピッチャーが投球練習をする場所なんだ」

へぇ～。野球場ってうまく出来ているんだなあ……。野球初心者の僕は、初めてのことにただ驚くばかりだった。

「あら？ラッシーがあたし達より早く練習に来ているなんて珍し

いわね～」

誰かが声をかけてきた。どうやら女の人（正確にはポケモンか）っぽいけど……。

「毎度毎度うるせー“ラプ”ちゃんのお出ましだ……」

例のごとく、ラッシー先輩はその声の主を“ラプ”と読んだ。

「あら？悪いかしら？あたしみたいにうるさいレディーがいないと、あんたみたいな悪ガキはおとなしくならないんじゃない？」

この先輩……暴走チコリータに似ている！

「それとも？あたしの“ハイドロポンプ”でも浴びたいのかしら？」

あ！！僕たちほのおタイプが大嫌いなみずタイプの技で脅しているぞ～。

「ごめんなさいかわいい“ラプ”ちゃん！文句言わないから、“ハイドロポンプ”だけはやめて下さい！」

ラッシー先輩が土下座して“ラプ”先輩に謝っている。

「解ればよろしい。……あら？かわいいポケモンちゃんたちがいるわね。あなたたちは、見学者なのかしら？」

“ラプ”先輩は僕たち４匹組に気づいた様子だ。

「はい！僕ヒトカゲの“カゲっち”です」
「あたしは、ピカチュウの“ピカっち”です」
「あたし、チコリータの“チコっち”といいます」
「僕、トゲチックの“チック”っていいま～す♪」

僕たち４匹組は、順々に自己紹介した。

「ウフフ。みんなかわいいわね♪あたしはラプラス。“ラプ”先輩って呼んでね♪」

ラプ先輩は満面の笑みで自己紹介した。

「よかった。女の子でも野球部に入っているポケモンがいたんですね」

ピカっちが安心した感じで一言そう話した。

「そうよ。あたしはこの野球部でただ1匹の女子部員。だけど、好きなことに男も女も関係無いと思うの。だからあなた達も遠慮する必要なんて何も無いわ！」

ラプ先輩はピカっちとチコっちに力強く説明した。するとラッシー先輩が僕の耳元で、

「あいつは男顔負けの性格だからな。わがままで“野球部の影の部長”とかって呼ばれているんだぜ」

なんてささやいていたのだが、次の瞬間ラッシー先輩は“こおりづけ”になってしまった。

後ろを振り返ると、ニコニコ笑っているラプ先輩がいた。

「ちょっとおしゃべりなラッシーくん♪うるさいからしばらくの間“ぜったいれいど”でこおりづけになっててね♪」

こわ……！

この時僕は改めて“口は災いのもと”だということを思い知らされた。

「やれやれ。ラッシーのこおりづけ事件はこの野球部のイベントとなってしまったな」

また別の先輩の声がした。

「ま、それだけこの野球部が平和だということだな。ところで練習に来ているのは、俺とラプとジュジュとそこでこおりづけになっているラッシーか……。ラージがいないな……」

その先輩の姿を見た時、僕は感激しすぎて“オーバーヒート”しそうだった！

「ようやく登場だね。わがあさひポケ中学生徒会長！そして野球部のエース、リザードン……“ヒート”くんが！！」

ジュジュ先輩が紹介してくれた。

そう。そこに姿を現わしたのは僕が野球部に入りたいと思うきっかけとなったリザードン先輩だった！

「今は生徒会長の話はいいよ。とりあえずそこでこおりづけになってるラッシーを助けなきゃな」

と、リザードン先輩はラッシー先輩の氷を炎で溶かした。

「ふい～～。ラッシーふっか～～つ！！」

ラッシー先輩が元気よく復活した。

「ありがとな。さっすが俺の大親友！男だねぇ～！」

どうやらラッシー先輩はリザードン先輩と大親友らしい。

「そんなに褒めないでくれよ。照れるじゃんか。お前がヒノアラシで俺がヒトカゲだった頃からずっと熱い野球少年だったからな。

当然のことだよ」

リザードン先輩が照れながら話をしている。

「ああ！おまえはヒトカゲだったから“ヒート”で、俺はヒノアラシだったから“ラッシー”なんてニックネームを付けあったんだよな」

ラッシー先輩はそのあと、

「これからも同じ熱い野球バカとして、よろしくな！“ヒート”！」

「当たり前だ！こっちこそよろしくな！“ラッシー”！」

2匹の熱いほのおタイプの先輩はガッチリ握手をかわした。

……カッコイイ！僕は目を輝かせてその様子を見ていた。

「お！そこにいるのは……見学者かい！うれしいね。俺はリザードンの“ヒート”！よろしくな。ゆっくり見学してくれよ」

ヒート先輩は僕たち4匹組に気づいてあいさつしてくれた。

「ぼ……僕ヒトカゲの“カゲっち”です！部活動紹介の時のヒート先輩の優しそうな笑顔に僕もあんなリザードンになりたいって憧れました！僕ヒート先輩と一緒に野球やりたいです！」

僕はヒート先輩に自分の熱い気持ちを話した。ヒート先輩は、

「そうか！ありがとうな！そういう熱い気持ちは俺たちに負けてないな！気に入ったぜ、よろしくなカゲっち！」

そう言われると緊張の糸が切れたのか、僕はなぜか涙が込み上げてきて……、

気づいたら大泣きしてしまった。

「おいおい感激しすぎて“オーバーヒート”しちゃったのか？そこまでされると俺も言葉にならないくらいうれしいぜ」

するとピカっちが、

「もう、カゲっちくんってば、泣き虫なんだから」

と、優しく持っていたハンカチで僕の涙を拭いてくれた。

『……そういえば、昔から僕が大泣きするとピカっちがこうやってくれたっけ……』

そんなことを考えながらしばらくの間泣き続けた。

「ん？もしかしてカゲっちのガールフレンドか？」

ピカっちが顔を赤くして、

「いえ、カゲっちくんの幼なじみのピカチュウです。“ピカっち”と呼んでください」

と、恥ずかしそうに自己紹介した。
そのあと続けて、

「あたしもカゲっちの友達のチコリータです。“チコっち”と呼んでください。」

そしてチックも、

「僕も同じく友達のトゲチックです。“チック”って呼んでくださ～い♪」

と、あいさつした。

「おお！みんなよろしくな！」

ヒート先輩がうれしそうにみんなと握手した。

その後少しして僕は泣き止んだ。そして遠くから、

「道具持ってきたぞ～♪」

と、なぜだかうれしそうにたくさんの練習道具を持って来たラージ先輩が戻って来た。

「よし。これで俺とラッシー、ラージ、ラプ、ジュジュ。全員集まったな」

……あれ？野球は９匹いなきゃ出来ないスポーツじゃなかったけ？

「カゲっちは気づいているようだな。確かに野球は９匹で行うスポーツなんだが、見てのとおりうちは５匹しかいないんだ。がっかりさせてごめんな」

ヒート先輩が悲しそうに話してくれた。

「でもどうして何ですか！？」

僕はこの状況が理解出来ずヒート先輩に質問した。

すると、ヒート先輩は衝撃の事実を明らかにしてくれた。

第9話：「野球部の見学はドタバタすぎる！（汗）」の巻～その2～（後書き）

カゲっち：「ワ～イ！リザードン先輩とお話したぞ！（笑）」

ピカっち：「でも、話するだけで泣いちゃうなんて、やっぱりカゲっちくんダメダメ主人公ねぇ～」↑自分は“じしん”で大泣き

カゲっち：「それを言わないで……（泣）」

作者：「チコっちは暴走するし、ピカっちは“じしん”で大泣きするし、カゲっちはヒート先輩と話して感激しすぎて“オーバーヒート”しちゃうし、僕の文章読みにくいし……。この後ちゃんとスムーズに進められるかな？かなり不安だ……（汗）」

第１０話：「5匹しかいない理由」の巻（前書き）

カゲっち：「いつの間にか１０話目になるんだね」

ピカっち：「でも物語がなかなか進んでないわね……。いつになったら野球部の見学は終わるのかしら？」

チコっち：「いつのまにか題名も変わっているし（汗）」

チック：「節目の１０話目なのに、この微妙なムード……。でも第１０話むりやりプレイボールさせちゃいま～す♪」

第１０話：「5匹しかいない理由」の巻

野球部のメンバーは5匹しかいない……。

ヒート先輩から明かされた衝撃の事実。

……でも一体なぜ？

僕は、この状況がとてもじゃないけど理解出来なかった。

それまで笑顔で溢れていた野球部の先輩たちも悲しそうな表情をしている。

そんな重たい空気の中で、ヒート先輩は話を続けた。

「……この野球部は、昔から弱小チームとして有名なんだ。もう部活が出来て２０年間も経つんだが、未だに“カントリー・リーグ

”で優勝したことがないんだ」

その言葉を聞いた瞬間、僕ら４匹組も驚きの表情を隠せなかった。

「その“カントリー・リーグ”って一体どんな大会なんですか？」

僕はヒート先輩に聞いた。

「ああ。この大会は毎年7月から8月に開かれるポケモンカントリーの５つの町の中学の野球部が試合するリーグ大会さ」

ヒート先輩はかなり暗い表情をしながら、大会のシステムを話してくれた。

「試合は全ての野球部とするようになっていて、全部で3試合ずつある。つまり、俺たちは４つの野球部と試合をするから、全部で１２試合するんだ。例えて言うなら、野球部のペナントレースと言うところだな」

……なるほど。でも、その大会で優勝したことが無いと言っても、まだ納得出来なかった。

「俺はこんな野球部を何としても強くしたいと思って、ラッシーたちや、今ここにいるメンバーと入部したんだ」

その言葉の後、ヒート先輩が段々と怒りの表情と変化していった。

「去年入部した時はすでに３０匹くらいいたと思う。……だが、真面目に努力していた奴なんてその中の半分もいなかったんだ！それればかりじゃない！そんな奴らばかりがレギュラーだったから、試合で勝つつもりなんて微塵のカケラも無かったんだ！」

ヒート先輩がわなわなと震えている。思い出したくも無い嫌な出来事だったようだ。

「しかも、精一杯努力していた連中はやめていったんだ。おかしいだろ？真剣にやっているメンバーが集まれば、それなりの実力だったかも知れないのに、そいつらがなんで悲しい思いをしなきゃいけないんだ？」

確かに悲しすぎる。

その本当に勝ちたいと思っていた先輩たちが、夢を諦めてしまった時の気持ちは計り知れないだったと思う。

そして、その様子をみていたヒート先輩は怒りと悲しみが複雑に絡み合って、心が痛かったと思う。

「そのレギュラー組に我慢出来なくなった俺は、勝ちたく無いなら、楽しく無いなら、野球部をやめてくれ！！って追い出したんだ。そしたら、最後に何て言ったと思う？」

その次の言葉を聞いた瞬間、僕の中で何かが切れた感じがあった。

「……努力してもなあ、弱い奴は弱いって決まっているんだよ。じゃあな～！せいぜい無駄に頑張れよ！」

ヒート先輩が怒りからまた悲しみの表情と変わった。

……そしてよほど悔しかったのか、そこから涙がこぼれてきたのを見た。

「その時俺は決めたんだ。今ここにいる5匹と共に強い野球部にすると……！それに楽しく野球をしたい後輩たちを温かく迎えることが出来る最高の野球部にしてやる！！ってな。だから今は5匹だ

けでも後悔はしてないんだ」

もう2度と自分と同じような辛い思いは誰にもさせたくない……。
ヒート先輩の表情は何かを決意したように見えた。

「だからカゲっちが俺と野球したいと言うなら、大歓迎だ。その時はまたこの野球部に入部届を出してくれよ」

と、最後はあの憧れの笑顔で話してくれた。

「さて暗い話はいい加減終わりにして、うちの野球部のメンバーのポジション（守備位置）と背番号を紹介するか」

と、ヒート先輩の一言で部活の見学がスタートした。

ちなみに野球は9つのポジションがある。

?:ボールを投げるピッチャー（投手）。

?:そのボールを受け取るキャッチャー（捕手）。

ちなみに?:と?:はバッテリーと呼ばれているらしい。

?:一塁ベース付近を守るファースト（一塁手）。

?:二塁ベース付近を守るセカンド（二塁手）。

?:三塁ベース付近を守るサード（三塁手）。

?:二塁ベースと三塁ベースの間を守るショート（遊撃手）。

ちなみに?:~?:まではまとめて内野手と呼ばれているらしい。

?:?:から見て外野の左側を守るレフト（左翼手）。

?:?:から見て外野の中央を守るセンター（中堅手）。

?:?:から見て外野の右側を守るライト（右翼手）。

ちなみに?:~?:までは外野手と呼ばれているらしい。

野球初心者の僕たちに対して、ヒート先輩は解りやすく教えてくれた。

「まずは俺からスタートするか……。俺のポジションはピッチャー。野球になると口調が変わるけど、それだけ野球に賭ける熱い気持ちがあるぜ！背番号は“１”だ」

と、ポジション紹介はヒート先輩からスタートした。

「あたしのポジションはキャッチャーよ♪背番号は“５”よ。熱苦しいヒートを引っ張れる自信はあるわ♪」

と、続いてラプ先輩。

「俺のポジションはライトだ！背番号は“２”だ！外野だけど、ヒートに負けないくらい試合に勝ちたい気持ちはあるぜ！」

と、ラッシー先輩も熱く話す。

「僕のポジションは、センター。すばやさには自信がかなりあるよ。飛んでくるボールは全部捕ってみせるよ。背番号は“３”だからね」

ジュジュ先輩も笑顔で続く。

「俺のポジションはレフト。守備はそんなに得意じゃないけど、みんなが認めてくれたこのパワーでたくさんヒット打ってみせるぞ！キャプテンとしてもこの背番号“６”をよろしくお願いします！」

最後に、キャプテンのラージ先輩があいさつした。

やっぱりたくさん部員がいた事も背番号が飛び飛びだということからわかる。

「ん？みんなもう集合しているのか。珍しくラッシーが遅刻していないんだな」

ポジション紹介が済んだ後に、聞き覚えのある声がした。　みんなその姿を見て先輩たちが、

「監督！この野球部に見学者が来ているんですよ！」

と、うれしそうにしている。

僕たち４匹組はその監督の姿を見た瞬間、驚きの表情を隠せなかった。

だってあのポケモンが僕たち４匹組の前にいたのだから。

第１０話：「5匹しかいない理由」の巻（後書き）

作者：「今回は野球のちょっとした知識も書いてみました。野球知っている読者さんは確認の意味で、知らない読者さんはこんな解りにくい説明で少しでも分かっていただけたら幸いです」

カゲっち：「これって……前書きで書くべきことじゃない？（汗）」

作者：「細かいことは気にしない♪」

カゲっち：「こんな計画性無くていいのかな？主人公としてはかなり不安なんだけど……（汗）」

第１１話：「野球部に入部だ！」の巻（前書き）

カゲっち：「え！とうとうこの時が来たんだね！やっとこの時が！」

↑“オーバーヒート”寸前

ピカっち：「気になる第１１話プレイボール！！」

第11話：「野球部に入部だ！」の巻

ヒート先輩の熱い気持ちを知った僕たち。

そして野球部の見学が本格的にスタートした僕たちの前に現れた、野球部の監督は……僕たちがよく知っているあのポケモンだった！

「どうしてキュウコン先生がここにいるんですか！？」

そう。そこにいたのは僕たち4匹組のクラス、1年2組の担任の先生である、キュウコン先生だったのだ。

「お前たちだったのか。野球部の見学に来ていたのは」

キュウコン先生もまさか自分のクラスから、4匹も参加しているだなんて想像しなかっただろう。少し驚き気味である。

「今日3度目の自己紹介だがとりあえず……。わが野球部へようこそ！私が野球部の顧問であり、監督のキュウコンだ。今日はゆっくりと見学していってくれ」

キュウコン先生……いや、キュウコン監督が軽くあいさつした。

僕たち4匹組は元気よく、「はい！」と返事した。

それを見たキュウコン監督はニッコリ笑った。

「おい！そろそろ練習はじめようぜ！かわいい見学者に恥ずかしいところは見せられないぞ！」

ラージキャプテンの一言でいよいよ本当に練習が始まった。

先輩たちもかなり気合いが入っているようだ。

まず最初にウォーミングアップとしてランニングからスタートした。

どうやらこのグラウンドを5周ほど走るらしい。

ヒート先輩、ジュジュ先輩、ラッシー先輩はもともとの種族の関係で、走ることにそれほど苦は感じていない。何事も無くこのメニューをこなしている。

ただ、ラプ先輩とラージキャプテンはちょっと遅れて走っているようだ。特にラプ先輩は先頭を走るヒート先輩に1周半は遅れながら走っている。

あまりにもいら立ちがひどくなったのか、ラプ先輩はある方法を考えた。

なんと、“れいとうビーム”で自分の通る道を凍らせながら走っているではないか！

『ず……ずるい……！』

と、この場にいたメンバーがそう思ったのは、もはや言うまでもない。

おかげでラプ先輩はかなりスピードアップしたようだ。

ランニングはあくまでレースではないので、早く着こうが、遅く着こうが関係ない。

しかし、ラプ先輩はかなりの充実感だったのだろう。かなりご機嫌な様子である。

余談だが、キュウコン監督はこの走りをかなり絶賛していた。
野球というスポーツも一つの作戦で試合の流れが変わる。

だからラプ先輩のように冷静に事態を分析できる選手は、チームにとっても大切な戦力なのだ。

……ということらしいが……。それで果たして練習と言えるのかは大きな疑問だ……。

ちなみに凍ったグラウンドはヒート先輩とラッシー先輩の“かえんほうしゃ”で元に戻された。

先輩たちは、ストレッチをした後に、野球グローブを白いボールを持ってきた。第１１話目にしてようやく、キャッチボールがスタートしたのだ。なんだかかなり遅いような気もするが……。

とりあえず練習の様子を見てみることにした。２匹１組になって互いの距離は１０ｍくらいといったところか。

まず最初にヒート先輩とラッシー先輩の、“熱い親友”ペアが1組目だ。かなり息が合いそうでいいお手本になりそうだ。

続いてジュジュ先輩とラージキャプテンの、“ホウエンコンビ”ペアだ。スピードとパワーが楽しみといったところか。ここもいいペアになりそうだ。

最後にラプ先輩とキュウコン監督の“師弟コンビ”というペアが3組目だ。

ラプ先輩はいつもこうしてキュウコン監督と、キャッチャーとしてボールの感触というものを確かめているという。

この3組でキャッチボールは始まった。バシン！バシン！バシン！……グローブにボールがおさまる音がグラウンドに響き渡る……。みんな真剣な表情だ。

特にヒート先輩はその1球1球に気持ちがこもっているように見える。

絶対今年こそ優勝する！

背番号1のその熱い思いが自然とメンバーに伝わっているようだ。

僕たち４匹組はその様子を黙って見つめていた。あのニコニコ笑顔のチックでさえ、もう興味深そうに見つめている。

……そして急に立ち上がり、

「あの……。僕たち４匹も今から練習に参加させて下さい！！」

……え！？さすがにぼくもこの展開はわからなかった。まさかあのニコニコ笑顔のチック君が自ら練習を熱望するなんて……。

……と、驚いている間にもう１匹立ち上がった。なんと、あんなに部活のことで悩んでいたピカっちではないか！

「あたしも参加させて下さい！もしかしたら足を引っ張るかも知れないけれど……。でも、お願いします！みなさんと野球をさせて下さい！」

僕はまた驚いた。普段おとなしいあのピカっちが、これ以上ないというような真剣な表情でお願いし始めたのだ！！

……そしてこの2匹につられるようにして、もう1匹立ち上がった。チコっちだった！やはり真剣な表情をしている。

「あたしもピカっちやチックと気持ちは一緒です！本気で練習させて下さい！」

……もうここまで来たら僕だって！僕も立ち上がった。そして、熱くなったその気持ちを込めて、

「お願いします！僕たち４匹組を野球部に入部させて下さい！この野球部を強くさせるのに少しでも協力させて下さい！！」

僕たち４匹組は頭を下げてお願いした。すると、拍手が聞こえてきた。

「頭を上げてくれ……。カゲっち、ピカっち、チコっち、チック」

その声は震えていた。僕たち４匹組は頭を上げた。

すると、その視界に入ってきたのは、涙ぐむヒート先輩の姿だった……。

「……本当にありがとな。俺たちなら大歓迎だ。さっきの話を話して自分のふがいなさを思い出して……つい悔しくて泣いちまった。大切な仲間がいなくなってめちゃくちゃ辛かった……。このまま誰も入ってくれなかったら、俺の夢が叶えられないところだった……。その言葉を聞いて本当にまた野球の試合ができると思ったら……。うれしくて……うれしくて……」

その後、ヒート先輩は思いっ切り泣いていた……。1年間の辛い過去が次から次へと浮かんできた。

そしてラッシー先輩が代わりに、

「こんなめちゃくちゃな野球部だけどよろしくな!!一緒に大会の優勝目指してがんばろうぜ!」

こうして僕たち4匹組は晴れてあさひポケ中学校の野球部に入部した!

目指すはただ1つだけ!!

“カントリー・リーグ”の優勝だ！！

第１１話：「野球部に入部だ！」の巻（後書き）

作者：「良かったね。念願の野球部に入部だよ！」

カゲっち：放心状態

作者：「こんなことで放心状態かい！優勝した時がかなり不安だ（汗）」

第１２話：「“ポケット・スポーツ”で道具を揃えよう！」の巻（前書き）

カゲっち：「なんかめちゃくちゃなタイトルだね。（汗）」

ピカっち：「もっといいタイトルつけて欲しいわ」

ヒート：「まあ、そういうな。楽しくやろうぜ！」

ラッシー：「んじゃ第１２話プレイボールだぜ！」

第12話：「“ポケット・スポーツ”で道具を揃えよう！」の巻

ついに野球部に入部した僕たち4匹組。
野球は初心者だけど精一杯努力して、悲願の“カントリー・リーグ”の優勝目指して頑張るぞ！！

「……そういえば、カゲっちたちは野球道具は持っているのか？」

ヒート先輩が僕たちに聞いてきた。

……持っていない。

「ワッハッハッハッハ！そんな落ち込まなくていいぞ。ちょっと俺について来いよ！」

そう言うとヒート先輩は、その大きな翼を広げて僕たち4匹組を背中に乗せていった。

「監督。少しの間だけ練習からはなれますので」

ヒート先輩がキュウコン監督と話をする。

「全然構わないぞ。こっちのことは気にするな」
「ありがとうございます。では行ってきます」

そうして、ヒート先輩は大空へと飛び立った。一体どこに行くのだろうか？

「どうだ？空を飛ぶ気分は？」

それからちょっと時間が経ってからヒート先輩が話しかけてきた。

「最高ですね！風がすごく気持ちいいです！」

ピカっちがかなり嬉しそうだ。

「そうだろう？俺はガキの頃から父さんにこうやって乗せてもらっていたからピカっちの気持ちはよくわかるんだ。いつかリザードンになった時に俺みたいに嬉しがるポケモンたちを見たいなあ！なんて思ったから嫌じゃないんだ。他のポケモンたちを乗せるのって」

ヒート先輩が嬉しそうに話す。僕もこうやってお母さんやお父さんの背中に乗って空を飛んでいることがあるから、ヒート先輩の気持ちがよくわかる。

「でもピカっちにはそばにボーイフレンドもいるし、こうやって毎日空飛んでいけるんじゃないか？」

ヒート先輩はからかった感じで笑いながら話した。

それを聞いたピカっちの顔は、段々赤くなっていく。だってさっきの“じしん”の後からピカっちは……、なぜかずっと僕のそばにいるんだ。

「ヒ……、ヒート先輩！カゲっちとあたしは……ただの幼なじみですよ！変なこと言わないで下さいよ！」

「ピカっち。俺は一言も“カゲっち”がボーイフレンドだなんて言ってないぞ？嬉しさのあまり“オーバーヒート”するような泣き虫ヒトカゲが、かわいいピカっちを守れると思うか？」

……ヒート先輩？

なんで僕だけこんなにテンションがた落ちなんでしょうか？

「カ……、カゲっちくんはさっきあたしのこと守ってくれたんですよ！バカにしないで下さいよ！カゲっちくんはただのダメダメ泣き虫ヒトカゲとは違いますよ！」

……ピカっち。それ全然フォローになっていない気が……。

むしろさっきよりひどく感じてるの……僕だけかな？

おまけにあの“じしん”の時は、僕も放心状態だったからね。しっかり君を守ったかなんて不安だよ……。

僕はかなりテンションが落ちとなっていた。せっかくこれから楽しい野球部の活動があるというのに……。

学校のグラウンドを出発してから約１０分。ヒート先輩は地上に降りた。

「さあ、着いたぜ。ここが俺がみんなを連れて来たかった場所だ」

その場所はあさひタウンの中心部の自然公園の近くの商店街だった。ヒート先輩の後をさらについて歩くことにした。

「俺のオススメのスポーツ用品店があるんだ。俺もいつもそこで野球の道具を買っているんだ。ほら、ここだ」

ヒート先輩オススメのスポーツ用品店に着いたようだ。店の看板には、“ポケット・スポーツ”と書いてあった。
それほど大きい店では無いようだ。

早速僕たちは店内へ入った。様々なスポーツ用品が所狭しと並んでいる。
ケガ用のスプレーやキズぐすりや修理用具まで置いてある。

しかし、店員さんらしきポケモンがいないなあ……。

「すいませ～ん！“トノ”店長いらっしゃいますか？ヒートです！」

ヒート先輩は店の奥へそう大声で呼んでみた。

「ん～？なんだ？ヒートか？また野球道具が壊れたのか？全くおまえさんとラッシーは昔からよく道具を壊すなあ～」

と、店の奥から出てきたのはニョロトノだった。

うわー……。かなり不機嫌な顔つきだあ……。

「トノ店長！違います。俺の学校の野球部に後輩が入部したから……。オススメの店だって紹介しただけだよ」

それを聞いた瞬間にニョロトノさんの顔が笑顔になった。

「そうかそうか！それは悪いことを言ってしまったな～！お詫びに野球道具の人数分をタダにしてあげるよ♪」

かなりご機嫌になってすごいこと言い始めたけど……、そんないい加減でいいのかな？

「さっすがトノ店長だ♪やっぱりこの店で良かった！」

ヒート先輩も嬉しそうにしている。

……あの～。盛り上がっているところで悪いんですけど……、って僕が言おうとしたその時、

「お！わりぃ、わりぃ！この方がこの“ポケット・スポーツ”の店長であるニョロトノの“トノ”店長だ」

ヒート先輩が紹介してくれた。

「はじめまして。僕ヒトカゲの“カゲっち”です。ヒート先輩の後輩です」

「あたしピカチュウの“ピカっち”です」

「あたしはチコリータの“チコっち”です」

「僕はトゲチックの“チック”で～す♪」

例のごとく、僕たち４匹組はトノ店長にあいさつした。

「みんな笑顔で元気いっぱいだな。さすがは野球バカのヒート先輩の後輩だな」

トノ店長は楽しそうに僕らを見てそう言った。

「トノ店長はヒート先輩やラッシー先輩とお知り合いなんですか

？」

僕は先ほどの会話のやり取りがかなり親密に聞こえたのでちょっと疑問に感じていた。

「そうだよ。だって私は小学生の頃のヒートとラッシーの元監督だったんだからな」

「え！？本当なんですか？」

僕は驚いた。だって、ヒート先輩の元監督が小さなスポーツ用品店の店長だなんて思わなかったから。

「あの時からヒートやラッシーは熱い全力プレーを見せてくれてな、見ているこっちも楽しかったんだ。ヒートやラッシーがいなかったら“あさひファイアーズ”のジュニア大会も優勝なんて有り得なかったかもしれなかったしな」

と、懐かしそうにトノ店長は話す。さらに、

「熱くなりすぎている代わりに、ヒートやラッシーが使う道具は壊れやすかったがな。何度も新しい道具を、渡していたものだ。まあ、決まって赤いバットに赤いグローブだったがな」

と、一言加えた。

「だって赤が大好き何だもん。赤を見ていると燃えてくるんだよ」

と、ヒート先輩が話した。

「さてと昔話はこのあたりで終わりにして、そろそろ道具選びと行こうぜ。カゲっちたち仲良し４匹組の記念すべき、最初の道具をな」

「ふむ。そうするか。みんなこっちにおいで」

僕たち４匹組とヒート先輩はトノ店長の後について、店の奥へ進んだ。

「野球道具はここだ。さあどれでも好きなものを選びなさい」

『はい！ありがとうございます！』

僕たち４匹組はバリエーション豊かなカラーの道具から自分の好

きなバットやグローブを選んでいく。僕もお気に入りを選ばなきゃ！

選び始めて15分ほどして、僕たち4匹組はお気に入りのカラーを決めた。

まず僕は、バットもグローブも赤にした。憧れのヒート先輩と同じ、そして熱い気持ちをイメージするのにうってつけだと思ったからだ。

ピカっちのバットは全体は黒だが、グリップ（手で持つ部分）だけが赤というちょっと変わったものにした。なんでも本人いわく、

「おもちゃの感じがしたから♪」

ということらしいが……。グローブは黄色にしたようだ。

チックのバットは全体が濃い茶色のバットだ。

「だって一番ヒットが打ちやすそうだもん♪」

笑顔でチックが言う。ちなみにグローブは……、世にも珍しいシルバーだ！でもこんな色って人間界には無いかも……。

そしてチコっちだが、彼女のバットはピカっちと同じ“おもちゃバット”だ。
どうやら2匹とも同じバットにしたかったらしい。グローブは緑色にしたらしい。

とまあこんな感じで僕たち4匹組はそれぞれオリジナルのバットとグローブを選んだ。これをタダで受け取れるなんて夢のようだ！！

トノ店長！本当にありがとうございます！！

道具選びが終わった僕たち4匹組とヒート先輩は、トノ店長に見送られながら学校へ戻った。

第12話：「“ポケット・スポーツ”で道具を揃えよう！」の巻（後書き）

ヒート：「どうだ？いい店だっただろ？」

カゲっち：「はい！ようやく道具が揃って嬉しいです！」

ピカっち：「次回からは練習が本格的に始まるわよ♪」

第１３話：「波乱だらけのランニング！？（汗）」の巻（前書き）

カゲっち：「ハァ～……」

作者：「どうしたの？」

カゲっち：「なんだか１日が長い……」

ピカっち：「気づけば１０話分も費やしているんだもの」

作者：「最近この小説が３分クッキングのような気がしてきたのは僕だけでしょうか？（汗）」

チック：「良いんじゃない♪のんびりしていて♪」

ラッシー：「という訳で第１３話プレイボールだぜ！」

第１３話：「波乱だらけのランニング！？（汗）」の巻

“ポケット・スポーツ”で、それぞれオリジナルな野球道具も揃えたことだし、いよいよ練習のスタートだ！

あれから学校のグラウンドに戻って来た僕たち４匹組とヒート先輩は野球部の練習へと戻って来た。

「今日はそんなに時間が残っていないから、簡単な練習にするぞ」

キュウコン監督が笑顔で話す。

確かに時間を確認すると、４時を過ぎていた。部活の見学や活動は６時までらしいから、そんなに時間は残っていないようだ。

「早速だが、まずはじめにランニングからだな。いきなりグラウンド５周はきついかも知れないが、自分のペースで走ってきていいからな。とりあえず……、ジュジュとヒート！一緒について行ってくれ」

そう言われると、ジュジュ先輩とヒート先輩が一緒に走ってくれることになった。

「チコっちちゃん。頑張ろうね♪」

ジュジュ先輩がチコっちに優しく声をかける。すると、またチコっちの顔が赤くなって行くじゃないか。暴走しないか不安になってきた……。

「カゲっちもピカっちもチックも頑張って行こうぜ！」

ヒート先輩はかなりうれしそうだ。

さあ！いよいよ野球部の一員として初めての練習が始まるぞ～～～！

僕たち6匹はホームベースからスタートしてからライトの方へと走りはじめた。

さすがにジュジュ先輩やヒート先輩は早いなあ。もう離されたよ……。

……おや、なんだろう?この不気味なズドドドドドドドドドという音は……。

僕は恐る恐る後ろを振り返ってみた。

……げっ!!!

あれは、チコっちじゃないか!!

……はやっ!!

あっという間に僕の左隣を走り抜けて行ったぞ!!?１００mを3.5秒で走っているんじゃないか?と言うあの神懸かり的な走りを見せるあの暴走チコリータ……果たして5周スタミナが持つのか不安だ……。

一方僕とピカっちはあの暴走チコリータに目が点になってしまったが、それでも自分のペースを乱すことなく走っていた。

「なんだかこうして走っていると、3匹でかけっこの練習していたの思い出すわね♪」

と、僕の右隣にいるピカっちが満面の笑顔で話しかけてきた。

「そうだね。小学校の運動会の前って言ったらこうして走っていたよね」

僕はつい去年まで小学生だったのに、なぜか何年も昔のことのように懐かしくなってきた。

……とある小学校のグラウンドで3匹のポケモンが横に1列に並んで一斉に全力疾走している。

ヒトカゲ、ピカチュウ、チコリータだ。
このポケモンたちは運動会のかけっこの練習をしているようだ。

「やったー！僕が1位だ！！」
「違うよ！あたしが1位よ！！」

ヒトカゲとピカチュウはほぼ同時にゴールインしたためにどっちが1位かと争っている。

「……まあいっか♪本番でもこれくらい頑張って1位とろうね♪」

ヒトカゲがそう言うと、自然と2匹とも笑顔になって笑っている。

「いいな～。あたしも1位になりたいな～」

「大丈夫だよ、チコっち。頑張って練習したら1位になれるよ！」

そういうと3匹はまた練習を始めた。

……「あの時も1番を目指していたよね。なんだか懐かしいね。またみんなで頑張って練習しようね」

僕はピカっちにそう言った。するとピカっちの顔が赤くなった。そしてさっきよりもさらに僕に近づいて走っている。

「どうしたのピカっち?さっきから僕に近くない?」

いくら幼なじみだからと言ってもかなり恥ずかしく感じる。だっ

て今までにこんな近くにいるピカっちは見たことなかったから……。

「だって……。また何かあったら1匹でいるの不安何だもん……。カゲっちくんなら守ってくれると思うんだもん」

やっぱりラージ先輩の“じしん”が恐かったんだな。ピカっちって昔から恐がりだもんな。

さて、そんな感じで楽しく思い出話をしている僕たち2匹より、さらに後ろを走っているのはチックだ。自分のペースで良いと言われたためか、鼻歌混じりでニコニコしながら走っていた。

「みんな楽しそうだな～♪野球部も楽しいじゃん♪」

と、みんなの様子を見て楽しそうに走っていた。

さて、いよいよ5周目に突入したぞ！頑張って走り抜くぞ！

ジュジュ先輩とヒート先輩は後12周は走れそうだ。なんでこん

な中途半端な数字かと言うと、耳の良いピカっちがこんな会話を聞き取ったようなのだ……。

「ジュジュ。おまえ後何周走れそうだ？」

「へ？僕は後１０周は走れるよ？それともキミはもうバテバテなのかい？」

「ば……バカ言うな！！俺は誰にも負けないぜ！！！おまえが後１０周って言うなら俺は後１２周は走れるぜ！！」

あらあら……。２匹とも火花散らしてるよ……。

というわけで2匹とも互いに譲ることなく走っていた。

ちなみにあの暴走チコリータは2周目でダウンしてしまった。

まああの神懸かり的な走り方をしていたら当然だろう。ピカっちも同じことを思っていたのか、苦笑いしていた。

僕とピカっちは5周目で限界だ。さすがに疲れてきた。

メニューをこなした後、スポーツドリンクをラプ先輩から渡されて、休憩することになった。

「おつかれ♪初めてなのによく頑張ったわね♪」

その言葉を聞いて改めて野球部の一員になれたことを実感した。

僕たち2匹に少し遅れてチックもメニューを終えた。やっぱりあのニコニコ笑顔だ。

「僕も疲れたけど、楽しかった♪次は何するのかな♪」

ここまで楽しく練習していると、先輩たちもうれしいだろうな。僕もチックのようにならなきゃ。

さて、あのジュジュ先輩とヒート先輩の激しいデットヒートレースの結果はどうなったかと言うと……。

「ハァ～……。あの2匹もバカよね～。後輩を前に恥ずかしくないのかしら？４１周も走る気力を試合で見せなさいよ」

と、ラプ先輩がため息混じりであきれながら話していた。

その2匹の先輩は三塁ベース近くで、見事に凍り付けになっていた。

この勝負……。４１周目でラプ先輩の“ぜったいれいど”で凍り付けにされて引き分けだ……。２匹ともご苦労様でした。

とまあ、そんなある意味で波乱のランニングを終了した僕たちの次の練習はキャッチボールだ。

いよいよ野球ボールをその手にすることが出来るぞ！

第１３話：「波乱だらけのランニング！？（汗）」の巻（後書き）

ラッシー：「俺出番無しかよ……（泣）」

ラージ：「ドンマイドンマイ。俺も出番無いから……（泣）」

カゲっち：「なんだか１日が一生終わらなそうだ……」

チック：「のんびりしていて良いんじゃない♪僕はこの方が良いよ♪」

作者：「最近みんなが勝手なこと言うようになってきたような……。なんでだ？」

第１４話：「はじめてのキャッチボール！！」の巻（前書き）

カゲっち：「僕ちゃんと出来るかな～？（汗）」

作者：「読者さんには君のダメダメっぷりがウケているからな～♪（黒笑）」

カゲっち：「もしかして……嫌な予感……。」

ラッシー：「ちゃんと出来たか注目の第１４話プレイボールだぜ♪」

第１４話：「はじめてのキャッチボール！！」の巻

いろんな意味で、野球部ってすごいな～♪
本当にこのメンバーの一員になれて良かった♪
僕たち４匹組はランニングの後に軽い準備運動で、体をほぐした。
そして、まだ新品のグローブを持ち出して来てキャッチボールを始めようとしたのだが、
「お前たちにこれを渡す。これで本当に野球部の一員だ。頑張ってくれよ。」
キュウコン監督から渡されたのは、野球帽だった。
あさポケ中を意味するＡとＰの文字が、まるで空に浮かぶ白い雲のように白色で横に並んで刻まれている。そして、全体が朝日のような赤色で、つばの部分は海のような青色だった。
僕たち４匹組は早速受け取った帽子をかぶってみた。
「似合っているかな～？」
と言わんばかりに僕たち４匹組はお互いを見る。そして、なぜか笑ってしまった。

そのあと、僕たち４匹組は僕とピカっちペアとチコっちとチックペアに分かれてキャッチボールを始めることにした。
「ん？チコっちは左利きなんだな。ラプと一緒じゃないか。」
キュウコン監督は少し驚いていた。
そう。チコっちは左利きなのだ。何か字を書くときも左脚で書くし、“つるのムチ”も左のムチから発動しやすいのだ。
読者さんのみなさんは今もしかしたら、
「ポケモンたちに利き腕なんてあるのか？」
と感じたかも知れない。この設定は作者さんが、
「野球をするのに利き腕は必要な設定」

と、勝手に決めたことなので、少々違和感を感じても、許してほしい。

さて、話題がそれてしまったが、話を元に戻そう。

キュウコン監督はまず、打球の違いから教えてくれた。

?ゴロ→打ったときに地面を転がって来たボールのこと。

?バウンド→打ったときに地面を弾んで来るボールのこと。

?フライ→打ったときに空高く飛んで来るボールのこと。

?ライナー→打ったときに地面に着かずに真っすぐ飛んで来るボールのこと。

「簡単にまとめるとこんなところだろう。フライやライナーはボールが地面に落ちる前に捕れば、その時点で打ったバッターはアウトになるからな。しかし、これは打撃のときにまた教えるとしよう。」

と、キュウコン監督は教えてくれた。さて、いよいよキャッチボールのスタートだ!!

「カゲっちくん、よろしくね♪」

「こっちこそよろしくねピカっち。」

僕とピカっちペアは非常に和やかな雰囲気でキャッチボールを始めた。そばでコーチをしてくれるラッシー先輩も終始笑顔だった。

…バシン!…バシン!

ボールがグローブに収まるときのこの音がグラウンドに響く。

「なかなか上手いんじゃんか。特にピカっちはホントに初心者なのか?」

ラッシー先輩がかなり驚いている。

確かに……さっきからボールをすべて完璧にグローブで落とさず捕るし、僕の方へボールも胸元へ反らさず投げている。「それだ

けの技術があれば、たいしたもんだ。完璧に捕球して、さらに相手が捕りやすい胸元へちゃんと投げてくれる。貴重な守備の要として期待出来るぜ♪」

ラッシー先輩はピカっちのことをベタ褒めだ。ピカっちはもう赤くなってしまっている。

「そんな……たまたまですよ。相手がカゲっちくんだからやりやすかっただけですよ。」

「ふふ～ん？な～るほど……。ボーイフレンドがいたから安心して出来たワケかぁ～……。」

ラッシー先輩はニヤニヤして僕を見る。そして一言、

「決めた！！カゲっちとピカっちのラブラブカップルは、二遊間を守ってもらおう！ちょうどセカンドとショートがいなかったからな～♪カゲっちがセカンドでピカっちはショートで良さそうだな～～♪」

と、うれしそうに言った。

「俺も賛成だ！二遊間はコンビネーションが大事だからな～。ラブラブカップルの2匹にはぴったしだな！」

と、ヒート先輩もうれしそうだ。……っていつの間にか、氷溶けていたんですね……。（汗）

「あたしも面白いと思うわ♪バカな先輩たちと守備をするより、ずっといいと思うわ。カゲっちくんもヒートのすぐ後ろよ。特等席じゃない！」

と、続いてラプ先輩。

「そうだね。カゲっちくんもピカっちちゃんも“すばやさ”が速い種族だし、最高の二遊間になりそうだよ。」

と、ジュジュ先輩まで納得している。

「ちょっとみんな～？2匹とも困っているじゃないか。勝手なこと言わないで、監督に決めてもらおう！」

と、ラージキャプテンの提案で、キュウコン監督に決定してもらうことにした。

キュウコン監督はしばし沈黙した。かなり難しい表情をしている。
……でもさすがにこんな理由で二遊間　なんてさせませんよね？
さっきのポジション紹介でヒート先輩が二遊間はかなり難しいって言っていたし……。
　するとキュウコン監督が決定したようだ。みんな息を飲む。グラウンドに緊張が走る……。
「フッ……。面白そうだな。俊足でなおかつコンビネーションが良い。二遊間に重要なことがクリアされている。２匹に二遊間組まさせてみようか。」
　このキュウコン監督が決定した後、先輩たちはバンザーイ！！！と喜びの歓声を出した。
　僕とピカっちはただ目が点となってその様子を見ていた。
「なんかよくわからないけれど、あたし……カゲっちくんと一緒なら頑張れそうな気がする。これから頑張って練習しようね。」
　ピカっちが笑顔で僕に話しかけてきた。僕と一緒なら頑張れそうなんて照れちゃうよ～。／／／

　そんな感じで妙な盛り上がりを見せる中で僕とピカっちは再びキャッチボールを始めた。
　……だけど、みんなこっちを見てニヤニヤしているから、僕もピカっちもお互いの顔を見られないほど恥ずかしい気持ちになってしまっている。ピカっちなんて顔が真っ赤な上に、“でんきショック”を赤いほっぺや、体全体からパチパチ音を鳴らしながら繰り出している。
　それでも周りの先輩たちを驚かしたのは、僕たちが相手の顔を見ないで、ボールをすべて完璧にキャッチしていることだった。
「やっぱりラブラブパワーってすげえんだな。俺とヒートでも相手の顔を見ないでキャッチボールするなんて、至難の技だぜ。」
と、ラッシー先輩。

「ああ。俺が思っていた以上に野球のセンスあるぜ。この2匹。こりゃ大会が楽しみだ。」

と、ヒート先輩も感心している。

結局20分の練習の間、僕たち2匹が一度もミスをすることは無かった。

さて、みんなが僕とピカっちペアに注目している間に、もう一方のチコっちとチックペアはどうだったのだろうか？

こちらのペアのコーチはジュジュ先輩だ。手取り足取りチコっちに教えている。

「チコっちちゃん。ボールはチックくんの胸元に投げるんだよ。じゃあやってみようか。」

突然ですが読者さんのみなさんに問題です。この後、チコっちはどんな行動を起こしたでしょうか？

・　・　・

ハイ、時間切れです。では、正解を見てみましょう!!

ジュジュ先輩に手取り足取り教えてもらったチコっちは言われた通りにチックにボールを投げた。

「イタッ！」

チックは痛がっている。あの暴走チコリータのことだから、きっとボールをチックにぶつけたのだろう……。

しかし、そのときチコっちの手にはまだガッチリとボールが握られていた。ではなぜチックが痛がっているのだろう。

実はそのとき、あの暴走チコリータは顔を真っ赤にしてジュジュ先輩を見つめていたのだ。

「ああ……ジュジュ先輩……かっこよすぎる……。」

それに対してチックは、

「チコっち～。早くボール投げてよ～～。」
と、つまらなそうに彼女を待っていたのだ。
「あ！チックくんごめんね。今投げるから！」
と、ボールを投げる姿勢を見せたのだが、この時一緒に“はっぱカッター”を繰り出したのだ。
「あ……。ごめんなさい。」
幸い目だったケガは無かったが、チコっち……やりすぎです……。
（汗）
ちなみにチコっちとチックペアも２０分くらい続けたのだが、キュウコン監督があることに気がついた。
「チックは肩が良いな……。チコっちの悪送球もジャンプして捕ったりするし……。サードに向いているな……。チコっちは左利きだし、ファーストをやらせてみせようかな…。」
確かに……。チックは二塁ベースよりさらに遥か後ろからでも投げているな……。２０Ｍは軽く越えている気がする。（汗）むしろチコっちのボールが届いていないような……。
「チックくん遠すぎ～！」
ってチコっちが暴れているのに彼は、それでもニコニコしているぞ……。ある意味この野球部で一番すごい選手なのかも……。（汗）
「明日からチックはラージとキャッチボールだな。一番この野球部で強肩だからちょうど良いな。」
と、キュウコン監督。
ちなみになぜ左利きがファーストに向いているかと言うと、
・右利きの場合だとボールをキャッチしたあと９０度体を回転して他の塁に投げないとならないが、左利きだとそれが自然体で出来るらしい。
・牽制のときも右手にファーストミット（ファースト用の大きいグローブ）を持っている方が素早くランナーをタッチ出来るらしい。
というメリットがあるとキュウコン監督が教えてくれた。
最後にキュウコン監督は、

「予想以上に君たち４匹は野球が出来るぞ。頑張れば、他校の野球部より鉄壁の内野陣となれるはずだ！」

僕がセカンド、ピカっちがショート、チコっちがファースト、チックがサード……。意外にも僕たち４匹組のルーキーは内野陣としてチームの一員になったのだ。これから頑張って練習しなきゃ！！

「キャッチボールが終わったから次はバッティング練習を行うぞ！みんな準備出来次第始めるからな！」

『ハイ！！！』

僕たちあさひポケ中学のナインは元気に返事した。

もうすぐ４時半だ。空はオレンジ色に染まろうとしていた。

第１４話：「はじめてのキャッチボール！！」の巻（後書き）

カゲっち：「ちゃんと出来たぁぁぁ！！」

作者：「さすがにそこまでひどくは出来ないよ。たまに良いところも書かなきゃね♪」

カゲっち：「作者さんありがとう！！作者さん大好き♪」

作者：「く……苦しい……。首絞めないで……。（汗）」

カゲっち：「これで僕のイメージ変わるかな？」

作者：「無理だと思う。だって読者さんは君のダメダメっぷりに期待しているんだから。」

カゲっち：「そんなこと言わないで！！」

第１５話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～そして～

カゲっち：「次は打撃練習だ！楽しみだ～～！」

ヒート：「今回もまためちゃくちゃなタイトルだな……（汗）」

ジュジュ：「気にしない♪じゃあ早速第１５話プレイボール！！」

第１５話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～その１～

キャッチボールちゃんと出来て良かった～。

次は野球では一番楽しいバッティング（打撃）練習だ。頑張るぞ。

練習の前にキュウコン監督が打撃の知識を紹介してくれた。

「まずバッターボックスのことから話すとしよう。ホームベースから見て右側が右バッターボックスで左側は左バッターボックスだ。うちのチームで左バッターはラプとチコっちが分かっているが、ピカっち、カゲっち、チックは右バッターで良いんだな？」

僕ら３匹は首を縦に振った。

「よしわかった。次にストライクゾーンについて話すぞ。ストライクゾーンは打者が自然にバットを振ることが出来る範囲と考えて欲しい」

特にポケモンは４本足のポケモンがいるので、かなりアバウトになることを許して欲しい。

「とりあえず、バットを振ってみようか。おいヒート。ちょっと投げてくれないか？投球練習だと思って投げれば問題無いだろ？」

キュウコン監督がヒート先輩にそう伝えた。もちろんヒート先輩は快くそれを引き受けた。

「だったらあたしがマスクをかぶるわ。かわいい後輩たちにあさひポケ中学野球部のバッテリーの力を見せてあげる♪」

ラプ先輩が僕たちルーキー４匹組にウインクしてキャッチャーの準備を始めた。

ピッチャーマウンドに上がったヒート先輩は、早速投球練習を始めた。

「は……速い」

僕たちルーキー４匹組はヒート先輩が投げる球のスピードの速さに驚くばかりだった。

投げた瞬間にラプ先輩が構えるミットに届いている。あんなボール打てるのかな？なんだか不安だ……。

「さて、一体誰から打つんだ？」

キュウコン監督が聞いた。すると、

「じゃあ僕から打たせてもらいます。」

濃い茶色のバットを持ち、ヘルメット（野球帽と同じデザイン）をかぶったジュジュ先輩が名乗りを挙げた。

「あのランニング対決の決着がついていないしね。だから延長戦といこうじゃないかヒートくん」

ジュジュ先輩が“挑戦状”を叩きつけた。

「良いだろう。この打撃練習は１５球ずつだから８球打てたらお前の勝ち。逆に８球俺が抑えたら俺の勝ちだ。それでどうだ？」

ヒート先輩がその“挑戦状”に応じた。

もうこれはただの打撃練習ではない。２匹の先輩は真剣な表情だ。

絶対負けられないというオーラーが感じられる。

そのジュジュ先輩が二回三回と素振りをしてからゆっくり右バッターボックスに入った。

「君たちは遠くから観ていなさい。参考になるから」

と、キュウコン監督の指示で三塁側の屋根付きのベンチの中から他のメンバーはこの対戦を観ることにした。

「私が審判をしよう」

と、キュウコン監督が審判をすることになった。

「プレイボール！」

キュウコン監督の掛け声で、

ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩のガチンコバトルがスタートした。

まず注目の1球目。ピッチャーのヒート先輩が大きく振りかぶる。

そして、バッターのジュジュ先輩へボールを投げた！！！

カーン！！

ジュジュ先輩がそれを打ち返した。その当たりは二塁ベースの上を越した。

「センター前ヒット（中安）！」

キュウコン監督がコールした。

「すごいや。あんな速いボールを打つなんて……」

僕は驚きと感激が混じって興奮している。

「でもああいうボールを、他校の野球部はあういう球をどんどん投げてくるぜ」

ラッシー先輩がそう言う。

「え!?僕たちそんなの打てるかな?」

僕やピカっちやチコっちは驚きと不安な表情をみせる。

「大丈夫だよ。これから一生懸命練習するんだ。君たちなら出来そうな気がするんだ。俺たちもサポートするから安心して」

と、ラージキャプテン。その言葉を聞いたらなんだかほっとしちゃった。

でもチックはこの会話の間も常に笑顔だったな……。不安に感じなかったのかな?

さて、話を勝負に戻そう。

1球目はジュジュ先輩の勝ちという結果だった。

ヒート先輩はかなり悔しそうな表情をみせる。

マウンドを蹴り、そしてじっとジュジュ先輩を睨みつけるように見つめた。

そして2球目を大きく振りかぶって投げた!!

「ストライク!!」

ジュジュ先輩はバットを振ったが、ボールに当たらず、空振りに終わった。

「ヨッッシャーーー!!!!!!!!」

ヒート先輩はグローブを叩き雄叫びをあげた。

「ヒートくん。それやめてくれないかな?」

空振りしたジュジュ先輩は苦笑いしながら言う。

「悪いか?俺はこうすると気合いが入るんだ」

ヒート先輩がそう言う。

これで1勝1敗となった。

次の3球目。大きく振りかぶってヒート先輩が投げた。

コーン！

フラフラっとボールがライトへ飛んでいく。あの白い線の内側か？外側か？

……内側だ！フェアだ！！

ガッツポーズのジュジュ先輩にがっくりとうなだれるヒート先輩。

記録はライト前ヒット（右安）だ。

ベンチでもチコっちがキャーキャーと騒げば、僕は悔しさを表情に出す。

他のメンバーはその様子を見てあぜんとしている。

「何よカゲっち。ちゃんとジュジュ先輩を応援しなさいよ！」
「何言っているのさ！ヒート先輩が勝たなきゃ面白く無いじゃん！！」

このベンチの中でも応援合戦がスタートした。火花をバチバチっと散らす。

次の４球目をヒート先輩が投げた。

カキーン！！

あ！！打球が内野を大きく越えてレフトを越えて……、

「ホームラン！」

キュウコン監督がコールしている。

え!?ホームラン?僕たちはレフト方向を見つめた。

「入ったの?本当に?じゃあダイヤモンド1周しちゃおーう!じゃーねヒートくん♪」

そう言うと、イヤミ全開のジュジュ先輩がダイヤモンドを回り始めた。

記録はレフトへのホームラン（左本）となった。

ヒート先輩は打たれた方向をただ呆然と見つめている。

そしてフーッと一息吐くと、クルッとホームベースに向き直す。

さらにラプ先輩がマウンドに近づいて来た。

「悪いわね。高めに構えて……。これは徹底的に低めをつこうかしら?思ったよりジュジュがタイミング合っているし」

「いや、アレを投げよう。これをただの練習と考えちゃいけないようだし。ここから本気に投げたいけど良いか?」

「ええ。わかったわ。あたしたちの凄さ、見せつけてあげましょう♪」

ラプ先輩とヒート先輩が相談する。何か方針を決めたようだ。

ジュジュ先輩はホームベースに戻って来たあと、念入りにバットを振っている。

「おお……。相談しているってことは本気だぜラプとヒート。ホームラン打たれて燃えてきたか？」

ラッシー先輩が腕を組んでうれしそうに話す。

「こっからのヒートはすごいぜ。カゲっちたちもよく見ていなよ」

そう言われると、僕たちは今まで以上にこの対決に釘付けになった。

さあ次が5球目だ！ヒート先輩が振りかぶって投げた！！

「そんなストレートばかりで抑えられるって思ったら甘いよ！またホームラン打ってあげるよ！」

ジュジュ先輩がバットを振る。またヒット打たれてしまうのかな？僕は不安な様子でバトルを見つめる。

「ストライク！！」

キュウコン監督がストライクをコールする。誰もが驚いていたが、一番驚いていたのは、バッターのジュジュ先輩だった。

「え？どうして？僕のタイミングはバッチリだったはずなのに……。わかった！！さてはフォークを投げたな！？」

ジュジュ先輩はよほど悔しかったのか、その場で“じたばた”している。

「あったりめーだ！！絶対負けられないからな。ここからは本気で投げさせてもらうぜ」

ヒート先輩はボールを赤いグローブで受け取りながら、そう話す。

でもまさかフォークを投げるなんて……。

ラッシー先輩に教えてもらったんだけど、フォークというのはバッターの目の前でストンと落ちる変化球のことらしい。

ヒート先輩のフォークはストレートと同じような速さで投げられるから、見分けるのは難しいんだ。

「たかが打撃練習であんなに熱くなるなんて。本当に負けたくない気持ちが伝わるぜ。あの決して逃げないピッチングスタイルは観ててスカッとするだろう？」

ラッシー先輩が僕たち４匹組に聞いて来る。

「ええ。僕ますます憧れちゃいます。」

僕はあの優しく話し掛けるヒート先輩と、この決して逃げない熱い気持ちを見せるヒート先輩。

この“２匹”が目標になったのだ。

「カゲっちくんもあれくらいかっこいいところ見せてくれるよね♪」

ピカっちが僕に笑顔で話してきた。

「どうかしら？だってダメダメヒトカゲなんだから、あたしはかっこ悪いところしか見れないと思うわ」

チコっちが反応を見せた。

……って、なんでそこまでひどく言われる必要があるの？

そんなに僕って泣き虫でだまされやすくて、おっちょこちょいなダメダメヒトカゲなの？

「ウフ♪そうね。カゲっちくんはかっこいいなんて一つも感じないわね♪」

ガーーーン！！

ぼ……僕は半分泣きそうになっていた。すると、ポーンと肩を叩いてきた。

隣に座っているピカっちだった。

「ジョーダンよ♪そんなこと無いってあたしは信じているから……。もう、泣かないの」

「ピカっち～～～。だって、だって……ワーーーン！」

僕はこらえきれず泣いた。

「全く……本当に泣き虫ね♪ほら泣かないの」

と、またハンカチで僕の涙をふくピカっち。

ラッシー先輩はその様子を見て目が点になっている。

まるで小さい子供が母親に慰めてもらっているような風景に驚いているのだろう。

ラージキャプテンはチコっちにいじめじゃないか?という内容を話すが、これが日常的な僕たち幼なじみ3匹の風景だということを伝えた。

さて、ベンチ内がなんだか騒がしくなってきているのと、話題が脱線しているのが不安だが、話をヒート先輩とジュジュ先輩の対決に戻そう。

まさか変化球を投げると思わなかったジュジュ先輩は次の球が何かを考えていた。

ちなみに大会では、こうして変化球を投げることは許されている。

だがラッシー先輩いわく、まだ特別ルールがあるらしいのだが……。

現在5球目までででジュジュ先輩の打撃結果は中安、空振、右安、左本、空振と3球ヒットを打っている。

まさにヒート先輩と一進一退の攻防を繰り広げている状況なのだ。

『全く……。そこまで本気にならなくても良いのに……。ちょっとホームランで調子乗りすぎたかな？でも、そこまで本気なら僕だって考えがあるよ』

そう心の中で感じたジュジュ先輩。不敵な笑いを見せている。

さあ6球目!!ヒート先輩が足を上げて投げた!!

「やっぱりね。ストレートだね。外角低めのボールかい?それ!!“はたく”!!」

そう言うと、ジュジュ先輩はなんと自分のしっぽでボールを打った!!

その球はセンターへと強い当たりのゴロで抜けて行った。

記録はセンター前ヒット（中安）だ!

「しっぽで打つなんて……。あんなの反則じゃないですか!!」

またベンチの中で僕は騒ぐ。するとラージキャプテンは、

「いや。あれも許される。僕たちはポケモンでしょ?だから自分の覚える技で打撃・走塁・守備・投球を行うのが1チーム3回許さ

れているんだ」

続けてラッシー先輩も、

「俺が言った特別ルールはこのことなんだ。俺たちあさひポケ中学が大会で一度も優勝出来なかった理由はこれも関係しているんだ。もし、相手よりポケモンバトルが弱かったり、自分のレベルが低かったりしたら、こうしていきなり技を使われたりした場合に防ぎようが無いだろ?それがあさひポケ中学だったんだ。この野球部は常にそれで負けていたんだ」

あさひポケ中学が優勝出来なかった理由がこんなところに隠されていたなんて……。

僕はショックの他に言う言葉が無かった。

「ヒートの奴もそれはわかっているはずだぜ。表情が違う」

ラッシー先輩がそう最後に言った。

僕たちルーキー4匹組は果たして力になれるのか不安になってきた。

他のチック以外のメンバーも不安そうにしている。だがチックだけはその時も笑顔だった。

さて、打たれたヒート先輩は、

「これでなきゃ面白く無いな。ますます燃えてきたぜ!!」

と、闘志を燃やしている。

この壮絶な対決の決着はどうなるのか!!?

次回へ続く!

第１５話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～そして～

作者：「たった６球でこの量になるとは……。試合始まったらすごいことになりそう……」

カゲっち：「気になる続きは次回のお楽しみ！！」

第１６話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～そして～

作者：「今回は野球の話は一切ないから～♪」

ジュジュ：「なんだって！？」

ヒート：「早く決着つけろ！！」

ラプ：「うるさいわね！“ぜったいれいど！！”」

作者：氷づけ

ヒート：「……。（汗）とりあえず第１６話プレイボール！」

第１６話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～そ

ラッシー先輩から明かされた衝撃の特別ルール……。

それは、僕たちポケモンが覚えられる技を1チーム3回まで使えるというルールだった。

「カゲっちくん……。ポケモンバトルみたく技を使っても良いらしいけど……」

僕の隣に座っていたピカっちが話しかけてきた。

「ポケモンバトルはもうやらないってあの事件の時から、カゲっちくん言っていたよね？こんなルールがあるとやりにくいんじゃない？」

ピカっちが心配そうな表情で見つめている。

……いや、チコっちも心配そうな表情をしている。

「いい加減忘れたら？あの事件はどうすることも出来なかったんだから……。あんなにバトル好きだったのに……」

チコっちがそう言う。

「“あの事件”ってどういうことだ？」

その時ラッシー先輩の声がした。

「特別ルールの話からカゲっちの表情が暗いから変だと思っていたんだ。何か辛い過去をもっているようだな？」

ラッシー先輩はすでに僕がおかしいと思っていたらしい。

「辛いかもしれないが話をしてくれ。何か力になりたいんだ。ヒートも言っていただろう？どんなヤツでも安心して練習出来る野球部を目指しているってな？……それに同じほのおタイプとしてカゲっちには頑張って欲しいからな」

ラッシー先輩は真剣に聞いてくれそうだ。

「わかりました……。“あの事件”のことを話します」

僕は静かに“あの事件”のことを話し始めた……。

……それは今から3年前のことだった。僕はまだ小学4年生だった。

「カゲっち！ポケモンバトルしようぜ！」

この声は、その時の僕にとって大親友だったブースターの“ブース”の声だ。

「良いよ！だけど僕は負けないよ！」

その時の僕はポケモンバトルが大好きだったし、ブースも大好きだった。

毎日こうしてあさひタウンの中心の自然公園に集まっては、よくポケモンバトルをしていた。

僕たちは同じほのおタイプとして、ライバル関係でもあったんだ。

「カゲっちくんがんばって～！ブースくんもがんばってね！！」

この声は、ピカっち。笑顔で応援している。隣にはチコっちもいる。

「それじゃ行くぜ！！“たいあたり”！！」

ブースが先制攻撃をしてきた。ドスンと僕に当たる。

「イテテテテ。僕は“かえんほうしゃ”だ～！！」

僕はブースに“かえんほうしゃ”をする。

「なんだって？じゃあ僕だって“かえんほうしゃ”！！」

公園のバトル場で、炎のぶつかりあいが始まる。お互い譲らない！

「ブース！僕は絶対負けないよ！だって毎日ほのおタイプの技を磨いているからね！！僕は最強のほのおポケモンになるんだ！！」

「僕だって目指す目標は同じさ！！そのためにも、まだ勝ったことがない君を倒さなきゃならないんだ！！“ほのおのうず”！！」

突然ブースが“ほのおのうず”を繰り出す！熱い気持ちをこめて、渦が僕を包む。

これでブースがやや有利になったようだ。

「だったら僕はこれを利用するまでさ！！“だいもんじ”！！」

その瞬間、僕を包んでいた渦が大きく形を変えて大の字となる。

そしてさっきの“かえんほうしゃ”と、“ほのおのうず”、そしてそれを合わせたパワーの“だいもんじ”がブースに当たった。

「うわっちっちっちっちっ！！！俺の負けだ！！」

ブースは多少やけどを負ったが、これもいつもの風景と知っているピカっちが彼にチーゴのみを渡した。

「へへッ！誕生日プレゼントの“だいもんじ”のすごさが分かったでしょ？」

僕の誕生日は４月１１日だ。その時にお父さんがくれた、わざマシンの“だいもんじ”によって僕は誰にも負けない強さを持っていた。

「ったく……。僕の種族は“もらいび”だけど、僕は体が弱いから他のブースターと違ってほのおわざでもダメージになってからほのおが強くなるから、厄介だよな……」

ブースが悔しそうに言う。そう彼は、他のブースターと違い、ほのおわざでもダメージが当たる変わったブースターなのだ。

「でも、ブースのほのおもかなり強いよ！たくさん練習したんだね」

そう、彼は必死にハンデを越えるために炎の威力を強くしていたのだ。

それは他のほのおポケモンでも嫌がるくらい熱い。

「カゲっちが相手だと嫌だぜ。お前は熱いものを好む性格だから

な」

ブースが僕を褒める。しかし、その時ピカっちが、

「その代わり、雨を見ると大泣きしてあたしたちを困らすダメダメヒトカゲになるけどね♪」

どうやらこの時から僕はダメダメヒトカゲとしていじられていたようだ。みんな大笑いしている。

「せっかく良い雰囲気なのにぶち壊さないでよ～」

僕は困ったように言った。

そうしているうちに、やがて夕方になってきた。僕たちは家に帰ることにした。

「カゲっちくん。ブースくん。みんなで一緒に帰ろう♪」

ピカっちがそういう。チコっちの家はここからすぐ近くの商店街

の花屋さんだ。

「いいよ。一緒に帰ろう」

ブースが言う。彼の家は“しんかのいし”を始めとした、様々なポケモンを強くする道具を揃える店だった。

そしてピカっちの家が、街外れできのみを使った様々なお菓子を作るお菓子屋さんだった。

僕の家は店ではないが、お父さんが郵便局で働いている。
だから街のことはよく知っている。

そんなこんなでとりあえず４匹はなかよく家に帰ることにした。

だが、この時僕は２度と忘れない“あの事件”に遭遇することになったのだ。

それによって大切な友達の夢を壊すことも知らずに……。

あたりがその時に限って暗かったような気がした。不気味に感じたのは僕だけだろうか？

「きゃぁぁぁぁ！！」

その時、確かにピカっちの声がした。

振り返ると、そこにはザングースピカっちの耳を思い切りわしづかみしている光景が。

チコっちもヤルキモノにがっちり頭の葉っぱをつかまれている。

「あ！！お前たちは学校でいじめをしている悪ガキのザングースとヤルキモノだ！！！ピカっちとチコっちを離せ！！」

ブースは彼らのことを知っているようだ。

「やなこった！ホレホレ！」

ザングースが憎たらしい笑顔でピカっちの耳をギュっとにぎる。

その度に彼女の悲鳴が響く。

「離して！！痛いよ！助けて！」

ピカっちが涙がボロボロ流しながら僕たちに助けを求める。

「アニキ！こいつらオーダイルさんのところに連れていこうぜ！」

ヤルキモノがチコっちの葉っぱを強く握る。彼女の悲鳴が響く。

「そんなことさせるか！！“たいあたり”！」

ブースがザングースに攻撃する。

「へん！“みだれひっかき”！」

ザングースがブースを攻撃する。

「危ない！！えーい！“かわらわり”！！」

僕はザングースに思い切り攻撃する！

するととっさに怯んで、ピカっちをにぎっている手を離した。

「やった。助かったわ！」

僕たちのところにピカっちが戻ってきた。

「もうこんなことをさせないよ！“かえんほうしゃ”！」

怒りをこめて、ブースの炎がザングースに直撃した！！

ザングースはＫＯ状態だ！！

「やったぜ！！」

僕とブースはハイタッチした。

この時、僕たちはすっかりヤルキモノの存在を忘れていた。

だから“あの事件”が起こったのだろう。

ブースの顔から笑顔が消えた。

「カゲっち！うしろォォォォォ！」

「！？」

僕は慌てて後ろを振り返る。

……が、しかし遅かった。

僕は思い切り吹き飛ばされて地面にたたきつけられた。

「カゲっち！！？ちきしょう！！“すてみタックル”！！」

ブースがヤルキモノを攻撃した。しかし彼は、“メガトンパンチ”で返り討ちにされた。

ピカっちとチコっちの悲鳴が響く。ピカっちは泣き崩れて体が動かなくなっている。

「ハッハッハッ！さっきまでの勢いもムダだったな！このチコリータを助けられないほど弱いんだよ」

「ううう……。くそ！せっかく最強のほのおポケモンを目指しているのに……！」

彼は……、ブースは悔しくて地面から起き上がれず涙を流している。

「……けるな……！」

その時、僕の中では怒りが頂点に達していた。

ハンデに負けず必死に努力するブースに対するその言葉に対してだった。

「ふざけるなあぁぁぁぁぁぁぁッ！！！！！！！！」

その瞬間僕のしっぽのほのおが青白くなり、そして普段の数十倍も大きくなった。

さらに普段はオレンジ色の体も真っ赤に……まるでリザードのようになっている。

そして、その瞳には確かに炎が燃えていた。

……この状態こそ、“いかり”だった！もうこの状態になると戦闘不能になるまで収まることはない。

すべての怒りの対象を焼き尽くすまでは……！

「な……なんなんだ！？あのヒトカゲは！？」

僕は思い切り“ドラゴンクロー”をぶち込んだ！チコっちはヤルキモノが怯んだスキに逃げ出した。

「“りゅうのいかり！！！”」

次々とその“いかり”はポルテージを上げる。ヤルキモノはもう反撃することも出来ない。

そして最後に、

「もう2度と姿を現すなぁぁ！！“オーバーヒートォォォォォ！！”」

最大限の感情をこめた“オーバーヒート”により、この悪ガキ２匹を倒した。

そして僕も力が抜けたようにその場に倒れたのだ。

そのあと、僕が目を覚ました場所は、病院だった。隣にはブースもいた。しかし彼は泣いていた。

「僕は2度とほのおわざを出せなくなっちまった……」

理由を聞いた瞬間に僕は頭が真っ白になった。

あのヤルキモノに吹き飛ばされた時に、少なからず頭にダメージがあったらしい。

その影響で彼はほのおわざを繰り出す神経を破壊されたらしい。

「どうしたら良いんだよ！僕は……僕は最強のほのおポケモンになりたかったのに！！」

彼は、隣でワンワン泣いていた。

「あの時僕がヤルキモノに気づいていたらあんなことにならなかったんだ！僕のせいで……僕のせいで……！」

僕は“あの事件”を語っているうちに涙が止まらなくなっていた。

「……そのブースターはどうしたんだ？」

ラッシー先輩が聞く。

「ブースは転校しました。なんとかまたほのおわざを覚えようと必死にリハビリしているようです。転校するときに……ただ彼は、“カゲっちありがとう”。って言ってくれました。あの時から僕はポケモンバトルは一切やっていません。もう出来ることなら、２度とあんな思いはしたく無いんです」

そこまで言うと、僕は下をただ黙って向いて見つめていた。涙がポタポタと流れて一滴ずつこぼれていた。

ラッシー先輩やピカっちやチコっちはただ黙っていた。

みんな暗い表情をして……。

第１６話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～そ

作者：「ふっかーつ！！」

ラプ：「うるさいわね！よくこんな暗い話なのにそんな明るく出来るわね？」

作者：「良いじゃん？」

ポケモン３匹：「良くない！」

第１７話：「決戦！？ジュジュ先輩ＶＳヒート先輩の１５球勝負！！」の巻～そ

作者：「カゲっちは元気になるのか！？そして１５球勝負の結果はいかに！！」

チック：「気になることばかりの第１７話プレイボール！！」

第17話：「決戦!?ジュジュ先輩VSヒート先輩の15球勝負!!」の巻～そ

僕が“あの事件”をラッシー先輩に話した後、ベンチの中はかなり暗い雰囲気になっていた。

僕はそのベンチで体を震わせていた。

思い出せば思い出すほど、辛くなっていた。涙が止まらない。

すると突然誰かが肩をポンと叩いてきた

「……よし。分かった。そんな小さい体に重すぎるかも知れないけど……。その“過去”を乗り越えていこうぜ」

視線の先には笑顔のラッシー先輩がいた。

「“過去”を……乗り越える……？」

僕は一瞬言葉の意味が分からなかった。瞳にはまだ涙がこぼれそうな位溢れ出している。

「そうさ。“過去”を乗り越えるんだ」

ラッシー先輩が繰り返す。

「わかるか？“過去”を乗り越えるんだ」

またもラッシー先輩が繰り返す。

「ほら……。言ってみろ。“過去”を乗り越えるんだ」

僕は涙目のまま復唱する。

「“過去”を……乗り越えるんだ……」

ラッシー先輩がまた笑顔を見せる。

「そうだ。“過去”を乗り越えるんだ。いくら後悔したって前には進めない。後悔する時は思い切り後悔するんだ。自分を思い切り責めれば良い。でも、そればかりじゃ2度と決して前にも進めなくなるんだぜ？」

ラッシー先輩の熱い言葉が響く。

「後悔しているって事は、プラス思考にすると、自分が本当に取るべき行動を知っていたんじゃないのか？自分がこうしなかったから……、こういう辛い“過去”を作ったと言うなら……」

ラッシー先輩はさらに熱くなる。

「カゲっちの苦しみを今日初めて会ったばかりの俺たちが……周りのヤツらが１００％理解するのはハッキリ言って不可能だ。でも周りで励ましてくれているのは、それだけカゲっちのことが心配なんだ！みんなカゲっちが元気だった姿を知っているから！」

ラッシー先輩はこみあげる感情を止められずにいた。

「カゲっち……俺たちに言ってくれたよな？野球部を強くさせるのに協力させてほしい！！って。ヒートはずっとカゲっちと同じように“過去”に後悔していたんだぜ？でも本気でこの“過去”を乗り越えようとしている。だって本気で協力してくれる、仲間がいるから……じっと立ち止まるわけにはいかないんだ。だからアイツも後悔するのは止めたはずだ。あんなに生き生きと野球しているヒートを見られるのは、ずいぶん久しぶりだぜ。元気だった本来の姿に戻りつつあるぜ」

ラッシー先輩の話はさらに続く。

「俺だってカゲっちと同じように苦しんでいた“仲間”にどういう行動をしたらいいか分からずに苦しんでいたぜ……。アイツを苦しみから解放させたのは…、紛れもない……カゲっち……。おまえの一言だ。おまえの一言でヒートが“過去”を少しずつ乗り越えているんだ」

最後にラッシー先輩が力強く、

「だから……今度は俺たちの出番だ！！カゲっちが“過去”を乗り越えられるように全力でサポートしてやる！！」

そこまで言われたとき、僕はまた泣き始めた。ラッシー先輩がまるで弟を慰めるように軽く抱きしめる。

「カゲっち。おまえは辛い思いをしてきたんだ。今度は本当に楽しいことが待っているはずだ」

「ワ～～～ン！ラッシーせんぱ～～～い！！」

ピカっちやチコっちも思わず軽くもらい泣きする。ラージキャプテンも、

「俺たちはもう“仲間”だ。苦しみも悲しみも楽しみも嬉しさもみんな共感してやる」

そしてチックも、

「僕も君を1匹にはさせないよ。だからがんばろう」

と、励ましてくれた。

「みんなありがとう……。僕……、頑張って“過去”を乗り越えるよ……。こんなに応援されてうれしいよ……」

その時僕はまた仲間の大切さを改めて感じた。

「さあ。暗い話はこれくらいにして、ヒートとジュジュの勝負の続き観ようぜ！」

ラッシー先輩の一言で僕らは１５球勝負の続きを見はじめた。

『……ったく！まさか技ありだと思わなかったぜ。強がって見せたけど、ジュジュは結構厄介な相手だぜ……』

マウンドのヒート先輩は、まさかの連続で驚いている。

ここまで６球で一進一退の攻防が続く。キャッチャーのラプ先輩もピッチャーのヒート先輩に次に何を投げさせるか困っている。

『でも……勝つのは俺だ！！！』

次が７球目だ！長い間合いからヒート先輩が大きく振りかぶって

力強く投げた！！

「ストライーク！！」

思わずジュジュ先輩が後ろを振り返る。もうジュジュ先輩のひざ元ギリギリに……つまり内角低めのストライクゾーンギリギリにそのストレートは決まった。

「オラァァァ！！決まったァァァ！！」

ジュジュ先輩はマウンドでグローブを叩きつけて吠える！

「く……！あんなコースなんてどうやって打てっていうんだよ？しかも見えなかったよ？」

一体ヒート先輩のストレートは何キロ出ているのだろうか？野球経験者のジュジュ先輩でも見えないなんて……。

「おお～。いいねいいね♪ヒート。ナイスナイス♪」

ベンチの中でもラッシー先輩が盛り上がってきた。

この7球を振り返ると、中安、空振、右安、左本、空振、中安、見逃し、とジュジュ先輩が打てば、ヒート先輩が闘志溢れる球で抑えるという状況が続いている。

この調子でいくと15球目まで決着がつかないかも知れないぞ。

観ている側としても手に汗握る展開だ。

さて8球目だ。周囲が段々夕日が差し込んでオレンジ色に染まってきた。気づけば5時近いのだ。

そんなことを全く気にしていないヒート先輩が投げた!

「ボール!!」

「あ!くっそ!コントロールミスだ!」

悔しそうな表情のヒート先輩。

「力み過ぎたぜ~。あっつくるしいヤツだぜ。もっとリラァーッ

クス！！」

ベンチで笑顔のラッシー先輩。手を叩く。

「もう～。後輩にカッコイイところ見せようとして～。それはダメダメリザードンだよ～。ヒートくん♪」

バッターボックスのジュジュ先輩は相変わらずのイヤミ口調だ。

「だ……誰がダメダメリザードンだ！？一球サービスしてやったのに感謝の気持ちというのが無いのか？」

ヒート先輩がそう言う。

あの真っすぐな気持ちもラッシー先輩が言うには、“過去”に苦しんでいたときには見られなかったらしい。

怒りながらも、その表情には確かに笑顔が見られた。

純粋に野球を楽しんでいるヒート先輩がそこにはいた。

だがボールの場合は、バッターのジュジュ先輩の勝ちと言うルールだ。これでジュジュ先輩は5点となった。

次が9球目!!
ヒート先輩が振りかぶって投げた!!

「ボール!!」

審判のキュウコン監督がコールする。ヒート先輩が投げたボールはジュジュ先輩が立つバッターボックスとは逆方向の……、つまり外角のもう高めの方に大きく外れてしまった。

「くっそ!また外れた……。さっきと同じように投げているはずなのに……どうしてなんだ?」

マウンドでヒート先輩が首を傾げる。

確かにここまでヒート先輩の投げたボールは必ずストライクゾーンに決まっていた。

まして相手に点数が入るようなことをわざとするはずがない。

……だとしたらこの突然のコントロールミス連発の原因は何なのか？

『フフ。まだ気付いていないんだねヒートくん。僕がさっき君にイヤミ口調で話しているのは、キミに“ちょうはつ”を繰り出したんだ。これにまんまとかかったらコントロールミスは終わらないよ。』

バッターボックスで小さくニヤリと笑うジュジュ先輩。

……そう。彼の繰り出した“ちょうはつ”こそ、ヒート先輩がコントロールミスを連発した原因なのだ。

読者さんには“？？？”という方もいるかもしれないが、技の効果が実際とは異なる設定になっていることがあるかもしれないが、そこは許してほしい。

次が１０球目！！

『俺は負けねぇ！！この野球部を優勝させるためにも！ここで負けねぇ！！』

マウンドで熱い気持ちをボールにこめてヒート先輩が投げた！

「ボール！！」

だが勝負の世界はあまりにも無情だ。

勝ちたい！負けたくない！と思っても、ヒート先輩のボールは真ん中高めに外れてしまう。

「なんでだ……どうしてなんだ……？」

次第にヒート先輩の表情が青ざめていく。まさか、“ちょうはつ”でコントロールミスを続けているなんて夢にも思っていないだろう。

これでジュジュ先輩は7勝。

とうとうヒート先輩は後が無くなった。

様子が変だと感じたのだろう。ラプ先輩がマウンドへ向かう。

「どうしたの？そんな青ざめた顔して……。ヒートらしくないわよ？」

「……」

ヒート先輩はラプ先輩の問いかけに黙って下を向いたままだ。

「……もしかして……諦めたワケじゃないでしょうね？」

ラプ先輩が半分怒った感じで話す。

「まだ終わったワケじゃないでしょ？何暗い顔しているの？後が無いなら、もう後はがむしゃらにボール投げなさい！自分の良いところを後輩に見せなさい！」

ラプ先輩がヒート先輩を励ます。

「全く……。これだからヒートのピッチィングは熱くなりすぎる

とあたししか抑えられないって言われるのよ。そのくせちょっとリズムが狂うとバカみたく動揺するのよ？」

ラプ先輩はあきれた感じで話す。

「良い？とりあえずアンタの良いところ後輩に見せるような……、悔いの無いようなピッチィングするのよ？」

まだヒート先輩は黙ったままだ。

……ブチッ！

するとラプ先輩の堪忍袋の尾が切れた。

「き・こ・え・て・い・る・の！！！！？？わかったら大きく返事しなさい！！このヘタレエースのヘタレリザードン　！！！」

ラプ先輩は周りにも聞こえるような声でヒート先輩に返事を促す。

「返事しないなら……」

……ゾクッ！

一瞬僕やラッシー先輩の背筋に嫌な寒気が襲った。

「ラプの前ではちゃんと返事しよう……」

同感です、ラッシー先輩。

……あまりにも恐すぎてヒート先輩の身に起こった災難は言葉には言えない。

なるべくラプ先輩は怒らせない方が身の安全を確保出来るような気がする……。

実はラプ先輩って野球部で一番スパルタなのだろうか？……かなり不安だ。

さて、恐怖のお仕置きを受けたヒート先輩には後が無い。

『しょうがない。これで打たれたら後悔しない！これしか投げら

れない！！』

キャッチャーのラプ先輩のサインにヒート先輩が納得した。

さあ１１球目！！

「打てるなら打ってみろ！！」

ヒート先輩が大きく振りかぶって全力で投げた！！

そのボールは縦にストンと変化して落下した。フォークだ！！

……しかも落下したときにボールが炎に包まれた！！

……それだけでは無い！落下したときにその軌道上にも炎の柱が出来ている！！なんてフォークだ！！

「おお！！あれは“ほのおのうず”で作った特別変化球！！ファイアフォークボールだ！」

身を乗り出すラッシー先輩とラージキャプテン。

「とうとう奥の手を出したか！ダブルＦボールとも勝手に呼んでるけどな！」

とにかくすごいのは伝わった。僕も目がキラキラ輝く。

ピカっちとチコっち、チックはさっきの僕との変貌ぶりに苦笑いしていた。

……だが勝負の世界はやはり無情過ぎた。

そのありえないボールに対してジュジュ先輩は冷静だった。そしてニヤリとまた笑った。

「残念だね！この勝負もらったぁぁぁぁぁ！！！」

その言葉通りにボールはレフトへ弾んだ。記録は左安だ。

これで8勝3敗となったジュジュ先輩の勝利が確定した。

バッターボックスで歓喜の声が……ベンチから飛び出したチコっちとジュジュ先輩の笑い声が響いた。

一方マウンドではレフトに落ちたボールを見つめるヒート先輩がいた。そしてガクっとマウンドに倒れ込んだ。

「ちっくしょおおおおおおおお！！！！！！！！」

全身全霊を……すべての思いをぶつけたはずの最高のボールを打たれたことへのショックは計り知れなかった。

しばらくの間、ヒート先輩の悔し涙が夕日が差し込んでオレンジ色に染まるマウンドを濡らした。

「ヒート先輩が負けたの…？」

ベンチでもその光景は受け入れがたい現実だった。

僕は改めて野球の恐さを感じたような気がした。

「やれやれ……負けちまったか……。ラッシー。ヒートを起こしにいくぞ」

「ああ。このまま親友をほっとくワケに行かないしな」

ヒート先輩を起こしにラッシー先輩とラージキャプテンがベンチから出る。なぜかその表情は暗かった。

キャッチャーのラプ先輩もショックだったのだろうか？まだキャッチャーボックスで茫然としている。

「ラプ先輩？」

ピカっちが心配そうな顔をして近くに寄る。

「残念でしたね。ヒート先輩をあんなに励ましてたのに……」

「……そうね。でも彼が打たれたのはあたしの責任。キャッチャーはピッチャーの良いところを引き出さないといけないの。それが出来なかったから……」

その先は言葉に出来なかった。ピカっちが撫でている。

「ヒート先輩……。一生懸命投げた姿……かっこよかったです……。僕、やっぱり野球部に入部出来てよかったです。次はきっと勝てますよ！だから泣かないで……。そんなヒート先輩は見たく無いです……」

僕はマウンドで泣いているヒート先輩を励ました。精一杯気持ちを伝えた。

「泣くなヒート。今回は残念だったけど、“この一瞬に生きる”お前の姿は後輩に伝わったはずだ。また明日から努力するんだ」

キュウコン監督がそう言う。

「はい……。みんなも迷惑かけてごめん……」

ゆっくりとヒート先輩が立ち上がった。泥だらけの姿にその気持ちが表現されていた。

「今日の練習はここまでだ。バッティングのことは参考になっただろう。明日から本格的に練習を始めるぞ」

最後にラージキャプテンのあいさつで野球部の練習が終わった。

段々と夕日が沈んでいく中で僕たちは帰宅することにした。

明日から練習頑張るぞ！！

第17話：「決戦!?ジュジュ先輩VSヒート先輩の15球勝負!!」の巻～そ

ヒート：「何だよ!俺の負けかよ!!」

作者：「世の中うまくはいかないよ」

ヒート：「もっと明日から練習頑張るぞ!!」

第１８話：「最高の時間……」の巻（前書き）

カゲっち：「ようやく一日が終わるね。」

作者：「まだまだだよ……。」

カゲっち：「え？何があるの？」

ピカっち：「気になるから第１８話プレイボール！」

第１８話：「最高の時間……」の巻

明日から毎日大変かも知れないけど、でも一緒に先輩たちと、“カントリー・リーグ”の優勝目指して練習するぞ！

「カゲっちにピカっち、チコっちにチックは少し残ってくれ」

僕たち仲良し４匹組はキュウコン監督に呼ばれた。

「お前たちの背番号を決めるぞ。もう立派な野球部のメンバーだしな」

どうやら背番号を決めるらしい。

「今残っている番号は“４”、“７”、“８”、“９”だ。さあ、選んでくれ」

僕たち４匹組は誰から選ぶか相談した。その結果、野球部の入部を強く希望していた僕から選ぶことになった。

「それじゃ～僕は４月生まれだから、“４”にしよう」

僕は“４”にした。

「あたしは“７”が良いわ。幸せな数字ですもの」

ピカっちは“７”だ。

「それならあたしは“８”にするわ。ピカっちの次の番号だから♪」

チコっちは“８”だ。

「僕は残った“９”だね♪」

チックは“９”だ。

「みんな決めたようだな。では大会の時はその番号を背負ってくれ。ではまた明日な」

キュウコン監督はそう言うと、校舎へ戻って行った。

「あたしたちも帰りましょうか」

ピカっちは疲れた様子でカバンを持ちながら話す。

「そうだね。みんなで帰ろうか」

僕が言う。ちなみにチック君の家はカフェを営んでいるらしい。

「明日からは、寝坊出来ないね」

中学校から下校し始めた僕たち４匹組。明日から野球部の朝練があるとラージキャプテンが話していた。

集合時間は７時３０分って言っていたな。ちゃんと起きれるか不安だな……。

僕たちの住むあさひタウンの中心部には商店街がある。そのあたりに僕らの家があるのだ。片道１５分くらいだろう。

「なんか今日は一日いろんなことがあったわね」

チコっちが話す。

思えばそうだ。

今日は僕の苦手な月曜日の朝だった。

まず僕のお母さんにむりやり起こされ、学校に着けば、朝のあいさつを僕だけしてなくて、ワンテンポズレてクラスメイトのみんなに笑い者にされ、笑顔が溢れるチック君と中学生になって初めての友達になり、授業では、目が死んでいる社会科のエアームド先生に憂鬱に感じ、部活紹介では、ヒート先輩に憧れを抱き僕だけマイワールドに入り、紹介の半分も聞かず、野球部に入部したいとみんなに話したら、ピカっちとチコっちがおっちょこちょいで、ドジを踏みやすくて、だまされやすくて、泣き虫なダメダメヒトカゲの言うことにかなり驚いたりもした。

いざ、部活の見学を始めたら、吹奏楽部では知らぬ間に入部試験で不合格（？）になり、美術部では、美術に興味が無いなら見学しないでとバカにされた結果、“だいもんじ”で攻撃して、美術室を掃除した。

野球部の見学では、まずチコっちがジュジュ先輩に“メロメロ”になって、暴走チコリータになったり、ラージキャプテンの手荒い歓迎で、ピカっちと僕の関係が周りから見てラブラブに見えたり、ヒート先輩の姿に僕は“オーバーヒート”してピカっちに涙を拭い

てもらったり、入部が決まって“ポケット・スポーツ”でトノ店長に道具をタダでもらったりした。

野球部の最初の練習のランニングでは、チコっちが暴走チコリータになったり、ジュジュ先輩やヒート先輩が熱く４１周走ってラプ先輩に凍らされたりした。

キャッチボールでは、僕ら４匹組の意外な野球センスに自分たちも先輩たちも驚いた。

そして最後にジュジュ先輩とヒート先輩の１５球勝負では、ヒート先輩がまさかの敗北が待ち受けていたとは夢にも思わなかっただろう。

辛い僕の過去を話を聞いてもらい、支えてくれると言ってくれたラッシー先輩やみんなには、感謝しても感謝しきれない。

こうして振り返るだけでも今日一日で様々なドラマがあったことに僕は充実と驚きと疲れを感じた。

思えば１６話分も費やしているんだな……。

「それじゃあ、また明日♪」

チックとチコっちは同じ商店街の中に自分の家があるので、彼らとは町の中心の自然公園の前で別れた。
僕とピカっちの家は町外れにあるので、まだ一緒に仲良く帰っていた。

「ところでピカっち？学校で僕に話があるって言っていたけれど。話って何なの？」

僕は部活紹介の後にピカっちが僕に話があるって言っていたのを思い出した。

それもみんなが帰った後……、つまり僕に関係している話だと思った。

「えっ？聞きたい？」

突然ピカっちが焦り始めた。顔がまた真っ赤になっていた。

「言っても良いよね？」

ピカっちが僕に聞いてくる。

「ん？……良いよ？」

僕は全く彼女が焦り始めた理由が理解出来なかった。

でも、後で考えると無理も無いと思った。

だって彼女は……、

僕が全く予想しなかったことを話し始めたのだから……、

「あたし……、カゲっちくんのことが好き……」

小さかったけれど、　彼女は僕に好きって言ってくれた。

……え！！？

僕は次の瞬間、全身が“かなしばり”になった。

「好き……。本当に大好き……。ずっとそばにいたい……。」

彼女は話し続ける。

僕は黙って話を聞く。またダマされているんじゃないかとも思った。

「あたし……。カゲっちくんと仲良しで良かった。あの時からずっとずっと好きだった……。確かにダメダメヒトカゲかも知れないけど……、でもあの時カゲっちくんが助けてくれてから好きだったの……。今日だって守ってくれた……」

ピカっちは自分の気持ちを伝えようと必死だった。

「恥ずかしくて……、顔を見ただけで……」

彼女は続ける。

「みんな同じ部活が良いって言ったのは……、みんなと一緒にいたいというのもあるけど……、だけど本当はカゲっちくんのそばが一番落ち着くから……。温かい気持ちでいられるから……。辛くても……、いつでも元気なカゲっちがいるから……」

僕は話を聞くうちに、だんだんとピカっちの気持ちに驚いていた。

……まさかそこまで自分のことを考えていたなんて……。

「カゲっちくんがまさか野球部に入りたいなんて思って無かった。女の子のあたしが野球だなんて……みんな反対すると思った。……でもここで諦めたら、もうカゲっちくんと一緒にいられなくなるから……。後悔したく無かったから……」

ピカっちの言葉に体が震える。

だからラージキャプテンが“じしん”を使ってから様子が変だったんだ……。

バトル嫌いになってしまった原因の、“あの事件”からずっと好きって言っていたピカっちに……、

……僕は申し訳ない気持ちでいっぱいだった。
そして……、

ドジでだまされやすくて泣き虫でバトル嫌いの本当にダメダメなヘタレなヒトカゲにここまで想ってくれていた……、

……1匹のかわいい女の子のピカチュウのためにも……、

……僕は“過去”を乗り越えなければならないと……、

強く決心した……
。

「カゲっちくん……。あたしとずっとそばにいて下さい……」

そこまで聞くと僕はまだ震えが止まらないその体で……、

彼女を抱きしめました……。

「ありがとう……。僕……うれしいよ……。こんなダメダメなヒトカゲだけど……ずっとそばにいるからね……。またキミを本当に守れるくらい……強くなるからね……」

僕はまた泣いていた……。
ただうれしくて……。

「カゲっちくん……。あったかい……」

彼女はまるで天使のような笑顔で気持ち良さそうに僕に抱かれていた。

辺りはもう薄暗くなってきた。
でも時間なんて関係無い。

しばらくの間……、ずっと僕たちは幸せだった。

ドタバタな月曜日で一番幸せな……最高な時間でいられたから……。

第１８話：「最高の時間……」の巻（後書き）

作者：「ようやく日にちが進みそうだ」

カゲっち：「でも本当に色んなことがあったなぁ～」

ピカっち：「でも最後にカゲっちくんと恋人になれた……」↑顔が真っ赤になる

ヒート：「次回も楽しみにしてくれよな！」

第１９話：「その日の夜といつもと違う朝」の巻（前書き）

作者：「久しぶりの最新話です♪」

カゲっち：「僕、張り切るよ♪」

ピカっち：「それでは第１９話のプレイボール♪」

第19話：「その日の夜といつもと違う朝」の巻

まさかまさかのピカっちの告白にはびっくりしたけれど、でも本当に幸せ……。

「ねえピカっち……。そろそろ家に帰ろうか……。きっとお母さんたちが心配していると思うから……」

僕はまだ震えが止まらない状態が続いていたが、周りがかなり暗くなっていたので、帰ることをピカっちに提案した。

「……良いよ。だってすごく気持ちが温かくなれたから……」

ピカっちは満足そうに話す。

そっと僕は、抱きしめていたピカっちのことを離した。

その後僕たち2匹はさっきよりも仲良く帰ることが出来た。

……まるでその時間だけが普段の何万倍も遅くゆっくりと流れて行ったような気がした。

「じゃあねカゲっちくん。また明日」

ピカっちは自分の家に着くと、手を振ってくれた。

「うん。また明日」

僕も手を振ってあいさつした。

「ただいま～」

僕はようやく家に着いた。
ちなみに現在６時３０分である。

……一言言うならヘトヘトである。

「お帰り。ずいぶん遅かったのね？」

まず僕に声をかけてくれたのはお母さんだ。
夕ごはんを作っている途中なのだろうか？
エプロン姿でキッチンで料理をしている。

「そうかな？でも今日は中学の部活紹介があって、放課後に見学していたから……」

僕はとりあえずリビングでソファーに座って、かなり疲れた様子でお母さんと話す。

「部活ねぇ……。それでカゲちゃんは？何の部活に決めたの？」
「野球部だよ。ピカっちもチコっちも今日友達になったトゲチックのチックも一緒だよ」
僕はお母さんの質問に対して即答した。

……？

あの～もしもし……。お母さん？
何でそんなに驚いた表情を見せているんでしょうか？

しかも、さっきまで包丁でキャベツを切っていたんですよね？

……動きがまるでビデオかＤＶＤの一時停止ボタンを押したようにストップして石像のように固まっていますけど……？
そこまで僕はすごいことを言ったのでしょうか……？

「カゲちゃんが野球部!?みんなに迷惑かけるんじゃないの?」
「それ……どういう意味?」
なぜだかかなり心配されているような気がする。
「だってカゲちゃんは昔から泣き虫でおっちょこちょいで落ち着きが無いし……、朝寝坊だってするじゃない」
……僕って自分の母親からもダメダメヒトカゲとして見られているのでしょうか?
しかし、以前お父さんから話を聞かされたことがあったのだが、僕のお母さんは昔から人一倍心配性として有名だったらしい。
元々人一倍心配性の性格にこんなダメダメな息子……。
お母さんからすれば、心配という名の相乗効果は計り知れないだろう……。
「でも“がんばりや”のカゲちゃんのことだからちゃんと練習についていけるわね。お母さんも応援するからね!」
「ありがとうお母さん」
そのあとお母さんはうれしそうにご飯を作るのを再開した。

……そういえばお腹空いたなあ……。

その後しばらくしてお父さんも帰ってきたので、夕ご飯を食べることになった。

「いっただきま～す！！」

今日はハンバーグだ！
野菜サラダにみそ汁もあるけど、お腹ペコペコだからドンドン食べられそう！

え？ポケモンが人間のような食事をするの？って読者のみなさんは思ったでしょう？

食べられるんだよ♪

しかもお母さんの料理の味は町でも有名なんだ！

僕……幸せ♪

「そういえば“ヒカゲ”は野球部に入部するのか？お父さんも応援しているぞ」

お母さんから話を聞いたのだろう。お父さんが食事中に話しかけてきた。

あ！！読者さんのみなさんに言うの忘れていたけど、僕の本当の名前は“ヒカゲ”って言うんだ！！

友達からは“カゲっち”。
お母さんからは“カゲちゃん”。
そしてお父さんからは本名の“ヒカゲ”。

ポケモンの世界がいくら広くても、こんないろんな名前で呼ばれるヒトカゲっていないだろうな。

「それで話は変わるけど、あさっての水曜日はおまえの誕生日だろう？プレゼントを楽しみにしてるんだよ」

……すっかり忘れていた。

今日は４月９日月曜日だ。

僕の誕生日の４月１１日はもうあさってにまで迫っていたんだ。

ちなみに僕のお父さんは誕生日プレゼントにはいつも“わざマシン”を買って来る。

バトル好きだった頃は最高のプレゼントだった。

……あの事件後も受け取っていた。

いくらお父さんにあの事件は気にするな！今まで通りに生活していろ！と言われても……、

バトル嫌いなのは決して治らなかった。

それでも必ずプレゼントは“わざマシン”だった。

まるでいつかまた元気に友達とポケモンバトルして欲しいと言うメッセージが込められているような気がした。

実は一番心配していたのはお父さんだよね？

その日が来たら、ちゃんと言うよ……。

……ありがとう。

……その後夕ご飯を食べ終え、お風呂でゆっくり疲れをとる僕。

自分の部屋に戻り明日の準備をして……。

……お休みなさい……。

本当に長かった一日が終わった。

そして次の日。
見渡す限りの青い空に白い雲。
今日もすごくまぶしい朝日が僕らを優しく照らしている。

「あ♪おはようカゲっちくん♪」

ピカっちは自分の家の前で僕の事を待っていた。カバンを持ってね。
僕たちはこうして学校に行くことにしたんだ。
ピカっちがどうしてもって言うからね。

「やっぱりカゲっちくんのそばってすごく優しい気持ちでいられる♪」
「そんなにくっつくと恥ずかしいよ～／／／／／」

他の登校中の生徒から見ても、ラブラブカップルってわかるくらい彼女は僕にくっついている。
まあ、野球部の朝練が7時30分からだから、まだそんなに他の生徒はそんなにはいないけど……。

「良いじゃない。だってあたしはカゲっちくんとカップルなんだから……」

いやいや……。いつからそんな大胆になったのピカっち？

自然公園の前ではチコっちとチックが待っていた。

「おはようカゲっちくん♪」

今日も笑顔のチックがあいさつする。

「おはようピカっち……！！！？何しているの！？」

チコっちは驚いていた。

いや、むしろ驚かない方がおかしいだろう。

今チコっちの前には♂のヒトカゲと、ヒトカゲに抱き着いて気持ち良さそうにしている♀のピカチュウがいるのだから。

ラブラブ状態全開である。

「あたしたち……。カップルになったの♪すごく幸せ♪」

「いやいやカップルって……。そんな簡単に言うの？ためらいも

何も無いの！？」

チコっちはまだパニック状態だ……。

「良いの。だって気持ちがスッキリしたから♪」

僕とピカっちは学校へと向かう。

チコっちはそのラブラブ状態にあぜんとしていた。

野球部のメンバーが待つグラウンドに到着した僕たち４匹組。

ここでも僕とピカっちはラブラブだった。

「お！！ラブラブ二遊間がここで登場だ♪ホントにラブラブカップルになったんだな♪」

うれしそうに話すラッシー先輩。

他のメンバーはすでに集合していた。

その後しばらくして、ラージキャプテンのあいさつとキュウコン

監督のあいさつあり朝練習が始まった。

朝練習は簡単な練習がメインになるらしい。

「まずはランニングだ。みんな走るぞ♪」

ラージキャプテンの一声でグラウンド5周のランニングを始める。

足が速い種族、そうでない種族。

いろんなポケモンがいるけど、必ず良いところがある。

ラージキャプテンは力の強さが足に変わって良い特徴だし、ラプ先輩は何と言っても守りの良さが売りだ。

ランニング5周一つでも、ナイン一匹一匹の想いはそれぞれ違うはずだ。

ヒート先輩、ジュジュ先輩は相変わらず先頭で5周を走り切った。

少し遅れて、ラッシー先輩に僕とピカっちが走り切った。

そのあと笑顔でチックとバテバテのチコっち（恐らくまた暴走チコリータに変化したのだろう。）が走り切る。

そしてラージキャプテンにラプ先輩が遅れても最後まで走り切っ

た。

「それじゃあ次はキャッチボールだ」
僕はピカっちとキャッチボールだ。
丁寧に丁寧に一球ずつキャッチしては相手のグローブへ投げる。

チコっちはジュジュ先輩とキャッチボールだ。

「ちゃんと相手の顔を見て投げるんだよ。下を向かないでね」
ジュジュ先輩……。ちょっと難しい注文かも知れないです……。

特にその笑顔からは信じられない意外なセンスの持ち主であるチックは、ラージキャプテンとキャッチボールだ。

……！？

２匹は軽く５０Ｍは離れているぞ！？

あれでお互いの顔が見えているのかな？

しかも全くお互い送球がそれていないし……。

……すごい！凄すぎる。

ラッシー先輩とヒート先輩のコンビもすごい！

目に見えないんですけど……ボールが……。

「それっ！！ラッシー！！」

「ほいよ！！ヒート！！」

これが友情の強さなのだろうか？

見えないボールをパスン！パスン！と受け取っては返す。

周りから見れば異様な風景である。

ラプ先輩はいつも通りキュウコン監督とボールの感触を確かめた。

その後軽くノックをすることになった。

みんな三塁ベースからやや外野の芝生よりに集まる。

実際にキュウコン監督がバットで打ちその打球を捕ることになったのだ。そして最後にホームベースで構えるラプ先輩にボールを返

す練習だ。

ちなみに1匹につき1球捕れても、そうでなくても次のメンバーと交代していく。

まずは野球部のスピードスター、ジュジュ先輩からだ。

カーン！！

強いライナー（フライが真っすぐ速く飛んだ打球）が飛んできた！！

「そらぁぁ！！」

ジュジュ先輩は左腕を伸ばして、さらにジャンプしてそれをキャッチした！！

そして最後にホームベース近くに構えるラプ先輩に素早く送球した。

ワンバウンドしたが、ちゃんとミットに入った。

「やっぱりあさポケの守備職人と呼ばれている事はあるな」

ジュジュ先輩の次に待つラッシー先輩がコメントした。

「だが、俺だって負けないぜ」

カーン！

「それ！！」

今度はゴロだ！かなり基本的な当たりだがしっかりとラッシー先輩は素早く体の正面でボールを捕る。

そして最後にホームベースに投げる。ノーバウンドでミットに届いた。

「俺は外野手だが、内野手が捕れないヒット性の当たりはこうやって素早くカバーして内野にボールを返さないと、相手のランナーがドンドン進むからな。大事な練習なんだぜ」

何事も基本が大事。笑い飛ばしたラッシー先輩の言葉にはそんな意味もあった。

次はチックの出番だ。

「僕はサードだし、ちょうど良い練習になるね♪」

どこまでも彼の笑顔は健在だ。

コーーン！

ボールはマウンドの横で高く何度弾みながらチック目掛けて来る。バウンドボールだ。

チックの顔から笑顔が消え、とてつもなく真剣な表情になる。

そして前進するが、ちょうどよくボールもグローブの中に収まる。最後にホームベースのキュウコン監督に軽くポーンと返した。もちろん正確な送球＋ノーバウンドで。

「たまげたな。バウンドは打球の中でも処理するのが難しいんだぜ。あんなにいとも簡単にさばくとは……」

ラッシー先輩やヒート先輩やジュジュ先輩は感心するばかりだ。

なぜバウンドの処理が難しいのか？

前進する時にタイミングを間違えると頭の上を越されることも一つの理由だが、自分のキャッチしやすい高さを見極めるのが難しい

こともある。

おまけに相手の打者が足が速いと打球を処理する間に内野安打にされることがあるのだ。

だから打撃の基本は“ボールをたたき付けてバウンドやゴロにする”ことだと言われる。

『チックか……。アイツは野球は経験がないなんて言っているらしいが、どうも気になることがあるな……』

ラッシー先輩やジュジュ先輩やヒート先輩が驚く中で、ただ一人ラージキャプテンだけはチックに何かを感じたようだ。

「やっぱり面白い♪」

ニコニコ笑顔のチックの次はラージキャプテンだ。

『俺は守備はそんな得意じゃないけど、精一杯のプレーを見せてやる！』

カーーン！！

高く高くボールは青空へと吸い込まれていく……。フライだ。

『……この辺か…？』

落下点に入ったラージキャプテン。

パスン！！とその青いグローブにボールは入った。そして持ち前の強肩＋正確な送球で、ラプ先輩にボールを返す。

『よかった……。俺はエラー（ミス）が多いからひとつひとつのプレーを大事にこなさなきゃ……』

ほっとした様子で次のヒート先輩と交代する。

「どんな打球でも来い！！」

ヒート先輩は気合い十分だ。

カキーーン！！

かなり良い音が聞こえた。速いライナーが飛んでくる。

いや、正確には二塁ベース近くのほうでバウンドしそうだ。

「ノーバウンドで受け止める！！」

次の瞬間ヒート先輩は横に飛び込んだ！！

「イテテテ……けど捕ったぜ……」

ヒート先輩はボールを捕った。そして最後にラプ先輩にストライク送球を見せた。

「試合中ならファインプレーだな……」

ラッシー先輩も驚く。

「ヘッヘッヘ……！頑張れよチコっち！」

次はチコっちだ。グローブを構えて、じっと真剣な顔でホームを見つめる。

スコーン！

コロコロとゴロが転がる。

「こんなボールくらい！」

ちゃんと基本に沿って体の正面でそのゴロをつかむ。
そしてワンバウンドでホームに返す。

「……ふぅ……何も起こらなくてよかった……」

そりゃ緊張して当然だね。お疲れさん。

『次はあたしね……』

ピカっちもガチガチだ。歩くのに精一杯か……。

彼女はチラっと後ろを見る。

『ピカっち。大丈夫だよ。僕もいるから』

目で僕は緊張しているピカっちに話す。

『そうだよね。カゲっちくんもいる。安心して出来るはず。』

カーーン！！

高いバウンドだ！

彼女は戸惑いながらもしっかりとそれを捕る。

そして、ホームベースで構えるラプ先輩のミット目掛けて投げる。

ツーバウンドしたが、ちゃんとミットに正確に送球出来た。

「まずは正確な送球が出来るのが大切だ。肩なんてそのうち強くなるよ」

ラージキャプテンがピカっちの頭を撫でる。

「カゲっちくんありがとう♪しっかり頑張ってよ♪」

僕はゆっくりと構える。いつに無く真剣な顔で……。

カキーーン！！

速いゴロが転がる。それをガッチリとつかみ、そしてラプ先輩目掛けて投げる。多少ずれたが、ちゃんとミットに入った。

「はぁ……緊張した……」

またジュジュ先輩に戻って来た。

グルグルとローテーション方式でその後何度も順番が回って来た。

基本に逆らわず、最後まで全力で練習した。

そして時間になったので道具の片付けやグラウンド整備を行った。

最後のミーティングでは、キュウコン監督からこんな話があった。

「実は今度の週末から毎年恒例の合宿を行う。今回はとある高校の部活にお願いした」

キュウコン監督が笑顔になる。

「みんなも知っているだろう?ポケハン学園バトル部のことを。彼らのところでみんなのポケモンバトルを集中的に磨こうと思う」

次の瞬間わぁぁぁぁぁぁぁ！！と歓声が上がる。

ポケハン学園バトル部……。

そこは、ポケモンとこのポケモンの世界には存在しないが、小学校の社会科でも学んだ、異世界のモンスター達が毎日自分の限界まで全力でバトルを磨く部活だ。

そこでバトルの全てを磨こうというのだ。

過去にあさポケ中野球部が“カントリー・リーグ”で勝てなかった最大の原因……。

技をさらに強くするために……。

そして悲願の初優勝へと突き進むために……！

「これで私の話は終わる。では放課後にまた会おう」

キュウコン監督のあと、ラージキャプテンのあいさつで僕らは朝練習を終えた。

今度の週末が楽しみだ！！！！！

第１９話：「その日の夜といつもと違う朝」の巻（後書き）

作者：「長くなったな……。この小説で一番長かったかも……」

カゲっち：「わぁ♪いよいよ週末から合宿だ！！明日は僕の誕生日だし♪」

ピカっち：「幸せ続きね♪」

第２０話：「学校生活は楽しく……？」の巻（前書き）

作者：「朝早くに更新しました♪」

カゲっち：「気付けば２０話到達♪」

ピカっち：「読者さんの……みなさんの応援無しではたどりつけませんでした。」

チコっち：「これからもよろしくお願いします！」

チック：「それでは第２０話プレイボール！」

第２０話：「学校生活は楽しく……？」の巻

今週は僕にとって幸せな日々が続きそうだ！

朝練習の後、僕たち仲良し４匹組は２階の自分の教室である１年２組へと向かう。

８時３０分までが登校時間で朝練習が終わるのは８時２０分だ。

教室に入るとクラスのみんなが「おはよう♪」とあいさつしてくれた。

まだそんなにみんなと一緒になってから時間は経っていないけど、仲良く過ごしていきたいな。

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴る。そして担任のキュウコン監督……いや学校生活では先生と呼ばなきゃ……。

とにかく教室に入ってきた。

「きりーつ！きをつけー！礼！」

日直の掛け声で朝のホームルームがスタートした。

「みんなおはよう。昨日は先輩たちが優しく部活動の紹介をしてくれただろう。みんなもやってみたい部活動を発見出来たかな？」

キュウコン先生は静かに問い掛ける。その問い掛けに首を縦に振る生徒、そうでない生徒、反応は様々だ。

「中にはその先輩たちに認められて昨日から部活動の一員となった生徒も数多くいたようだな。先生はうれしく思うぞ」

キュウコン先生は静かに笑う。

「さて、色々大変だが、中学校生活に早く慣れて勉強も部活も頑張るように。先生からは以上だ。何かみんなからは連絡無いか？」

誰も無いようだったので、

「それでは今日も一日楽しく頑張ろう！」

キュウコン先生の話の後、もう一回あいさつした。

こうして朝のホームルームは終わった。

今日の１時間目の授業は理科だ。

僕らは早速教室の反対側にある第１理科室へと向かう。理科室は

2つあり隣同士にある。そしてその間に準備室がある。ここには担当の先生が実験道具などを準備している。
理科の授業はこれから基本的には、ここで行うようだ。

ガラガラと教室の扉を開く。

中に入ると、火山の模型や化石の模型、フラスコやビーカー、顕微鏡、そして惑星の写真、雲の写真など、いかにも“理科”というような道具や模型が揃っている。

黒板に座席表が張られていたので、その位置に僕らは座った。4匹につき1班という構成になっていたが、僕ら仲良し4匹組は偶然にもみんな同じ班になった。

「良かった……。カゲっちくんと一緒で……」

ピカっちが一番安心したようだ。小さい声でうれしそうにつぶやいていた。

ワイワイガヤガヤと1年2組の生徒が第1理科室で盛り上がっている中、黒板の左のドアが開いた。

「みんな席に座ったか？授業を始めるぞ～」

どうやらこのポケモンが担当の先生のようだ。

日直のあいさつで授業が始まる。

「え～あさひポケ中学にようこそ。僕はこの中学は7年目になるマルマインだ。先生の授業は実験や観察がメインになるから1年間よろしく」

マルマイン先生が簡単に自己紹介した。

次に簡単に授業のシステムの紹介をする。

「みんなは授業というと、教科書に沿って先生がしゃべったり、黒板に書かれる事をノートに書くものだと思っているだろう?けれど理科は違う。実際に本物を目にしたり、道具を使って意外な発見が出来る教科なんだ」

マルマイン先生は続ける。

「先生もそうだが、みんなはポケモンだ。自分の持つ技の仕組み、特徴を一緒に学んでいこう!」

この授業はどうやら実験や観察がメインになるようだ。
後で聞いた話だが、マルマイン先生の授業は人気があるらしい。
かなり期待が持てそうだ。

「今日は1回目なのでビデオを観る事にする」

そういうと教室の電気を消し、窓のカーテンを閉めた。

ビデオの題材は「植物の不思議」だった。

この題材に一番チコっちが興味を示した。

……まあ彼女はくさタイプで家は花屋さんだから当然か。

簡単に内容を整理すると、植物はどうして動けなくても生きて行けるのか？とか、光合成の仕組みや、発芽の仕組みといった内容だった。

しばらくしてビデオの鑑賞も終わり、授業も終わった。

「それでは次回から本格的に授業を始めるからな。道具は忘れずにな」

あいさつを終え、僕らは授業道具を戻しに教室へと戻る。

２時間目は体育だ。といってもここはポケモンの世界。ほとんどは技の習得や自分の力量のアップがメインとなる。

早速グラウンドに到着する。
担当の先生はルカリオ先生だった。

「みんなはじめまして。俺は今年先生になったばかりで緊張しているけど、精一杯みんなが頑張れるような授業を行うからよろしくね！」

恐らくほとんどの女子生徒ならまず“メロメロ”になるようなかなりのイケメンだ。
実際何匹かの女子生徒はすでに“メロメロ”になっているし……。

僕の隣のピカっちは一言ささやいた。

「あたしはカゲっちくんにしか恋心は無いわ。だってカゲっちくんが一番温かいですもの……」

そこまで僕を好きだったんだね。本当にありがとう……。
さて、体育の授業がスタートした。
念入りに準備体操をした後に、技の命中率がどれくらいあるのかテストするらしい。

ピカっちやチコっちやチックは設けられたその的に１０回のチャンスで７回当てた。もう平均な能力はあるのだ。

ちなみに僕……。バトル嫌いだけど、バトルで使う技には自信がある。得意の“かえんほうしゃ”はパーフェクトの実力だと証明した。

みんなが緊張する中で一人涼しい態度を僕は実力を見せる事が出来た。

『あの事件さえ無ければ今頃きっと……ヒトカゲの種族でもトップクラスのバトルの実力に胸を張る事が出来たんだろうな……』

もちろんラッシー先輩やピカっちの気持ちが届いていないわけではない。

けれど後ろめたい気持ちでいっぱいだ。

まるで昨日の出来事のようなあの悪夢をどうやって乗り越えて行けば良いのだろうか……。

僕は心の中で一人また迷走を始めた。

そんな複雑な心境でクラスメイトを見守る中、テストは終わった。

「テストの結果発表をするぞ……。パーフェクトが2匹いた。でもこれからみんなも頑張ればパーフェクトを狙えるからね。それじゃ名前を発表するよ。パーフェクトはヒトカゲくんとゼニガメくんだ」

名前を呼ばれた僕とゼニガメくんはみんなの前に出る。なんだか

恥ずかしいや……。

「みんな。頑張ったこの2匹に拍手して。」

次の瞬間、歓声と拍手の音が響いた。

「そんなぁ……。でもすごくうれしいよ。みんなありがとう……」

僕は照れながらもニッコリと笑う。

この場が一層和やかな雰囲気になったのは間違いなかった。

しかし、僕の隣にいたゼニガメくんの一言で状況は一変した。

「チェッ……。なんでこんな弱小トカゲと一緒なんだよ。おまえらの種族なんて俺の水でそのしっぽの炎に当たりそうになったら脅えるくせに……。生意気なんだよ……」

僕は思わず彼の方を向いた。

「なんだよ?見てるんじゃねぇよ……。本当の事じゃねぇのか?……フン!弱いヤツほど喜びの表情を見せるらしいけど……。本当らしいな……」

その場の和やかな雰囲気は一変して思い空気に変わった。

「キミは……、ゼニガメくんはうれしくないの？褒められたのに……」

僕は彼に問いかける。

……だが、彼は僕の質問に答えてくれなかった。

……ドゴッバキッ！

鈍い音が響いた。

彼は僕の質問に答えることなく、僕のお腹を蹴飛ばした……思い切り……。

「気安く話して来るんじゃねぇよ！！褒められてうれしくねぇのかって？……笑わしてくれるぜ……さすが弱小種族だ！！」

僕は蹴られた瞬間地面に倒れこんだ。
そして……このあまりにもありえない言葉を聞きながら意識を失った……。

第２０話：「学校生活は楽しく……？」の巻（後書き）

カゲっち：気絶状態

ピカっち：「何？あのゼニガメくん……。どうして蹴る必要があるの？」

チック：「なんだか嫌なキャラクターだね……」

チコっち：「作者さんもね……」

作者：「……え！？」

第２１話：「ピカっちの優しさ、カゲっちの優しさ……」の巻（前書き）

作者：「なんだか最近物語が違う方向に向かっている気がする……？」

ピカっち：「じゃああたしとカゲっちくんのラブラブな一日を書いて……？」↑天使の笑顔

作者：「え！？」

ピカっち：「お・ね・が・い♪決めた！明日のカゲっちくんの誕生日はデートのお話♪」↑何気にペンを持つ

作者：「あ！ペンを返しなさい！」

ピカっち：「ダメ♪」

チック：「最近ピカっちのキャラが壊れているような……不安です（汗）」

チコっち：「……気を取り直して第２１話プレイボール……」

第２１話：「ピカっちの優しさ、カゲっちの優しさ……」の巻

……カ……カゲっちくん……！

「う……う～ん……」

僕はどれくらい意識を失っていたのだろうか……？

「……ピ……ピカっち……？ここは？」

僕はベットの上で寝かされていたようだ。まだ頭がボーッとする。
僕は隣のイスに座って心配そうに見つめるピカっちに声をかけた。

「……ここは保健室よ……。そして今はもう下校時間なの……」

ピカっちは今にも泣き出しそうな表情で少しずつゆっくりと答えてくれた。

あのゼニガメくんに蹴飛ばされたのが2時間目のことだったから相当な間意識を失っていたようだ。

「……突然のことで……びっくりさせてごめんねピカっち……」

僕はピカっちに謝る。

「……それで……？あの後どうなったの？」

みんながいる中であんな事件があったのだ。きっとみんな黙ってはいなかっただろうな……。

「カゲっちくんが倒れた後、あのゼニガメくん……。さらにカゲっちくんの背中も蹴飛ばしていたわ……。周りのクラスメイトは騒ぐし、先生も慌てて止めに入ったわ。あたしは怖くなったけれど、カゲっちくんを急いで何とかしなきゃって思って……、チコっちやチックくんと3人で保健室まで運んだの……」

……そうか……僕……みんなに迷惑かけたみたいだな……。

「ゼニガメくんは職員室で怒られた後教室に戻ってきたけど……、自分が悪いくせにあたしの隣の席の……カゲっちくんの席の机を思

い切り蹴飛ばしたわ……。みんな怖くて彼と視線を合わせなかったわ……」

……ピカっちも怖かっただろうな。今もその話をしながら体が小刻みに震えていた。

「この話……後でキュウコン先生に聞いた話何だけど、彼は……ゼニガメくんは小学生の時から相手に自分の持つ技でバトルの苦手なポケモンに暴力をしたり、いじめをしたり、度々問題を起こしていたらしいの……。先生も頭を抱えていたわ……。あさひタウンであんなに荒れたポケモンはいないのに……ってね……」

確かに……。僕らの住むあさひタウンはその町の名の通り、一番最初に朝日の日差しを浴びる町だ。

そこで育つポケモンたちは、その朝日に希望を持ち、今日一日をみんな朝日のようなまぶしい笑顔で平和で過ごしている町なのだ……。

事実心を痛めた……悲しみを味わったようなポケモンたちはこの町の笑顔で癒されたりして、また生きていく気力を持ち始めると言う。

そんな穏やかな平和な町でそんなポケモンが育つなどとてもじゃないけど、考えにくい。

キュウコン先生が頭を抱えてしまうのも当然だと思った。

「……ところで……今日の授業分どうしようかな……。ずっと気絶していたから……」

僕はあることに困った。

そう……。ずっと意識が無かったので、3時間目から5時間目の授業を受けていないのだ。

初めての授業だから、どんなシステムなのか必要な道具などを全く聞いていない。

さすがにおっちょこちょいでドジばかりする僕にとってはちょっとばかし不安だ……。

「……安心して。カゲっちくんがいなかった間ずっとあなたのために話をメモしたり、プリントを預かったりしたから……」

そう言うと彼女は自分のかばんからノートとプリントを出す。僕は起き上がってそれらを受け取った。

僕はそのノートの中身に驚かされた。

きれいな色使いで重要なポイントがその一冊のノートに優しく丁寧に書かれていた……。

まるで子供を心配する母親のような言葉で一つ一つ……。

お世話好きの彼女だから……、僕と一緒にいた時間がとても長かった彼女こそだから……、出来る作業だと思った。

「ダメダメヒトカゲくんのことを忘れることなんて無いわ……。それよりあなたがいないの……、すごく寂しかった……。もう無茶はしないでね……？」

彼女は笑っていたが……、確かに涙目で僕を見つめる。

その時は親に甘える子供のような瞳だった。

「……もちろん約束するよ……。無茶はしないってね……。心配かけてごめんね……」

僕はそう言うと彼女の右手を握った。

「カゲ……っちくん？」

ピカっちは僕が一体何がしたいのかわからない様子だった。

「僕……君に寂しい気持ちにさせてしまった。君は……僕がそばにいると温かくて優しい気持ちになれるって言ったよね？今日一日君のそばにいられなかったから……、僕……その悲しくて辛い気持ちを無くすために手を握っているよ……。温かくて優しい炎で心を暖めてあげるから……。だからあの笑顔を見せてピカっち……」

僕は……もう2度と自分のことで周りの大切な友達を悲しい気持ちにはさせない……。

確かにゼニガメくんはいきなり攻撃してきた。

あの表情はとても周りのポケモンたちを温かくて優しい気持ちにはさせてくれない。

みんなを怖がらせて……辛い気持ちにさせるだけ……。

……だからこそ、僕がみんなを温かくて優しい気持ちにさせたい。

ピカっちが教えてくれた僕の……、

……ダメダメヒトカゲのたった一つ褒められたこの力で……。

そして……決して暴力のために僕らの技があるのでは無いと……、

彼に……ゼニガメくんに教えるために……！！

ガチャッ。

保健室のドアが開き担当のハピナス先生が入ってきた。

「1年2組のピカチュウさん？ヒトカゲくんは目を覚ましたかしら？」

「あ！ハピナス先生！ヒトカゲくんなら目を覚ましました！」

僕はそのハピナス先生にまずは謝った。いきなり迷惑かけたてしまったから……。

「良いのよ。幸い大したケガじゃなかったし……。それにゆっくり眠れていたようだから安心したわ」

ハピナス先生いわく、僕たちポケモンは例えバトルで多少のケガをしたり、急にカゼを引いていても、“ねむり”状態になればゆっくりと体力やケガやカゼは回復すると言う。

だからこのあさポケ中の学校方針として、“例え授業があってもゆっくり体を回復させる”のが決まりらしい。

だから他の先生もその生徒に対しての考慮を怠らないとか……。

「ところであなたは野球部らしいわね？練習に行くの？」

行きたいけど……、授業も出てないのになんだか申し訳無いな……。

「迷う必要なんて無いのよ？だってそれがあなたの意志なんだから……。別に先生や先輩は文句言わないわよ？みんな誰だっていつケガや病気をするのかわからないし、それよりあなたの元気な姿を見せた方がみんな喜ぶはずよ」

ハピナス先生は、「ほら、行きなさい」と言わんばかりだった。

「僕……、練習に行きます！！みんなと楽しく過ごしたいので！」

「もちろんいいわ。頑張ってね！」

僕とピカっちは保健室から出る時に、

「お世話になりました！」

と、元気よくあいさつした。

ハピナス先生は僕たちを温かく見送ってくれた。

場所は変わってグラウンドの野球場。

僕たち2匹がそこに着いたときには、

チコっちやチックやキュウコン監督はもちろん、ヒート先輩やラージキャプテンも……つまり野球部のメンバーがそこにいた。

「カゲっち?……もうケガは大丈夫なの?」

珍しくチコっちが心配して声をかけてくれた。

いつもそんな穏やかな態度は見せにくい彼女が……。

「うん。保健室のハピナス先生がもう大丈夫だって……。それよ

り僕の元気な姿を見せてあげなさいって言われたんだ……」

きっとあの時からずっと心配していたのだろう。チコっちはその言葉を聞いてホッとした表情を見せた。

もちろん他のメンバーも。

「話は監督、チコっちやチックから聞いたぜ。なんてヤツだそのゼニガメは……。努力や実力を褒められて何が気に入らないんだって言うんだ……。オマケにカゲっちに攻撃するなんて……」

ラッシー先輩が今にも背中の炎を爆発させそうな勢いで怒っていた。

「カゲっち……。あまりそのゼニガメが言った言葉……。気にするなよ？決して“ヒトカゲ”という種族は弱小なんかじゃないから

な。俺も昔は“ヒトカゲ”だったしな……。努力は決してバカにしてはいけないぞ？」

ヒート先輩が僕に言う。

……そうだ。決して弱小なんていう種族はない。

得意不得意はあるかも知れないけれど……、

きっとみんな良いところ……他の種族に真似できない長所があるはずだ……。

そして一生懸命努力すれば、きっともっと長所を磨けば……、

きっと……みんなに褒められるようなすごい種族になれるはずだから……。

僕はもっと努力することを決心した。

「さて、カゲっちも元気そうだし練習始めようぜ！！」

野球部の……ナインはラージキャプテンの一言でみんな右手や右足をあげて、「オーーーーッ」と言う。

僕は決して努力はバカにしないよ！！

だってここにも悲願の夢に向かってひたむきで全力に進む……、

本当にすごいメンバーがいるから!!

僕もあさひポケ中学野球部の背番号“４”として……、

その一員だからね!!

まず練習はランニング５周からスタートし、キャッチボールを朝と同じように行う。

僕も朝と変わらない姿で練習出来たので安心した。

そして、そのメニューをこなした後にキュウコン監督がナインを集める。

「今日は打撃メインで練習を行う。まず私が一人指名する以外のメンバーは全員自分の守備位置に付くように」

今日は昨日出来なかった打撃練習を行うらしい。

「ヒート。今日は投げなくて良いぞ。今日はバッティング専用のマシンを使うからな」

マウンドにはバッティングマシンが設置される。ボールを空洞に入れると、自動的に、ポーンとバッターに目掛けて飛んでくるらしい。

「ヒートは空いた守備位置を守ってくれ。たまには気分転換も良いだろう？」

ヒート先輩も納得だ。

「それから新入部員４匹は初めて自分の守備位置を守ることになる。しかし、ゲッツーやベースカバーといった細かい守備練習は今日はしない。朝のノックと同じような気持ちで一球一球こなしていけばいい。あくまで打撃メインの練習だから、先輩たちの練習をよく観察して学んでくれ」

僕たち４匹組は元気よく返事する。

「私はみんなの打撃を見て打順を決めたいと思う。みんなの全力を見せてくれ！！」

ナインは力強く返事した。

キャッチャーの守備位置にはネットがあるのでラプ先輩は審判を行うことになった。

キュウコン監督いわく、彼女の判断は公式の審判に匹敵するらしい……。

ラプ先輩のすごさを改めて知った。

何はともあれ、打撃練習がスタートした。

第２１話：「ピカっちの優しさ、カゲっちの優しさ……」の巻（後書き）

カゲっち：「カゲっちふっか～～～つ♪」↑ジャンプして満面の笑顔♪

ピカっち：「あ♪ねえねえカゲっちくん。明日デートしない？」

カゲっち：「え？でも学校が……」

ピカっち：「いいの♪作者さんが学校休みにする設定にするらしいから♪」

カゲっち：「え？本当に！？ありがとう作者さん♪」

作者：「え？いつそんな約束が決定した……」

カキン！↑氷付け

ラプ：「もう作者さんはＫＹなんだから♪ラブラブカップルの邪魔しないようにお仕置きしなきゃね♪明日デートたっぷり楽しんでね♪」

カ・ピ：「ハ～イ♪」

第２２話：「打撃練習開始！！トップバッターは……ヒート先輩だ！！！」の巻

作者：「次から次へとアイデアが浮かんで来るよ～♪（笑）」

カゲっち：「作者さんは野球好きだから書きやすいんでしょ？」

ヒート：「まずは俺からか！打って打って打ちまくるぜ！」

ラッシー：「じゃあ行くぜ！第２２話プレイボールだ！！」

第２２話：「打撃練習開始！！トップバッターは……ヒート先輩だ！！！」の巻

今日のメインの練習……打撃練習を頑張るぞ！

「ここがセカンドの守備位置だ。だいたい一塁ベースと二塁ベースの中間辺りと覚えていれば良いさ」

ラッシー先輩が教えてくれた。

「チコっちはファーストだったな。一塁ベースの右にいれば良いぞ」

続いてチコっちがラッシー先輩の言う通り、一塁ベースの右……つまり僕の左でファーストの守備に付く。

「ピカっちはここだ。二塁ベースと三塁ベースの中間辺りで守るんだよ。」

続いてピカっちがジュジュ先輩の教えで、二塁ベースと三塁ベースの間……つまり僕の右でショートの守備に付く。

「チックはサードだから三塁ベースの左が守備位置だ」

最後にラージキャプテンが教えた通りにピカっちの右にチックが守備に付く。

もう一度おさらいすると、半時計周りでチコっち、僕、ピカっち、チックの順番で自分の守備位置に付いたことになる。

「それから大事なことを一つ。内野手全員に言えるけれど、もし2匹同時にボールが捕れそうな時は確実にどっちが捕るかを確認するんだよ」

内野手……つまりファースト（チコっち）、セカンド（僕）、ショート（ピカっち）、サード（チック）の4匹はとにかく互いの意志疎通が重要だとジュジュ先輩は言う。

「特に高く飛んだフライはね……。フライはボールをキャッチした時点でアウトに出来るからね。『あ！これは確実に自分が捕れるぞ！！』ってなったときには、オーライ！！って言うんだよ」

『オーライ……』

僕たち4匹組はとりあえず復唱する。

「ハッハッハ！説明聞いただけじゃわかりにくいだろうな。まあ、習うより慣れろさ！実際にやってみようか！」

ラッシー先輩が笑い飛ばす。

「大丈夫さ！君たち仲良し４匹組ならすぐに覚えられるよ。初心者だけど、すでにチームワークは完成されているし、試合ではキャッチャーが他の野手に指示を出すからね」

ラージキャプテンが笑顔で自分の守備位置に向かいながら話す。

ちなみに外野手はファースト（チコっち）とセカンド（僕）の後ろにライト（ラッシー先輩）が守る。

二塁ベースの後ろにセンター（ジュジュ先輩）が守る。

最後にサード（チック）の後ろをレフト（ラージキャプテン）が守る。

それぞれの守備位置が分かったところでいよいよ練習の始まりだ！！！

「まずは俺からだ！パワーに俊足が混ざった最高のバッティングを見せてやる！！」

トップバッターは、赤いバットを持ったあさひポケ中学野球部のエース！！ヒート先輩だ！！

ゆっくりと右バッターボックスに入る。バットがまるでマッチ棒のように小さい……。

リザードンという種族を考えると、そのパワーとすばやさ……走力が高い能力を持っているから、両方が噛み合えば、ホームランあり内野安打ありとまさに万能タイプだ！！

……こんな恐ろしいバッターはいないだろうな……。

「プレイボール！！」

審判のラプ先輩の一言で練習スタートだ。ちなみに1匹につき10球打つことが出来る。

打ち終わったら次から次へと交代していくルールのようだ。

では注目の1球目！！

バッティングマシンから勢いよくボールが発射される。

『……ストレート！！打てる！』

ヒート先輩は思い切り真ん中より低めのストレートをバットで振る。

カーーン！

打球は青空へ吸い込まれてレフトへ大きく飛ぶ。

『これは捕れるな……』

しかし、高さのわりには勢いが足りない。
ラージキャプテンが前進してきて、手を上げて、

「オーライ！！」

そのボールをキャッチした。
記録はレフトフライ（左飛）だ。

次は２球目！！

バシン！

ヒート先輩は高めのボールをバットで振らなかった。

「ストライク！！」

ラプ先輩の声が響く。
微妙だけどギリギリストライクゾーンらしい。

「いつもならあのコースを振るのに……まさか、監督が言っていた打順を気にしているのね？」

ラプ先輩が言う。

「当たり前だ。俺は４番を狙ってるんだ！このメンバーで４番を打てるのは、俺、ラッシー、ラージがいるからな……」

実はこのときにすでにヒート先輩は４番を狙っていたのだ。

これも練習開始前にキュウコン監督から学んだことだが、打順にもある特徴があるのだ。

読者のみなさんも説明を読んで、あさひポケ中学野球部のオリジ

ナルの打順を考えてみて下さい！

まず1番打者は何がなんでも塁に出ることが必要だ。
それに盗塁をしてチャンスを広げるためにすばやさも必要だ。
足が速くて、例えパワーが無くてもヒットを確実に打てる打者、
フォアボールを選べる打者はこの打順に適している。

2番打者は、塁に出た1番打者を送る役目だ。

バントしたり、わざとゴロを打ってランナーを次へ進めることが
必要になる。

つまりは器用さが必要になる。

ちなみに2番打者も足が速いと非常に有利だ。ゴロを打ったとき
にオマケに自分も塁に出られる可能性があるからだ。

3番打者から5番打者は“クリーンアップ”と言われる打順だ。

その名の通り、ランナーを掃除……つまり点を取る打順だ。

まず3番打者……。この打順はヒットを打って自分もランナーとして残れるのが理想。

ホームラン打てるパワーあり、ヒット打てる確実性あり、内野安打も時には打てる走力もあり……、とまさに万能タイプがオススメだ。

そしてヒート先輩が狙っている4番打者……。この打順は全てを決める打順だ!!

チームの主砲と言われたり、チームの顔とも呼ばれる。

簡単に言うとホームランを打てる最強のパワーが要求される。それだけでは無い。チャンスをモノにしたり、例え負けていても大逆転のヒットを打つなど、ここ一番での勝負強さなど、並大抵ではない集中力も必要だ。

5番打者はとにかく長打力……つまり外野へボールを飛ばす打者が理想だ。

4番打者とは反対の打席の打者だとさらに良い。

6番打者は、“クリーンアップ”が残したランナーをヒットで返す役目や次の打者へと“つなぐ”ことが役目だ。

7番打者は“第2の1番打者”や“第2の主砲”が入る厄介な打順だ。

例え4番打者のように勝負強さが無くてもホームラン打てる打者、例え1番打者のような絶対的な出塁が出来なくてもそこそこヒット打てる打者や足の速い打者が良い。

というのも、7~9番は主に打てなくても、守備の上手い野手が中心となるからだ。

8番打者は当たれば大きい意外性ありの打者だ。

普段打てなくても「え!!?」と驚く場面でいきなり打つ打者が

良い。

7番打者を進める“2番打者”として考えても良いだろう。

そして9番打者。

チャンスで打てる厄介な打者であれば十分大丈夫だ。

それと1番打者に“つなぐ”役割もある。

必ずしもこのような決まりがあるわけでは無い。

あくまで、チームのメンバーや監督が決めることだからだ。

ちなみに打順は3つアウトを取られるまで永遠にぐるぐる回り続ける。

いかに、次の打順に“つなぐ”かで、点数の入り方もかなり違う。

一体読者のみなさんならどんな打順を考えるだろうか？

さて話が脱線したが、ヒート先輩の打撃練習の続きを見てみよう。

次が3球目だ！

ボールが勢いよくマシンから発射される。

『……うお！？何だ！？変化球も発射出来るのか！？』

ヒート先輩は驚いた。と言うよりもナイン全員が驚いた。

ボールは真横に右バッターのヒート先輩の内角（内側）から外角（外側）へと変化したのだから……。

幸い、あまりにもキレが良すぎたのかボールという判定にはなったが……。

「まさかスライダーが飛んで来るとは……。へへッ！優等生だぜ、このマシン」

スライダー……。

そう。今のような変化を見せる変化球がまさにそれだったのだ。

と言うよりかなり実践的過ぎないか……？

打てるかかなり不安だな……。

次が４球目！

カキィーン！

ヒート先輩が思い切り当てた打球は真っすぐ速くゴロで僕のところへ転がる！

僕はボールの転がる方へ移動していく。

そして、ガッチリと体の正面でキャッチした……、

……ハズ。

……でもグローブにはボールは収まっていなかった。

……なんで？

実はボールは僕の体の下をコロコロと転がっていたのだ。

……いわゆる“トンネル”である。

先輩たちは、「カゲっち後ろ！後ろ！」と騒ぎながら、ボールを探す僕に教えてくれた。

チコっちとピカっちはお約束通り、

頭を抱えている。

……やっぱり僕はダメダメヒトカゲなのかな……？

もちろん記録はセカンドエラー（二失）である。

「気にするなカゲっち。エラーなんて誰でもある。それに今のミスでまた一つ学ぶことだってあるぞ。“失敗は成功のもと”だ。次

からもっと頑張れば良いだろう？」

ベンチで記録を書き込むキュウコン監督が声をかけてくる。

「何よりも一つ一つ全力で挑むプレーが私は好感を持てる。その気持ちを忘れるな」

「ハイ！」

そうだ。過去を後悔していたって前に進めないんだ！

“過去”を乗り越えなきゃ！

立ち直ったところで次は5球目！！

「絶好球いただき！！」

カーーーン！！

ヒート先輩の赤いバットから快音を生んだ打球はグングンとレフ

トとセンターの間へ飛んでいく！

ラージキャプテンとジュジュ先輩がドンドン後ろへ走りながら下がる。

ボールはまだグングンとフェンスより高く勢いよく飛ぶ。

このままホームランになるのか！？

「……ここだ！！」

しかし、ジュジュ先輩は叫ぶと同時にフェンスの手前で思い切りジャンプする！

何と、グローブの中にボールは収まったのだ。

もし、そのまま捕れなかったらホームランかそれともフェンス直撃の大飛球だっただろう。

見事な守備でした！

ワァァァ！という歓声と拍手が響いた。

次は６球目！！

カキーーン！！

打球はショートとサードの間を真っ二つの強烈なライナー……！！

……ヒットか？

……いや違う！！

ショートのピカっちは右に移動して手を伸ばし、グローブで捕ろうとしたが間に合わない。

「これくらいなら僕の守備範囲だ！！」

だが真剣な表情のサード……チックは左にポーンと飛び込んでこのライナーを捕った！！

捕った後、クルっと一回転してピカっちの隣に着地した。

ワァァァァ！と歓声と拍手がジュジュ先輩の時より、大きく響いた。

……チックのファインプレーだ！

「エヘヘヘ♪捕れちゃった♪」

チックはまた笑顔になり、照れながらもサードの守備位置に戻った。

それにしても彼のセンス……ただ者じゃないぞ……。

チックは天才なのだろうか？

『やっぱりな……。あのトゲチック……。アイツとよく似ている……。カントリーでも屈指の選手であるアイツに……！』

ラージキャプテンは、チックを見てどうやらある選手を思い出したらしい。

だれかは気になるけれど、その間の7球目はタイミングが合わずに空振りしてしまう。

そして、8球目を打った。

今度は文句無しの当たりだ。打球は勢いよくジュジュ先輩の頭の上を越し、そのまま場外ホームランとなった。

これが、リザードンの……ヒート先輩のパワーである。

次の9球目は今度はライトのラッシー先輩への方向へと大飛球が飛んでいく。

ちなみに自分の打席と同じ方向の打球を、“引っ張り”と言い、逆方向の打球を“流し”と言う。

つまりヒート先輩の場合は右バッターなので、レフトが“引っ張り”、ライトが“流し”となる。

左バッターは逆になるけど。

その流しの打球はまだグングンと伸びていく。

ラッシー先輩は必死に追いかけるが途中で追いかけることが出来なかった。

……またしてもホームランが飛び出したのだ。

『ホームランが打てなきゃ俺じゃねぇ！！４番を打つためにももっともっと打ってやるぜ！！』

どうやらヒート先輩はホームランにかなりこだわりを持っているらしい。

その言葉通り１０球目も強烈に迷いなくフルスイングした！！

ドッカーンと行ったぁぁぁぁぁぁ！！！

今度はラージキャプテンの守るレフトを大きく越えて……！

レフトの左端に建つポールという高い棒の上を通過した。

ポールはレフトならこれより左に飛んで行くとファールとなる。

ライトにもポールがあるが、それより右に飛んで行くとファールとなる。

真上を通過した場合は文句無しのホームランだ！！

ヒート先輩の打撃結果は、左飛、見逃、ボール、二失、中飛、三直、空振、中本、右本、左本だ。

豪快で強烈な打球の数々は正にパワーヒッターだ！

「ヒートはスイングも迷いないし、いろんな方向へ大きな打球を打てているな。この調子で2巡目も頑張れよ」

キュウコン監督がヒート先輩に感想を述べた。

「次はラッシーと交代だ」

そう言われると自分の赤いグローブを手にして、ライトのラッシー先輩のところへ向かう。

「最後を3本のホームランで終わらせるなんてすごすぎですヒート先輩！」

練習を終えたヒート先輩にかっこよくてつい声をかけてしまう。

「ワッハッハッハ！そうか？ありがとうなカゲっち！」

ヒート先輩はポーンと僕の頭を軽く叩く。

「次はおまえの番だぜ親友！！」

次はラッシー先輩が練習を開始するようだ。

「ヨッシャ～！！昨日の分も打って打って打ちまくるぜ！！」

ラッシー先輩はうれしくてスキップしながら準備へ向かう！

ラッシー先輩はどんな打撃をするのか楽しみだ！！

第２２話：「打撃練習開始！！トップバッターは……ヒート先輩だ！！！」の巻

ラッシー：「１匹１０球だと足りないんじゃねぇのか？」

キュウコン：「心配するな。部活終了後に嬉しい報告してあげるから。それより次回は頑張れよ」

ラッシー：「ハイ！」

第２３話：「豪快フルスイング！！ハイテンションのラッシー先輩だ！！」の巻

ラッシー：「今回は俺の打撃練習だ♪打って打って打ちまくるぜ！！」

ヒート：「気合い全開の第２３話プレイボール！！」

第２３話：「豪快フルスイング！！ハイテンションのラッシー先輩だ！！」の巻

強烈な打撃を見せたヒート先輩！
自分もあんな打撃が出来ると良いな！

「ヨッシャ～！さあマシンちゃん！なんでもボール出して来なさい♪」

ラッシー先輩は黒いバットを持ち、右バッターボックスに入り、これでもかとハイテンションを見せる。

ラッシー先輩の打撃練習がプレイボール！！

バクフーンという種族はリザードンと同じタイプだ！きっとすごいバッター何だろうな！

今回どんな打撃をラッシー先輩は見せるのか楽しみだ！

まずは１球目！！

勢いよくマシンから、ボールがラッシー先輩の胸元目掛けて発射される！

「真ん中のストレートだと！？甘過ぎるぜ！ソラァァァ！」

豪快に全身で思い切りバットをフルスイングした！

ドンピシャの会心の当たりが……ガツーーンと打球が大空へ飛んでいく！

「レフト方向への引っ張った大飛球だぜ！確実に入ったね！」

すでにラッシー先輩はホームランを確信してグーサインを出している。

レフトのラージキャプテンは一生懸命打球を追いかけたが途中で見送った。

野球場の入口のフェンスを越えて打球は消えた。

「1球目から仕留めるとはラッシーらしいぜ！！」

ライトのヒート先輩がうれしそうに話す。

「あたりめぇだ！！一撃必殺のストレート打ちが俺のバッティングだぁ！！ボールを引っ張ったら俺の右に出るのはいねぇ！！」

ラッシー先輩はさらに熱く燃える！

「打撃はいちいち難しく考えるな！ただ飛んでくる球を豪快に引っ張れば良いんだぁ！！こんな風にな！！」

次の2球目もラッシー先輩は豪快に引っ張る！！

「ぐぁ！しまった！」

だが打球は飛ばずゴロになっている。

「やった♪あたしにボールが来たわ♪」

転がった打球はショートのピカっちの右側に転がる。
ピカっちは無難に移動しながら、うれしそうにその打球を捕った。

「ラッシー先輩♪もっとここに打ってぇぇぇ♪」

よほど守備が出来たことがうれしかったのか、笑顔で左手を上下に振ってラッシー先輩にアピールする。

「初心者であんなにボールに怖がらずに立ち向かうポケモンってそんなにいないぞ……？ピカっちはホントに守備の要になりそうだ……。女の子なのに頑張るなぁ……」

ヒート先輩はじめ先輩や監督も驚く。

楽しく覚えていくその姿に、経験者が見失う原点が垣間見られた気がした。

ではピカっちが楽しそうに練習しているので、3球目を見てみよう。

マシンが外角低めなのコースへボールを発射する。

「まだまだ俺のフルスイングは続くぜ！！」

ラッシー先輩は今まで通りのスイングで、ボールを飛ばした。

「く！また打ち損じた！！」

打球は青空へ吸い込まれる。

僕とピカっちはその打球を追いかける。

二塁ベースで同時に同じような位置に重なる。

……えっとこんなときは……、

「オーライ！！」

僕は大きな声を出してグローブを頭の上に構える。
同時にピカっちは後ろに下がり僕がエラーした場合に備える。

……ポス…。

ボールはグローブに吸い込まれた。

「良かった……。今度はちゃんと捕れたよ……」

僕はグローブを降ろしながらホッとした表情を見せた。

次が４球目!!

ボールが内角からスルスルと斜め下に変化している!!

「優等生マシンちゃ～ん♪カーブを投げるなんて素晴らしいね～♪でもこの一振りで打ち砕いてやるぜ!オラァァァ!!」

ラッシー先輩がタイミングを合わせて豪快にフルスイング!!

ガツーーンと行ったぁぁぁぁぁぁ！

「これは手応えありぃ！ホームランだぜ！」

バットを降ろして右手でガッツポーズのラッシー先輩。

ジュジュ先輩とラージキャプテンが打球を追いかける！！

その頭を越して打球は……白球は……入ったぁぁぁ！！

ホーームラーーン！！

ホントにラッシー先輩はレフト方向に大きな打球が飛びやすいなぁ。

後でキュウコン監督に聞いた話によると、彼のように引っ張りでホームランを打ちやすいバッターを“プルヒッター”と言うらしい。

さっきのヒート先輩はセンター、レフト、ライトと色んな方向へホームランを打っていた。

広い範囲に打つヒート先輩は“広角打法”のパワーヒッターだと言うらしい。

一口にホームランバッターと言っても様々なタイプが存在するのだ。

野球って奥が深いなぁ……。

次が5球目!!

外角高めにフォークが来た。

「今の俺は気分最高だぜ!ソリャァァ!!」

うまーく逆方向へ流し打ちした!

勢いは無いが一塁ベースにライナーが飛ぶ！

「あたしの出番ね！えい！」

ファーストのチコっちがジャーンプ！！

捕りましたぁぁぁ！！

「アタシだけ何も目立って無かったからファンもいなくなるところだったわ」

何を言っているんだ……このチコリータは……。

さあ、６球目！！

ラッシー先輩は自信たっぷりに見送った。

「ボール！」

審判役のラプ先輩がコールする。

次は7球目!!

「さてと……そろそろ投げるボールが無くなったんじゃねぇのかマシンちゃん♪」

ラッシー先輩はますますテンションアップだ。

マシンからボールが発射される!!

カキーーン!

黒いバットから快音が聞こえる!

今度はサードとショートの間を鋭い強烈な火を吹くようなライナーが破っていった!!

そしてレフトのラージキャプテンの前に打球は落ちた。

「全く……。なんでも引っ張ってくるから俺が動いてばかりだよ……。守備は得意じゃないのに……」

ラージキャプテンはボヤキ始めた。

ホントにご苦労様です……。

まだまだテンションアップの８球目！！

「俺にストレートは効かないぜ！！そらよっと！！」

今度は僕とピカっちの間……二塁ベースに打球が来た！！

「いつまでも……ダメダメヒトカゲでいるわけにはいかない！！
失敗は成功のもとだぁぁ！」

僕は自慢の俊足を活かし、全速力で打球に向かう。

「え～い！！」

最後に飛び込んでキャッチした！！

そしてピカっちの前に上手く着地した。

ワァァァァァ！！と歓声と拍手が鳴る！！

「カゲっちくん……カッコイイ……／／／／／／」

ピカっちは顔を真っ赤にしていた。

良かった……。カッコイイところを見せられて……。

ラブラブ状態もテンションもラッシー先輩の打撃も好調なのでさらに燃えていこう！！

次は9球目！！

「ラッシー♪ラッシー♪ラララララッシー♪俺はバクフーンのラッシー♪」

ラッシー先輩が歌を歌っているぞ。

そしてそのまま思い切りフルスイング！！

打球はライトのヒート先輩の方へ飛んでいくぞ！

「これくらいは余裕だ！」

ヒート先輩はゆっくりと前進して余裕を持ってキャッチした。

さあ、次はラストの１０球目！！

「悔いの残らないフルスイング♪ソリャァァァァ！！」

ドカーーンと力でレフトに持って行ったぁぁぁぁぁ！！！

ラージキャプテンはもう動かない。

大きな打球だ……。大きな打球だ……。

またしても場外ホームランが飛び出した！！

恐らくヒート先輩より飛距離は大きいかも知れない。

ラッシー先輩の打撃結果は、左本、遊ゴ、二飛、左中本、一直、ボール、左安、二直、右飛、左本だった。

「見事なバッティングだったぞ。飛距離も特大だし、クリーンアップも考えられるぞ。この調子で頑張れ」

「ハイ！」

キュウコン監督とラッシー先輩がやり取りする。

「次はチックと交代だ」

黒いグローブを持ってラッシー先輩はチックと交代した。

「僕もいっぱい打つぞ～♪」

抜群の野球センスのチックはどんな打撃を見せるか楽しみだ！！

第２３話：「豪快フルスイング！！ハイテンションのラッシー先輩だ！！」の巻

ラッシー：「ふぃ～！やっぱホームランは気持ち良いぜ！」

チック：「今度は僕の番だよ！次回をお楽しみに♪」

第２４話：「野球の天才！！チックの真相と5匹の先輩の背番号“１０”との約束」

チック：「え～？僕なにも隠していないよ～？」

カゲっち：「それに背番号“１０”って誰なの？」

ヒート：「それはこの話を見ればわかるさ」

ラッシー：「ナゾだらけの第２４話プレイボール！！」

第２４話：「野球の天才！！チックの真相と5匹の先輩の背番号“１０”との約束」

豪快フルスイングで僕はますますテンションアップだ！！
チックはどんな打撃を見せるのかな？

「チックにカゲっちにピカっちにチコっちはルーキーだから２０球を打ってもらおう」

キュウコン監督がベンチから出て来て、バッティングマシンの設定を変えている。

「２０球も打てるの？ワ～イ！うれしいな♪」

チックが茶色いバットを持ちながら、笑顔＋スキップで右バッターボックスに向かう。

トゲチックという種族はパワーとすばやさがかなり低い。その代わり、守りの能力と“ゆびをふる”などの技で意外性という面では

素晴らしいモノを持つ。

さて、チックはどんなバッティングを見せるのか？
注目の1球目！

彼の……チックからその笑顔が消え、真剣な表情へと変わる。

『外角のストレートは……こうして打つ！』

マシンからの外角低めのストレートに対して彼は軽くバットを振る。

コーン！

決して良い当たりとは言えない、フラフラとしたフライがチコっちのところに飛んでいく。

「フライね……まだ下がらなきゃ……」

ファーストのチコっちがバックし、練習開始前にヒート先輩と代わったライトのラッシー先輩が前に出てくる。

……！？

次の瞬間僕らは言葉を失う。

ボールは2匹の間にポテンと落ちたのだ。それも白い線……フェアゾーンのちょうど上に……。

「あ！ヒットになっちゃった♪」

チックが喜びを見せる。

次は2球目！

マシンからボールが発射される！

『内角を攻めるシュートか……！ヒットにするのは難しいけど……！』

シュートはスライダーと逆の動きをする変化球だ。

カーン！

これもライトへ流したチック。しかもさっきよりかなり打球は大きい！

「なんだなんだ！？またフェアゾーンギリギリに飛んでいくぞ！」

ライトのラッシー先輩が必死にその打球を追いかける。

しかし、打球は外野の一番深い、フェンスの手前の白線上に落ちた。

遅れて落下点に着いたラッシー先輩。

『なんてうめぇバットコントロールなんだ。俺やヒートみたく力ずくてブンブンバットを振らないで、うまくタイミングを合わせてミートバッティングしやがる。もしかしてあのチックってヤツ……野球の経験者か？』

ミートバッティングとは、思い切りフルスイングせずに、ボールとのタイミングを合わせてヒットを打つため、軽くバットを振る打撃のことだ。

練習をすれば、チックのようにフェアゾーンギリギリのところだってうまく飛ばすことも出来る。

自由自在にバットを操りヒットを打つから“バットコントロールが良いと言われたりすることもある。

彼は……チックはまたしても笑顔だ。

「2球続けてヒットなんて……うれしいな♪」

謎が謎を呼ぶけど、次が3球目！

『真ん中やや高めのストレート！それなら……』

カキーーン！

チックが打った！

今度は二遊間を破るライナーだ！
センターのジュジュ先輩の前にワンバウンドしてヒットになる。

『来たボールに対して強振しないで、センターへ弾き返す打撃……。なかなかのセンスを持っているじゃないか……。とんでもない肩力に、さっきの好守備といい、一体何者なんだ？あのトゲチックは……』

ジュジュ先輩もチックに対して驚きを見せる。

さあ次は4球目！

『内角低めへのシンカー？……それなら……！』

シンカーはカーブと逆の動きを見せる変化球だ！

足もとに来たボールに対してチックは打ち返した！

カキーーン！

茶色いバットから快音が響いた。今度は三塁の白線ギリギリのところをにボールが飛ぶ。

サードのヒート先輩はジャンプしたがその頭上を鋭い強烈なライナーが通過していった！！

「やったやった！４球続けてヒットになっちゃった♪」

チックがうれしさのあまり、クルリとバッターボックスで一回転した！

『……見送ればきっとボールだ……。そんな悪球をいとも簡単にヒットにしやがるなんて……。俺やラッシーでも難しいぞ……』

ヒート先輩も驚きの表情を隠せない。

『ここまで完璧に良いコースにヒットを飛ばしちゃうなんて……。こんなの“まぐれ”でも“奇跡”でも無いわ……。紛れも無く彼の……チックくんの……“技術”……。』

審判役のラプ先輩もある半信半疑ながら……彼の才能に驚く。

先輩たちも目を疑うが、続けて5球目を見てみよう！

『またストレート！しかもど真ん中！絶好球！』

チックが真剣な表情でそのストレートを打ち返す！！

カキーン！

「……あ！」

「なに！？」
「まさか！？」
「ありえねぇ！」
「うそでしょ！？」

打ち返した瞬間、ヒート先輩を含めた５匹の先輩はそれぞれ驚きの言葉をみせた。

当然だろう。パワーがそんな無いトゲチック……チックがライトへホームランを打ったのだから。

と言ってもヒート先輩やラッシー先輩のように、打球が青空へ吸い込まれるような大きな放物線を描いたわけでは無い。

さっきから彼が打ち返している鋭い強烈なライナーがそのままライトのポールに直撃したのだ！！

ポールに直撃した場合、判定はホームランとなる。

「僕がホームラン？うれしいな♪」

それだけではない。ここまで5球とも全部ヒットにしている。

「……なあチック……。ちょっと良いか？」

突然ヒート先輩がマシンのスイッチを切りながら、チックのところへ近づく。

「もしかして……おまえにはお兄さんがいるんじゃないのか？」

え？……お兄さん？

「先輩？もう変なこと言わないで下さいよ♪僕にお兄さんは……」

チックは笑顔で返事をしようとしたが、次の一言でその笑顔は消えた。

「“ピース”……。去年卒業したあさひポケ中学野球部のＯＢでキャプテンだ。背番号は“１０”。それに俺の前の生徒会長でもある。種族はキミと同じトゲチック」

どうやらこの野球部には去年もトゲチックが所属していたようだ。

「ピース先輩は去年の先輩たちの中では数少ない真面目な先輩だった。それに俺やラッシー、ラージ、ラプ、ジュジュのことをまるで弟や妹のようにかわいがってくれた」

ヒート先輩が昔話を始めた。

「それに練習熱心だった。必ず毎朝一番に学校に来て、最後まで残って練習していたからな」

ヒート先輩が懐かしそうな表情だ。

「テキトーに練習しているバカな先輩の中でも、俺が憧れを抱いたほどだ。一緒に練習に付き合ってくれたりもした。嫌な顔をせずにいつも笑顔で……」

なぜか悲しそうな表情に変わるヒート先輩。

今度は僕たちの方を向く。

「昨日話しただろ？真面目な先輩たちが優勝への夢……野球への

熱い気持ちを捨てて次々と辞めていった話を……。ピース先輩もいたんだ……」

僕をはじめとする仲良し4匹組が驚きの表情を見せる。

「ピース先輩はキャプテンとして何としても悲願を達成したかった。みんなの協力が必要だと訴えた。だが、それで逆に先輩が……学校生活でいじめを受ける原因となったんだ……」

……え？なんでそんな良い先輩がいじめに？

「生意気だと言われて……、バカ先輩の自由の時間を奪う邪魔な存在として扱われて……。でもピース先輩はそれでも笑顔を絶やさなかった。俺たち5匹が辛い思いになるのが嫌だと言って……」

その場が重苦しい空気に変わる。

「でも限界が来たのだろう。その日はすごく悲しそうに練習していたな。そして部活が終わった後に俺たち5匹を集めて言ったんだ。“最後まで一緒にいられなくてごめん……”って……。」

ラージキャプテンがつぶやく。

「先輩は俺に言ってくれたっけ……。“守備が苦手なのに一番練習頑張ってたねラージ。ヒートは熱血過ぎて冷静さを失うから、キミが次のキャプテンだ。いつでも真面目だったごほうびだよ”って……。ヒートがなってもおかしくなかった役目をあえて俺にしてくれて……」

ラージキャプテンは顔を真っ赤にして大量の涙を流しはじめた。

「ピース先輩は俺たち5匹に、“最高の後輩がいたからここまで頑張れた。今日で僕は辞めるけれど、いつか君たちがこの野球部をリーグ優勝させてくれるって信じているから……。負けないでね……。それと来年入部する後輩を温かく迎えてあげてね。こんな辛い思いをするような後輩を一人も出さないでね。お願いだよ!!”と言い残して大泣きしながら走り去って行ったよ……」

切なすぎる悲痛な話をヒート先輩は続ける。

するとラプ先輩がふと、

「……ピース先輩はポジションが……チックくんと同じサードだった。……すごい強肩で……確かあのレフトからホームベースまで……バウンドせずに送球していた。……笑いながら毎日あたしとキャッチボールしてたっけ……」

ラプ先輩も泣きながら……声を詰まらせながらつぶやく。

「打撃も……ライトへレフトへセンターへ色んな方向に打ち返して……良い守備練習になったな……俺には真似できねぇぜ……」

ラッシー先輩も泣きながらつぶやく。

「守備も飛びついたり、ジャンプしたりして……後ろからみてもかっこよかったな……」

ジュジュ先輩も泣きそうだ……。

そのプレースタイルが今日チックが見せた姿と重なる……。

「俺は決意したさ。絶対優勝させてやるって……。ピーク先輩の“夢”を叶えるためにも……。そして言えなかった感謝の気持ちを伝えると……」

ヒート先輩が涙ながらにチックに話す。

1年前味わった“悪夢”。

あの時言えなかった感謝の気持ち。

そして、ピース先輩の涙の約束を守っていること……。

ピース先輩の笑顔と共にどうしても忘れられない5匹の一つ一つのかけがえのない大切な思い出……。

「……そうです。ヒート先輩の言う“ピース”は僕の兄さんです……」

チックは自分のお兄さんと認めた。

「僕も兄さんに色々教えてもらいました。中学を卒業した後兄さんは、ながれぼしタウンでカフェを営み暮らしています。本当は……野球はやりたくなかった。あの日兄さんが大泣きして帰って来たのを見たから。……野球をもうやらないって言っていたから……、僕もやっている意味が無いと思っていたから……」

チックはバッターボックスで泣き崩れはじめた。

「でも……兄さんの果たせなかった“夢”を叶えるために……また始めようと思いました」

「じゃあなんで隠していたんだ？“弟”だと言うことを……」

僕も思った。わざわざ隠す理由がわからなかった。

「それは……、野球をまた始めるから……、カゲっちくんたちと同じ“ルーキー”という気持ちで望みたかったからです！！あのピース兄さんの弟だと言うと、それに甘えるからだと思ったからです！！」

僕やピカっちやチコっちと同じ新鮮な気持ちで野球をしたかったらしい。

「迷惑かけて……ウソを言ってすみませんでした」

彼は頭を下げて謝った。

ピース先輩がチックをかわいがる弟想いなら、チックもまたピース先輩の“夢”を受け継ぐと決心した兄想いだった。

……兄弟っていいなぁ……。

僕はしみじみと感じた。

「ありがとうなチック。ピース先輩の“夢”を絶対叶えような！それが俺たちの出来る“おんがえし”だからな！！」

そう言うと、ヒート先輩はマシンに手をやり、

「話は終わりだ。さあ、練習始めるぞ！！」

マシンのスイッチを入れた。

僕たちの“夢”は絶対叶えてみせる！

絶対に……！

絶対に……！！！！！

第２４話：「野球の天才！！チックの真相と5匹の先輩の背番号“１０”との約束」

カゲっち：「兄弟っていいなぁ……」

チック：「うん♪こんなにピース兄さんを尊敬している先輩がいるなんて驚いたよ♪」

ヒート：「かけがえのない思い出だからな」

ラッシー：「次回はチックの練習の続きだ！頑張れよ！」

チック：「ハイ！」

第２５話：「右に左にヒット打っちゃうよ♪」の巻（前書き）

チック：「今回は僕の練習の続きだね♪」

カゲっち：「２０球目までどんなドラマが待っているのかな？」

ジュジュ：「注目の第２５話プレイボール！！」

第２５話：「右に左にヒット打っちゃうよ♪」の巻

チックの内に秘めた想いと、５匹の先輩の涙の約束が明らかになったところで、もっともっと頑張らなきゃならないね！！

ここまでチックの打撃練習をまとめると、右安、右安、中安、左安、右本とまさに右に左にヒットを打ち分けているぞ。

この先どうなるのか非常に楽しみな６球目！！

マシンからボールが発射される！

『内角高めのストレート！それなら……！』

カーーン！

ライナーが二遊間の頭の上を越えて……センター前に落ちる！！

「これで６球続けてのヒットだ♪」

このとてつもない勢いはもう誰にも止められないのかな？

すごい！すごすぎる！7球目はどうなるかな！

「……う～ん。やっぱり右バッターボックスだと打ちにくいなぁ……。左バッターボックスに入っちゃお♪」

チックはそう言うと、左バッターボックスに移動する……。

……って……えっ！？あれでチック……打ちにくいの！？

「やっぱり左バッターボックスは見やすいな♪僕はスイッチヒッターだから、右投げには左バッターボックスだね♪」

……え！？チックは右と左……両打席を使うスイッチヒッターだったの！？

でもどうして右ピッチャーには左バッターボックスが良いんだろう？

僕やピカっちやチコっちは首を傾げて頭に“？”マークをつけている。

「カゲっちたちには少々難しいな。よ～し！この背番号“1”の

ヒートがエースの責任として教えてあげるぜ」

ヒート先輩の説明によるとこういう理由だ。

例えば右ピッチャーに対して右バッターボックスに立つと、相手が投げるときに腕の動作が見えにくくなるのだ。

つまり、飛んでくるボールとのタイミングが取りにくくなるらしい。

（特に内角のボールに対して）

タイミングを合わせやすくするため、腕の動作を見やすくするためにわざわざ逆のバッターボックスに入るのはこういった理由なのだ。

「両打席を使うことによって相手ピッチャーが右投げだろうが左投げだろうが、苦手意識が無くなるのが最大のメリットだな」

ちなみに余談だが人間界でもこの世界でも、スイッチヒッターが試合中に自分の打順のときに一球ごとに打席を変えるのも許されている。

「僕もそうだけど、だいたいスイッチヒッターって元々どっちかの打席だけだったと言うポケモンたちが多いよ。僕の場合は右バッターだったけれど、どうしても右ピッチャーが打てなくて、ピース

兄さんに教えてもらって練習して今のようになったんだ！」

それだけではないだろう。

「どうしてでも打ちたい！」という気持ちが無ければ、そこまでの努力は無かっただろう。

僕はチックの笑顔の裏側には、並大抵ではない野球への思いとものすごい練習量があることを確信した。

「さ～て打つぞ～！」

チックが左バッターボックスに構える！！

ボールがマシンから発射される！

『これは……見送ればボールかも……？』

チックが内角高めのストレートをバットを振らず見送った。

ラプ先輩が一瞬迷った。さて判定は……ストライクかな？ボール

かな？

「……ボール！！」

その瞬間、守備陣の歓声が沸き上がる！

「すごいわチックくん。よく自信満々に見送ったわね？」

ラプ先輩がチックを褒める。

「ピース兄さんが“自分が打てないボールは手を出すな。”ってよく言っていましたから。“フォアボールで出塁するのは、ヒットを打つのと同じ価値があるよ。”と」

これでチックは7球連続アウトになっていないことになった。

どこまでもチックの快進撃は止まらない！さあ8球目！

『外角低めにストレート！それ！』

チックは得意の流し打ちを見せる！

「やったー！またあたしのところにボールが来た！えい♪」

ショートのピカっちが手を伸ばしてジャンプ！！

バシッと音が聞こえた！黄色いグローブにボールが収まったようだ！

「やった♪捕れた～♪」

ピカっちはうれしさのあまり、右足を上げてクルクルと回転し始めた。

「……あらら……。ピカっちに捕られちゃった……。でもやっぱり野球っておもしろ～い♪」

８球目ではじめてアウトになったチックは、ジャンプしてクルクルと５回転した。

この２匹もハイテンションになると止められないかも……。２０球を打ち終わった後どうなるかちょっと不安だ……。

次は９球目！

『またストレート!!打てる!』

カーン!!

チックがひざ元のストレートをセンターへ弾き返した!!

打球はセンターとライトの間に落ちそうなライナーだ!!

「すばやさなら誰にも負けない!全力プレーで捕ってみせる!!」

ジュジュ先輩が猛スピードで落下点へ走る!!

「ピース先輩に認められたこの広い守備範囲が僕の武器だ!!」

ジュジュ先輩が地面すれすれの打球に向かって思い切りダイビングする!!

果たしてボールは捕れるのか!?

「捕ったのか……」
「捕ったんですね……」
「あたしの王子様……ジュジュ先輩カッコイイ……／／／／」
「さすがジュジュ先輩！カッコイイです！！」
「マジで捕りやがったぜ！！やるなぁ！」
「すげぇぇぞ！！ジュジュ！！」

ジュジュ先輩の持つ緑のグローブにボールが収まったのを僕らは目撃した……。

結果はもちろんジュジュ先輩のミラクルプレーだ！！！！

「イタタタ……でもこれは僕だけのプレーじゃない。ピース先輩の熱い想いも後押ししてくれたから……」

背番号“３”のジュジュ先輩は少し寂しげに話す。

「そうかもしれないな。俺たちがこうして頑張れるのも、長所を見つけてくれたピース先輩がさらに伸ばしてくれたからかな……」

背番号“２”のラッシー先輩も言う。

「……何そんなめそめそしているんだよ！！そんな顔してたらピース先輩がますます悲しむぞ！！その日が来る日までやらないとい

けないことはたくさんあるぞ！！もっと気合い入れるぞ！！」

背番号“６”のラージキャプテンが最後に奮起を促した！！

「オーーー！！！」という声が外野から聞こえた。
ますます気合いが入る！！
燃え上がる外野陣！さあ次は１０球目！！

チックが外角高めのストレートを一塁線に打ち返した！

「ゴロなら簡単だわ！」

チコっちが緑のファーストミットで、無難にゴロを捕った。

「何よ！！もっと大きな声で褒めてよ～～！」

チコっちがギャーギャーと騒ぐ。
どうやらもっと周りが盛り上がるのを期待していたようだ……。

しかしチコっち……？
ピカっちやジュジュ先輩のようなダイナミックなプレーの後に、
平凡なゴロはちょっと盛り上がるのにかなりムリがあるような気が

するよ？

「……もう！！こうなったら誰でも驚くような“ミラクルメガニウムソーラービームー”のような大活躍を見せてギャフンと言わせるんだから！！」

言葉を意味も無くゴチャゴチャ並べているが、とにかく彼女はみんなの注目を浴びるようなビックプレーを見せたいようだ。

最後の「ギャフンと言わせるんだから！！」はもはや別の方向へ向かっている様な気がするが……。

何はともあれ、チコっちもかなりの意気込みだ！さあ１１球目！

『うわ！落ちるスライダーだ！！』

チックが驚く。

落ちるスライダーとはスライダーが縦方向に動く変化球だ。
フォークがストンと急激に落ちるのに対して、縦スライダーはスルスルと流れるような動きを見せる。

「ストライ～ク！」

審判役のラプ先輩がコールする。

さすがに手が出なかったチック。

「アハハハ……。あんなの打てないよ……。びっくりしちゃった♪」

チックが苦笑いしている。

次は１２球目！！

カーーン！！

打球はレフト線ギリギリのところを飛んでいる。

「俺はキャプテンだ！！守備は苦手なんて言っていられない！背番号“６”の意地見せてやる！！」

ラージキャプテンは今までの恐らく１５倍くらいの速さで打球を追いかける。

「絶対捕ってみせる！！」

ラージキャプテンが思い切り飛び込んだ!!

バシッ!!

しかし、打球は惜しくもグローブの先に当たり、コロコロと転がってしまった……。

記録はレフト線へのヒット（左安）とラージキャプテンのエラーだ。

「あ……!やっぱりダメだったか……。やっぱり俺は守備が下手なんだな……」

立ち上がったあと、かなりガッカリとした表情になったラージキャプテン。

「ドンマイ!ドンマイ!次捕れれば良いだけの話だろう?それよりガッツプレーが最高だぜ!」

サードのヒート先輩が手を叩く。

パチパチパチ……。

拍手がグラウンドから中から聞こえる。

「ありがとうみんな……」

誰かがミスをしたなら、みんなでカバーしあえばいい。

“チーム”とはそういうものではないだろうか。

さて、まだまだ練習は続く！次は１３球目！

カキーーン！

チックが強烈なゴロを打つが、一塁の白線の外側に切れた。

「ファール！！」

ラプ先輩の声がする。

「打ち損じちゃった♪次はヒット打っちゃうよ～♪」

チックに動揺した様子は見られない。むしろ、ますます笑顔にな

っていくぞ。

次が１４球目！

「イチッ……ニッ……サンッ！！」

チックがタイミングよくバットを振る！！

カキーーン！！

速いゴロがきれいに一ニ塁間を破り、あっという間にライト前に転がっていった！

さあ次行ってみよう♪１５球目！！

「もっとヒット打っちゃうよ～♪えい♪」

カーーン！

今度は二三塁間を速いゴロが破り、レフトに転がる！

「またヒットになったよ♪」

チックがクルクル回り始める。

次は１６球目！！

マシンからフォークが発射されたが、ワンバウンドした。

結果はもちろん、

「ボーール！」

さあ残り少なくなってきたけど、張り切るよ！１７球目！！

『次は内角のスライダーだ！！それ！』

チックがバットを振った！！

「あたしのところにボール～♪うれしい♪」

ピカっちが満面の笑顔でバウンドしたボールをキャッチした。

「本当に楽しそうだね？ピカっち」

僕はピカっちに声をかけた。

「だってあたしのすぐそばに、大好きなカゲっちくんがいるから♪カゲっちくんがいると何でもすごく楽しく感じるの♪」

ピカっちがニコって笑って僕を見る。

「だから……あたしもっと頑張るわ！！大好きなカゲっちくんから温かいパワーをたくさんもらっているから♪」

ピカっちがジャンプしながら話す。
ますますテンションアップした様子だ！

「カゲっちくんももっとカッコイイところ見せてね♪」

僕はうなずく。そして改めて彼女のために頑張ろうと思った！

僕とピカっちのラブラブがもっとパワーアップしそうな１８球目！！

カキーーン！

チックがバットを思い切り振った！

打球はライナーとなって僕のところに飛んできた！！

「ボールは必ず捕ってみせる！！」

バシッ！！

僕は体の正面でボールをキャッチした！！

「上手くキャッチ出来てよかった……」

本当はボールがいつぶつかるかわからないから怖いけど、ピカっちだってあんなに応援している。ピカっちが僕を強くさせているのかもしれない！

さあ、もっと頑張るぞ！１９球目！

「ストレート！えい♪」

チックはバットを振るが、打球は一塁の白線の外側に転がった。

結果はファールである。

いよいよ最後の２０球目！！

「最後はホームランだ！！それ！！」

チックが思い切りバットを振った！

「げっ！！」

ライトのラッシー先輩がバックする！だが打球はラッシー先輩の頭の上をライナーで破った！

「あらら。ホームランにならなかったね♪でもたくさんヒット打てて楽しかった♪」

僕もみんなもきっと楽しかったよ。

何より楽しそうに練習をこなす姿はチックらしく感じたよ！

チックの打撃結果をまとめると、右安、右安、中安、左安、右本、中安、ボール、遊直、中直、一ゴ、ストライク、左安、右安、左安、ファール、ボール、遊ゴ、二直、ファール、右安である。

チックは練習を終えると、キュウコン監督にコメントをもらった。

「私は今年から野球部の顧問を担当しているから君のお兄さんのプレーを見たことはない。だが、ヒートたちが語るほど大切な思い出を残した選手だ。よほど素晴らしい選手だったのだろう。君も右に左にお兄さんの“夢”を乗せてヒットを打つ気持ちを忘れなければ、もっとヒットを量産出来ると思うぞ！」

そう言われると、チックは「ハイ！」と大きな声で返事した。

「次はラージと交代だ！」

次はキャプテンの出番だ！！

ラージキャプテンはどんな打撃を見せるのかな？

第２５話：「右に左にヒット打っちゃうよ♪」の巻（後書き）

チック：「楽しかった～～～♪」

作者：「ご苦労さん。監督の言う通り、お兄さんの“夢”を乗せてたくさんヒット打ってね」

チック：「うん♪」

ラージ：「次は俺の出番か！頑張るぞ！」

第２６話：「“つなぐ”パワーヒッター！！それがラージキャプテンだ！！」の巻

ラージ：「待っていましたぁぁぁぁ！」

ギャアァァァ！！（汗）

うれしいからってジャンプは止めてぇぇ！（汗）

ラージ：「だって俺燃えてきたんだよ！！ヒートならわかるよな？」

ヒート：「当然だ！！キャプテンの力見せてやれ！」

カゲっち：「それでは第２６話プレイボールです！」

第２６話：「“つなぐ”パワーヒッター！！それがラージキャプテンだ！！」の巻

何もかもが驚きの連続だったチックの打撃練習。
僕もあれくらいヒットを打てると良いなぁ……。

「次は俺の出番だ！ヒートやラッシーが４番を狙っているけど、俺も譲る気は全くないぜ！！」

右バッターボックスに黒いバットを持ったラージキャプテンが入った。

ラグラージという種族は、すばやさはそんなに高くないが、その他の能力はかなり高い能力を誇る。使用する技もかなりパワフルなものばかりだ！！
きっとあさポケナインの種族の中でもトップのパワーだと思う。

４番を狙うと宣言したキャプテン！ヒート先輩やラッシー先輩のような打撃に負けない……、そんな力強い１０球を僕も期待しています！

さあ、まずは１球目！！

マシンから真ん中低めにボールが発射される！！

「ストレート！！俺のパワーで粉砕だ！！」

カキーーン！

打球は勢いよくセンターとレフトの間に飛ぶ！
ラージキャプテンの代わりにレフトを守るヒート先輩とセンターのジュジュ先輩が必死に追いかけるが……、

カシャーン！

打球はそのままフェンスに直撃した！！

「俺は確実にヒットを打ち、バントもしたり、時に特大ホームランも打てるような……何でも出来る４番バッターになりたいんだ！！チームの勝利に貢献出来るようなバッターに！！」

どうやらラージキャプテンはナインでもトップのパワーの持ち主だが、豪快なホームランよりは、チームの勝利に貢献出来るような、確実な打撃を目指しているらしい。

さすがは僕たちのキャプテンだ。チームのことを第一に考えていて立派だなぁ。

「あのパワーの持ち主なのにもったいないぜ。俺みたく豪快にフルスイングすりゃあもっとホームラン打てると思うのにな」

ライトを守るラッシー先輩が言う。

「いや、ラージの言う通りだ。野球は9匹でやるスポーツだ。みんながチームの事を考えずにプレイしていたら、試合に勝てないぜ。いかに打線を“つなぐ”ことが出来るか。それを考えるのも大切だぜ」

レフトのヒート先輩が言う。

「チームの勝利に時には自分の打撃を犠牲にするのも大切だよね」

センターのジュジュ先輩が言う。

「ピース兄さんもよく言っていたな～。“自分でかっこよく決めようとしないで、みんなで点数を取っていくことが大事だよ。そのために自分が出来ることを考えてね♪”って」

最後にサードを守るチックが話した。

次は2球目！！

ボールが外角低めに発射された！！

カーーン！

打球はサードの後ろに飛んでいく！
サードのチックとショートのピカっちがバックして、レフトのヒート先輩が前進してくる。

「オーライ！」

ピカっちが空を見上げて声を出す。

青空からボールが落ちてきて、ピカっちの黄色いグローブに上手く収まった。

「やった♪これで3回もキャッチ出来た！」

ピカっちがニコニコ笑いながら、スキップして元の場所に戻った。

さあ、続いて3球目!!

「外角へのスライダー!!それ!!」

カーーン!!

打球はライトとセンターの間（右中間）へ飛んでいく。しかもかなり大きな打球だ。頭の上を越えそうだ。

ラッシー先輩とジュジュ先輩が打球を追いかけていく!!

しかし打球はそのまま先輩たちの頭を越えて右中間を破っていった。

次は4球目!!

「フォークか!!でも打てるぜ!!」

ラージキャプテンが内角低めのフォークを黒いバットで打ち返し

た！

打球はセカンドの僕とライトのラッシー先輩の間に落ちた！！

「ランナーを次の塁に進めるためにどんな打撃をしたら良いか、いかに打線を“つなぐ”か。俺は常にそのことしか考えていないぜ！」

ラージキャプテンはバッターボックスの中で静かに闘志を燃やしている。

さあ次は5球目！！

「打って打って打ちまくってやる！！俺の武器は打撃だ！」

なんだかラージキャプテンが燃えはじめたぞ！

バッターボックスから出て二、三度素振りをしてから、再びバッターボックスに戻る。

「さあ、来い！！」

ボールがマシンから発射された！！

「ストレート！もらったぁぁぁぁぁ！！」

カッキィーーーン！！

ものすごい快音が響いて、打球がグーーンと青空へ吸い込まれて行く！！

そしてそのまま……左中間のフェンスを越えたぁぁぁ！！！

「力と力の勝負で俺は負けないぜ！ラッシーやヒートよりもホームランは打てる自信もあるぜ！」

確かに……、飛距離はラッシー先輩やヒート先輩にも負けていない気がする。

３匹の中で、誰があさポケの４番になるのかワクワクしてきた！

キャプテンのパワフルな練習はまだ続く！！６球目だ！

「またホームラン打ってやるぜ！うおりゃー！！」

カキーーン！！

今度はセンターのジュジュ先輩の頭の上を大きく越えた！！

「またホームランだぁ……。守備の名手が僕なら打撃の名手はラージだな」

ジュジュ先輩が打球を見上げながらつぶやいた。

さあ止まらず7球目!!

次はスライダーが内角に飛んできた。

「こんな打ちにくいボールだって打ってやる!!」

その言葉通り、バットの根元に当たった打球は、レフトとセンターの前にポトリと落ちていった。

長打を打ったり、ポトリと落ちるヒットを打ったり出来る……。まさに何でも出来るラージキャプテンは、広角打法のヒート先輩や、プルヒッターのラッシー先輩とはまた違うタイプのパワーヒッターだというのがよくわかる。

さあ、キャプテンはどこまで打つのかな?8球目!!

外角高めに大きく外れてボールが飛んできた。

「ボーール！」

ラプ先輩の判定はボールだ。

「さすがにあれは打てないよ。無理なバッティングをしてアウトになるよりは、フォアボールを選んで“つなぐ”方がマシだしね」

ラージキャプテンは笑いながら話す。

さあ、ラスト2球だ！9球目！

また内角にスライダーだ！！

カキィーーン！！

「今、手応えがすごく良かったんだけど……、まさかね……」

ラージキャプテンが黒いバットを振り切った後、思わず右中間を見る。

打球はフェンスを越えたか……？

カシャーーン！

いや、ギリギリでフェンスの上部に当たったようだ。

「ホームランは狙うものじゃないと思うんだ。俺は確かにすごいパワーだと自覚している。でもチャンスでもチームのことを考えないで、フルスイングして三振するより、次の打者につなぎたいと思っているんだ」

あくまでチームの勝利が第一。

まさにこれこそが、“ひとりはみんなのために”だということなのだろう。

『打撃ってただヒットを打てれば良いって問題じゃないんだ……。いかに打線を“つなぐ”かが大事なんだ……』

セカンドでラージキャプテンの打撃練習を見て、僕はまた何かを学んだ気がした。

いよいよ最後の１０球目！！

「最後だし、思い切りフルスイングしよう」

ラージキャプテンの目が燃える！！

飛んできたボールはフォークだ！！

「オリャァァァ！！！」

気合いの一振り！！果たして結果は！！？

「ストライク！」

ボールはバットにはかすらず、最後は空振りで終わった。

「へっへっへ。でも気持ちよかったぜ♪打撃練習は最高だな」

ラージキャプテンの打撃結果は、左中安、遊飛、右中安、右安、左中本、中本、左中安、ボール、右中安、空振だ。

「外野の間を抜ける長打は見てて頼もしく感じたぞ。この調子でナインを引っ張ってくれ」

例のごとく、キュウコン監督がコメントする。

「はい！任せて下さい！」

ラージキャプテンが力強く返事した。

「次はラプと交代だ。審判はヒートに任せたぞ」

そう言われると、レフトのヒート先輩がラージキャプテンとハイタッチして交代した。

「次はあたしの番ね。粘りの打撃を見せてあげるわ♪」

ラプ先輩が笑顔で準備を始めた。

あさポケナインのまとめ役、ラプ先輩の打撃はどんなのかしっかり見なきゃ！

第２６話：「“つなぐ”パワーヒッター！！それがラージキャプテンだ！！」の巻

ラージ：「最後はホームラン打ちたかったな」

ジュジュ：「いやいや、思い切りフルスイングして空振りしたなら見ていても納得してくれたはずだよ」

ラージ：「そうか？そう言われるとうれしいな……／／／／」

ピカっち：「次はラプ先輩の番ですね」

ラプ：「あたしの練習も期待していてね♪」↑ウインク

第２７話：「ヒットを打ちたい……！！ラプ先輩の持つ打撃の武器」の巻（前書

ラプ：「今回はあたしね。みんなに負けないくらい頑張って練習するわ♪」

ピカっち：「どんな打撃をするか楽しみだわ♪」

チコっち：「気になる内容がたっぷりの第２７話プレイボール♪」

第27話：「ヒットを打ちたい……！！ラプ先輩の持つ打撃の武器」の巻

ラージキャプテンが“つなぐ”打撃でナインを引っ張ってくれそうだ。
僕もあんな風にならないといけないな。

「次はあたしの番ね♪カゲっちくん。ピカっちちゃん。チコっちちゃん。しっかり観察していてね♪」

まるで、海のように青いバットを持って、左バッターボックスに入るラプ先輩。

「あたしはチームで数少ない左バッターよ♪打撃はそんなに得意じゃないけど……。でもヒートやラッシーやラージには出来ない打撃が出来るわ！」

ラプラスという種族は何と言っても体力の高さは素晴らしい。すばやさが低い代わりに、その他の能力はバランスが良いのが特徴だろう。

それだけではない。人間の難しい言葉の意味を理解出来るほどの高い知能の持ち主でもある。
キャッチャーはピッチャーの特徴を把握して、上手に相手を揺さぶるような投球の組み合わせ（リード）をしなきゃならない、まさ

にチームの司令塔でもある重要なポジションだ。
彼女の種族に最も適したポジションだと言える。

そんな野球部の中でも冷静さが光る、ラプ先輩の打撃練習がスタートした！！

まずは1球目。

外角へのシュートが飛んできた。

『見送ればボールかも知れないけど……、でも際どいわ！えい！』

コーン！

軽く当てた打球は三塁の白線の外側に飛んでいった。

「ファール！」

今回は審判のヒート先輩がコールした。

「バッターにとって三振はどんな場面でも嫌なものなの。あたしのようにバッターは、いかにツーストライクから粘れるかが大事よ。ファールなら何球打ってもアウトにはならないしね♪」

ラプ先輩が真剣だけど笑顔も交えて、優しく僕らに言う。

次は2球目！！

今度は内角高めのストレートだ！

『全く際どいわね……。えい！』

またも軽く当てただけの打球が一塁の白線の外側に飛んでいった。

「ファール！」

結果はまたしてもファールだった。

「これで良いのよ。だいぶタイミングが分かってきたわ♪次はヒットよ♪」

2球をファールにして手応えを感じたようだ。

それでは注目の3球目！

今度は外角へのカーブだ！！

「ここよ！えい♪」

コーーン！

打球はサードのチックの右の白線上をゴロで転がっていった！！

「やっぱりね。変化球はギリギリのところばかりだったわ。こういうボールはムリに引っ張らずに流した方がヒットになりやすいわ」

ラプ先輩は最初から流し打ちをする気持ちでいたようだ。

「かなりレベルが高いですねラプ先輩……。ルーキーの僕たちには真似出来ないです」

かなり専門的なラプ先輩のバッティングは上級者向けのような気がする……。

さすがは野球部のまとめ役だ……。

さあ、４球目！！

真ん中より内角のところにストレートが飛んできた！！

「あたしの技術は半端ではないわよ！えい！」

コーーン！

打球はバッターボックスの外側に飛んでいった。

「ファール！」

ヒート先輩がコールした。

「バッターにとって体に近いところに飛んでくるボールは一番空振りを取られやすいの。特に遅いカーブのような変化球の後の速いストレートはね。みんなタイミングがわからなくなるから、三振を奪うときの決め球として利用して来るわ。逆を言えば、そこをファールにすれば、相手はどこに投げたら良いか困るけどね♪」

ラプ先輩がウインクする。

「さすがは粘りのラプだ。俺だったら間違いなく打ち損じるぜ…」

ライトのラッシー先輩が驚きの表情を隠せない。

ラプ先輩のように、ツーストライクからファールを打って三振しないようにする技術を“カット”と言うらしい。
そして、“カット”を続けて、最終的にヒットやフォアボールを選ぶことを“粘り打ち”と言うらしい。

「ラプ先輩。そんなことあたしにも出来ますか？」

ショートのピカっちが心配そうに質問する。

「ええ、出来るわ。“絶対出塁する”という気持ちを強く持って、どんなボールでもバットに当てるという執念を持てばね♪こういうバッターは相手にとってホームランバッターより厄介な存在に見えるはずよ♪」

ラプ先輩がまたウインクする。

「わかりました！あたしも頑張ってみます！」

ピカっちはほっとした表情で返事した。

次は5球目！！

今度は外角低めへのストレートだ！！

「打てるわ！えい！」

カーーン！！

打球はファーストのチコっちの正面のライナーだった。

「なんだか守備の感覚がつかめた気がするわね？」

チコっちが不思議そうな表情で自分の緑のミットを見つめる。

「チコっちもそう思う？……じつは僕もそう感じるんだ」

僕は赤いグローブを空に向けながら話す。

「一体どうしてかしら?」

ピカっちも黄色いグローブを見つめる。

「多分“生きたボール”をキャッチしているからだ」

キュウコン監督が疑問に答える。

「“生きたボール”って何ですか?」

僕が質問する。

「つまり、キャッチボールやノックのような打球ではなくて、実際に打撃をした球のことだ。ノックでヒートやラッシーや、チックやラージや、ラプのような打球は完全に再現は不可能だからな。どのメンバーの打撃も、自分の特徴を一生懸命に磨いて手に入れた技術だ。そういうボールはバッターの想いも込められている。例えノックをたくさんしたって、実戦に勝る経験は積めないぞ。君たちが先輩たちに一日も早く追いついて欲しいと思って、この練習も兼ねているんだよ」

確かに……。今朝のノックのような練習も大切かも知れないけど、先輩たちの技術が凝縮されたボールをキャッチ出来たときの方が喜びが大きい気がする。

次は6球目!!

内角に向かってシンカーが飛んできた!!

「また内角球!!それ!」

カーーン!!

打球は勢いがない。そのままサードのチックのシルバーのグローブに吸い込まれた。

「サードの守備なら任せて♪兄さんと毎日練習したから自信があるんだ♪」

チックは楽しそうに笑顔で語った。

……おや?ラプ先輩が震えているような気がする……。

「それにしても……何よ！あたしだけ絶好球が飛んで来ないじゃない！！かわいいレディーなんだからもっと優しくしなさいよ！！！」

あ！！ラプ先輩が顔を真っ赤にして怒っているぞ！！

「ヒット打ちたい！打ちたい！！打ちたい！！！打ちた～い！！！！」

ラプ先輩が“あばれている”！！

「おいおいおいラプ。落ち着けよ。例え今打てなくても、次があるじゃないか。おまえらしくないぞ？」

審判役のヒート先輩が必死にラプ先輩を落ち着かす。

「だって……みんな楽しそうにヒット打っているのよ？あたしだって打ちたいわ……」

ラプ先輩の瞳から涙が落ちて来る。

「ったく……。ヒット打つのは大切なことだ。でもな、場合によってはバントや進塁打や犠牲フライだって立派な打撃だぜ。おまえがヒットを打ちたいと叫びたいなら、俺はおまえのその粘りの技術が欲しいって叫びたいぜ……」

ヒート先輩が大事にラプ先輩に話をする。

「いいか？ラプにはヒットを打つ技術よりその粘り打ちの技術がすごいんだ。だったらその技術をもっと磨いたって良いんじゃないのか？」

ヒート先輩が真剣な表情でラプ先輩に話す。

「……そうね。ヒートの言う通りね。この打撃技術があたしの武器なのよね。ありがとう……。おかげでスッキリしたわ……」

ラプ先輩がいつもの優しい笑顔に戻った。

では、気を取り直して7球目！！

外角へのストレートだ！

「ヒット打てなくても、みんながそばにいてくれる！！粘り打ち

を見せてあげる！！」

コーーン！！

打球はフラフラと僕の後ろに飛んで来た！

「く！このままじゃ間に合わない！それ！！」

僕は思い切り赤いグローブを持つ左腕を伸ばして、横に飛ぶ！！

しかし、そのわずか数十ｃｍ先にポトリと打球が落ちた。

「しぶとく食らい付いたヒット……。まさにこれこそが粘り打ちの真骨頂だ。ヒートの言う通り、こういう技術を磨くんだ」

キュウコン監督がラプ先輩に話しかけた。

「はい。わかりました。自分なりにチームに貢献出来るように頑張ります」

ラプ先輩がうなずいて返事をした。

さて、次は８球目！！

また内角にストレートが飛んできた。

「これは完璧にボールだわ」

ボールを余裕をもって見送った。

「ボール！」

ヒート先輩もボールと判定した。

さあ、続いて９球目！！

「外角へのスライダーね。それ！」

カーーン！！

打球はレフトのラージキャプテンの前でワンバウンドした。

『なんだかヒット打てるようになってきたわね……。ヒートが励ましてくれてから……』

ラプ先輩がチラッとヒート先輩を見た。

ヒート先輩が「その調子だぜ」と言わんばかりの笑顔を見せた。

苦しんでいる仲間がいたら一言をかける。

バッテリーを組む2匹の先輩なら、なおさらその意識は強い。

ピッチャーとキャッチャーはこうしてコミニケーションをして互いを信用するのだという。

『キャッチャーはどんなにすごい頭が良くても、肩が良くても、ピッチャーと仲が悪かったり、ピッチャーの投げたい球を投げさせないなんてキャッチャーとして失格……。あたしもまだまだ勉強不足ね……』

目を閉じて深呼吸をしたラプ先輩。

さあ、いよいよ最後の１０球目！！

最後は真ん中にストレートが飛んできた！

『何でも打つわ！迷いなんてもう無いんだから！！』

カキィーーン！！

ラプ先輩が迷いなく青いバットを振った！！

打球はものすごい鋭いライナーがあっという間にライトのラッシー先輩の右を抜けていった！！

『こんな感触はじめてだわ……。今まで野球をやって来てはじめて……。』

ラプ先輩が味わった手応え……。それこそがバットの芯で捕らえた当たりだ！！！

『今は試合じゃないけど言える……。ヒットを打てるってこんなに感激することなのね……』

打撃が苦手なラプ先輩ならその喜びはひとしお大きかった。

バットを振りきった後に涙をこぼしながら一言……、

「もっと練習してヒット打てるように頑張るわ……」

野球選手にも色んな人がいる。打撃が得意な人、そうでない人。守備が得意な人、そうでない人。速いボールを投げるピッチャー。変化球をたくさん投げるピッチャー。コントロール良い人、そうでない人。

完璧な選手なんて数えるほどしかいない。

でも、みんなが力を合わせて勝利をつかむ……。

それが“野球”というスポーツだ……。

ラプ先輩の打撃結果は、三邪、一邪、左安、捕邪、一直、三直、右安、ボール、左安、右安だ。

「例え今打てなくても、努力をすればだんだんと結果が伴うぞ。粘り打ちを磨いていけば必ずな……」

「ハイ！頑張ります♪」

キュウコン監督がいつものようにコメントした。

「次はカゲっちと交代だ。色んな打撃を見てたら打ちたくなってきただろう」

……え!?僕が打つんですか!?

打てるか不安だけど、僕の熱い気持ちをぶつけてみせる!!!

第27話：「ヒットを打ちたい……！！ラプ先輩の持つ打撃の武器」の巻（後書

ラプ：「恥ずかしいところ見せてごめんねみんな……」

ピカっち：「そんなこと無いですよ。一生懸命な姿がかっこよかったです！！」

チコっち：「あたしもそう思いました！」

ラプ：「ありがとう……。次回はカゲっちくんの番よ。頑張りなさいよ！」

カゲっち：「も……もち……めちろん……ですよ……」↑硬直状態

ピカっち：「もう！カミカミじゃない！あたし……不安だわ……」

第２８話：「落ち着いて！君は一人じゃないよ！」の巻（前書き）

カゲっち：「今回は僕の出番……。緊張してきた……」

ヒート：「大丈夫だ。カゲっちなら出来るはずだ」

ピカっち：「あたしも応援しているわ♪」

カゲっち：「ありがとう。じゃあ早速第２８話プレイボール！！」

第２８話：「落ち着いて！君は一人じゃないよ！」の巻

ラプ先輩もみんなに負けないような技術の持ち主ですごいや！！

『次は僕の出番か……。みんなのようにちゃんと打てるかなぁ……』

僕はまだ新品の赤いバットを持ち、ヘルメットをかぶって、右バッターボックスにゆっくりと向かって行った。

その時、ベンチに座っていたキュウコン監督が僕に向かって、

「カゲっちはルーキーだから、まずはボールの速さに目を慣らしておこう。バッターボックスの外側に立って素振りをしていなさい」

と、言ってきた。

僕は言われた通りにバッターボックスの外側でバットを振る準備をする。

『えっと……。ヒート先輩は右手をバットのグリップ（根元）から離して持てって言ってたっけ』

バットを持つときは、右手が下で左手が上になるように持つのだが（左バッターは逆）、その時にグリップから離して持つようにして持つと良いらしい。

いわゆる、バットを短く持つということだ。

さて、これから打つマシンのボールのスピードはどれくらいなんだろう？

バットをグッと強く握って、視線をマシンへ真っすぐに向ける。

マシンからボールが発射された！！

ボールはあっという間に僕の横を通過していった！

『は……はや……。これを打つなんて……ヒート先輩たちすごいや……』

目慣らしは5球と言うことらしいけど、それまでに慣れるなんて無理だよ……。

とは言え、僕ももう立派な野球部のメンバーだ。それに「カントリー・リーグ」まで時間がそんなに無いことを考えると、ここで泣き言を言っている場合ではないのはわかる。

でも、やっぱり初心者にはヒット打つなんて無理だよ……。

僕は思わず下を向いてしまう。

「カゲっちくん。もしかして今僕にはムリだと思っているでしょ？」

ラプ先輩の声がした。あまりにも落胆している僕が気になったのかも知れない。

「……全く……。あなたはもう一人じゃないのよ。みんながそばにいるじゃない。それに見なさい」

ラプ先輩の視線の先には、満面ね笑顔を浮かべて、手を振っているピカっちの姿があった。

「あなたがここで泣き言を言ったり弱気になっていたら、ピカっちちゃんが不安になるんじゃないの？」

「それはそうですけど……。でもみんなのように打てるか不安なん……」

バシィィ！！

「うわぁ！！」

僕の言葉を最後まで聞かずに、ラプ先輩が僕に思い切りビンタをした。

僕はそのまま吹き飛ばれてしまう。

「ラプ！？」
「何しているんだよ！？」

周りは突然のことにビックリしている。

「……うぅ……。何するんですか……？……！？」

僕は驚いた。痛みをこらえながらゆっくりと起き上がると、ラプ先輩が怒った顔をしながら涙を浮かべていたのだ。

「どうしてわからないの？……ピカっちちゃんは……あなたを信じているんじゃないの？……どんなときでも……。あなたがいるから頑張って練習しているんじゃないの？あの子は誰よりもあなたを応援しているんじゃないの！！？」

……そうだ。僕はもうピカっちも一緒なんだ……。

「あなたはピカっちちゃんのために頑張ろうとしなきゃダメ！！みんなのために頑張らなきゃダメなの！！何でも一人だと思ったらダメなの！！」

ラプ先輩は大声で僕に語りかける。

「……今ここであなたのみんなを大切に想う……熱い気持ちを見せてあげなさい。例えバットに当たらなくても……！諦めたらそこでダメダメヒトカゲと認めるようなものよ……」

「わかりました……。僕……どんなことがあっても決して負けません！！ピカっちのためにも……！」

僕はまたダメダメヒトカゲになるところだった。

辛いことがあっても逃げちゃダメだ……。
みんながいるのに……。
ピカっちがいるのに……。

『僕はあさポケを優勝させたくて野球を始めたんだ！！例え速いボールが来ても食らいついてみせる！』

自然としっぽの炎が強く燃えていく。
瞳にも赤々とした炎が燃えはじめた！

「その心意気よ！“がんばりや”なあなたらしい一生懸命な姿見せてあげなさい！」

ラプ先輩の言葉で僕はまた目慣らしをしながら素振りをする。

そして5球の目慣らしを終えた後に、目をつぶって静かに深呼吸を数回した。

そのあとゆっくりと右バッターボックスに入った。

練習開始前にキュウコン監督が話しはじめる。

「カゲっちはルーキーだから変化球は使わず、まずはストレートだけにマシンを設定した。後は２０球を打てるからな。今までのみんなの姿を参考に自分の打撃の武器を見つけるんだよ」

「ハイ！」

僕らヒトカゲという種族は、あさポケナインの種族の中でパワーは低いと思う。でもすばやさはそれなりに高いと思う。

「ヒントをあげよう。キミのその俊足をいかに活かすかだよ」

そう。僕は俊足の持ち主だ。

ということは長打を狙うよりは、ボールをたたき付けてバウンドにして内野安打を狙う方が良いのだ！

「プレイボール！」

審判役のラプ先輩のコールでついに練習が始まった！！

まず、注目の1球目!!

バッティングマシンから僕に向かって勢いよくボールが発射された!

『何が何でも打ってみせる!』

僕は短く持った赤いバットを勢いよく振る!

「ストライク!」

しかし、ボールは当たらず空振りだった。

「やっぱり当たらないなぁ……」

僕は肩を落としてつぶやく。

「カゲっち!落ち着け!試合ならまだワンストライクだ!でも三つストライク取られるまでアウトにはならないからチャンスはあるぞ!」

僕の代わりにセカンドを守るヒート先輩が応援している。

「軽くバットを振ってボールに当てる気持ちでいいよ♪僕もピース兄さんにそう教わったんだよ」

サードのチックも笑顔で応援している。

「自分がムリなくバットが振れる範囲がストライクゾーンだぜカゲっち。打てないボールは手を出したらダメだよ」

レフトのラージキャプテンも教えてくれる。

「三つストライクを取られるまでアウトにはならない……。バットをムリなく振れたらストライクゾーン……。軽くバットに当てる気持ち……」

僕は一つ一つ復唱する。

次は2球目!!

『三つストライクを取られなきゃアウトにはならないんだ……。
今ワンストライクならまだ見送っても大丈夫……』

僕はバットを振らずに見送った。

「ボール！」

コールされたあと、歓声が響く。

実は外角の低めに大きく外れたのだ。

「その調子だ！あと三つボールにすれば、次の打者につなげるぞ！！慌てて打つ必要は無いからな！」

ヒート先輩が大きな声で教えてくれる。

「カゲっちくん！がんばって！あたしも応援しているわ！」

ショートのピカっちから黄色い声援が響く。

『慌てて一球目から打つより、もしかして何球か様子を見た方が

いいのかも……。上手くいけばフォアボールで出塁出来るし……』

僕の頭の中でいろいろな考えが浮かんでくる。

何かきっかけがほしいな。3球目!!

『ワンストライク……まだ見送れる』

僕はじっとしてボールを見送る。

「ストライク!」

今度はストライクだ。

『あの場所はストライクゾーンなんだ。覚えないといけないな……』

外角のボールだけど……、バットを振ると確かにムリなくバットが振れる。

「やっぱり初心者には難しいかな……。バットにボールが当たら

ねぇな……」

ライトを守るラッシー先輩がつぶやく。

「いや。悲観的にならない方が良いかも……。もしかしたらカゲっちは僕たちに全く見られない新しいタイプの選手かも知れない気がするよ」

センターのジュジュ先輩がそう言う。

「へぇ……。どんなタイプなんだ？」

ラッシー先輩は興味深々だ。

「次にわかるよ。」

ジュジュ先輩の言葉の意味がわからないのか、ラッシー先輩は首を傾げて“？”マークを頭に浮かべた。

さあ、次は４球目！！

『ツーストライクなら……打てない球以外は全部当てて見せる！

！』

僕は気持ちが熱くなる。

マシンからボールが発射された！！

『これは……打てそうな気がする！！それ！！』

僕は真ん中よりちょっと外角のボールをバットで振った！！

カーン！

打球はサードのチックの前でワンバウンドした。

『当たった……。ボールが見えた……！もしかしたら……打てるかも知れない！』

さっきの目慣らしから合わせると9球だが、はじめて目でしっかり捉えることができた。

「……やっぱりね……。僕が思った通りだ。彼はもしかしたら“

慎重打法”と“選球眼”の持ち主かも知れない」

ジュジュ先輩が確信を抱いたようだ。

“慎重打法”とは、バッターがじっと自分にとって打ちやすいボールやコースに来るまでじっと待ち続けることだ。

普通バッターは三振を嫌がるので、大抵のバッターはツーストライクになる前に打っていくタイプが多い。

あるいはラッシー先輩のようにアウトを恐れず初球から打っていく“積極打法”のバッターもいるくらいだ。

そういった意味から三振というリスクが多い“慎重打法”は敬遠されがちだが、実はこの打法は三振を恐れず相手ピッチャーにたくさんボールを投げさせることでボールのスピード、変化球の種類、キレの良さを知ることが出来るメリットがある。

“選球眼”はストライクとボールを見極めたり、絶好球を見極めたりする技術だ。

この技術を持っていると例え初球で無くても一球でヒットを打つことが出来るようになる。

「でもカゲっちはまだボールについていくのがやっとだぜ？ただ単にバットが出なかっただけじゃ……」

ラッシー先輩が半信半疑だ。

「いや、あいつはもうボールに慣れてきたようだぜ。表情が自信に満ち溢れている」

ヒート先輩が話す。

さあ、次は5球目！！

『これは……打てる！！えい！！』

バットは真ん中のボールに当たった。

コーン！

打球はフラフラとセンターの前に飛んで行く。

ジュジュ先輩が思い切り前進するが、間に合わない！！

ポトリ……。

打球は芝生の上に弾んだ。

「やった……！打てた！！打てた！！ヒットだ！！」

僕はうれしさのあまりバッターボックスでジャンプする！！

「1球目のときから比べると、落ち着いたな。偉いぞカゲっち！」

ヒート先輩がグーサインをする。

「ヒート先輩が三つストライクを取られなければアウトにならないって言ってましたし、ラージキャプテンがムリなくバットが振れる範囲がストライクゾーンだって言ってくれたので……。もしかしたら慌てて初球から打つより、本当に自分が打てる球が来るまで待つ方がいいと思いました！！」

僕はうれしさを爆発させる。

「うん。それがキミの打撃の武器だよ。ヒットを打ちたいと思うばかり、何でも打ちに行くより、相手ピッチャーの球をよく見ていくと良いよ」

ジュジュ先輩が笑顔だ。

「よし。その調子だ。あと15球も頑張れよ」

ヒート先輩も応援する。

「カゲっちくん。頑張ってね♪」

ピカっちも手を振ってくれる。

僕にはみんながそばにいてくれる。

決して一人じゃないんだ!!

よし！この調子で練習頑張るぞ！！

第２８話：「落ち着いて！君は一人じゃないよ！」の巻（後書き）

カゲっち：「そうだ。僕にはみんながいるんだ。弱音を言うとピカっちが不安になるんだ」

ピカっち：「そうね。みんなのためにももっとがんばってね♪」

カゲっち：「うん！次回も頑張るよ！」

第２９話：「熱い気持ちをバットに込めて……！」の巻（前書き）

カゲっち：「今回も僕の練習の続きだね！がんばるぞ！」

ピカっち：「頑張って！！あたしにカッコイイところ見せてね♪」

カゲっち：「うん！それじゃ第２９話プレイボールだよ！」

第２９話：「熱い気持ちをバットに込めて……！」の巻

たくさんのアドバイスのおかげで５球目ではじめて打ったヒット！！

その感覚を忘れずに、練習を頑張るぞ！

次は６球目！

『さっきゴロを打ったのを第一打席。そのあとヒットを打ったのを第二打席、だから次は第三打席だと考えよう……。まず初球は見送った方が良いかな』

そんなことを考えていると、マシンから勢いよくボールが発射された！！

『もうこれは、左バッターボックスに向かって飛んでいくから……ボール球だ！』

僕は赤いバットを振らずじっと見送る。

飛んできたボールはストライクゾーンから大きく外れた。

「ボール！！」

審判役のラプ先輩のコールが響く。

「その調子だよカゲっちくん。ボールを見続けることでもっと絶対に打てる球が見つけられるはずだよ」

センターのジュジュ先輩が緑のグローブを叩きながら教えてくれる。

『なんだかちゃんと目でボールが見える！！後は、ヒットを打てそうなボールが来るまで待っていよう……』

次は7球目！！

『カゲっち……良いぜその表情。燃えてきたようだな。一打席一打席を大切にしようという気持ちが伝わってくるぜ。“選球眼”か……。ボールに対する集中力が無ければ出来ない技術だぜ』

ヒート先輩はセカンドを守りながらそんなことを考えていた。

『例え打てなくてもいい。次の打者にいかに“つなぐ”かだけ考

えよう。そのためにもフォアボールで塁に出ることは大切なはず！』

マシンから速いボールが発射された！

『まだだ。まだワンストライクにもなってない！』

僕は赤いバットを振らずにじっと球を見送った！

「ボール！！」

判定のコールのあと、ナインの声が響く。

「あれを見送るなんて……。際どいコースなのに……」

一番驚いたのはラプ先輩だった。

無理もない。先ほどの自分の練習の時は、同じような際どいコースをファールにしていたのに、このヒトカゲはじっと見送ったのだから。

『野球の試合はやったこと無いけど、でも試合だと考えれば良い

んだ……。今これでノーストライク、ツーボール。あと二回ボールを選んだら出塁出来る』

僕は赤いバットで一度トンと軽くホームベースを叩く。

『さあ……来い！』

しっぽの炎がまた勢いよく燃えだす。

さあ、８球目が発射された！

『まだだ！まだストライクは取られてないから見送れる……！』

僕は赤いバットを振らない。

「ボール！！」

ラプ先輩の声が響く。

「すげぇ……。なんて集中力だ……。まだ1球しか空振りしてい

ないぜ……」

ラッシー先輩が驚きを隠せない。

「もし、ピッチャーが投げていてあんなに際どいコースを見送られたら、ストライクゾーンに投げるしかねぇぜ。厄介な相手に思われるぜ」

ヒート先輩も驚いている。

『これでノーストライク、スリーボールだ。次にボールを選んだら出塁出来る』

さあ、９球目！！

『まだ見送れる！たくさんボールを見て目を慣らそう！』

僕は赤いバットをじっと持ったまま、見送る。

さあ、判定は！？

「ボール！！」

『やった！フォアボールだ！これで次の打者に“つなぐ”ことが出来た！』

もし、試合なら第一打席は三ゴ、第二打席は左安、第三打席は四球となる。

つまり、二打席も次の打者に“つなぐ”ことが出来たのだ。

『まだ9球しかボールを見ていないのに、あのボールの数の多さ……。そうだ！良いこと考えた！』

ジュジュ先輩が何か思い付いたようだ。

そして、

「カゲっち！キミはヒットを打つことよりとにかく塁に出ることを考えれば良いよ！」

ジュジュ先輩が僕に大きな声で教えてくれた。

「はい！わかりました！」

僕も大きな声で返事をする。

『やっぱり僕の考えていたことは間違っていなかったんだ。よし、もっと頑張るぞ！』

僕は赤いバットを持って構える。

「何言っているんだよ。それじゃヒットを打つ練習の意味が無いじゃねぇか」

ラージキャプテンがやや怒り口調だ。

確かにジュジュ先輩の考えじゃ打撃練習の意味が無くなる。

「ラージ。僕ある作戦を考えたんだ！」

ジュジュ先輩がラージキャプテンに話す。

「ん？どんな作戦なんだ？」

「いいかい？ゴニョゴニョゴニョゴニョ……」

ジュジュ先輩がラージキャプテンに耳打ちする。

「それ……結構良い作戦かもしれない……。でもそんなこと、お前のプライドが許さないんじゃないのか？すばやさで負けたくないと言うプライドが……」

ラージキャプテンはその作戦に驚いた。

「良いさ。それでチームが良くなるって言うならね」

一体ジュジュ先輩の作戦はいかなるものなのか？

さて、次が１０球目だ。

『よし。ジュジュ先輩の言う通り、ちゃんとボールを見よう。しっかり打てるボールを探そう』

僕は赤いバットをしっかりと構える。

マシンから速いボールが発射された！

『これは……！打てる！打てる！それ！！』

カーン！！

打球はサードのチックの頭の上を越えてワンバウンドした！

「やった！！またヒット打てた！」

僕はジャンプして喜ぶ！！

「ちゃんと打てるボールは打ち返す。立派だわ。その調子よ♪」

ラプ先輩がウインクしてくれる。

さあ、続いて１１球目！

『次は際どいコース……。見送ってみよう』

僕は赤いバットを振らずにじっとボールを見送る。

「ストライク！」

ラプ先輩がコールする。

「あちゃ～。ストライクだったんですね。一瞬迷いましたよ」

僕は苦笑いする。

「際どいコースはね。でもああいったボールに惑わされちゃダメよ。ツーストライクでも無いのにあれをムリに打ってアウトになったらもったいないわ」

実際三振をあまり多く取らないピッチャーはああいったボールを投げて、アウトにしていくらしい。

「要するに、バッターボックスの中では焦っちゃダメってことよ」

ラプ先輩がアドバイスをしてくれる。

さあ、１２球目だ！！

「カゲっちくん！頑張って～！」

ショートのピカっちが応援してくれる。

『ありがとうピカっち。僕は君のためにもっと頑張るよ！いつでも応援してくれている君のために！』

僕はもう一度しっかりとバットを短く持って構える！

『僕は一人じゃないんだ！みんながそばにいる！だから僕はみんなのために出来ることを全力で頑張るだけだ！』

どんどん気持ちが熱くなる！
この小さい体に溢れんばかりの熱い気持ちがバットに伝わりそうだ！

『もう……何でも打てる！』

僕は飛んできたボールに対して自然と反応して……、

カーーン！！

思い切りバットを振り切った！！

打球は青空に吸い込まれていく！

センターのジュジュ先輩とレフトのジュジュ先輩がバックしていくが……、

カシャーーン！

打球はそのままフェンスに直撃した！

思わず内野手のチコっち、ピカっち、ヒート先輩、チックが僕の方を見る。

「カゲっち……」
「カゲっちくん……」
「カゲっち……？」
「カゲっち……！」

その時僕の周りに炎が燃えているように見えたという。

『そして僕は……努力をバカにするような人たちには絶対負けない！！人の夢をバカにするような人に負けない！！』

ヒート先輩から聞いたピースさんの話……。

そして、“あの事件”でブースをバカにしたザングースやヤルキモノ！

絶対に努力や夢を壊すような人には負けない！！

次は１３球目！！

『努力はウソつかないことを証明してみせる！それ！』

カーン！

打球は一二塁間を破ってライト前に転がる！

『しっかりとボールが見えているようだな。一瞬たりも手を抜かないで練習する。それがカゲっち……キミの良いところだ』

ベンチのキュウコン監督がフッと笑う。

燃え上がって来た！１４球目！！

『これはボールだ。振らなくていいな……』

僕の横をボールが通過する。

「ボーール！」

僕は判定を聞いてももう笑顔にならない。

「カゲっち真剣ね……。そんな表情を見たのいつ以来かしら……」

ファーストのチコっちが言う。

「さすがあたしの大好きなカゲっちくん♪やれば出来るのよね♪
カッコイイ♪」

ショートのピカっちはもう“メロメロ”だ……。

次は１５球目！

僕はまたバットを振らないで見送る。

「ボーール！」

熱い気持ちが込み上げるが、それでも落ち着いてじっくりと見送ることが出来た。

続いて１６球目！！

『打つぞ！！気持ちをぶつけてみせる！！』

カーーン！！

打球が左中間に飛んでいく！！

「オーライ！」

先に追いついたのはレフトのラージキャプテンだ！

そのままキャッチする。

「捕られたけど、良い当たりを飛ばすなぁ。感心するぜ」

ラージキャプテンがうれしそうに話す。

次は17球目!!

『どうしたら塁に出られるか……。やっぱりボールを見ることなんだね』

僕はそのままボールを見送った。

「ストライク!」

今度はストライクのようだ!

僕はもう一度深呼吸をする。

さあ18球目!!

『ヒットなんていらない。僕の役目はいかに“つなぐ”ことが出

来るかなんだ！これはボールだ！』

僕はまたバットを振らない！

「ボーール！」

このマシンは不良品なのではないのか？という声が聞こえそうなくらいストライクゾーンにボールが飛んで来ない。

でも、実践的なマシンらしいので不良品ではないのだ。

『本当にボール球を振らないな……。気持ち一つであんなに変わるもんなんだな……。フッ……。俺も見習わなきゃならないな……』

ラッシー先輩がうれしそうにする。

さあ１９球目！！

『一人はみんなのために！みんなは一人のために！』

僕はその言葉を何度も頭の中で復唱する。

『これは……！打てる！えい！！』

僕は赤いバットを振る！！

コーーン！

軽く当てた打球は一塁ベースの白線上に落ちる！

「フェア！」

もう練習を始めた頃とは僕は意気込みが違う。

まるで気持ちの勢いがバットに伝わっているようだ。

さあ、いよいよ最後の２０球目！！

『これは打てない！』

最後、僕は自信に満ち溢れた気持ちでそのボールを見送った。

「ボーール！」

最後もボールは、ストライクゾーンから大きく外れた。

「フゥー……。緊張した……」

はじめての打撃練習を終えると、僕は力が抜けてバッターボックスで座り込んだ。

「ご苦労さま。よく頑張ったわね。あたしたち経験者にも負けていなかったわよ」

「へへへ……。わぁぁぁ！」

ラプ先輩は何と優しく僕を抱えると自分の背中に乗せたのだ。

「ウフフ。驚いたときのカゲっちくんの表情……かわいいわね。ピカっちちゃんもこんな優しい彼氏がいて幸せね」

そういうとそのままベンチのキュウコン監督の方に向かった。

そのときピカっちは……？

「もうカゲっちくんてば……。やっぱりかわいいし、素直だし、頑張りやさんだし……！あたしのために頑張るなんて……とにかくしあわせ～♪」

……周りのメンバーの目が点になるほど、すごいうれしそうに顔を真っ赤にして、さらに、ほっぺたの赤い電気袋から微量の電気を“ほうでん”していた……。

ちなみに僕の打撃結果は、空振、ボール、ストライク、三ゴ、中安、ボール、ボール、ボール、ボール、左安、見逃し、左中安、右安、ボール、ボール、左飛、ストライク、ボール、一安、ボールだった。

「ボール球をしっかりと見極めて、打てるボールをしっかりと当てる。良いじゃないか。はじめてとは思えない打撃を見せることが出来たな。しっかりとこれからも練習すると良いだろう」

キュウコン監督も感心しきっている。

「次はピカっちと交代だ」

「ハイ！」

僕は元気よく返事した。

「次はあたしね♪カゲっちくんがあんなに頑張っていたから見習わなきゃ♪」

ピカっちはうれしそうに準備を始めた。

笑顔がかわいいピカっちの打撃練習はどうなるのか？

次回へ続く！！

第２９話：「熱い気持ちをバットに込めて……！」の巻（後書き）

カゲっち：「緊張したぁ……」

ヒート：「すげぇよカゲっち！！はじめてなのによく頑張ったな！！」

カゲっち：「いえいえ。みんながいたから頑張れたんですよ。それにもっと練習しなきゃいけませんからね」

ピカっち：「次回はあたしの出番ね。カゲっちくんみたく出来るかな？」

カゲっち：「僕も応援しているよ！頑張ってね♪」

第３０話：「練習は楽しく頑張ろう！」の巻（前書き）

ピカっち：「今回はあたしの出番よね。女の子のあたしにちゃんと練習出来るのかな？」

チコっち：「大丈夫よ。あなたは彼氏のダメダメヒトカゲよりしっかりしているから」

カゲっち：「ダメダメヒトカゲなんて言わないで！！（泣）」

ラプ：「さて、練習はどうなるのかしら。第３０話プレイボールよ！」

第３０話：「練習は楽しく頑張ろう！」の巻

はじめての打撃練習はものすごく緊張しちゃった！

打撃練習を終えた後、僕は再び赤いグローブを持ち、セカンドの守備へと戻った。

「なかなかやるなぁカゲっち！ピカっちが打撃練習をする間だけど、俺と二遊間だ！一緒に頑張ろうな！」

僕はそのとき、一瞬“オーバーヒート”しそうだった。

だって僕の憧れのヒート先輩とまさか二遊間が出来るなんて夢じゃないのかなって思ったんだもん！！

僕は目をキラキラさせながら、

「こちらこそよろしくお願いします！」

と、多少緊張しながらもあいさつをしたのだった。

だか、他にも目をキラキラさせたポケモンがいる。

次に打撃練習をするピカっちだ。

『打撃練習をしていたときのカゲっちくん……。一生懸命な姿がものすごくかっこよかったわ……。ますます惚れちゃった……／／／／』

僕の走りゆく姿を見て、ピカっちは顔を真っ赤にして、ますます僕に“メロメロ”状態になっていた。

『次はあたしの番ね♪カゲっちくんみたくちゃんと打てるといいな～♪』

そしてまだ新品の黒くて、グリップ（根元）が赤いバットを持ち、ヘルメットをかぶってバッターボックスに向かう。

「ピカっちもはじめてだから目慣らしを5球投じるぞ。さっきカゲっちと同じように素振りをしていると良いだろう」

キュウコン監督が簡単にアドバイスをする。

「はい！わかりました」

ピカっちも元気よく返事をする。

そんなこんなで目慣らしが始まった。

バッティングマシンからボールが発射される！！

『女の子のあたしでも頑張れば男の子に負けないくらい野球が上手になれるはず。……それにカゲっちくんだって一生懸命頑張っていたから、あたしにも出来そうな気がする』

ピカっちはバッターボックスの外側で一生懸命素振りをする。

同じことを5球分こなしたあと、いよいよ練習のために右バッターボックスにゆっくり入った。

ピカチュウという種族は、僕たちヒトカゲよりもさらにすばやさが高いのが大きな特徴だろう。

また、すばやさを活かした技の数々も天下一品だと言える。

ただ体が小さい分、パワーが低くなっているため長打はあまり期待出来なくなる。

「ピカっちもカゲっちと同じように、足の速さを活かしたヒットを狙うと良いだろう。転がしたり、たたき付けたりな」

「はい！」

キュウコン監督はピカっちにアドバイスを送った。

「プレイボール！」

ラプ先輩がコールしてピカっちの練習が始まった！！

まず注目の１球目！

「あたしに打てるのかな？……すごい緊張してきた……」

ピカっちは何度も深呼吸をする。

その時、

「ピカっちがんばってこっちに打ってぇ！本当に出番が少なくてみんなに忘れ去れるわ！」

ファーストのチコっちが大声でピカっちを応援している。……いや、あれはむしろ自己アピールか……。

「ピカっち！がんばって！キミなら打てるよ！」

僕も大声でピカっちを応援する！

「ピカっち！」
「頑張れ！」
「ピカっちちゃん！」

なんだかあさポケナイン全員が、これまでよりさらに大きな声で緊張しているピカっちを応援するような気がする。

「ありがとう……。あたし頑張るわ！」

ピカっちは勇気をもらえたのか、みるみるうちに彼女の象徴とも言える元気を取り戻していく。

さて、そんなピカっちにマシンからボールが発射された！

『バットに当たるかな？えい！』

ピカっちが軽くバットを振った。

「ストライク！」

しかし、ボールには当たらず空振りとなった。

その瞬間グラウンド中に『あ～！』といったため息に包まれた。

『やっぱり当たらない……。でもまだ1球目よね。次は打てるように頑張ろう！』

ピカっちは自分のバットを見てそう感じた。

さあ、続いて2球目!!

グラウンド中にピカっちを応援する声が響き渡る。

そんな中ボールがマシンから発射された!!

『今度は当てよう!えい!』

ピカっちはバットを振る!

「ストライク!」

またもため息にグラウンド中が包まれていく。

彼女が打とうとした球は外角に大きく外れたボール球。

当然バットにボールは当たらず、またも空振りとなったのだ。

ピカっちは判定を聞いた瞬間にガックリと下を向く。

『やっぱり当たらない……。あたしにはボールに当てるのはムリなのかな……』

それでも彼女はバットをギュっと握る。

『ダメダメ！何言ってるのよあたしってば！みんながこんなに応援してくれているのに！弱気になったらいけないわ！』

ピカっちはまた顔を上げる。

その視線の先には自分を応援しているみんなの姿があった。

次は3球目！！

『みんなの応援に答えるためにもお願い！バットに当たって！』

ピカっちはバットを振った！

「ストライク！」

しかしピカっちの思いもむなしく、またもや空振りとなってしまった。

「そんなぁ……。どうしてバットに当たらないの？」

ピカっちは今にも泣き出しそうだった。

「やっぱりあたしにヒットは打てないよ……。みんな応援してくれていても出来ないことは出来ないのよ……」

ピカっちがまた弱気になっていく。

「ピカっちちゃん……。そんな弱気にならないで……」

「楽しそうに練習してくれよ……。なんだかこっちまで楽しくなるから……」

「僕たちがアドバイスするから頑張ろう」

「お願いだからバットを持ってくれよ……」

先輩たちが精一杯励まそうとする。

「いや！もうこれ以上練習なんてしたく無いわ！！」
「何言っているのよピカっち！！」

ピカっちは自信がなくなってしまっている。
チコっちがいくら大丈夫だと励ましても、ピカっちは練習したく無いと弱音を言う。

「カゲっち！！あなたもなんか言いなさいよ！！ピカっちが苦しんでいるのに何も言わない気なの！？」

チコっちがかなり興奮した感じで僕に言う。

「そうだね。本当は僕が励ましてあげないといけないよね……」

僕はゆっくりとピカっちに近づいていく。

「カゲっちくん……助けて……。あたしどうしたらいいの？」

ピカっちは涙をボロボロ流している。

僕はどうやって彼女を励ましたら良いのかわからなかった。

無心で彼女の右手を優しく握ってあげた。

そして、

「ピカっち……。そんなに不安がらないで……。僕がそばで見ているから……。それにキミはダメダメな僕と違って落ち着けば必ず打てるはずだよ」

一言一言、彼女の瞳を見つめながら、優しく励ます。

「カゲっちくん……。それでも、あたし自信が無いの……。もし1回も打てなかったらきっとチームの足を引っ張るかも知れないと思うから不安なの……」

ピカっちは僕に抱き着きながら話す。

それを見ていたナインが顔を赤くしていく。

彼女いわく、この抱き着いているときが一番気持ちが落ち着くらしいのだ。

「ピカっち……。本当に辛いんだね。僕もさっきすごく不安だっ

たよ。でも、あんなに頑張れたのはピカっちが手を振って応援してくれたおかげだよ……。それにヒート先輩たちがアドバイスをしてくれた……。その時思ったんだ。“僕は一人じゃない”ってね。キミも僕やナインのみんなが優しく見守っているから一人じゃないよ。だから元気出して……」

僕はピカっちの頭を撫でながら話す。

「カゲっちくん……。あたし頑張ってみる……。すごく不安だったけどカゲっちくんに抱き着いていたら、なんだか頑張れそうな気がしてきた……」

そう言うと彼女は僕から離れて立ち上がる。

「みんな……。ごめんなさい。迷惑かけて……。あたし、もうちょっと頑張ってみます……」

すると、拍手が聞こえてきた。

「ああ！ピカっちが楽しく練習していると俺もみんなも楽しくなれるんだぜ。だから楽しくなれる俺たちもピカっちを応援するぜ！」

ヒート先輩が笑顔で話す。

「ありがとうございます！そうですよね。楽しいのが一番ですよね！」

ピカっちはいつもの楽しそうな表情になる。

それからしっかりとバットを握る。

『あたしが楽しく練習すれば、みんなも楽しく練習できるってすごいことよね……。もしかしたらこれがあたしの打撃のヒントなのかしら？』

右バッターボックスの外側でピカっちが素振りを何回かする。

そして、ゆっくりと右バッターボックスに入ったのだった。

第３０話：「練習は楽しく頑張ろう！」の巻（後書き）

ピカっち：「驚いたわ……。先輩たちがあたしの楽しそうな姿で練習を楽しく出来るなんて……」

カゲっち：「苦しい気持ちのときにピカっちの楽しそうな姿を見ると、僕も頑張れそうなんだ」

チコっち：「みんなも応援しているわ。だからもう弱音なんて言わないでね」

ピカっち：「ええ。次回は頑張るわ」

第３１話：「勇気を与える一打！」の巻（前書き）

ピカっち：「今回もあたしの練習の続きね。頑張るわ……」

カゲっち：「僕も応援しているよ！」

チコっち：「ピカっちの活躍を読者のむなさんも祈ってね。第３１話プレイボールよ！」

第３１話：「勇気を与える一打！」の巻

ピカっちはすごく不安だったんだね。
でもキミには僕やみんながいるよ！
だからみんなと夢を追いかけるのを諦めたりしないで！

ピカっちが右バッターボックスに入ると、練習が再開された。

『みんなはあたしが楽しく練習している姿を見て、頑張れるって言ってた。じゃあその楽しいと思う気持ちを、忘れないようにしなきゃ……。どんなときでも野球を楽しむ気持ちって大事なのかも』

ピカっちは昔から何をするにもすごく楽しそうにしていることが多かった。

僕やチコっちときのみを集めるのにピクニックをするときも、

学校で授業を受けるときも、

あと、僕が大泣きしたり、ドジをしたときでも楽しそうにお世話をしていた。

そしてあさポケ野球部に入部してからも、はじめての野球の練習を楽しそうにしていた。

むしろ、彼女がさっきみたく悩んだりしたり姿はあまり見たこと無いような気がする。

『あたしが打って喜べば、みんなさらに楽しくなるかも知れない！だからやめるなんて言わないわ！』

ピカっちはギュッとバットを握る。

そんな彼女に４球目が発射された！

『さっきのように色々悩むのはやめよう。とにかく楽しまなきゃ♪』

ピカっちがニコっと笑いだす。

そして、バットを振った！！

「ストライク！」

しかしバットはまたもボールには当たってくれなかった。

『あら？また当たらなかったわ？……なんでかしら？』

ピカっちは首を傾げる。

『まあ良いわ♪次打てれば良いんだから。それに、あたしが打てなくてもカゲっちくんがいるから、あたしはもっと楽しく練習しよう♪』

ピカっちはかなりリラックスした表情を見せて、ニコニコ笑いはじめる。

『あたしはカゲっちくんをサポートすることだけ考えれば良いわ♪』

どうやらピカっちは“自分らしい”打撃を目標として決めたようだ。

楽しそうにしてチームを明るい雰囲気にし、なおかつ僕のサポート役に徹する打撃に……。

『うん。それでやってみよう♪無理にヒット打つことなんて考え

なくて良いから楽な気持ちになれるわ♪』

さあ、決意を新たに次が5球目!!

マシンからボールが発射された!!

『楽な気持ちで楽しく……。えい♪』

ピカっちはバットを振った!

コン!

「やった……当たったわ!」

あ!!ピカっちがはじめてバットでボールを当てることが出来た!!

そのボールはバッターボックスの外側に転がった。

「ファール!!」

もちろんながら判定はファールなのだが、4球連続で空振りだったピカっちにとっては大きな手応えだったようだ!

「当たった……。当たったわ……！カゲっちくん、ちゃんと見てた！？」

ピカっちはあまりにもうれしかったのか、クルクルと回転し、赤いほっぺからビリビリと電気を“ほうでん”している。

「ちゃんと見てたよ！良かったね！頑張って練習していれば、きっと打てるようになれるって信じていたよ！」

僕もセカンドの守備位置でジャンプして喜んじゃった！
だって苦しんでいる友達や仲間があんなうれしそうにしていると、こっちまでうれしくなっちゃうんだもん！

いや、僕だけじゃない。周りを見ると、チコっち、ヒート先輩、チック、ラージキャプテン、ジュジュ先輩、ラッシー先輩、ラプ先輩……。

みんなが笑顔でグローブを叩いたり、ジャンプしたり……、とにかく体全体で目一杯喜んでいた！！

まだ完全なヒットじゃないけど、ヒットを例え１００本打つことよりもすごくすごく“大切な喜び”を僕らは感じていた。

「この調子で頑張れば、きっとヒットを打てるようになるよピカっち！！」

僕は歓声が止まらないグラウンドで、大きな声で彼女を応援した！

「ええ！頑張っちゃうわ♪」

ますますピカっちは笑顔になっていく。

やっぱりピカっちの楽しそうな姿……かわいいなぁ……♪

さあ、次は６球目！！

『やっぱり自分がヒット打たなきゃって感じたらダメみたいね…。あたしはカゲっちくんのサポート役♪カゲっちくんと２匹で協力すれば良いのよね♪』

ピカっちは、自ら名付けたおもちゃのバットを静かに構える。

『みんなを喜ばせたら、それで良いわ！えい♪』

ピカっちはバットを振った！

コン！

打球はコロコロと弱いゴロでファーストのチコっちの方に転がっていく。

「やったわ。久しぶりのゴロ……。キャッチ～♪」

チコっちは前進しながら、緑のファーストミットでそのボールをつかんだ。

「ピカっち～♪もっとここに打ってね～。ここからは“チコっち劇場”よ！見ていなさい！」

そう言いながら、チコっちは頭のはっぱをグルグル回す。

それにしても“チコっち劇場”って……。（汗）

そんなにキミは目立ちたいのかい？

キミは昨日のランニングのときからずーーーっと目立っているん

じゃないのかな。（汗）

と僕は思ったのだが、面倒なことになりそうなので、口に出すのは止めておこう。

さて、次は7球目だ。

『そういえば、監督はあたしのような足が速くて力の無い選手はボールを転がして打てば良いって言ってたわ……。じゃあさっきみたく打てれば……』

ピカっちは右バッターボックスの中で先輩や監督の色々なアドバイスを思い出していく。

そして、飛んできたボールに対してバットで当てにいった！！

コーーン！

コロコロと打球が僕とチコっちの間に転がっていく！

僕は左に移動しながらボールをキャッチしようとしたが……。

……？（汗）

おかしいな……。ちゃんとグローブでキャッチしたはずなのに……。

僕はキョロキョロと周りを見渡す。

するとその時、聞き覚えのある声がした。

「カゲっち。ボールはこっちよ♪あたし……目立つためには手段を選ばないわよ♪ウフフフ♪」

……チコっち。手段を選ばないってどういうことなの？

まさかとは思うけど、今のようなファーストとセカンドの間の打球をむりやり取りに行くとか言うんじゃないでしょうね……？（汗）

そのうち嫌なことが起きそうで不安だ……。（汗）

続いて8球目！！

『あたしが打てなくたって、みんながいる。あたしはあたしらしく頑張れば良いわ！えい♪』

ピカっちがバットを振った！

カーーン！

今度は速いゴロが三遊間に転がっていく！

「これは捕れそう！えい！」

サードのチックがおもいっきりボールに飛びついてキャッチした！

「へへへ♪体が汚れちゃったけど、ちゃんと捕れたよ♪」

確かにチックの体は土で汚れている。

「でもそれだけ全力で練習しているってことよ♪汚れた分だけ野球の技術は身についているわ♪」

ラプ先輩がうれしそうに話してくれる。

「ピカっちも良い当たりのゴロが多くなって来たよ。チックや他のみんなが一生懸命守備をしているからヒットになっていないけど、自信持っていいと思うよ！」

僕はますますピカっちを強く応援する。

「ありがとうカゲっちくん……。さっき抱き着いたおかげで気持ちがすごく落ち着けたから、きっとバットに当たるようになったわ……。だからあたし……カゲっちくんのために頑張るわ……／／／／」

ピカっちは僕の言葉に顔を赤くしている。

その姿を見るとますますかわいくて、僕はもっと応援したくなった。

さあ、９球目！！

『もうそろそろ打てそうな気がする♪カゲっちくんがいれば恐いことなんて無いわ！えい♪』

ピカっちがまたバットを振る！！

「ストライク！」

しかし、タイミングがズレたのかボールに当たらず空振りとなってしまった。

僕やナインのみんなは、ため息をする。
きっとヒットを期待していたのだろう。

「ドンマイピカっち！でもキミならきっと打てるよ！僕は信じているよ！」

僕は大きな声で応援する。

「がんばってピカっち！あたしも応援するわ！」

チコっちも真剣な表情で応援する。

グラウンド中で、「ピカっち～」「がんばれ～」「打てるよ～」と言ったような声が響く。

まるでみんなピカっちが打てるように祈るような気持ちだ。

さあ、頑張ってピカっち！１０球目だ！！

『みんなありがとう……。あたし１回もヒット打てないかも知れないけど、みんながついているから頑張れるわ！あたし負けないんだから！』

ピカっちが瞳をウルウルさせながら、バットを振る！！

みんなの思いを乗せておもいっきり！

カキーーン！

そのとき、今までで一番の快音が響いた！！

打球は速いゴロで三遊間を……破るのか！？

「もう一回捕ってみせる！それ！」

チックがさっきのように思い切り飛び込む！

……だが打球は……彼のシルバーのグローブでも届かず、そのまま三遊間を破ってレフトのラージキャプテンの元に転がった！！

「ワァーー！！」と歓声がグラウンドに響き渡る！！

「……ヒットだ！ピカっち見て！ほらヒットだよ！！やっぱりみんなの願いが届いたんだぁーー！！！！」

僕は興奮気味にその場ですごくジャンプしたり、グローブを叩いたりする！

「とうとうやったわね♪おめでとうピカっちちゃん♪これがあなたの初ヒットよ♪」

ラプ先輩がピカっちに声をかける。

「……ありがとう……。カゲっちくん、みんな……。諦めないで良かった……。なんだかみんなの力で打てたような気がする……。応援してくれたから……。あたしきっとこのヒットを忘れない……

…。だってこれが“努力”だと思うから……」

ピカっちは感動のあまり体が震えていた。

無我夢中で打った初めてのヒットの方向をじっと見つめながら……。

「そうね。でもあなたのヒットでみんなが盛り上がっているわ。きっとそれがあなたの打撃の武器よ。目に見える技術ではないけど、“ムードメーカー”と呼ばれているわ♪」

そう。実はこれが彼女の……ピカっちの打撃の武器だったのだ。

“ムードメーカー”。それは、例えチームが負けていて、みんなが元気を無くしているときでも、みんなを勇気づけるようなヒットを打つ選手のことだ。

まさにチームの勝利のカギを握る大切な役割がある。

「でもラッシー先輩の方が元気もあるし、チックくんのようにヒットをたくさん打てるわけでも無いわ……」

ピカっちは驚いてしまう。

「そうね。でもラッシーたちはヒット1本でここまでチームを勇気づけることは出来ないわ。みんなを大切に優しく見守る天使のような……あなただからこそ出来るのよ」

ラプ先輩の言葉に、顔を赤くするピカっち。

「天使だなんてちょっと照れちゃいます……。でもあたしカゲっちくんを見守る天使にはなりたいわ……」

ピカっちがチラっと、すごい喜んでいる僕を見る。

「それで良いと思うわ。それも立派な役割よ♪」

ラプ先輩の言葉に、ピカっちは大きくうなずいた。

さあ、１１球目！

『あたしにはみんなを元気にさせることが出来る！えい！』

ピカっちはバットを振った。

コーーン！

今度は僕の前にバウンドが飛んできた。

「難しい打球。でも落ち着いて捕るよ！」

僕はツーバウンドしてから、しっかりと打球をグローブでつかんだ。

「ピカっち。そんな感じでどんどん転がして良いぞ。足の速いキミなら内野安打に出来る打球もあるぞ」

キュウコン監督がベンチで、ピカっちを褒めている。

次は１２球目！

『ちゃんとバットに当たるかな？えい♪』

ピカっちがバットを振る！！

コン！

打球は後ろのバックネット側に飛んでいった。

「ファール！！」

ラプ先輩がコールする。

「ファールになっちゃったのね。でも次は打てそうだわ♪」

ピカっちは楽しそうに話す。

「僕もそう思うよ。だってボールがバットに当たるようになっているんだもん！絶対打てるよ！だから頑張ってピカっち！」

僕はピカっちを精一杯応援する！

次は１３球目！！

『カゲっちくん見ててね。あたしはカゲっちくんのために打つんだから！！』

ピカっちがバットを強く振った！

カキーーン！

快音残して打球がライナーで飛んでいく！！

センターのジュジュ先輩が俊足飛ばして前進して来るが、さらにその前でワンバウンドした！！

ワァァァァ！と歓声が響く！

「うん。なかなか良い当たりだね。頑張ればピカっちちゃんもこんな当たりがたくさん打てるよ」

ジュジュ先輩が笑顔でピカっちを褒める。

次は１４球目！！

「ピカっち頑張って！あなたとあたしやカゲっちの小さい頃からの友情の強さを見せてよ！！」

ファーストのチコっちが強い口調で応援する！

ピカっちはその言葉にうなずく。

『そうね。いつでもあたしたち一緒だったよね。例え辛いことがあっても3匹で励ましたから乗り越えられた……。あたしたち3匹の強い友情を見せるわ！』

ピカっちはバットを振った！

カキーン！

あっという間に速いゴロが三遊間を破って、センターのジュジュ先輩の前に転がった！！

「やったわ！！2回連続でヒットになったわ！！」

ピカっちは笑顔で何度もジャンプして喜んでいる！

次は１５球目！

『あたしはカゲっちくんやチコっちちゃん……。そしてチックくんと一緒だから頑張れる。だから仲良しのみんなのサポート役で良いの……』

ピカっちは色々なことを考える。

『これも“つなぐ”ことになるよね？あたし何かわかったような気がするわ！』

ピカっちがスッキリとした表情を見せて……、

コーーン！

バットを振った！

打球はコロコロとショートのヒート先輩の前に転がった。

「それ。どんなときでも練習は手を抜かない。そうすれば技術は身につくぜ」

赤いグローブでボールをしっかりつかみながら、そう言う。

次は１６球目！

『あたしはみんなのためになるなら、目立たなくたって、ヒット打てなくても良いわ！えい♪』

ピカっちはバットを振った！

「ストライク！」

だけどバットにボールは当たらず、空振りとなった。

それでも彼女は楽しそうにしている。

「空振りしちゃった♪でもまだ頑張るわ」

彼女はいつものような笑顔で頑張ろうとする。

さあ、１７球目！

『今度は当たるかな？えい♪』

ピカっちはバットを振った。

コーーン！

コロコロとボールがファーストのチコっちの前に転がる。

「またあたしの出番ね！キャッチするわ♪」

チコっちが前進してゴロを捕ろうとしたが……、

パスン！

なんとボールを弾いてしまった！！

ボールは白線を越えて、外側のファールゾーンに転がる……。

「ちょっと！！待ちなさいよ！“チコっち劇場”は始まったばか

りよ！！あぁ～！イライラする！！！」

ドンマイチコっち……。だけどそこまで怒らなくても……。もうちょっと落ち着きなよ……。（汗）

記録はファーストのエラー（一失）だ。

気を取り直して次は１８球目！

ピカっちがバットを振る！！

コン！！

「ファール！」

打球がバックネット側に飛んでいったから、これはファールだ！！

「とっても不思議な気分だわ……。最初はあんなに空振りしていたのに……。応援のパワーってすごいのね……」

ピカっちがバットを見ながら驚きの表情を見せる。

「そうね。でもそんなあなたにあたしたちは勇気をもらっている……。これで一人じゃないってことわかるでしょ？」

ラプ先輩が話しかける。

その言葉にピカっちが納得した感じでうなずいた。

さあ、１９球目！

『あたしは一人じゃない。カゲっちくん、チコっちちゃん、チックくん、ラプ先輩、ヒート先輩、ラッシー先輩、ジュジュ先輩、ラージキャプテン、キュウコン監督……。みんながいる。だからどんなことにも負けないわ！』

ピカっちがバットを振った！！

カーーン！

打球はライトのラッシー先輩の前に飛んでいくが、

『ピカっちがあんな一生懸命なんだ！俺もピカっちの頑張りに負けないように全力で練習するぜ！』

ラッシー先輩が前にダイビングしながら、赤いグローブでしっかりキャッチした！！

その瞬間、グラウンドにワァーー！！と言う歓声と、拍手が響く！

みんなますます全力で練習に取りくんでいるようだ！

さあ、最後の２０球目！！

『あたしはみんなの夢を乗せて頑張るだけ！！見ててカゲっちくん！！』

カキーーン！！

ピカっちのバットから快音が響く！

打球は左中間を真っ二つに破るライナーとなった！！

「良かった。ヒット打てて……。ウフフ……楽しかったぁ♪」

ピカっちは満足そうな表情をする。

……パチパチパチパチ。

グラウンド中に拍手の音が響く。

「ピカっちお疲れ♪」とか「よく頑張ったな！」とか「すごいよ！」といった声がたくさんする。

「みんな！ありがとう……！あたし……うれしいわ……」

その言葉を背に彼女はキュウコン監督の元に歩み始めた。

ピカっちの打撃結果は、空振、空振、空振、空振、空振、捕邪、一ゴ、一ゴ、三ゴ、空振、左安、二ゴ、捕邪、中安、中安、遊ゴ、空振、一失、捕邪、右直、左中安だった。

「ピカっちはみんなと違ってヒットは少ないが、良い当たりがみんなの全力プレーで捕られたりしていたから後何本かヒット多くなってもおかしくなかったぞ。それにちゃんとゴロを転がしていたし、これからしっかり練習すればもっとヒット打てるようになるぞ。頑張れよ」

キュウコン監督も納得の表情だ。

「次はジュジュに打たせるか……。カゲっちにピカっちは同じ俊足のジュジュの打撃練習をしっかり観察すると良いだろう」

次はジュジュ先輩の出番のようだ。

「昨日はヒートと真剣勝負で力んだから、今日はリラックスして打てると思うよ」

ジュジュ先輩が練習の準備を始める。

その姿に１５球勝負の敗者ヒート先輩がギュッと右手を握りしめる。

「何度考えてもあの負け方悔しいぜ。でもここであいつの練習を

研究しなきゃな……」

ヒート先輩はいずれ来るかも知れない再戦に向けて、静かに闘志を燃やしている。

「次はあたしの王子様のジュジュ先輩の出番……。あたしも一緒に飛ぶようなホームラン打って……／／／／」

ちなみにチコっちはすでに“メロメロ”状態だ……。（汗）

あさポケナインの守備職人、そしてスーパースピードスターのジュジュ先輩の打撃練習はどうなるのか……。

次回に続く！

第３１話：「勇気を与える一打！」の巻（後書き）

ピカっち：「良かった……。ちゃんと打てた……」

カゲっち：「良かったね！今度からますます練習頑張ろうね！」

ピカっち：「ええ！大好きなカゲっちくんのためにも……あたし一生懸命頑張るわ！」

ジュジュ：「次回は僕の真の力が明らかになるよ！お楽しみ！」

第３２話：「“アベレージヒッター”としてのプライド」の巻（前書き）

ジュジュ：「今回は僕の出番だよ」

チコっち：「頑張ってジュジュ先輩……。あたしの愛の力で全球ホームランよ……／／／／／」

カゲっち：「……。（汗）と、とりあえず第３２話プレイボール」

第３２話：「“アベレージヒッター”としてのプライド」の巻

ピカっちはやっぱり楽しそうな姿が一番だよ。
この調子で頑張っていこうね！

「次は僕の出番か……。ヒートやラッシー、ラージやラプとは違う打撃を見せてあげるよ」

ジュジュ先輩は自分の茶色のバットを持ち、ヘルメットを構えて、ゆっくりと右バッターボックスに向かう。

「設定は俺たちと同じ実践型にした。球数も１０球だ。これでいいな？」

ヒート先輩がバッティングマシンの設定を変えたようだ。

「わかったよ。早速練習を始めようか……」

ジュジュ先輩がバットで、トンとホームベースを軽くたたく。

ジュプトルという種族はやはりすばやさが高いのが特徴だろう。
それに加えてとくこうの高さも忘れてはいけない。

パワー面はヒート先輩やラッシー先輩と、僕やピカっちの中間と思うから、長打もそれなりに打てるはずだ、とジュジュ先輩が言う。

そんなあさポケナインのスーパースピードスターのジュジュ先輩の打撃練習が今始まる！

まずは注目の1球目！

マシンからボールが発射された！

『外角低めのストレート！いただき！』

ジュジュ先輩がバットを振った！

カキーーン！

打球は三遊間を真っ二つに破りそうなライナーだ！！

「あたしだって走るのは得意よ！えい♪」

ショートのピカっちが思いきり横っ飛びをする！

しかし、黄色いグローブはボールに届かず、そのまま外野にボールが抜けた！

「あれ？捕れなかったわ。さっすが先輩たちはヒット打つの上手だわ♪」

ピカっちは楽しそうな笑顔を見せる。

「1球目からあんなヒット打てるなんて……やっぱりあたしの王子様……／／／／」

チコっちは顔を真っ赤にしている。

「ジュジュ先輩が4番よ……。そうよ！そうすればあたしの愛の力であさポケを優勝させることが出来るわ！！」

チコっち……。頭の葉っぱを勢いよくグルグル回しすぎだよ……。

それにキミの愛の力で優勝させるって……。（汗）

僕は半分あきれながら、彼女がギャーギャー騒ぐのを見ていた。

暴走チコリータが止められない勢いにならないか不安だけど、次は2球目!!

『今度は外角高めのストレート……。僕のストライクゾーンだ!』

ジュジュ先輩は絶対ボールと判定されるようなその球を打った!!

コーン!

見送れば絶対にボールと判定されるような球をジュジュ先輩は打った!!

打球はサードとレフトの間に向かってフラフラと飛んでいる。

これは捕れるのかな?

サードのチックがバックし、レフトのラージキャプテンが前進してくる。

「このままじゃ追いつけない!それ!!」

サードのチックが思い切り飛び込んだ!

しかし打球はシルバーのグローブの前にポトリと落ちた!

「僕はヒットを打つことに価値を感じるんだ。10球飛んできたら、10球ともヒットにするのが目標なんだ。それにフォアボールだと一塁しか塁は進めないけど、ヒットならうまくいけば二塁も三塁も行ける。それなら、多少のボール球も打ちたいんだ」

ジュジュ先輩はそう言いながらバットでトンとホームベースを叩く。

次は３球目！！

『これも見送ればボールだけど、僕は打率１０割を目指すんだ！だからこのスライダーを打つよ！』

内角低めのボール球をジュジュ先輩は打った！！

コーーン！

「打ち損じたか……。ヒット１本損した……」

打球は、一塁の白線上をコロコロ転がる！

「キャー！ジュジュ先輩のボールがあたしのところに……！やっぱりあたしたちの恋は運命でつながっているんだわ！」

チコっちはまたも顔を真っ赤にして、ギャーギャー騒ぎながら平凡なゴロを捕った。（汗）

次は４球目！！

「僕は打率１０割を目指すんだ！だからなんでもヒットにしたいんだ！」

ジュジュ先輩は一度バッターボックスの外側に出て、何度か素振りをする。

「あの～ジュジュ先輩？“打率”って何ですか？」

ピカっちが首を傾げながら、尋ねる。

「“打率”がわからないのか……。でも初心者だもんね。教えてあげる」

ジュジュ先輩の説明が始まった。

「打率は、バッターがヒットを打つ確率のことだ。どうやってその確率を出すかと言うと、

打率＝安打（ヒット）数÷打数（バッターが打った回数）で出せるんだ」

ジュジュ先輩の話は続く。

「打率を書くときは１の位は書かないで必ず小数第３位まで書く

んだよ。．３４８とか、．２７８のようにね。小数第４位は四捨五入して書くんだ。読み方は小数第１位から、割（わり）、分、（ぶ）、厘（りん）と読むんだ。みんなも上の２つの打率を読んでみよう！」

打数は、打席数（実際にバッターボックスにたった回数）からフォアボール（フォアボール）やデッドボール、送りバント、エラーや犠牲フライ（バッターがフライでアウトになった後に三塁ランナーがいた場合、そのランナーがホームベースに帰ってくること）を引いた数のことだ。

「打率が高いほどそのバッターはヒットを打つ確率が高いということなのさ。だいたい3割くらい打てれば良いバッターと認められるよ」

ジュジュ先輩は笑顔で話してくれる。

さあ一つここで読者のみなさんに練習問題です。

Q. ある試合でカゲっちの打撃結果は次のようになりました。では打率はどれくらいですか？

第１打席→三振
第２打席→四球

第３打席→左安（レフトへのヒット）
第４打席→送りバント

……。

ハイ。時間切れです。

では、答えです。

Ａ．．５００
カゲっちの打席数→４

打数→２（第２打席の四球と第４打席の送りバントは打数に入らないので引く）

安打数→１

よって安打÷打数に当てはめると、

１÷２＝０．５

なので１の位を省いて小数第３位まで書くと、．５００となるんだ。

「とまあこんな感じかな?僕説明するのはあまり得意じゃないからわかりにくいかな?」

ジュジュ先輩がやや心配そうな表情をする。

「そんなことないですよ。詳しく教えてくれてありがとうございます!」

ピカっちは爽やかな笑顔で返事した。

「ジュジュ先輩……。あぁ……頭が良くて、かっこよくて……。もうあたしのハートも取られちゃって……／／／／／」

チコっち大丈夫かな……。なんだかフラフラしているような気が……。(汗)

さて練習が再開だ。

『次はヒットにしたいな……。出塁できなきゃ僕のこのすばやさも意味がない……!』

ジュジュ先輩が外角低めのストレートを打った！！

カキーーン！

良い当たりだ！！

打球は二塁ベースを越えて、センターのヒート先輩の前でワンバウンドした！！

『これで3本目のヒット……。まだまだ打ちたい……！』

ジュジュ先輩は真剣な表情だ。

「僕はもっとヒットを打ちたい……。このチームで一番多くのヒットを！！」

ジュジュ先輩がバッターボックスの中で、マシンをにらみつけながらそう言う。

次は5球目！！

「あさポケ一の“アベレージヒッター”、ジュジュの実力をもっとみせてやる！」

ジュジュ先輩が真ん中のストレートを打ち返した！！

カキーーン！

打球は僕のところへ飛んでくる！

『これはジャンプしなきゃ！え～い！』

僕は思い切りジャンプした！！

だが、打球は僕の赤いグローブより高くキャッチ出来なかった。

「あ！しまった……。」

打球はライトのラッシー先輩の前でワンバウンドした。

「ふぃ～……。全くあいつも良くまあカンカンヒット打てるよな……。ヘッヘッヘ……さすがだな」

ラッシー先輩はグローブでボールを捕りながらつぶやいていた。

「あいつはガンガンホームラン打たない代わりに一番ヒットを打てるからな」

センターのヒート先輩もつぶやく。

“アベレージヒッター”。

後でキュウコン監督に聞いた話だと、安定した打率を残す選手のことを言うらしい。

実際の試合でも常にヒットを打ちやすいので、打線に自然と“つながり”が生まれやすいのだ。

ヒート先輩やラッシー先輩やラージキャプテンのように、力でヒットを打つ“パワーヒッター”に対して、ジュジュ先輩は技術でヒットを打つタイプなのだ。

「僕もどっちかと言うと、ジュジュ先輩みたくたくさんヒットを打つタイプかな。パワーが無くても積み上げた技術でヒットは打てるってことだよね♪」

サードのチックはもうニコニコだ。

次は６球目！

『チックくんは僕にとって一番のライバルになりそうだ。なんたってあのピース先輩の弟だからな。でも僕だって君には負けるつもりは無いよ！』

どうやらチックの存在こそが、ジュジュ先輩がここまでヒットにこだわる理由みたいだ。

『チックくんは２０球１０球ヒットにした。打率は．５００。ならば、僕はそれを超えるまで！』

ジュジュ先輩は外角高めからのシンカーを打った！！

コン！

『……しまった！打ち損じた』

打球はバッターボックスの外側に飛んでいく。

「ファール！」

ラプ先輩がコールする！

「あぁ……。ジュジュ先輩が悔しそうだわ……。もっとカッコイイところ見せてくれないかしら……」

チコっちはジュジュ先輩の表情を見て残念そうにする。

「……どうしたのよジュジュ？いつもならあんなボール打たないじゃない。むりやり打つなんてあなたらしくないわね？」

ラプ先輩はすでに“異変”に気づいているようだ。

ジュジュ先輩に声をかける。

「うるさいな。なんでもないよ」

ジュジュ先輩はラプ先輩に構わず、そのまま真っすぐ前を向く。

「あ、そう？なら良いんだけど？ごめんね……。集中しているところ邪魔して」

ラプ先輩は深く追求はしなかった。

『ジュジュ……。ライバルに負けたくない気持ちはすごくわかるけど……、だけどそんなにわがままな振るまいをしていたら、週末からの合宿が心配だわ……。……それだけじゃない。勝ち負けや記録にこだわるあまり、個人プレーに走らないか不安だわ……』

ラプ先輩はジュジュ先輩の背中を見つめながら、不安を覚えたようだ。

さあ、次は7球目！

「ヒットを打たなきゃ何も始まらない！それ！」

ジュジュ先輩は外角へのフォークを打った！

カーーン！

打球はショートのピカっちの左を破るゴロになるか！？

「今のあたしには怖いものなんてないわ！！」

ピカっちが自慢の俊足で打球を追いかける。

『このままじゃ追いつけないわ！イチかバチか……えい！』

ピカっちが地面に倒れ込み、打球に手を伸ばす！

ザザァーー！！

次の瞬間砂ぼこりが立ち込める。

そして、砂ぼこりが晴れた……。ピカっちはどうなったのか？

「ピカっち!?」

僕は心配になり、彼女の名前を呼んでみる。

「えへへへカゲっちくん♪ちゃんと捕れたわ♪」

ピカっちは座った状態で、グローブを青空に向かって伸ばして、笑顔を見せた。

「ピカっち!!すごいよ!!ファインプレーじゃないか!!」

僕はしっぽを左右に勢い良く、そして大きく振りながら彼女を褒めてあげる。

「ちぇ……。またヒット1本損したよ……」

ジュジュ先輩は地面を蹴りながら悔しそうにする。

『ジュジュ先輩……。何だか様子が変だわ……。昨日のようなクールでカッコイイところをあたしに見せて……』

チコっちはその様子をじっと見つめている。

次は８球目！！

『このままじゃ負けてしまう……。そんなの僕のプライドが許せない……！』

ジュジュ先輩の心の中では焦りが生まれている。

『さぁ……来い！打ってみせる！』

マシンからボールが発射される！

「外角低めへのストレート！いただき！」

ジュジュ先輩は思い切りバットを振った！！

カキーーン！！

文句なしの……快音だ！！

「これは左中間真っ二つだろう！！いっけぇぇぇぇぇ！！」

ジュジュ先輩は打球の方向を指指す！

レフトのラージキャプテンと、センターのヒート先輩が追いかけるが……、

カシャーーン！

打球はフェンスに当たった！

『あさポケのナンバーワンの打率を残すのは僕だ！！絶対譲るものか！！』

ジュジュ先輩は笑顔を見せず、ただギュッと右手を握る。

「キャー！すごいわジュジュ先輩！ガッツポーズも見せてカッコイイ！！」

チコっちは一塁ベース付近で、グルグル回り始める。

チコっちのこの状態……もし試合始まったらどうなっちゃうんだろう……？

すごく不安になってきた……。（汗）

次は9球目！！

『あと2球か……。2球ともヒットにするまでだ！』

ジュジュ先輩がバットでトンとホームベースを叩く。

『さあ、何が飛んでくるんだ！？』

ジュジュ先輩に向かってボールが飛んでくる！！

『内角へのカーブ！打ち損じるわけにはいかない！』

ジュジュ先輩がバットを振った！！

カーン！

打球はレフトのラージキャプテンのところに飛んでいく。

『平凡なフライだな。これなら捕れる』

ラージキャプテンがゆっくりと落下点に入る。

「オーライ！」

大きな声を出して、黒いグローブを空に伸ばす。

パスン！

「良かった。ちゃんとキャッチ出来た……」

ラージキャプテンがほっとした表情を見せた。

『……。当たりが甘かったかな……。どうしてもフライを打ち上

げてしまう……』

ジュジュ先輩は、どうも自分の納得するような打撃が出来ないことに、ややイライラし始める。

「ジュジュ先輩……頑張って……。みんなを驚かせるようなヒット見せて……」

チコっちは小さい声で静かに応援する。

さあ、いよいよ１０球目!!

マシンからボールが発射される!!

『真ん中高めのストレート!今度こそ!』

カキーーン!

打球はライナーで勢いよく二塁ベースを通過し、センターのヒート先輩の前に落ちた!

「キャー！ジュジュ先輩！すごいヒットだわ！誰も追いつけないヒット！あたしの愛がこもった願いが通じたんだわ！」

チコっちがジャンプを何度も繰り返す。

「これだ。このセンターへのライナーが打てれば良いんだ。良かった。最後に打てて……」

ジュジュ先輩は笑顔になる。

ジュジュ先輩の打撃結果は、左安、左安、一ゴ、中安、右安、捕邪、遊ゴ、左中安、左飛、中安だった。

「ヒットを打ちたい気持ちはわかるが、むりやりな打撃はダメだな。打率をあげたいならもっと1球1球大切にな」

キュウコン監督もやや怒り口調だ。

「でも、それが僕の役目なんです。1本でも多くのヒットを打ってチームの役にたちたいんです」

ジュジュ先輩は反論する。

「……。そうか。ジュジュはチームプレイが、まだよくわからないんだな?今日の打撃練習だと、全力プレーが伝わらない。もう一度よく考えてみなさい。ヒットより大切なことがあるはずだ」

キュウコン監督が諭すように言う。

「とりあえず交代だ。最後はチコっちだな。」

チコっちはうれしそうに走ってゆく。

「ついに“チコっち劇場”がクライマックスよ!見てなさい!」

ダッシュで駆け抜けるが……

バタン!

「きゃあ!」

チコっちはマウンドのボールを踏んでしまい、そのまま倒れた。

「チコっちちゃん？大丈夫？」

ピカっちが声をかける。

「大丈夫！へっちゃらよ！」

チコっちはまたダッシュで準備に向かった。

いろんな意味で不安だらけのチコっちの打撃練習はどうなるのか？

次回へ続く！

第32話：「“アベレージヒッター”としてのプライド」の巻（後書き）

ジュジュ：「ヒットより大切なもの……。僕にはまだ足りないものがあるのかな」

ラプ：「そうね。でもそれはあなたが見つけることよ」

ジュジュ：「そうみたいだね。次回はチコっちちゃんの出番だよ。カゲっちくんたちに負けない活躍期待しているよ」

チコっち：「は……はい！！あたし頑張ります」

カゲっち：「暴走しないか不安だ……（汗）」

第３３話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

チコっち：「つ……ついにキタァァァ～～！！」

カゲっち：「異常なまでなハイテンション……（汗）」

ピカっち：「頑張ってね、チコっちちゃん。いっぱいヒット打ってね♪」

ジュジュ：「今回からいよいよ打撃練習編の大詰めだよ。みんな応援してね」

チコっち：「それじゃあ“チコっち劇場”いくわよ！第３３話プレイボール！」

第３３話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

ジュジュ先輩は他の先輩と違って、何か満足出来ない結果になってしまったようだ。

「いよいよ君が１巡目最後のバッターだ。今まで友達や先輩たちが頑張っている姿を見て君も何か感じただろう。それを思い切り見せてくれ」

キュウコン監督がバッティングマシンの設定を変えながら、チコっちに話しかける。

「そういえば、チコっちで９匹目なんだな。色々なタイプのバッターがいたけど、チコっちはどんな風にはじめての練習をするんだろう？」

チコっちに代わってファーストを守るヒート先輩がつぶやく。

あさひポケ中学の野球部のメンバーは、それぞれ違う打撃の武器をもっていたなぁ……。

広角打法のヒート先輩。

プルヒッターのラッシー先輩。

努力の天才スイッチヒッターのチック。

“つなぐ”パワーヒッターのラージキャプテン。

粘り打ちのラプ先輩。

まぐれかもしれないけど選球眼の僕。

みんなに勇気を与える一打を放つムードメーカーのピカっち。

あさポケ一のアベレージヒッターのジュジュ先輩。

こうして考えると一口に打撃と言っても色々なタイプが存在するのがわかるなぁ。

『僕も一つにこだわらないで、もっともっとみんなの良いところを吸収しよう』

僕は新たな決意をした。

「あたしだってみんなに負けないんだから！えい！えい！」

チコっちは左バッターボックスの外側で、ピカっちと同じおもちゃのバットを一生懸命振りながら、目慣らしをしている。

ブン！ブン！

そのバットの振り方を見る限り、ヒート先輩やラッシー先輩の振り方に似ている。

「さあ！どっからでも飛んできなさい！」

チコっちは、僕やピカっちのような不安を抱いている様子は見られない。

「すごいねチコっちちゃん。初心者なのに緊張しないなんて。僕も応援しているよ！」

センターのジュジュ先輩は笑顔を見せる。

「そんな……。ジュジュ先輩……。あたし……あなたのために一生懸命頑張ります……／／／／／」

ジュジュ先輩の言葉に顔を赤くするチコっち。

僕は、無事暴走しないで練習をこなして欲しいけどね……。（汗）

「チコっちはそんなにパワーは高くないし足も速く無いけど、チームに数少ない左バッターだ。だからその事をしっかり活かしてほしいと思う」

キュウコン監督がチコっちにアドバイスをする。

「はい！頑張ります！」

チコっちは大きくうなずいた。

チコリータという種族は、僕やピカっちと違って、守りの能力が高いのが特徴だ。

それに加えて、“はっぱカッター”や“マジカルリーフ”、“ソーラービーム”といった攻撃技から、“リフレクター”や“ひかりのかべ”、といった防御技、“アロマセラピー”、“しんぴのまもり”といった補助技まで、多彩な技を使えるのも特徴だろう。

そんな野球部の中でもおてんばなチコっちの打撃練習が始まった。

まず、注目の1球目!!

マシンからボールが発射された!!

『あたしの想い……白いボールに乗せて、どこまでも飛ばすんだから!』

チコっちが思い切りバットを振った!!

ブン!!

「ストライク!」

しかし、バットにボールは当たらない。空振りとなってしまった。

『……どうして神様? あたしの純粋な気持ちは、ジュジュ先輩には届かないってことなの……?』

チコっちはガックリとする。

「頑張ってチコっち！もっと軽くバットを振ると良いよ！」

僕はチコっちを励ます。

『わかっているわそんなこと……。でも……それじゃ気持ちが届かない……』

チコっちは前を向く。
その視線の先には……、

「チコっちちゃん頑張って！君だってちゃんと打てるはずだよ！」

センターで精一杯応援する、ジュジュ先輩がいた。

『あたしの王子様に気持ちを届けるまでは、負けるつもりなんて無いわ！』

チコっちの恋心に火がついた！

さあ、続けて2球目!!

『さあ来なさい!あたしの想い……何としても……王子様に届けて見せるわ!』

チコっちは先ほどと同じように、思い切りバットを振る!

「ストライク!」

しかし結果は、またしても空振りだ!

「チコっちちゃん。もっと肩の力を抜いてリラックスしてごらん」

ジュジュ先輩がアドバイスを送る。
確かに、今の彼女のバットの振り方は、かなり力んでいる。

「リラックスね……。深呼吸しなきゃ……」

チコっちは一度バッターボックスの外側に立ち、深呼吸をする。

「そう。気持ちを落ち着かせて……。何度も目を閉じて深呼吸すると良いよ」

ジュジュ先輩は的確にアトバイスをする。
さすがはあさポケ一の“アベレージヒッター”。打席での心得を知っているなぁ。

「これでよしと……。さあ、頑張るわよあたし！」

チコっちが再び左バッターボックスに入る。

さあ、次は3球目！

『ジュジュ先輩が好きな気持ちは誰にも負けないわ！絶対にあなたへ届けて見せるわ！』

チコっちがバットを振った！

「ストライク！」

しかし結果は3球続けての空振りだ。

チコっちはがっかりとした表情になってしまう。

『やっぱりあたしの気持ちは……届かないのかしら？バットに当たってくれないわ……』

チコっちからいつもの元気が無くなる。

しょうがないなぁチコっちは……。いつもやる気や元気は、僕に負けないけど……、どうも途中で壁にぶつかってしまうなぁ……。

「チコっち～。早く君の“チコっち劇場”が見たいなぁ……。君が最高に輝く瞬間が見たいなぁ……」

僕はおねだりするような感じで、チコっちに話しかける。

もちろん、それが僕の本意ではないけれど、彼女の性格からして多分……、

「……本当に見たい？見たいのね！？そうよね！あたしの“チコっち劇場”を見ないで読者さんも納得しないわよね！！」

やっぱり……。どうしても“きまぐれ”な性格だから、ついつい調子に乗ってしまう。（汗）

ショートのピカっちも、僕の考えが理解出来たのか、苦笑いしている。

ちなみにチコっち。
目をキラキラさせているけど、読者さんが果たして“チコっち劇場”に、どれだけ期待しているかは僕にもわからないからね。（汗）

彼女は昔からそうだ。彼女の考えには、数字のデーターという面倒なものは存在しない。
代わりに存在するのは、いつでも自由な毎日を送る“きまぐれ”な考えだ。

それはそれで彼女らしいけど、そのおかげで暴走チコリータに成りかねないのが不安だ……。（汗）

実際ジュジュ先輩に対する恋心も、いつ、どのように終わるか考えただけでゾッとする。（汗）

まあ、彼女がひとまず元気になったところで、僕の作戦がうまくいったのは間違いないだろう。

さあ、“チコっち劇場”が始まるのか!?次は４球目だ!

『もうカゲっちてば……。あんなに楽しみにしているなんて……うれしいわ♪もう打つしか無いわね♪』

彼女はルンルンルンルン♪、と気分を良くしてバットを振った!

カキーーン!

……え?……まさか……今……ジャストミート（ボールに対して、タイミングがバッチリ合うこと）しなかった?（汗）

打球はヒューと青空へ吸い込まれていく。

「……うぉ！？結構良い感じで飛んでいるじゃねえか！！……まだバックしなきゃ……！」

ライトのラッシー先輩も、驚きを隠せないままドンドン下がっていく。

しかし、それでも打球は落ちて来ない。
一体どこまで飛んでいくんだ？（汗）

「……うぉ！？ウソだろ？……入っちまった……」

ラッシー先輩はフェンスの手前まで来たのだが、打球はそのままフェンスを越えていった……。（汗）

……ナイン全員がその瞬間、目が点になってしまった。（汗）

「ホ……ホームラン……」

ラプ先輩も目が点のまま、コールする。

「ちょ……ちょっと見なさいよ!!これが“チコっち劇場”の始まりを告げるホームランよ!もっと盛り上がりなさいよ～～!」

打った本人は、ギャーギャー騒ぎはじめる。

『……もしかしたら、チコっちは“意外性”が売りのバッターかも知れないな。何をしだすか、わからないくせ者になりかねないな。……フッ。カゲっちも、ピカっちも、チコっちもルーキーでありながら、潜在能力は計り知れないな。これは、今年のあさポケはリーグの台風の目になるかもな……』

ベンチのキュウコン監督は、今の事実にこう感じていた。

“意外性”とは、誰も想像もしないような場面で、周りを「あっ！！」と驚かせるような、打撃をみせるバッターのことだ。

「そんなマンガみたいなことなんてありえないだろう。」と言われそうだが、実際に人間界でも、そういう打撃をみせるバッターはいるらしい。

これが、チコっちの持つ打撃の武器なんだろうなぁ……。

「なによ！あたしのときだけ、みんなボーッとするなんて！！良いわ！もっと見せてあげるんだから！！」

チコっちはギャーギャーしながら、またブンブンとバットを振る。

次は、５球目！

『きっと神様は、あたしの恋する乙女の気持ちを感じたんだわ…

…。そうよ！だからあんなホームラン打てたのよ！』

チコっちは、いつ“暴走チコリータ”になるのかわからない状態までになっている。

『さあ来なさい！“チコっち劇場”は始まったばかりよ！』

チコっちは思い切りバットを振る。

コーーン！

打球はコロコロと一塁の白線上を転がる。

「フェア！」

ラプ先輩がコールする。

「どんな打球でもファールと言われるまでは、捕りにいくのが基本だ。簡単なゴロでも、一球一球大事に取りに行かなくちゃな」

ファーストのヒート先輩はゴロをしっかり捕って、そのボールを

マウンドへポーンと戻した。

「バットに2回続けて当たったわ！次はまたホームランよ！」

チコっちはさっきと違って、楽しそうな顔をしている。

「まだまだ“チコっち劇場”は始まったばかりよ！！よ～く見ていなさい！！」

なんだかなぁ……。チコっちの打撃も、僕やピカっちの目指しているのと、かなりズレているような気がする……。（汗）

このあと、どんな練習になっちゃうのかがすごく不安だけど……、

とにかく今は精一杯彼女を応援して、全力で練習するだけだ。

なんだかますますやる気が出て来たぞ～！

第３３話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

チコっち：「入ったわぁぁぁぁぁぁぁぁ！ホームラーンよ！」

カゲっち：「とんでもない打撃をしちゃったね。びっくりしちゃったよ（汗）」

チコっち：「でもまだまだこんなもので“チコっち劇場”は終わらないわ！次回も期待していてね！」

第３４話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

チコっち：「今回もあたしの打撃練習の続きよ！」

カゲっち：「一体どうなるんだろう？」

ピカっち：「気になる第３４話プレイボール！」

第３４話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

ビックリしたぁ……。まさかチコっちがホームラン打っちゃうなんて……。（汗）
これが“チコっち劇場”なんだろうか？

次は６球目！

マシンからボールが発射された！

『ジュジュ先輩のところにまだボールが飛んでないわ！次こそ、この想い届けてみせるわ！』

チコっちがバットを思い切り振る！！

「ストライク！」

空振りしたので、判定はストライクだ！

「あぁ！もう！どうしてこう……うまく当たらないのかしら！？」

チコっちはよっぽど悔しいのか、その場で“じたばた”している。

「チコっちちゃん。イチ、ニのサン！で打ってみると良いよ！タイミングさえ合えば君はホームラン打てるんだから！」

ジュジュ先輩はチコっちに、タイミングを合わせるようにアドバイスする。

「あ……はい……。イチ、ニ、サンであなたに愛を届けると良いんですね……？」

チコっちは誰にも聞こえないような声で返事をする。

次は7球目！！

『読者のみなさんだって、あたしの“チコっち劇場”に期待しているはず！絶対打ってみせるわ！』

マシンからボールが発射された！

『ジュジュ先輩に想い……届いて！イチ、ニ、サン！！』

チコっちがタイミング良くバットを振った！

カーーン！

打球は僕の真っ正面に飛んできた。

「これくらい、捕ってみせる！」

パシッ！！

打球は僕の赤いグローブに、そのまま吸い込まれた。

「良かった。ボールが飛んでくると、緊張しちゃうんだよね」

僕は苦笑いして、ボールをマウンドに戻した。

「もうカゲっち！それじゃあ“カゲっち劇場”になっちゃうじゃないの！！ちゃんといつもみたく“ダメダメヒトカゲ”になりなさいよ！」

チコっち。すごく悔しいのはわかるけれど、その言い方はかなり傷付くんですけど……。（汗）

とりあえず……次は8球目！

『もう！みんなであたしの純粋な恋心と、“チコっち劇場”を邪魔するなんてひどいわ！！』

もうチコっちの考えは、チームプレイと掛け離れている気がする……。（汗）

そんなチコっちにまたボールが飛んできた！！

『このままあたしの“チコっち劇場”は終わるはずないわ！！見てなさいよ！！』

カキーーン！！

快音がバットから響いた！

打球は速いライナーとなって、二塁ベースの上を越えるそうだ！

僕とピカっちが互いに俊足で追いかける！！

「ピカっち！僕が追いつけそうだ！！僕にまかせて！！」

「え？……わ、わかったわ！」

僕はそう言うと、さらにスピードを上げ、横っ飛びをする！

ピカっちは二塁ベースの後ろに下がり、僕がエラーした時に備えている。

ドサッ！！

うまくキャッチ出来たのだろうか？

何もわからないまま、僕は地面に倒れた。

「カ……カゲっち……くん？」

ピカっちが心配そうにしている。

「……ん？僕うまくキャッチ出来たかなぁ……？」

僕はゆっくり起き上がる。体は土まみれだ。

「惜しかったわ……。グローブが届かなったみたい。ボールはセンターのジュジュ先輩の前に落ちたわ……」

ピカっちが残念そうに言う。

確かに……僕の赤いグローブには、ボールが入っている様子は無かった。

「あちゃ～。せっかく捕れたと思ったのに～。悔しいなぁ！！」

せっかくピカっちにかっこいいところ見せれたかも知れなかったのに～！（悔）

僕はまたダメダメなところを見せてしまったと思いながら、ガッカリと元の守備位置に戻る。

しかし、実はピカっちに好印象だったことをこの時の僕は知らない。

『……ダメダメヒトカゲのカゲっちくんが、あんなにテキパキ指示出してくれるなんて……。ウフ♪あたし……ドキドキしちゃったわ♪』

ピカっちはニコニコしながら、元の守備位置に戻っていった。

気を取り直して9球目！

『やっぱり“チコっち劇場”は始まっているようね！あんなライナーが打てるなんて！！次も打ってみせるわ♪』

チコっちがバットを振った！！

カーーン！

打球はライトへフライで飛んでいく。

「これは、大丈夫だ！捕れるぞ！」

ライトのラッシー先輩がゆっくりと落下点に入る。

「オー、ライ！」

ラッシー先輩はガッチリとボールをつかんだ。

『もう！どうしてラッシー先輩のところに飛んでいくの！？あたしはジュジュ先輩に想いを届けたいのに！！』

チコっちは別の意味で悔しがっていた。

次は１０球目だ。

『あたしの気持ちはただひとつ。純粋過ぎるこの感情を空へ飛ばすこと！えい！』

チコっちがバットを勢いよく振った！！

「きゃぁ！！」

勢いのあまり、チコっちは反動でその場に倒れてしまう。

「ストライク！」

もちろんボールバットに全くかすらない。判定はストライクだ。

『もう……。どうして当たらないの？やっぱり……あたしの気持ちはジュジュ先輩に届かないってことなの？』

チコっちはその場に座り込んでしまう。

頭の葉っぱがチコっちの気持ちを表すかのように、しおれた感じになっている。

『どうせ……。あたしの気持ちなんてこの程度なのよね……。それなら……この恋心を諦めた方が良いよね……』

ずっと下を向いたまま、チコっちが諦めの心をのぞかせる。

と、そのときだった。

「チコっちちゃん。あたしみたいにならないで……。元気のないチコっちちゃんなんて……見たくないよ……」

チコっちはその言葉に頭を上げる。

視線の先には、悲しそうな表情をしているピカっちがいた。

「チコっちちゃん……。あたしに言ってくれたあの“言葉”覚えている？」

ピカっちが静かに語りかける。

「“あの言葉”って何？僕初めて聞くよ？」

僕はピカっちとチコっちの“言葉”の意味がわからず、首を傾げる。

「……いつでもあたしとピカっちで、お花のようにみんなを和ませて元気にさせようね……」

チコっちが静かに口を開いた。

「そうよチコっちちゃん。あなたはお花が好きで、あたしにたくさんお花の話をしてくれたよね……？」

ピカっちが一歩ずつ前に出る。

「……いつだったかしら？2匹で一緒にみんなで内緒にチューリップをたくさん育てていたときがあったよね？」

ピカっちが語りかける。

「あのチューリップね……。確か5年くらい前よ……。2匹で大事に育てていたのに、めちゃくちゃにされて泣いたよね……」

チコっちは座ったまま話す。

「そうね。そのときチコっちちゃんあたしに教えてくれたよね？“植物だって……、お花だって動けないけれど……精一杯生きているのに！！……みんなを和ませてくれるのに！！……みんなのために色々な形で頑張っているのに……！！”って……。バラバラになっちゃったチューリップを見ながら……」

ピカっちはチコっちの前でしゃがみながら、笑顔でチコっちに話す。

……グッと悲しい気持ちを抑えて……。

「そうね。あたしもくさタイプだからなおさら悔しかったの……。でもピカっちがそのときに言ってくれたよね？“チコっちちゃん。あたしたちがこのチューリップのために、何か出来ること無いかしら？このままだとかわいそうでしょうがないわ……”って。だからあたし言ったのよ。あの“言葉”を……」

チコっちはまた下を向く。

「そうね。……“いつでもあたしとピカっちで……お花のようにみんなを和ませて、元気にしようね。”そうすればチューリップたちも悲しまないで済むかも知れないから……」

ピカっちはチコっちの右の前足を優しく握りながら、そう言った。

「……ごめんねチコっちちゃん。こんな昔話持ち出して……。でもその日からのチコっちちゃんがずっと元気だったから、……今こうして元気の無い姿を見てると、あの時のこと思い出しちゃって……」

ピカっちは上手く言葉が出ない。

「もうピカっちってば……。あまり泣かないの……。あたしずっと元気でいてあげるから……。じゃないとあのチューリップたちも悲しんじゃうから……」

チコっちはピカっちの背中をポンポン優しく叩く。

まだ悲しみで体が小刻みに震えるピカっちの背中を……。

「チコっちちゃん。……強いね。……本当はあたしの方が励まさなきゃいけないのに……。辛いのはチコっちちゃんのはずなのに……」

ピカっちは言葉がうまく出てこない。

「……そんなこと無いわ。あたしも今ちょっと元気無くしたんだから……。ピカっちのおかげで大事なこと思い出せたわ……。ありがとう……」

チコっちは瞳を閉じ、少し笑いながらそうピカっちに言う。

何粒か涙をこぼしながら……。

『僕が知らない間にそんなことがあったんだ……。だからチコっちやピカっちはいつも元気に振る舞っていたんだね……』

僕は2匹の苦しみを気付けなかった自分が、ふがいなくてしょうがなかった。

「さあピカっち……。そろそろ練習に戻りましょう。そして笑顔で頑張りましょう！」

「うん！！」

チコっちとピカっちは立ち上がり、自分の練習に戻る。

『ありがとうねピカっち。絶対みんなを元気にさせるわ。そしてジュジュ先輩に気持ち届けてみせるんだから！！』

チコっちがギュっとバットを握る。

チコっちにも優しい気持ちが存在するんだね。ビックリしちゃった。

ちょっと見直したかな。

「さあ！ここから巻き返すわよ！“チコっち劇場”の第2章の幕開けよ！」

……いや、見直すのはよそう……。次回が不安だ……。（汗）

第３４話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

カゲっち：「そんなことがあったなんて……今まで気付かなくてごめんね」

ピカっち：「ううん。良いのよ。だってカゲっちくんを心配させたくなかったから……。黙っていてごめんね」

チコっち：「さて！元気が出たから頑張るわよ！次回をお楽しみにね！」

第３５話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

チコっち：「いよいよ今回で“チコっち劇場”もラストよ！みんな期待していなさい！」

カゲっち：「そして、後書きにはお知らせがあります。ぜひ見てくださいね！」

ピカっち：「それでは第３５話プレイボールよ！」

第３５話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

チコっちとピカっちの笑顔の裏側には、そんな悲しい物語があったなんて……。
でもきっとその優しさはチューリップたちに届いているはずだよ！！

さて、ここまでのチコっちの打撃練習を振り返ってみると、空振、空振、空振、右本、一ゴ、空振、ニ直、中安、右飛、空振だ。

さて、続いての１１球目はどうなるのか？

『あたしの持ち味はこの人一倍あふれる元気よ！そこから“チコっち劇場”があるのよ！』

チコっちは今まで以上に元気になる！！

『さあどんどん来なさい！あたしの“チコっち劇場”は、無敵よ！』

チコっちが飛んでくるボールに対して思い切りバットを振った！

カキーーン！！

強烈な……強烈過ぎる当たりだぁぁ！！

打球はサードのチックの頭を軽々越えて……、そのままレフトのラージキャプテンの守備位置に飛んでいく！！

「なんて強烈なライナーだ！！でも俺だって絶対捕ってみせる！！」

ラージキャプテンが白線に向かって左に走って行く！！

カシャーン！

しかしラージキャプテンが追いつく前に、打球は勢いを保ったままフェンスに直撃した！！

「す……すげぇ……。なんて弾丸ライナーだ……」

ラージキャプテンはフェンスに直撃したボールをキャッチしながら、その強烈さに驚いている。

いや、ラージキャプテンだけでなく、ナイン全員が驚いている。

弾丸ライナー……。

元々ライナーはフライが真っすぐ飛んでいく打球だが、今のような強烈過ぎる当たりはまさに、銃を撃った時のような迫力があるので、そう言われる。

「もう!!どうして盛り上がらないのよ!!カゲっちたちとどこが違うって言うのよ～～!!!」

打った本人はまたしても、自分の望み通りに盛り上がらないことに納得せず、ギャーギャー騒いでいる。

だけどチコっち……。そりゃ盛り上がって欲しいと思うのは難し

いと思うよ。

さっきのホームランといい、今の弾丸ライナーといい、インパクトが強すぎて、どうしても驚いてしまうんだから……。

「カゲっち！どうして盛り上がらないのよ！？あんなに期待しているって言ってたのに！！こんなに盛り上がらないの……あんたのせいよ！」

……いやいやチコっち。

……そんな頭の葉っぱをグルグル回しながら、僕に“やつあたり”したところで状況は変わらないと思うよ……。

さあ、続いて１２球目！

『このままじゃジュジュ先輩にも想いが届かない！もっとみんなを盛り上げて、目立ちたいわ！』

チコっちは何度もブンブンとバットを振る。

『こんなボールなんかに負けないんだから！！』

チコっちがバットを振った！！

カーーン！

打球はライトのラッシー先輩とセンターのジュジュ先輩の間に飛んでいく！！

2匹の先輩が共にそれを追いかけていく！

『あ！ジュジュ先輩のところに飛んでいくわ！！お願い！キャッチして！』

チコっちは飛んでいった打球を見つめる！

さあ、彼女の切なる想いは届くのか？

「オー、ライっと！」

しかし打球をつかんだのは、ライトのラッシー先輩だった。

『ガーーーン！！なんで……なんであんな爆発ポケモンに捕られちゃったの？……悔しい！！！悔しいわ！！！』

チコっちは“つるのムチ”で地面を何度もパシンパシンと叩く。

「おお！チコっち悔しそうだな。でもさっきのような弾丸ライナーやホームランだって打てるんだ。次打とうぜ！ドンマイドンマイ！」

もちろんラッシー先輩は、チコっちの悔しがる理由をわかるはずも無く、笑顔で彼女を励ましていた。

さあ、次は１３球目！

『もう！これだからほのおタイプはＫＹ過ぎるし、鈍感だし、嫌

になるわ！！』

酷いこと言うなぁ……。今のチコっちにほのおタイプは、相性とかそれ以前に邪魔な存在になっているみたいだ……。

『見てなさい……！次こそは！！次こそは……！！』

なんだか、もう“つなぐ”とか“チームプレイ”とか、そんなのお構いなしの、わがままなバットの振り方をしているよ……。試合になったらすごく不安だ……。

そんなチコっちにボールが発射された！

『“チコっち劇場”は奇跡を起こす物語よ！！えい！！』

チコっちは思い切りバットを振った！！

カーーン！！

あ～ぁ……フライになっちゃった。
だから不安だったんだよなぁ。わがままな振り方だったから……。

打球はたかーく飛んでいるけど、僕のところで落ちそうだ。

これ捕ったらうるさくなりそうだなぁ……。

「しょうがない。捕るしかないよね。オーライ！」

ポス……！

僕は無事にボールをつかんだ。

……ため息をしながらね。

「もうカゲっち！どれだけあたしの邪魔をすれば気が済むの！？
このダメダメ泣き虫ＫＹヒトカゲ！！！」

やっぱり……。僕の考えた通りだ。
思い切り騒いでるよ……。
オマケに酷いこと言ってるし……。

はぁ～。このままどうなっちゃうんだろう？
次は１４球目……。

『これも神様のいたずらね！この第３５話が終わったら、思い切り文句言うわ！！』

なんだか神様もかわいそうになってきたなぁ……。
この“暴走チコリータ”が何言うか考えただけでも恐ろしいや……。

『あたしの気持ち！届いて！』

チコっちがボールに対して思い切りバットを振った！！

「ストライク！」

ラプ先輩がコールする。

あ～ぁ。神様のバチが当たったせいか、結果は空振りとなった。

『どこまでも邪魔が入ってるわねぇ……。それでもあたしは諦めないんだから！！』

……いまさらながら、好きな男の子に対しての女の子ってみんな無敵な気がする……。

次は１５球目だ！

『例え大雨になっても、灼熱の日照りになっても、あたしは負けないんだから！！速いボールが飛んで来ても負けないわ！！』

チコっちはボールに振り遅れないように、思い切りバットを振る！！

コーーン！

打球は平凡なゴロだ。

「あ！あたしのところに転がって来たわ～♪うれしい～♪」

ピカっちは本当にうれしそうに、前進しながらゴロをキャッチした。

「チコっちちゃ～ん♪次はバウンドでこっちに打ってぇ～♪」

ピカっちは笑顔でチコっちにお願いした。

『……ごめんねピカっち。今はあなたのところに転がせないわ。今のあたしの狙いはただひとつ！ジュジュ先輩の緑のグローブよ！』

チコっちの目標は限り無く大きい。

続いて１６球目！

『本当にジュジュ先輩に気持ちを届けたいわ。次はあのグローブに届いて！』

チコっちが気持ちを込めてバットを振った！！

カーン！

打球は一塁の白線より右側に飛んでいく。

「ファール！」

判定はファールだ。

『これも飛んでいかないわ……。でも信じれば奇跡は起こるはずよね！』

チコっちはさらに強く決意する。

さあ、次は17球目！

『あたしは諦めないわ！だってジュジュ先輩のこと誰よりも好き

なんだから！』

彼女の熱い想いは果たして届くのだろうか？

カキーーン！！

あ！！また強い弾丸ライナーがレフトに飛んでいくぞ！！

「うわわ！フェンス越えそうだぁ！！」

レフトのラージキャプテンがバックしていくが、途中で見上げてしまった。

「ま……またホームラン……。しかも今度はレフトに……」

ナイン全員が打球の方向を見つめてあぜんとしている。

「チコっち……。よくホームラン打っちゃうよね……。すごいよ……」

僕は彼女に話し掛ける。
すると彼女は、

「それが自分でもどうして打てるのかわからないのよ。バットを振って……気がついたらホームランになっちゃったって感じなのよねぇ……」

彼女もまさか2回もホームラン打てるなんて思ってなかったのだろう。
ずっと苦笑いしていた。

恐るべし……。“意外性”……。

だがこの時の僕たちは、この先に起きた奇跡の“チコっち劇場”を知らない。

さあ、何があったのか？次は１８球目！

『次こそは……次こそは……！』

チコっちがバットを振った！！

カーーン！！

打球はセンターとライトの間に飛んでいく。

『あ……！ジュジュ先輩のところに飛んでいくわ！今度こそあたしの想いをキャッチして……！』

チコっちが祈るように打球の方向を見つめる。

「オー、ライっと！」

しかし、またしても先に追いついたのはライトのラッシー先輩だ。もうキャッチする体制に入る。

『そんなぁ……。また爆発ポケモンに捕られちゃうの？……ガックリ……』

チコっちはがっくりと下を向く。

だが、次の瞬間。

「ハッ……ハ～クション！！……うわぁ！弾いちまったぁ！！！」

ラッシー先輩はいきなりくしゃみをしてしまい、打球をうしろに弾いてしまった。

「まったくしょうがないなぁ。それ！」

センターのジュジュ先輩がすかさずその打球を捕った！

ちなみにこの時、打ったバッターの判定は「アウト」だ。フライは、ワンバウンドする前に誰かが捕ればアウトとなる。だから、今みたく例え弾いたり、こぼしてしまっても、他の誰かがワンバウンドする前に捕れば良いのだ。

ちなみに今のジュジュ先輩みたいに、誰かをサポートする技術を“カバー”と言う。

「ありがとうなジュジュ！助かったぜ！」

ラッシー先輩がお礼を言う。

「良いんだ。チコっちちゃんがあんなに頑張っているからね。僕も手を抜きたくないんだ」

その言葉に例の“暴走チコリータ”は喜んでいた。

『キャー♪ジュジュ先輩に褒められたわ～♪頑張っているだなんて……はずかしくて受け取れない言葉よ……。でもあたしの想いがこもったボールを手を抜かないで捕ってくれるなんて……♪幸せ過ぎるわぁ～！」

チコっちは顔を真っ赤にしてフラフラしている。
完璧に“メロメロ”状態だ……。（汗）

さあ、“奇跡”を目撃した後の１９球目！

『燃え尽きたわ……。望みが叶ってもう何も心残りはないわ……』

チコっちは燃え尽きた状態でバットを振る。

コン！

打球は左バッターボックスの外側に落ちる。

「ファール！」

ラプ先輩がコールした。

「チコっちちゃん。次はいよいよ1巡目最後のボールよ！気持ちを込めて振ってね♪」

ラプ先輩がアドバイスをする。

「ええ！そうします！」

チコっちが大きく返事をする。

さて、次がいよいよラストの２０球目！

ヒート先輩から始まってこれが１３０球目！！

どんな終わり方をするのか？

今バッティングマシンからボールが発射された！！

「イチッ、ニッ、サン！えい！」

カーーン！！

打球はゴロになって僕のところに転がる。

「最後だからちゃんと捕らないと！」

僕は前進して無難にキャッチした。

「終わったのね。“チコっち劇場”も無事終わったわ！」

チコっちが笑顔になる。

色々不安だらけだったけど、ご苦労様！

チコっちの打撃結果は、空振、空振、空振、右本、一ゴ、空振、ニ直、中安、右飛、空振、左安、右飛、ニ飛、空振、遊ゴ、一邪、左本、中飛、捕邪、ニゴだった。

「空振りも多かったが、それよりもあの2本のホームランや、鋭

いライナーは見事だった。この調子で頑張ってくれ！」

キュウコン監督は笑顔でコメントした。

「さてと、次はヒートからまた練習……と言いたいが、その前にみんなに話がある。一度ベンチ前に集合してくれ」

僕たちナインは言われた通り、駆け足で集合した。

「さて……。みんなよく練習頑張っているのが伝わって、私もうれしい限りだ。みんなの練習を見て、打順を決めたから発表したいと思う。きっとみんなも打順を固定させた方がもっと目標が明確になるだろう」

キュウコン監督の言葉にみんながうなずく。

「では、発表するぞ」

なんだか緊張するなぁ。僕は何番になるんだろう。

気になる打順は次回明らかになる！！

第３５話：「ついに始まる！？不安だらけの“チコっち劇場”！（汗）」の巻

チコっち：「よかったわぁ。ジュジュ先輩にあたしのボール届いて」

カゲっち：「色々あったけど、ご苦労様。ところで作者さん。お知らせって何？」

作者：「いやぁ。君たちナインの打撃練習を見てもらったからね。ちょっとした企画をね。その名も、“みんなもあさポケ野球部の監督になって、オリジナル打順を考えよう！”」

カゲっち：「とんでもない企画だね。（苦笑）」

作者：「下の説明を読んで、読者さんのみなさんも打順考えてみて下さい！」

ナイン：『お願いします！』

ルール

？ナインの打撃練習や打順の説明（第２２話に掲載）を参考に、１～９番まで考える。

？「個人的にこのポケモンが好きだからこの打順」というのもありにします。その時は応援メッセージをつけてあげるなど、このだめだめ作者にわかりやすくして下さい。

?:締め切りは12月27日の夜中の0時まで。

?:応募方法はこの小説の感想欄に書き込むか、直接メッセージを送るかにして下さい。作者やナインがしっかりコメントを返信します！

?:一人何回参加してもOKです！

?:結果発表は後日1～9番までのそれぞれのベスト3を発表する形を取りたいと思います。

※作者が気に入った打順は、作成者の名前を載せずに発表します！

カゲっち：「僕たちの打順待っています！」

第３６話：「みんなの夢へつなぐ……、“ドリーム打線”！！」の巻（前書き）

カゲっち：「いよいよ今回は打順発表だね！ワクワクだよ！」

ヒート：「俺がもちろん４番だよな？」

ラージ：「４番は俺だよ」

ラッシー：「俺に決まっているだろう！」

ラプ：「結果はどうなるのか？第３６話プレイボール♪」

第３６話：「みんなの夢へつなぐ……、“ドリーム打線”！！」の巻

いよいよ打順が発表されるぞ！僕は一体何番になるのかなぁ？

「それじゃ早速発表していくぞ。しっかりと聞いてくれ！」

『はい！！』

キュウコン監督の言葉にナイン全員が大きく返事をした！

なんだかドキドキしてきたぁ……！

「まずは……、１番セカンドカゲっち！！」

……え！？……僕が１番なの！？

僕はあまりに予想外だったので、驚いてしまった。

「……は……はい！熱い気持ちを燃やして頑張ります！！」

僕はカミカミになりながら返事をした。

周りのみんなも「頑張れよ！」とエールを送ってくれた。

「次に……2番ショート、ピカっち！！」

なんと、大事な1・2番コンビは、ルーキーの僕とピカっちになった。

ナインは「おぉ～～」と驚きの声を出す。

そしてピカっちも、口に両手を当てて驚いている。

「……はい！カゲっちくんやみんなへのつなぎ役……しっかり頑張ります！！」

ピカっちは笑顔で返事をした。

「次に……、3番レフト……ラージ！」

“クリーンアップ”の先陣の3番にはラージキャプテンが指名された。

「はい！4番では無いけど、キャプテンとして……4番と同じ気持ちで、しっかり打ちます！！」

ラージキャプテンが真剣な表情で意気込んだ。

「次に……4番ライト、ラッシー！！」

そして、あさポケ野球部の4番には豪快ハイテンションフルスイングのラッシー先輩が指名された！

「は……はい！ヨッシャァァー！あさポケの夢を乗せて、たくさんホームラン打ってみせます！」

嬉しさのあまり顔をくしゃくしゃにして、喜びを爆発させるラッシー先輩。

何度もガッツポーズを見せていた。

「まだ続くぞ。次に……5番ピッチャー……、ヒート！！」

続けて5番にヒート先輩が指名された。

「はい！……野球に賭ける想い、そして悲願に向けて、しっかりとバットにぶつけて頑張ります！！」

ヒート先輩が強く決意を述べた。

「次は……6番キャッチャー、ラプ！！」

ラプ先輩はクリーンアップから7～9番へのつなぎ役に指名された。

「はい！打撃はあまり得意じゃないけど、得意の“粘り打ち”で頑張ります！」

ラプ先輩も強く決意を語る。

「さあ、続いて……7番サード、チック！」

天才スイッチヒッターのチックは、7番となった。

「はい！ピースお兄さんの分もしっかり打ちます！」

チックもまた真剣なまなざしだ。

「そして、8番センター……ジュジュ！」

あさポケナイン一の“アベレージヒッター”のジュジュがなんと8番になった。

「何番でも自分の打撃を発揮出来るように頑張ります」

ジュジュ先輩はそう意気込んだ。

「最後に9番ファースト……チコっち！！」

そして、意外性抜群のチコっちは9番となった。

「はい！みんなに負けないように頑張ります！」

チコっちもしっかり決意を語った。

改めて打順を確認すると、

1番：カゲっち（二）
2番：ピカっち（遊）
3番：ラージ（左）

4番：ラッシー（右）
5番：ヒート（投）
6番：ラプ（捕）
7番：チック（三）
8番：ジュジュ（中）
9番：チコっち（一）

という打順だ。

キュウコン監督がこの打順に込めた意味を語り始めた。

「この打順のテーマは“夢へつなぐ”だ。みんなの持っている大きな武器が存分に発揮できるように考えてみたぞ」

キュウコン監督はナイン1匹1匹の姿を見渡すように話す。

「まずは1番のカゲっち。君は誰よりもボールとストライクの判別が上手な選手だ。きっと他校のメンバーも驚くだろう。ヒットを打って出塁することも1番打者の大きな使命だが、私はそれよりもフォアボールを選んでほしいと思う。たくさんのボールを相手ピッチャーに投げ出すことで、きっとナイン全体にピッチャーの特徴がわかると思うからだ」

僕の役割はヒットを打つことよりも、相手ピッチャーの特徴をつかむための“情報収集”らしい。

ジュジュ先輩とラージキャプテンがお互いの顔を見る。

おそらくジュジュ先輩の“作戦”と、キュウコン監督の“考え”が一致して驚いたのだろう。

「2番のピカっちはゴロを転がすのが上手だったので起用してみた。さらにこれからはバントの練習をさせたいと思う。小さいスピードスターとして、俊足を生かした小技が上手な選手を目指してほしい」

バントが上手になれば、彼女が目標としている“サポート役”に一層近づくだろう。

「次に3番のラージ。君の練習はまさに教科書みたいだった。一発を狙わず、確実に“つなぐ”ことを意識した打撃、さらに元々高いパワーのおかげで外野手の間を抜けるというのは、キャプテンとしての自覚が見えたぞ」

3番打者はランナーを返して、なおかつ自分も残る“万能選手”がピッタリだって言っていたからなぁ。

「そして4番のラッシー。君の思い切った豪快フルスイングじゃないとこの打順は出来ない。ドンドンあさポケの……ナインの夢を

乗せてどこまでも飛ばしてくれ！」

みんなの夢を乗せてどこまでも飛ばす……。その言葉にラッシー先輩は、いつものハイテンションでなく真剣な表情でうなずいた。

「そして5番のヒート。君は誰よりも野球に賭ける強い気持ちが伝わる。本来は4番を打たせてやりたいが、君はこのチームの“エース”だ。それだけでも十分チームの責任を背負っている。だからこれ以上のプレッシャーを与えたくないと私は思った。ラージが“キャプテン”、ラッシーが“4番”、ヒートが“エース”。こうやって別々にナインを引っ張るというのも、“チームワーク”じゃないか？」

ヒート先輩は燃える闘志の“エース”として、その投げる1球1球にみんなの夢を乗せてほしいということなのだろう。

ヒート先輩は納得した表情を見せた。

「6番のラプは打撃は苦手かも知れないが、その“粘り打ち”なら相手ピッチャーに与える影響は大きいだろう。それに打撃と言ってもただヒットを打つだけではない。バントやゴロを転がして、役目を“バトンタッチ”するのも立派な打撃だ」

ラプ先輩の役目はいかにクリーンアップが残したランナーを進めるか。ということらしい。

「7番のチックはラプがつないだ“夢”をバットに込めて右に左に打ってくれ。打順を考えると、相手も油断しているだろう。その相手にお兄さんから受けた“技術”、“夢”をぶつけてくれ！」

チックが7番にいることで、打順の中ではあまり大切に扱われない下位打線にも元気が出るはずだ。

「8番のジュジュは“アベレージヒッター”としてのプライドが許さないだろう。でも君がこの打順にいることでさらに“夢”はつながるはずだ。常に“打てる1番打者”の姿を見せてやれ！」

多分この言葉の裏側には、チームプレイの大切さを勉強してほしい目的もあるに違いない。

「最後に9番のチコっち。君の“意外性”あふれる打撃は正直私も驚いた。だが最も打てないと言われやすいこの打順で君のその“チコっち劇場”を見せ付ければ、みんなの“夢”にグッと近づくだろう」

確かに……。こんな何をするかわからない選手がいたら相手も嫌がるだろうなぁ……。

「これで私の言いたいことは全て話した。後は君たちが精一杯の練習を続けていけば、この“ドリーム打線”は無敵に限りなく近づくだろう。みんな分かってくれたかな？」

ナインは力強く『ハイ！』と返事をした。

「そうか……、嬉しいぞ。私はみんなにアドバイスをしてあげることしか出来ないけど、精一杯全力でアドバイスするからな」

キュウコン監督はうれしそうに笑顔を見せた。

ラージキャプテンが突然前に出てくる。どうやら円陣を組むようだ。

「よ～し！みんな！１匹１匹の力を合わせて……俺たちのこの“ドリーム打線”で、“カントリー・リーグ”の優勝目指そうぜ！！絶対勝つぞあさポケ！！！」

力強くラージキャプテンがあいさつした。

『オーーーー！！！！！』

みんなは力強く返事をすると、打撃練習の再開のため、また元の守備位置に戻っていく。

「なぁ……ヒート。俺たち……今年こそあさひポケ中学野球部を優勝させること出来るのかなぁ」

打撃練習の準備を始めたヒート先輩に対して、ラッシー先輩が話しかける。

「……出来るさきっと……。この……夢をつなぐ新あさポケ打線、“ドリーム打線”なら絶対にな……。俺たちに今出来ることは大会までしっかりと練習を続けることだ。決して手を抜くこと無く全力で練習をずっとな……！」

ヒート先輩が自分の赤いバットをじっと見つめる。

「そうだよな！わりぃ……変なこと聞いて！ヨッシャァ！俺も４番としてナインを引っ張るぜ！他校の野球部め！しっかり見てろよ！」

ラッシー先輩がガッツポーズを見せながら、ライトの守備位置に戻ってゆく。

……そうだ。

僕たちに今出来ることは、しっかりと練習を続けることなんだ……。

……努力して、努力して……、また努力していけば必ず……、

“夢”は叶うはずなんだ……。

カキーーン！

バシッ！！

カキーーン！

バシッ！！

カキーーン！

ワァァァァ！

キュウコン監督の話の後、僕らは空が夕日でオレンジ色に染まる

まで、打撃練習を続けた。

やがて打撃練習が終わり、ナインがグラウンド整備や道具の整理を行った。

「全員集合！」

ラージキャプテンの掛け声でナインが集まる。

「みんな今日もよく練習頑張ったな。特にルーキーの４匹にはまだ慣れない部分が多い中での全力の練習は素晴らしかったぞ」

キュウコン監督が褒めてくれた。
僕やピカっち、チコっちにチック……それぞれが照れていた。

「さて……、明日は水曜日だから学校と部活動は休みだな。しっかり体を休めると良いだろう」

読者のみなさんは今かなり驚いたかも知れないが、僕たちの世界の学校は、週４日制なのだ。

具体的には水曜日、土曜日、日曜日は休日になる。

また部活動の休日はそれぞれ違うが、野球部は水曜日に休みとなる。

「それと、もう一つ話がある。木曜日から部活終了から約2時間、このグラウンドで自主練習を許可する。日々の練習で足りないもの、磨きたいことはドンドン用具を使って練習して良いぞ！」

キュウコン監督の言葉にナインが喜びの表情を見せる。

「そんなところだな。では木曜日の朝練習に遅れるなよ。以上だ」

キュウコン監督のあと、ラージキャプテンの掛け声で今日の部活が終わった。

「すげぇな！去年ならこんなシステム無かったからうれしいぜ！俺は自主練習するぜ！」

ヒート先輩がうれしそうにする。

「俺もだ！４番としての役目をしっかり果たしたいからな！！」

ラッシー先輩も、背中から炎を爆発させるほどの喜びを見せる。

「それなら僕もこのスピードに磨きをかけなきゃ」

ジュジュ先輩もますますやる気を見せる。

「俺は苦手な守備を練習しようかな。キャプテンとしてチームの足を引っ張りたくないからね」

ラージキャプテンもワクワクの表情だ。

「……あんたたち熱血野球バカ軍団だけを残したら危険ね。あたしも練習に参加するわよ」

ラプ先輩も自主練習に参加するようだ。

するとその他の４匹の先輩たちが「え〜!?」と言うような表情を見せた。

……よほどラプ先輩のお仕置きが怖いんですね。

「先輩たちが練習するなら僕も参加します！もっともっと野球を上手になりたいんです！」

こんなチャンス滅多に無いからね！

「カゲっちくんが参加するならあたしも……」

ピカっちは顔を赤くしながら僕のそばに近づきながら、気持ちを伝える。

「僕も練習した〜い！やっぱりみんなと一緒なら楽しいからね」

チックもニコニコ笑いながら練習に参加することを話す。

「みんながいるなら……もちろんあたしも参加するわ」

チコっちもみんなと気持ちが一緒のようだ。

「……ということはみんな自主練習に参加するんだな。よ～し！頑張っていこうぜ！」

ラージキャプテンが掛け声をかける。

『オオーーー！』

ナインは一斉に声を出した。

なんだか木曜日が楽しみになってきたぞ！！

第３６話：「みんなの夢へつなぐ……、“ドリーム打線”！！」の巻（後書き）

カゲっち：「“ドリーム打線”かぁ。なんだかかっこいいや♪」

ラッシー：「俺が４番……くぅ！やったぜ！」

作者：「みんな。たくさんの読者さんのためにも精一杯頑張ってね！」

ナイン：『はい！』

作者：「それから前回の企画でちょっとお知らせです。応募の締め切り日を無くしたいと思います」

カゲっち：「つまり、気が向いたら応募という形だね」

作者：「やっぱりこういう企画はフリーな考えで行っていただきたいからね」

カゲっち：「そうだね♪僕もたくさんの応募待ってます」

第３７話：「奇跡の物語の始まり」の巻（前書き）

カゲっち：「新年あけましておめでとうございます！！」

ナイン：「今年もよろしくお願いします！」

作者：「新年特別企画！“野球するよ！”はカゲっちの誕生日編を更新していきますよ！！」

カゲっち：「早速第３７話プレイボール！！」

第３７話：「奇跡の物語の始まり」の巻

「……ん？もう朝なんだ……。なんだか眠たいや……。休みだし寝ていよう……」

読者のみなさんおはようございます。
今日は４月１１日の水曜日……。
僕の誕生日なんです……。

……そう……僕の……誕生日……。

「あ！！そうだ！！今日は僕の誕生日だったっけ！！こうしちゃいられないよ～！！」

僕は大切なことを思いだし、勢いよくベッドから起きた！

……そう、勢いよく……。

ドテーーーン！

「イテテテテ……。なんで朝からこんなドジしないといけないの～～？」

僕は勢いよく起きたせいで、ベッドがらバランスを崩し、そのまま床にぶつかってしまった。

「おはようカゲちゃん。今日は誕生日ね♪お友達もたくさん遊びに来るから、お母さん張り切ってお料理するわよ♪」

僕がリビングに入ると、すでにパーティ会場のように準備されていた。

僕はその光景に思わず目が点になってしまった。

「……もしかして、お母さんがこれを一人で準備したの……？」

僕は気になってお母さんに聞いてみる。

「そうよ♪だって今日は1年に1回しか来ない大事な日でしょ？しっかりとカゲちゃんをお祝いしたいって考えたら、これくらいなら出来るわよ♪」

お母さんは笑顔で教えてくれる。

「……ありがとうお母さん……。僕すごくうれしいよ……」

僕はすごくうれしくなって、感激のあまり“オーバーヒート”しそうになる。

「どういたしまして。それよりカゲちゃんもせっかくの誕生日を楽しく過ごすのよ。今日はあなたが主役なんだから」

僕はその一言に大きくうなずく。

ピンポーン

そのとき玄関のチャイムの音がした。誰かが来たみたいだ。

僕は玄関へ向かい、ドアを開く。

『カゲっちく～ん♪お誕生日おめでとう♪』

ドアを開けると、ピカっち、チコっち、チックがいた。

「ありがとうみんな♪こんな朝早くからどうしたの？」

パーティは夕方からなのに……。

「お誕生日プレゼントを見て欲しくて♪あたしたちみ～んなで考えたとっておきのプレゼントよ♪」

ピカっちがそういうと、僕の手をひっぱる。

「あ！外に行くなら……お母さん！ちょっと友達と出かけに行くよ～！」

すると、お母さんのが「いってらっしゃ～い♪」と言ってくれる。

「もう♪早く早く！！」

ピカっちはもう我慢出来ないという感じで僕の手を引っ張る。

一体どこへ連れていくのだろうか？

しばらくして、僕たち仲良し４匹組は“おかのもり”にたどり着いた。

以前僕とピカっちとチコっちできのみ集めをした場所だ。

「こっちよカゲっちくん♪この場所にお誕生日プレゼントがあるの♪」

ピカっちたちがそう言うと、さらに奥の方へと向かう。

「ここよ♪どう？ビックリするでしょ♪」

ピカっちやチコっち、チックが案内してくれた場所……、そこは“おかのもり”の中にある開けた草原だった。

とても広々としていて、きっと寝転がったて日なたぼっこしたら、とっても気持ち良いだろうなぁ。

そして、その先には花壇があった。

僕はそれを見て驚いてしまう。

「カゲっちくんの１３回目の誕生日プレゼントにちなんで、１３種類の花の種をここに植えたの。花が咲くと、カゲっちくんの笑顔も満開になるのよ♪」

ピカっちがニコニコ笑いながら教えてくれる。

「……ありがとうみんな！僕にこんなプレゼントを準備してくれるなんて……！」

僕はうれしくなり目がキラキラ輝いてしまう。

「喜んでもらえて良かった♪こっちも一生懸命みんなで考えて良かったわ」

チコっちの言葉にピカっちとチックもうなずく。

「それじゃあ一旦戻りましょう。朝早くからビックリさせてごめんね」

ピカっちがぺこりと頭を下げる。

「そんなこと無いよ。僕にとって最高のプレゼントだったよ！ありがとう」

朝からいい気分になっちゃった！
今日は一日良いことがありそう♪

そのあと僕たちは、あさひタウンに戻ることにした。

だがこの時僕は、自分の誕生日に起きた“奇跡”の物語が始まることに気づくことは無かった……。

第３７話：「奇跡の物語の始まり」の巻（後書き）

カゲっち：「一体何が始まるのかな？次回が楽しみ！」

作者：「僕にとっても読者さんの皆様にも夢の企画ですよ！」

ピカっち：「次回もお楽しみに♪」

第３８話：「２匹のヒトカゲ」の巻（前書き）

カゲっち：「ついに……来るんだね！」

作者：「うん！これは僕にとっても夢と奇跡としか言いようが無いよ！！」

カゲっち：「それでは第３８話プレイボール！」

第３８話：「２匹のヒトカゲ」の巻

ピカっちたちの共同の誕生日プレゼントはすごかったなぁ……。
みんな本当にありがとう！

今僕たち仲良し４匹組は、“おかのもり”を下ってあさひタウンに戻る途中だ。

「確か今日の夕方６時に、誕生日パーティーが始まるよね？その時にまた今度は一人一人お誕生日プレゼント渡しちゃうから、楽しみに待っていてね♪」

ピカっちが笑顔で話しかけてくれた。

「みんな……本当にありがとう。僕すごく幸せだよ……」

僕はうれしくて、しっぽの炎がユラユラ燃えている。

そんな感じで楽しくおしゃべりをしていたら、“もりのいりぐち

”に近づいてきた。

「もう、あさひタウンが近いわね……。……あれ？」

ピカっちが何かに気づいたようだ。

「どうしたのピカっち？」

「……ねぇ、あれ何かしら？」

チコっちがピカっちに何があったのか聞くと、ピカっちは“何か”に指さす。

指を差した方向にあったもの……

「……もしかしてポケモン？……それもヒトカゲじゃない……」

そう……、オレンジ色の体に、白いお腹、極めつけはしっぽの先から炎が灯っているポケモン、“ヒトカゲ”が僕らの立つ場所から５０Ｍ離れた場所に眠っていたのだ……。

「……確かに“ヒトカゲ”だ……。でもなんでこんなところで眠っているんだろう？」

僕は気になって、さっと駆け足で“ヒトカゲ”に近寄る。

「あの……もしもし？……こんなところで眠っていますけど、どうかしましたか？」

僕は“ヒトカゲ”の体をさすって起こしてみる。

すると……、

「……ん？……もう朝なの……？」

どうやら気付いてくれたようだ。

その“ヒトカゲ”はゆっくりと……まぶたを開いてくれた。

「……気付いたぁ♪良かったぁ♪ピカっちが君のこと見つけてくれたんだよ♪♪」

僕は満面の笑顔で“ヒトカゲ”に話しかける。

すると、その“ヒトカゲ”はまぶたをこすりながら……、

「……ありがとう……。ってどわぁぁぁぁぁ！！！？（汗）」

ビッ……ビックリしたぁ……。

意識がハッキリするや、“ヒトカゲ”は突然大きな声で叫びだした。

「き……君はだれなの！！？……タイヨウは！？……ポッポにニドリーノは！？……と言うよりここはどこぉ！？昨日はハナダシティのポケモンセンターで眠っていたはずなのにぃ！！」

かなりパニクった様子で、“ヒトカゲ”は叫びだす。

『えっ……えぇぇぇ！？……タイヨウ？ポッポ？ニドリーノ？……ハナダシティ？……ポケモンセンター？』

僕ら仲良し４匹組は彼の……“ヒトカゲ”から飛び出した、聞き慣れない単語の数々に首を傾げてしまう。

「……もしかして何かあったの？落ち着いてよく聞かせてよ」

僕は彼の身に何かあったことと感じ、彼に色々話を聞くことにした。

場所は変わって、“もりのいりぐち”から町の中心へ２００Ｍほど歩いた、大きな木がある“たいぼくのこうえん”。

僕たちは大木に吊り下がったブランコにそれぞれ乗って、彼の…“ヒトカゲ”くんの話を聞くことにした。

「まずは自己紹介しなきゃ。僕は♂のヒトカゲで名前は“ヒカゲ”。みんなからは、“カゲっち”って呼ばれてるよ。よろしくね♪」

「あたしは♀のピカチュウで名前は“ピチカ”。“ピカっち”って呼んでね♪」

「あたしは♀のチコリータで名前は“チコリ”。“チコっち”って呼んで♪」

「僕は♂のトゲチックで、名前は“チーク”。“チック”って呼ばれているんだ～♪」

僕たち仲良し４匹組は“ヒトカゲ”くんに自己紹介すると、順々に握手していく。

「よろしくねカゲっち、ピカっち、チコっち、チック。……俺は“ヒトカゲ”。ニックネームは付いていないから、これが俺の名前なんだ」

僕らはその言葉に驚いてしまう。なぜなら……、

「ちょっと待ってよ。君は種族名でみんなから呼ばれているの？」

種族名は僕らの世界では、人間界で言う“苗字”のようなモノだ。だから、僕たちにとってはある意味名無しのような感じになってしまう。

「そうだよ。……まあ俺の住む世界は人間とポケモンが一緒に暮らしているからね。俺たちポケモンは人間にとってかわいい“友達”であり、共に冒険する大切な“仲間”でもあるんだ」

彼の説明に僕らは興味深々となる。

僕らの世界は人間はいないけれど、小さいときから彼らの種族の姿を絵本で見たり、国語の授業でも彼が言うような冒険の話を学んだりしていたからだ。

「もしかして、さっき言っていた“タイヨウ”って言うのも人間

さんなのかしら？」

ピカっちがヒトカゲくんに聞いてみる。

「そうだよ。俺も人間と色々な場所へ冒険しているんだ。で、その人間の名前が“タイヨウ”って言うんだ」

僕たちはまた「そうなんだ」と感じた。

「その……“タイヨウ”さんや人間さんは、あたしたちみたいなポケモンとどうして冒険をするの？」

ピカっちが再び聞く。

「人間は俺たちポケモンにいろんな指示をしてバトルさせてどっちのポケモンが強いか？って競うんだ。実際そういう大会もあるらしいけど……。……それでいろんな人とバトルするために、自分の住む町を飛び出して冒険していくわけ。俺も冒険の途中でいろんな人のポケモンとバトルしたよ」

「ヒトカゲくんの世界ってなんだかすごい……」と僕ら仲良し４匹組は同時に感じた。

「つまり……、君や君の世界のポケモンはバトルのときに人間たちと“協力”しているんだね？」

「うん。バトルに勝てたときはうれしくて、共に喜んだりするよ♪」

僕の言葉にヒトカゲくんはニッコリ笑う。

「だとしたら、人間は僕らポケモンと仲が良いのね♪」

ピカっちはニコニコ笑いながら、ヒトカゲくんに聞く。

「……うん。大体はね……。……でも人間の中には俺たちポケモンにいじわるしたり、傷付けたりしても何とも思わないひどいのもいるんだ……」

ヒトカゲくんが悲しい顔で返事をする。

「君の世界にも“いじめ”はあるんだね……」

僕は暗い顔でそういう。

「……でもほとんどの人間はポケモンを優しくお世話してくれたり、傷ついたら体を治してくれたりするよ。さっき言った“ポケモンセンター”は俺の世界のポケモン達のための病院って感じかな」

ヒトカゲくんにまた笑顔が戻る。
そして彼の言葉に僕も安心する。

「じゃあ君はその病院で寝ていたんだ。君の大切な“仲間”や……、大切な“タイヨウ”さんと……」
「ハナダシティっていうのはきっと町の名前なんでしょ？」
僕とピカっちの言葉にヒトカゲくんは大きくうなずいた。

「ねぇねぇ。“タイヨウ”さんってどんな人なの？」

チコっちがヒトカゲくんに聞く。

「う～ん……。“タイヨウ”は普通の人間と違って俺やいろんな

ポケモンの話す言葉を理解出来るんだ。俺もさすがに最初は驚いたけどね……。それといつも元気なんだ！太陽みたいにとっても明るくてね！……たまにケンカしたりするときもあるけど……でもすんごい優しい気持ちを持っていて、勇敢だよ！なんたって俺たちポケモンをいじめる人間から守ってくれるからね！」

ヒトカゲくんはピョンピョンジャンプして話してくれる。

「でもいっちばん好きなのは……、やっぱりタイヨウの背中に乗るときかなぁ……。タイヨウの背中ってあったかいし、すごく落ち着くんだよね～♪」

ヒトカゲくんがニコニコ笑い、ブランコをこぎながら、話してくれる。

その言葉にピカっちが顔を赤くしていく。

『何となくわかる気がするわ。あたしも、カゲっちくんに抱きしめてもらうとすごく落ち着くし、心が温かくなっていくから……／／／／／』

ピカっちは僕の方を見ながら、そんな風に考えていた。

彼のお話が一通り終わったので、続いて僕たちのことを話す。

ここはポケモンたちがのんびり暮らしている平和な世界、“ポケモンカントリー”だということ。

そしてこの町が“あさひタウン”ということ。

さらに僕たちがヒトカゲくんを見つけたときのこと。

僕たち4匹組のことを一通り話した。

ヒトカゲくんはその一つ一つを、興味深々な様子で聞いてくれた。

「じゃあやっぱり……俺は自分の世界とは、全く違う場所に迷い込んじゃったんだ……。一体どうしたら元の世界に戻れるんだろう……」

ヒトカゲくんは下を向いて、ため息をしてしまう。

するとピカっちが、彼の前にやってきた。

「ねぇ……ヒトカゲくん？……あたしたちもあなたが自分の世界に戻れる方法を探してあげるわ……。だから……だから一人で悩んだりしないで……」

お世話好きな性格だから、きっとヒトカゲくんのことを放って置けないんだろう。優しく彼の頭を撫でながら聞いてみる。

「え……？一緒に戻れる方法を探してくれるの？本当に……？」

ヒトカゲくんはピカっちの目を見ながら迷いだしてしまう。

『まだ出会ってそんなに時間も経っていないのに、……そんな簡単に信用しても良いのかな？……もしかしてだまそうとしてるんじゃないのかな……？』

仮にもここは自分の知らない世界だ。

簡単に僕たちの言うことに信用出来ないでいた。

するとその時、

「一人はみんなのために……。みんなは一人のために……」

ヒトカゲくんは声のした方を向く。

そこには僕がいた。

「……何なのその言葉？」

半分冷たい言い方をしてヒトカゲくんが聞く。

「……何て言ったら良いのかな？……えっと……みんなのこと考えないで一人でわがままな行動をすると、みんなが困るから、みんなのことを考えて行動してねって言うこと。逆に一人が困っているときはみんなで助け合うことが大事だよってことかな……」

僕は苦笑いしながら、恥ずかしそうに話す。

「だから、僕たちは君が困っているのを放って置きたく無いんだ

よ。一人じゃ出来ないことも、みんなで協力すればきっと出来るはずだと思うんだ」

僕はヒトカゲくんに真剣に話す。

「それにあたしたちは、もうあなたを大切な“友達”って思っているの。それなのに、困っている“友達”を放っておくわけにはいかないわ！」

ピカっちも真剣に話す。

チコっちやチックも、僕らの言葉にしっかりうなずいた。

「……ありがとうみんな。なんだか俺は勘違いしていたみたい……。でも、そこまで信用してくれるなら、一緒に元の世界に戻れる方法を探してほしい！！」

ヒトカゲくんはお願いするように言う。

「もちろんよ“カゲポー”くん！あたしたちもそうしたいわ♪」

ピカっちはニッコリ笑いながらヒトカゲくんに“約束”した……

……ん！？なんなんだ今の“カゲポー”って？（汗）

「ヒトカゲくん…　…ニックネームが無いから、あたし考えたの♪……だってその方がかわいいじゃない♪」

ピカっちがニコニコ楽しそうに言う。

「えぇぇぇぇ！？……ちょっと恥ずかしいなぁ……。俺、そういうこと慣れてないし……／／／／／」

ヒトカゲくんは恥ずかしそうに落ち着かなくなる。

……僕はその様子を見て、昔のことを思い出して苦笑いしてしまう。

『僕もある日突然「カゲっちくん♪」って呼ばれたときはビック

リしちゃったけ……』

しかし、ヒトカゲくんは静かに笑い始めた。

「……でも俺のことをそこまで考えてくれるなんてうれしいよ……。ありがとうみんな……」

ヒトカゲくんはちょっと、ウルウルしていた。

「それじゃあ決まりね♪これから仲良くしましょうねカゲポーくん♪」

こうして僕たちはヒトカゲくん……、いや、カゲポーくんと友達となったのである。

第３８話：「２匹のヒトカゲ」の巻（後書き）

作者：「なんと！！ナエトル先生の“ポケモンマスターへの旅路”からカゲポーくんこと、ヒトカゲくんが新年特別企画のスペシャルゲストとして、登場してくれました～！！！」

ヒトカゲ（カゲポー）：「よろしくお願いしますエースさん♪読者の皆さん♪」

作者：「やっぱりうちの“ダメダメヒトカゲ”と違ってすごくカワイイよ♪ダブルヒトカゲなんて夢みたい……」↑大のヒトカゲ好き

カゲっち：「……言い方が気になる……。えっと……ヒトカゲくんが登場する“ポケモンマスターへの旅路”は作者さんのお気に入り小説なので、みなさんもぜひ読んでみて下さい！！」

作者：「ちなみにこの“カゲポー”というニックネームは、この小説のために考えていただきましたナエトル先生のアイデアに、ちょっと付け足したコラボならではのニックネームです！！ナエトル先生！ニックネームのアイデア、そして今回のコラボに快くご協力していただき、本当にありがとうございます！！」

第３９話：「カゲっちの苦しみとカゲポーたちの願い」の巻（前書き）

カゲっち：「さあ！ますます盛り上がって来ました！新年特別企画♪」

ピカっち：「早く読みたいわ♪」

カゲポー：「早速第３９話プレイボールだよ♪」

第３９話：「カゲっちの苦しみとカゲポーたちの願い」の巻

僕たちの知らない世界ってまだまだたくさんあるんだなぁ……。
いつかそんな世界に行けたらいいなぁ♪

「カゲっち～♪俺とポケモンバトルしない？」

互いのことを話し終えたあと、カゲポーくんが突然こんなことを言い出した。

「僕と……ポケモンバトル？どうして……？」

僕は表情を曇らせながら、カゲポーくんに聞く。

「カゲっちが俺と同じ“ヒトカゲ”だからかな～？それに別の世界に住むポケモンたちとバトルするなんてこんなチャンスあるわけ無いから、ワクワクするんだ！」

カゲポーくんはしっぽをゆらゆら揺らしながら、笑顔で理由を話してくれた。

「カゲっちくん。カゲポーくんがこんなにやりたいって言っているから、バトルしてあげても良いんじゃない？」

ピカっちもニコニコ楽しそうに言う。

いや、ピカっちだけではない。

チコっちもチックも「バトルすれば？」という顔をしている。

でも僕は迷っていた。

本当ならバトルしてあげた方が良いのかもしれないし、僕だってカゲポーくんがどんなバトルをするのか楽しみだ。

『……でもどうしてもバトルという言葉を聞くと、あの嫌な“事件”を思い出してしまう……』

これは僕の悪い点だ。
いちいち自分の犯したミスを何度も未練がましく振り返ってしまう。

おとといあんなにラッシー先輩に、“過去”を乗り越えろを言われたばかりで、みんなもそのためのバックアップをすると言ってくれたのに……。

「カゲっち！バトルしてくれるの～？」

カゲポーくんがしっぽを振りながら元気よく僕に聞く。

「ごめん……カゲポーくん……。僕……あることがきっかけでポケモンバトルはしないって決めているんだ……。だから……」

僕の出した答えは「バトルをしない」だった。

するとカゲポーくんは機嫌を損ねて騒ぎ出す。

「えぇぇぇぇぇ!?なんでなんで～!?俺こんなにワクワクしているのに!何があったって言うのさぁぁ!?」

僕の“過去”を知っているピカっち、チコっち、チックは暗い顔をして黙って僕のことを見ている。

「ねぇカゲっちってば!!どうしてポケモンバトルが出来ないのか教えてよ!」

納得のいかないカゲポーくんが僕の体をつかみながら、怒るように聞く。

「……実は昔、大切な親友の“夢”を奪ってしまったからなんだ……」

僕はゆっくりと彼に教えた。
ブースのこと。あのヤルキモノにザングースに襲われた事件のことをみんな話した。

「……そうか……。そんなことがあったんだ。……ごめんカゲっち。俺わがまま言ってバトルしたいだなんて言って……」

カゲポーくんは、申し訳なさそうに言う。

「いや。悪いのは僕だよ。僕がダメダメな気持ちを持っているから、みんなに迷惑かけちゃうんだよね……。カゲポーくんのお願いを受け入れないなんて……本当にダメダメだよね……」

正直な気持ち、自分が情けなくてしょうがなかった。あんな“事件”が起こらなかったら、きっと今でも楽しくバトルしているのに、それが出来ない自分が憎たらしいほど情けなかった。

「……でもやっぱり変だよ！！」

カゲポーくんが真剣な表情で、強い口調で僕に言う。

「だってカゲっちは何も悪いことなんてしてないじゃない！……悪いのはどう考えても、そのヤルキモノにザングースじゃん！どうして大切なブースやピカっちたちを守るために一生懸命頑張ったカゲっちが傷つく必要があるのさ！！」

「……」

カゲポーくんの言葉に黙って下を向く僕。

確かに彼の言う通り、僕は大切な友達を守っただけだ。
それにも関わらずどうして何年間も苦しい思いをしなきゃならないのだろうか？

「それに……それに！！カゲっちが守っていなかったら、もっとひどいめにあっていたんだよ！？……カゲっちはみんなを助けた“勇者”じゃないか！！……自分が犯したミスよりも、友達を助けたことにもっと自信を持つのが当たり前じゃん！！」

彼は僕の心に叫ぶように強く強く話す。

「カゲっちくん……。あたしもそう思うわ……。カゲっちくんは確かにダメダメなところが多いかも知れないけど、……そのかわり一生懸命頑張る姿は誰にも負けていないわ……。それにあたしたちもブースくんのことを聞いたときはすごく悲しかったけど、……それでもブースくんは今でもリハビリ頑張っている。……だからあたしもいつまでも立ち止まったままじゃいけないって考えているのよ……」

ピカっちは悲しくて辛い気持ちを我慢して、辛い“過去”を乗り越えようとしている……。

「あたしだってピカっちと同じ気持ちだわ。いつまでも時間を止めていたらダメだと思うの。……ラッシー先輩が言っていたように

“過去”を乗り越えなきゃいけないと思うわ……」

チコっちもゆっくりではあるが、確実に一歩ずつ前に進もうとしていた。

「カゲっち。僕もピース兄さんの悲しい出来事を知ってから、野球をしなくなったって言ったよね。でも今はこうして大切なチームメイトと楽しく野球が出来るようになったんだ。……カゲっちの“夢”を追いかける姿に辛い過去を乗り越えなきゃって感じたからだよ？……だから君だって絶対にポケモンバトルが出来るはずだよ？」

チックは紛れも無く、過去を乗り越えることが出来ると証明した大切な友達だ。

みんなが僕に強いメッセージを送ってくれる。

……でも僕はどうしても、過去のトラウマを乗り越える一歩目が踏み出せずにいた……。

みんなの眼差しは真っすぐ僕の方に向けられている。

まるで過去を乗り越える一歩目を後押しするかのように……。

「カゲポーくん……みんなごめんね……。……僕には出来ない……。……どうしてもバトルはしたく無いよ……。……どうしてかはわからないけれど……、でも僕には出来ないよ……」

僕の目から自然と涙があふれてくる。

どうしてかはわからないけれど、僕の心は誰にも開くことの出来ない扉で閉められているようだった。

みんなの温かい励ましがあるのにも関わらず、なぜか僕の出した答えは否定的な意見だった。

「どうしてだよ!!カゲっちには僕たちの気持ちがわからないの!?ピカっちもチコっちもチックもみ～んな辛い思いをなんとか乗り越えようと頑張っているのに!!どうしてカゲっちだけは後ろを向いたままなのさ!!……俺、同じ“ヒトカゲ”として情けないよ

！！……カゲっちの弱虫！！」

カゲポーくんはしっぽの炎を強く燃やしながら、僕に怒り始めた。

「うるさい！……うるさい！うるさーい！！……カゲポーくんは何もわかっていないよ！……僕だって本当はポケモンバトルがしたいよ！……でもね……あんな事件を味わって……しかも自分のミスで大切な親友の夢が叶えられないようにしたんだよ！！？……それなのにどうして僕が悪くないなんて言えるのさ！！！？」

ハッキリ言って最悪な状況だった。

僕と同じ“ヒトカゲ”だからこそ、カゲポーくんは僕になんとか前を向かせようとしていたのに、僕はそれを拒否してしまったのだ。

……だがそれだけでは済まなかった。

「ピカっちもチコっちもチックもそうだよ！！君たちはほのおタイプのポケモンから、ほのおタイプの技が使えない悔しさを全くわ

かっていない！！……ブースは僕に正々堂々ほのおタイプの技で勝ちたいって言っていたのに……それが出来ない悔しさをわかっていないよ！！……なのにわかっているような言い方して……」

僕はみんなを……涙であふれている目でじっとみんなを睨みつけるように、心を傷つける残酷な言葉を放ったのである。

その言葉を聞いた瞬間、ピカっちがその場で泣き崩れてしまう。
みんながそれを見て慌てだす。

僕と対峙するように立っているカゲポーくんがその様子に怒りを隠せずにいた……。

……そして、

「……なんなのさ……。……俺は、……ピカっちたちはカゲっちにちょっぴり勇気を出して欲しかっただけなのに……。……どうしてそんなひどいこと言うのさ……。そんな風に君はずっとみんなを“友達”を見ていたんだね……。そんなの優しい心を踏みにじるただの裏切りだよ……」

一歩一歩カゲポーくんが僕を睨みながら近づいてくる……。

ハッキリ言ってどこで、気に入らない相手を傷付ける殴り合いが始まってもおかしくなかった……。

でも僕だってそこまで相手を苦しめたくはない。

「“えんまく”！！」

僕は思い切り黒い煙幕をカゲポーくんやピカっちたちのいる方に向かって放った。

「ゴホッゴホッ！……みんな大丈夫！？……くっそ～！カゲっちがこんなことするなんて……！」

カゲポーくんやみんなは煙幕が晴れるまで待つことにした。

しばらくして煙幕は晴れたが、そこに僕の……カゲっちの姿は無かった……。

恐らく技を放ってからこの場を離れたのだろう。

そのあと、カゲポーくんたちはピカっちの提案で、彼女の家に向かうことにした。

だが、空気はあまりにも気まずい雰囲気だった。

「カゲっちくんごめんね……。あたし……カゲっちくんがそこまで苦しんでいることに気付けなくて……。……あなたの言う通り、あたし……何もわかっていなかったかも知れないわ……」

特にピカっちのショックはあまりにも大きすぎた。

もう、チコっちやチックがどれだけ励ましても泣き止む様子は感じられない。

「……せっかくのお誕生日なのに……、気分を損ねること言ってごめんね……」

今日は４月１１日。天気は今日も晴れ。

夕方からはみんなを楽しい幸せな時間が待っていたはずなのに、友情さえ壊れそうな状態に陥っていた……。

第３９話：「カゲっちの苦しみとカゲポーたちの願い」の巻（後書き）

カゲっち：「最悪だ……（涙）」

作者：「全く妙な意地張っちゃダメじゃん」

カゲポー：「このまま俺たちどうなっちゃうんだろう……？」

第４０話：「戦わなければならない……！！」の巻（前書き）

カゲポー：「このタイトルはどういうことなのエースさん？」

作者：「今回はある急展開が待っているんだよ！」

カゲポー：「え！？すごく楽しみだよ！早速第４０話プレイボール！！！」

第４０話：「戦わなければならない……！！」の巻

「ハァ……ハァ……ハァ……」

僕は“えんまく”を放った後、ずっと走り続けていた。

バタン！

「うわ！」

何かにつまづいたのか、僕は転んでしまう。

そして立ち上がることなく、その場でじっとしてしまう。

「うぅぅぅ……。みんなごめんね……。僕を励ましてくれてたのに……。ピカっちごめんね……うぅぅぅ……」

僕は泥だらけの体を起こしながら泣いていた。

どうしてみんなの励ましに応えなかったんだろう……。

あんなこと僕が思うはずが無いのにどうして？

僕は自分を責めていた。

「謝らなきゃ……。みんなに謝らなくちゃ……。そして嫌でも良い……。頑張ってカゲポーくんとポケモンバトルしなくちゃ……」

僕は涙を拭き、じっと前を見つめてそう決心した……。

僕がいる場所は、“たいぼくのこうえん”から、さらに町の中心部に向かって１Ｋｍ離れた、“もみじのみち”と呼ばれる商店街へ続く道。“しぜんこうえん”とは逆の方向にあり、ほのおタイプのポケモンの家がたくさんあるのが特徴だ。そして秋になると、これでもかと、もみじで道が埋まってしまう。

昔、この中にブースの家族が住んでいた家や、店もあったのだ。

「こんなところまで来たんだ。ブースが引っ越してからここに来

てなかったなぁ……」

僕はキョロキョロしながら、商店街へと向かう。

「少し疲れたから、ちょっと“たきびこうえん”で休もうかな？」

僕は道の脇にある“たきびこうえん”に入った。

ここはそんなに大きくないが、その名の通り公園の中の3ヵ所で、常にたき火がたかれているのが特徴だ。

ほのおタイプの子供の憩いの場として、よくブースと過ごしたっけ……。

「……やっぱり落ち着く……。このたき火って何でこんないい気持ちになれるんだろう？」

僕は公園の中心の大きなたき火のそばのベンチでゆっくり休んでいた。

「僕はみんなの気持ちをわからず、あんなひどいこと言っちゃった……。なんて謝ったらいいかな……」

僕は頭を冷やしながら、気持ちを落ち着かせて謝る方法を考えていた。

ドカッバキッ！

「うわぁ！！」

僕が考えていると、何者かに背後から思い切り攻撃されてしまった。

僕は倒れてうずくまる。

「フハハハハハ！……なんだこのヒトカゲ！？俺たちが近づいているのに何にも気づかないなんて……！さっすが弱小種族だなぁ！！」

「そう思うだろ？まぁ、ワカシャモの“メガトンパンチ”は強烈だからなぁ！」

「へっ！俺だってコイツにぶち込んでやるぜ！“かみなりパンチ”！！」

だれかが攻撃してくる。

バリバリバリバリ！

「うわぁぁぁぁ！！！！」

僕は“かみなりパンチ”を受け、遠くに吹き飛ばされてしまった……。

「くぅ……。ゲホッゲホッ……！だ……だれだ……？」

僕はフラフラになりながらもなんとか立ち上がることが出来た。

「おやおや？どっかで見たことがあったと思ったら昨日俺の不意打ちで倒れた弱小ヒトカゲじゃん？」

僕は驚いた。そこにいたのは、昨日の体育の時間に僕を殴り気絶させたゼニガメくんがいたのだから。

「ん？あいつと知り合いなのか？」

そばにいたワカシャモが聞く。彼と僕は面識が無い。

「知り合いなんかじゃねぇよバーカ！アイツは俺と同じクラスなだけだよ！昨日“褒められるのがうれしくないのか”って聞いて来たからイラっときて殴っただけだよ！！」

「はぁ？そんな生意気な口聞いたのかこのクソトカゲは？だったらますますお仕置きしねぇとならねぇなぁ！」

ゼニガメくんの言葉にデンリュウが反応する。恐らく“かみなりパンチ”で攻撃したのはこのポケモンだろう。

『……出来れば話し合いで終わりたいけど、彼らの様子を見る限りそんな平和な方法で解決できないや……』

僕はスキを見てその場逃げることにした。

……バトルはしたくないから……。

だが、僕の考えた作戦は通用しなかった。

「ぐわぁぁ！！」

僕の前にはあのワカシャモがいた。しかも“にどげり”で僕のお腹を蹴飛ばした。

『い……いつの間に……！！？』

僕はまたうずくまる。

「抵抗しないで良いのか？“でんじは”！」

「ぐわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

このデンリュウの技の威力普通じゃないぞ……！

「フハハハハハ！やっぱりヒトカゲは弱っちぃからストレス解消にちょうど良いや！！」

「ぐぅ……！は……放せ…！」

デンリュウが僕のしっぽを強く踏みつけながら笑いとばす。

僕は必死に痛みと戦いながら、抵抗した。

「フン。おまえたちヒトカゲは臆病者の集まりだ。……このままこの炎を消してやるぜ！」

「！？」

ゼニガメくんが僕のしっぽの炎めがけて“みずでっぽう”を繰り出そうとしている。

「そ……そんなことさせるもんかぁぁ！！」

僕はとっさに自分の周りに炎を放った。そして……、

「“ほのおのうず”！！」

本来この技は相手の周りに炎を放ち、相手を動きを封じるためにあるのだが、自分の周りに放つことで自分を守る防御技にすることだって可能だ！！

「アッチチチチ！……テメェよくもやりやがったな！！！」

さっきまで僕のしっぽを踏んでいたデンリュウが多少のダメージを受けていた。

『さて……ここからどうするかな……？』

僕は“ほのおのうず”の中で次の作戦を考えていた。

本来なら戦うなんてことはしたくないけど、かといってこのダメージを受けた体で逃げ切れそうにもなさそうだ。

『しょうがない……戦おう……。戦わなきゃしっぽの炎が消されてしまうかも知れない……』

さっきのゼニガメくんの行動は本気みたいに感じた。
だったらますます戦わなきゃ……！！

しばらくして、“ほのおのうず”の効果が切れた。

僕は彼らの前に姿を表す。

「ようクソトカゲ！覚悟は出来てるんだろうな？俺たちに向かってあんなふざけたマネしやがって！！」

デンリュウがイライラした様子で、僕をにらみつける。

「できたよ。ただ僕だって負けないよ……。それにさっき僕たち“ヒトカゲ”が弱小だって言ったよね？じゃあみせてあげる！僕たち“ヒトカゲ”の強さを！！」

僕はしっぽの炎を激しく燃やしはじめる！！
そしてデンリュウやワカシャモにゼニガメくんに向かって突撃し始めた！！

「おもしれぇ！！見せてもらおうじゃんかよ！！」

デンリュウも真っ向からぶつかりに来た！！

一方ここはピカっちの家だ。

ピカっちの家はきのみを使った料理店だ。
店先にも「クックピカピカ」という飾りがついた看板が置いてある。

「カゲっちくん……どこ行っちゃったのかしら……？」

ピカっちは落ち着かない様子で窓を見る。

「そうね。あれからずいぶんな時間が経っているから、かなり遠い場所まで行ったのかも知れないわね」

チコっちはピカっちの店のメニューの、「モモンもち」を食べながら答える。

「……ごめん。俺が変なこと言ったせいでみんなに迷惑かけちゃって……」

カゲポーくんはじっと申し訳なさそうに言う。

「何言っているのよ。あのダメダメヒトカゲはあれくらい厳しいこと言わなきゃずっと後ろを向いたままだわ！カゲポーくんは悪い

ことなんて何もしてないわよ」

チコっちがカゲポーくんに優しく肩をポンポン叩く。

「それよりも、あなたがちゃんと元の世界に戻ることをサポートするって約束したんだからあたしたち頑張るわよ！！」

チコっちの言葉にみんなが元気を出す。

「……そういえばさぁ。ピカっちとカゲっちって恋人関係なの？」

カゲポーくんの言葉にピカっちが顔を真っ赤にする。

「……どうしてそんなこと聞くの……？」

ピカっちがカゲポーくんに聞く。

「だってカゲっちがあんな態度見せてから、ずっとここに来るまで泣いていたじゃん。……それにさっきもずっと窓を眺めていてさ

ぁ。普通の友達関係とは思えないよ？」
「そ……、そうかしら？」

ピカっちが顔を真っ赤にしながらそういうと、みんなが首を縦にふる。

「そうね……。カゲっちくんは泣き虫だし、ドジばっかりしてみんなを困らすダメダメくんだけど……、でも誰かを大切にする気持ちは人一倍強く感じるわ……。みんなはカッコイイ男の子が好きって言うけど、あたしは欠点だらけだけど、何かに一生懸命な彼は大好き♪」

ピカっちがニコっと笑い答える。

「誰かを大切に思う気持ちかぁ……。逆にその気持ちが強すぎて苦しい過去を乗り越えられないのかも知れないなぁ……」

カゲポーくんがじっと窓を眺める……。

『カゲっちくん……。ケガとかしないでね……。あたしたち怒ってないからね……。いつでも戻ってきて良いからね……』

ピカっちは窓の外を眺めながら祈るように想いつづけた。

こちらは“たきびこうえん”だ。

「うおらぁぁぁぁ!!!“かみなりパンチ”!!!」
「えーい!!そんなの“きりさいて”みせる!!」

カァァァン!!

デンリュウの“かみなりパンチ”に、カゲっちの“きりさく”がぶつかり合い、剣と剣がぶつかったような音が響き渡る!!

「……けっ!!つまんねぇ!なんでこんなヤツの技と互角なんだよ!!」

デンリュウは自分の技で僕にダメージを与えることが出来なかっ

たことに、かなりイライラし始める。

「デンリュウ下がってな！こんなチビ俺が片付けてやるぜ！！」

後ろにいたワカシャモがデンリュウに声をかける。

「なんだよ？ウズウズしてるのかよ？……ったくしょうがねぇなぁ……。そのかわりフルボッコにしてやれよ！」

デンリュウがいったんワカシャモと交代する。

「ようチビトカゲ！！テメェとの格の違いを見せてやるぜ。かかってきな！」

ワカシャモがかなり挑発する態度をみせる。

『アイツは一番手強いかも知れないな……。あの技の威力とスピード……。かなり練習をしているみたいだ』

ワカシャモという種族は修業好きで有名だ。気をつけなきゃ大ケガは避けられないな！！

『どんな作戦で僕を狙うか分からないな……。こういうときはこの技だ！！』

僕は自分の体をガードするしぐさをみせる。“まもる”を繰り出したのだ。
これでアイツの作戦を観察しようと考えたのだ。

「うぜぇ！！“まもる”なんてしやがって！こっちは“つばめがえし”を繰り出してやってぶちのめそうと考えたのによ！！」

アイツの“つばめがえし”の威力はこっちにダメージにはならないが、付近にあったベンチを粉々にしている。

『やっぱりパワーは強そうだ……。ああいう力ずくで攻撃するヤツにはこれだ！！』

僕は「カゲェ～♪」とかわいく“なきごえ”を繰り出す。

「うわぁ！アイツナメたマネしやがって。“まもる”といい、“なきごえ”といい、自分の身を守るようなことしかしねぇや！！」

ワカシャモは次第に冷静さを失う。

僕はその姿に鼻で笑ってやった。

「テメェ！笑ってんじゃねぇよ！！うぉらぁぁぁ“だいもんじ”！！」

次にアイツが繰り出したのは“だいもんじ”。

「そんな技で僕は倒せないこと教えてあげるよ。“りゅうのいぶき”！！」

この技は小さい頃、いとこのハクリューに教えてもらった技だ。リザードン系とカイリュー系は昔は同じドラゴンの生態系で生きてきたので、今でも優秀な個体は互いの種族のグループの技は練習すれば、取得可能だと何かの本で読んだことがある。本当に確率は低くて、１５万匹に１匹いるかいないからしいんだけどね……。

何にせよ、何かと僕のバトル経験では使い勝手がいいのは事実だ！

ドドドドドドド！！ドカーン！！

さて、“だいもんじ”と“りゅうのいぶき”がぶつかり合う！！

「うぉ！？バカな？“だいもんじ”が押されてるだとぉ！！」

ワカシャモは驚きを隠せない。

いくら僕が優秀な個体だといえども、結局はヒトカゲの繰り出す技だ。

ワカシャモの方が一つ一つの技の威力が高いに決まっている。それに“だいもんじ”はほのおタイプでも屈指の大技。そんなのが、“りゅうのいぶき”に負けるはずないのだ。

「クッソテメェ……！何しやがった！！！」

ワカシャモが僕に聞く。

「特別何もしてないよ？……ただ一つ言えるのは……ワクワクしてるんだよ！久しぶりのポケモンバトルにね！！」

僕のしっぽの炎は強く燃えてるけど、さらにユラユラ燃えている。まさにワクワクしている状態だ。

「さてと、そろそろやっつけちゃおうかなぁ？僕の種族をバカにしたお礼はたっぷりしなくちゃね！」
「なんだと？調子にのるんじゃねえよ！！」

ワカシャモは完全に冷静さを失っている。このスキにあの技だ！！

「冷静さを失ったらポケモンバトルは勝てないよ！“どろかけ”！！」

僕は思い切り地面を蹴り、泥をワカシャモの顔にぶつける！！

「ぐぁぁ！目に入りやがった！うぜぇぇぇ！！！」

よし！これでこっちの勝利はほぼ決定だ！！

「最後はこれだぁ！“ほのおのパンチ”！！」

僕は炎が燃え上がる拳でワカシャモを思い切り攻撃した！！

「ぐわぁぁぁ！！」

ほのおタイプにこの技はあまりダメージは無いけど、それでもパンチの威力は強くワカシャモはＫＯ状態になった。

「まずは僕の勝ちだね！次は誰が戦うの？」

僕は早く次の相手と戦いたくてウズウズしていた。

「次は俺だ。ケッ情けねぇな。こんなチビトカゲにやられるなんてよ！！」

次の相手はデンリュウだ。かなりイライラした様子でこっちをにらみつける。

『デンリュウか……。スピードなら僕が勝てるかも……。ただ問題はやはり威力の高い技だな……』

さっきのような作戦は見破られそうだし、徹底的に先手を取って攻撃する方が良さそうだ……。

「先手必勝！まずは“かえんほうしゃ”！！」

僕は勢いよく“かえんほうしゃ”を繰り出そうとした……。

だが、次の瞬間！

ビリリ！

「うわぁぁ！！」

僕は全身のしびれに襲われ、その場に倒れ込んでしまう。

『そういえば、不意打ちで“でんじは”を受けたんだっけ……。なんだっていきなりこんなときに……』

僕は何とか立ち上がろうとしたが、何かが攻撃してきた！！

「フン。俺はあのニワトリ野郎とワケが違うぜ。消えな……！」

僕は慌てて“まもる”を繰り出そうとした……が間に合わず、彼の“はかいこうせん”を至近距離で受けてしまった……。

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

僕は６０ｍは軽く吹き飛ばされ、公園内の土管にぶつかってしまった。

「うぅぅぅ……がぁ！！」

さらに悲劇は続いた……。“アイアンテール”で何度も背中を攻撃された。

「うぅぅぅ……がぁ！！……うわぁぁ！！」

何度も公園中に１匹のヒトカゲの悲痛な叫びが響く。

「どうした？さっきまでの勢いは？……ちょっとは手応えのある野郎だと思ったのに、たかだか“でんじは”の効果が少し出ただけでダウンか？」

デンリュウがニヤリと笑いながら、何度も僕の背中を蹴り飛ばす。

「ぐあぁぁ！！……い！！」

蹴られる度に激痛が伝わる。

「これだから“ヒトカゲ”は大嫌いなんだよ！俺たちの仲間だったヤツも、いじめの対象に妙な情けをかけやがったから、徹底的にフルボッコにしてやったぜ。だいたい甘ぇんだよ考えが！！強いヤツが弱いヤツをいじめて何がわりぃ！？」

僕はじっとデンリュウをにらみつける。

「……その“ヒトカゲ”は自分の間違いに気づいたんだ……。みんな一人じゃ生きていけないって……。他のポケモンと仲良くしなきゃいけないってことにね……」

僕はうれしかった……。自分と同じ種族の仲間が優しさに気づいてくれたことに……。

“間違い”と一生懸命闘ってくれたことに……。

「僕は負けない……。優しさを踏みにじった君たちには！！“かみつく”！」
「ぐわぁ！！」

僕はデンリュウがひるんだスキに起き上がった。

ポタッポタッ……ザァーーー！！

と、ちょうどその時雨が降り出した。

『……このままじゃまずいな……。いったん“えんまく”をはって、どこかで雨宿りしなくちゃ……。しっぽの炎が消えたら大変だ……！』

僕たち“ヒトカゲ”はしっぽの炎が消えてしまうとその命が終わってしまう。

元気なときは雨くらいでは消えたりしないけど、今は相当な傷で体がボロボロだ。

こんなときに雨に濡れたら、命に関わる事態に陥るのは目に見え

ている。

「……“えん……”……っ！？」

何でだろう？足が動かない……。

「クソトカゲちゃん？な～に逃げようとしてるのかな～？足は動けなくしてやったぜ……“ふぶき”でなぁ！！」

うかつだった。ゼニガメくんがいたのを忘れていた……。

僕はすかさず炎で氷を溶かそうとするが……。

「……くっ！！雨のせいで炎の威力が弱まっている……。全然溶けない……」

相当な技の威力だったのか、いくら炎で溶かしてもまた凍りつく……。

ジュージュー……。

無情にも雨によってしっぽの炎が小さくなっていく。煙がしっぽの先から立ち上る……。

『くっ……！！なんで溶けないんだ！！？頼む！！溶けてくれ！！』

途中何度か体の力が抜けて、ガクッと倒れそうになる。

意識がだんだんもうろうとして来る……。

『もうダメかも知れない……。力が出ない……。炎が消えそうだ……』

悔しかった。

あの時“でんじは”の効果が出ただけでこんなにも劣勢になってしまったと考えると……。

『もうみんなに会えなくなるんだね……。お母さんにも、お父さんにも、ヒート先輩たちにも……、チコっちやチックに……カゲポーくんとも仲直り出来ないで……、ピカっちのそばにもいられなくなるんだね……。みんなごめんね……。僕は最期までダメダメだったね……』

次第に死ぬことの恐ろしさを感じ、涙がほほを伝ってポタポタこぼれる……。

しっぽの炎はその明るさをわずかに感じられるだけになってしまった。

さらに一歩ずつニヤリとしながら、デンリュウが近づく。

「トドメをさしてやる。“かみなり”！！」

僕は目を閉じた。

『ありがとう大切なみんな……。……こんなダメダメヒトカゲをいつも見守ってくれてありがとう……』

僕は静かにお礼を言った……。

ゴロゴロピシャーーン！！

そして、頭上に“かみなり”が落ちてきた……。

『さようなら……』

第４０話：「戦わなければならない……！！」の巻（後書き）

カゲっち：「はぁ～……。僕ってとことんダメダメなんだね……」

作者：「まぁドンマイドンマイ。でも次回はもっとすごいことになるかもね」

カゲっち：「そうなの？僕は助かるの？」

作者：「……」

カゲっち：「すごく気になる～～！！」

第４１話：「また会おうね……！！」の巻（前書き）

カゲポー：「カゲっち……。俺たちこのまま仲直り出来ないのかな……？」

ピカっち：「一体どうなっちゃうのあたしたち……」

作者：「すべての答えが凝縮された第４１話プレイボール！！」

第４１話：「また会おうね……！！」の巻

「……おかしいわ……。もうあれから3時間も経っているのに全く帰って来る気配が無いわ……」

ここはピカっちの部屋。

部屋に入った時にまず驚くのが、甘い香りがすること。しかも優しくて癒されてしまうのだ。

部屋の右側にはベッドが置いてあり、枕元には目覚まし時計に、僕やピカっち、チコっちが写った写真の入った写真立てが飾られている。

中央には小さいテーブルがあり、小さい花瓶が置かれていた。

そして窓側には、僕とピカっちとチコっちの人形が仲良く並んで置かれていて、花を育てているのか、小さい植木鉢が置かれている。

壁にはきのみや植物で作ったきれいな装飾品を飾っている。

おそらくピカチュウという種族が森の中で暮らしていたのが、大きく関係しているのだろう。

まるで小さい植物園のような部屋だ。

そんな部屋に僕と別行動だったピカっち、チコっち、チック、カゲポーくんが集まっていた。

とりあえず僕が帰って来るのを待っていたみたいだが、全く状況が変わらないことにだんだんとピカっちが不安な顔をし始める。

「ピカっち。カゲっちのこと考えすぎよ。今はカゲポーくんがどうしたら元の世界に戻れるか考えなきゃ……」

チコっちはわざと僕を気にするなと言う。

「……そうね。いつか帰って来るかも知れないわね……。ごめんなさい」

ピカっちは申し訳なさそうに謝る。

『……でも本当に心配だわ……。もし、カゲっちくんの身に何かあったらどうしよう……』

ピカっちは窓を眺めながら心配そうな顔で空を見つめる。

空は今にも雨が降りそうに黒い雲が見えていた。

「俺……本当に元の世界に帰れるのかなぁ……？もし戻れなかったら……」

カゲポーくんが不安な顔をする。

「大丈夫よ。だって何かの弾みでこの世界に来たなら戻れないワケ無いじゃない……。きっと帰れるわよ……」

チコっちはカゲポーくんを励ます。

「そうだよね！きっと帰れるよね！ごめんね変なこと言って……アハハ」

とは言うものの一体どうすれば良いのか分からないでいたのは事実だ。

みんなが途方にくれていたその時、

……ピカっち！チコっち！チック！……カゲポーくん！！

「カゲっちくん！？」
「カゲっち！」
「カゲっち？」
「カゲっちなの？」

突然どこからか声が聞こえた……。

「今のもしかして……」
「カゲっちの声だったわよね……？」
「僕も聞こえた……」
「俺も……」

みんなが顔を合わせて不思議な顔をしている。

さらに、

ごめんねみんな……。僕……みんなと会えなくなるみたいだよ……。

『……！？』

また聞こえた……。今度は涙声……。とても寂しそうにして話している……。

ピカっちはまた窓を眺めた。
その黒いつぶらな瞳に映ったもの……

ザーーザーーと降りしきる雨の様子だった。

「俺……探して来るよ……」

カゲポーくんは嫌な予感がしたのか、立ち上がって部屋の扉を開きに行く。

「あたしも行くわ……。雨はカゲっちくんにとって嫌いなものなのに……帰って来ないなんて……」

ピカっちもそう言う。

「ダメだピカっち……。俺、嫌な予感がするんだ……。もしかしたらピカっちが来たらダメな気がする……。それにカゲっちと険悪なムードを作ったのは俺だ……。だから例え雨が降っていても……同じ“ヒトカゲ”を探さなきゃいけない……。みんな待っていてほしいんだ……」

カゲポーくんはそう言い残すとサッと部屋の外に飛び出した。

そのあと、みんなはその場にいるしか無かった。

もはやこれは、“ヒトカゲ”同士にしか分からないのだろうと感じながら……。

「うぅぅ……。あたし……本当はカゲっちくんがピンチなら助けなきゃいけないのに……悔しいわ……」

ピカっちはその場に座り込んでしまった。

下を向き、涙をこぼしながら……。

『カゲっち?どこにいるんだよ?……あれ!?』

カゲポーくんは空を見つめる……。すると、

「なんであそこだけ雪が降っているんだ?……もしかしたら……!!」

カゲポーくんが発見した異変。

それはまさしく、僕にむけてゼニガメくんが“ふぶき”を繰り出している様子だった。
その場所までカゲポーくんはかなり離れている。

逆に言うとゼニガメくんの技はとてつもない威力を持っていたということだったのだ。

走り始めてからさらに15分は経っただろうか。

雨は止むどころか、ますますひどくなっていく。

「ハァ……ハァ……。確かこのあたりのはず……。クソ～！どこにいるんだよ！？」

そんな悪天候の中、カゲポーくんは僕を捜していた。

「……あ、あれは……！？」

カゲポーくんの視界に飛び込んで来たもの……。

それは、あの“ふぶき”により凍りついている木々だった。

「この公園の中かも知れない！！」

右手に飛び込んできた公園に体の向きを変える！

「か……カゲっち！！！！」

するとそこには、僕とバトルしてKO状態のワカシャモが倒れていて、さらに奥には傷だらけの1匹のヒトカゲ、それから対峙しているデンリュウと背後にゼニガメが立っていた……。

ゴロゴロゴロ……。

「まずい!!カゲっちがピンチだ!!……クソ～“ひのこォォォ”!!」

カゲポーくんが無数の火の玉をデンリュウに向け発射した!!

ドッカーーン!!

「!?」
「何!?」
「誰だ!?」

その場にいた僕、ゼニガメくん、デンリュウが突然の爆発音と爆風に驚く……。

「ふぇーー。危なかったぁ……！“かみなり”を抑えることが出来て良かったよ♪」

「テメェ……なにもんだ！？……邪魔しやがって……」

突然の乱入者に驚くデンリュウ。

『誰かが助けに来たのかな……？』

僕は相変わらずフラフラ状態でその声の方を向く。

「あ！カゲっち♪俺助けに来たよ！！大丈夫だった？」

間違いない……。そこに立っていたのは、異世界からこの世界に迷い込んだヒトカゲ……カゲポーくんだった。

「ふざけんじゃねえぞクズトカゲ！“１０まんボルト”！！」

デンリュウがカゲポーくんに攻撃した。

「へへーンだ！こんなの当たらないよ！！」

カゲポーくんがひょいひょいと攻撃をかわす！

「あれ？足が凍り付いている！“ひのこ”！！」

カゲポーくんのおかげで氷は溶けた。さっきの衝撃で地面の部分から切れ目が入っていたので、再び凍ることも無かった。

「ありがとう……」
「どういたしまして♪」

カゲポーくん笑顔で僕のそばに来てくれる。

「よくここが分かったね？」
「うん。色々あってね」

僕の問いかけにカゲポーくんが笑いながら答えてくれる。

「……カゲっちごめん！俺カゲっちに無理矢理嫌なこと要求して……」
「もう良いよ……。僕だって意気地無しなところ見せてみんなを嫌な気持ちにさせたんだもん……」

互いに謝る僕たち。

「さて、反省はここまでにして……、あいつらを倒さなきゃな！カゲっちまだ闘える？」

「平気さ！！違う世界で育った“ヒトカゲコンビ”の強さ見せようよ！！」

僕たちは気合いを入れて、じっと相手を見る。

「なめんじゃねぇぞ！“かみなり”！！」

デンリュウは再び“かみなり”を繰り出した！！

「同じ攻撃が何度も通用するほど、バトルは甘く無いよ！！“だいもんじ”！！」

僕は巨大な炎をデンリュウに向けて発射する！！

ドドドドドド！

すごい音とともに炎が、デンリュウのところで形を変えて大の字になる。

「これが本当の“だいもんじ”さ！！ほのおタイプ屈指の強さなんだから、ちょっとやそっとのことで壊れないよ！！いっけぇぇぇぇ！！！」

僕は真剣の表情でそう叫んだ！！

ドッカーーーン！

２つの技は互いに威力を打ち消した。

「チッ！ザコの分際でいちいち歯向かいやがって……！おとなしく俺の餌食になれや！！」

デンリュウはまたイライラをみせる。

「ザコだって言っているけど、ちゃ～んと相手の実力を見てから言ったほうが良いかもね♪僕が何を繰り出したかわかる？」
「んだと！？……何だぁ……！？アチチチチ！」

デンリュウは無数の炎の球に驚いている。

『一体どういうことなんだ！？カゲポーとか言う奴の“ひのこ”をあのカゲっちとか言う奴が“なげつける”とは……あんな技見たことねぇ！！』

デンリュウは必死にダメージを“こらえる”が、それでも火の玉の威力は相当だ！

ドーン！ドーン！ドーン！

デンリュウに僕が投げつけた“ひのこ”がぶつかる音が辺りに響く。

「カゲっち……すごいや！俺の“ひのこ”を使ってこんなこと出来るんだね♪」

カゲポーくんが“ひのこ”を繰り出しながら、僕の技に驚いている。

「うん♪名付けて“ダッグファイアボールアタック”！！……でもこの技は、2匹のポケモンの……僕とカゲポーくんの協力が無ければ出来ないんだ！……これは昔、親友のブースと考えたタッグ技なんだ。ブースはほのおタイプの技が得意だったから、“ひのこ”も巨大な火の玉だったんだ！」

僕は隣にいるカゲポーくんに笑顔で教える。

「でも何でこんな技を考えたの？」

カゲポーくんが“ひのこ”を繰り出しながら僕に聞く。

「“ひのこ”を繰り出すときってどうしてもたくさんの火の玉を繰り出すから、威力がどうしても低かったり、高かったりして偏るんだ。それだと、ダメージの効率も悪いし、何より疲れがたまりやすいんだ。……だから威力を保って攻撃するなら、全部を合わせて攻撃する方が断然良いんだ！！」

「なるほど。確かに一つの炎の塊を繰り出す方が楽だね♪」

ただ、本来“なげつける”は自分の持つ道具を相手に投げて効果を発揮させる技。
他のポケモンの技を“なげつける”までには、相当な集中力や技術が必要だ。

『それでもこれはまだ未完成。本当なら別のタイプの技も“なげつける”ことが出来ないとダメなんだ……』

僕はそんなことを考えていた。

この技の弱点は相手に決定的なダメージを与えられないことだ。
完成度が高いものだと本当にＫＯ状態に出来るのだ。

だが、それでもデンリュウを驚かせる作戦は上手くいった。

僕が次の作戦を考えていると、

「ねぇカゲっち？俺さっきからあいつのこと観察していたんだけどさ～……あいつパワーで圧倒するタイプだよね！だから一瞬ひるませた方が良いかも！」

どうやらカゲポーくんは相手の様子を観察してから、攻撃に移るタイプのようだ。

「うん、わかった！！じゃあ同時に技を繰り出そうか！」

そういうと僕とカゲポーくんは同時に腕を鋼のように固くしていく！

そして……、

『“メタルクロー”！！』

そのままデンリュウの体めがけて僕は左手から、カゲポーくんが右手から振り落とした！！

「ぐわぁぁぁぁぁ！！」　相性の良い“メタルクロー”でも、ダブルの攻撃にはさすがにデンリュウも耐えられないようだ。

「まだ終わらないよ！“ひのこ”！！」

「僕は“かえんほうしゃ”！！」

形は違うが、高温の炎がデンリュウを襲う！！

「うわぁぁぁぁ！！」

デンリュウはその場にＫＯ状態になり倒れた。

『やったね～♪』

僕とカゲポーくんはハイタッチをした！！

「ぜ……ゼニガメくんはどこだ！？」

僕はキョロキョロして辺りを見渡す。

「もしかしたら逃げたかも知れないね……」

カゲポーくんは苦笑いする……。

「僕久しぶりにポケモンバトルが出来たんだ。まだ楽しいバトルには遠いけど、良かったよ」

「そうでしょ？それにカゲっちは俺の使えない技をたくさん使っていたし、すごかったよ！！」

僕とカゲポーくんは隣同士に座って楽しく会話をしていた。

気付けば、空には青空が広がっていた。

「ねぇカゲっち。俺……カゲっちならきっとまた楽しくポケモンバトル出来るようになると思うよ！！……あんなに勇気を出して戦っていたんだもん！きっときっと出来るようになるよ！！」

カゲポーくんが真剣な表情でそう言う。

「そうかな？でもカゲポーくんが教えてくれたんだよ？一回のミスを引きずったらダメって……。前を向かなきゃダメって……。だから今日久しぶりにポケモンバトルが出来たのはカゲポーくんの……」

最後まで言葉を話す前に、僕はその場に倒れた。
ケガがひどくて、気絶したのだ。

「カゲっち……。ありがと……。俺もカゲっちと一緒にバトル出来て良かったよ。楽しかった……！」

カゲポーくんは静かに笑いながら、僕にそう言った。

おーい……ヒトカゲ！！

遠くから誰かの声がする。
カゲポーくんはその声の方に振り向く。

「タイヨウ！？どうしてここに！？」

声の主はカゲポーくんの大切なパートナーだという、“タイヨウ”さんだった。

「どうしてって……。おまえを迎えに来たんだろ？……全くどっ

かいなくなるから心配したよ」
「わぁぁぁぁん!!タイヨウ〜!タイヨウ〜!会えてよかったぁ〜!!」

うれしさのあまりタイヨウさんに飛び付き、大泣きするカゲ……
いやヒトカゲくん。

「そうだ。行く前に……。カゲっちに渡さなきゃ……」

ヒトカゲくんは僕のそばに、何かを置いてくれた。

「カゲっち。みんなから話は聞いたよ……。今日は誕生日なんだね。だからこれはプレゼントだよ……。これは俺がタイヨウに渡すために造ったモンスターボールのペンダントなんだ。上の赤い部分を野球や辛い過去を真っ白にするために頑張るカゲっちが持っていてよ……。俺たち目指す目標や住んでいる世界は違うけど……、同じ“ポケモン”で……同じ“ヒトカゲ”でしょ……?……だからいつまでもお互いのこと忘れたく無いから……、お互いがいつまでも繋がっているという証……だよ……?いつかまた会えると信じているから……“さよなら”なんて言わないよ?……“また会おうね”……。……また会おうね……!……また会おうね!!!」

ヒトカゲくんはそう言うと、後ろを振り返ることなくまっすぐタイヨウさんの元へもどっていった……!!!

そして少しずつ僕のそばから離れていったのである……。

それからどれくらいの時間が経ったのだろうか……？

「カゲっちくん起きて……！いつまでお昼寝しているの？」

ピカっちの声で僕は目が覚めた。

「もう……！花壇に足をぶつけて転んで気絶なんて……、全くダメダメなんだから！！」

……あれ？カゲポーくんは？……それに傷が全快している……？

「ピカっち……？カゲポーくんはどこに行ったの？」

「カゲポーくん……って誰のこと言っているの？カゲっちくんは朝この花壇を見せたら、喜んで走って転んで……今までずっと気絶

していたのよ？」

ピカっちが言うには、僕は自分のドジにより気絶していたらしい。

「それより……もう夕方だから早くパーティーの準備しなくちゃ♪」

ピカっちは笑顔で歩いていく。

『……じゃああれは……夢の中の出来事だったのかな……？バトルも……あのカゲポーくんの笑顔も……』

僕はその場で下を向き、な～んだ……とため息をしてしまう。

だが、その時だった。

『……あ！？……これは……！？』

僕の手にはギュッとカゲポーくんの……ヒトカゲくんのプレゼントが握られていた……。

『夢じゃない……。ありがとう……カゲポーくん……僕頑張るよ！！……頑張って辛い過去を乗り越えるよ……！……だからカゲポーくんもバトルに冒険頑張ってね……！！』

僕は心の中で、“奇跡”の誕生日プレゼントに感謝した。

奇跡とは、だれも信じてくれない小さな出来事を、それを大きな可能性として起こることを、教えてくれた跡なのかも知れない……。

……いや、夢や希望を持っている人にだけ送られる……。そんな大切な“プレゼント”なのだと僕は思った……。

「ねぇねぇ！カゲっちくん早く行こう！」

僕は遠くで手招きしているピカっちのもとへ静かに歩きだした…。

その夜、僕はピカっちから赤と黄色いリストバンド（腕にはめることの出来る輪の形をした装飾品）を一つずつ、チコっちからは緑と赤のリストバンドを一つずつ、チックからは白と赤のリストバンドを一つずつプレゼントされた。

そして、各自がもう一セット買ったようだ。

「これでみんないつでも一緒ね♪リストバンドはめて仲良く練習しましょうね♪」

みんながピカっちの言葉にうなずく。

「ヒカゲ。お父さんはこれを渡すよ。“ほのおのしるし”。ほのおタイプのポケモンにだけ色々な効果を発揮するらしい、ちょっと

変わったお守りってところだそうだ。おまえは人一倍泣き虫だからちょうどいいと思ってな」

そういうとお父さんが僕の首にかけてくれる。

『何だろう……。すっごく温かい……』

僕はニコニコしながら「ありがとうお父さん♪」とお礼を言った。

これで全員がプレゼントを渡し終えた。

そのあと、お父さんにお母さん、僕にピカっち、チコっち、チックは右手に僕たちが数日前にたくさん集めたきのみを使い、ピカっちのお父さんが専門のポケモンに頼んで作ったという“特製きのみジュース”の入ったコップを持って、

「カゲっちくん♪お誕生日おめでとう！！！」

一斉に「おめでとう」の声が響く。

さぁ！いよいよ楽しいパーティーの始まりだ！！

第４１話：「また会おうね……！！」の巻（後書き）

カゲっち：「本当にお別れなんだね……。すごく寂しいけどいつかまた会おうね！！僕この奇跡を忘れないよ！！」

今回で新年特別企画が終了です。この夢のようなコラボ企画に協力して頂いたナエトル先生、本当にありがとうございました！！

仲良し４匹：『ありがとうございました！！』

これからもヒトカゲくんとタイヨウくんの活躍を楽しみにしています！！

カゲっち：「次回からはどうなるの？」

次回からはまた野球のお話がメインになりますよ！

キュウコン：「打撃練習が終わったから、次は本格的な守備練習を行うぞ！しっかり頑張るんだ！」

それでは、新年特別企画を最後まで読んでいただいたすべての読者のみなさん！本当にありがとうございました！！

第４２話：「新たな友達」の巻（前書き）

カゲっち：「お久しぶりです♪」

ピカっち：「今回は新キャラが登場ですよ♪」

チック：「では早速見てみよう♪」

チコっち：「第４２話プレイボール！」

第４２話：「新たな友達」の巻

「おはようカゲっちくん♪」
「おはようピカっち」

“奇跡”の誕生日の翌日。僕はいつものようにピカっちと学校に向かうことにした。
いつものようにまぶしい笑顔で仲良く……ね。

『……それにしてもピカっちが、僕に寄り掛かるように歩くのはやっぱり恥ずかしいなぁ……』

ピカっちが満足しているから、やめてほしいとも言えないし、こればかりは慣れるしかなさそうだ。

登校中に自然公園で待っているチコっちやチックとも会い、いつものように仲良く４匹で楽しく会話を交わす。

「今日は音楽の授業があるよね？担当のロゼリア先生がクラス全体を仲良しのグループに分けるって言っていたわ」
「そうなんだ。じゃあこのメンバーでグループになろうね♪」

チコっちの言葉にチックがニコニコし、ながら反応する。彼女はクラスの教科係を任されたので、いち早く授業の情報を教えてくれるのだ。

「え～!?カゲっちは歌えば音程をメチャメチャに外しながら、みんなと全然タイミングズレて歌うじゃない!それに演奏のときはパニックになって、みんなをハラハラさせるじゃない!!」

「ま……まさに音楽ダメダメくんなんだね……」

チコっちの言葉が、僕の心に何かがグサっと刺さり、さらにチックの苦笑いにかなりテンションダウンの僕。

「もう。それを言うなら、カゲっちくんは“美的センス０の超ダメダメヒトカゲ”よ♪絵を描かせても、１００匹中１００匹がその絵に対して、それが何なのか理解出来ないほどヘタなんだから。ね、カゲっちくん♪」

……いやいやピカっち。そこは笑顔で補足説明するシーンじゃないと思うんですけど……。

……とまあみんなが僕をいじっているうちに、町の東に広がる海

が見えてきた。その近くに、僕らの通うあさひポケ中学校があるのだ。

『かなりテンションダウンで不安だけど……今日も一日元気に頑張っていこう！』

僕はまだまぶしい朝日を浴びながら、そんなことを考えていた。

『おはようございます！』
『おはよう～！』

今日も野球部の朝練習があるため、キュウコン監督やラージキャプテン、それにヒート先輩やジュジュ先輩、ラプ先輩が集まっていた。

「あれ？ラッシー先輩はまだ来ていないんですか？」

僕は自分のバックから、自分の背番号が入った、あさポケの野球帽と赤いグローブを持ち出しながら、ラプ先輩に聞く。

「ラッシー？あの爆発ネズミが来るわけ無いわ。だって遅刻常習犯なんだから」

ラプ先輩が呆れたように言う。何でもラッシー先輩は夜更かしてでも遊ぶため、どうしても遅刻をしてしまうんだとか。

「わりぃわりぃ！！遅れちまった！！」

しばらくして、ラッシー先輩が慌てて登場した。

「今日はギリギリセーフだな。遅れたらラプの恐怖のお仕置きが待っているから気をつけた方が良いぜ」

ヒート先輩が笑いながら話す。

「とりあえずこれで全員揃ったな。朝練習始めるぞ！！」

キュウコン監督の一言で練習が始まる！
もうおなじみとなったランニング５周を行い、いつものようにキャッチボールをする。僕はピカっちと楽しく練習をした。

続いてそれぞれの守備位置へ走っていき、キュウコン監督のノックが始まる。

カキーーン！
パス！
カーーン！
パシッ！！
コーーン！
パシッ！！

強烈なゴロから、高いフライまで、ありとあらゆる打球を各自がキャッチをする。楽しく熱心に。

続いてはトスバッティングだ。２匹１ペアとなり、一方がボールをトス（ボールを下から軽く投げること）して、もう一方がそれを打つ練習だ。

「よ、カゲっち！思い切りハイテンションで頑張ろうぜ！！」
「はい。よろしくお願いします！！」

僕はラッシー先輩とコンビとなる。始めに僕がトスをして、ラッシー先輩が打つことになった。

「ラッシーラッシー、ララララッシー♪」

ラッシー先輩は歌を歌いながら、投げられるボールを打ち返していく。

ブン！
カーーン！！
ブン！
カーーン！！
ブン！
カーーン！！

この練習は、おとといの打撃練習よりは難易度は低いものの、タイミングを合わせることが目的になる。
何事も基礎が大事なのだとキュウコン監督が話していた。

「次は僕の番ですね。頑張るぞ！」

僕も練習をはじめた。

ブン！
カーーン！
ブン！
カーーン！
ブン！
カーーン！

「よし。こんな感じかな」

自分が納得出来るようになるまで、各自が練習を続ける。

『それにしてもみんな一生懸命に頑張っているみたいだ。やっぱりみんな優勝したいんだなぁ』

いつもはあんなにニコニコのチックも、僕のそばを離れないピカっちも、“チコっち劇場”を繰り広げるチコっちも、みんな練習となると一心不乱になって頑張っている。

『僕も負けないように頑張らなくちゃ！！』

僕はやる気が出てきた。

最後にダッシュの練習だ。１００ｍを全速力で駆け抜け、走塁の

技術を高めるのが目的だ。

僕やピカっちといった足に自信がある種族は、無難に走っていく。特にジュジュ先輩は俊足に自信があると言う通り、タイムは１１秒に迫ろうかという好成績を叩きだした。

一方ラプ先輩やラージキャプテンは、この練習は苦手としているが、それでも目一杯駆け抜けた。

『このメンバーは走攻守ともバランスが良いな。もっともっと技術を磨いていけば、常勝メンバーも夢じゃないかもな』

練習を見守るキュウコン監督が、ふとそんなことを考えていた。

そんなこんなしているうちにあっという間に練習時間が終わった。

「朝練習はこれからも基礎を重点に置いたメニューを続けていこうと思う。みんなはそれぞれ高い能力を持っているから、後はそれをいかに磨くかだと思っているからな」

キュウコン監督がみんなに強い口調で話す。

「とりあえずこれで朝練習は終わりだ。今日も一日元気に学校生活を送るように！！」

『ハイ！！』

キュウコン監督の話が終わり、あいさつをした後、僕らナインは自分の教室に向かった。

しばらくして、僕たち仲良し４匹組は１年２組の教室に入った。おしゃべりの声がたくさん聞こえたりして、にぎやかで楽しい朝の一場面が展開されていた。

「おはようピカっち♪」

「あ、おはようオーちゃん♪」

僕たちが自分の席に座り、色々な準備をしていると同じクラスのポケモンが話しかけてきた。

「君は……」

「あ、君はこの前の体育の時間にいきなりゼニガメくんに蹴られちゃったヒトカゲくんだったね。俺はオタチ。“オーちゃん”って読んでよ。あの時ピカっちたちが困っていたから、一緒に君を保健室まで運んだんだ。それをキッカケに仲良しになってね」

どうやら例の騒ぎが出会いのキッカケとなったようだ。

「この前はありがとう。そして、これからよろしくね」

「うん。よろしくね」

僕たちは互いに握手を交わす。

「オーちゃんはカゲっちくんと違ってすごくしっかり者なんだから。勉強の成績も立派だってチックくんが言っていたわよ♪」

「え？チックがそんなこと言っていたの？照れちゃうよ／／／／／／」

ピカっちの言葉に顔を赤くして照れてしまうオーちゃん。どうやらチックとは、かなりの仲良しらしい。

「確か部活は放送部だったけ？色々と大変じゃない？」

「まぁね。でもピカっちも野球部で頑張っているらしいじゃん？女の子なのにすげぇよ」

オーちゃんの言葉に今度はピカっちの顔が赤くなる。

「……でもあれだな。野球部も先輩たちの話を聞くと、かなりの弱小チームだと言うじゃん。ピカっちも練習、大変だろ？」

「そうね。でもカゲっちくんもいるし、何より先輩たちが優しく温かく迎えてくれたから楽しいわ♪」

オーちゃんの言葉にピカっちがニコニコ笑う。

「まぁ、とにかく頑張れよ。試合の時は応援行くからよ。そろそろ時間だから席戻るぜ。じゃあな」

「ええ。オーちゃんも頑張ってね♪」

オーちゃんに手を振って、楽しそうに返事をするピカっち。

「何だかピカっちとずいぶんと楽しそうにしていたねオーちゃん」

「うん。あたしも彼とお話していると楽しいわ♪」

「そうなんだ。でもまた新しい友達が出来てうれしいや」

オタチのオーちゃんか……。また楽しい時間が増えそうだ。

間もなくして、キュウコン先生が教室に入ってきた。

こうして今日も学校生活が始まったのである。

第４２話：「新たな友達」の巻（後書き）

カゲっち：「オタチのオーちゃんかぁ……。一体このあとどんな展開が待っているか楽しみだよ♪」

ピカっち：「早く続きが知りたいわ♪」

第４３話：「自分らしく生きる……」の巻（前書き）

カゲっち：「ずいぶん更新が遅れたね？」

作者：「まぁ色々トラブルがあってね……」

ピカっち：「今回はどんなお話が待っているのかしら？」

カゲっち：「気になる第４３話プレイボール！！」

第４３話：「自分らしく生きる……」の巻

新しい友達が出来てすごくうれしいや！これからよろしくねオーちゃん！

キーンコーンカーンコーン……。

「ふぇ～……。やっと社会の授業が終わったよ。疲れちゃった」
「でもカゲっちくんが居眠りしそうになるなんて珍しいわ。そんなに疲れる授業なのね」

ピカっちが僕の言葉に苦笑いする。僕は勉強は得意とは言えないけど、居眠りなんかはしないように、頑張って授業を受けるようにしている。それでもあのエアームド先生の授業は一種の催眠術じゃないかと錯覚してしまう。

「次は音楽の授業ね♪遅れないように行こうよ♪」
「うん」

僕とピカっちは授業道具を準備して、音楽室への移動をしようとした。

「やぁピカっち。俺も一緒に行っても良いかな？」

すると、後ろからオーちゃんが話しかけてきた。

「良いよ♪みんなで一緒に行った方が楽しいわ♪」

ピカっちは笑顔で返事をする。

「ごめんピカっち。ちょっとトイレ行ってから行くから……、先行ってて！」

「良いわ。遅れないように気をつけてね♪」

僕はそう言うと、少し離れた場所にあるトイレへと向かう。

「チコっちちゃんとチックくんは今日は日直だから、先に行っているはず。だから二人きりになっちゃったね♪」

ピカっちは笑顔でオーちゃんに話しかける。

「そう……みたいだな」

オーちゃんは顔を赤くする。おそらく恥ずかしがっているのだろう。

「……ピカっち？一つ聞いても良いか？」

「え？別にいいけど……何かしら？」

音楽室に向かう途中、オーちゃんがピカっちに話しかける。

「その……何て言うか……ピカっちは大変だとか思わないのか？」

「何を？」

「その……カゲっちのことさ。何だかあいつ……ドジばっかりして怒られたりしてるじゃん？現に1時間目の国語でも教科書の読む場所間違えたり、2時間目の数学でも解く問題間違えたりして……。みんなピカっちが教えなかったら大変だったんじゃないのか？」

「……確かに大変……」

ピカっちがオーちゃんの言葉に苦笑いする。1日に5回はドジをする僕にはかなり苦労しているはずだ。

「だから……もったいないなぁって感じるんだよな。ピカっちはクラスの男子でもかなりの人気あるからさ、もっとしっかり者のヤツといたら楽できると思うんだよな……」

オーちゃんはどうやら、僕とピカっちが付き合っているのを知っているようだ。

「確かに楽したいなぁって感じるときもあるけど、でも元々お世話好きな性格だから、別に彼がドジをしても嫌とか苦とか感じたことは無いわ」

ピカっちがニッコリした表情で彼に答える。

「それにカゲっちくんは誰よりもあたしや友達を大切に考えているし、何より“がんばりや”だから……。あたしは何かに一生懸命な彼が大好きなの♪」

ピカっちが彼にそう言う。

「ふ～ん。なんだかピカっちってすごく変わっているなぁ……」

オーちゃんは不思議そうな顔で彼女に言う。

「……でもなんでいきなりそんなこと聞いたの？」

ピカっちが首を傾げながらオーちゃんに聞く。

「え！？そ……それは……、特に理由は無いよ！！ただ……ピカっちが大変じゃないかなって感じていたから、実際どんな風に感じているのかな～って思っただけさ！！！」

オーちゃんは顔を赤くしながら、慌てた様子で彼女の質問に答える。

「ウフ♪心配してくれるなんて……オーちゃん優しいのね♪」

ピカっちが天使のような笑顔で彼に言う。

しばらくして何も知らない僕が戻ってきた。ピカっちはうれしそうに僕に近付く。

「それじゃあ音楽室に向かおうか」

僕たち3匹は音楽室に向かった。

音楽の授業は合唱を行った。順調にみんな歌っていたのだが、やはりここでも僕が音程を外すというドジをしてしまう。

「もう……、カゲっちくんてば！！」

僕は当然恥ずかしかったけれど、ピカっちはそれ以上に恥ずかしそうにしている。

『全くカゲっちのやつ。あんなかわいい子を困らせるなよ……。少しはピカっちに楽させてやれよ……！！』

オーちゃんは僕とピカっちの様子を見て、イライラした様子を見せる。

『……実はカゲっちのやつ……ピカっちのことあまり好きじゃないのか……？』

オーちゃんはその時感じただろう。「あんなダメダメヒトカゲのそばにいたら、ピカっちがその被害に巻き込まれてしまう……。だからあの2匹を離すべき」と……。

『決めた!!俺がピカっちのそばにいてあげよう……!!』

彼がそんな陰謀を抱いていたことをその時の僕は知らない……。

そんなこんなであっという間に放課後を迎えた。

僕が勉強道具をカバンに入れていると、ピカっちが近付いて来た。

「カゲっちくん?明日は理科の観察があるから、ちゃんと道具を忘れずにね♪」

「うん。そうだね……。ちゃんと忘れないように気をつけなきゃ……」

僕は疲れきった表情で返事をする。

「本当に大丈夫なの？カゲっちくんは人一倍ダメダメだからあたし結構心配しているのよ？」

ピカっちはまるで子供を心配するお母さんのように僕に聞く。

「そうだ。いくらなんでもピカっちに心配かけすぎだぜ？もっとしっかりしなきゃダメじゃないか！！」

「オーちゃん……」

僕たちのやり取りを見ていたのか、オーちゃんがイライラした様子で僕に言う。

「いいか？もし明日ちゃんとしなかったら、俺が許さないからな？」

オーちゃんはかなり怒り口調で言う。右手をギュっと強く握りながら。

「わかったよ……。ピカっちに迷惑かけるようなことはしないって約束する……」

僕はションボリしながら返事をした。

「んじゃあ俺は放送部があるから、この辺で帰るよ。ピカっち、また明日な！野球部頑張れよ！」

「うん♪オーちゃんもがんばってね♪」

オーちゃんは走りながらその場を後にした。

ピカっちは優しくその様子を見送っていた。

「それじゃああたしたちも行きましょう♪」

「うん。そうだね……」

しばらくして、僕とピカっちは野球部の練習に向かうことにした。

「ごめんねピカっち……。いつもいつもドジばっかりして……」

歩きながら僕はピカっちに謝る。

相当迷惑をかけていることをオーちゃんの言葉で改めて感じたのだ。

するとピカっちは「え？」というような表情を見せながら、

「べつに謝らなくても良いわよ。カゲっちくんがドジをするのは、いつものことだと思っているから平気よ♪」

ピカっちはいつものような笑顔で僕に言う。

だが僕の気持ちは晴れない。

「でもオーちゃんの言う通り、僕は迷惑かけすぎだよね……」

「オーちゃんの言葉を気にしているの？良いのよあんな言葉。あの子はあたしたちが、今まで歩んできた道を知らないで怒っているんだから。それにもしあなたがそんなに立派に行動したとしても、あたしは嬉しくないわ」

「え？どうして？」

僕はふと顔を上げ、ピカっちを見る。

それを見て、ピカっちはさらに近付いて僕を撫でながら優しくこう言った。

「あたしがあなたのそばにずっといたいのはね……。あなたのお世話をしたいからなの……。でないと、あたしがそばにいる意味が無くなっちゃうもの……。みんな……完璧なポケモンなんていない

のよ……。必ず欠点がある……。でも欠点があるからこそ、お互いそれをカバーして生きている……。あたしだっていつもカゲっちくんをお世話するけど、でもいざとなったときは何も出来ないから悔しいし、悲しいの……」

「ピカっち……」

ピカっちの体が小刻みに震える。顔を伏せ、悲しそうな表情を見せている。

「それに……カゲっちくんだっていつもダメダメなんかじゃないって……あたしは知っている！何か一つに対してガムシャラに一生懸命頑張る姿を、あたしは何度も見ている！！その姿はあたしすっごく嬉しいし、カッコイイって思っているよ！！」

「……」

ピカっちは涙目で強く強く僕の心に、自分の想いをぶつける。

「だからこれからもいつものあなたを……自分らしさをずっと見せてね？……それがあたしの癒しだから……」

「ピカっち……。うん……わかった。もうオーちゃんの言葉は気にしないよ……。まっすぐ迷わず走りつづけるよ！」

僕はピカっちの手を優しく握り、そう誓った。

「それじゃあ迷いも消えたことだし、野球部の練習に行こうか！

チコっちやチックも待っているし！！」
「うん♪頑張ろうね！！」

僕らは目指す場所を目指して走り始めた。
迷いを恐れずずっとずっと……。

「もしもし？あーオーダイルか？ちょっとお願いがあって電話をしたんだけど……」

ちょうど同じ頃、放送室の中で電話をかける一匹のポケモンがいた。

「用事？まぁ簡単に言うと援護がほしいってことかな？ちょっとあまりにも邪魔したくてしょうがない奴らがいてね……」

そのポケモンは、不敵な笑みを浮かべる。

「すっごくかわいいピカチュウがほしいんだよ。ぜひ俺のモノにしたい。でもそいつにはラブラブな相手がいるんだ……。だから2匹をバラバラにしたいからね……。ぜひオーダイルの力を貸してほしいんだ。……良いのか？頼むぜ！詳しいことは後で連絡するからよ。じゃあな！！」

交渉を終えると、そのポケモンは電話を切る。
そして部屋の明かりを付けた。

「ククク……カゲっち……いやバトルの天才ヒカゲ！……ちゃんと見てろよ？これから俺ら“ゴールド・ブラック”の力でてめぇの幸せを粉々に砕いてやるからよ……！！！」

誰もいない放送室でそのポケモン……いやオタチのオーちゃんは不気味な笑みを浮かべ、大声で笑い出した……。

第４３話：「自分らしく生きる……」の巻（後書き）

ピカっち：「カゲっちくんがドジをするのも、頑張る姿を見せるのも“自分らしく”生きている証拠だわ♪」

カゲっち：「その言葉を聞いて大分気持ちが楽になったよ」

ピカっち：「次回からはいよいよ練習よ♪」

第４４話：「守備練習スタート！！……の前に特別授業！！」の巻（前書き）

カゲっち：「今回から守備練習だね」

ヒート：「……とその前に知ってほしい知識を勉強してもらうぜ」

作者：「専門的分野が多くなるので、読者のみなさんに理解されるか不安ですけど……」

ナイン：『第４４話プレイボール！』

第４４話：「守備練習スタート！！……の前に特別授業！！」の巻

やっぱりピカっちの言葉には安心しちゃうなぁ……。ダメダメでドジなことをしちゃうけど、でも僕は自分らしく生きるよ！！

「ピカっち～！カゲっち～！こっちよ～！」

僕とピカっちがグラウンドにたどり着くと、先に出発していたチコっちやチックが、すでに道具の準備を終えていた。

「みんな集まっているんだね。じゃあ急いで僕たちも準備しなきゃ！」

「そうね♪」

僕らはバッグを一塁側のベンチに置くと、早速準備を始めた。

そして、ナインの集合場所へと集まった。

「これで全員揃ったようだな。では早速今日の練習内容を伝えよ

う」

ナインの前に立つキュウコン監督が説明を始めた。

「今日は本格的な守備練習を行っていこうと思う。基本的なプレイから、ゲッツーやバント処理、中継などだ。野球の中ではかなり難易度は高いが、しっかりとついて来てくれ！」

『はい！』

僕らナインは力強く返事をすると、おなじみとなったランニング5周、キャッチボール、素振りを行う。

そうすること30分……。

「よし！では早速それぞれの守備位置についてくれ！！」

キュウコン監督の言葉で、ナインが散らばる。

僕はセカンドの守備位置に向かった。

「まずは基本のプレイからやろう。ボールが飛んできたら、この前の打撃練習のようにキャッチしてくれ。それでフライのときは捕った時点でアウト。ワンバウンド……つまり1回でも弾んだら、ファーストのチコっちに投げるんだ。チコっちが確実にキャッチしたら、アウトにできるからな」

内野ゴロでも外野へのヒットでも、バッターが一塁に着く前にファーストがボールを捕ればアウトに出来るということらしい。

フライは例えファールゾーン（白線の外側）でも、捕った瞬間アウトに出来るのだ。

「選手を起用する場合、アウトを捕るためにちゃんとその長所を活かした守備位置にしているんだぜ」

マウンドに立つヒート先輩が教えてくれる。

一体それぞれの守備位置に何が必要なのか、ちょっと紹介しよう。

まずはピッチャー（投手）。
実際に直球や変化球など、様々なボールを投げて相手チームより失点を少なくし、勝利へ導く役目がある。全ポジションで最も動きがあるため、スタミナ面、メンタル面でかなりきついポジションなのだ。

ただ、ヒート先輩いわく、「ピッチャーは一番面白いぜ！相手打者から三振を取ったり、強力な打者だとアウトに取ったら最高だぜ！！」だとか。

ちなみに補足だが、学生野球のエースナンバーは“１”（ヒート先輩の背番号でもある）。これはトランプの“１”をエースと言うことから来たらしい。

人間界のプロ野球のエースナンバーは、“１１”や“１８”だ。（球団により例外あり）

これは過去に有名な選手が付けていたのを、そのままイメージとして残したらしい。左腕エースの“４７”も同様である。

次にキャッチャー（捕手）。

この守備位置に求められるのは、どんなボールでもキャッチ出来る技術に、ピッチャーに投げる球をサインを出して指示する役目がある。

また、盗塁を指すために強い肩も必要とされるほか、ランナーをホームインさせないために、ホームベースでガッチリと抑える技術も必要だ。（ブロック）

リードあるいはインサイドワーク

そのため、ラプ先輩のように多少鈍足でも、大きな体＋頭脳派選手が向いていると思われる。

どうしてもリードに集中するため、打撃まで力が及ばず、打撃が弱くなりやすい。

だが例外は必ずある。打撃も肩もブロックもリードも最高な“スーパーキャッチャー”は存在するのだ。

続いてファースト（一塁手）だが、このポジションは他の野手からの送球を、確実に受け取る大事なポジションだ。それだけでなく高い守備能力を持つと、一二塁間が鉄壁になるのは確実だ。

しかし、大抵はナインの中で打撃が得意でも、守備が苦手という選手が守ることが多いのが事実だ。

実際にファースト自体が守備をするチャンス（守備機会）や範囲（守備範囲）は少なく、他の野手よりも楽なポジションといえるらしい。

要するに9つの守備位置の中でも、稀にみる打撃優先のポジションなのだ。

続いて僕の守るセカンド（二塁手）だ。なんでも内外野でも難しいポジションらしい。

その理由は次の2つの要素があるためとされている。

?自ら打球を処理する機会が多い。

セカンドは基本一二塁間を守るため、その範囲をファーストと協力して、ボールを捕らないといけない。

またショートとうまく提携して、センター前に落ちそうなボールを、センターが追いつけない場合セカンドやショートが協力して捕

る役目もある。

その結果、広い守備範囲が求められているため、それをカバーするための俊足、自分がキャッチ出来るかどうかの判断能力が求められるのだ。

?カバーなど、他のポジションをサポートする役目がある。

例えば一塁ランナーが盗塁を試みたときに、二塁のベースカバーをしたり、バントのときに一塁のベースカバーに入ったり、さらにランナーをホームインさせないように、外野からの送球を中継してバックホーム（ボールをホームベースに返すこと）する役目がある。

しかもこのプレイはショートが行うこともあるため、ここでも判断能力が必要になるのだ。

『……そう考えたら、僕って責任重大だよね……』

ヒート先輩の説明を受けるうちに、僕は段々大変なポジションが割り当てられたことを感じた。

さぁ、続いてショート（遊撃手）の役目をみてみよう。

このポジションもセカンド同様に難しいポジションである。このポジションは、三塁ベース後方から、レフトやセンター前の打球をキャッチしなきゃいけないので、セカンド同様に、広い守備範囲をカバー出来る俊足と高い判断能力が求められる。

盗塁の際の二塁ベースカバーや、外野からの（特に左中間）中継役を行う。ダブルプレーなど、セカンドとの連携プレーもかなり多いため、いかにこの2つのポジションの選手が、素早く判断できるかがカギを握っている。

さらにセカンドと違い、ショートは一塁から遠いため、一塁への正確な送球＋強肩が求められているのだ。

この話をキュウコン監督やヒート先輩から聞いたとき、ピカっちはかなり不安な表情を見せたが、

「大丈夫さ。ピカっちとカゲっちは幼なじみで、恋愛関係もある素晴らしいコンビだ。だから連携プレーもそれほど苦にならないと思うぜ！おまけに俊足を持つ種族だから、この前の打撃練習でも広い守備範囲を見せてくれただろう？後は練習あるのみだ！！」

と言うヒート先輩の言葉で一安心したようだ。

『ポジションを決めたとき、ただノリで決めたと思ったのに……実はそこまで計算していたんですね……』

僕はヒート先輩を改めて尊敬するようになった。

次にサード（三塁手）を見よう。

このポジションは一塁から最も遠いことから、強肩＋正確な送球が求められる。

さらに右打者から近いため、引っ張りの打球（打者と同じ方向の打球）は速くて勢いの強い打球になることが多い。

そのため、「絶対に捕るんだ！」とボールに恐れず向かっていく選手が向いている。

『チックも普段はニコニコしているけど、サードの守備のときは絶対逃げないよね……』

僕はこの前の打撃練習のときのチックの守備を思い出しながら、そう感じた。

ただ、セカンドやショートのような複雑なプレーは無く、三塁ベースを離れることもほとんど無い。
そのため、ファースト同様守備の負担は少なく、強打者に打撃のことに集中させることも出来るらしい。

続いてレフト（左翼手）の役目だ。

レフトは右打者による打球が飛んで来ることが多いので、確実な捕球能力が要求される。

また、時には三塁ランナーのタッチアップ（フライでバッターがアウトになったあと、ホームベースに走ってくること）による相手の得点を阻止するために強肩＋正確な送球も必要だ。

そのほか三塁牽制のカバーをする役目がある。

でもライトと違い、得点のためのランナーが近づいてくる位置にいるので、ほとんど自分でキャッチした後は内野手に中継することが多い。

それと連携プレーもあまり無いので、守備が苦手な選手でも、あ

まり負担にならないポジションでもある。

「カントリー・リーグは、左打者も多いし、右打者も流し打ちしてライトに飛んでいくから、俺にとってうれしいよ」

そう。競技のレベルが高くなると、ラージキャプテンの言うように、打球がレフトに飛んで来ないので、強打者を育成出来るのが大きな利点だ。

続いてセンター（中堅手）の役目をみてみよう。

センターはホームベースから一番遠い守備位置となる。（球場は左中間、右中間、センターが広い）

もし、タッチアップによるランナーを直接アウトにするためには、ライトやレフトよりもさらに強肩で無いといけない。

また、二塁盗塁の際のカバー、レフト、ライトのカバーなど動きが多い。このように外野手で一番広い守備範囲となるため、それを補う俊足も必要だ。

ただ、レフトやライトと違い投球や打球を見やすい位置であること、打球も真っすぐ飛ぶモノが多いため、比較的ボールはキャッチしやすいポジションではある。

「センターは強肩はあまり重視されないんだ。なぜかと言うと、ホームベースからあまりにも遠いから、中継することが多いこと、それに強肩はライトやレフトの方が必要だからね」

ジュジュ先輩が話す。

センター、キャッチャー、セカンド、ショートはボールを直接自分でキャッチする機会が多いので、“センターライン”と言われる。チームの守備の要だ。

この４つのポジションの守備能力が、チームの守備力を左右しているのだ。

最後にライト（右翼手）だ。

このポジションは三塁から最も遠いために、三塁でランナーをアウトにするための強肩が必要だ。場合によってはホームベースでアウトにすることもあるため、同様に強肩が必要となる。

競技のレベルが高いと、右打者の流し打ちによる打球も飛ぶため、判断能力は外野手で一番必要だ。

強肩な選手が多いのと一塁に近いので、打者がライトに速い打球を打つと、一塁にその打者が到達できる前にアウトになる、ライトゴロが出来るときもある。

補足だが、少年野球の“ライパチ”はライトで8番を意味する、下手な選手の代名詞であるらしい。
なぜかと言うと、右打者が多く、流し打ちもほとんど無いため、自分でキャッチすることが無く、守備の負担が無いためだ。

この9つのポジションを簡単に数字で表すことが出来る。（守備番号）

ピッチャー：1
キャッチャー：2
ファースト：3
セカンド：4
サード：5
ショート：6

レフト：７
センター：８
ライト：９

野球の実況では「６、４、３のダブルプレー！！」など、この守備番号で表すことも多い。

ちなみに上の場合、ショートがキャッチして、セカンドに送られたあと、ファーストに送ったという意味だ。

「こんな感じかな。まぁ言葉で聞くより、実際にプレーをする方が覚えやすいよな？」

ヒート先輩の言葉にみんなが頷く。

「それじゃあ練習スタートだ！！」

キュウコン監督の言葉で、あさポケナインの守備練習が始まった。

第４４話：「守備練習スタート！！……の前に特別授業！！」の巻（後書き）

カゲっち：「ふぇ～……。確かに専門的だったね（苦笑）」

作者：「でもどうしても知ってほしくてね。打順のポイントのように、ポジションのポイントも大事だからね」

キュウコン：「さて、次回は本格的に練習スタートだ！」

ナイン：『ハイ！』

第４５話：「守備練習開始！まずは基本から……！」の巻（前書き）

カゲっち：「いよいよ守備練習開始だね！」

ピカっち：「どんなことをするのかしら？」

チック：「色々気になる第４５話プレイボール！！」

第４５話：「守備練習開始！まずは基本から……！」の巻

９つのポジションにも、それぞれ重要なポイントってあるんだね。僕もしっかり練習しなきゃ！！

「さて、まずは基本のプレーからだ。バッテリー（ピッチャーとキャッチャー）と内野手（ファースト、セカンド、サード、ショート）は、フライ以外の打球は、キャッチしたらすべて一塁に送るんだ！フライは例えファールゾーン（白線の外側）でも、バウンドするまではキャッチしたらアウトに出来る。良いな？」

『ハイ！！』

キュウコン監督の言葉にヒート先輩、ラプ先輩、チコっち、僕、チック、ピカっちが大きく返事をする。

「外野手（レフト、センター、ライト）のみんなは、内野手のカバーをしてくれ。キャッチしたら、カゲっちかピカっちに中継して、二塁ベースに戻すんだ」

『ハイ！！』

どうやら早速連携プレーも出来るようだ。しっかり練習しなきゃ。

そんな感じで説明が終わった。キュウコン監督がノックする形で、いよいよ練習スタートだ！！

「まずは……サード！！」
「ハイ！！」

チックが元気に返事する！

カーーン！！

たたき付けられたバウンドがチック目掛けて転がっていく！！

『これくらい……前進してキャッチしてみせる！！』

チックは勢いよく前進してボールをキャッチする！
そして……、

「ファースト！！」
「ハイ！！」

キャッチャーのラプ先輩の指示で、ファーストのチコっちが、一

塁ベースを後ろの左足で踏む。

そして、目一杯前の右足を伸ばし、ファーストミットでチックからの送球を見事にキャッチした！！！

「よし！そんな感じだ。チックは捕ってから投げるまでの間も無く、なおかつ正確な送球だったぞ」

「ありがとうございます！！」

キュウコン監督はチックを褒める。

「確かに……グローブから右手にボールを持ち替えるまで、あっという間だったなぁ……」

僕はチックの守備の様子を見て感心してしまった。

「一塁に投げるときに、ちょっと前にステップしながら、勢いづける感じで投げると良いよ♪」

チックは笑顔で教えてくれる。

「次は……セカンド！！」
「ハイ！！」

次は僕の方向に飛ばすようだ。頑張るぞ～！！

カーーン！！

速いゴロが二塁ベース寄りに飛んでいく。

僕も2、3歩右にズレる。

「ファースト！」

ラプ先輩の言葉で再び一塁ベースを踏むチコっち。
そして……、

「それ！！」

僕は右手にボールを持ち替えて、少し軽めに投げる。

チコっちも見事にキャッチしてくれた。

「そんな感じだ。今はファーストから遠い位置から投げたから、普段通り上から投げても良いんだ。だが、近い位置からキャッチした場合は下から上へと軽く投げる（トス）と良いぞ」

「ハイ！」

僕はキュウコン監督の言葉に大きく返事をした。

「次は……ピカっち！」

「ハイ！」

続いてショートのピカっちが練習だ。

カーン！

打球は速いゴロ！！三遊間を破るか！？

「これは回り込むように捕ると良いんだっけ？」

ピカっちがダッシュして、大きく三塁ベースに向かって半時計周りに円を描くように回り込む。

こうすることで、常にキャッチの基本である、体の正面という体勢が出来るのだ。

「ここから届くかしら?えい!」

ピカっちは三塁ベースより5歩ほど後ろの、かなり深めの位置から、思い切り一塁へ送球する。

トントン……ポス!

ボールは2回弾んだが、それでも無事にファーストミットに収まった。

「ピカっちはそんなに肩は強くないが、キャッチから投げるまでの時間を、カットするような気持ちで素早く投げると良いぞ!」

「ハイ!」

キュウコン監督が言うには、いくら肩が強くても投げはじめるのに時間がかかるのはダメなようだ。

正確に一塁へ投げること、素早くアウトにするため、キャッチしてからすぐに投げる選手は肩がそんなに強く無くても、アウトに出来るのだと言う。

「この送球の技術を“スローイング”と言うんだ」

ヒート先輩が言う。

「さらに言うと、一塁への送球は山なりに投げたらダメなんだ。そうするとファーストはキャッチするために、目一杯上へミットを伸ばし、足をベースから離してしまう恐れもあるんだ。第一ボールを捕れずに、エラーになってしまったら、ランナーは二塁に走ってしまうからな」

そのほかにも山なりのボールは、スピードが遅いため、一塁ベースに到達する時間が長くなるだとか。

「それなら強く地面に投げるつもりで、矢のように勢いがある方が良いんだ。第一ファーストもキャッチ出来るぞ！」

送球の技術を熱心に話すキュウコン監督。

ピカっちも最後まで真剣に聞いていた。

「さぁ、次はファーストだ。キャッチする間に、一塁にピッチャーがカバーに入るんだぞ！！」
「ハイ！！」

ファーストにボールが飛んだ場合は、ピッチャーが一塁にいるか、ファーストが自らベースを踏めばアウトに出来るらしい。

カーーン！！

打球はファーストのチコっちの前で弾んだ。

チコっちは1歩前進してキャッチする。

「ファーストがベースを踏みなさい！」

キャッチャーのラプ先輩が指示をする。何人かの野手が捕れそうな場合は、以前の打撃練習のように「オーライ！」と叫ぶか、キャッチャーが指示するパターンがあるのだ。

「ハイ！」

指示を受けたチコっちが、足でベースを踏む。こうすることでアウトに出来るのだ。

「それでいいぞ！！キャッチャーはチームの司令塔の役目がある。最初のうちはキャッチャーの指示に従うと良いぞ！」

キュウコン監督が両前足を叩いて褒める。

「次にピッチャー！！」
「ハイ！！」

ヒート先輩が大きく返事をする。

「ピッチャーはボールを投げた後に、鋭い打球が飛んでくると反応できないときがある。そんなときは内野手全員が、自分に飛んでくると思ってキャッチするんだ！！」
『ハイ！』

カーン！

ヒート先輩のピッチングの動作後、打球が飛んできた。果たして

キャッチできるか？

「うわ！捕れない！！」

ヒート先輩はグローブでボールを弾く。

「僕が捕るよ！」

僕は素早くボールを一塁に投げる。

そのまま一塁に投げたが……、

「あぁ！ボールが捕れないわ！！」

僕は慌てたせいか、ボールを高く投げすぎたようだ。

ファーストのチコっちはジャンプしたが、全く捕れなかった。

「カゲっち。あまりミスを気にするな。誰だってパニックになるときはある。そんな時こそ、手順を忘れずにプレーするんだ」

「ハイ……。ごめんなさい」

僕は少しガッカリするような様子で、自分の守備位置に戻っていった。

「続いてキャッチャーゴロだ！」

キュウコン監督がたたき付けるようにゴロを転がす。

ラプ先輩はマスクを外すと、慌てることなくキャッチして一塁に送球した。

「内野手の基本のプレーはこんな感じだ。とにかく一塁に送れば、アウトに出来る。無理なプレーは厳禁だ」

キュウコン監督の言葉に、内野手全員が頷いた。

続いて外野手の守備だ！

「外野手のみんなはさっき言ったように、キャッチしたら二塁に投げるように」

どうやら長打を打たれた場合を想定するようだ。

「セカンドとショートは外野からの中継役と、二塁でランナーをタッチする役目をどうするか、プレイするんだ」

一塁でランナーをアウトにする場合と違い、外野にヒットを打たれた場合は、ランナーをタッチしないとアウトにならないようだ。

「それでは行くぞ！」

キュウコン監督が強く言う。

カーーン！！

打球は左中間に飛んでいく！！

センターのジュジュ先輩に、レフトのラージキャプテンが、追いかける!!

カシャーン!!

ボールはフェンスに当たった。

「俺が中継する!!」
「うん。任せたよ!!」

ボールを先にキャッチしたラージキャプテンがそのまま投げた!

「レフトに近いから、あたしがボールを受け取るわ!」
「わかった!じゃあ僕が二塁にいるね」

僕とピカっちは素早く配置につく。

中継のこれと言った決まりは特に無いが、レフト方向は基本的にショートが中継役で、センターからライト方向はセカンドが中継役になるとうまくボールを内野に戻せると、キュウコン監督が教えてくれた。

「ラージキャプテン！こっち～♪」

ピカっちが大きく腕を振る。
こうすることで外野手にも伝わるのだ。

ラージキャプテンから投げられたボールがピカっちのところに戻ってきた。

「これを……カゲっちくん♪」

ピカっちは振り向いて二塁にいる僕にボールを投げた。

「それ！」

最後に僕はグローブで地面をこすり、土をすくいあげるような動作をした。

「これは本当ならランナーの足をタッチするんだよね」

もう一度おさらいすると、外野にヒットを打たれた場合は、
?外野手がキャッチ
?中継役（内野手）に投げる。
?ランナーに近いベースに投げ、タッチする。

場合によってはランナーが戻るパターンもあるが、その時はランナーが戻るベースに投げるのだ。

「打ったバッターも、走っているランナーも、ボールがベースに着く前にどこかのベースに到着すればセーフだし、離れていてタッチされたらアウトになるからそれを覚えておくと良いぜ！！」

ヒート先輩がアドバイスを送ってくれた。

そのあと同じような練習を繰り返した僕たち。
一つ一つの動作を確認しながら……、ときにはミスをしながら……。

「基本のプレーはこんな感じだな。次は盗塁を刺す練習とけん制の練習を行うぞ！！」

しばらくしてキュウコン監督がそう言った。

次はどんな練習なのか楽しみだ！

第４５話：「守備練習開始！まずは基本から……！」の巻（後書き）

カゲっち：「作者さんのイジワル……」←まさかの送球ミス

ラッシー：「イジワル……」←一度も出番無し

ラプ：「2匹ともドンマイよ。次回もあるんだからね？」

チック：「頑張ろう！」

第４６話：「バッテリーＶＳランナー！」の巻（前書き）

カゲっち：「頭がいたい～！（汗）」

ピカっち：「覚えることがいっぱいあって大変ね。でも、しっかり練習しなきゃ」

ラプ：「それじゃあ早速第４６話プレイボールよ！」

第４６話：「バッテリーＶＳランナー！」の巻

何事も基本が大事！しっかりとプレーの一つ一つを身につけていくぞ！！

「次は盗塁を刺す練習と、けん制の練習を行うぞ！」

キュウコン監督の言葉で練習の内容が変わる。

「盗塁を刺すためには俺とラプ、つまりピッチャーとキャッチャーの共同作業が必要なんだ」

「共同作業？」

ヒート先輩の言葉に僕は首を傾げてしまう。

「どういうことかあたしが教えてあげる♪」

ラプ先輩がウインクしながら説明を始めた。

「盗塁するためには、相手バッテリー（ピッチャーとキャッチャ

ー）がどんなボールをよく投げるのか知っておく必要があるの」

ラプ先輩の説明によると、バッテリーがどんなボールを投げるかを集めたデータを“配球”と言うらしい。

例えばヒート先輩の場合、ストレートを多く投げる傾向があり、武器としているフォークは三振を取るために最後に投げることが多いのだ。

「だから1回から9回まで、27個のアウトを取るのに同じようなパターンで投げると打たれやすいのよ」

と、同時に配球を研究することで、相手ランナーがいつ盗塁したら良いのかわかってしまうのだ。

「まぁ、僕も盗塁には自信があるけど、ヒートの場合は3球目にフォークを投げやすいから、走りやすいけどね」

ジュジュ先輩が話す。

一般的に盗塁するときには、速い直球を投げた時よりも、それよりも何キロかスピードの遅い変化球の方が盗塁しやすいのだ。

「それを防ぐため、足の速いランナーがいるときはなるべくピッチャーに直球を投げさせることが多くなるわ♪ただ……」

ラプ先輩が笑顔から急に曇った表情に変わる。

「ただ……何ですか？」

ピカっちが心配そうに話しかける。

「ごめんね。ランナーがいるときに直球を多く投げさせることは、盗塁をさせないための警戒が出来るんだけど、逆にそれはバッターとの勝負をおろそかにしてしまうの」

その言葉に首を傾げるピカっち。

ただ、僕にはラプ先輩が言いたいことがわかった。

「配球が単調になって、直球を打たれてしまうリスクがあるんですね？」

そう。さっきもラプ先輩が言ったように、盗塁を刺すには速い直

球を投げた方が良いのだが、逆にそれは投げるボールを読まれて、ヒットを打たれる恐れがあることも意味するのだ。

そうなったらますますピンチが広がるのは目に見えている。

盗塁を刺す……。

それはランナーとの作戦の駆け引きが必要になる……、正に“頭脳戦”なのだ。

「カゲっちくんも、ピカっちちゃんも足が速いから盗塁が出来ると思うわ。相手バッテリーがどんな配球を見せるのか、よく見ていると良いわ♪」

『は～い♪』

僕とピカっちは大きく返事をした。

「まだ盗塁を刺すためのテクニックはあるぜ！！２つあるけど順に説明するぜ！！」

ヒート先輩が説明を始めた。

「一つ目は“ウエストボール”だ！」

“ウエストボール”とは直球をわざと大きくバッターの外角（外側）高めに外すこと。

「カウントがノーボールとか、ワンボールとか、明らかにピッチャーに有利なときに投げるんだ。ボールを一つ増やすけど、高めに外すことで座った体勢のキャッチャーが、立ち上がって二塁や三塁に投げることが出来る。するとランナーをアウトに出来るんだ」

確かに座った体勢で遠くまで投げることは困難でも、立ち上がれば投げやすくなれる。

「二つ目は“クイック”！これはランナーがいるときにピッチャーが投げるときの動作を少なくして、時間を短くすることだぜ」

実際にヒート先輩が投げるときの動作を見せてくれる。

「ランナーがいなければ、バッターに対して真っ正面に立って、思い切り足を上げて、腕を大きく振る！！こうすりゃあストレートもかなりのスピードを出せるぜ！！」

スパーーン!!

ボールはラプ先輩の構える青いキャッチャーミットに吸い込まれた。

「これはランナーがいるときだ。バッターに対して真横に立って（セットポジション）、足を早く上げて投げる!!」

確かに……。これだけでもさっきと比べて動作が少ない。
クイックの上手なピッチャーはさらに動作が少ないか、この動作にかかる時間が短いと言う。

「ただ、この状態はいつもよりコントロールは乱れるし、何より思ったほどのスピードが出ないから、俺は好きじゃ無いんだ」

ヒート先輩が苦笑いする。

「とまぁ、こんなところだろう。盗塁を防ぐにはバッテリーの共同作業が必要の意味がわかっただろ?」

僕とピカっちは大きく頷いた。

ちなみに盗塁をされたときは、二塁への盗塁（二盗）ならセカンドかショートがベースにいてランナーにタッチして、三塁への盗塁（三盗）なら、サードがベースにいてランナーにタッチするのだ。

「それでは練習を始めるか！」

キュウコン監督の言葉で練習が始まった。

ちなみにランナー役として、キュウコン監督が繰り出した“みがわり”が利用された。

何でも“みがわり”を“あやしいひかり”でコントロールするらしい。

とにかく練習が始まった。

ヒート先輩がセットポジションで、ボールを投げた！！

同時に一塁ランナーの“みがわり”もスタート！！

「僕が二塁にいるよ！」

「あたしはカバーにまわるわ！！」

二遊間の僕たちは役目を決め、その場所に向かう。

「あたしをバカにしないでよ！」

ラプ先輩がマスクを外し、ボールを二塁に送球する！！

“みがわり”もかなりのスピードで二塁に到着しそうだ！

「間に合うか！？それ！！！」

ザザザーー！！

一瞬二塁ベースに砂ぼこりが立ち込める。

「……。セーフだな……」

二塁ベースに審判役としてその場にいた、キュウコン監督が判定した。

「わずかだが、“みがわり”はタッチされる前に、二塁に足からスライディングした。カゲっちのタッチも体にされている」

キュウコン監督によると、タッチするときに相手ランナーも勢いよく突っ込むため、反動に負けないくらい強いタッチが必要らしい。

「それに浅く速く行うように。そうでないとタッチがどうしても遅く見えてしまうぞ」

「あ、すいません……」

僕は申し訳ない気持ちになってしまった。

同じような練習を続けて１０回行った。

「セーフ！」
「きゃ！送球がそれたわ！」
「アウト！！」
「まだタッチが甘いぞカゲっち！」
「負けるもんか！！」

結局アウトに出来たのは2回だけだ。

「ハァ……ハァ……ハァ……。僕はこのタッチを上手に出来なきゃいけないね……」

セカンドの定位置で座り込み苦笑いする僕。

「送球ミスが無いように気をつけなきゃ……」

ラプ先輩は考え込んでしまう。

「試合中はもっとランナーに気をつけなきゃな。走られ放題の配球にならないように」

ヒート先輩がポーン、ポーンとボールをバウンドさせる。

「休んでいる暇は無いぞ！続いてけん制の練習だ！」

キュウコン監督が強い口調で言う。

何日間か監督の様子を見たけど、ここまで選手に強い口調で話すのははじめてかもしれない。

「ところでけん制ってどんなことをするんですか？」

ピカっちがヒート先輩に聞く。

「まぁ、簡単に言うとランナーを盗塁させないために、様子をうかがうんだよ」

ヒート先輩が帽子を取りながら答える。

「けん制することで、相手ランナーはなかなか盗塁しにくくなるのよ」

ラプ先輩もマスクをつけながら説明を始めた。

元々ランナーは次の塁に走りやすくするため、ある程度ベースから離れていることが多い。（リード）

しかし、この離れている距離が大きいと盗塁されやすくなったり、ヒットを打たれたときに次の塁に到着されてしまう。

「だから、ある程度ランナーが戻らなきゃいけないベースに向かって、ボールを投げるの。こうすることでランナーをベースに戻したり、運が良いとアウトにすることも出来るのよ」

ラプ先輩が話してくれる。

他にもけん制によってバッターの打つタイミングを狂わせたり、次にどんなボールが来るか悩ませたりすることが出来るらしい。

「これも盗塁を刺すときと同じように、ランナーとの“頭脳戦”なの♪」

ラプ先輩はいつものようにウインクしながら話してくれた。

「ちなみにけん制は何回行ってもカウントに影響は無いんだ」

それとけん制は左投げのピッチャーが有利らしい。

なぜなら一塁ランナーを真っ正面で見ることが出来るのと、三塁ランナーはホームベースに盗塁（本盗）する可能性がほとんど無いためだからだ。

「カゲっちたちは、盗塁のときのようにベースカバーをして、ランナーにタッチするんだ。場合によってはランナーが間違って次の塁に走っていくから、その時は内野手全員でランナーをアウトにするんだ！」

最後にキュウコン監督の言葉で、説明は終わった。

そのあと早速練習が始まった。

先ほどのように、“みがわり”が一塁ランナーだ。

マウンド上でヒート先輩がチラッチラッとランナーを見る。

『……。一度けん制するか……』

ヒート先輩が突然クルっと一塁に体を向け、けん制球を投げた！

その瞬間“みがわり”は頭からベースに飛び込んだ！

ファーストのチコっちはボールをキャッチすると、ランナーにタッチした！

「セーフ！」

だが、判定はセーフだ。

チコっちはボールをヒート先輩に返す。

『まぁ、こんな感じか……。あまりけん制し過ぎると、自分のリ

ズムも狂うし、ほどほどにしておこう』

同じようにして、二塁へのけん制、三塁へのけん制も行う。

「振り向く前にプレート（マウンドの白い板）から足を外さないとボークになるから、気をつけなきゃいけないわね？」

「あぁ。ボークになったらランナーは次の塁に進むからな」

ラプ先輩とヒート先輩がやり取りをする。

けん制の練習はそのあと１０回行った。

「だいたいコツを掴んだようだな。これで盗塁を刺す練習と、けん制の練習は終わりだ。これからリーグまでに練習を積み重ねるぞ！」

『ハイ！！』

この練習の間外野手のラージキャプテンとジュジュ先輩、ラッシー先輩は、主に内野手のカバーがほとんどだった。

「俺たちが活躍する場面がなかなか来ないなぁ……」

ラッシー先輩はこの前の打撃練習とは比べものにならないほど、テンションが低い。

「まぁそう言うな。一通りの守備練習の後、あさポケ名物“１０まんノック”をするからな」

キュウコン監督がバットを持ち笑う。

「ひぇ～！！“１０まんノック”だなんて地獄だぁ～」

ラッシー先輩とラージキャプテンが恐怖を覚えた。

「“１０まんノック”だなんて楽しそうですね♪」

一方何も知らない僕はワクワクした気分になる。

後々、地獄を味わうことなど知る由もなく……。

「さぁ～て。次はダブルプレーの練習を行うぞ！」

キュウコン監督がそう言う。

次回も守備練習はまだまだ続く！！

第４６話：「バッテリーＶＳランナー！」の巻（後書き）

カゲっち：「へぇ～。守備ってランナーとも勝負しないといけないんだね」

ヒート：「だからアウトを取ると燃えてくるんだぜ！」

ピカっち：「次回も内野手メインの練習ですよ。楽しみにしていてね♪」

第４７話：「２つアウトを取れ！」の巻（前書き）

カゲっち：「今回でだいたいの守備のプレーは終わりだね」

ピカっち：「最後まで全力で頑張るわ！」

ヒート：「突き進む俺たちに注目してくれ！」

ナイン：『第４７話プレイボール！』

第47話：「2つアウトを取れ！」の巻

守備ってすごく奥が深いんだね。試合のときにちゃんと出来るように頑張るぞ！

「次はダブルプレーの練習をするぞ！」

キュウコン監督が強い口調で話す。

「どういった練習内容なのか、説明するぞ」

ダブルプレーとは　、ゲッツーとも言うらしい。

ランナーが一塁、あるいは一二塁、満塁など、続けて二人以上いる場合に、まとめて2つのアウトを取ることだ。

「基本的にランナーはゴロやバウンドが転がってきたら、必ず次の塁に進まないといけないんだ」

逆にフライやライナーならば、一塁ランナーなら二塁に進まず、一塁に戻らないといけない。

「ということは、ゴロの場合は打ったバッターは必ず一塁に行かないといけないし、一塁ランナーも二塁に行かないといけないんですね」

「そういうことだ」

ピカっちの言葉にヒート先輩がうなずく。

「だから守備陣にとっては一番アウトを取れるし、逆に攻撃陣にとっては一番嫌なパターンになるんだ」

キュウコン監督の言葉に納得する僕たち。

「アウトを取る順番はホームベースから近い順に取るんだ」

例えばランナーが一塁にいるなら、まず先に二塁からアウトにして、次に一塁をアウトにするらしい。

「だいたい説明はこんな感じだ。早速練習を始めるか！」

『ハイ！！』

僕たち内野陣は大きく返事をした。

「まず始めにランナー一塁の場面から行うぞ！」

キュウコン監督の“みがわり”が一塁に登場した。

コーーン！

打球はサードへのバウンドになった。

サードのチックがそれをキャッチして、二塁へ送球する！！

「あたしにボールが来たわ♪」

二塁ベースに構えていたピカっちが上手にキャッチした！！

「アウト！！」

二塁に到達していないので、一塁ランナーはアウトになる！

「行くわよチコっちちゃん♪」

続けてピカっちは一塁に送球する！！

「来なさい！！」

一塁ベースにいたチコっちは続けてそれをキャッチ！！

「アウト！！」

バッターも一塁に到達していないので、アウトとなった！

「よし！素晴らしいダブルプレーだったぞ！」

キュウコン監督はバットを持ちながら、褒めてくれた。

続いてランナー一二塁の場面も練習する僕たち。

コーーン！

打球はセカンドの前に転がる！！

「僕が捕らなきゃ！！」

僕は前に走りながら、それを赤いグローブでキャッチする！！

「まずは三塁へ！！」

僕は三塁に送球する！！

「僕に任せてよ♪」

ニコニコしながらサードのチックがキャッチをする！！

「アウト！！」

二塁ランナーは三塁に到達していないのでアウト！

「二塁に……それ！！」

チックが二塁へ送球する!!

「絶対に捕ってみせる!!」

二塁ベースに構えていたのは僕。

「アウト!!」

一塁ランナーは二塁に到達していないのでアウトだ!!

「なかなかの判断力だったな。場合によっては一塁に送球しても良いぞ」

キュウコン監督が感心する。

「そっかぁ。間に合わないときは一塁に投げても良いんだよね」

僕は先ほど学んだ基本のプレーのことを思い出す。

いかなるときでも、打ったバッターは必ず一塁に走らないといけないので、迷ったときは、確実に一つずつアウトを取れば良いのだ。

「ムリしてゲッツーを取ろうとして、逆にランナーが増えたら、ピンチが広がるからね♪」

ラプ先輩がニコニコしながら説明をする。

ダブルプレーを利用して、絶対絶命のピンチを抑える作戦があるらしい。

「試合が終盤戦になると、1点が重たくなるからな。ランナーがたくさんいて、相手チームの4番打者を迎えたりするのはドキドキするぜ」

マウンドのヒート先輩が苦笑いする。

「でもそういった場面でまとめて2つアウトが取れたりすると、最高の気分になるんだぜ!!」

そんな場面を自ら作り出すため、わざとバッターをフォアボールにして、ランナーを満塁の状態にする作戦があるのだと言う。

「この作戦を“満塁策”って言うのよ」

ラプ先輩が説明をする。

「満塁の状態で、ゴロが転がって来たら、どこへ送球してもアウトに出来るからね。その代わり長打を打たれたりしたら、大量失点につながるイチかバチかの賭けの作戦なのよ」

でも逆に言えば、そんな絶対絶命のピンチだからこそ、ダブルプレーでまとめて2つアウトを取れれば、最高の気分になれるのだと言う。

「それほど、攻撃するチームにとって、ダブルプレーは何としても避けたいことってなんですね」

「ああ。そうだ」

僕の言葉にヒート先輩がうなずく。

「少しその練習をするか」

ヒート先輩がそう言うと、キュウコン監督が“みがわり”を一塁、二塁、三塁に置いた。

『試合でもなんでもない今でさえ緊張するなぁ……』

僕は辺りの様子を見て、ドキドキと緊張してしまう。

「それでは、練習を始めるぞ！！」

キュウコン監督はそう言うと、バットでボールを振った！

カーーン！！

強い打球が三遊間を転がる！！

「僕がキャッチするよ！！」

サードのチックはそう言うと、その打球を難無くキャッチして、

「まずは、三塁ベースを踏んで……」

幸いチックから三塁ベースは近かったので、そのまま彼はベース

を踏んだ。

「アウト！！」

ちなみに、今のようにするだけでもアウトに出来ると言う。

「そのまま、ホームベースだぁぁぁぁ！！！」

チックは持ち前の強肩を見せ付け、ホームベースに送球する！！

「間に合う……間に合うわ！！」

ラプ先輩がボールをキャッチした！

「アウト！！」

もちろんホームベースもアウトにすることが出来た！

「バックホーム（ホームベースへの送球）か三塁が先か。判断に

迷いやすいが、効率よくアウトを捕ることが出来たな。よし、もうちょっとダブルプレーの練習をするぞ！」

キュウコン監督の言葉で、再び練習を始めた僕たち。

何度も確認を取りながらていねいに行ったのである。

１０分後……。

「だいたいこのあたりで良いだろう。次は特別な守備位置の練習だ！！」

キュウコン監督によると、試合の状況で、僕たちの守備位置は色々と変化するらしい。

「まず始めに、バントシフトの練習だ」

バントシフトとは相手打者がバントを試みた場合に行う守備位置らしい。

「バントシフトはいかにバントを素早く処理出来るかが重要になるんだ」

基本的にはファーストとサードが本来の守備位置より大きく前進するのだと言う。

「バントはボールを白線ギリギリに転がして来ることが多いからな。だからこの2つのポジションが、本来の守備位置で守っていると、キャッチしてから送球してもセーフになってしまうんだ」

ヒート先輩が説明をする。

「とりあえず練習をしてみましょうか」

ラプ先輩が言う。

その言葉にキュウコン監督は、“みがわり”を一塁に置いた。

「相手がバントの構えを見せたら、チックくんとチコっちちゃんは前に走るのよ」

2匹はラプ先輩の言葉にうなずいた。

キュウコン監督がバットを横に構えた！！

「これがバントの構えよ！2匹とも走って！！」

チコっちとチックが前進する！！

コン！

ボールは三塁の白線をコロコロ転がる！

「僕が捕って……カゲっち！！」

チックはキャッチすると、そのまま一塁に送球した！！

このとき一塁ベースカバーに入るのはセカンドなので、僕が一塁

に立っている。

「来たね！キャッチするぞ！！」

僕は赤いグローブを前に出し、ボールをキャッチした！！

「アウト！！」

ランナー役の“みがわり”は一塁に到達出来なかったので、結果はアウトだ。

だが、一塁ランナーの“みがわり”は二塁に到達している。

「これが“送りバント”よ」

ラプ先輩が言う。先ほど練習したゲッツーを防ぐために、攻撃するチームはこうしたバントをするのだと言う。

「この送りバントを三塁の場面で行うと“スクイズ”になるの。他にも、自分の俊足を活かして内野安打を狙う“セーフティバント”や、バントのときに油断している野手を狙って、あえて強いゴロにする“プッシュバント”もあるわよ♪」

ただ、守備位置はどんな場合でも同じだとラプ先輩は説明した。

「ちなみにバントの場合は、ボールだと思ったらバントの構えをやめるの。ツーストライクの後にファールにすると、三振扱いになるから気をつけてね」

ラプ先輩は最後にそう言って説明を終えた。

「最後に後退守備と前進守備を練習して、大まかな守備練習は終わりだ。頑張るんだぞ」

『ハイ！！』

キュウコン監督の言葉にナインが大きく返事をする。

「“後退守備”は相手打者がパワーヒッターのときに、長打を防ぐための守備位置だ」

キュウコン監督によると、相手打者がパワーヒッターのときは、いつも以上に警戒する必要があると言う。

「特にクリーンアップは守備チームから得点を奪うために、長打などでまとめてランナーをホームインさせるからな。打たれ放題となるとダメージは大きくなるんだ」

逆にクリーンアップにヒットを許さないことで、攻撃チームの得点を防ぐことが出来るのだ。

「バッテリー以外はいつもの守備位置から、5歩くらい下がってみるんだ。それが“後退守備”の位置だ」

確かに……ここまで下がれば、長打を打たれてもキャッチ出来るな。

「続いて“前進守備”だが、これはランナーをホームインさせない守備位置だ」

タッチアップ（フライでバッターがアウトになったときに、ランナーが次のベースに走ること。三塁ランナーがホームインすると“犠牲フライ”になる。）を封じたり、内野ゴロでバックホームすることが簡単になるのだとキュウコン監督は説明した。

「いつもの守備位置から5歩くらい前に出るんだ」

ここまで前だと、ホームベースも近いなぁ。

「これで守備練習はだいたい終わりだ」

僕たちはいろんな知識で頭が痛くなりそうだったが、それでも「一生懸命で良かったぞ」とキュウコン監督は褒めてくれた。

「では、１０分間休憩だ。そのあとあさポケ名物“１０まんノック”を行うぞ！」

新入部員の僕やピカっち、チコっち、チックはそれが何なのかわからず首を傾げる。

だが、ヒート先輩たち５匹の先輩は一斉に「え〜！？」と声を上げた。

一体どんな練習なんだろう？

全ては次回明らかになる！！！

第４７話：「２つアウトを取れ！」の巻（後書き）

カゲっち：「ふ～。ようやく休憩時間だよ」

キュウコン：「まだまだだ。次回は“１０まんノック”スタートするからな！」

カゲっち：「は、はい！」

第４８話：「あさポケ名物！その名も“１０まんノック”だよ！」の巻（前書き）

カゲっち：「いよいよ守備練習も大詰めです！！」

ピカっち：「“１０まんノック”って何かしら？」

ヒート：「後半には波乱の予感！？」

ラッシー：「すべてが気になる第４８話プレイボール！！」

第４８話：「あさポケ名物！その名も“１０まんノック”だよ！」の巻

守備練習もいよいよ大詰め！気を引き締めて練習するぞ！！

「やれやれ。ようやく休憩だぁ。疲れたなぁ」

ラージキャプテンは一塁側の屋根付きベンチに座りながらホッと一息付く。

「僕たちも休もうか」
「ええ。そうね♪」

僕とピカっちも一塁側のベンチに座る。

「はぁ～……。次は“１０まんノック”かぁ……。どうせならホームランかっ飛ばしてぇよ……」

ラッシー先輩もため息をしながらベンチに座る。

「守備練習ってこんなに大変なんですね」

「だからこそ練習を積み重ねることが必要なのよ」

ピカっちとラプ先輩が“おいしいみず”を飲みながら、会話をする。

「でもピカっちちゃんたちは動きが良いわ。7月に大会が始まるけど、その間には最高の守備陣になると思うわ」

「あたしもそうなれるようにもっともっと練習頑張ります」

2匹は笑顔を見せながら楽しそうにする。

“１０まんノック”ってそんなに大変なんですか？」

僕は隣に座るラッシー先輩に話しかける。

「大変ってレベルじゃねぇ～よ……。始まったらいつ終わるかわからない地獄の特訓だ……」

ラッシー先輩いわく、あさひポケ中学は打撃より守備重視と言う伝統があるらしく、その守備を向上させるために力を入れているらしい。

「だからキュウコン監督もあんなに熱くなっているんですね」

僕は先ほどまでのキュウコン監督の様子に納得した表情を見せた。

「それじゃあ次の練習を始めるぞ！みんな自分の守備位置に行くんだ！」

『ハイ！！』

１０分ほど経って僕たちは守備位置に戻った。

「今から“１０まんノック”を行うぞ！みんなしっかり頑張るんだ！」

キュウコン監督が練習の説明を始めた。

「これは３００球のノックだ。基本的に内野手はキャッチしたら一塁に送球するんだ。もしヒットを許したら、ランナー役の“みがわり”が走っていくからな。だから外野手はヒットを打たれたらい

かにランナーを進めないかに集中するんだ」

つまりは実践的な守備練習だ。
もちろんランナーがホームインしたら失点することになる。

「失点すると、終わりまでの球数が３０球増えてしまうから気をつけるんだ」

いかに３００球で終わらせることが出来るかが勝負になるのだと言う。

「３００球かぁ……。簡単に終わりそうで終わらないですね」

永遠にノックが続く様子から、“１０まんノック”という名前がついたらしい。

「あたしは守備位置を指示したり、誰がキャッチしたら良いか指示するからね」

ラプ先輩はマスクを被りながら、そういった。

「ちなみに昨年の最少失点は２０点らしい。ひどいときは軽く５０点は失点するからな」

キュウコン監督がフッと笑う。

その時僕はゾクっと背筋に寒さが伝わった。

説明を終えたところでいよいよ練習が始まった！！

「今日こそ失点０に抑えるぞ！！」

マウンドでヒート先輩がナインに気合いを入れる！

『オーー！！頑張るぞあさポケーー！！』

僕らも利き腕や利き足を上げて気合いを入れた！！

まずは１球目！

キュウコン監督がバットを振った！

カーーン！！

打球はセンターへ飛んだ！！

「最初からヒットは嫌だね！！オーラーイ！」

センターのジュジュ先輩が2、3歩下がって無難にキャッチした！

「アウト！」

これまた“みがわり”の審判が判定を行った。

次の2球目はライトにライナーで飛んでいった！

「ケッ！絶対３００球で終わらせるぜ！！」

気合い十分なラッシー先輩がそれを真っ正面でキャッチした！！

「アウト！！」

判定はもちろんアウトになった！

「僕だって負けない！！」

「あたしに任せて！！」

「俺が全てキャッチしてやるぜ！！」

そんな調子でノックは５０球を超えた。

「今日はなかなかすごいな。まだ一回もランナーが出ていないとは……」

キュウコン監督は予想もしなかった出来事に感心する。

「オラァァァ！！絶対０点に抑えるぞ！！」

マウンドのヒート先輩の気持ちががさらにヒートアップする！！

「僕たちは絶対カントリー・リーグで優勝するんだ！！みんなの

悲願を達成するために、どんな困難も乗り越えてみせる！！」

ヒート先輩の闘志が乗り移ったのか、僕もしっぽの炎が激しく燃えはじめる！

「カゲっちくんが頑張るんだから、あたしだって負けない！！」
「あたしもよ！」
「もちろん僕だって！！」

内野陣の声が次第に大きくなる！

「ヒートだけじゃねぇぜ！俺もあさポケの４番として、熱くナインを引っ張るぜ！！覚悟しやがれ！！“１０まんノック”！！」

ラッシー先輩も熱く燃える！

「キャプテンとして負けない！！あさポケの底力見せてやる！！」

守備がニガテだというラージキャプテンは、人一倍気合い十分だ！

「僕も華麗な守備で頑張るよ」
「あたしもヒートを引っ張るわ」

ジュジュ先輩、ラプ先輩も真剣な表情だ！！

『良いぞ。このチームは部員こそ少ないが、団結力や野球に対する熱い気持ち、それに目標を達成するための努力は他校の何倍もある。今こそ弱小あさポケの進化が始まるんだ』

キュウコン監督はフッと笑う。

「そらぁ！」
「絶対キャッチよ！」
「燃えてきたぜ！！」

さらにノックは続きいつの間にか１５０球を超えていた。

「ハァ……ハァ……。ようやく半分かぁ。でもまだヒットになっていないぜ……」

さすがに動きが多くなり疲れが見えはじめるナイン。

だが、勝負はこれからだ。

次は１５１球目！

カーーン！！

打球は三遊間を襲う！！

「あたしが捕らなきゃ……！」

ピカっちは一生懸命追いかける！

しかし、打球はそのままレフトに落ちた。

「いつもなら……いつもなら捕れた当たりだわ……」

やはり疲れが出はじめたせいか、いつもは無難に捕れる打球をヒットにされた。

「１５１球目で初ヒットか……」

ちなみにランナー役の“みがわり”は一塁でストップする。

「……ドンマイだ！絶対次はゲッツーだ！」

ヒート先輩が暗くなっているピカっちを励まし、マウンドに戻る。

その１５２球目！！

キュウコン監督がボールを打つ！！

カーーン！！

打球はセカンドに転がってきた！！

「絶対にアウトにするんだ！ピカっち！」

僕は二塁ベースにいるピカっちにボールをトスする！！

「アウト！！」

まずは一塁ランナーはアウトになった！！

「そのまま受け取ってチコっちちゃん！」

ピカっちは一塁に送球した！！

「任せて！！」

チコっちが無難にそれをキャッチした！！

「アウト！！」

打ったバッターもアウトになった！

「やったぜ！ダブルプレー成功だ！！」

これでまたランナーはいなくなった。

「良かった……。みんなの足を引っ張ることにならなくて……」

ピカっちはホッとした表情をみせた。
そのあとランナーを出しては、ダブルプレーや、タッチアップの失敗で確実にアウトを取る僕たち。
気づけば２００球を超えていた。
「あと１００球……。ハァ……ハァ……。負けないぞ！」
みんなは汗をたくさん流している。
大分バテてきてもおかしくない状態だ。
次は２０１球目！！
カーーン！！
打球はレフトへ飛んだ！！
「キャプテンの意地見せてやるぜ！！」
ラージキャプテンは勢いよく前進していく！！

ポトッ……。

だが、惜しくもキャッチする前に打球はワンバウンドした。

「くっ！！」

悔しそうなラージキャプテン。
グローブを前に出しても届かなかったようだ。

これでランナー一塁だ。

続けて２０２球目！！

カキーーン！！

今度は右中間に打球が飛ぶ！！

俊足が自慢のジュジュ先輩も、ラッシー先輩も追いつかない。真っ二つに破られた！！

一塁ランナーの“みがわり”は一気に二塁から三塁へ走る！

「ここは僕に任せてラッシー！！」

「おうっ！」

ジュジュ先輩はボールを手にすると、そのまま中継せずに三塁へ投げた！

ビューーン！

勢いよく三塁にボールが送られる！！

「間に合う……！絶対間に合う！！」

三塁ベースカバーのチックが真剣な表情で、それをキャッチ！！

しかし、ランナーも足からベースに滑り込んだ！！

「いっけぇぇぇぇぇ！！」

チックもほぼ同時にランナーにタァァッチ！！！！

「……セーフ！！！」

その瞬間、ガックリとうなだれるチック。

三塁に送球したジュジュ先輩もしゃがみ込んでしまった。

「完璧な送球だったのに……。タッチも早かったのに……」

僕はチックたちの様子に小さくつぶやいた。

「これでランナー二、三塁かぁ。ちきしょう……」

マウンドを蹴りながらヒート先輩がつぶやく。

「今日こそは失点　０で乗り越えそうなのに……このままじゃ……」

ラプ先輩が不安そうな表情を見せる。

「でも、ようするにあのランナーをホームインさせなきゃ良いだけの話だろ！！みんな前進守備だ！！」

ラージキャプテンの一言でナインは前進守備をとる。

続けて２０３球目！！

「どんな球でもキャッチしてやる！！さぁ来い！！」

僕は思い切り赤いグローブを叩いて気合いを入れる！

キュウコン監督がバットを振った！！

カキーーン！

「あっ！！」
「しまった！！」
「ちきしょう！！」

白いボールは青空に吸い込まれていく！！

「くっそ！！負けるもんか！！」

センターのジュジュ先輩が自慢の俊足で白球を追いかける！！！

「僕はあさポケ一の守備職人だぁぁ！！絶対キャッチするんだぁぁぁぁ！」

ジュジュ先輩は思い切りグローブを伸ばし、地面に飛び込んで行く！

「間に合えぇぇぇぇ！！！！！！」

それからどれくらいの時間が経ったのだろうか？

「くっっっそおおおおおおお！！」

ジュジュ先輩はうつぶせの状態で思い切りグローブを叩きつけた。

あの瞬間、ジュジュ先輩のグローブは確かにボールに触れたものの、弾かれたようにポーンとまたグラウンドに落ちたのだ。

慌ててショートのピカっちに中継したが、時すでに遅し。

その前にランナーは、２匹ホームインしてしまったのだ。

そしてその瞬間、ナイン全員から「絶対０に抑える！！」という闘志が消え、下を向いてしまったのである。

「２失点……。ということは６０球のペナルティかよ……」

ライトのラッシー先輩が、ぼうぜんと立ち尽くしてしまった。

「……練習は終わりだ」

突然キュウコン監督がバットを置いた。

……そして、

「全員ホームベース前に集合だ！！」

突然怒るような口調で僕らナインに指示した。

僕たちはその言葉に「えっ？」というような困惑した表情で、キュウコン監督の方を向く。

「何をしている！全員集合だ！！」

また怒鳴るようにキュウコン監督が指示する。

『は……はい！』

僕らナインはその表情に、驚きを隠せないまま集合した。

そのあとのキュウコン監督の話で、さらに驚くことも知らずに……。

第４８話：「あさポケ名物！その名も“１０まんノック”だよ！」の巻（後書き）

カゲっち：「どうしてキュウコン監督はあんな怒っているのかな？」

ピカっち：「分からないわ……」

キュウコン：「真相は次回明らかになるぞ。ぜひお楽しみに！」

第４９話：「勝てない理由」の巻（前書き）

キュウコン：「今回は私の意外な事実が明らかになるぞ」

ラージ：「俺たちナインが集合した理由もな！」

ラプ：「注目の第４９話プレイボールよ！！」

第４９話：「勝てない理由」の巻

“１０まんノック”はやっぱり大変だったなぁ。先輩たちが嫌がる理由がわかったよ。

「よし、全員集まったな」

キュウコン監督は集まったナインを見て、そう言う。

「なんで私が突然みんなを集めたかわかるかラージ？」

「いいえ、わかりません」

キュウコン監督の質問に対して答えるラージキャプテン。

「実はみんなを突然集めたのは、どうしてこのあさひポケ中学野球部が、一度も“カントリー・リーグ”で優勝出来なかったのか伝えたかったからだ」

『え？』

キュウコン監督の言葉にナインがざわめく。

確か入部した日にヒート先輩や、ラッシー先輩から聞かされたのに……。

「私は今年からあさひポケ中学に転勤してきたのだ。以前は強豪にじポケ中学で、同じ野球部の監督を行っていた」

「にじポケの！？」

キュウコン監督の言葉にヒート先輩が驚きを隠せない。

ポケモンカントリーにある町の一つ、にじタウン。

そこにあるにじポケ中学は、ここ５年連続優勝というリーグでは常勝チームとして知られているらしい。

「去年は１２試合で一度も勝てなかったなぁ。毎試合のように２０点は取られていたっけ……」

にじポケは豪快な攻撃を持つ一方、送りバントや盗塁といった細かい“つなぎ”のプレイ、そして絶対的なエースとそれを支える強力守備陣が特徴だと、ヒート先輩が言う。

「このチームのことは、にじポケが初優勝した5年前からずっと見てきた。なぜあさポケだけがそんなにも勝てないのかと言うのもな」

キュウコン監督が目をつぶって話す。

「5連覇を果たしたその時、その答えは見つかった」

「一体……それはなんですか？」

ラージキャプテンがおそるおそる聞いてみる。

「……簡単だ。“諦めない気持ち”。“勝ちたい”という強い意志が見られなかっただけだ」

『！？』

その言葉にナインが互いの姿を見てしまう。

「この“１０まんノック”のときも、以前の打撃練習もそうだ。“負けたくない！”“諦めたくない”という気持ちがどうしても伝わらないんだ」

キュウコン監督が話を続ける。

「そんな……そんな!!俺たちは去年のメンバーと違うんだ!!“勝ちたい”気持ちは誰よりも強いんだ!!冗談じゃない!!!」

ラージキャプテンがショックからか、荒れ狂う波のように叫びだす。

「……ラージ。ではキミは守備がニガテだということをみんなによく話すが、それを向上させようとする気持ちはあるのか?」

「!!?」

キュウコン監督の冷静な質問に対して、またも驚くラージキャプテン。

今にも泣き出しそうな表情だ。

「そ……それは……」

思わず下を向くラージキャプテン。

「君は打撃は一級品なのに、守備練習のときはいつも嫌そうな表情を見せるだろう?それでどうして“勝ちたい”気持ちが伝わると

いうのだ？」
「……」

キュウコン監督の言葉に下を向いたまま、小刻みに震える背番号“６”。

「ジュジュもそうだ。おととといの打撃練習、今日のプレー。センスは一級品なのに、それを過信するばかりに“これでいい”などと思ってはいないか？」
「それは……」

ジュジュ先輩も質問に答えることが出来ない。

「ヒートは真っすぐな姿勢はすごい長所だと思うが、だが真っすぐ過ぎるがあまり、ピンチの場面や自分が逆境に立たされたときに、気持ちが折れていないか？」
「……」

入部したその日繰り広げたジュジュ先輩との１５球勝負がすべてを物語っている。

「ラッシーもだ。どうして打撃練習だとあんなに燃えるような姿を見せるのに、“１０まんノック”になるとそんなにやる気を見せないんだ？」
「……」

あまりにも痛い言葉に、前を向くことが出来ないラッシー先輩。

「私が見た“勝ちたい”気持ちや“諦めない”気持ちが見られないということ。今は4匹に質問をしたが、他のみんなも心当たりがあるんじゃないのか？」

キュウコン監督は別に説教するように怒っているわけでもなく、ただ誰も答えられない質問を何問も出す。

『僕も何回もエラーする度に、自分にマイナス思考を働かせていたっけ……』

僕もただ下を向き、暗い気持ちになる。

「なぜ私が練習を途中でやめたのか。それは2失点しただけで、君たちナインの“絶対に抑える！”という強い意志が消えたことを残念に感じたからだ。そんな姿勢で試合に臨んだところで相手に勝てるはずがないだろう？」

キュウコン監督はさらに話を続けた。

0点で200球までこなしたのに、2失点しただけでズルズルと気持ちを引きずっていたのでは、同じ“優勝”へチャレンジしている他校にメンタル面で負けてしまうのだ。

「この現象は5年前から感じていた。毎年毎年“負の連鎖”から脱出出来ないのが、あさひポケ中学野球部の弱さの真相だと私は感じた」

“諦めない”気持ち、“勝ちたい”気持ちが全力プレーを生むんだとキュウコン監督が言う。

逆にその気持ちが無くなったら、去年ピースさんの“夢”を奪ったテキトーな先輩たちのようになるんだ……、とキュウコン監督は言った。

気持ちの弱さ……。センスへの過信……。逆境からの逃避……。

こんな気持ちを持って果たして今年も“優勝”という悲願を達成出来るのか？

あさひポケ中学野球部ナインはまた難しい課題に直面した。

「とりあえず今日の練習は終わりだ。このあとは自主練習の時間にするぞ」

『ハイ……』

キュウコン監督の言葉にナインは力無く返事をした。

その後僕たちは一度一塁側ベンチに集まった。

ナインのキュウコン監督の話に対する心のダメージは大きすぎたようだ。

みんな黙り込んだまま暗い表情をしている。

「まさか監督があんなことを言うなんて……」

ラプ先輩が重苦しい空気の中、力無くつぶやく。

「俺たちの考えていることって周りから見れば甘かったのかもなぁ……」

ラッシー先輩がフゥーとため息をする。

「このままの調子で、ピース先輩の叶えられなかった“夢”を達成出来るかな……」

いつもは弱音なんて言わないヒート先輩もそう言う。

僕はふと空を見た。

いつもと変わらない青空が広がる空。

でも今ここに集まっているナインには、そんな青空を見て気持ちいいなどと感じることは無かった。

「これから自主練習の時間かぁ……。なんだか野球をしたい気分じゃないなぁ……」

僕が暗い表情でそう言う。

ヒート先輩、ラッシー先輩、ジュジュ先輩、ラプ先輩、ラージキャプテン、チック、チコっちも同じような気持ちのようだ。

誰一人として練習道具を持ち、グラウンドに出ようとしない。

そう……ナイン全員が……、……え？

「ピカっちがいない……」

僕はピカっちの姿が見えないことに気がついた。

「さっきまで一緒だったのに……」

僕は心配になり、辺りをキョロキョロしてしまう。

一体彼女はどこへ……？

僕はベンチを飛び出し、彼女を探しはじめた。

第４９話：「勝てない理由」の巻（後書き）

ヒート：「嘘だろ。監督が常勝チームの監督だっただなんて……」

作者：「キュウコン監督についてはまだまだ不明な点が多いですが、物語が進むにつれてどんどん分かっていきますよ！」

第５０話：「どうして野球をするの？」の巻（前書き）

カゲっち：「いつの間にか５０話になっていたんだね」

作者：「１話１話が細かいせいで、大会開始前に５０話になったのかも……」

カゲっち：「でもこれもいつも読んでくれて、たくさんの温かい感想を書いてくれる……数え切れない多くの読者さんのおかげだよね！」

作者：「本当にありがとうございます！！」

カゲっち：「そんな区切りの第５０話……

ナイン：『プレイボール！！』

第５０話：「どうして野球をするの？」の巻

僕たちが考えているより“優勝”って大変なんだなぁ……。これからどうしたら良いんだろう？

「ピカっち？ピカっち！？」

僕は姿が見えないピカっちを探していた。

『さっきまで僕と一緒だったのに……。どうしていないんだ？』

僕は少し焦りの気持ちを抱きながら、グラウンドを飛び出した。

「あ！ピカっち！！」

彼女は自分の黄色いグローブとボールを持ち、バックネットの前にいた。

「あ、カゲっちくん！一緒にキャッチボールしましょうよ♪」

ピカっちはいつもと変わらない笑顔で僕に話しかける。

「……ピカっち……」

僕は相変わらず暗い気持ちで彼女を見つめる。

「どうしてみんな練習をしないのかしら？」

彼女は首を傾げながら僕に聞く。

「みんなキュウコン監督の言葉にショックを受けているんだよ。僕たちが考えているほど“優勝”は簡単じゃないんだって。それでこのまま練習を続けて、他の野球部に勝てるんだろうか？って迷いが生じているんだよ」

僕はみんなの気持ちを代弁するように、ピカっちに理由を説明する。

「……勝てないからって練習しなくてもいいの？」

ピカっちが悲しそうな、でも真っすぐな視線で僕を見つめながらそう言う。

「勝てないからって逃げてもいいの？」

彼女は僕に考えるスキを与えずに、素朴な疑問をぶつける。

「勝てないからって何もしなくていいの？どうして？」

「……それは……」

僕は答えることが出来ない。

「勝てないから……強くなりたいから練習するんじゃないの？」

「……」

僕は黙って彼女の方を見る。

「そんなのただ逃げているだけだわ……。ちゃんと一生懸命頑張っていれば何でも出来るはずなのに……」

彼女は下を向く。

「キュウコン監督もそれを言いたかったのよ……。なんでもすぐ自分達の前に壁が出来たら逃げて回り道をして……。そんなのあたしたちあさポケナインの姿じゃないよ……」

彼女は言葉を詰まらせながら、自分の気持ちを伝える。

「ヒート先輩も、ラッシー先輩も……本当ならあんな程度じゃないってキュウコン監督は強く感じているから……、でもそうしてくれないからガッカリしちゃったと思うの……」

「ピカっち……」

彼女の言葉に腕をギュッと握る僕。

確かにヒート先輩たちの野球への姿勢は立派だけど、何か逆境が生じたときにそれから逃げてしまうことに、キュウコン監督は残念がっていたのかも知れない……。

「逆に言えば、キュウコン監督はそれほど今のあさポケナインに期待しているんじゃ無いかしら?……まだまだあたしたちの力は伸びるってことじゃ無いかしら?」

僕はハッとした。

言い方は辛いものだったけれど、キュウコン監督は僕たちに強い期待をしているんだと……。

あさポケナインの強さはもう開花寸前までだと……。

「だから……あたしは練習を続けるわ。今すぐ“答え”は出ないかも知れないけれど、頑張っていればいつかきっとその日が来るって信じているから……」

彼女はそう言うと、後ろを向く。

僕はじっと考えていた……。

いつか遠い昔に同じような言葉を聞いたことを思い出しながら……。

……カゲっち！

お前は俺よりバトルのセンス……、ほのおタイプの技の威力は上なのに、どうして気持ちで負けるんだ？

そんなもんじゃ無いだろう？……俺に見せてくれよ！

俺に“爆砕炎”の姿を……。

最強のヒトカゲの姿を……！！！

『君に笑われそうだね……。あの時から僕は気持ちで変わっていないみたいだよ……』

僕は“彼”の言葉を思い出しながらフッと笑ってしまう。

「……練習しようか。大会までそんなに時間が無いし……。何より期待しているキュウコン監督に応えるために……！」

僕の気持ちは雨雲が消え、日差しが出てきたように明るくなってきた。

「そうよ。それこそあさポケナインの姿よ！！」

ピカっちは少し“ほうでん”しながら力強く返事をした。

その後ベンチに戻った僕は、ピカっちの気持ちをみんなに伝えた。

すると……、

「……そうだよな。迷っていたところで何も始まるわけがないんだ！」

「ああ！見せてやろうぜ！生まれ変わったあさひポケ中学野球部の姿を！！」

「そうと決まったら練習よ！！」

『オーーーー！絶対勝つぞあさポケ！！！！！！』

みんなは今までの落ち込んだ気持ちがウソのように、元気よくグラウンドに飛び出した！！

『よく気がついたな。私の気持ち、このあさひポケ中学野球部に賭ける強い意志！！その強い気持ちさえあれば、きっと勝てるはずだ！！』

三塁ベンチからキュウコン監督が、じっとその様子を見ていた。

「オラァァァ！青空に強い闘志ぶつけてやるぜ！！」

いつも以上に強い気持ちをぶつけるラッシー先輩。豪快なフルスイングに迷いは見られない！

「守備が苦手ならひたすら練習だ！１本もヒットは許さねぇぜ！！」

ラージキャプテンは苦手な守備を克服しようと、激しく動き回る！！

「強い闘志はピンチのときに現れるぜ！！誰にも打たせないぜ！！」

「鉄壁のリードを見せるわ！！」

ヒート先輩とラプ先輩のバッテリーは、ブルペンで１球１球に魂をぶつける！！

「今以上に打撃も守備もパワーアップさせて、世界一のプレーヤーになってみせる！！」

ジュジュ先輩の燃えるような特訓は健在だ！！

「ルーキーだって負けないよ！！鉄壁の内野陣はここに誕生さ！！」

僕たち仲良し４匹組は、それぞれの気持ちをその一つ一つのプレーにぶつける！

気付けばあっという間に自主練習の時間は終了していた。

「今日の自主練習はここまでだ。明日は金曜日。いよいよ特別合宿前日だな」

再びナインを集めたキュウコン監督がそのように言う。

「今週は打撃、守備を中心とした練習をしてきた。明日は走塁に、ヒートは投球練習を中心に行う。良いな？」

『はい！！』

キュウコン監督の話が終わると、僕たちナインはそれぞれ帰宅を始めた。

今まで以上に強い決心を抱きながら……。

第５０話：「どうして野球をするの？」の巻（後書き）

カゲっち：「そうだよ……。勝てないから……強くなりたいから練習するんだ……。キュウコン監督もそう強く僕らに伝えたかったんだ……」

ヒート：「俺たちはこんなもんじゃねぇ……今こそ朝日のように輝くことが出来るはずだ……！」

作者：「次回からは野球の分野の走塁、投球の話をしたいと思います！……もちろん寄り道ありで……」

カゲっち：「お楽しみに！」

第５１話：「金曜日の昼休みは波乱の予感！？」の巻（前書き）

作者：「なんだかなぁ……。最近明るくて楽しい話が書けないなぁ……」

カゲっち：「試練ばかりだよね～」

作者：「今回からは走塁・投球練習編！いよいよ野球の分野の紹介も大詰めです！」

カゲっち：「早速第５１話プレイボール！！」

第５１話：「金曜日の昼休みは波乱の予感！？」の巻

次の日のことだった。

「今週も今日で終わりね～♪カゲっちくん♪」

僕ら仲良し４匹組は、朝のホームルームの後、１年２組の教室の窓側に集まり、おしゃべりをしていた。

「そうだね。今週１週間は色々あったよね～……」

僕は窓から空を眺めながら、ふとそんなことを言う。

「そうね。チックと友達になって、野球部に入部してたくさんの先輩にも出会ったっけ……」

それだけではない。僕はピカっちとラブラブカップルになったり、誕生日には不思議な夢を見たり……まさに１週間がドラマのようだった。

「でも気づけばあっという間に金曜日ね～。なんだか幸せな気分だわ～♪」

チコっちが頭の葉っぱをクルクル回しながら、嬉しそうに言う。

「学校が休みだからだよね！今週の休みは何しようかなぁ……」

僕は、のほほんとマイワールドに入ろうとした……が、そのとき！！

「あら？でも明日から野球部の特別合宿よ？まさか、忘れたとか言わないでよ？」

ピカっちがポンと僕の背中を叩きながら、不機嫌そうに言う。

「あ……。そうだった……っけ？てっきり来週かと思っていた……」

テヘヘと恥ずかしそうに笑いながら、僕は言う。

昨日……いやその前から、ずいぶんと合宿の話はあったはずなのに、このダメダメヒトカゲはそれを覚えていないようだ。

『たぁぁぁぁ～～～～！まさか本気で思っていたの～～～！？』

窓側に集まっていた僕以外の３匹は、たまらずその場で一斉にズッコケてＫＯ状態になった。

『なんだかなぁ……。野球のときのカゲっちと普段のカゲっちはギャップがありすぎるよ……』

チックは改めて、この“ダメダメヒトカゲ”の性格に驚いていた。

まぁそんな感じで、いつものように平和な学校生活を送る僕たち。

気がつくとあっという間に昼休みを迎えていた。

「それにしても朝のカゲっちには驚いたわ。まさか合宿の日を間違えて覚えていたなんて……」

チコっちがピカっちにあきれた表情で話す。
2匹は図書室へ本を借りに行こうと、廊下を歩いている途中だ。

「そうね。でも……あたしは、そんなカゲっちくんがかわいいって思うの♪」

ピカっちが笑顔でそう言う。

「さすがピカっちね。あ～ぁ。あたしもいつかあの人とラブラブカップルになりたいわ～」

チコっちがうらやましそうに言う。

まぁ、幼なじみの僕とピカっちの様子を見ていたら、そう感じるのも無理ないだろう。

「大丈夫よ。あたしだってカゲっちくんに気持ちを伝える前までは、チコっちちゃんと同じ気持ちだったんだから。それに……」

ピカっちは笑いながらチコっちと話していたのだが、なぜか途中で話をやめてしまう。

「どうしたの？突然話をやめるなんて……？」

チコっちがすかさずピカっちに聞く。

『あれ？どこかを見つめているみたいだわ……』

チコっちはピカっちの様子を見てそう感じる。

確かにピカっちの視線は、じっとどこかを見つめているようだ。

そして、その視線の先には……。

「よう、ピカっち！」

いつの間にどこから現れたのだろうか？

そこには1匹のオタチ……オーちゃんがいた。

「今日もカゲっちのヤツはドジばっかりしているよなぁ。全くどうしてこうもピカっちを困らせるのかなぁ……アイツは」

オーちゃんはイヤミっぽく言う。

「ま、俺がダメダメヒトカゲをもっと立派な男にしてやるけどな」

オーちゃんがフッと笑う。

「あんた？黙って聞いていればカゲっちの悪口しか言わないわね？」

オーちゃんの言葉に、チコっちがイライラした表情を見せる。

「悪口？……そうかそうか。俺がピカっちへ心配してやっているのに、それは悪口になるんだな？」

オーちゃんが気にくわないというような表情を見せ、そのように言う。

「あったりまえじゃない？あんたはピカっちを気にしてカゲっちを良くするとか言っているけど、第三者から見ればそんなの悪口に

しか聞こえないわよ？」

チコっちが半分怒りながらオーちゃんに言う。

「ケッ！どうやらここにもピカっちの気持ちがわからないダメダメチコリータがいるみたいだなぁ？全く……ピカっちはお前らのことを信用しているのに、それを裏切っているなぁ」

オーちゃんがチコっちを挑発するように言う。

……すると！！

シュン！シュルルル！！

「！！？」

「チコっちちゃん！？」

チコっちは何も言わず、突然オーちゃんに“はっぱカッター”を繰り出した！！

「なんですって……？もう一度言ってみなさいよ。……誰が……

誰が！ピカっちの気持ちをわからないダメダメチコリータですって……？」

チコっちは怒りに体を震わせる。

「誰って……？はぁ？お前のことだよ。ピカっちが困っていても見て見ぬフリしているだろ？カゲっちのドジを直してやろうとか思ってないんだろ？ピカっちを友達だなんて思っていないんだろ？」

チコっちの攻撃をさらりとかわしたオーちゃんが、また挑発的な言葉を言う。

「あんたねぇぇ……！」

チコっちがまた技を繰り出した……！

ヒュン！ヒュン！

「やめてぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

そのとき悲痛な叫びが響いた……。

「！？」

「ピ……ピカっち！？」

チコっちが“つるのムチ”を繰り出して2秒後、彼女とオーちゃんの前には予想外の光景が広がっていた。

「二人とも……やめてよ……お願いだから……ね？」

なんと2匹のケンカと止めようと、ピカっちが間に入って来たのだ。

しかも、チコっちの繰り出した“つるのムチ”を真っ正面から受けてしまったようで、その小さくて黄色い体に痛々しい傷が出来ていた。

「オーちゃんも……カゲっちくんも……チコっちちゃんも……あたしの大切な友達……。だから……争いなんてしないで……ほしい。……暴力で幸せになんてなれないよ……？」

ピカっちは床にうつぶせの状態で、顔だけ2匹の方向に向け静かに笑う。

「かわいそうに……ほらみろ？やっぱり俺の言う通りだったろピカっち？こんなに痛々しい姿になるほど、周りのヤツらは君を困らせてるんだ。そんなヤツらを見ていると俺はイライラするぜ！」

オーちゃんがそう言いながら、ピカっちに手を差し伸ばす。

「ピカっち……。ごめんね……。あたしオーちゃんの言う通りかも知れないわ」

攻撃をしたチコっちが悔しそうに言う。

納得出来なかったとはいえ、暴力で意見を通そうとした自分が憎たらしいほど悔しいようだ。

『オーちゃんの言ったことはすごくムカつくけど、攻撃はダメよね……。こんなあたしが、ピカっちの幼なじみなんて笑っちゃうわ……』

チコっちは悔しさをギュッと握った前足に込める。

そして……、

「先に……本借りに行くね？……じゃないとお昼休み終わっちゃうから……」

「うん。ありがと♪」

そう無理矢理笑顔でピカっちに言うと、チコっちはその場から走り出した。

その頃僕は、休み時間の間中庭の休憩スペースで、静かに本を読んでいた。

なんでも、今カントリーで一番売れてる小説だと言うのだが、これが結構楽しい！！

学校の図書委員会もオススメだと、図書室に購入したと言うのだ。

「あれ？もうこんな時間かぁ……。そろそろ教室に帰ろうかなぁ……」

僕はしおりを本に挟み、ベンチから立つ。

「あれ？……チコっちじゃん！本は借りれたの？」

僕は少し離れたベンチに座るチコっちに話しかける。

「カゲっち……？本は、借りれなかったわ」

チコっちは少し驚きながらも、笑顔で質問に答える。

「そうか……。じゃあ今日の帰りに、商店街の本屋で買いに行く？」

僕は笑顔で提案する。

でもチコっちは黙って下を向いている。

「そういえばピカっちは？……ピカっちも一緒だったんでしょ？」

僕はキョロキョロしながら、チコっちに尋ねる。

「……」

それでもチコっちは下を向いたままだ。

「ね～ぇ？チコっちってば！僕の話聞いているの！？」

僕はチコっちに大きな声で聞く。

「え！？え、……えぇ！ちゃんと聞いているわよ！」

チコっちがようやく返事をした。無理矢理な笑顔で「ハハハ」と笑いながら。

「もう！ピカっちがいないようだけど、どうしたのさ？」

僕は改めてチコっちに聞いてみる。

「ピカっちなら……、図書室に向かう途中で、急にスピードあげちゃって転んじゃったの！それでいないのよ！」

チコっちは多少焦りながらも、ウソを言う。

「そうなんだ。たいしたケガじゃなければいいね……」

本当のことを何も知らない僕は、ガッカリした感じで元気なく言う。

……キーンコーンカーンコーン……

ちょうどそのとき、昼休み終了のチャイムが鳴った。

「ヤバ！次は体育だ！僕、教科係だから急ぐよ！！またあとでね！！」

僕はそう言うと、サッとその場から離れていった。

中庭の休憩スペースには、もうチコっちしか残っていない。

『ごめんねカゲっち……。あなたに本当の出来事なんて言えない。……言いたくない。……だってこんな話聞いたら、きっとあたしたち幼なじみ3匹が、“あの時”のようになっちゃうかも知れないから……』

花壇に植えられたたくさんの花を見つめながら、チコっちはそう感じた。

その大きな瞳からたくさんの涙を流しながら……。

第５１話：「金曜日の昼休みは波乱の予感！？」の巻（後書き）

チコっち：「あたしの友達を想う気持ちってたいしたこと無いのかしら……」

作者：「また試練が襲いはじめたなぁ……。でも今回の話は後々重要になりますよ！！」

カゲっち：「次回は野球の練習が始まります！！」

第５２話：「オーちゃんの陰謀、チコっちとピカっちの悩み、そして全力疾走！」

作者：「ようやく投稿できた～」

カゲっち：「お疲れ～♪今回は練習開始だね」

作者：「うん！いよいよ野球の分野紹介も大詰めだよ！！それにまた気になる展開もあるんだ！！」

ヒート：「それが何か……第５２話プレイボールだぜ！！」

第５２話：「オーちゃんの陰謀、チコっちとピカっちの悩み、そして全力疾走！」

５時間目の体育の授業。

その授業で１年２組は、陸上競技の１００ｍ走の計測を行っていた。

「ピカっちは見学なんだね。本人は平気って先生に笑顔で言っていたみたいだけど、ケガの様子を見るため見学になったらしいんだ。でも放課後の野球部の練習には普通に参加出来るってさ！」

僕は隣に座るチコっちにそう話す。

「そうなの……」

しかし、チコっちは暗い表情を見せる。

僕に隠し事をしていることと、ピカっちに対して自分が本当に“友達”としてふさわしいのか？

その二つのことが頭から離れず、悩んでいたのだ。

「チコっち？どこか気分がおかしいの？中庭で会ったときからなんか変だよ？」

普段ならこんな暗い表情を見せないことを知っている僕は、チコっちにそう聞いてみる。

「え!?な……なんでもないわよ?あ……あたしならいつでも元気だから!」

チコっちは僕に心配かけまいと、作り笑顔をみせる。

「それより……、さっきのカゲっちの走りは上手だったわね!100mを14秒で走るんだもん。サーって、あっという間に駆け抜けちゃって……」

チコっちは作り笑顔で僕をそう褒めてくれる。

「そ、……そうかな?でも僕は走るのは得意な分野だからね。“あの時”から……あ!!」

僕は何気なく話をしたが、一つの単語のせいでやめてしまう。

「“あの時”……」

チコっちが“あの時”という言葉に敏感になる。

そして、そのまま下を向いた。

『カゲっちのバカ!!あたしがあんなこと思い出したくないの知っているくせに!!』

チコっちの中で……いや正確に言えば僕、ピカっち、チコっちの幼なじみ3匹の中で触れたくない思い出を、僕は触れてしまった。

「ご……ごめん。この話は無しだったよね……」

僕もシュンと暗くなる。

「ごめんねカゲっちくん。心配かけるようなことしちゃって……」

やがて体育の授業が終わり、僕たち3匹は教室に戻ることにした。

「しょうがないよ。だって慌てて転んじゃったんでしょ?」

僕は心配無いという表情を見せながら、ピカっちにそう言う。

「え……？」

しかしながら、ケガをした理由が違うことを知っているピカっちは、僕の言葉に首を傾げる。

『あたしのケガをした理由……もしかしてチコっちちゃんから聞いていないのかしら？』

ピカっちがチコっちを見る。

チコっちは苦笑いしながら、ウインクする。

これは、彼女たちの間では一種のサインなのだ。

「そ……そうね。あたしも図書室に本を借りに行くのがワクワクしちゃって……」

と、無理矢理話を合わしたピカっち。

『……そうよね。カゲっちくんがあんな出来事を……オーちゃんの言葉を知ったら、悲しんじゃうわ……。“あの時”のように……3匹がおかしくなっちゃうのは見たくないわ……』

心の中で、悲しそうにするピカっち。

昼休みの経験は話さないことに決めたようだ。

その結果、僕は本当に何も事実を知らないまま、彼女とは違う時間を過ごすことになった。

「あぁ。まずは第1作戦成功だぜ……。へへへ！！」

一方ここは放送室だ。

ここでチコっちとピカっちを苦しめた張本人が、誰かに電話をかけていた。

「しっかしよぉ～。作戦変更して正解だぜ。あのピカチュウはチコリータとヒトカゲと幼なじみだったからな。先にチコリータを狙って正解だぜ！でも、まさかこうもうまくいくなんて思わなかったぜ。あのピカチュウは、俺の予想以上のダマされやすいヤツだったぜ。こりゃあ……いとも簡単に俺のものに出来そうだぜ！ワッハッハッハッハッハ！！」

非情な笑い声が響く。

「とりあえず、チコリータを意気消沈出来たから……、次はピカチュウをおびき寄せてやるぜ！……あぁ！サンドパンのヤローとキリンリキも連れていくぜ。……もちろん俺も行くぜ！ヘッヘッヘ！あのピカチュウの泣き顔と怯える姿が見れるとなるとゾクゾクするぜ！」

今ここに、ピカっちの笑顔と幸せを奪う、最悪の作戦が決行されることになった。

「それじゃあな！そっちも頑張れよ！！」

そう言うと、オーちゃんは電話を切った。

「あのピカチュウとチコリータがバラバラになるのは時間の問題だな。この作戦で2匹を敵対関係にしてやるぜ……！ヒトカゲはまだ見学していろ。そのうちじっくりジワジワ悲しみと、苦しみを味わってもらうからなぁ……！！」

オーちゃんはそう言うと、放送室の電気をつける。

何食わぬ顔で放送部の一員として、“オモテ”の活動をはじめた。

さらに場所は移って、野球部のグラウンド。

すでにあさポケナインとキュウコン監督が集合していた。

まずいつものように、ランニングやキャッチボールを行う僕たち。

トスバッティング（下から投げたボールを打つ練習）、それにノックも行った。

「さて今週は打撃練習、守備練習を新入部員と共に行ってきたが、今日は走塁・投球練習をメインに行うぞ」

キュウコン監督が、僕たちにメインとなる練習を発表する。

「投球練習かぁ……。ようやく俺の本職に磨きをかけられるぜ……」

その言葉に静かに燃えるヒート先輩。

「走塁なら僕の得意分野だね。足の速いカゲっちくんや、ピカっちちゃんにもぜひ頑張ってほしいね」

『はい！』

ジュジュ先輩の言葉にうなずく僕とピカっち。

「では、早速練習を始めるか。……とその前に、走塁の知識を軽く説明するかぁ！」

ラッシー先輩が、ホームベースに向かう前に、僕たちルーキー４匹組に説明をはじめた。

「何か打撃練習や守備練習のように専門的な知識があるんですか？」

僕がラッシー先輩に聞く。

「ん？特にそんな難しく無いと思うぜ？昨日の守備練習を思い出せばな。ただ、スライディングの種類を紹介するだけだからよ」

ラッシー先輩が言うには、走塁技術と言うのはそれほど深く考えなくても良いらしい。

「ただ、いかに“１本のヒットで塁を進むことが出来るか？”それを考えれば良いと思うぜ」

ラッシー先輩が笑顔で言う。

「そんなわけで……早速“ラッシーのララ講座”のはじまりはじまり～～♪」

ラッシー先輩がハイテンションで説明をはじめた。

「まず、バットでボールを打ったときに、一塁に走る。これは昨日の守備練習でも学んだよな？」

「えぇ。どんな球でもファールと判定されるまでは、必ず一塁に走るんですよね？」

ラッシー先輩の言葉に、僕はうなずく。

「あぁ。その時左打者の方が有利だって言われているんだ。なぜかと言うと、左バッターボックスは一塁に近いからなんだ。だからリーグでも俊足の左打者は数多くいるぜ」

ラッシー先輩の言葉になるほどと言うような表情を見せる僕たち。

「それと一塁へは基本足からは滑りこまないで、ただ駆け抜けるだけで良いんだ。ただ……」

ラッシー先輩が突然説明を止める。

「ただ……何ですか？」

ピカっちがすかさずラッシー先輩に聞く。

「ただ、ここで“ラッシーのララララポイント～～♪”」

ラッシー先輩が真剣な表情から突然ニコニコし始めた。と同時に、見事にズッコケる僕たち。

「おいおい大丈夫かよ？それじゃハイテンションにならないぜ？」

まるで他人事のように言うラッシー先輩。

「まぁいいか！じつは一塁に向かっては頭からベースに滑り込む技術があるんだ。それが、“ヘッドスライディング”だぜ！！」

“ヘッドスライディング”。それは通常なら足からベースに滑り

込むところを、頭から飛び込むようにして、手を先にベースに触れさせる技術だ。

この技術を用いると、例えアウトとわかっていても「塁に何としても出るんだ!!」と言う強い意志がチームメイトに伝わり、そこから奮起させるということも出来るという。

「だけど、ケガも多いからな。その辺を注意してくれよ」

ヘッドスライディングは、まさに体を張ったリスクを恐れない強い心の表れなのだ!!

「盗塁のときでもヘッドスライディングは使うヤツもいるんだぜ」

ほとんどの選手は足から滑り込むパターンがあるけど、やはりここでもヘッドスライディングを使う選手がいるらしい。

「ちなみにツーベース（1本のヒットで二塁まで行くこと）や、スリーベース（1本のヒットで三塁まで行くこと）のときは、際どいときはスライディングをするんだ!なぜかわかるか?」

ラッシー先輩が僕たちに聞く。

「確か……、長打を打たれたときはタッチプレイだから……それと関係しているんですか？」

ピカっちが聞く。

「あぁ！まさにその通りだ！長打の場合は相手チームがランナーにタッチするだろ？つまりこっちがギリギリのときは、ベースに何としても触れないといけない。だからスライディングをするんだ！」

ラッシー先輩の先輩に、「なるほど」というような表情の僕たち。

「とりあえず基本はこんな感じかな？早速練習するぜ！！」

ラッシー先輩の一言で練習が始まった。

「私が“みがわり”チームにノックするから、打った瞬間走りはじめるんだ」

『ハイ！！』

バックネット側に集まったナインが力強く返事をする！

「ちなみにヒットの場合は、ランナーとして残るんだ。それと二人以上いるときに、前のランナーを抜かさないように。抜かしたランナーが、アウトになってしまうからな」

注意事項を確認したところで、早速練習開始だ！！！

打順の順番で並んでいるため、まずは僕からスタートだ。

キュウコン監督がバットを降った！

コーーン！！

打った瞬間、僕はバックネットから勢いよく走り出した！！！

「僕は走るのは得意だよ！！」

全速力で一塁に走る僕。

ちなみに打球はサードがキャッチした！

そしてそのまま一塁に送球される！！

「絶対にアウトになるもんか！！たぁぁぁぁ！！」

僕は思い切り一塁にダイビングする感じで、ヘッドスライディングをした！！

「アウト！！」

しかし、判定はアウト。

「あ～……。アウトかぁ……」

僕はちょっと悔しい気持ちになってしまったが、しょうがないとバックネットに戻っていった。

「どんなバッターでも、塁に出るんだという強い気持ちは大切だ。特にカゲっちは1番打者だから、誰よりも強い気持ちが必要だぞ」

キュウコン監督がそのように言う。僕は黙ってうなずいた。

続いて、2番打者のピカっちの番だ。

キュウコン監督が、先ほどのようにバットを振った！！

カキーーン！

打球は三遊間のバウンドだ！！

サードとショートがそれぞれ追いかける！

「あたしだって、走ることには自信があるわ！！」

ショートがキャッチして、一塁に送球したが

その前にピカっちが一塁を駆け抜け、グルッと右に回った！

「セーーフ！」

判定は文句なしのセーフ！！

ちなみにピカっちが行った動作は、もう一塁から進まないことを示すらしい。

逆に二塁に進むときは、ベースを踏んだあとすぐに二塁に走る動作を見せるらしい。

「もちろん途中で戻ってきて、ベースを踏んでも良いんだ。とにかくタッチされる前に、ベースを踏んでいればアウトにならないんだ」

ジュジュ先輩がそのように言う。

ランナー一塁の状態で、次は3番打者のラージキャプテンの出番だ。

キュウコン監督がまたバットを振った！！

カキーーン！

打球はレフト後方に一直線！！

「とりあえず、塁の途中まで走らなきゃ♪」

一塁ランナーのピカっちは、一二塁間の中間地点より3歩手前くらいまで走る！

一方、ラージキャプテンは一塁に到達した！

さぁ、レフトが懸命にバックして行き、打球を追いかける！！

「アウト！！」

何と頭を越えれば、間違いなく長打になる打球をレフトがキャッチした！！

「アウト？それじゃあ急いで戻らないきゃ」

ピカっちは一塁に戻る。

ラージキャプテンは、バックネットに戻っていった。

「良い動きだ。もし今のボールをエラーか、捕れなくてヒットになったときは、すぐに二塁や三塁まで走れるし、アウトなら戻っていく。常に次の塁に進むことを考えていて素晴らしいぞ」

キュウコン監督がピカっちの動作を褒めた。

ランナー一塁の状態は変わらず、続いて4番打者のラッシー先輩が登場した。

キュウコン監督がバットを振る!!

カーン!

打球は二遊間に飛んでいく!!

「これなら二塁に行けるわ!」

ピカっちは迷いなく二塁に走る！

打球はセンターの前で落ちてヒットになった！！

「ライナーが一番判断に迷うんだよな～。捕られてバッターがアウトになったとき、塁に戻ってなかったらランナーもアウトになってダブルプレーになるかなぁ。かといって走ってなくて今みたくヒットになったら、次の塁に走ってなくてアウトになるからなぁ」

一塁にたどり着いたラッシー先輩がそんな感じで話す。

そういった意味でもピカっちの判断は、良かったと言えるだろう。

これでランナー一二塁となった。

続いて5番打者のヒート先輩が登場した！

「俺は投球、打撃、守備、走塁……。すべてにおいて全力プレーだ！！さぁ、来い！！」

気合いを入れるヒート先輩。

そんな中、キュウコン監督がバットを振った！！

カーーン！

打球はライトの後ろに飛ぶ。

「フライかぁ……。これは戻らねぇとなぁ……」

ラッシー先輩が一塁のベースを踏んだまま、打球の様子を見る。

燃えるようなヒート先輩は、アウトになろうがなんだろうが全力疾走で一塁にたどり着く。

「アウト！！」

ライトが無難に打球をキャッチした！

「あれなら内野から遠いわ！だったら……」

二塁ランナーのピカっちは、キャッチと同時に三塁に向かって走

り出した！

「あ！これが“タッチアップ”なんだ！！」

僕はその様子を見ながら、そのように叫ぶ！

“タッチアップ”は昨日の守備練習でも学んだように、フライでバッターがアウトになったあと、ランナーが次の塁に走ることだ！

「逆にランナーが戻ることを“リタッチ”って言うんだ」

ジュジュ先輩がそのように言う。

さて、その間にピカっちはどうなったのだろうか？

『間に合う！間に合うわ！！』

元々走るのが好きな彼女。

二塁をスタートしたあと、全速力で三塁に走り出したのだ！

その間に、ボールはライトからセカンドに送られていた！

「ピカっち！！がんばれ～！！」

僕は力強くピカっちを応援する！

ピカっちは三塁の近くで、足からベースにスライディングを見せた！！

「セーフ！！」

ボールがセカンドに戻っていたときには、ピカっちはすでに三塁にたどり着いていたため、判定は文句なしのセーフだ！！

「やっ……た……。ウフフ♪ちょっとドキドキしちゃった♪」

果敢で好判断な走塁を連発するピカっちは、照れている様子でそのようにつぶやいた。

「すごいねチコっち！さっすがピカっちだよね！僕、すごくうれしいや！！」

僕は興奮気味にチコっちに話す。

「え！？そ……、そうね。あたしもすごいと思うわ！」

チコっちは僕の言葉に慌てる。

『カゲっち……。ピカっちとあたしがホントのこと話していないのに、あんなに応援している……。こんな純粋に優しくて、ひたむきに頑張る幼なじみにあたしはウソをついている……。なんだか自分が憎たらしいほどムカつくわ……』

チコっちは昼休みの出来事を全く知らない、僕の様子を見て自己嫌悪に陥っていた。

……いや、チコっちだけじゃない……。

『……あんなに……誰よりも一生懸命あたしを見ているカゲっちくんに、あたしはウソをついている……。……自分が最低な人に感

じるわ……』

相手が自分をよく知っている僕だけに、応援されればされるほど辛い気持ちになっていく。

『……あたし……本当に“友達”って言えるのかな……？』

チコっちにピカっちは同じ気持ちを抱いていた……。

「次はあたしの出番ね。足は遅いけど、だけど一生懸命頑張るわ！」

ランナー一三塁で、６番打者のラプ先輩が登場した。

だが、このあと驚きの展開が待っているとは誰が思っただろうか？

気になる練習の続きは次回に続く！！

第５２話：「オーちゃんの陰謀、チコっちとピカっちの悩み、そして全力疾走！」

カゲっち：「ナイス活躍だよピカっち！！！」

ピカっち：「あ……ありがとう……」

チコっち：『やっぱりピカっちも悩んでいるみたい……。これからあたしたち３匹……どうなっちゃうのかしら……』

第５３話：「ホームベース目指して……！」の巻（前書き）

カゲっち：「今回も走塁練習の続きだね！！」

ピカっち：「あたしたち幼なじみ３匹のやり取りにも注目してね♪」

チコっち：「それじゃあ早速……第５３話プレイボールよ！！」

第５３話：「ホームベース目指して……！」の巻

夢に向かって走りつづけるあさポケナイン！
走塁練習でも全力疾走を見せるぞ！

ランナー一三塁の状態で、６番打者のラプ先輩が登場した。

キュウコン監督がいつものようにバットを振った！！

コーーン！

打球はコロコロとショートへ転がる！

「ボールに勢いが無いから……走るわ！！」

三塁ランナーのピカっちは、ここでも果敢な走塁を始めた！

迷いなくホームベースに向かってスタートしたのだ！

「うぉ！ゴロかよ！！」

一塁ランナーのラッシー先輩はこの場合、ゴロなので二塁に走らないといけない。

「いくわよ～！！」

ラプ先輩が元気よく一塁に走り出す！

……だが！！

「え！？何なのあの走り方！！」

その光景にまずはじめに驚いたのは僕。

「すごすぎるわ……」

続いてチコっち。彼女も以前の打撃練習で周りを驚かせた“意外性”の持ち主だが、今回はそれをさらに上回ったと思う。

「こうすれば技を使わなくても走れるわ！！」

以前も、ラプ先輩は驚きの走り方を見せたときがあったが、その時は“れいとうビーム”で自分の前を凍らせて走る作戦だった。

だがそれだと大会の特別ルール、“技は1試合で1チーム3回まで”に触れることも意味している。

では、今回はいかにして技を使わずラプ先輩は走ったと言うのか！？

と、その前に打球をキャッチしたショートはまずバックホームをした！！

『お願い！間に合って！！』

三塁ランナーのピカっちは目をつぶり、足からホームベースに滑り込んだ！！

一方ボールをキャッチしたキャッチャーも、ピカっちをホームインさせまいとホームベースをしっかりブロックし、ピカっちの足に

タッチしようとする！！！

ザザザザザー！！

一瞬ホームベースの周りで砂ぼこりが立ち込める！

一瞬その場にいた、ラプ先輩以外のナインが息を飲み判定を聞く準備をした……。

「セーフ！！」

その判定のコールが聞こえた瞬間、ナインが「わぁぁぁぁぁぁ！！！」と大歓声をあげた！！

「セ……セーフなんですね……？それじゃあこれがあたしにとって初得点……ですね……」

ピカっちが静かに笑いながら、ゆっくりと立ち上がる。

その瞬間、ピカっちはキャッチャーミットの下から小さな足をの

ばし、ホームベースに触れていたのだ。

ピカっちが言っていた“得点”。

ホームインしたことで、チームに得点が入ったのはもちろんのことだが、このときに、「選手がランナーとして、何回ホームベースに戻ってきたか？」を意味する個人記録、“得点”も刻まれる。

「つまり、選手個人の“得点”が高いと言うことはそれだけ打線がつながっていること、ランナーがいかに1本のヒットで好走塁を見せているかがわかるんだ」

キュウコン監督がそのように言った。

さて、例のラプ先輩の走塁はどうなったのだろうか？

「今回は一塁に相手が投げていないから出塁出来たわ♪」

うれしそうなラプ先輩。

……だが、

「ところで、ちゃんとあたしの走り方見ていたの？」

ラプ先輩がヒート先輩に笑顔で聞く。

「え！？……見ていたさ！……す、すげぇよなぁ！まさか“れいとうビーム”で道を凍らすなんてよ！ワハハハハ！」

ヒート先輩が作り笑いでグラウンドを見る……が！

「ヒート。どこの道が凍っているんだ？」

二塁に到達しているラッシー先輩が、「ニヒヒヒ」と笑いながらヒート先輩に聞く。

「ヒート？あんたウソをついたんでしょ？許さないわよ～！！」

「何で俺だけ～！？」

ラプ先輩がニコニコ笑いながら、ヒート先輩に話しかける。

その様子を見てヒート先輩が冷や汗をかきながら、困惑した表情をする。

『みんな楽しそうだなぁ……。やっぱり楽しいって良いことだよね♪』

僕はにこやかで平和なムードにそんなことを感じた。

ところで読者のみなさんは疑問に感じているかも知れない。

ラプ先輩がどんなふうに走ったのか？

「ワハハハ！ヒートも災難だな～。ラプは走っていないぜ。ただ、４つの足で思い切りグラウンドを蹴ったんだ」

二塁ランナーのラッシー先輩がそのように言う。

グラウンドを蹴ることで、ラプ先輩はまるでロケットのように一塁に突っ込んだのだ。

「元々あたしは体が大きい方だから、スタートさえ速ければあっ

という間にセーフになるの♪」

ラプ先輩がニコニコ笑いながら、僕たちに真相を教えてくれた。

ちなみに僕たちの世界の野球場は、人間の世界の野球場よりも1.5倍くらいあると思ってほしい。

なぜこんなに大きいかと言うと、「ランナーにボールが当たると、アウトになるというルールがあることを考えた結果だ」と、作者さんは言っていたけど……。

「まぁ、どのみちピカっちの好走塁のおかげでチームが盛り上がっているぞ。さっすが“ムードメーカー”だぜ!!」

ラージキャプテンがピカっちをなでながら、うれしそうにする。
ピカっちは照れているのか、顔が真っ赤になっている。

さて、だいぶ練習の話から脱線しているので、続いて7番打者のチックの様子を見てみよう!!

「ランナー一二塁だね♪僕も走るぞ～♪♪」

持ち前の笑顔でやる気をみせるチック。

キュウコン監督がバットを振った！！

コーーン！！

打球は今度は一二塁間に速いゴロで転がった！！

「きゃ！！間に合わないわ！！」

一塁ランナーのラプ先輩は二塁に向かう途中で、セカンドにタッチされてアウトになった！

続いて一塁に送球するが……、

「僕はアウトになんてならないぞ！！エーーーイ！！」

その間チックは、一塁に思い切りヘッドスライディングをした！！

「セーーフ！！」

判定はセーフだ！何とかダブルプレーという最悪のパターンは避けられた。

「三塁に向かうには絶好だったぜ！あの一二塁間に飛んでで行けば、先にダブルプレーでまとめてアウトにしたがるからな～」

ラッシー先輩は三塁で余裕の表情を見せた。

「ラッシーの言う通りだ。ランナー二塁の場面で、ランナーを進めたいときに右方向を狙って打つバッターもいるからな」

ラージキャプテンが腕を組んでそんな風に言う。

これでランナー一三塁となった！

続いて8番打者のジュジュ先輩が登場した！

「僕もピカっちちゃんに負けるわけには行かないからね。グラウンドを駆け抜けるよ」

ジュジュ先輩がフッと一息つく。

キュウコン監督がバットを振った！！

カーン！

打球は青空へ吸い込まれる……が、力は無くセンターがキャッチをした。

「アウトかぁ……」

意気消沈しながらもジュジュ先輩はバックネットに戻っていく。

「これくらいの距離ならタッチアップ出来るぜ！！」

ラッシー先輩がいきなりホームに走り出す！

「無茶するな！どう考えたってアウトだろ！！」

明らかに内野手から近いにも関わらず、無謀な走塁をするラッシー先輩にヒート先輩が叫ぶ！

「ゴチャゴチャうるせぇ！！俺に任せとけ！！」

だが、ラッシー先輩は三塁に戻る様子は無い！

そればかりか、ブレーキが壊れた車のように、さらに加速をする！

「オラァァァァァ！！」

ラッシー先輩が頭からホームベースに突っ込む！！

そして……、

「セーーーフ！！！！！」

何とラッシー先輩はあの勢いで、ホームベースをブロックするキャッチャーにぶつかっていったのだ！！！

キャッチャーはフラフラと立ち上がるが、ボールはミットは無くグラウンドに転がっていた。

「見たか！？これが“クロスプレー”だ！！」

ラッシー先輩が笑い飛ばしながら、ガッツポーズを見せる！

“クロスプレー”とは、ホームインが際どいときにキャッチャーに突っ込んでいくことだ。

ボールがキャッチャーミットからこぼれていたら、判定はセーフになるのだ！

「だからキャッチャーは体が大きい方が向いているの♪じゃ無いとあのバカみたくぶつかってもしっかりタッチ出来るからね♪♪」

ラプ先輩はご機嫌な様子で僕たちに教えてくれた。

「ったく……。セーフだから良かったけど、アウトになったらチャンスをムダにしちまうんだぜ？“暴走と好走塁は紙一重”だぜ？」

ヒート先輩がラッシー先輩の行動にあきれた様子をみせる。

「わりぃ、わりぃ。ピカっちがあんな走塁を見せたから、俺も燃えちまったぜ」

ラッシー先輩が笑いながら返事をする。

確かに普通の選手なら、浅い外野フライでタッチアップするのはためらうかも知れない。

しかし、ラッシー先輩は自分の足の速さに賭けて見事に成功したのだ。

「まぁ、ためらっちゃ何も始まらないからな。勇気を出して行動したことが、良い結果につながっけど、時には冷静な判断も大事だぜ？ケガなんてしたら話にもならないからな」

ヒート先輩がそのように言う。

『走塁はただ走るだけじゃないんだ……。自分の勇気、技術が試されているんだ……』

僕は2匹のやり取りを聞いて、走塁の難しさを感じた。

さてランナー一塁の状態で、9番打者のチコっちが登場した……が。

「チコっち。頑張ってこの前みたく“チコっち劇場”を見せてよ♪」

僕はチコっちの背中をポンと叩いて、チコっちを激励する。

「カゲっち……」

そのニコニコした表情を見て、チコっちはまた心が痛くなる。

『カゲっちは本当のことを何も知らないのに、あたしに対してこんなに期待している……。こんな優しい幼なじみをあたしにあたし

はウソをついているんだわ……』

チコっちは僕の表情を見て、笑いながらもどこか悲しい気持ちで僕に返事をした。

「ありがとう……。見せてあげるわ！とびっきりの“チコっち劇場”をね！！」

今自分に出来ることはただ一つ……。

『カゲっちを悲しませないように、元気な姿を見せること！！』

そうすることで、オーちゃんとの出来事を忘れることが出来ると、彼女は感じたのだろう。

その間に、キュウコン監督はバットを振った！！

カキーーン！

とてつもなく勢いが強いライナーが右中間を襲う！！

「やった～！！一気に走るよ～♪」

一塁ランナーのチックは打球を確認すると、全速力で走る！！！

打球はセンターとライトのちょうど真ん中を破って、コロコロと転がる！！

「まわれ～！！まわれ～！！」

バックネットに集まったナインのムードは、一気にヒートアップ！！！

チックは二塁、そして三塁を回った！！！！

「たぁぁぁぁぁ！！！」

チックは真剣な表情でグラウンドを駆け抜ける！！

さて、ボールに追いついたのはライトだ。

そしてセカンドに中継をした……が！！

「僕の方が早かったようだね♪」

チックがニコニコしながら、ゆっくりとホームベースを踏んだ。

と、同時にナインが彼のことをハイタッチで出迎えたのだった。

さて、その間にチコっちはどうなったかと言うと……？

「あたしだって全力になれば、何でも出来るんだから！！」

打った瞬間、彼女は勢いよく一塁に走り出した！！

「まだまだ走れるわ！めざすはホームベースよ！！」

そう言うと、一塁を蹴って二塁に向かう！！

チックが三塁を回った頃には、二塁にも到達した！！

「ここでストップするわけには行かないわね……えい！！」

へ！？ちょっと……チコっち……？

もうボールはセカンドに戻ってきているのに……まさか！？

ダダダダダ……キキィィィィ！！！

あ～ぁ。チコっちは二三塁間で見事に挟まれた！！

「え……えぇぇぇ！？」

ボールはセカンドからサードに送られ、チコっちを追いかける！！

「きゃ！」

チコっちは慌てて二塁に戻るが、ボールは小刻みにショート、セ

カンド、ピッチャーに回る!!

「だけど“チコっち劇場”はこれからよ!!」

チコっちは何とか二塁に戻ろうとしたり、三塁に向かったりする!!

……と、ここでサードがセカンドに送球した際に、それが大きく反れて、大暴投になってしまった!!

「チャンス!!」

チコっちはこのスキに、三塁ベースから一気にホームベースに突っ込んだ!!

「すごい!!すごいよチコっち!!さっすがだね〜〜!!!」

僕はうれしくなり、その場でジャンプしてしまった!!

「カゲっち……。えぇ、もちろんよ！！あたしの“チコっち劇場”は世界一奇跡を起こすんだから！！！」

チコっちも持ち前の元気のよさが弾けだす！

『そうよね。くよくよしていたってしょうがないわ。もう2度と同じ失敗をしなければ良いんだわ。あたしは、あたしらしくいつものように元気な姿を見せれば良いんだわ！！！』

チコっちの笑顔には迷いが消えたことを意味していた。

うっすらと小さい涙が流れているのがその全てを表していた……。

『オーちゃん……。あなたには悪いけど……、カゲっちくんの気持ち、チコっちちゃんの気持ちは……あなたが考えている以上に、優しくて日差しのように暖かいんだから……。あたしたちが過ごした楽しい時間、苦しんだ時間は……、誰にも書き換えることなんて出来ないんだから……！』

その時ピカっちは、オーちゃんの見せかけの“思いやり”に惑わされずに、僕とチコっちのような目に見えない“思いやり”を信じ

ることを決めた……。

「これで走塁練習は終わりだ。みんなよく頑張ったと思う。これから実戦の中でさらに技術を磨くことを心掛けてくれ」

『はい！！！』

ナインは力強く返事をした！

「さて、ヒート！いよいよ君の熱い気持ちを前面に出すときが来たぞ！！」

キュウコン監督のこの言葉は、次の練習内容を意味していた。

「いよいよヒート先輩のピッチングが見られるんですね！僕、ワクワクしてきました！！」

「あぁ、期待していてくれよ！！！」

ヒート先輩がマウンドに向かいながら、僕の言葉に返事をした。

野球部に入部したその日に、たった１１球しか見られなかった、ヒート先輩のピッチングが今ここに始まろうとしていた！！

第５３話：「ホームベース目指して……！」の巻（後書き）

カゲっち：「ピカっちも、チコっちもすごいよ！！かっこよかったよ！！！」

ピカっち：「そう言われると照れちゃう……／／／／／」

チコっち：「でも、頑張れて良かったわ♪」

作者：「次回からは投球練習です！いよいよ野球の分野紹介も終わりに近づいてきましたよ！！」

ヒート：「期待してくれよな！！」

第５４話：「登場！あさポケの“炎のエース”！！～ヒート&ラプバッテリーV

ヒート：「今回からついに投球練習だな！！」

ラプ：「燃える姿を見せてあげなさい！！」

作者：「ここでちょっと注意点です。本文でカウントが表示されますが、左の数字がボール、右の数字がストライクの数となっています」

カゲっち：「例えば１－２と書いている場合、ワンボールでツーストライクということになります」

作者：「今年からプロ野球でも、カウントがボールから言われるようになったので、それに合わせていこうと思います！」

ヒート：「長くなったけど第５４話プレイボールだぜ！」

第５４話：「登場！あさポケの“炎のエース”！！～ヒート&ラプバッテリーV

熱くなるような走塁練習も終わって、ついにヒート先輩のピッチングが見られる時が来たぞ！

「投球練習は１０球準備に投げた後、ナインとそれぞれ勝負する形を取る。それで良いな？」

マウンド上の“エース”に対して、キュウコン監督がルールを説明する。

「えぇ。俺自信もずっとピッチングが出来なかったから、バッターと真剣勝負したいんです！！」

赤いグローブを手にしたヒート先輩が今までに無い真剣な表情でそのように言う。

「そうかそうか。そのような熱い言葉を聞けて、うれしく感じたぞ。精一杯のピッチングを見せてやれ！」

キュウコン監督がポンとヒート先輩の腕を叩いた。

と、ここで突然ですが、キュウコン監督から聞いた、投球に関しての知識を紹介していこうと思います。

「まず始めに投球フォーム（ピッチャーの投げ方）についての説明だ」

投球フォームには大きく分けて４つに分かれているらしい。

?オーバースロー
ボールを上から思い切り投げる方法

?スリークォーター（英語で３と言う意味）
ボールを斜めから投げる方法（オーバースローとサイドスローの中間だが、はっきりとした区別は無い）

?サイドスロー
ボールを横から投げる方法

?アンダースロー
ボールを下から投げる方法

「ちなみに俺はボールを上から思い切り投げるから、オーバースローだぜ！」

ヒート先輩が笑いながら僕に教えてくれる。

「次に変化球の種類を復習するぞ」

変化球に関しては以前の打撃練習でも紹介したが、あらためて紹介すると次のようになるらしい。

?フォーク

ボールが目の前でストン！と縦に落ちる変化球。

ボールの握ったときに、指の形が食器の“フォーク”の形に似ている。

・ＳＦＦ（スプリット）

正式にはスプリット・フィンガード・ファストボールと言うが、短縮してＳＦＦ、スプリットと呼ぶ。　球速は直球並に速く、変化はフォークより小さい。

・チェンジアップ

スルスルとゆっくり落ちる変化球。微妙に左右に動くと“サークルチェンジ”になる。

・パーム

サーッと真っすぐ落ちる変化球。

・ナックル

例えて言うなら“、落ち葉がユラユラと落ちるような動きを見せる”変化球。あまりにも不規則な動きのため“魔球”とされる。

?スライダー
・ボールが右ピッチャーのときに、左から右に動く変化球。左ピッチャーの時は逆に動く。

・Hスライダー（高速スライダー）
スライダーの速さが、直球とあまり変わらないときにこう呼ばれる。

・Vスライダー（落ちるスライダー、縦スライダー）
スライダーが縦に動くとこう呼ばれる。

・カットボール
バットの芯を外すために使う変化球。ギリギリまで直球と動きが変わらない。

?シュート
ボールが右ピッチャーのときに、右から左に動く変化球。左ピッチャーのときは逆に動く。

・Hシュート（高速シュート）
球速が直球とあまり変わらないシュート。

?カーブ
ボールが右ピッチャーのときに、左上から右下に斜めに動く変化球。左ピッチャーのときは右上から左下に動く。

・スローカーブ
カーブの中でも特に球速が遅い。

・パワーカーブ
球速が速いカーブ。

・ドロップ
カーブに似ているが、カーブよりも横に大きく曲がり、打者の近くで大きく曲がる。

・Dカーブ（ドロップカーブ、縦のカーブ）
普通のカーブと違って、横の動きが少なく縦に大きく曲がる。

・ナックルカーブ
カーブと動き方は似ているが、ボールの握り方がナックルと似ている。

・スラーブ
スライダーの動きにカーブの動きが混ざった変化球。

?シンカー
ボールが右ピッチャーのときに、右上から左下に動く変化球。
ちなみに左ピッチャーが投げると特別に“スクリュー”と呼ばれる。

・Hシンカー（高速シンカー）
球速が直球とあまり変わらないシンカー。

「だいたいまとめるとこんな感じだな。変化球の曲がり方は、ピッチャーを真っ正面から見た場合だから注意するように」

キュウコン監督は最後にそう言って説明を終わった。

「ヒート先輩のボールを打つのかぁ……。何だかドキドキしちゃうよ～」

ナインと勝負する形と聞いた僕は、少しばかり緊張感と期待感が混じった複雑な気持ちになった。

「それじゃあ練習を始めるかぁ……ラプ！」

「えぇ！しっかりと受け止めるわよ！！」

バッテリーを組んだ2匹の先輩の意気込みが強くなる！

こうして、ヒート先輩の投球練習がスタートした！！

マウンド上のヒート先輩が、ゆっくりと腕を高くあげ、体を右に半回転させる。

「これがオーバースローなんだ……。体全体でボールを投げているみたい」

僕はヒート先輩の投げる動作に、少しばかり感激する。

さて、ヒート先輩が頭の位置からボールを投げた！！

スパーーン！

力強いストレートはそのままラプ先輩の構えるキャッチャーミットに吸い込まれた！！

「すごい速いストレート……。僕にあんなボール打てるかなぁ……」

右バッターボックスの外側で素振りをする僕は驚きと動揺を見せる。

続いて2球目をヒート先輩が投げた！！

スパーーン！

1球目と同じように、風を切る速球がキャッチャーミットに吸い込まれた！！

『まだ2球しか受けてないけれど、間違いなくこの前ジュジュと勝負したときよりも調子が良いわ！』

キャッチャーのラプ先輩は、ヒート先輩のボールのキレの良さに気づいていた。

続いて3球目！

『ヒート。今度はインコース（内角）の低めよ！思い切り投げなさい！』

ラプ先輩は真ん中に構えたミットを低めに移動させた！

『難しいコース……。でも俺なら出来る！！』

ヒート先輩が思い切りストレートを、そのミット目掛けて投げた！！

スパーーン!!

「すげぇよヒート……。１５球勝負の時とは比べものにならねぇほど、ストレートが走っているぜ……」

三塁側ベンチに座るラッシー先輩は、“エース”の燃える闘志に圧倒されていた。

「今日は調子良いじゃない。全てあたしが構えたミットからズレる事なくボールが届いているわよ」

「そうか？でも油断はしていない気持ちではいるぜ！」

クールなラプ先輩、ホットなヒート先輩がそんなふうにやり取りする。

次の４球目。これもミットからズレる事なく、外角低めにストレートが決まる!!

５球目、６球目も同じように精密なコントロールでボールを投げた!!

その度にベンチから拍手が聞こえる！

「次はフォークを投げるぜ！」
「わかったわ！ドンと来なさい！！」

次の7球目はヒート先輩の得意変化球、フォークを投げるようだ！

「真ん中に思い切り……行くぜ！！」

ヒート先輩は力強く腕を振った！！！

ストン！！

「ひぇ～……。やっぱりマシンと全然落ち方が違うや……」

僕は赤いバットを振ってタイミングを合わせるが、そのキレの良さに脱帽してしまった。

「フォークも良いんじゃない？自信もって良いと思うわ」
「そうか！ありがとうな！！」

８球目、９球目、１０球目も全力で投げきったヒート先輩。

『見てろよ！これが俺の……“エース”の意地だ！！』

ヒート先輩は内に秘めた闘志を熱く燃やし始めていた！！

「さて、あらためてルールを確認だ。この前発表した打順でヒートと実戦感覚で勝負する。もちろん３つストライクを取られたらアウト、４つボールでフォアボールだ！」

『わかりました！』

言うならば、バッテリー以外は打撃練習ということになるようだ……。

「打ったらもちろん走るんだ。盗塁も有りにするぞ！」

ということは、今まで行った打撃、走塁練習の復習をするようだな。

「では、早速練習開始だ！ヒート、ラプ！守備陣はいつもと違うがしっかりと抑えてみせるんだ！！」

『はい！頑張ります！！』

「最初は僕かぁ……。緊張しちゃうなぁ……」

これが1番打者のプレッシャーなんだろうか？

僕はマシンを相手にした以前の打撃練習とは、全く比べものにならないほどのプレッシャーを感じていた。

『でも“カントリー・リーグ”はヒート先輩みたいなピッチャーがいるんだ！負けてはいられないぞ！！』

それに憧れのヒート先輩と勝負出来るんだ。これ以上に楽しみなことは無い！！

そんなワクワク感のおかげで少し余裕が出来たのか、右バッターボックスに入ったときには、僕は少し笑みを浮かべていた。

「プレイボール！！！」

さぁ、ヒート&ラプバッテリーＶＳナイン一２の勝負がここに始まった！！

『トップバッターはカゲっちかぁ……。小さくて愛嬌たっぷりな“がんばりや”だが、あの“選球眼”には気をつけないとな』

マウンドのヒート先輩がロジンバッグ（マウンドに置いてある白い袋。滑り止めの役割がある）を握ってそんなことを考える。

『だが、今日の俺のボールを見分けられるかな！？』

ヒート先輩が振りかぶって、第1球目を投げた！！！

『最初はストレートが来るはず！でも慌てて打つ必要は無いんだ！！！』

右バッターボックスでバットを構える僕。

どれくらいスピードが速いのかは、投球練習のときにわかったけど……、タイミングをまだわからないから見送ることにした。

「ストライク！！」

判定はストライクだ。

『最初は内角低めへのストレート……。打てないことは無いけど、多分詰まって内野ゴロになっちゃうんだろうなぁ……』

僕は判定を聞いて、フーッと深呼吸をする。

『さすがカゲっちくんね。とても野球を始めたばかりのルーキーとは思えないわ……。どこなら手を出すか迷うわね……』

ラプ先輩は僕をチラッと見てそんなことを考える。

『2球目は外すわよヒート。カゲっちくんは考え込むとプレッシャーに負けちゃうタイプだから、徹底的に迷わせるのよ！』

ラプ先輩が外角低めの……、ストライクゾーンから大きく外れた場所にミットを構える。

『やっぱりカゲっちに対してセンスを感じているようだな……。わかったぜ！！』

カウント、ノーワンから第2球目をヒート先輩が投げた！！

『これは……見送れる！！』

僕はじっとバットを振らずにボールを見た！！

「ボーール！」

判定はボールとなった。

『でもどうしてだろう?ヒート先輩なら、どんどんストライクゾーンに投げてくると思ったのに……』

1球目はストライクゾーンギリギリの内角低めに自慢のストレートを投げたのに、2球目は誰が見てもボールとわかるようなところに、ストレートが飛んできたことに疑問を抱く僕。

『まぁ良いや……。100%ストライクゾーンに投げられることも滅多に無いから……。あまり気にしないようにしよう……』

僕は視線を再びヒート先輩に向ける。

次が3球目だ!カウント1ー1からヒート先輩が投げた!!

『もう、ストレートは僕には効きませんよ!!えい!!』

僕は真ん中よりやや外角低めのストレートを振りに行く!!

「ストライク!!」

しかし空振りになってしまった!

『ひぇ～……。なんかすごく速かったよ……。せっかくの絶好球だったのに～……！！』

僕は悔しい気持ちでいっぱいになってしまった。

『これでツーストライクよ。でもカゲっちくんもタイミングが合いそうね……。それなら……』

ラプ先輩がヒート先輩にサインを送る。

『ほぉ～……。なるほどなぁ。よし！分かったぜ！』

ヒート先輩がそのサインに大きく頷く！！

『ツーストライクかぁ……。次はフォークが来そうだなぁ……。何としても食らいついて見せる！』

僕は真剣な表情を見せる！

『頑張って……カゲっちくん……。あたしはいつでもあなたを応援しているわ……！かっこいいヒット打ってね……』

ネクストバッターサークル（バッターボックスの外側にある白い円）で、ピカっちが祈るような気持ちで僕を見る。

カウント1－2からヒート先輩が4球目を投げた！！

『行くぜカゲっち！！これがあさポケの“エース”だ！！』

ヒート先輩が思い切りボールを投げた！！

『僕だって負ける気はありませんよ！あさポケナインの一員として……同じ優勝を目指す仲間として……勝たせてもらいます！！』

僕も思い切りフルスイングをした！！！

「ストライク！！バッターアウト！！」

その瞬間、ヒート先輩が小さく右手を握った。

『ルーキーに対して大人げないかも知れないけど、ピッチャーにとって最初の打者をアウトに取れるか、そうでないかでモチベーションは変わるからな……。例えどんな相手だろうと、それにバッターも俺に全力で勝負を挑んでいるんだ！手を抜いたら失礼だ……！！』

ヒート先輩は内にそんな感情を抱きながら、ボールを受け取った。

『ハハハハ……。最後は内角高めのストレートだったんだ……。低めに投げていたし、追い込んだからフォークだと思っちゃった……』

僕は緊張が取れたせいか、ベンチに戻るときに脱力感を感じた。

『でも、やっぱりヒート先輩はすごいや！僕みたいなルーキーに全力で投げてくれたんだもん！！僕、アウトになったけれど楽しかった！！』

そう。バッターにとって納得出来る内容ならば、次回に対する意気込みは大きく変わるのだ。

『次はあたしの番ね。みんなに負けないくらい頑張っちゃうわ♪』

あさポケの小さなスピードスター、ピカっちが右バッターボックスに向かう。

白熱しそうなヒート&ラプバッテリーＶＳナイン－２！！

次回は一体どんな展開が待っているのだろうか！？

第５４話：「登場！あさポケの“炎のエース”！！～ヒート＆ラプバッテリーV

カゲっち：「４球しか投げて無いのに、すごく熱くなってるね？」

作者：「実戦感覚の執筆はやっぱり楽しいからね。おかげで文がメチャメチャだけど……」

ピカっち：「次回はどんな展開が待っているのかしら？」

第５５話：「ヒート先輩のストレートは無敵！？～ヒート&ラブバッテリーＶＳ

ピカっち：「タイトルがごちゃごちゃしているわね……（汗）」

作者：「どうしても熱くなるとこうなるんだよ」

カゲっち：「もちろん、ヒート先輩も熱くなっているみたいだよ！

第５５話プレイボール！！」

第５５話：「ヒート先輩のストレートは無敵！？～ヒート&ラプバッテリーＶＳ

やっぱりヒート先輩はすごいや！熱い気持ちが僕にも感じられたよ！！

「よろしくお願いしますヒート先輩！」

２番打者のピカっちは、右バッターボックスに入るときに、ヒート先輩にお辞儀をした。

「あぁ！こっちこそよろしくな！」

ヒート先輩も、嫌がることなくピカっちに返事をした。

『次はピカっちちゃんね。長打は無いと思うけど、走塁練習に見せた俊足は嫌だわ……』

ラプ先輩がヒート先輩にサインを送る！

『なるほどなぁ……。フライアウトを取る気だな？』

ヒート先輩がラプ先輩のリードに納得し、うなずいた。

さぁ、第1球目をヒート先輩が投げた!!

『カゲっちくんに見せたあのストレート……。きっと投げてくるはず……だったら……!!』

ピカっちは突然立てていたバットを横に寝かした!!

コーーン!

「え!?う……ウソ!?」

「な!?セーフティバントだと!?おい、ラプ!!」

ラプ先輩とヒート先輩が、ピカっちの意外な作戦に驚く!!

「あ……切れちゃったわ……」

ピカっちは打球が三塁の白線上より外側に転がったのを見て、ガックリとした。

「ファール！」

一旦期待にざわめいたベンチも、ため息に包まれる。

『それにしてもセーフティバントだなんて……。いつの間にそんなことを練習したんだ？』

ボールを受け取ったヒート先輩が疑問を抱く。

「惜しかったなぁピカっち……。昨日の自主練習のときにチックのアドバイスで、頑張っていたもんね」

僕はピカっちとヒート先輩の勝負を見て、一人つぶやく。

……そう。あれは昨日の自主練習のときのことだった……。

「やっぱり……ヒットを打ったうれしさを忘れられないわ……。

もっともっと打てるようになりたい……」
「そうだね。僕とピカっちは大切な1、2番コンビを任せられたんだ。でも、どうしたらもっと打てるようになるかな～？」

そう言いながら、僕とピカっちは素振りをしていた。

すると……、

「カゲっち！ピカっち！こんなところにいたんだね♪僕も練習させてよ♪」

どこからか、チックがニコニコ笑顔で登場した。

「あ！ちょうど良かった！ねぇねぇチック。僕たちヒットを打つコツを知りたいんだけど、なにかあるのかな～？」

天才スイッチヒッターのチックなら、きっと良いアドバイスをしてくれるはず。

そんなことを考えながら、ヒットを打つコツを彼に聞くことにした。

「ヒットを打つコツ？そうだな～……。カゲっちやピカっちは僕

と違って足が速い種族だからね。それを活かしたいなぁ……そうだ！！」

チックは何か思いついたようだ。

「カゲっちはとにかくライナーを、ピカっちは内野安打を狙う打撃を目指すと良いかもね♪」

チックが言うには、僕の場合絶好球を見逃すことが少ないため、直球を狙ってライナーを外野に飛ばす気持ちで打つと良いと言うのだ。

「ライナーを飛ばせば、パワーが多少期待出来るカゲっちの長所を活かして、長打も狙えるし、うまくいけばツーベースもスリーベースも打てるよ♪」

「へぇ～、そうなんだ。僕は内野安打を狙ってゴロを打つ練習に徹していたよ～」

僕は苦笑いする。

「カゲっちの考えていることは間違っていないよ♪ただ、この前の打撃練習でフェンス直撃のヒットを打っていたから、そのパワーも活かしたいと思ったんだ♪」

チックいわく、僕はゴロで内野安打を狙おうとすると、逆にバットの振り方（スイング）が窮屈になるらしい。

「同じ俊足でもタイプは微妙に違うからね。自分に合った打撃を見つけるのは簡単で難しいんだよ♪」

チックがニコニコ笑顔で話す。

「ピカっちは逆に長打を狙うことは難しいと思うよ。パワーがあるとは言い難いし、それに打撃練習でゴロが良いところに飛んでいたから、もう徹底的に転がす気持ちで打つと良いんだ♪」

ピカっちの足なら転がせば、まず間違いなくセーフになるとチックは言う。

「まだ理由はあるよ♪ピカっちは2番打者でしょ？2番打者はバントがとにかく上手なのが理想なんだ。ピカっちがバントの名手になれば、チームにとっても、ピカっちにとっても嬉しいことがあるよ♪」

「え？一体何かしら？」

ピカっちはすごく気になっている様子だ。

「それはね……送りバントのときにランナーも進められるし、自分もランナーとして出塁出来るんだ！」
「本当なの？」
チックの言葉に少々戸惑いを見せるピカっち。
「本当だよ♪さっきも言ったように、ピカっちは転がしたらヒットになるんだから、バントをたくさん練習すると良いよ♪今日の守備練習のときに“セーフティバント”の話があったよね？」
「ええ。確かランナーがいないときにするバントのことよね？」
ピカっちがチックとやり取りをする。
「その通り。もし、バントの名手でしかも俊足の選手がいたら……」
「際どいところにボールを転がせる！」
ピカっちはうれしそうだった。何と言うか、自分の目指すスタイルを発見出来たからだろう。
「そうだよ♪しかも相手はそんなにバントをするなんて考えないだろうから、きっと慌ててエラーも誘うことも出来るんだ♪しかも例え失敗しても、きっと嫌な存在として印象が残ると思うよ♪」

「わかった♪ありがとうチックくん♪」

こうして、僕とピカっちは目指すスタイルを取得するべく、練習を続けたのだった……。

さて、話は戻りピカっちＶＳヒート&ラプバッテリーだ。

『セーフティバントをするなんて……。うかつにストライクゾーンに投げられないわね』

ラプ先輩が次のサインをヒート先輩に送る。

『フォーク……。いや、気にするな。ストレートにタイミングは合ってはいねぇ……』

ヒート先輩が首を横に振る。

『ヒート……。わかった……。あなたが投げたいボールはこれしか無いものね♪』

ラプ先輩がもう一度サインを送る。

ヒート先輩は納得したのか、大きくうなずいた！

『一体どんなボールが来るのかしら？何だか一球外しそう……』

ピカっちは次に飛んでくるボールを考え、じっとバットを構えた。

さぁ、ノーワンから第2球目をヒート先輩が投げた！！！

「ピカっち！！」

僕はベンチからピカっちを応援する！！

『あ！またストレート！……でも……打てる！！』

ピカっちは持っていたバットで、ボールをたたき付けた！！

コーーン！！

打球はサード方向に高いバウンドになって転がった！！

『当たった……！後は自分を信じなきゃ！！』

打った瞬間ピカっちは、自慢のスピードで一塁に走りだす！！

一方打球はサードが前進しながら、一塁に送球した！！

『負けるもんですか！！えい！！』

と、ここでピカっちは先ほどの走塁練習では見せなかった、ヘッドスライディングをした！！

ザザザァー！！

砂ぼこりが立ち込めた！

さぁ、判定は！？

「セーフ！！」

「ワァァァァァァ！！す……すごいよピカっち！！！」
「やるな！！ヒートのストレートも簡単に打てるもんじゃねぇのに……よく食らいついたな！！」

僕とラッシー先輩が体をベンチから乗り出すように、ピカっちのプレーを見て叫んだ！！

「ありがと♪♪走ることなら負けないわ♪」

ピカっちは一塁ベースで、うれしそうに笑顔で声援に応えていた。

『やるわねピカっちちゃん。やっぱり一球外すか、フォークを挟めば良かったわね』

『そうみたいだな。カゲっちといい、ピカっちといい、この1週間でグングンレベルをあげたな』

ラプ先輩とヒート先輩は、歓喜の一塁ベースをじっと見つめていた。

これで、ランナー一塁となった。

続いて、3番打者のラージキャプテンが登場した。

『ピカっちが一塁かぁ。俺のヒットであっという間にヒートを失点させてやるかな』

右バッターボックスの外側で何度か素振りをした後、ゆっくりとラージキャプテンが構えた。

『ランナー一塁。ラージなら何でもやって来そうだな。どうするラプ？』

『心配しないで。あなたの今日のストレートなら三振に取れるわ』

ラプ先輩がヒート先輩にサインを送った。

注目の第1球目！

『ラージ！俺のストレート打ってみろ！！！』

ヒート先輩がセットポジション（バッターに対して真横に立つこと）から、投げた！！

『どうせストレートだ！打って……！！！？』

スパーン！

「ストライク！！」

ラージキャプテンがバットを振ったが、全くかすらなかった！

『うわぁ……。速ぇぇ……。当てにいこうと、軽く振っただけな

のに……』

ラージキャプテンに対する初球はストレート。それも真ん中よりやや低めという、そんなに厳しくないコースだ。

『やっぱりね。ピカっちちゃんはただバットの先に当たったのが、いいコースに飛んだだけ。まだ3匹とも、バットの芯で捕らえていないわ……』

ラプ先輩は自分の予想が当たり、ニヤリとした表情をした。

『まだ、ストレートで押せるわ！』

ラプ先輩は今度は内角低めにミットを構えた！

『そこかぁ！よし、投げるぜ！！』

カウントノーワンから、ヒート先輩が第2球目を投げた！！

『何としても、ヒットを打ってやる！とりぁぁぁぁ！！』

バッターボックスのラージキャプテンも、思いきってバットを振

った！！

「ストライク！！」

判定はストライク！ラージキャプテンのタイミングが合わない！！

『くっそ～！これじゃ“つなぐ”ことが出来ねぇ……！』

ラージキャプテンはバットで、トンとホームベースを叩く。

一方簡単にツーストライクとしたヒート先輩は、ボールを受け取ると、マウンドの土を少し蹴る動作を見せる。

『とりあえずツーストライクまで追い込んだな。さて、次はどうする？』

ヒート先輩はラプ先輩のサインを見る。

『安心して。１００球投げる間は防御率０．００にするから♪』

ラプ先輩の口から出たこの“防御率”と言う言葉。

キュウコン監督によると、これが良いピッチャーなのかを判断する材料となるらしい。

「防御率は、“ピッチャーが9回投げきったときに、何点取られるか？”を表すデータなんだ」

例えば防御率4．００ならば、そのピッチャーは9回投げきったときに4点取られることを意味している。

ちなみに防御率は次の式で計算出来るらしい。

防御率＝自責点×９÷投球回

「“自責点”と言うのは、“ピッチャーが自分が打たれたり、フォアボールで出したランナーがホームインした数”のことだ。エラーで出したランナーがホームインしたり、スリーアウトを取れたとわかるようなときに、エラーで出したランナーは例外なんだ」

キュウコン監督がそのように言う。

だから今の場合、一塁ランナーピカっちは、ヒート先輩がヒットで出したランナーなので、仮にホームインすると自責点に加算されるのだ。

ちなみにランナーを残してピッチャーが交代して、次のピッチャーが打たれた場合は、その残したランナー分だけ前のピッチャーの自責点として加算されるらしい。

“投球回”はその名のとおりピッチャーが投げたイニングを表している。

アウト一つを3分の1として数えていき、一つもアウトをとっていない場合で交代したときは、3分の0イニングとして考える。

例えば5回まで順調に投げていたのに、6回でワンアウトも取れずに突如打たれてKOされた場合は、5回と3分の0として記録されるのだ。

と、かなり専門的な話となってしまったが、ここで話を元に戻そう。

ランナー一塁で、カウントはノーツー。ラージキャプテンが追い込まれているという苦しい状況だ。

『さて、最後はこれだ！！』

ヒート先輩が振りかぶって第３球目を投げた！！

『フォーク……いや、ボール球だ！！』

一瞬ラージキャプテンがピクリとボールに反応したが、バットを振らずに見送った！

「ボーール！！」

ボールは……速球は外角の低めに大きく外れた。

これでカウントは１―２となった！

「しっかし驚いたぜ……。カゲっちへの４球、ピカっちへの２球、そしてラージへの３球。９球ともストレートで押しているなぁ……。今日はよほどラプもヒートのストレートに信用しているようだぜ…

…」

ツーストライクでフォークを投げず、ストレートで空振りを誘ったり、決め球として打者の打ちにくい胸元へ投げていることが、ヒート先輩の調子の良さを表しているらしい。

『まだストレートで押せるわよ！次はここよ！！』

ラプ先輩が次にミットを構えた場所。

そこは外角でストライクゾーンギリギリのやや真ん中のコースだ！

『1球外したってことは……また内角にくるか？』

一方ラージキャプテンも神経を集中させ、次に飛んでくるコースを考える。

カウント1―2からヒート先輩が第4球目を投げた！！

『これで決めるぜ！！』

『俺だって負けない！ここだぁ！！』

コーーン！！

「ファーール！」

ラージキャプテンのバットに飛んできたストレートが何とかあたり、打球はバックネットに飛んでいった。

『かろうじてバットに当てたか……。さすがあさポケの打撃職人だな』

ヒート先輩がクルッと一回転する。

『くぅぅ……。軽いスイングでもギリギリってところだ……。こりゃやべぇな……』

ラージキャプテンはいいコースに飛んでくる、速球の威力に驚きをみせる。

『カウントは1―2だからまだこっちが有利ね……。初球真ん中よりやや低め……。2球目は内角低め……。3球目は外角低めにはずして……4球目は外角ギリギリのコース。ラージには低めにストレートを見せ続けている印象ね……』

ラプ先輩は次に投げさせるコースを考える。

『……。やっぱりらーじはパワーヒッターってことだけあって、ラプも慎重なリードだな。んじゃ次は……そこだ！！』

ヒート先輩は次に投げるコースを決めたようだ。

「タイム！！」

と、審判にタイムを要求してラプ先輩をマウンドに呼ぶ。

「次に投げるコースを言うぜ……。外角高めのストレート……良いな？」

「え？でも甘くなったら確実に打たれるわよ？」

ラプ先輩はとにかくゴロの山を築くために、低めに集めるリードを見せたが、ヒート先輩は逆にホームランバッターが好きな外角高めに投げようと言うのだ。

「多分ラージもそこまでバカじゃねぇから、そろそろ俺たちの配球に気付く頃だ。低めをつきすぎるとカットされ放題だ」

「……。確かにまだストレートに合っているようには見えなかったわね……。わかった。それでいきましょう！」

ラプ先輩とヒート先輩が、自分の場所に戻りプレイ再開だ！！

『また低めに投げる……？でもいい加減フォークかな？いくら何でも5球続けたら打たれるくらいわかるだろう……』

ラージキャプテンがじっとヒート先輩を見ながら、神経を集中させる。

カウント1―2から第5球目をヒート先輩が投げた！！！

『ス……ストレート！？でも甘い！！』

ラージキャプテンが外角高めに飛んできたボールを打ちにいくが……！！

スパーーン！

「ストライク！バッターアウト！！」

ここでもストレートはさえ、ラージキャプテンは空振り三振に倒れた。

「うぉぉ！すげぇ！スピードガン見てみろよ！！」

ネクストバッターサークルに構えていたラッシー先輩が、キュウコン監督から受け取ったスピードガン（物の速さを調べる機械）を見て叫ぶ。

「今のストレート……１４６キロだ……。中学生レベルじゃねぇよ……」

その言葉に驚いたのはラージキャプテン。

「うそ！？それじゃかすりもしねぇよな……」

そう言いながら、ベンチに戻っていった。

「１４６キロ……。確かに俺……今日は調子いいって思ったけどそこまで球速出しているなんて思わなかったぜ……」

その球速に、投げた本人が一番驚いたのかもしれない。

「ヨッシャーーーー!!次はラッシーラッシー、ララララッシーの出番だぜ!!!」

ランナー一塁の状態は変わらず、続いてあさポケの４番打者でヒート先輩の親友、ラッシー先輩が登場だ!!

ますます白熱するヒート&ラプバッテリーＶＳナイン－２!!

次回ついに４番ＶＳエースが始まる!!

第５５話：「ヒート先輩のストレートは無敵！？～ヒート&ラプバッテリーＶＳ

１番：カゲっち→空振

カウント１―２から、ピッチャーヒートのストレートに空振り……。

２番：ピカっち→三安

初球のセーフティバントは失敗するも、続く２球目のストレートに食らいつきサードへ打球が！ピカっちは気迫のヘットスライディングで内野安打に！！

〈ランナー一塁〉

３番：ラージ→空振

ピッチャーヒートの投げる速球にタイミングが合わず……。

〈ランナー一塁〉

打撃陣はもっとしっかり速球に食らいついて、ランナーを進めよう！！

バッテリーは一人一人との勝負に全力で挑もう！！

作者：「今までの状況をテキスト風にまとめてみました。まだ１１球だけですが、熱い勝負に燃えてきました！！」

ラッシー：「次回は俺との対決だぜ！！」

第５６話：「火を噴くストレートＶＳ風を斬るフルスイング！！～ヒート＆ラプ

ラッシー：「ヨッシャァァーーー！！今回は俺の出番だぜ！！」

ヒート：「今日の俺は誰にも止められないぜ！！」

ラプ：「暑苦しいわね～……。そんなあたしたちが繰り広げる勝負に注目してね♪」

カゲっち・ピカっち：「それでは第５６話プレイボールです！！」

第５６話：「火を噴くストレートＶＳ風を斬るフルスイング！！～ヒート＆ラプ

ヒート先輩のストレート……まさに火を噴くようなボールだよ…。あのボールを打つなんて出来るのかなぁ……。

「よっヒート！ついに俺との勝負だな！お前のストレート、俺のこのフルスイング。どっちが勝つか楽しみだぜ～♪」

右バッターボックスに入る前に、あさポケの４番打者でヒート先輩の熱き親友、ラッシー先輩が楽しそうにヒート先輩に言う。

「へっ！お前のフルスイングもすげぇけど、俺も今日は打ち砕かれるなんて思っちゃいねぇよ！！４番とエース、どっちが強いかこの打席で決めてやる！！」

珍しくヒート先輩が笑いながら、ラッシー先輩に話す。

「面白そうだな！だけどこのハイテンションフルスイング……ラッシーくんも誰も止められる気がしないぜ～～♪♪」

ラッシー先輩のハイテンションはどこまでも健在のようだ。ベン

チの中に集まった僕らは、ただ苦笑いするしかなかった。

とにかく、ランナー一塁の状態でプレイは再開された！

まず、注目の第1球目！！

『ラッシーはああやって笑い飛ばしているけど、実力は本物だ！1球目から狙っているはずだ！！』

ヒート先輩がじっとラプ先輩のサインをのぞきこむ。

『初球は外しましょう。一球様子を見てから考えたいの』

ラプ先輩は、ラッシー先輩の出方をうかがっているようだ。

『……今日のアイツのストレートはキレにキレまくっていやがる……。なんたってあのラージを三振に仕留めるくらいだ……。出来れば一球外してきて欲しいぜ……』

ラッシー先輩は先ほどと違い、今度は超が付くほどの真剣な表情になる。

『ここはラプに任せよう……行くぜ！！』

ヒート先輩がセットポジションから力強くボールを投げた！！！

『ボール球！！ラッキー！！これで次は仕留められる！！』

ラッシー先輩は余裕で、外角高めに大きく外れたボールを見送った！！

「ボーール！！」

判定はもちろんボール！これでカウントはワンボールとなる……！

「ここで初めてボールを先行させたか……。相当ラッシーを警戒しているみたいだな……」

ラージキャプテンが緊張感みなぎる様子で、そのように言う。

『ラッシーが振らなかったわね……。いつもならボール球だろうと、初球からガンガン振るのに……。なんか嫌だわ……』

ラプ先輩が不安そうな表情を見せる……が！

『だけど、今日のヒートのストレートの威力を見せ付ければ……さすがのラッシーも食らいつくのは困難ね……。次はここよ！！』

ラプ先輩が構えた場所は……内角低めのゾーンだ！！

『ギリギリいっぱいのコースか……。フッ……。強気のリードを見せたなラプ……』

ヒート先輩はそのサインにうなずく。

そして、第2球目をラッシー先輩に投げた！！！

だが、ここで予想外の事態が！！

ボールがラプ先輩の構えた場所より、かなり真ん中に飛んでいく！！！

『しまった！！コントロールをミスった！！！』

ここまで１２球、完璧にコントロール出来たストレートが予想外な場所に飛んでいくことに、動揺を隠せないヒート先輩。

『ヨッシャーー！！もらったぁぁぁ！！』

カキィィーーン！！！

ラッシー先輩が自慢のフルスイングで、そのボールを打ち返す！！

「あ！！ヒート先輩！！」
「すげぇ！文句なしの当たりだ！！」
「ホームランか！？」

ベンチに座る僕やラージキャプテン、ジュジュ先輩が体を乗り出すようにして叫びだす！！

「ファール！」

しかし判定はファールだ！ポール（外野のフェンスの端にある棒）の左側でわずかに切れてしまったのだ！

「あらら！？ファールかよ！！もったいないなぁ……」

ラッシー先輩は残念そうに苦笑いだ。

『やっぱりな。甘くなったら今みたく飛ばして来やがるぜ。次はどうする？』

打球の方向を見つめていたヒート先輩が再びサインをのぞく。

『内角攻めよ！バッターの懐に投げなさい！！』

ラプ先輩はストレートを、ラッシー先輩に近い内角高めに投げるよう、ミットを構える！！

『次は何が飛んでくるか……！ヒートの性格からして、恐らく強気の内角へのストレート中心だろうな！！』

ラッシー先輩はさすがヒート先輩の親友だけあって、配球を読んでいた！！

カウント1―1から第3球目をヒート先輩が投げた！！

『いくぜラッシー！！これが俺のストレートだぁ！！』
『俺は4番だ！ヒートの球を打てないなんて笑わしてくれるぜ！！』

火を噴くストレートに……、風を斬るフルスイング！！

果たして軍配はどちらに！？

「ストライク！！」

「ぐぁぁぁぁ！当たんねぇ！？」

フルスイングで回転したあと、ラッシー先輩は黒いバットをポーンと叩く。

「内角ギリギリへのストレート……。決まればほぼバッターは打てないコースだ……。すげぇよ今日のヒート……」

ラージキャプテンが静かにそう言う。

「ん！？１４８キロ！？」

「うそ！！さっきより速いじゃん！！」

ラージキャプテンが手にしたスピードガンを見て、ベンチ組が騒ぎだす！

一体どこまでヒート先輩のスピードが上がるんだろうか！？

『これで追い込まれちまったか……。次はフォークか？それともまたストレートか？』

ラッシー先輩にとっては不利に、そしてヒート先輩にとっては有利なカウントまで持ってきた。

カウントは1―2……。

『次で決めてやるぜラッシー！！』

『そんな簡単に俺が三振するなんて思うなよヒート！！』

追い込まれた4番。追い込んだエース。

だが、ここから熱いドラマが待っているなど、誰が予測しただろうか……。

カウント1―2からヒート先輩が第4球目を投げた!!

『コースは真ん中低め!!手を出したら確実にゴロだぜ!!』

『低めのボール!!ウオォォラァァァ!!』

カシャーーン!!

打球は三塁側ベンチに飛んでいった!!

「ファール!!」

判定はファール!カウントは1―2のままだ。

「よく、あんな低めのボールに手を出すよなぁ～。見送ればボールかも知れないのに……」

ラージキャプテンがふてくされたように言う。

「何言ってるんだよ。カウントはラッシーにとって不利なんだ。際どいボールはどんどん当てにいく。これが本当だよ」

ジュジュ先輩はそのように言う。

『際どいコースに当てて来たわね。でもこっちが有利なのは変わらない……。続けて投げるわよヒート』

『あったりめぇだ！逃げるなんて俺の選択肢には存在しねぇよ！』

ラプ先輩のサインにうなずくヒート先輩。

『さっきの失投は例外として、はじめてヤツのストレートを当てることが出来た。あとは絶好球を一球で仕留めるだけ……！』

一方のラッシー先輩は、一度黒いバットを見つめながらじっとヒート先輩を見る！

さぁ次が第５球目！！

マウンド上のエースが、右バッターボックスの４番に思いきり投げた！！

『いくぜラッシー！！』
『来い！ヒート！！』

カーーン！

「！！？」
「あ……当たった！！走れぇぇピカっち！！」
「はい！」

ラッシー先輩の叫び声で二塁に走るピカっち！

一方打球はレフトの白線ギリギリに速いライナーで飛んでいく！！

マウンドのヒート先輩は打球の方向を見つめている……。

『外角低め……。当てやすいコースだったかな……。俺の負け……！？』

ヒート先輩にわずかに諦めの心が出たが、

「ファール！！」

そう。打球は白線の外側に落ちたため、判定はファールになったのだ。

「うぇ！？なんだよ！またファールかよ……」

ヨッシャーのガッツポーズの前に落胆のラッシー先輩。

「なんだぁ……。ファールかぁ……。せっかくクリーンヒット（芯で捕らえた完璧なヒット）を見られたかも知れないのに……」

ベンチで僕がガッカリしていると……。

「カゲっち。今のヒートのストレート……何キロかわかるか？」

ラージキャプテンが僕に聞く。

僕はよくわからないので、首を横に振る。

「１４７キロ……。ラッシーのヤツ、だんだんタイミングが合ってきているみたいだぜ……」

『ファールか……。命拾いしたぜ……』

マウンドでロジンバッグを手に握るヒート先輩。

『さて、次はどうする……』

ヒート先輩は次のサインをのぞきこむ。

『ストレートで良いわ。ただし次は内角高め。外角だとヒヤヒヤするから♪』

ラプ先輩は先ほど空振りを奪ったコースにミットを構えた。

『さっきのファールでもう外角には投げてこないな。だとしたら次は俺から空振りを奪った内角高めか！！……ま、嫌な印象を植え付けたことで、俺にとっては狙い球をしぼりやすくなったぜ……！』

ラッシー先輩は少しニヤリとする。

「次はどうするんだろう？見ているこっちが緊張してきますね……」

「あぁ……。ここまで5球は完全にストレート一本。6球目も続けるか注目だ……」

ベンチ組はまさに手に汗握る激しい対決に、息を飲んでいた。

ランナー一塁で、カウント1―2！！

その状況からヒート先輩が第6球目を投げた！！

『来た！内角高めへのストレート！仕留めてやるぜ！！！』

カキィーーン！

「捕らえたか！」

「ピカっち！走って！！」
「ヒート！！」

その瞬間、ベンチ組は立ち上がり、打球が飛んでいったレフト側を見る！

『クッソ！狙ってやがったか！！』
『すごいわねラッシー……』

打球はどんどん青空に吸い込まれていく……が！

「ファール！」

またファールだ。タイミングが早すぎたようで、打球は白線の外

側……さっきよりも外側に落ちた。

「クッソ～！またファールかよ！俺には神様はついていないってか？」

ラッシー先輩は悔しそうに戻っていった。

「ファールかぁ。惜しかったですね」

「でも確実にラッシーはタイミングが合ってきているようだ……。次の7球目はどうするかな……」

ラージキャプテンが腕組みをする。

『ヒート。一球外すわよ！これ以上ストライクゾーンに投げるの

は危険過ぎるわ』

『了解だ！まだカウントに余裕はあるからな！』

次の第7球目は完全にストライクゾーンから外したバッテリー。

『気持ちに余裕を持たせるために、一球外してきたか……。でもこれでカウントは2―2になったぜ……』

右バッターボックスに構えたラッシー先輩は、じっとそのボールを見送って次の作戦を考えていた。

カウントは2―2！次は第8球目！！

『ラッシーには悪いけど、次はフォークを投げてね♪』

ラプ先輩がヒート先輩にサインを送る。

『フォークか……。まぁ、ラッシーのタイミングは合っているみたいだし、しょうがねぇか……』

ヒート先輩がうなずいた。

『次は何が飛んでくる……？だいぶ俺の特大ファール２本を見たら、ストレートはありえないな。どっちみち何が飛んできても、食らいつくだけだ！！』

ラッシー先輩がトンとホームベースを叩いたあと、ギュッとバットを握った！

マウンド上のヒート先輩が振りかぶって投げた！！！

『今だわ！チャンス！！』

と、ここで一塁ランナーのピカっちが二塁に向かって走り出した！！！

「ピカっち！？」

僕は彼女の予想外の行動に思わず立ち上がってしまった！

『しまったわ！ピカっちちゃんのことをすっかり忘れていたわ！！』

ラプ先輩は自分の判断ミス、そしてピカっちの行動に多少ショックを受ける。

『これは！？フォーク！……でも低すぎる！！』

一方ラッシー先輩は飛んできたフォークに一瞬反応はしたものの、バットは振らない。

「ボーール！！」

真ん中低めに外れたフォークの判定はボール！！

だが、それだけでは終わらなかった。

「きゃ！パスボールになっちゃった！！！」

なんとあまりにボールが手前でワンバウンドしたため、ボールはラプ先輩のミットに収まらず、コロコロと転がってしまったのだ！！

「いっけぇぇぇピカっち！！！！そのまま“でんこうせっか”のように走れぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

ベンチ組のムードは最高潮に達していた！！
全員ベンチから体を乗り出し、叫ぶように、腕をグルグル回してピカっちに声援を送った！！

ちなみに“パスボール”とは、今みたくキャッチャーがボールをキャッチ出来なくて、ボールが転がることだ。

この場合、キャッチャーがランナーに近い塁に投げるか、ランナーがストップするまでプレイは続行となる。

補足だが、捕れない原因がピッチャーのコントロールミスの場合は“暴投”となるが、このときもランナーの動きも全く同じになる！！

最後に、“振り逃げ”というプレイもあるが、これは三振のあとキャッチャーがこぼした場合に、バッターが一塁に走ることをいう。この時もキャッチャーは一塁に送球、あるいはランナーにタッチしないといけない。

さて、盗塁をするため一塁から走っていたピカっちだが、ラプ先

輩がボールに追いついたときにはちょうど三塁に達していた！

『これ以上進むのはやめよう。でも、一気に三塁まで来れたわ♪♪』

ピカっちはニコニコしながら、額の汗を拭いた。

『クッ。ピカっちの盗塁作戦がラプに動揺を与えたせいで、ボールをキャッチ出来なかったか……』

ヒート先輩はじっと青空を見つめていた。

『でも……、ドンマイだ！！次は決めようぜ！！』

ヒート先輩が帽子を右にずらしたあと、元に戻した。

『ヒート……。そうよね……こんなところで動揺したってダメよね……。ありがと……』

ラプ先輩は多少涙目になりながら、ヒート先輩の動作を見ていた。

実はヒート先輩が青空を見つめていたのは、自分とラプ先輩に対する「落ち着け！」のサイン……。

……そしてあの帽子の動作は「ドンマイドンマイ！気にすんなよ！」というサインだったのだ……。

『俺とラプ……あさひポケ中学野球部で出会って……初めてバッテリーを組んだときに決めた……、初めて決めた俺たちだけの……“サイン”だった……よな？』

バッテリー……。

それは一緒になって、ただ相手チームと駆け引きをするためのコンビではない……。

この2つのポジションだけしか……2人だけしか築くことの出来ない……最高の友情が、信頼関係が……どれだけ球場に伝わるかが試されている……そんな特別なコンビなのかも知れない……。

ランナーは三塁、カウントは3―2のフルカウント……。

『さぁ、もう一度仕切り直しだ！決めるぜ！！』

『ええ！！もちろんよ！！！』

マウンド上のヒート先輩が、ラッシー先輩に第9球目を投げた！！！

『ストレート！！ウオォォラァァァァ！！！』

一方ラッシー先輩も全力でフルスイングし始めた！！！

「ストライーーク!!バッターアウト!!!!」

最後は熱く燃える渾身のストレートがラッシー先輩のバットの空を斬った!!

「ヨッシャーー!!決まったぁぁぁ!!!!」

マウンド上のヒート先輩はドン!!と強く足をたたき付け、右手を強く握りしめ、雄叫びをあげた!!!!

「さ……三振……。あんなにタイミングが合っていたラッシーに、最後は内角低めか……ん！？」

ラージキャプテンが二重の驚きを感じた。

持っていたスピードガンに表示された数字は……、

「１４９キロ……」

あさひポケ中学野球部エースのリザードン、ヒート。

彼の熱い闘志は確実に、その自慢のストレートの威力をあげていた……。

第５６話：「火を噴くストレートＶＳ風を斬るフルスイング！！～ヒート&ラプ

カゲっち：「ひゃぁぁぁ～。すごいなぁ……。これがエースＶＳ４番なんだなぁ……」

チコっち：「何感心しているのよ！ちっともあたしの出番が無いじゃない！！」

ピカっち：「チコっちちゃん……（苦笑）」

第５７話：「エースから点数を奪え！！～ヒート＆ラプバッテリーＶＳナイン

ヒート：「やっぱりピッチングは燃えるぜ！！」

ラプ：「予想以上の調子よね！このまま無失点で切り抜けなさい！！」

カゲっち：「僕も応援しています！」

ピカっち：「それでは気になる続きの第５７話プレイボール！！」

第５７話：「エースから点数を奪え！！～ヒート＆ラプバッテリーＶＳナイン」

エースＶＳ４番！
すごく迫力満点で燃えてきたよ！“カントリー・リーグ”でも、こんな場面がやって来るのかな？

「次は僕の出番だね♪頑張るぞ～♪」

そう言って登場したのは、７番打者のチック。５番打者はヒート先輩、６番打者はラプ先輩なので、一気に打順が飛んだのだ。

いつものようにニコニコ笑顔で、左バッターボックスに向かう。

『チックかぁ……。確実に来たボールを右に左に打ち返すあの技術は、嫌らしさがあるな。この状況ならなおさらだ……』

現在ランナー三塁の状態だ。

外野に大きなフライを打てば、タッチアップで失点。
内野ゴロでも、処理に時間がかかれば失点。
もちろんヒットを打たれても失点だ。

『リードも慎重にならなきゃ。まず1球目は……これよ！！』

ラプ先輩がヒート先輩にサインを送る！

『フォーク……。初球ストレートという傾向も続いていたし、そろそろ狙い打ちされると感じたか？』

ヒート先輩がゆっくりとサインにうなずいた。

「初球は何を投げるんだろう？ストレート……かな？」

僕は独り言のようにつぶやく。

「ストレートでガンガン押した方が良いかもな。フォークはキレすぎている気がするからな」

ラッシー先輩が腕組みをしながら、真剣なまなざしで答える。

『フォークがキレすぎている……？でもそれで何か問題でもあるのかな？』

僕は疑問を抱きながらも、勝負の続きを見ることにした。

『最初は何が飛んでくるのかな～？ランナー三塁だし、僕がここで打てるかどうか重要になりそうだぞ』

チックは打席の中で、ユラユラと茶色いバットを左右に揺らす。

そんなチックに対して、マウンド上のヒート先輩が第1球目を投げた！！

『あ、フォークだ！！でもこれはボールになりそうだ！！』

チックは外角へのフォークを振ることなく、じっと見送った！！

「ボーール！」

判定はチックの予想通りになった。

フォークはラプ先輩がギリギリになって受け止めるほど、低めに大きく外れたのだ。

『危なかった……。取れなくてパスボールにだけは、キャッチャーとして絶対にしたくないわ……』

ラプ先輩は一度マスクを取って、深呼吸をした。

カウントはワンボールノーストライクだ。

続く2球目に関して、またやり取りが始まった。

『次もフォークで良いわ。チックくんはタイミングを合わせるのが上手だからストレートはやめるわね』

『あぁ。ここまで速球中心だったから、ストレートは見破られそうだからな』

ラプ先輩のサインにヒート先輩が納得する。

「外角へのフォークか……。きっとストライクが欲しかったんだろうな。チックは俺やラージと違って内外野の間に落とすタイプだ

から、力任せの勝負を避けたいんだな」

ラッシー先輩がそのように状況を分析した。

「恐らくそうだろうな。カゲっちも俺もラッシーも内角への速球に空振っているから、チックもそれに気をつけていたはずだ。だからその逆をつく外角へのフォークは効果あるぜ」

ラージキャプテンもそのように話した。

『初球はフォーク……。ボールにはなったけど、よくキレているみたい……。ちょっと打つのは難しいかな……』

チックはクルッとバットを回しながら、もう一度構えた！

そんなチックに対してヒート先輩が第2球目を投げた！！

『またフォーク！！……でも……もしかして見送れば……』

チックはじっと我慢するように、そのボールを見送った！

「ボーール！」

結果はボールだ!!先ほどと同じように、外角低めに大きく外れた!

「これでカウントはツーボールノーストライクになったか……。ちょっとバッテリーに不利だな」

「ああ。フォークは投げなくても良いと思ったけど、その通りになりそうだな」

ラッシー先輩とラージキャプテンが、今の状況を分析した。

『2球続けてフォークが飛んできたか……。しかも同じコースに……。でも何だろう?キレが良すぎて見送ればボールになると言うことは、わざわざ打ちにいく必要は無いのかも……』

チックは一度タイムをかけ、バッターボックスの外側に出る。そしてそのまま素振りをした。

『フォークで空振りを誘いたかったけど、こんな簡単にボールになっちゃうなんて……。これ以上フォークを投げるのはちょっと考え物ね……』

ラプ先輩が次のサインをヒート先輩に送る。

『ストレート……。同じ外角に投げて欲しいのか……』

ヒート先輩がサインにうなずいた。

「次は何を投げるのかな？またフォークかなぁ……」

「いやフォークは投げないかもな……。ストライクが欲しかったのに、２球とも見事に外れちまったからな。慎重に攻めるラプだったら、一回ストレートを挟むんじゃないか？」

僕の質問にラッシー先輩が答える。

カウントツーボールノーストライクから、ヒート先輩が第３球目を投げた！！

『次は……うわっ速い！ストレートだ！！』

チックは突然飛んできたストレートに驚いた……が、

『……な～んてね♪えいっ♪』

突然バットを横にして、その速い球に当てた！！

コーーン！！

「！！？」
「えっ！！？」
「げっ！スクイズか！！ちっきしょう！！」

ヒート先輩が前進して、ボールをキャッチ！そのままバックホーーーーーームーーー！！！

『残念だけどあたしの勝ちね♪こういう場合は……こうよ！！！』

三塁ランナーのピカっちは打球が転がった瞬間に、持ち前のスピードでホームベースに足から突入した！！！

『ホームベースは絶対死守するわ！！』

一方のラプ先輩もヒート先輩からボールをトスされ、そのままピカっちにタッチを試みる！

タイミングはほぼ同時！！

判定はいかに！！？

「セーフ！！」

判定を聞くと、ピカっちはジャンプをして喜んだ！！

一方のラプ先輩は落胆した様子で、ユックリと定位置に戻った。

「セーフ……だと……？ピカっちの足は……スライディングは……どれだけすげぇんだよ……？」

ヒート先輩はじっと、嬉しそうな笑顔をしながらベンチに戻るピカっちの姿を見ていた。

「すげぇよピカっち！どれだけセンスあるんだよ！」
「あぁ！！ヒートから唯一のヒットを放ち、盗塁で相手を動揺させ、さらには神的な走塁でホームイン！！ここまで大活躍じゃん！！」
「さっすがピカっち！！走ることに関しては最高ね！！」
「カッコイイよピカっち！！！」

ベンチでラッシー先輩、ラージキャプテン、チコっち、僕が順々に彼女を祝福した！！

「そんなこと無いですよ～。チックくんの見事な作戦のおかげで取れた“１点”何ですから～♪♪」

ピカっちは照れながらもニコニコした表情を見せた。

『これも立派な得点……だよね兄さん？……ホームランでなくても、ヒットでなくても、得点は取れる……。逆にこのパターンが一番難しいって……よく兄さん言ってたよね？……うまく出来て良かったよ……』

チックは“ムードメーカー”のおかげで最高のムードになったベンチを見ながら、一塁ベースに立っていた。

ここまで打者5人に対して、三振3つを奪ったストレート……。

しかしピカっち、チックの2匹の“伏兵”によって、そこから1点を取れた！！

「続いて僕の出番だね？まだヒートくんから奪ったヒットはわずか1本。しょうがないね。僕がヒットの打ち方を見せてあげるよ！！」

ランナー一塁と状況は変わって、続いて8番打者のジュジュ先輩が登場した！

『次はジュジュが相手か……。失点したのは悔しいが、いつまでも引きずっているわけにも行かないぜ……』

『そうね。ジュジュにはこの前の15球勝負で敗れた悔しさが残っている……。今回は絶対に勝ちましょう！！』

マウンド上でヒート先輩が、キャッチャーボックスの中で、ラプ先輩が静かに闘志を燃やし始めた！

『負けないで下さいヒート先輩！僕はヒート先輩が泣き崩れた、あの光景はもう二度と見たくないんです！！カッコイイところ見せてください！！』

僕も右手をギュッと握りながら、真剣な表情に変わった！

それでは、まずは注目の第1球目！！

『もうフォークは投げなくても良いわ！ストレート中心で打ち取っていきましょう！』

ラプ先輩がヒート先輩にサインを送り、サッと外角低めにミットを構えた！！

『ああ！！もちろんその気でいるぜ！！』

ヒート先輩がそのサインにうなずいた！！

『ヒートくんの今日の調子、配球を考えると最初に投げるのは…ストレート！！甘いコースに飛んだら打たせてもらうよ！』

ジュジュ先輩がじっとヒート先輩を見た！！

セットポジションからヒート先輩が足を上げて、第1球目を投げた！！！

『絶対にお前だけには負けない！！この前のリベンジだ！！』

あさポケの頼れる炎のエース、ヒート先輩ＶＳあさポケのヒットマン、ジュジュ先輩！！

彼らの熱い戦いが今再び始まった！！

第５７話：「エースから点数を奪え！！～ヒート＆ラプバッテリーＶＳナイン一２～

～第５５話の後書きの続き～

投手：ヒート

〈ランナー一塁〉

４番ラッシーに投げた、決め球のフォークが外れ、パスボール……。

ランナーピカっちは一気に三塁へ……。

〈ランナー三塁〉

４番：ラッシー→空振

９球に渡る粘りも、最後の１４９キロの速球にタイミングが合わず……。

７番：チック→犠野

バッテリーを裏をつく見事なスクイズ！しかも三塁ランナーもチックもセーフに！！記録はスクイズと、フェルザーチョイス（ランナーが皆セーフになること）に！！

☆ナイン一２→１点

〈ランナー一塁〉

エースのヒートは絶好調だが、そこから見事な作戦でナイン一２が１点を獲得！！！

打たれたバッテリーは、気を落とさずに押さえ込もう！

ナイン一２はもっともっと攻め込もう！！

第５８話：「再び！ヒートＶＳジュジュ～ヒート&ラプバッテリーＶＳナイン

ヒート：「待たせて悪かったな！今回は俺と」

ジュジュ：「僕の対決だよ！！」

ラプ：「果たしてどんな展開が待っているのかしら？」

カゲっち：「注目の第５９話プレイボールだよ～！！」

第５８話：「再び！ヒートＶＳジュジュ～ヒート＆ラプバッテリーＶＳナイン」

ヒート先輩とラプ先輩のバッテリーと、チックとの絶妙な駆け引きは見ていてドキドキしちゃったよ……！

ランナー一塁の状態で登場した、８番打者のジュジュ先輩に対してヒート先輩が投げた１球目！

「ファーール！！」

打球は前には飛ばず、後ろのバックネットに直撃しただけだった。

「あんな速いボールに初球から当てるなんて……、凄すぎますよ……」

僕は驚きの表情を見せる。

「ジュジュに対してまずは内角低めにストレートを投げたか……。そんなボールを後ろに高く飛ばすってことは、ジュジュはライナーを狙っているな……」

隣に座るラッシー先輩が険しい表情を見せる。

「ライナーかぁ……あいつなりにつないで、ヒートを一気に叩こうとするのか？」

ラージキャプテンがラッシー先輩に聞く。

「まぁ、ヒートにとってさっきの1失点はシナリオ外だったろうからな。もう一回気持ちを最初にしようと、調子の良い速いストレートをアイツは投げたいんだろうが、逆にこだわり過ぎてジュジュに狙い打ちされて外野の間を破られたら、嫌な気持ちだけが残るぜ……。チックのときとは別に、今度は慎重に攻めろよ……」

ラッシー先輩がそのように答えた。

『ガンバってジュジュ先輩……。この前みたくあたしの愛の気持ちがこもったヒットで……恋を邪魔するドラゴンを倒して……／／／／』

ジュジュ先輩登場となれば、もちろん片想い心炸裂が定番か……？

チコっちの暴走が今日もここに始まりを告げた。

『初球から当てにきたか……。さっすがはジュジュ……嫌な相手だ』

ここまで２４球を投げたヒート先輩が次のサインをのぞきこむ……。

『次も内角低めへのストレート……ジュジュはなんでも打ちたがるから、とにかくゴロでアウトを取るわよ！』

キャッチャーのラプ先輩がヒート先輩に出したサインは、またもストレートだ！

『ストレートか……まぁ、ファールに出来たらツーストライクになる……。でもだからって無理して三振を狙わないようにしなきゃな……』

マウンド上のヒート先輩がフゥーと一息をつき、空を見上げた後ラプ先輩の作戦にうなずいた。

ランナー一塁にチックが構え、カウントはノーボールワンストライク……。

そこからヒート先輩が第2球目を振りかぶって投げた！！

『またストレート……！クッ！！』

コーーン！

「ファーール！！」

ジュジュ先輩はやや振り遅れるも、持ち前のミート力（ボールとタイミングを合わせる力）で、ボールを後ろに飛ばした！！

「やった！これでツーストライク！追い込みましたね！！」

僕はまだアウトにしてないのにも関わらず、うれしくなりガッツポーズを見せる！

『そんな……どうして？ジュジュ先輩がそんな簡単に負けそうになるなんて……！！あたしの愛の気持ちが届いていないの？』

ネクストバッターサークルにひかえるチコっちが、やや悲しそうな表情をみせる。

『これでツーストライク……。今日はヒートがジュジュの調子を上回っているのか……。だが、油断するなよヒート……。アイツの恐ろしさはここからだからな……』

ラッシー先輩は相変わらず厳しい表情で戦況を見つめていた。

『今日はジュジュもストレートに押されているわね……。次もストレートを投げさせようかしら？』

ラプ先輩がウインクしながら、ヒート先輩に次のサインを送る。

『ストレート……。まぁ……ジュジュはヒットも多いけど、打ちたい気持ちが裏目に出て、変なボール球にも手を出してくれそうだからな……』

ヒート先輩がそのサインをのぞきこみながら、じっとそんなことを考える。

「次は……またストレートを投げるんでしょうかね？」

僕はラッシー先輩に質問をする。

「ストレート……投げるかもな。でも何だろうな？この嫌な予感は……」

「嫌な……予感？」

ラッシー先輩のその不可解な言葉に、僕はただただ首を傾げるばかりだった。

『ヒートくんはきっと僕が振り遅れているのを見て、追い込んでいると感じているだろう……。でも……本当は違うんだよ？僕は君に絶対勝てる自信があるんだ。それをじっくり見せてあげるよ』

ジュジュ先輩は、誰にも分からないくらい、静かに笑う。

さぁ、カウントノーツーから……ヒート先輩が第3球目を投げた！！！

『やっぱり……ストレートで来たね！！！打ち返してあげる！！』

ジュジュ先輩がヒート先輩自慢のストレートをバットで振った！！

カキーーン！！

「あ！！」
「クッソ……！」
「良い当たりだぞ！！」
「さすがあたしの王子様！！」

打球が飛んでいった瞬間、ベンチ組とチコっち、それからグラウンドにいたみんなが騒ぎ出す！！

打球は三塁の白線上を通過する強烈なライナーだ！！

サードが飛びついたが、キャッチは出来なかった！！

「リベンジどころか、返り討ちか……ん！！？」

ラージキャプテンが残念そうにつぶやいたが次の瞬間、突然指を指しはじめた！！！

「ファール！」

今日は何度良い当たりがファールになることだろうか？

打球は確かにサードはキャッチ出来なかったが、レフト前に落ちる手前でわずかに白線の外側に落ちた。

「あっぶねぇ……。また命拾いしやがったぜヒート……」

ラージキャプテンがほっとした表情を見せる。

「本当ですね……。最初の2球は振り遅れていたのに、3球目であんな良い当たりを打つなんて……」

僕は一瞬ヒート先輩が負けたと思い、頭の中が真っ白になりかけたが、ファールの判定でもう一度気持ちを元に戻した。

「俺の嫌な予感……95%的中しちまったか……。ジュジュはやっぱりヒートに自信を無くさせようとしてやがる……」「!?」

ラッシー先輩の言葉に僕は驚きを隠せなかった。

「じ……自信を無くさせようと……?どうしてそんなことを感じるんですか?」

僕はラッシー先輩に質問をした。

「ジュジュのヤツめ……。あえて相手ピッチャーの一番自信があるボールを打ち砕こうとしているんだ。俺やラージみたくでっけぇホームランを打つこともなく、強烈なライナーを飛ばしてな……」

「一番自信のあるボール……!!」

ラッシー先輩の言葉によって、僕の中のある記憶が思い出された……。

数日前にオレンジ色の空の下、ホームベース横で歓喜に沸くジュジュ先輩と、マウンドで崩れたヒート先輩の姿が……。

『……そういえばあのときもジュジュ先輩が打った最後のボールは……、ヒート先輩が強い闘志をぶつけたフォークだった……。それも技の効果を込めた“一番自信のあるボール”……』

僕はなぜか小刻みに震え出す。

それが怒りなのか、それともショックなのかは全く分からなかったが……、とにかく小刻みに震えていた……。

「ピッチャーにとってとてつもなく悔しいのは、相手にヒットを打たれることでも、ホームランを打たれることでもねぇんだ……。絶対に決めなきゃならない……自分の中で一番自信のあるボールを打たれたときなんだ」

ラッシー先輩はじっとマウンドのヒート先輩の姿を見つめながら、強い口調で話す。

「ジュジュのことだ。相手の自信を奪うことで、精神的ダメージを与えようとしているに違いない。そうすることで、次に同じように対戦したときに、優位に立とうとしているんだろうな」

ラッシー先輩がそのように話した。

『悪いねヒートくん。僕はあさポケ一の“アベレージヒッター”として君に負けるわけにはいかないんだ。君はそのストレートに自信があるんだろう？ならば完璧に打ち返したらどんな気持ちになるか、味わってみると良いよ。“敗北”と言う名の、とても苦い味をね』

ジュジュ先輩はニヤリと笑う。

『ク……！ファールとはいえ、当たりは完璧だった。これはストレートを狙われているのか？』

ヒート先輩がロジンバッグを握りながら、困惑する。

『困ったわね。甘いコースでもないのに、完璧な当たりを打たれたわ……。これじゃ次にストレートは投げにくいわね……。だからといって……』

ラプ先輩が下を向く。次のサインを決めかねているのだ。

『フォーク……。これもなかなか思うところに決まらないから、出来れば投げさせたくない……』

「なかなか次のボールを投げませんね。カウントは圧倒的にバッテリーに優位なはずなのに……」

あまりにもサインが決まらないため、ジュジュ先輩はいったんタイムをかけて、バッターボックスの外側で素振りを始めた。

マウンドでラプ先輩とヒート先輩が話しはじめる。

「次は意図的に一球外したほうが良いんじゃない？焦ってアウト

を取りに行くと、ジュジュの思うつぼだわ」
「カウントはノーボールツーストライクだからな。でも、アイツは俺のボールを研究しているような気がするんだ。初球と2球目のボールを振り遅れたのに、3球目に同じ球種であの当たりを飛ばした……。だから、アイツの場合ボールを見せれば見せるほど、ヒットを打つかも知れない……」

ヒート先輩はいつになく慎重な姿勢を見せる。

きっと以前の15球勝負で敗れたことで、ジュジュ先輩への攻め方をかなり考えているのだろう。

「それじゃあ何？次は何を投げるつもりなのよ？」

ラプ先輩はいらだちを見せはじめる。

「あんたの頼れそうなボールは、今日はハッキリ言ってストレートしかないわ！フォークは全部外れているじゃないの！！」
「でもそれしかこの場合投げることは出来ねぇよ。それにそのフォークだってまだ全然投げてねぇんだ。だからそいつに賭けてみようぜ！」

何とも苦しい選択だった。

絶好調のストレート中心の投球から、イチかバチかのフォーク中心への投球に変えることが、今ここに決まった。

ランナーは一塁、カウントノーストライクツーボールという状況から、プレイが再開された!!

そしてマウンドのヒート先輩が、セットポジションから第４球目を投げた!!

『頼みの綱はこれしかない!!決まってくれ!!』

『どんなボールだろうと、僕には関係ない!絶対に打ち返してあげるよ!!』

果たして、軍配はどっちにあがるのだろうか!?

「ボーール!!」

やはりコントロールが効かないのか、フォークは外角に大きく外れてしまった。

「クッ！やっぱり決まらなかったか！！」

悔しがるヒート先輩。判定を聞いた後、マウンドの土を蹴飛ばした！！

「ここでフォーク……。でも今日のヒート先輩のフォークは全然良いところに決まらないなぁ……」

一塁ランナーのチックがヘルメットを取って、つぶやく。

「さすがはジュジュ先輩……。誰も倒せないドラゴンを愛のパワーで苦しめているわ……。そのまま勝って……／／／／」

チコっちはどんどん顔が真っ赤になっていく。

今の彼女にとっては愛しのジュジュ先輩の活躍が、そのまま自分の片想いパワーのおかげだとしか考えていないに違いない。

ただ……、ジュジュ先輩本人にとって、これほど迷惑な話は無いと思うのは僕だけなのだろうか？

ちょっとだけ不安だ……。

『フォーク……やっぱり決まらないわね……。でもまだ1―2……。十分余裕があると考えなきゃ……』

ラプ先輩はジェスチャーで長方形を描く。

“ストライクゾーンはこれだけ広いよ！”とアピールしているのだ。

さぁ、カウントは1―2！

そこからヒート先輩が振りかぶって第5球目を投げた！！

『次こそは……頼む！決まってくれ！！』
『君のフォークは今日は脅威じゃない！残念だね！！』

優位な立場なのに苦しいヒート先輩。

不利な立場なのに余裕のジュジュ先輩。

その対決の結果はいかに！？

カキーーン！！

その快音とともに、無情にも打球は左中間に大きく飛んでいく…

…。

ガッツポーズのジュジュ先輩。

チコっちは頭の葉っぱをグルグル回して大喜びだ！！

だが、その一方で白球の行方をただただ見送るしかできないヒート先輩がいる。

そしてラプ先輩は、もう下しか向いていない。

カシャーン！

大きな当たりは誰のグローブにも収まることなく、そのままフェンスに直撃した！！

一塁ランナーのチックは一気に三塁へ！！

打ったジュジュ先輩は二塁でストップした！！

『……ヒート……。また負けたか……。コントロールの効かないフォークを決めようとするあまり、力んで真ん中に飛んでしまったようだな……』

ラッシー先輩は唇を噛み締めて、親友の敗れた姿を見つめていた。

「ヒートくん。これが僕の実力さ！一度勝った相手には二度と負けない。勝つ気持ちが強いからこそ出来るんだ」

二塁ベースのジュジュ先輩は有頂天な様子で、ヒート先輩に勝利宣言を突き付けた！！

『ハハハ……、また俺の負けか……。最初は三振を奪って意地を見せつけていたと思ったのに、結局はこの有様なのかよ……！これで、よく“エース”だなんて言えたもんだな！』

振り返れば、１番の僕は三振、２番のピカっちも結果的に内野安打だったが、ほぼ打ち取ったような当たりだった。

続く３番のラージキャプテン、４番のラッシー先輩のダブルパワーヒッターも連続して三振と、練習開始直後は素晴らしい投球内容

だった。

だがその一方で、ラッシー先輩との対決のときにフォークが決まらず、パスボールで進塁を許したり、7番チックのときのスクイズなど、ヒットを打たれずにランナーを進めて得点を許すなど、後で考えるとあまりにもったいないプレーも見られた。

『やっぱりポイントは絶好調のストレートに対して、コントロールが定まらないフォーク……。あのパスボールも、チックに対してのフォークも決まっていれば、こんな優位なのに苦しい展開となることも無かったのになぁ……』

ヒート先輩は下を向き、フゥーーとため息をついた。

『だけど悔しいぜ……。有利なカウントから崩れるなんて……。今日はエースのプライドに賭けて、何がなんでも勝たなきゃならなかったのに……クッソ！！」

ヒート先輩は外野から戻ってきたボールを受け取ると、悔しさのせいか下をむいたままじっとしていた。

『……あのパスボールからなんだか調子が乱れてしまった……。

あのパスボールでヒートを苦しめていたのかも知れないわ……』

ラプ先輩はマスクを外し深呼吸をするが、悔しさのあまり何度も涙がこぼれそうになった。

『あのパスボールさえ無ければ、ピカっちちゃんの盗塁だけで済んで、ランナー二塁の状態でチックくんを迎えたのに……。それだけでその後のシナリオも大きく変わったかも知れないのに……』

ラプ先輩は自らを責め立てる。

「ヒート先輩……。また打たれちゃった……。この前の負け方も悔しいけど、今回は絶対に有利だったから、もっと悔しいかも知れないですよね……」

僕はベンチの中で立ち上がり、マウンドを見つめる。

「カゲっち。どうしてさっき俺が、ジュジュの考えを９５％的中だと言ったと思う？」

ラッシー先輩が僕に聞く。

僕は首を横に振った。

「俺はジュジュの考えのうち、多分９５％はさっきも言ったように、アイツがヒートに自信を失わせるのが目的だと思ったのだが、残りの５％はおそらくヒートから、ヒットを奪わなければならないと感じていたからだと思うんだ」

「ヒート先輩からヒットを奪う……？それは、ジュジュ先輩が何としても勝ちたいと感じていたからなんですか？」

僕はラッシー先輩の言葉に疑問をぶつける。

……すると、

「それもあるかも知れないが、考えてみろ？ジュジュがバッターボックスに入るまで、外野までに鋭く飛ばしたヤツがいたか？」

ラッシー先輩がまた質問をする。

「いませんね……。だってヒットは１本……、それもボテボテの内野ゴロが、ピカっちの俊足によって生まれたヒットでしたからね。もしヒート先輩のフォークがちゃんと決まっていれば、練習終了まで外野まで飛ばすことは至難の技だったかも知れませんよ……」

僕はラッシー先輩の質問にそのように答えた。

「だろ？いくら練習だからってこのまま打撃陣がそれだけに終わっていたら、カントリー・リーグで他校のピッチャーを打てるか不安にならないか？ここでジュジュがかっ飛ばしたおかげで、打撃陣にハッパをかけたのかもな」

ラッシー先輩が真剣な表情で話した。

ジュジュ先輩のクリーンヒット（完璧な当たり）の衝撃が収まらない中、にぎやか……というよりは、騒がしいバッターが登場した。

……それは、

「ここでジュジュ先輩に続けば、あたしの想いは届くはず！！“チコっち劇場”がまた始まるわよ～～！！」

左バッターボックスに9番打者のチコっちが登場した。

……それも例のごとく、ジュジュ先輩への愛のパワーがどうのこうのとか騒いで……。

『ハァ～……。なんだか展開が激しいや……。激しく熱く燃えたり、ややシリアス的な展開だったり……、今度はコメディー的なの……？』

僕、ピカっち、ラージキャプテン、ラッシー先輩のベンチ組を包んでいた重たい空気が一変、今度はみんなの目が点点点点になってしまった。

ラプ先輩も苦笑い、ヒート先輩にいたっては口を開いてボールを持っている。

「だからぁぁぁ！！！どうしてあたしのときだけこんなに静まりかえっているのよ！！！！」

世界の中心で……いや、野球場の中心で彼女の叫び声が響き渡る。

なんだかすごく不安でしょうがないけど……！

次回、いよいよ投球練習がラストを迎える！！

第５８話：「再び！ヒートＶＳジュジュ～ヒート＆ラプバッテリーＶＳナイン」

カゲっち：「……ヒート先輩……、負けちゃった……」

チック：「これが野球の恐さなんだ。たった１球で運命が大きく変わる……。残念だけど今回もジュジュ先輩の方が上だったね……」

チコっち：「何しょげているのよ！次回はあたしの出番よ～！しっかり注目しなさいよ！！」

第５９話：「それぞれの決意～ヒート&ラプバッテリーＶＳナイン－２編？～」

ヒート：「いよいよ今回で投球練習編が終わるぜ！」

カゲっち：「打撃、守備、走塁、投球……。野球の知識紹介も一通りだね！」

作者：「うん。ここまでわかりにくい説明に目を通していただいた、すべての読者のみなさんには本当に感謝です！」

チコっち：「それじゃあ元気よくいくわよ～！！」

ナイン：『第５９話プレイボール！！』

第５９話：「それぞれの決意～ヒート&ラプバッテリーＶＳナイン－２編？～」

因縁の対決はヒート先輩の負け……。
でも、ここで悔しんでいたら前に進めないんだ！だからもう一回立ち上がってヒート先輩！

先ほどのジュジュ先輩のヒットによって、ランナーは二、三塁という状況へと変化した。

ここで迎えるバッターは、あさポケ一“意外性”を秘めた９番打者のチコっちだ！

『いつまでも打たれたことを引きずっているわけにはいかねぇ！！目の前のバッター一人一人を打ち取ることだけを目指そう！！』

思えばチックにスクイズを決められてから、立て続けに出塁を許しているヒート先輩。

このチコっちを打ち取り、何としても投球練習を良い状態で終了したいものだ！

『最初は……外角へのストレート……。空振りを誘うのか……』

キャッチャーのラプ先輩のサインを受け取り、大きく頷くヒート先輩。

『いくぜ！！俺の意地を見せてやる！！』

『ピカっちにも打てたのよ！あたしだってジュジュ先輩からのパワーで、打ち返して見せるわ！！』

マウンドのヒート先輩が、セットポジションからチコっちに対して1球目を……投げた！！

『は……速すぎるわ！！』

チコっちはラプ先輩にボールが届くまで、そのボールを見送ることしか出来なかった。

「ストライク！！」

審判役のキュウコン監督の声が響く。

「なによ～！こんなのどうやって打てば良いのよ～！！」

チコっちがギャーギャー騒ぎだす。

「やっぱり今日のヒート先輩はストレートがものすごく速いや……。むやみにフォークなんて投げなくても良かったのかな……」

僕は残念そうにつぶやく。

「でもチコっちは、どこでどんなことをするかわからないバッターだからな。油断していると痛い目に遭うぜ」

ラージキャプテンが腕組みをしながら話す。

『とりあえずストライクを取れた。この調子でアウトを奪うぜ』

ヒート先輩は次のサインをのぞきこむ。

『次は内角高めに投げなさい。ここなら確実に空振りを奪えるわよ！』

ラプ先輩がサインを送り出す。

『1球見たからもう打てるわ！あたしだって負けるわけにはいかないんだから！！』

チコっちはキッと真剣な表情に変わった！

カウントはノーボールワンストライク！！

そこからヒート先輩が第2球目を投げた！！

『きゃっ！すごく速い……！』

チコっちはあまりの速さに驚いてしまい、目をつぶりながらバットを振ってしまった！！！

「ストライク！！」

判定ももちろん空振りだ！

チコっちは簡単に追い込まれてしまった！！

「チコっちちゃ～ん！落ち着いて！気持ちで負けちゃダメよ！！」

ベンチでピカっちが応援する。

「わ……わかっているわよ……！でもあんなの打てるわけ無いじゃない！」

チコっちは小声ながら、文句を言う。

「チコっち！ここで負けちゃったら、“チコっち劇場”があっという間に終わるぜ？それで納得出来るのか？」

と、ここでラッシー先輩がチコっちに言ってはならない言葉を口にした。

「え？“チコっち劇場”が終わってしまうなんて……ダメよそんなこと！！ここまでずっと出番が無かったんだから！そんなあっけ

なく三振なんてしたくないわ！！」

なぜだろう？チコっちに妙なオーラを感じてしまうのは……？

「“チコっち劇場”はここから本番なんだから！！」

どう考えても、本番って感じがしない気がする。

「その心意気だぜ！おまえの“チコっち劇場”、たっぷり見せてやれ！！」

ラッシー先輩が燃え上がるようにチコっちに話した！

『そうよ！あたしの“チコっち劇場”はまだまだこれからなんだから！みんな……じっくり見てなさい……！』

チコっちは変な意味で燃えてきた。

最初からそんな風にバッターボックスに入れば良かったのに……。

何はともあれ、カウントはノーツー。ヒート先輩にとっては絶対的有利な条件だ。

『この1球で終わらせてやる！！』

マウンドのヒート先輩が、足をあげてチコっちに第3球目を投げた！！

『ま……また速いストレート！！？ダメ……振り遅れる！』

チコっちは思いきったスイングを見せるも、バットに当たらない！！

「ストライク！バッターアウト！！ゲームセット！！！」

審判役のキュウコン監督のコールが響き渡る！！

「よっしゃ……。何とか最後は三振で終わったぜ……！」

ヒート先輩はニヤリと笑いながら、マウンドを降りた。

「もう～～～！！何よ何よ何よ～～～！？どうしてあたしだけこんなあっけなく終了なのよ！！これじゃ今まで待っていた意味が無いじゃな～～い！！」

左バッターボックスではチコっちが“あばれる”……。

……が！

「残念だったねチコっちちゃん。でも君のスイングは、カゲっちくんやピカっちちゃんのように軽くじゃなくて、迷いなく振っているから今度は打てるよ。だから元気出して」

「は……はい！が……がんばります！！」

二塁ランナーだったジュジュ先輩の一言で一転、急におとなしくなったのだ。

「あ～ぁ。結局ホームベースにたどり着いたのはピカっちだけかぁ～。これからもっと面白くなると思ったのに～」

一方三塁ランナーだったチックはそんな風につぶやきながら、ベンチに戻っていった。

『今日のヒートは打者7匹に対して、球数３１球で三振が４つ。

そして被安打（打たれたヒット数）は2……。失点1だったわね……。今日は良いところもたくさんあったけど、課題点も見つかった。良い練習だったわ……』

ラプ先輩はやれやれといった表情を見せて、ベンチに戻ってきた。

「まずヒートだが、投球練習よく頑張っていたな。力強いストレートには私も好感を持てたぞ」

しばらくして、キュウコン監督がヒート先輩に話し始める。

「だがその一方で、ピンチを迎えてからは急に調子を乱してしまったな。これはおまえのこれからの課題点だな」

「はい！」

ヒート先輩はキュウコン監督の言葉に力強く返事をした。

「さて……話は変わるが、明日からはいよいよ特別合宿だな。今回の合宿の目的は、何度も伝えたように“カントリー・リーグ”で勝つために必要な君たちのポケモンとしての技を磨くことだ。普段の部活ではその機会がなかなか無いから、一人一人しっかりと目標を持って合宿に望むんだぞ！！」

キュウコン監督はホームベースに集まった、僕たちナインにそのように語った。

「そっかぁ～！明日からはいよいよ特別合宿かぁ！！どんなことが待っているか楽しみだぜ！！」

ラッシー先輩は文字通りハイテンションとなる。

『ポケモンバトル……。僕にとってはあまり触れたく無い分野だけど、いつまでも逃げるわけにはいかない……。だって誕生日に見たあの夢の中で、確かに約束したんだ。もう一度楽しくバトルをするんだ！って……。例え過酷なことが待っていたって構わない。絶対に乗り越えて見せるんだ！』

僕は強い気持ちを持って合宿に望むことを決意した。

「とりあえず、私からは以上だ。ここからは自主練習の時間にする」

『ハイ！！』

こうして打撃練習に始まり、守備・走塁練習を経て投球練習で終えた、僕にとってあさひポケ中学野球部の最初の１週間が終わろう

としていた。

それから約2時間後、すっかり暗くなるまでじっくりと練習を続けた僕たちは、明日からの準備に備えるために帰宅することにした。

「明日からいよいよ特別合宿ね♪一体どんな先輩たちがいるのかしら？」

僕たち仲良し4匹組は、おなじみのようにおしゃべりをしながら歩いていた。

「今回の合宿って僕たちがよく知っている場所だって監督が言っていたよね？えっと……」

僕は場所がどこだったかを一瞬迷ってしまう。

「ポケハン学園バトル部でしょ～！監督から資料をもらったばか

りじゃない！！」

チコっちが「もう！」というような表情で僕に言う。

「あ、そうだったね！資料にも書いてあったけど、ポケハン学園って僕たちと同じようなポケモンと、誰も見たことがない異世界のモンスターが通う高校なんだね！」

「誰も見たことがないモンスターかぁ……。一体どんなモンスターなのかなぁ？社会科で一度学んだことがあったけど、実際に会えるなんて楽しみだね♪」

僕の言葉にチックがニコニコ笑顔で答える。

「でも一番驚いちゃったのは、バトル部の部長がリザードンだってことだよ！きっとすごくカッコイイんだろうなぁ～」

「名前は確か……“ラッシュ”だったわね。きっとポケモンバトルも強いんだと思うわ」

目をキラキラさせる僕に対して、ピカっちがそのように言う。

「とにかく明日からがすごく楽しみね♪早く明日にならないかしら？」

チコっちも顔をニコニコさせながら話していた。

「そうだね♪たっくさん練習して“カントリー・リーグ”で勝てるように頑張ろうね！！」

チックの言葉に僕らは大きくうなずいた。

今より強くなる……。

そう誓いながら……。

同じ頃、学校のグラウンドではまだ2匹の生徒が残っていた。

バシーーン！！

バシーーン！！

ブルペンからは、ボールがグローブに収まるときの音が聞こえてくる。

「ナイスボールだぜ、ヒート！！なんでジュジュとの対決の時にこのボールを投げなかったんだ？」

「アイツには借りがあったからな。勝ってそれを返したからだ」

投げていたのはヒート先輩。そしてその速球を受けていたのは、親友のラッシー先輩だった。

「負けず嫌いで守りに入らず、常に攻撃をする……。ヒートらしいぜ。バトルのときもそのスタイルを常に貫いていたよな」

「止めてくれよ。俺がバトルで強かったのは、ほんの一瞬だったんだから。今じゃ誰にも勝てないんだからよ」

ヒート先輩が苦笑いする。

「あぁ……、あの時は俺とヒートのコンビは、あさひタウン……いや、カントリーで知らないヤツがいないほど、最強コンビだったからなぁ……。今じゃどうしてか勝てないよなぁ……」

ラッシー先輩が、もうすっかり暗くなった空に向かってボールを投げる。

「そうだな……。不思議だよな……。ちっとも勝てやしねぇ……バトルでも……野球でも……！」

ヒート先輩が怒りを込めるように、マウンドの土を蹴る。

「俺さ。カゲっちを見ていたらさ。昔のヒートに似ているって思うときがあるんだよな。どんなときでも後ろを見ないで、ガムシャラに突き進むあの姿がさ……」

「じゃないと言わないよな？カゲっちのバトルに対するトラウマを乗り越えるために、なんでも力になるなんて」

ヒート先輩が穏やかな表情で返事をした。

「明日からは合宿……。俺たちあさひポケ中学野球部が変われるかも知れないな……。頑張ろうぜラッシー！！」

「あったりめぇ～だ！！ヒート！！」

２匹の熱いほのおタイプのポケモンは、互いに強く約束した。

「さってと……そろそろ帰るかラッシー……ん？」

ヒート先輩が自分のバッグを取りに行こうと、ベンチに戻ろうと

した……その時だった。

「久しぶりだけど、ちょっくら投げてみようかなぁ～♪“火炎スライダー・ラッシー”として投げていた頃みたく！」

「ラッシー……」

なんと、普段はフルスイングで４番に君臨するラッシー先輩が、マウンドに上がったのだ。

「ひょえ～。やっぱりここが一番野球やっているって感じがするな！わりぃヒート！ちょっと受けてくれよ！ウズウズしちまうぜ！！」

ラッシー先輩が待ちきれない様子でヒート先輩を誘う。

「……。あぁ！良いぜ！思う存分投げな！！」

ヒート先輩が急きょキャッチャーボックスに座る。

「行っくぜ～！マウンド上ラッシーが注目の第１球目を投げた！！！」

ラッシー先輩がいつものようなハイテンションで、足をあげる！！

そして思い切りボールを投げた！

バシーーン！

気持ちがスカッとするような音が響く！

「へぇ～。良いボール投げるなぁ。１４３キロだってよ！」

「ヒートに比べたら若干遅いけど、それでも2年のブランクは感じないわね」

「リーグのときも貴重なピッチャーになれるんじゃない？」

「お……おまえら……」

ラッシー先輩が驚きの声を出す。

無理も無い。そこにいたのは、先に帰ったはずの、ラージキャプテン、ラプ先輩、ジュジュ先輩だったのだから。

「あんたたちだけな～にカッコつけているのよ？この合宿に賭ける意気込みはあたしも変わらないわよ？」

「バトルの技術を磨きたいし、それに今年のリーグはもう半端な気持ちでは望めるようには思えないしな」

「悔しい気持ちも、感動を味わうのもいつも一緒……でしょ？」

どうやら彼女たちはヒート先輩たちの様子を見ていたようだ。

「それよりもラッシーの投げる姿って見たことなかったな。小学生の頃以来なんだろ？」

ラージキャプテンが興味深そうに言う。

「まぁな。外野を始めたのは俺が投げることよりも、打つことが好きだったからな。外野なら俺の種族の特徴の俊足も活かせるし、この肩力も活かせるからな」

ラッシー先輩がクルクル右腕を回す。

「火炎スライダー……だっけ？ちょっと投げてくれよ？」

ジュジュ先輩が言う。

「良いぜ！ちゃんと見てろよ！ピッチャーのラッシーが第２球目を投げました！！」

そう言いながら、ラッシー先輩は自慢のスライダーを投げた！！

パスン！！

「すげぇ……。あのコースはバッターから見ると、まず打てない内角ギリギリのボールじゃん。外角ギリギリからそんなに変化するのかよ……」

「練習すれば、頼れる戦力ね。うちには今のところヒートしかピッチャーがいないから、彼の負担を軽減出来るわ」

「スリークォーターってのが良いね。ヒートくんとフォームが違うのは相手に嫌な印象を与えるよ」

ラージキャプテン、ラプ先輩、ジュジュ先輩がそれぞれ驚きをみせる。

「そうか？だったら本格的に練習しようかなぁ～？」

ラッシー先輩はますますテンションを高くなっていった。

その様子を見て、他の４匹の先輩は笑い始めた。

「ハハハ……。でも明日からはいよいよ合宿か……。何だか燃えてきたぜ！！」

「えぇ！色んな技術を吸収して“カントリー・リーグ”で勝てる

ように頑張ろうね♪」

こうして5匹の先輩たちはガッチリと約束したのだった……。

『いよいよ明日からは特別合宿だ。どんなことが待っているか、ドキドキするなぁ……』

みんなと別れた後、自分の家に戻った僕。

忘れ物が無いかキッチリと確認した後、いつもより若干早めに眠ることにした。

だが不思議なもので、なにか大きなイベントの前の夜というのはなかなか眠れないものなのだ。

正直僕もベッドに寝転がってから、大分時間が経過していた。

『でも今までみたいにがんばれば、きっと良いことが待っているはず……。どんなことがあっても負けないぞ……』

明日からの意気込みを考えたあと、ようやく、夢の中に入っていった……。

いよいよ始まる特別合宿！

僕らあさポケナインに、一体どんな運命が待っているのだろうか！？

第５９話：「それぞれの決意～ヒート&ラプバッテリーＶＳナイン－２編？～」

カゲっち：「次回からは待ちに待ったコラボだね！」

作者：「フォック先生の“限界バトル！！ポケハン学園バトル部”のね。企画してから約半年経ってしまって……読者のみなさん、それからフォック先生や、協力していただく多くの先生にはご迷惑をおかけしました！（泣）」

カゲっち：「待たせた分、みんなが納得出来るような内容にしてね？」

作者：「はい！すでにフォック先生の“バトル部”で描かれたこの超大型コラボ！！本作ではカゲっちたち、あさポケナインの視点でお届けします！！」

ナイン：『お楽しみに！！』

第６０話：「ついに来た！！ポケハン学園バトル部！！」の巻（前書き）

カゲっち：「ついにこの時が来たね！！」

作者：「うん。フォック先生やたくさんの先生の協力には本当に感謝の気持ちでいっぱいだよ」

カゲっち：「半年かかったもんね～」

作者：「ここでちょっとだけお知らせです。実はこの特別合宿編は、すでにフォック先生の“限界バトル！！ポケハン学園バトル部”で描かれていますが、本作でお届けするのに少しばかり変更点があります。本当に申し訳ございませんが、ご理解の方をよろしくお願いします」

カゲっち：「例えば、僕はバトル部視点ではすでにバトル部のメンバーを知っている設定になっているけど、この小説では全くの初対面という設定なんだ！」

作者：「このような注意点はその都度お伝えしますので、よろしくお願いします」

ピカっち：「それでは準備良いかしら？」

ナイン：『もちろんだよ！！』

カゲっち：「注目の第６０話プレイボール！！」

第６０話：「ついに来た！！ポケハン学園バトル部！！」の巻

そして迎えた合宿当日……。

朝日はいつもと変わらず今日も僕らの住む町、あさひタウンを包んでいた。

そんな空の下、僕たちあさひポケ中学の野球部のメンバーが、次々に学校のグラウンドに集まっていた。

「よし、全員揃ったな。それでは合宿に出発する前に、私から一言話させてくれ」

そう言うと、キュウコン監督は話を始めた。

「今回合宿を行うポケハン学園がある場所は、実は私たちの住む“ポケモンカントリー”とは全く別の世界に存在している。この事は、昨日配布した資料にもしっかりと載せておいたな」

ナイン全員がうなずく。

「よし、みんなしっかりと資料に目を通しているみたいだな。偉

いぞ」

キュウコン監督がナインを褒める。
そして話の続きを始めた。

「それで私が何を言いたいかというと、全く別の世界ということは、時間の流れ方も異なるということなんだ」

キュウコン監督の説明を簡単にまとめると、こういうことだ。

僕らが向こうの世界で過ごした時間と、その間にこちらの世界で住む人たちが過ごした時間は、例え同じ時間だったとしても、決して一緒になることは一切無いということだ。

こんな説明を聞くと頭が痛くなりそうだが、理由として考えられるのは向こうの世界が存在する星と、こちらの世界が存在する星の自転速度（その星が自ら一回転するのにかかる時間。この時間がその星の一日とされる）が違うためだと言うのだ。

『人間界で言うところの地球（一日は２４時間）と、木星（一日は１０時間）の一日が全く違うのと同じ理屈ってことなのかもね』

だが、そのことを利用すればどちらか一方の時間で１週間過ごし

ても、もう一方の時間では2日くらいしか時間が変わっていない…、なんてことも出来ると言うのだ。

先ほどの人間界の例では、木星の時間で5日過ごしたとしても、地球の時間では2日と2時間しか経っていないことと同じ理屈だ。

「つまり自分達の世界の星より、自転速度が速い世界の星で自分達を強化することによって、その後の“カントリー・リーグ”に向けての数少ない練習時間を削るリスクを防ぐことになる……。ということなんだ」

ちなみに今回合宿を行うポケハン学園がある世界の星も、僕らの住む世界の星より自転速度が速い星だという。

「と、難しい話はこれで終わるとするか。いよいよ合宿を行うポケハン学園に向かうとするぞ」

キュウコン監督が話を終えたそのときのことだった。

ビュゥゥゥーーーン……。ビュゥゥゥーーーン……。

『！！？』

突然、僕たちナインの目の前の景色が黒くなったと思うと、不気味な音を発しながら砕けていくではないか！

「フフッ……ちょうどよかった。どうやら向こうの世界と、こちらの世界をつなぐための“ワープゾーン”が完成したようだな。この日のために、私たちの校長であるフーディン校長が、技のエネルギーを駆使して作り出したのだ」

キュウコン監督によると、自分たちの住む世界の星と別の異世界の星に向かうためにはこうした“ワープゾーン”が必要になると言うのだ。

ちなみに、フーディン校長は今回のみならず、他の部活動の合宿の際にもこうした“ワープゾーン”を作るという。

『しかし校長は、今回は自分一人の力では、これを創りだすのは不可能だったとおっしゃられていた……。ポケハン学園がある世界につなげるために予想以上のエネルギーが必要だったようだ。それでもあちらの世界の方々の協力で、無事あちらの世界の“ワープゲート”につなぐことが出来たとおっしゃっていた……。本当に彼らには感謝しきれない思いでいっぱいだな……』

目の前に出来た“ワープゾーン”が完成するまでの過程を知っているキュウコン監督は、ふとそんなことを考えていた。

「さてと、いよいよ特別合宿に出発するぞ。みんな私の後について来るんだ。それと、忘れ物だけはしないように気をつけるように」

『はい！』

キュウコン監督は一通り話した後、“ワープゾーン”の中に姿を消していった。

「いよいよだな……。どんなことが俺たちに待っているんだろうな……」

続いてヒート先輩も姿を消していく。

同じようにラッシー先輩、ラージキャプテン、ラプ先輩、チック、チコっちも次々と“ワープゾーン”に突入していく。

「さぁ……、僕たちもいこうか……」

僕は、自分の体より何倍も大きい“ワープゾーン”の入り口を前に多少の恐怖感を抱くも、ピカっちに話しかけた。

……すると、

「カゲっちくん……？手……つないでも良い……？」

「え……？」

ピカっちが不安そうな顔で僕にそのように話しかける。

どうやら彼女もかなり恐ろしい気持ちを抱いているようだ。

「ダメ……だよね……？恐いのはカゲっちくんだって……みんなだって同じだもんね……。ゴメンね、変なこと……あっ！？」

彼女は気持ちを話すのを止めざるをえなかった。

なぜなら……、

「もちろんいいよ。だってピカっちは僕にとって……いっちばん好きな人だから……」

「カゲっちくん……」

僕が優しい笑顔を見せ、そして彼女のその小さな願いを叶えてあげることができたからだ。

「さぁ、本当に行こうか！先輩たちに遅れないように！」

「うん！！」

こうして、僕らも“ワープゾーン”の中に姿を消したのであった……。

「わ～～～。ここが……、ここがポケハン学園なんだ……。すごく大きそうな学校ですね」

「あぁ。何せここは俺たちのようなポケモンや、誰も見たことが無い異世界のモンスターがともに通うらしいからな」

場所は変わり、ここはポケハン学園正門前だ。

僕やヒート先輩はじめ、ナイン全体がその風景に驚くも、ワクワ

クしたような表情を見せていた。

と、そこへ……

「ようこそ、あさひポケ中学野球部のみなさん。このポケハン学園によくいらっしゃいました」

誰かが優しく僕たちナインに話しかけてきた。

「あなたは……ゼウス学園長ではありませんか！この度は私たちあさひポケ中学野球部にこのような貴重な機会を設けていただき、ありがとうございます！」

「いえいえキュウコン先生。この特別合宿はあなたたちの意志、そしてこれから合宿場所になるバトル部のメンバーの意志……、それがあってこそのことです。それより……、ちゃんとこの世界の“ワープゲート”につながったようで……、良かったですね」

“ゼウス”と呼ばれたその人はキュウコン監督にそのように話す。

「もしかして、あのゼウスという人、アルセウスじゃないかしら？ほら、創造ポケモンって言われている伝説のポケモンの……」

「アルセウスって……、宇宙を創ったと神話で言い伝えられてい

る……あのアルセウス！？」

ラプ先輩の言葉にみんなが驚きを隠せない。

アルセウスが学園長とは……改めてポケハン学園のスケールの大きさを感じた瞬間だった。

だが、このナインの様子……。かなり失礼な感じにとらわれてもおかしくないと思うのは……僕だけだろうか？

と、不安な面が出て来たが話を元に戻そう。

「野球部のメンバーのみなさんも、フーディン校長先生から聞いたように、まるで朝日のように元気あふれて良いですね。みなさんの笑顔を見ると、周りの方々もきっと幸せに感じることでしょうね。これから始まる特別合宿……、必ずやあなたたちの力になることでしょう。頑張って下さいね」

『はい、ありがとうございます！野球部一同一生懸命頑張ります！』

ゼウス学園長の話を聞いた後、僕たちナインは元気よくそのように答えた。

「それでは早速バトル部の活動場所へと向かいましょう。こちらの方になります」

ゼウス学園長の案内のもと、僕たちあさひポケ野球部一同はバトル部の活動場所へと向かった。

「ここがポケハン学園バトル部が活動している部室です」
「わぁ～。すごく大きい建物だ～。僕らの中学校の体育館くらいあるかも～」
「本当だなぁ！」

ゼウス学園長の案内でたどり着いたバトル部の部室は、体が大きなポケモンやモンスターが何体でも入れるような大きさで、まるで体育館か道場といった雰囲気だった。
聞くとこの部室も、バトル部の部長と副部長が自ら作り上げたのだと言う。

『バトル部の部長や副部長はものすごい努力家なんだろうなぁ。早く会いたくなってきちゃった』

特に部長のラッシュさんはヒート先輩と同じリザードン！

きっとカッコイイに決まっていると思いながら、僕はその時を待っていた。

カチャッ

僕がワイワールドに突入したとき、ゼウス学園長が部室の扉を開いた。

「申し訳ありませんが、少しこちらでお待ち下さい。少しばかりバトル部の顧問と話をしてきますので」

僕たちは納得してうなずく。それを見たゼウス学園長はそのまま部室内に入っていった。

待つこと数分。再び部室の扉が開くと、中からゼウス学園長と別の方が三人出て来た。

「紹介しますね。彼らはこのバトル部を担当しています」

ゼウス学園長がそのように言う。

すると、黒い鳥のような姿をした人が一歩前に出て、

「はじめまして、あさひポケ中学野球部のみなさん。俺はこのバトル部の顧問のガルという者です」

と、自己紹介を行う。

話を聞くと、ガル先生はポケモンではない異世界のモンスターの一つ、黒狼鳥（こくろうちょう）と呼ばれるイャンガルルガと呼ばれる種族なのだという。

「ここにはもちろんみんなとおなじようなポケモンもたくさんいるが、俺のように見たこともない姿のモンスターもたくさんいる。みんなもきっと慣れない環境、モンスターたちに戸惑ってしまうかもしれないが、部員たちは面倒見の良い優しい性格の持ち主だ。だから、安心して先輩たちと特訓に励んでくれ！」

『はい！こちらこそよろしくお願いします！』

ガル先生の話が終わると、僕らは大きな声で元気よく返事をした！

そのあと、ガル先生の隣にいたもう一人の方が一歩前に出て、同じように自己紹介を始めた。

「はじめまして、あさひポケ中学野球部のみなさん。僕はこのバトル部の副顧問を担当しているイックンと言います。みなさんが有意義な時間を過ごせるように一生懸命頑張りますので、よろしくお願いします」

もう一人の方はそのように自己紹介をした。

話を聞くと彼も異世界のモンスターの一つ、大怪鳥と呼ばれるイャンクックと　いう種族なのだという。

「イックン先生は今年からこの学園に赴任してきた新米の先生なんだ。だけどしっかりと生徒たちの力になれるからみんなも困ったことがあったら遠慮なく彼に相談すると良い」

『はい！これからよろしくお願いします、イックン先生！！』

ガル先生の言葉に僕らがそのようにいう。

最後にもう一人の方がガル先生たちのように自己紹介を始めた。

「あさひポケ中学野球部のみんな、はじめまして。俺はこのバトル部でコーチを行っているゼルスという者だ。みんなの持つ力……、それを強化するために精一杯アドバイスするから、みんなも頑張ってくれ！」

『はい！！』

彼は僕たちと同じポケモンの種族、ジュカイン。
どうやらコーチとしてこのバトル部に所属しているらしい。

『でも、なんだろうこのゼルス先生という人……。迫力が全然違うや。落ち着いているけど……、みんなの心に響くようなメッセージを伝えるような……雰囲気が感じる』

どうしてそう感じるのかわからなかったけど、僕の中で奥深く眠っているバトル本能がそう感じさせていた。

信じられないかもしれないが、僕は昔から相手の雰囲気を読み取ることが出来るようなのだ。

まだバトル好きだった頃、カントリーで何度かただ“強い”だけではなく、それに“＋α”を合わせたような雰囲気を持つ人に何度か出会ってきたし、実際そのような人には点で勝てる気がしなかった。

だけど、ゼルス先生にはそれをはるかに上回るような雰囲気を感じた。

「さてここからは私ではなく、彼らにバトル部の案内を任せることにします。あさひポケ中学野球部のみなさん。ここでの経験は必ずやあなたたちにとって大切な力になることでしょう。それでは特訓頑張って下さいね」

『はい！色々とありがとうございました！』

ゼウス学園長はそういうと、そのまま僕らと分かれていった。

「それでは早速うちのバトル部の面々に会いに行きましょう！」

ガル先生はそういうと部室の扉を静かに開いた……。

第６０話：「ついに来た！！ポケハン学園バトル部！！」の巻（後書き）

カゲっち：『すごい……すごすぎるよバトル部……』

作者：「もしも～し。今から感激の“オーバーヒート”をしてどうすんの？（汗）」

ヒート：「次回はいよいよバトル部のみなさんに会うのか……楽しみだぜ！！」

第６１話：「バトル部での自己紹介はドタバタの嵐だよ！？」の巻（前書き）

カゲっち：「うっわぁ～！楽しみ！！」

ヒート：「待ちきれないぜ！」

作者：「ここで僕から一言。前話でもお伝えしましたが、本作ではバトル部視点での設定が若干異なっています。そのためキャラのセリフや行動に変化があるかと思いますが、ご理解をして頂けるようお願いします」

カゲっち：「それじゃ第６１話プレイボールだよ！！」

第６１話：「バトル部での自己紹介はドタバタの嵐だよ！？」の巻

「すっげぇ～……。俺たちの野球部とは気合いが違うなぁ……」

バトル部の部室の中に入った途端に、ラッシー先輩が驚きに満ちたコメントを発した。

無理も無い。僕たちが部室の中で最初に見た光景。それは、熱気がひしひしと伝わるようなバトルの特訓の様子だったからだ。

その光景にラッシー先輩は無論、僕も含めた他のメンバーも同様な表情だった。

「ハハハハ。君たちが驚くのも無理は無いな。ここのバトル部のメンバーは君たちと同じように、自分を強化したいと強く望む人たちが色々な世界から集まっているんだ。バトル部はそんな人たちの為に、日々こうしてたくさんの特訓をしているんだぜ」

と、ゼルスコーチが話してくれた。

「僕たちと同じ……。自分を強くしたいって思うのはどこの世界でも同じなんですね」

「……のようだな。しかしその熱望を叶えてくれるなんて、すげぇや……バトル部」

ゼルスコーチの話に僕は目を輝かせ、ヒート先輩はさらに驚きを見せていた。

と、その時だった。

「ゼルスさん！一体どこ行っていたんですか？俺とバトルの特訓しているときに、突然いなくなるからびっくりしましたよ」

誰かがゼルスコーチに向かってそのように話しかけた。

その姿を見たとき、僕はおなじみとなった感激の“オーバーヒート”状態となってしまった。

彼はオレンジ色の大きな体で、頭に角が2本生えている。そして大きなしっぽには、その種族の象徴とも言える、命の炎が燃え盛っている。その大きな翼を持った姿は威圧感があり、まるでドラゴンのようだった。

「悪いな“ラッシュ”。以前話した特別合宿の相手方がこの学園に着いたところだったからな。ちょっと案内をしていたところだったんだ」

ゼルスコーチが話しかけてきた相手、“ラッシュ”さんに対してそのように言う。

「特別合宿の……。へぇ～……お前らが噂に聞いた、あさポケナインってヤツだな？俺は“ラッシュ”。見ての通り、俺はリザードンだ。そして、このバトル部の部長をしているぜ！これからよろしくな！！」

彼はそのように自己紹介をした。

だが僕を含めたあさポケナインのメンバーは、彼が普通のリザードンとはちょっとだけ異なる特徴を、２つ持っていたことをまだ知る由が無かった。

「あ……あなたがラッシュ……さんですか？……カッコイイ……！！！」

その言葉が部室に登場した瞬間、ラッシュさんは拍子抜けしたような表情を見せた。

そして、その声がした方を見ると、そこには大きな目を目一杯キ

ラキラさせ、しっぽを左右に揺らしている1匹のヒトカゲがいた。

「ぼ……僕、ヒトカゲの“カゲっち”って……言います！これから特訓頑張ります！！」

「あ……ああ……。よ、よろしくな……」

まさかそこまで感激の表情を見せられるとは思っていなかったのだろう。

ラッシュさんは困惑の表情を見せるしか無かった。

「もう、カゲっちくんてば！！バトル部にまで来てカッコ悪いところ見せないでよ！見ているこっちが恥ずかしいじゃない！！」

僕の後ろにいたピカっちがベシっと僕の背中を叩く。

「俺なら平気だ。“これからチームのために、自分が目標とするようなカッコイイリザードンであるラッシュ先輩のもとで特訓を頑張る”んだろう、カゲっち？」

「ど……どうして僕の気持ちがわかったんですか！？」

僕はラッシュさん……いや、ラッシュ先輩に気持ちを読み取られたことに驚く。

「カゲっちやみんなが驚くのも無理は無い。彼は度重なる厳しい修業や特訓を続けた結果、通常のリザードンと違い、相手から出ている波動を感じることが出来るんだ」

と、説明するゼルスコーチ。

ナインは皆、口を大きく開けて驚きを見せていた。

「ま、ゼルスさんの言った通りだカゲっち！お前のそのがんばる姿はムダにはならないぜ！！頑張れよ」

ラッシュ先輩は僕に優しい表情で握手をしてくれた。

「あ、はい！頑張ります！！」

僕も力強く返事をした。

「あ、ラッシュ！ここにいたのか！突然特訓から外れたからどうしたのかと思ったぜ！！」

「わりぃわりぃ“レウト”。何でもあさひポケ中学校の面々がやって来たっていうからちょっと話していたんだ」

しばらくして、ラッシュ先輩に誰かが話しかけてきた。

“レウト”と呼ばれた彼。彼もまた竜の姿をしていた。しかも体全体は赤い上に、赤い鱗で覆われていた。
でも、どうやらポケモンではなさそうだ。

「へえ～、こいつらがそうなのか！俺は“レウト”！見てわかると思うが種族はポケモンじゃないんだ。別名“空の王者”と呼ばれる、火竜リオレウスの“レウト”だ！このバトル部で副部長をやっている。よろしくな！！」

レウト先輩はそのように自己紹介をした。

「さてと、ラッシュにレウトが来たから、そろそろみんなにも登場してもらうとするか」
「そうだな」

少ししてガル先生とゼルスコーチがそのように話し、一歩前に出た。

そして……、

「みんな、集まれ！！」

と、ゼルスコーチが大きな声で特訓を続けるバトル部のメンバーに号令をかけた。

その場にいたバトル部のメンバーははじめ、「どうしたんだろう？」といった表情を見せていたが、やがてゼルスコーチの元に集まってきた。

「よし、みんな集まったな」

「実は今日からこのバトル部で、別世界から来たポケモンたちと特別合宿をすることになったんだ」

ガル先生、そしてイックン先生の言葉にバトル部メンバーが驚きの声をあげる。

「彼らは“ポケモンカントリー”と呼ばれる世界の“あさひタウン”から来た中学校の野球部のメンバーだ。彼らの世界の野球の大会では自分達の持つ数々の技を駆使して、試合に勝つというシステムがあるらしい」

「それで今回、俺達が技を強化するためにこのバトル部で教えてあげようというわけだ」

ガル先生、ゼルスコーチがいきさつをメンバーに伝える。　始め

のうちはザワザワしていたバトル部のメンバーも納得の表情をみせた。

「それでは早速あさひポケ中学校野球部のメンバーに自己紹介をしてもらおう！みなさん順にこちらに来て下さい！！」

ガル先生が僕たちに呼びかけた。

「こんにちは」

わずかに時間を置いてぞろぞろと登場する僕たちナイン。
最初にキュウコン監督が一歩前に出てあいさつをした。

「早速来たようだな。こちらは野球部の監督をしているキュウコン先生だ」
「はじめまして、キュウコンだ。よろしくな」

ガル先生の紹介の後、キュウコン監督も頭を下げ自己紹介をする。

「俺はあさひポケ中学野球部キャプテンをやっているラグラージのラージです！！ここで合宿を出来るなんて……光栄です！！どう

かよろしくお願いします！！」

キュウコン監督のあいさつの後、嬉しさを前面に出したラージキャプテン。
ジャンプをしながらあいさつ……までは良かったのだが……、

ドーーン！ズーーン！ドーーン！！
「うわっ！？」
「キャッ！！」

その勢いのあまり、“じしん”が繰り出されてしまったのだ……。

「おい、ラ……ラージ！？ジャンプをやめろ！！」

ラッシュ先輩が揺れの中、ラージキャプテンに注意をした。

「あっ……すいません！嬉しくなるとついジャンプをするクセがあって……」

ラージキャプテンは謝りながら、ジャンプをやめた。

「まぁ、以後気をつけてくれよな……」

と、ラッシュ先輩は一言注意を促した。

と、そこへ……、

「でもすごい“じしん”だったよ。まだ中学生なのにすごいパワーだね」

と、バトル部メンバーから一匹のラグラージが登場した。
ラージキャプテンとは違って優しい口調で……。

「ラージくんだったね？僕は“ラグ”。君と同じ異世界から自分を強くするためにこのバトル部に来ているんだ」

話を聞くと、彼の世界ではポケモンたちが自分たちの心を闇に染めて極限以上のパワーを引き出してしまうという“ダーク化”が進行しているらしい。
その事態を解決するために彼は仲間とともに冒険をしていると言うのだが……、

「実は、本当の僕はその異世界で冒険をしているんだ。分身の僕は、あることがきっかけで本当の僕が知り合いにアドバイスでここに来たんだよ」

と、ラグさんは言う。どうやら分身の彼が身につけた力は、そのまま本当の“ラグさん”の力になるようだ。

「とにかく同じラグラージ同士、頑張ろうねラージくん」
「は……はい！よろしくお願いしますラグさん！！」

2匹のラグラージは握手をしながら、こう誓った。

“今よりも強くなる……”と。

「続いてあたしね♪あたしはラプラスのラプよ。よろしくね♪」

ラプ先輩がそのようにあいさつする。

すると……、

「あら、なんでかしら？あたし……、あなたと気が合うような気がするわね」

と、バトル部メンバーから女の人の声がした。

「ごめんね、ビックリさせちゃって。あたしは“サクラ”って言うの。見ての通り、色違いのリザードンよ。このバトル部では魔法の練習をしているのよ」

声の主、サクラ先輩が言う。

彼女の言う通り、体全体はピンク色で、まるで桜の花が咲き誇っているようだ。

「魔法を使えるんですか!?すごいですねサクラ先輩。でもどうしてなのかしら?あたしもなぜだか気が合うような気がする……」

お互いに「なぜ?」といった表情を見せる2匹。

だが、真相はレウト先輩の一言で明らかになった。

「サクラはなぁ……ラッシュの幼なじみなんだ……。そのせいなのか、サクラも男だろうがハッキリ物事を言う性格で……、よくバトル部の一番最初からいた男のレギュラーにつねるクセがあるんだ……」

レウト先輩がラッシー先輩に耳打ちする。

「そうなんスかレウト先輩？いやぁ、ラプもよく俺たちに向かって“お仕置き”だって言って技を繰り出すんスよ……」

もしかしたら読者のみなさんなら気づいたかも知れないが、実はラプ先輩にサクラ先輩という2匹の先輩たちは、部活内の男性陣にも負けない強気の性格だったのだ。

『……でも、そう考えると……恐いなぁ……』

その場にいたラッシー先輩、ラージキャプテン、ヒート先輩、ジュジュ先輩が共鳴するように震え出した。

すると……、

「ちょっとレウト？な～にサクラの悪口をかわいい野球部のみなさんに言っているのよ？ちゃ～んと聞いていたんだからね？」

「レ、“レイラ”！？いつの間に！？」

レウト先輩が驚いた表情で後ろを振り向く。

「ごめんね野球部のみんな。うちのヘタレウスが変なこと言って。あたしは“レイラ”。ポケモンじゃないけど、種族は雌火竜（めすかりゅう）と呼ばれるリオレイアなの。これからよろしくね」

体全体が緑の鱗に覆われた彼女がそのように言った。

「さてと、ヘタレウスのことはサクラに伝えなきゃね～」

「ヘタレウスなんて言うなよ～。」

レイラ先輩に対して困惑した表情のレウト先輩。

その瞬間、ナインは『あ～ぁ……。かわいそうに……』といった表情だった。

「さってと、次は俺の出番だな！！俺はバクフーンのラッシーだぜ！！ララララッシーって覚えてくれ！！」

しばらくしてラッシー先輩が持ち前のハイテンションで自己紹介を行った！

すると……、

「え!?ちょっと“ラッシー”って被っているじゃない!!」

一人の女の子の声がした。……それも人間の姿をした……。

「え!?マジかよ!!?ってか“ラッシー”って誰のことだよ!?」

ラッシー先輩は驚きの表情をした。
そしてピンクの服を着て、ベルトの中央に花をつけているその少女に聞く。

「俺だよラッシー。彼女が……“リリー”が俺にそう名付けたんだ」

ラッシュ先輩は自分を指さして言う。

「え〝えぇぇぇ〜〜〜〜!!!??」

ラッシー先輩は全世界に響くような大声で叫んだ。

「そういうことよ。だ・か・ら♪そこの君は名前を変えてよね～～♪」

白に近いクリーム色の内巻カールのロングヘアーで肌が美しいほど白い少女……いや、リリーちゃんはそのように言う。

「そ……そんなこと言われたって……！このニックネームは……、うちの作者さんのお気に入りだし、何より昔ヒートと互いにつけあったんだ！！いまさら変えられるか！！」

ラッシー先輩……目が……目がマジですよ……。

……と、お互い譲らないほどにまで白熱した論戦だったが……、

「まぁ、ニックネームのことは気にするな。こっちで何とかするから……」

ラッシュ先輩が二人を説得する。

「ありがとうございます……ラッシュ先輩……」

ラッシー先輩はようやく落ち着きを取り戻し、元の位置に戻って

行った。

「悪かったな、うちのリリーが変なことを言って」
「あなたは……」

ラッシー先輩は声をした方を振り向く。

そこには背中にバラが咲いていて、全身をトゲが覆っていて、さらに蔦で出来ている翼を持った大きなドラゴンがいた。
あとで聞いた話によると、体長は５ｍあるらしいのだが、普段はリリーちゃんの胸ポケットに、バラの花の姿で入っているらしい。

「おれは“がばね”。伝説のドラゴンと呼ばれているんだ。まぁ、うちのリリーは初めて会ったキャラに名付けをするクセがあってな……」

と声の主、がばねさんは言う。

「良いんスよがばね先輩。ムキになっちまった俺も悪いんスから……」

と、ラッシー先輩。

さらに……、

「さっきみせた“やんちゃ”な性格と違って実は仲間思いなんだね。同じバクフーンとしてうれしいよ」

と、1匹のバクフーンも姿を見せた。

「ラッシーくんだよね。僕は“ムゲン”。あることがきっかけでこのバトル部に来ているんだ。とにかく頑張っていこうね」

「はい、俺頑張ります!!」

ラッシー先輩もこうしてバトル部で貴重な出会いを果たしたのだった。

「次は僕ですね。僕はジュプトルのジュジュです。スピードで負ける自信はありません」

と、ジュジュ先輩。相変わらずのイヤミっぽさが出てしまったが……、

「お!ちょうど良い!俺の新たなスピードライバルの登場だ!!」

と、1匹のバシャーモがうれしそうに言う。

「あなたは……？」

「俺は“ブレイ”！よろしくな！！」

と、ブレイ先輩がジュジュ先輩に言う。

「ライバル……。でも僕はスピードでは負けませんから」

「な……んだと！なら今すぐ……」

「やめろ！！」

危うく2匹のガチンコスピードバトルが始まりかけたが、ラッシュ先輩の声でその心配は無くなった。

「次は僕だね！？僕、トゲチックのチックで～す♪」

続いてチックがこれでもかと言うくらいのニコニコ笑顔で自己紹介をした。

バトル部のメンバーも「よろしくな」と言わんばかりの拍手で出迎えた。

「あたしはチコリータのチコっち！よろしくね～♪」

あとに続くようにチコっちも自己紹介をしたのだが……、

パチパチパチ……。

「どうしてそんなに小さい拍手なのよ～！！！！」

チコっちは昔から自己紹介のあとの拍手が、小さいと言う妙なジンクスを抱えていた。

「大丈夫だチコっち。今は反応が悪くても、頑張ればきっと良くなる。だからあまり気にするな」

「あ、はい……ごめんなさい……／／／／／」

……？なんでだ？チコっちの顔が赤くなったぞ……？

まさか……まさかとは思うが……。

「次はあたしね。ピカチュウのピカっちです♪これからお世話になります♪」

気にしているうちに、ピカっちが自己紹介を終えたようだ。ニッコリとかわいく笑ったおかげか、拍手が大きく感じた。

「次は俺か……。俺はリザードンのヒートだ！！よろしくな！！」

熱い気持ちが感じるヒート先輩のあいさつ。

僕は以前部活紹介で見たヒート先輩の自己紹介と大きく違うことに、迫力を感じていた。

「最後は僕……。は……はじめましてみなさん！！ぼ……僕ヒトカゲのカゲっちです！！よ……よろしくお願いします！！」

僕は緊張しながらあいさつをした。

「これであさひポケ中学校野球部の自己紹介が終わったな。では早速だが、特訓を始めるぞ」

ゼルスコーチの言葉でバトル部メンバーが元の場所に戻る。

僕たちは最初はそれぞれ好きな場所に向かって良いようだ。

「僕たちはどこに行こうかなぁ～？」

僕たち仲良し４匹組がウロチョロしていると、

「よ！カゲっちだったよな？何だったらオレのところに来ないか！」

後ろを振り向くと、そこには１匹の……僕と同じヒトカゲが立っていた。

「き……君は？」

「悪い。自己紹介まだだったな。オレは“ヒイロ”！種族は見て

の通りヒトカゲだ!!」

話を聞くと、彼もやはり異世界から来たようで、元々はヒワダ町と言う町にあるヒワダ中学校に通う中学2年生なのだという。

と、いうことは僕の先輩なんだ……!!

「ごめんなさい、タメ口で話しちゃって……」

僕は申し訳ない気持ちになるが、

「気にすんな。今日から同じバトル部で特訓するんだ!仲良くしようぜ!!」

と、ヒイロ先輩は握手をしてくれた。

「ところでヒイロ先輩はどうしてここに来たんですか?」

「オレか?簡単に言えばラッシュ先輩にお礼に来たんだ。友達を助けてくれたお礼にな……」

「“友達”……?」

僕が首を傾げていると……、

「アニキィィィィィィィーーーーーー！！！！！」

突然こんな声が遠くから聞こえてきた……。それも不気味なくらい大きなズドドドドという音とともに……！！

「どこにいたんですかアニキ！！オイラ、ずっと探していたんですよ！！」

「わかったから！苦しいから首を締めないでくれ～！！」

と、いきなり1匹のワニノコがヒイロ先輩の首を締めるように、思い切り飛び込んできたのだ。

「ごめんなさいみんな。お騒がせして……」

「良いんですよ。僕たちはケガが無かったことですし……」

僕は謝るワニノコにそういう。

「まだ自己紹介してなかったよね……。オイラはアニキと同じヒワダ中学校2年の“ダイル”。……よろしくね？」

「こっちこそよろしくお願いしますダイル先輩♪」

緊張するダイル先輩に対してピカっちがあいさつする。

「せ……ん……ぱ……い？……オイラが先輩だなんて！！」

「だってダイル先輩は2年生で、あたしたち仲良し4匹組は1年生ですもの♪先輩になるじゃないですか？」

感激の“オーバーヒート”を起こしそうなダイル先輩に対してピカっちはそのように話した。

「ところでヒイロ先輩？“アニキ”って何ですか？」

「う～ん、説明すると長くなるなぁ……」

ヒイロ先輩によると、ダイル先輩はいじめられっ子だったらしいのだ。

そのいじめっ子にから救ったことがきっかけで、ダイル先輩は感謝の気持ちから“アニキ”と呼ぶようになったらしい。

「だが、そのいじめっ子にはさらに上の存在がいたんだ。“ブラックサイド”って言うんだけどな」

ヒイロ先輩が話を続ける。

その話によると、ダイル先輩は“ブラックサイド”によって一生歩けなくなるほどの重傷を負ったのだが、異世界にいたラッシュ先輩ともう一人、“フォック”さんという特別な方によってそのケガが回復したのだと言う。

「だからオレは感謝を伝えるのと同時にもっと強くなるためここに、ダイルと一緒に来たと言うわけなんだ」

ヒイロ先輩が最後にそう締めくくろうとしたが……、

「アニキはすごいんですよ！！ヒトカゲなのにでんき技を使えるんですから！！！」

『え！？本当ですか！！？』

ダイル先輩から出た一言で僕らは驚く。

「あのなダイル……。あの時のアイツみたく宣伝するなよ。何度も言うようにオレは見せ物じゃ無いんだから……！？」

ヒイロ先輩がふと前を見ると、

そこには目をキラキラさせたヒトカゲ、ピカチュウ、チコリータ、トゲチックがいた。

みんな「ヒイロ先輩♪でんき技が見たい♪」と言わんばかりである。

「ハァ～……。まぁ確かにオレの世界では科学が発達しているおかげで、全く異なるタイプの親から子供が産まれるんだ。と、同時にその子供は両親のタイプを2つとも受け継がれると言うわけなんだ。……まぁ、こういうポケモンを“ハイブリット（交雑種）”って言うんだけどな……」

ちなみにヒイロ先輩は当時リザードだったリザードンのお父さんと、ライチュウのお母さんの子供なのだと言う。

「でも良いことばかりじゃないぞ。ハイブリットは必ずデメリットがあるからな。オレの場合は、電気のせいで“不幸体質”なんだ」

と、ため息のヒイロ先輩。もう嫌と言うほど不幸な体験をしたらしい。

「……それでもヒイロ先輩カッコイイですよ……！僕同じヒトカゲとして感激しちゃいました！！！」

「あ……あぁ、そうか。ありがとうな……」

目がキラキラの僕に対してヒイロ先輩は困惑の表情だった。

『でもこの４匹の楽しそうなを見ていると、ヒワダ町のときのオレたちとダブるな。これからよろしくなチック、チコっち、ピカっち……、そしてカゲっち！！』

ヒイロ先輩はふとそんなことを考えていた。

そんなこんなでドタバタと始まったバトル部での特別合宿！！

次回、更なる驚きの展開が待ち受ける！！？

第６１話：「バトル部での自己紹介はドタバタの嵐だよ！？」の巻（後書き）

作者：「ひぇ～……！たくさんコラボキャラがいて、どんな風に書けば良いか悩む～！！（汗）」

ラプ：「ここまででもコアラ先生のラグさん、ｍｙｕ－ｍｙｕ先生のリリーちゃんとがばねさん、雷牙先生のムゲンさん、メガネ獣人先生のヒイロくんにダイルくんが登場したのね」

作者：「でもまだまだ登場していないキャラクターがたくさんいるんだ……。キャラクターの作者さんに申し訳ない気持ちだよ。ですが改めて、コアラ先生、ｍｙｕ－ｍｙｕ先生、雷牙先生、メガネ獣人先生、このコラボに協力して頂き本当にありがとうございます！」

カゲっち：「次回もお楽しみにね！！」

第６２話：「え！？ラッシュ先輩が野球するよ！！？」の巻（前書き）

ヒート：「な……なんなんだこのタイトルは……？（汗）」↑目が点

カゲっち：「早くも波乱の予感……（汗）」

ラプ：「一体どういうことか、第６２話プレイボールよ♪」

第６２話：「え！？ラッシュ先輩が野球するよ！！？」の巻

「さてと、俺も特訓の続きをするか……ん？」

僕たちあさポケナインの自己紹介の後、ラッシュ先輩は一度元の特訓場所に戻ろうとしたのだが、なぜかある異変に気づいた。

『……何だってこんな波動を感じるんだ？』

ラッシュ先輩の視線の先には、同じリザードンであるあさポケのエース、ヒート先輩の姿があった。

その表情は、このバトル部の部室の中に入ったときよりもより気合いが入っているように感じた。

格別ラッシュ先輩が感じたような“異変”は見られないのだが……。

それでもラッシュ先輩はヒート先輩のもとに近づいていき、呼び止めることにした。

「悪い、ヒート。ちょっと良いか……？」

「どうしたんですか？ラッ……ラッシュ……」

突然声をかけられたことに驚いたのだろう。一瞬ヒート先輩の言葉が詰まる。

「無理して俺のこと、“ラッシュ先輩”なんて呼ばなくて良いぜ？おまえ、野球に熱が入って、どうしても普段のような、おだやかな様子を見せられないんだろ？」

「うん……。でも良いんですか？」

どうやらラッシュ先輩は、ヒート先輩の野球になったときの言葉使いが、少々粗いのを波動で感じたようだ。

「気にすんな。俺とおまえは歳は違えど、同じ“リザードン”なんだ。“リザードン”の種族自体が少々荒い性格なのは当然だ。だから普段通りに接してくれ」

「悪いなラッシュ……」

ラッシュ先輩の言葉に対して申し訳なさそうに返事をしたヒート先輩。

しかし、この問題はラッシュ先輩が感じた“異変”とは別だった。

「ところでラッシュ、俺に何の用なんだ？」

ヒート先輩がラッシュ先輩に尋ねる。

「あぁ。何だか元気が無いように感じるんだ。自己紹介のときから感じていたんだが……、何かあったのか……？」

「やっぱりバレてたのか……波動ってのは恐ろしいな……」

ラッシュ先輩の言葉が当たったのか、突然表情が暗くなったヒート先輩。

「実は……俺はジュジュと以前１５球勝負というのを野球の練習でやったんだ……。全力で一球一球アイツに投げたんだが、結果は俺が負けた……。昨日も実戦形式でリベンジを挑んだが、やっぱり勝てなかったんだ……」

どうやらヒート先輩は、ジュジュ先輩との勝負で２度負けたことが、ずっと悔しい記憶として残っているようだ。

「正直どっちの対戦でも知らぬ間に負けていた……。負けた理由がわからねぇんだ！！俺……俺、こんな調子で“エース”として、他の学校の連中に立ち向かえるか……わからねぇんだ！！」

ヒート先輩がずっと抱えてきた気持ちを叫ぶ。

「それに……、俺の負けた様子をカゲっちが見ていた。アイツは……俺をいつも憧れの先輩として目標にしている……。それなのに期待に応えられない自分がふがいないんだ……！！！」

……そう。ヒート先輩は、僕に野球への姿勢として見せたかった“勝利”を無惨にも打ち砕かれたことが何よりも悔しかったのだ。

「なるほどな……。よし、なら俺がアイツに勝負を挑もう。同じリザードンとして、おまえの苦しみをほっとくわけにいかないからな！」

「えっ、ってラッシュ！？」

ラッシュ先輩はヒート先輩に一言残すと、ジュジュ先輩のもとに向かった。

「ジュジュ、ちょっと良いか？」

「あれ、ラッシュ先輩……どうしたんですか？」

ラッシュ先輩は、ちょうど準備運動のランニングを始めようとしたジュジュ先輩に話しかけた。

「いや、実はおまえと勝負したくなったんだ。何だか自分の実力に、自信に満ちあふれているように見えたからな」
「別に良いですよ？ただ……どんな勝負をするんですか？」

ジュジュ先輩がラッシュ先輩に聞き返す。

「前にヒートとお前が野球部でやったという“１５球勝負”でどうだ？」
「“１５球勝負”……？打撃練習のときのアレですか……。良いですよ。ただ僕はどんな相手でも負ける自信はありませんからね」

ジュジュ先輩は相変わらずイヤミな口調で、ラッシュ先輩の頼みを了承した。

「そうか、それじゃ決まりだな。」

こうして、ラッシュ先輩ＶＳジュジュ先輩の１５球勝負が始まることになった。

『なんだか自分の実力に対して自信過剰なせいか、調子に乗りす

ぎている感じだな……。これじゃ野球部のメンバーとうまくスタイルが合わない感じだ……。これじゃ優勝が厳しいな。特に熱血なヒートは、ジュジュのこのイヤミな様子に負けている気がする。これは……何か技を使ったようだな……』

野球の道具の準備を進めるジュジュ先輩を見ながら、ラッシュ先輩はあさひポケ中学校野球部が抱える課題点を感じたようだ。

「おい、聞いたか?ラッシュのヤツ、野球部のヤツと野球でバトルするらしいぞ」

「マジかよ?てゆうかラッシュって野球出来るのか?」

それから5分ほど。バトル部の部室内では「ラッシュＶＳジュジュの１５球勝負」の話が広まっていた。

無論その情報は、僕たち仲良し４匹組＋ヒワダ町メンバーのもとにも入ってきた。

「ラッシュ先輩とジュジュ先輩が?それ……本当の話なの?」

「わからないわ。でもみんなの話を聞いていると、この学園の野球場で行うらしいの」

たまたま噂を聞いたピカっちが僕たちに対して、そのように話す。

「でもちょっと信じられないよ。第一ジュジュ先輩がなんでラッシュ先輩とバトル……それも野球で勝負しないといけないのさ？」

僕は話がイマイチ信用出来ない様子で話す。

「なぁカゲっち。気持ちはわかるけど、ここでオレたちがうそかホントなんて話してもしょうがないと思うぜ。実際に確かめに行けば良いんじゃないのか？」

「オイラもそう思うよ？」

ヒイロ先輩とダイル先輩は僕に対してそのように言う。

「それもそうですね。それじゃあ……みんなで確かめにいきますか！」

「ええ、それが一番だわ♪」

こうして僕たちも野球場へと向かった。

しばらくして、ポケハン学園の野球場には、噂を聞き付けたバトル部メンバーとあさポケ中学メンバーが一塁側のスタンドに集結していた。

『さすがはポケハン学園。野球場の設備、広さも僕らのグラウンドと点で違うなぁ……』

僕がキョロキョロしながら、そんなことを話していると、

「頑張れよラッシュ！！」
「応援していますよ」

上からラッシュ先輩への声援と思われる声が聞こえてきた。そのうち一人は人間で、もう一人はリザードのようだ。

「“ホムラ”先輩。この勝負楽しくなりそうッスね！！」

人間さんの隣に座っていたラッシー先輩がそのように言う。どうやら彼の名前は“ホムラ”と言うようだ。

これはレウト先輩から聞いた話なのだが、この学園には人間の姿で生活するモンスターもたくさんいるらしく、ホムラ先輩も元々の

姿はリオレウスなのだと言う。

ちなみにホムラ先輩のように、モンスターが人間の姿になることを“擬人化”といい、元の姿を“原種”と言うらしい。

でも事実を知らなきゃ、誰もホムラ先輩のことは、かっこいい一人の青年のようにしか感じないだろう。

整った顔立ちに澄んだ青色の瞳、つむじのところで跳ねている茶色に近い赤色のその髪は、全体的に……特にもみあげのところで長くなっている。

さらに黒のガーディガンからＹシャツを出していて、濃い青のＧパンという服装、そして背中に“太刀”と呼ばれる刀を背負っている身長１８０ｃｍくらいのその姿を見て、誰も彼が元リオレウスだったなんて、にわかには信じられないだろう。

ちなみに彼の所持する太刀という武器。正確には“飛竜刀［朱］（ひりゅうとう［あか］）”と呼ばれるらしく、火竜リオレウスの素材から出来ているようだ。

と、話が脱線しそうだが、実は擬人化したモンスターの中には、何らかの事情で原種に戻れないといった問題もあるようで、ホムラ先輩も原種……つまりリオレウスに戻る方法を探そうとしていたら

しく、気がついたら異世界からこのバトル部の世界に来ていたらしいのだ。

『こうして考えると、本当は大変な思いでいるんだろうなぁ……』

僕はふとそんなことを考えていた。

ホムラ先輩と一緒に座っている目付きがおだやかなリザード……。彼の名前は“リザレ”というらしい。

ラッシュ先輩によると、彼もまた異世界から、何らかの理由でこのバトル部にやってきたようだ。

ただ彼は僕が知っているリザードの姿とは、少しだけ違う点が見られた。

まずは僕たちリザードン種（ヒトカゲとその進化系を、僕らの世界ではこのように呼んでいる）の特徴とも言えるしっぽの炎。

本来ならば、ヒトカゲからリザードへ、リザードからリザードンへと“しんか”するにしたがって大きく、そして明るくなるのだが、

リザレ先輩の炎は通常のリザードに比べて極端に小さく感じた。
大きさにして５ｃｍといったところだろうか？もしかしたら僕の炎よりも小さいかもしれない。

僕たちのしっぽの炎はその炎の持ち主の健康状態や、感情によって大きく変わるといつだったか理科の授業で教わったような気がしたが、実際にリザレ先輩は、呼吸系に問題があるらしいことを後でラッシュ先輩から聞かされた。恐らくそのことも何かしらの影響を与えているに違いない。

とはいえ、リザレ先輩は種族上は僕より上のリザード。もしかしたら僕よりも……いや、通常のリザードよりも優れている点があるに違いない……、とそのとき僕は感じた。

と、話がかなり脱線したが、ここからは本題のラッシュＶＳジュジュの１５球勝負に戻そう。

まずマウンドで投げるのはラッシュ先輩だ。何球も投球練習を続けている。
キャッチャーは冷静ながらも、内に熱い感情を感じるラプ先輩が担当するようだ。
そして審判役はキュウコン監督が担当するようだ。

『僕が野球でバトル部メンバーには負けるはずが無い。絶対に勝つぞ』

右バッターボックスの外側では、茶色いバットを振るジュジュ先輩の姿が見られた。

「ラッシュ先輩ってどんなボールを投げるのかな?すごくワクワクしてきましたね!」
「ああ!オレもまさかラッシュ先輩が野球をする姿なんて、ちょっと考えられないぜ!!」

僕もヒイロ先輩もワクワクした表情を見せる。

「ジュジュ先輩!!頑張って!!あたしの愛の力でかっこよく打って〜〜!!」

「また、始まった……」

ジュジュ先輩がバッター……といえば、チコっちが“暴走チコリータ”に変身するのはいつものこと……。

そんなこととうにわかっているハズなのに、彼女の言葉には、なぜだか呆れて苦笑いするしかない僕とピカっち、そしてチックだった。

『やれやれ……、チコっちを見ていると、なんだかヒワダ町にいるアイツに似ている気がしてきたぜ……』

『アニキ、オイラもそう思います』

ヒイロ先輩とダイル先輩も、暴走するチコっちを見て自分の世界のことを頭に思い浮かべたのか、ため息をついていた。

なんだかグダグダなテンションにならないのかが不安だけど……、

ラッシュ先輩がどんな投球を見せるのか楽しみになってきたぞ！！

「それじゃ……そろそろ打ちにいこう……」

ジュジュ先輩はバットを横にして、数回屈伸運動をしたあと、ゆっくりと右バッターボックスの中に入った。

「こっちも……お手並み拝見といくか……」

ラッシュ先輩も投げる準備をした。

「ジュジュもラッシュくんも準備は良さそうだな。では確認のためにルール説明をしておこう」

審判役のキュウコン監督がざっと説明を始める。

・投手は15球投げる間に打者を8回空振り、アウト、ファールにする。
・打者は8回ヒット性の打球を打てば勝ち。
・1匹につき自分の覚えている技を3回使用できる。

「この3点だけは注意してくれ。ただし、タイムをとることはいつでも許可する。わかったな？」

ジュジュ先輩、ラッシュ先輩がうなずく。

「へぇ～。野球は野球でも技を使っても良いのか～。ラッシュ先輩、そしてジュジュがどんな技を使うのか楽しみだぜ！！」

ヒイロ先輩がそのように話す。

「結構面白い勝負なんだねラージくん」

「えぇ！カントリー・リーグでも1試合で1チームにつき3回の技の使用が許されているから、それを取り入れているんです！！」

ラグさん、そしてラージキャプテンもワクワクした表情だ！！

「ラッシー。おまえはこの勝負、どっちが勝つと思う？」

「何とも言えないッスね～。ただ、こんなワクワクする勝負はなかなか無いッスよ！！」

ホムラ先輩とラッシー先輩もそんな会話をしていた。

『僕はラッシュ先輩を応援しますよ。かっこよくて強いリザードンは憧れだから……、それにヒート先輩みたいな悲しい姿はもう見たくないですから……』

僕の頭の中であの日の記憶が蘇る。

一生懸命“エース”としての姿を見せていた、ヒート先輩が崩れたあのシーンが……。

『ラッシュ……。もう波動で感じているだろうな。アイツがジュジュがあさひポケ中学野球部が抱える課題点だってことに……。お願いだ。アイツの目を覚ましてやってくれ!!』

ヒート先輩は暗い表情を浮かべて、ラッシュ先輩に対してそのように思った。

「ラッシュ!!」
「頑張れよ!!」

次第に歓声が大きくなっていく野球場……。

「プレイボール！！」

その中で今ここにラッシュ先輩ＶＳジュジュ先輩の１５球勝負が始まった！！

第６２話：「え！？ラッシュ先輩が野球するよ！！？」の巻（後書き）

作者：「え～。今回はナエトル先生のホムラくんに、ヨリシオン先生のリザレくんにも登場していただきました♪」

カゲっち：「改めてナエトル先生、ヨリシオン先生♪コラボに協力していただきありがとうございます！」

ラプ：「さぁ、次回はいよいよ１５球勝負始まるわよ！」

第６３話：「ジュジュ先輩の天狗の鼻をへし折れ！！」の巻（前書き）

ジュジュ：「いきなりなんで僕に勝負を挑んだんだろう？その前にラッシュ先輩は野球出来るのかな？」

ヒート：『俺の代わりにジュジュを目覚めさせるのは、もうラッシュしかいない……。何としても勝ってくれ！！』

キュウコン：「様々な思いが行き来する第６３話プレイボールだ」

第６３話：「ジュジュ先輩の天狗の鼻をへし折れ！！」の巻

まさかラッシュ先輩がジュジュ先輩に１５球勝負を挑むなんて…。ビックリしちゃったけど、どんな勝負になるのか楽しみだよ！！

その注目の１球目！！

「まずは小手調べといくか……」

マウンド上のリザードン、ラッシュ先輩が大きく振りかぶってボールを投げた！！！

スパーーン！！
「ストライク！！」
「！！？」
「えっ！！？」

内角低めに決まった速球を見て、ジュジュ先輩はもちろん、受けるキャッチャーラプ先輩も驚きの表情を見せた。

『は……速い……。なんてストレートなんだ……』
『こんなボール初めて受けたわ。なんてノビの良いストレートなの！？』

ラプ先輩もジュジュ先輩も、今までに味わったことが無い経験に一種の感動を感じていた。

「ビックリした……。ラッシュ先輩があんな速球を投げるなんて……」

「そうだな。オレもラッシュ先輩が野球する姿なんて想像したことが無かったからな……ビックリだぜ……」

僕とヒイロ先輩のダブルヒトカゲも驚きを隠せない。

「なんだよラッシー？今のどこが良いのか俺には全然わからねぇよ」

「すいませんホムラ先輩。今ラッシュ先輩が投げたストレートは、簡単そうで難しいコースに決まったんスよ」

「そうなのか？」

ホムラ先輩が疑問を感じつつ、ラッシー先輩の説明を聞く。

「ピッチャーをはじめてやる選手が、一番難しいと感じるのは自分の投げたい場所に投げることナンスよ。つまりコントロールってことッスね。特にバッターに近い場所に投げるのは相当な勇気がいるんスよ」

「なんでだ？」

ホムラ先輩がすかさずラッシー先輩に聞く。

「あのコースは下手にコントロールをミスったら、ボールがバッターに当たることだってあるから、ハッキリ言って怖いんスよ。低めに投げるのだって、野球経験者の中にも出来ない人がたくさんいますし……」

「へぇ～。野球ってそんなに難しいスポーツなんだな」

ホムラ先輩はラッシー先輩の説明を興味深々に聞いていた。

『驚いたわ。こんな速球をビシっと決めるなんて……。しかもヒートよりもノビ（実際の球速よりボールが速く感じること）を感じるわ。コントロールも良さそうだし、これはいけるわ！！』

ラプ先輩は良い感触を感じたようだ。

「さすがはバトル部部長のラッシュ先輩ですね。ここまで驚かせるなんて正直思いませんでしたよ。でも次もちゃんと投げられますか？」

ジュジュ先輩がイヤミっぽさ全開でラッシュ先輩に言う。

「ずいぶんと余裕じゃないか。こんなの小手調べなんだぜ？」

ラッシュ先輩はラプ先輩からボールを受け取りながら、そのように返した。

さぁ、まずはラッシュ先輩が1勝したぞ。

続いて2球目だ！

マウンド上のラッシュ先輩が、足を上げてボールを投げた！！

『またストレート！！1球決まっても、2球目は通じませんよ！！』

ジュジュ先輩が内角低めへのストレートをバットで振る！！

カキーーン！

「センター前ヒット！！」

今度はジュジュ先輩の勝利だ。

ラッシュ先輩の投げたストレートを、基本通りにセンターに弾き返したのだ！

「同じコースで同じボールは僕には通用しませんよ。僕はあさポケナインで一番ヒットを打てるんですからね！」

打ったあと、ジュジュ先輩が自分の茶色いバットを真っすぐラッシュ先輩に向けた。

「ほぉ～。あのジュジュってヤツも中坊のわりには結構やるな」

「まぁ、一応野球部だしな。こうじゃねぇと面白くねぇよ」

スタンドではバトル部メンバーでゴウカザルの“モモ”先輩、そしてムゲン先輩の仲間で同じゴウカザルの“ゴーシュ”先輩が感心している。

「ラージくん。今の結果はどう思う？」

「1球目があれほど完璧に決まっていましたから、おそらくキャッチャーのラプが手応えを感じたんでしょう。だから2球目もラッシュ先輩に、同じように投げてほしいと指示したんだと思います。でもジュジュだってそんな一筋縄で通用するようなバッターじゃありません。ここはジュジュが、らしいところを見せたと思いますよ」

ラージキャプテンがラグ先輩の質問にそのように答えた。

「あ～ぁ、打たれちゃった。ラッシュ先輩のボールを簡単に打つなんてさすがだなぁ……」

僕はガッカリした感じでつぶやく。

「そりゃあ相手はジュジュ先輩よ！！あたしの王子様は無敵なんだから！！」

チコっちはうれしそうに話す！そして……、

「頑張ってジュジュせんぱぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁい！！」

スタンドから精一杯声を出してジュジュ先輩を応援する！

「ラッシュ先輩が負けるもんか！！僕だって……ラッシュせんぱぁぁぁぁい！！」

僕も負けじと声を出して応援を始める。すると、

「野球部のやつら燃えているな！俺達も応援するぜ！！ラッシューー！」

「負けるなーー！！」

「燃える姿見せてやれ！！」
「絶対勝てよー！！」

なんとレウト先輩、ホムラ先輩、ゴーシュ先輩、モモ先輩も応援を始めた。

「ラッシュー！！」
「いっけぇぇぇ！！」
「気合い入れろーー！！」

そしてスタンド全体が声援に包まれた。すごい熱気が伝わる！

「ラッシュ……。何とか抑えてくれ……。ジュジュはもう何か企んでいるはずだ……」

ヒート先輩は心配そうな表情で様子を見ていた。

さぁ、ラッシュ先輩から見て1勝1敗！次は3球目だ！！

マウンド上のラッシュ先輩が大きく振りかぶって、ボールを投げ

た！！

「そらっっ！！」

速球がジュジュ先輩めがけて飛んでいく！！

「またストレート！！でも僕にはこれがある！！“はたく”！！」

ジュジュ先輩が一回転しながら、しっぽにボールを当てる！！！

打球は三遊間を破るゴロとなった！！

「レフト前ヒット！！」

これでラッシュ先輩から見て1勝2敗となった。

『しっぽで打ち返したか……。とことんラッシュ先輩のことを打ち砕くつもりなんだなジュジュ。勝利の執念が強いお前らしいな』

ラッシー先輩が腕組みをしながら、そのように状況を捉えた。

「どうしたんですかラッシュ先輩。もしかしてあなたの実力この程度だったんですか？このままだと僕が勝ちますよ？」

ジュジュ先輩がニヤリと笑い、余裕の表情をみせる。

「そうか……、だが俺は負けねぇよ」

マウンド上のラッシュ先輩はジュジュ先輩の言葉に、少しイラッとした表情をみせるも、すぐにまた冷静に気持ちをおさえた。

『最初はあのストレートに驚かされたけど、結局ラッシュ先輩は野球経験者じゃないんだ。技術的にも、そして作戦的にも僕に勝てる要素は無いだろう……。あとは僕のこの“ちょうはつ”でジワジワと調子を崩されるのを待つばかりだ』

ジュジュ先輩はこのときすでに勝利を確信していた。

例えどんな相手でも挑まれた勝負にはすべて勝つ……。ジュジュ先輩の考えがそうさせているのかも知れない。

『3球とも良いボールなのに、ジュジュの培った技術がいとも、良い当たりにしている。このままだと本当にジュジュのペースになりそうだわ』

ラプ先輩に多少の不安が浮かび上がる。

『ラッシュくんは度重なる修行や特訓のおかげで、体全体の筋肉が強化されている。それであんなに力強い球を投げられるのだろう。もし彼が野球など他のスポーツを行っていたなら、素晴らしい成績を残せるだったろうな』

キュウコン監督はラッシュ先輩の持つ力を3球で見破っていた。

さぁ、続いて4球目だ!!

「いくぜジュジュ!!ここからが本当の勝負だ!!」

ラッシュ先輩が足を上げてボールを投げた!!

『……またストレート。でももうこれはボールだね』

ジュジュ先輩はじっと見送った！！

「ボーール！！」

投げられたボールは真ん中高めに大きく外れた！！

判定を聞いてジュジュ先輩がフッと笑う。

「あ～ぁ。これでラッシュ先輩が3敗目……。1球目以外はすべてジュジュ先輩が勝っているよ……」

「さすがだわジュジュ先輩！！そのまま打ち砕いて！！」

僕はため息をついてしまい、反対にチコっちが大騒ぎする。

「ラッシュが押されているぜ！？やっぱり野球部は違うなぁ」

「何言ってやがる。まだまだこれからだ！！」

モモ先輩にレウト先輩が思わぬ展開に驚く。

「ラージくん？一体どうしちゃったのかなラッシュは……」

「技術の差なのかも知れないですね。ラプは1球目のジュジュの反応を見て、ストレートで押そうとしていたけど、意外にジュジュが簡単に打ち返した。いくらラッシュ先輩が良いボールを持っていても、野球の練習をしていないから、ちゃんと相手を封じ込めるような精度までに完成していないんですよ。ジュジュもタイミングがあっているみたいですし……。ちょっとラッシュ先輩が劣勢ですね」

ラージキャプテンがラグさんの言葉にそのように答える。

『せめて何か変化球があれば、見せ球として利用できるけど……その作戦は実行不可能に近いわ……。どうしよう』

ラプ先輩はストレートで押せないことに気づいたのか、ちょっと困惑している。

さぁ、ラッシュ先輩の1勝3敗で迎えた5球目!!

マウンド上のラッシュ先輩が全力でボールを投げた!!!

「ボーール!」

しかし、またもボールは言うことを聞かず、外角高めに大きく外れた！

その瞬間、ため息がスタンド全体に広がる。

「ラッシュ先輩が負ける……このままじゃ負けちゃうよ！！」

「あのストレートさえ決まれば……決まってくれれば良いのに……！！」

僕とチックはグッと腕に力を入れる。

変化の見られない状況に、歯がゆさが出てしまっているようだ。

『ラッシュ……。あんたの実力はこんなものなのか！？俺の代わりのリベンジ戦まで落としたら……アイツがまた自分の力に自信過剰になってしまう……！何とか頑張ってくれラッシュ！！』

みんなから少し離れた場所に座っているヒート先輩が、祈るような気持ちでラッシュ先輩を見ていた。

ここまでの5球を振り返ると、見逃し、中安、左安、ボール、ボ

ールだ。

ラッシュ先輩が1勝したあとは、完全にジュジュ先輩が4勝と圧倒している。

このままジュジュ先輩が勝利に駆け抜けるのか!?それともラッシュ先輩が巻き返しを見せるのか　!?

勝負の行方はまだまだわからない!!

第６３話：「ジュジュ先輩の天狗の鼻をへし折れ！！」の巻（後書き）

チコっち：「ジュジュ先輩……かっ……カッコイイ……／／／／／」

ヒート：『やっぱりダメなのか？ラッシュでもアイツを変えるのは出来ないのか！？』

ラプ：『逆転は厳しい状況ね……』

カゲっち：「まだまだ諦めない！僕は応援します！！頑張ってくださいラッシュ先輩！！」

第６４話：「仲間を信じて！！自分を信じて！！」の巻（前書き）

ラプ：「今回も１５球勝負の続きよ！」

カゲっち：「苦しい展開だけど、ラッシュ先輩は負けない！！信じていますよ！！」

ピカっち：「それでは第６４話プレイボールです！」

第６４話：「仲間を信じて！！自分を信じて！！」の巻

いよいよ始まった１５球勝負……。
ラッシュ先輩にとって少し苦しい展開だけど、まだまだ僕は応援するぞ！！

「タイム！！」

５球投げ終わったところで、キャッチャーのラプ先輩がタイムを要求した。
プレイは一時中断だ。

「どうしたんだラプ？」

マウンドに来たラプ先輩に対して、ラッシュ先輩が声をかける。

「ラッシュ先輩……、このまま勝負を続けても大丈夫でしょうか……？」
「なんでだ？俺なら平気だが……」

ラッシュ先輩はラプ先輩が思いもよらない発言をしたことに少々

驚くも、落ち着いてラプ先輩に真意を聞く。すると、

「正直今の状態が続くと、ラッシュ先輩が確実に負けますよ？いくらノビの良いストレートだからってジュジュは完全見切っているようですし、そのストレートだって2球続けて外れちゃっていますし……」

「あぁ、そのようだな……」

ラプ先輩の説明に耳を傾けるラッシュ先輩。

「だが、言いたいことは……本当は違うんだろ？隠してないで俺に話してみろ」

「え！？」

ラッシュ先輩は、ラプ先輩が本当に伝えたいことがあると思ったらしく、すかさず聞いてみる。

するとゆっくりとラプ先輩が話しはじめた。

「……あたし……もう見たくないんです……。自分とバッテリーを組んでいるピッチャーが悔しそうにしている姿を……」

ラプ先輩は小さい声でそのように言う。

「……前に15球勝負をしたときに、ヒートが今みたくコントロールが乱れていたときに、あたしは“全力で投げなさい！”って喝を入れました……。でも本当はそんなことするべきじゃなかった……」

ラプ先輩はあの時に自分がとった行動を、後悔していたようだ。

「でも負けたときに気づいたんです。“あの場面は優しく励ますべきだった……。ヒートの気持ちが落ち着くように……”って……」

「だから自分のせいで相手が傷つくのを避けたいって言うんだろ？」

ラッシュ先輩がポンとラプ先輩の肩を叩く。

「心配するなラプ。お前がその時にとった行動ってのは……間違ってねぇよ」

「え？」

ラプ先輩が暗い表情でラッシュ先輩を見る。

「少なくともお前はヒートのこと、野球部のメンバーのことを人一倍考えている。波動で感じるぜ？冷たいこおりタイプとは思えない……とても暖かくて優しい感情がな……」

「でも……」

ラプ先輩は悩んでいた。誰かを思う気持ちがあるのは自分でも気づいている。
でもそれとは逆に、すぐ相手に喝をするのはダメなんじゃないかと。

「ラプはそれで良いんだ。ラプらしさが出ていて良いじゃねぇか……。ナインを引っ張り続けるその責任感や、誰かがミスして苦しんでいるのを、自分のせいだって言えるの……俺はすげぇと思うぜ？それで良いじゃねえか……迷うことはねぇ」
「……」

ラプ先輩が下を向く。

「がんばれラプ……。お前が迷っていたら、お前とコンビを組むヒートが……ナインが迷っちまうぜ……？」

ラッシュ先輩がラプ先輩を励ます。

「……。わかりました……、今まで通りに……イヤ、今まで以上にナインを引っ張り続けます……。変なことを言ってすみませんでした……」

ラプ先輩はこの時感じていた。

『自分は何を悩んでいたんだろう？……ここまで自分を評価してくれる人もいるのに、自分を……仲間を信じきれていなかったなんて……。みんなごめんね……、あたし頑張るわ！』

そしてこのラッシュ先輩の言葉により、このあとラプ先輩が真の力を発揮する第一歩を踏みはじめたことを、僕たちは気づきはしなかった。

「さてと……気分がスッキリしたので、戻りますね。厳しい勝負になりそうですけど、ここから逆転目指しましょうね！」

ラプ先輩が、非常にスッキリとした気持ちで戻ろうとしたしたその時だった。

「ラプ、ちょっと頼みがあるんだ。ここから俺にサインを出さないでくれ。なんだかその……やりにくいんだ」

「サインを……ですか？」

ラプ先輩はラッシュ先輩の言葉に驚く。

普通こういった実戦感覚の勝負は、キャッチャーがピッチャーとのコミュニケーションや、次に投げるボールを決めるのにサインを使うのだが、ラッシュ先輩はそれをしないでくれと言うのだ。

しかしそれはピッチャーが何を投げたいのか、キャッチャーが把握出来ないため、うまくボールを受け取れない可能性も意味している。

「ここからはバトル部スタイルで投げさせてくれ！」

「……わかりました。あたしも慣れないピッチャーとコンビで勝負するのは大変ですからね。……でも危なくなったらサインを出していきますからね？」

ラプ先輩は一言注意点を言い残して、キャッチャーボックスに戻っていった。

「プレイ！！」

さぁ、いよいよプレイ再開だ。

「さっき一体何を話していたんだろうな……ラッシュ先輩たち」

「オイラもちょっとわからないです……」

ヒイロ先輩とダイル先輩がウ～ンと考える。

「おそらく作戦を考えていたんですよ。ジュジュ先輩がなかなか当たっているから、ラプ先輩とラッシュ先輩が次からどう攻めるか考えていたんですよ♪」

チックがニコニコしながら答える。

「だから次の6球目は注目ッスよ。作戦を変えたバッテリーがどんな攻め方をするか。……もしかしたらこの勝負のターニングポイントになるかも知れないッスよ」

チックが質問に答えている頃、ラッシー先輩もホムラ先輩やレウト先輩に解説をしていた。

「ラッシュ……頼むぜ……。苦しい展開だが逆転してくれよ……。ラプも頼んだぜ」

みんなから離れた場所で観ているヒート先輩は祈るような気持ち

だ。

……と、そこへ

「なんだ～、こんなところにいたの？“あさポケの炎のエース”くん？」

「自己紹介のときとは別人みたいね」

「……サクラさん？……レイラさんも……？」

ヒート先輩が後ろを振り返ると、そこにはサクラ先輩とレイラ先輩がいた。

「ビックリしたわよ。ラッシュがまさか野球でバトルをするなんて……」

「事情を聞いたら、君のためだって言ってたわ。君をショックから立ち直させるためだってね。ホント、年下のリザードン系には優しいんだから……」

サクラ先輩とレイラ先輩がそのように話す。

「でもラプも言っていたわ。“野球バカのヒートが苦しんでいる姿は見たくないわ！バッテリーを組むパートナーとして、何とか元気になって欲しい。そのために出来ることは頑張るわ！”ってね。仲間想いのパートナーを持って幸せね♪」

「いや……それほどでも……／／／／／」
レイラ先輩の言葉にヒート先輩が照れる。
「だから、ヒートも応援しなさい……。例え苦しい立場にいても、君の応援で頑張れるはずよ？」
「は……はい！！」
ヒート先輩がじっとグラウンドを見つめる。
……そして、
「がんばれよラッシュ！！ラプ！！！絶対勝てよ！！！」
力のこもった声援を送りはじめた。
『さてと、そろそろアイツの戦術もわかってきたことだし、ここからアイツの天狗の鼻をへし折ってやるか……』
マウンド上のラッシュ先輩が投げる構えを見せる。
『そして……あの時の俺のように……目を覚まさせてやる！自分の持つ力は仲間のためにあることを……、勝負は楽しくやることが大切ってことをな！！』

ラッシュ先輩が思い切ってボールを投げた！！

『どんなボールを投げてもムダですよ！！もうラッシュ先輩は僕の“ちょうはつ”の影響を受けているんですから！！』

右バッターボックスで、自分の茶色いバットを持つジュジュ先輩が打ちに行く！！

……だが！！

スパーン！

「ストライク！！」

何と不安視されていたストレートがインサイド（ど真ん中から内角側）ギリギリに決まったのだ！！

『そ……そんな！どうしてだ……！？ラッシュ先輩は“ちょうはつ”の効果でイライラしているはず……それによってコントロールは乱れているはずなのに……どういうことなんだ……！？』

この結果に一番驚いたのはジュジュ先輩だ。

思い描いたシナリオと見事に異なる原因を、把握出来ずにややパニック状態となった。

その様子を見て、ラッシュ先輩がニヤリと静かに笑う。

「インサイド……。まさかここであんなストライクゾーンギリギリいっぱいに、ビシッと決まるなんて……」

「よくわかんねぇけど、なんか勝負の流れがラッシュに傾き始めているような雰囲気を感じるぜ……！！」

ラッシー先輩、ホムラ先輩があまりの衝撃に立ち上がってしまう。

「正直僕も、今の結果は予想出来なかったよ……。なんて集中力なんだ……。あのジュジュ先輩のバットを一球で封じ込めたかも知れないよ……」

天才スイッチヒッターのチックまでも驚きの表情を隠せなかった。

『どうしてだ！狂った理由がわからない……わからない！！』

普段は絶対見せない焦りの表情を見せるジュジュ先輩。
チラッとマウンドのラッシュ先輩の姿を見た。

『……ハッ！！ま……まさか……！？』

そこでジュジュ先輩は、最悪の事態を思い浮かべた。

……まさか自分の戦術はすでに予想されていたのでは……と……。

『やっぱりな……。俺の考えていた通りだ。多分その戦術でヒートもやられっちまったんだな……。……だが、そんな甘い考えで俺に勝てると思うなよ！』

ラッシュ先輩はじっとジュジュ先輩を見ていた。

まさかの展開が続く１５球勝負！！

次回、さらに波乱は続く！！！

第６４話：「仲間を信じて！！自分を信じて！！」の巻（後書き）

ラプ：「そうよ。自分一人で悩んでいてもしょうがないのよ……。自分を信じている仲間がいる……。なのに自分が自分を信じないでどうするのよ」

ラッシー：「元気の良さがあさポケの売りだからな。苦しんでいる仲間を支えるためなら頑張るぜ！！」

カゲっち：「一方の１５球勝負も目が離せないや……。ドキドキしちゃうよ」

第６５話：「球場を包む衝撃の中で……」の巻（前書き）

ジュジュ：「くっそ……！なんでラッシュ先輩が動揺してないんだ！！」

ヒート：「もしかして……勝てるかも知れない……」

カゲっち：「ますます燃えてきたよ！！」

ラージ：「更なる衝撃、第６５話プレイボールだぜ！！」

第６５話：「球場を包む衝撃の中で……」の巻

『くっ……“ちょうはつ”の効果を受けているはずのラッシュ先輩が……なんであんな余裕の表情なんだ？まさか本当に作戦が通用しなかったってことなのか！？……ということはあの２球のボール球はわざとだったのか！？』

６球目に投げられた速球に、右バッターボックスのジュジュ先輩は完全に動揺していた。

いや、ジュジュ先輩だけではない。

『完全にジュジュペースで動揺していてもおかしくなかったはず……。２球続けてコントロールミスをしていたから、なおさらそう感じたけど……』

あの“つなぐ”打撃でチームを引っ張るパワーヒッター、ラージキャプテンも……、

『あのインサイドへの直球は野球経験者の僕たちから見ても、お見事としか言いようがないです……』

巧みなバットコントロールで、右に左にヒットを打つ天才スイッチヒッター、チックも……、

『すっげぇ～や……ラッシュ先輩』

強烈なフルスイングで4番に指名されたラッシー先輩も……、

『あのジュジュをたった1球で動揺させるとは……、普通じゃない何か威圧感を感じるぜ……』

さらにはジュジュ先輩に2度も敗れたヒート先輩までもが驚きを隠せなかった。

「な……何よ!!まだ、たった1球ストライクになっただけでしょ!!まだジュジュ先輩が負けたわけじゃないわ!!」

チコっちがスタンドに集まったメンバーの様子を見て、多少ムキになっている。

確かに6球目がストライクだったとは言え、まだジュジュ先輩の4勝、ラッシュ先輩が2勝だ。

だが、勝負の流れは徐々にラッシュ先輩側に傾き始めているのは、言葉に出してなくても、ここに集まったメンバー全員が感じ取っているに違いない。

「すごいや……ラッシュ先輩……。まさか野球でこんなにカッコイイところを見せてくれるなんて……驚いちゃった……」

僕は完全に感激の“オーバーヒート”状態になっていた。

……そこへ、

ポンッ

「!?」

僕たち仲良し4匹組＋ヒワダ中2匹組の席の上に座っていたゼルスコーチが、僕の頭を軽く叩いた。

「まぁ、ラッシュはバトル部の部長だからな。色々とバトルの経験を積んでいる。だからどんな状況でも、常に集中力が途切れることが無いんだろう」

ゼルスコーチがそのように話す。
スタンドのメンバーはみんな静かに聞いていた。

「それに戦術も素晴らしいものがある。さすがは頭が良いだけはあるな」

ゼルスコーチが感心したように言う。

「え!?アイツそんなに頭が良いのかよ!」
「アイツ、テストの結果とか見せてくれないから気になっていたけど……」

レウト先輩とホムラ先輩が食いつくように聞く。

「あぁ。アイツはバトルだけでなく、色々なスポーツもこなせるほど優秀だ。さらにガル先生やイックン先生に聞いたところ、中間テストに期末テストといった学力でも優秀な成績だったらしいぞ」
『えぇぇぇぇぇ!!!??』

ゼルスコーチの言葉にバトル部メンバー全員が驚いた。

『すごいや、ラッシュ先輩……。頭が良くて……さらに運動神経

抜群だなんて……カッコよすぎる……』

僕は目がキラキラして、さらに頭が“オーバーヒート”していた。
その様子を見てピカっちやチコっち、チック、さらにはヒイロ先輩やダイル先輩までもが苦笑いしていた。

さて、話が相当脱線しているような気がするが、ジュジュ先輩とラッシュ先輩の15球勝負の続きを見てみよう。

「どうしたんだジュジュ？あんなに余裕の表情を見せていたのに。もっと俺のことを楽しませてくれよ」

ラッシュ先輩はマウンドで楽しそうにしている。

「う……、まだまだ……まだまだこれからですよラッシュ先輩！！」

対して右バッターボックスに構えるジュジュ先輩は動揺を隠せないまま、もう一度トンとバットでホームベースを叩く。

「そうでなくちゃな！……それじゃいくぜ！！」

ラッシュ先輩がロジンバックを握る。

さぁ、次は7球目！！

『あのストレートはきっとたまたま良いところに決まっただけなんだ！……きっと次は僕が打てる！！』

ジュジュ先輩は茶色いバットをラッシュ先輩に向けてから、もう一度構え直す。

そんなジュジュ先輩に対してラッシュ先輩が足を上げる！

『これを打てるものなら打ってみろ！！』

そして、振りかぶって投げた！

『え！？スローボール！？』

ラプ先輩は驚いた。何とラッシュ先輩は思い切り力を抜いて、山なりにボールを投げたのだ！

『甘い！もらったぁぁぁぁ！！』

ジュジュ先輩はそのスローボールを思い切りフルスイングした！！！

……だが！！

「ストラーイク！」

「！？」

「えっ！？ウソでしょう！！？」

バッターのジュジュ先輩、そしてキャッチャーのラプ先輩は目を疑う。

いや、彼らだけじゃない。

「今の……もしかして……ナックルボールじゃ……」
「え？ナックルボールって……まさか……」

まずは天才スイッチヒッターのチック。

「ナックルボールッスね……。なんてピッチングスタイルなんスか……ラッシュ先輩は……」

ハイテンションフルスイングのラッシー先輩も。

「まさかあんなボールを投げるとは……、カントリーでも見たことねぇぜ……」

ピッチャーが本職のヒート先輩も、ラッシュ先輩が見せたこの変化球に驚きを隠せない。

「ねぇねぇラージくん？君たちが言っているナックルボールって何なの？」

ラグさんが隣に座るラージキャプテンに聞く。

「すみませんラグさん。このナックルボールというのは、野球の世界では“魔球”と言われているとても珍しい変化球なんです」
「“魔球”？そんなすごいボールをラッシュは投げたの？」

ラグさんがラージキャプテンに聞く。ラージキャプテンは黙ってうなずく。

「でも何で“魔球”だなんて言われているんだ、チック？」
「それはですねヒイロ先輩。ナックルボールの動きがとても不規則だからなんです」

ラグさんと同じ質問をしたヒイロ先輩にチックが答える。

普通の変化球というのはカーブでもフォークでも、一定方向にしか動かないため、例えどんなに動きが大きくても、それをある程度予測出来れば打ち返すことは可能だ。

「ただこのナックルボールだけはまるで枝から木の葉が落ちるように、ジグザグとした動きを見せるんです」
「それじゃあそれを予測すれば良いんじゃねぇのか？」

チックの説明に対して、ヒイロ先輩がそのように言う。

「本当にそれが出来れば良いんですけどね……。でも僕が説明したこの動きは、実は打席に立つバッターにしかわからないんです。言い換えれば受けるキャッチャーも、投げるピッチャーも、投げてみるまではわからないような動きをするんです」

「な……そんなこと有り得るのかよ……」

ヒイロ先輩は驚きに満ちた顔をしている。

確かにナックルボールは右に左に動く変化球として知れ渡ってはいるものの、実際にはその変化する量が一定でないことが、さらに打つのを困難にしているのだ。

ピッチャー視点から見ても、あるときは大きく変化をしたと思ったら、もう一回投げたときにはあまり動かないただのスローボールになることもありえるし、さらにはコントロールがあまり効かないこともある。

そのため普通の変化球よりもリスクが伴う可能性があるのだ。

そのためナックルを投げるピッチャーは、ひたすらナックルを投げることに集中することが多いらしい。

「し……しまった！！まさかこんなボールを投げられただなんて……！！」

ジュジュ先輩は自分の作戦が上手くいっていないことと、このナックルボールでさらに焦りを見せてしまう。

これでジュジュ先輩の４勝、ラッシュ先輩が３勝となった。

続いて８球目！！

「いくぜ！！」

マウンド上のラッシュ先輩が大きく振りかぶって投げた！！

「確かにこの状況は僕にとって不利かも知れない……。でも……でもだからって負けるわけにはいかないんだ！！！あさポケ一の“アベレージヒッター”のプライドが……あの人の気持ちが許さない！！！！」

ジュジュ先輩は見送ればボールかも知れない、外角低めギリギリ

の速球を思い切り振りぬいた！！！

カキーーン！

「お！！？」

「良い打球だ！！」

スタンドのメンバーがグラウンドに注目する！！

打球はレフトの白線に強く弾んだ！

「フェア！！」

キュウコン監督がコールした。

「ハァ……ハァ……ハァ……見ましたか、ラッシュ先輩……。僕だって一人の野球選手なんですよ……。簡単に引き下がると思わないで下さい……」

ジュジュ先輩は一度倒れかかるも、またユックリと立ち上がる。

その姿を見ていると、まるでヒート先輩が一球一球気持ちを込めて投げているように、ジュジュ先輩も一球一球全力で食らいついているように見えた。

「何だろう、この気持ち……。なんか……ジュジュ先輩が別人のように見えるよ……」

「カゲっちくんもそう思うの？……あたしもそう思う……。イヤミばっかり言って……チームのことより、自分の結果しか考えてないジュジュ先輩には見えないわ……」

僕やピカっちはジュジュ先輩の姿に、なぜかとても複雑な心情になる。

『なんでだジュジュ？……なんでそこまで勝利に執着するんだ……？あのノビの良いストレート、それに“魔球”ナックルを操るラッシュに……とても勝てそうもない相手になぜそこまで食らいつこうとするんだ……？』

ヒート先輩もジュジュ先輩の見せる姿に疑問を抱く。

『ジュジュ……。全く変わってないな……。去年の“カントリー・

リーグ”の打席で見せたあのときのまんまだ……。もう少し“いじっぱり”な性格を修正出来れば良いのにな……』

ラージキャプテンが打席の中で意地を見せるジュジュ先輩を見て、1年前のあの“悲劇”の前のカントリー・リーグを思い出していた。

1年前……。7月最後の週末に行われた“カントリー・リーグ”の初戦。

そこであさひポケ中学校は、優勝候補の強豪にじポケ中学校と試合を行っていた。

その試合に1年生ながら、持ち前のセンスを生かしてし烈な外野のレギュラー争いを制したジュジュ先輩も出場していた。

ちなみに彼だけが今残っている5人の先輩の中で、1年前のナインの中で唯一のレギュラーだったらしい。

試合は早くからあさポケ投手陣が、にじポケ打撃陣の前に次から次へと点数を失っていく。

「あ～あ。早く試合終わんねぇかな～」
「時間のムダ。スタミナのムダ。やってらんねぇよ～」

試合が進むに連れて次第にやる気を失う先輩たち。

……その中で、

カキーーン！
カーーン！
カキーーン！

９番センターで出場していたジュジュ先輩が、３打席連続ヒットを打って孤軍奮闘していた。

『僕たちは弱小校。でもこの試合は勝ちたい！！いつも一緒に練習をしてくれるピースキャプテンのためにも！！』

ジュジュ先輩はそんな気持ちを抱いていた。

しかし、そんな彼に決して忘れられない悔しい出来事が起きた。

9回裏にじポケが22点、あさポケが0点という状況で迎えたときに起きた。

『ノーアウト一二塁……。1点でいいから返したい……。そして次につなげるんだ!!』

9番のジュジュ先輩が右バッターボックスに入る。

そんな彼に対して、にじポケのエースのカイリューが楽々と追い込む。

『……ツーストライク……。でも負けない!!』

3球目から必死に粘るジュジュ先輩。

カン!
コーーン!
カン!!

「ハァ……ハァ……くっそ!なんてスタミナだ。もう9回なのにちっともスピードが落ちない!」

ジュジュ先輩に疲れが出始める。

そして向かえた１５球目！！

ビシィーーー！

「ストライク！バッターアウト！！ゲームセット！！！」

結果は空振りだった。

『打てなかった……。せっかくのチャンスだったのに！！！』

ジュジュ先輩は自分に怒りを感じながら、ベンチに戻る。

しかし、そこで彼を待っていたのは……、

「へっ！チャンスで打てないなんて、お前も大したことが無いんだな」

「だから努力してもムダなんだよ～。そこんところもうちょっと頭使えば～？」

心ない言葉の嵐……。彼にとってはこれ以上無い屈辱だった。

「……」

次々とベンチから出ていく先輩に対して言い返せないジュジュ先輩。

……ただその中でピースさんは違った。

「ジュジュくん……、悔しいね……。みんなが一緒になって戦えば勝てるかも知れないのに……」

「ピース……キャプテン……。すみません……僕がチャンスで打てなかったから……バカにされて……」

ジュジュ先輩は泣いていた。

「ううん。そんなこと無いよ……。君は優れたセンスでここまで頑張ったんだ。……負けて悔しいならそれをバネにもう一回頑張ればいいんだ。……勝てるように……みんなに勝てるように……誰にも負けないように……！！！」

ピースキャプテンが力強く励ました。

「さ、行こうよ。まだ大会は始まったばかりだからさ～♪」

笑顔になったピースさんはベンチの外に出ていった。

だが、その背中は……背番号１０はどこか寂しげだった。

『そこから僕は誰にも負けないように練習してきたんだ！！無敵のプレーヤーになるために……一度は挫折を感じた僕に、力強く励ましてくれたピースキャプテンの言葉の通りに！！！』

ジュジュ先輩がトンっとホームベースを叩く。

『だから……こんなところで負けたくない！！！』

第６５話：「球場を包む衝撃の中で……」の巻（後書き）

ジュジュ：「僕は負けるわけには……負けるわけにはいかない！！」

チコっち：「がんばってぇぇ～！！負けないでぇぇ～！！」

ヒート：『ジュジュの気持ちはわかる。だがだからって一人だけの力じゃ……団体競技を勝ち進むのは困難だ。みんなの気持ちが一つにならなきゃ……！』

第６６話：「気迫の終盤戦！！そして決着！！」の巻（前書き）

カゲっち：「すごい！すごいやラッシュ先輩！！もうかっこ良すぎる！！」

チコっち：「ジュジュ先輩だってまだまだこれからよ！！」

ピカっち：「そんな１５球勝負もついにクライマックスです！」

チック：「どんな結果なのか、第６６話プレイボール♪」

第６６話：「気迫の終盤戦！！そして決着！！」の巻

ラッシュ先輩のあのナックルには驚いちゃったけど、ジュジュ先輩も負けじと食らいついているぞ！！
ますます目が離せられないや！！

さぁ、次は９球目！！

「オラァッ！！」

ラッシュ先輩が振りかぶって投げた！！

『ラッシュ先輩に負けるわけにはいかない。でも“ちょうはつ”は効いていないみたいだし、どうすれば……！！？』

バシーン！
「ストライク！！」

ジュジュ先輩は色々な動揺と力みと疲れのせいか、真ん中に近いストレートを見送ってしまった！

「しまった!?今のはこれ以上無い絶好球だったのに!!」

ジュジュ先輩は悔しさのあまり、左手でポーンとバットを叩く。

『ど真ん中のボールを打ち返せないなんて、相当動揺が生じているんだな。次はナックルかストレートか、それともまた別のボールか考え込んでしまってるようだ』

ラッシー先輩はじっと戦況を見つめながら、そのように考える。

「ラッシューー!!!」
「がんばれ!!」
「負けるんじゃねぇぞ!!」

一球ごとに歓声が大きくなる。

「ラッシー。おまえの言う通りだな!!こんなに熱くなれるなんて、すげぇな野球ってのは!!」
「ああ!野球ってどこが面白いのかわからなったけど、俺たちバトル部と同じように熱いバトルが出来るんだな!!」

ホムラ先輩、レウト先輩が熱くなりながらラッシー先輩に話しかける。

「そ……そうッスか？野球が楽しいと言ってもらえるなんてうれしいッスよ！！」

ラッシー先輩が照れながら答える。

「ラージくん。僕も野球っていうスポーツはそこまで詳しく無いけど……、でもこの勝負を見ていると気迫を感じるよ。なんていうか……どっちも例えどんな逆境でも、絶対に諦めないっていう……強い気持ちが込められた気迫がさ」

「ラグさん……」

ラグさんもこの激しいぶつかり合いに、何か感じるものがあるらしい。

「バトル技を強化したいって言っていたね。きっと君たちあさポケナインなら、ものすごくパワーアップ出来ると思うよ。僕もそのためにたくさんサポートするよ。よろしくね」

「ラグさん……。あ……ありがとうございます！！！俺、ラグさんに教えて頂けるなんてすごく幸せです！！！こ……こちらこそよ

ろしくお願いします！！」

「オレ……野球ってただボールを投げたり、打ったりするだけだと思ってたけど、全然違うな……。なんか心の中で燃え上がるモノを感じるぜ！」

「オイラも！こんなにワクワクするなんて思わなかったよ！」

ヒイロ先輩とダイル先輩がそのように話す。

「そうですね。僕も部活の練習に、いつもそんな気分になりますよ。そしてなぜか頑張らなくちゃって気持ちになるんですよ。例えどんな苦難でも突き破らなきゃ……、例えどんな逆風でも立ち向かわなきゃ……って気持ちに。きっとラッシュ先輩たちは感じているに違いないですよ。このスタンドに集まった、みんなの気持ちを大切にしなくちゃって……、仲間の応援に応えなくちゃって……」

「カゲっち……」

僕の真剣な表情にヒイロ先輩が注目する。

『カゲっち……か。良いぜその眼差し。最初会ったときには感じられなかった、強い意志が伝わるからな。……きっとコイツは大切

な仲間やかけがえのない友達のためなら、思いきった行動が出来るヤツだな……。同じ“ヒトカゲ”としてなんか楽しみな存在だぜ！！……フッ……よろしくな、カゲっち！』

ヒイロ先輩は静かに笑った後、またラッシュ先輩たちの方に視線を向けた。

さて１５球勝負の経過だが、ここまで９球でジュジュ先輩が５勝、ラッシュ先輩が４勝という状況だ。

このままどうなるのだろうか？次が１０球目！！

マウンド上のラッシュ先輩が振りかぶって、投げた！！！

「オラァァッ！！」

鋭い速球が内角高めに飛んでいく！！

「内角高め！当てるのは困難だけど……負けられない！！」

ジュジュ先輩がボールにタイミングを合わせようとするが……、

パシィーーン！！

「ストライク！！」

ボールがラプ先輩のキャッチャーミットに収まるときの音が響き渡る。

「空振り……。球数が増えるに連れて、だんだんとラッシュ先輩が気迫を見せていますね……」

「うん。今まで低めにしていたボールを、いきなりあんな……体に近いギリギリのところに投げられたら、打ち返すのって難しいよ……」

僕とチックがそのように話す。

「でもこれでラッシュが追いついた！」

「やるなぁ！さっすがラッシュだぜ！！」

レウト先輩にホムラ先輩が、手を叩いて喜ぶ！

「いっけぇぇぇラッシュ！このまま決めてしまえ！！」
「あと3球だ！！油断するなよ！！」

ゴーシュ先輩、モモ先輩がさらに大きな声で応援する！

「何よ！！ジュジュ先輩が負けるなんてことありえないんだから！！ジュジュせんぱぁぁぁぁぁい！！」

チコっちも負けじと気持ちのこもった応援をする！！

さぁ、いよいよ勝負は終盤戦！！次は１１球目！！

『……そろそろ決めにかかるか……。ジュジュには悪いが、天狗の鼻を折らないことには勝っても何の意味も無いからな……』

ラッシュ先輩はポーンとボールを上に投げてから、投げる構えに入る。
そして……、

「いくぜ！！」

そのままラプ先輩のミットめがけて投げた！！

ポンッ！

『え！？なんなの？』

キャッチャーのラプ先輩が驚きの表情をみせる。

無理もない。ラッシュ先輩が投げたボールが、突然音を発したと思うと何か青いものに包まれたのだから……。

いや、それだけではない……、

ポンッ！！

『え！！ボールが……ボールが２つに分かれた！！？』

『ウソでしょ！？』

バッターのジュジュ先輩、そしてラプ先輩がその信じられない光景に言葉を失う。

一方スタンドでも……、

「なんだあのボールは！？」

「青白くなったり、２つに分かれたり……、とんでもない技だな！！」

ホムラ先輩にレウト先輩が立ち上がって驚きの表情をみせる。

「……もしかしてあの技……」

「なんだムゲン。何か心当たりでもあるのか？」

ムゲン先輩の言葉にゴーシュ先輩がそのように反応する。

『くっ！ボールが２つに分かれるだなんて……！一体どっちが本物なんだ……！？』

ジュジュ先輩が迷いを見せはじめる。

『わからない……。でも……やるしかない！！』

ジュジュ先輩が思い切ってバットで、ボールを打つ！！

カーーン！！

『よし！手応えあり！！』

ジュジュ先輩はホッとした表情を見せる。

……だが！！

「ストライク！！」

「え！！？」

『ニヤリ』

何ということだろうか。

ジュジュ先輩が捕らえたと感じたボールは、実はダミーで本物は既にラプ先輩のミットに収まっていたのだ……。

「なんて技なの……？いつの間にかミットに収まっていたなんて……。バトル部部長ってラッシュ先輩は言っていたけど、野球でも熟練者に負けないくらいの技術だわ……」

ラプ先輩は目を大きく開きながら、自分の周りで起きている真実に驚く。

「やっぱりね……。あれは僕の技を参考にして編み出した技だね」

「えっ！！マジかよ！！」

ムゲン先輩の言葉にゴーシュ先輩が驚く。

「あぁ。以前ラッシュから僕の“嘘弾（ライアーショット）”と、“本当弾（リールショット）”について教えて欲しいって頼まれたんだ。でもまさか……ここまで利用出来るだなんて……僕も思わなかったよ……」

ムゲン先輩がそのように言う。

ムゲン先輩のこの嘘弾（ライアーショット）という技。

これは中身が空っぽのボール状のエネルギーを作って、相手に飛ばすフェイント技。

対して本当弾（リールショット）。

これは彼のバトルスタイルに関係するのだが、重力を操ることが

出来る能力（すごいときは相手の動きを封じるほどらしい）を持つため、このボール状のエネルギーに重力を集中させているらしい。

当然相手にぶつかると相手は、重力に包まれてしまう。

「その本当弾って、おまえの技、“重力球”のことだろ？」

「まぁ、そういうことになるかな。でも“重力球”は灰色をしているけど、この本当弾に関しては、嘘弾と同じ青白い色をしているからね。相手からすれば、簡単に見分けるなんて困難なのさ」

ゴーシュ先輩、ムゲン先輩がそのように話す。

ちなみにムゲン先輩は、この二つのエネルギー弾を飛ばすときには、蹴り飛ばして相手にぶつけるらしい。

『うまくいったぜ……。ムゲンから教わった2つの技を参考に作り出した“ライアリール波動弾”がな……』

ラッシュ先輩がフゥーと一息つきながらそういう。

そう、ラッシュ先輩が投げるときに使用したこの技こそが、“ラ

イアリール波動弾”なのだ！！

『この技は俺が扱える波動を上手く利用して、相手を惑わすことが出来ないかとひそかに練習していたんだ。実際に今こうして使ってみたが……』

ラッシュ先輩はなかなかの手応えを感じているようだ。

さぁ、ジュジュ先輩の5勝に対してラッシュ先輩が6勝とついに逆転したぞ！！

続いて12球目！！

『くっ！ついに逆転された！！まさか……まさかこの僕が負ける……？』

ラッシュ先輩が投げる構えに入る前に、一度ジュジュ先輩はタイムを要求した。

『いや、僕は誰よりも厳しい練習をしてきたんだ！誰にも負けないために！！だから……このまま終われない！！』

ジュジュ先輩は何度か素振りをした後、また右バッターボックスに入る。

「プレイ！！」

さぁ、プレイ再開だ！！

「オラァァ！！」

マウンドのラッシュ先輩が思い切り投げた！！

『打つ！打て！当たれぇぇ！！当たってくれ！！！』

ジュジュ先輩がアウトサイド（外角のど真ん中）のストレートを思い切りフルスイングした！！

カキーーン！！

「おっ！！」

「あっ！！」

スタンドの僕とチックが立ち上がる！！

ジュジュ先輩が気力を振り絞った打球が空高く飛んでいく！！

「これが……これが、僕の全力だぁぁぁぁぁぁ！！いっけぇぇぇぇぇ！！大空を切り裂けぇぇぇぇぇぇ！！！」

打ったジュジュ先輩は打球が飛んでいったレフトを指差す！！

カッシャーーン！

打球はレフトのフェンスの上側に直撃した！

あともう少し打球が高ければ間違いなくホームランだったに違いない！

『……俺に負けまいとジュジュも本気だな……。まさにアイツのプライドが負けることを許さないんだろう』

打たれたラッシュ先輩は打球を見たあと、またクルリと元の位置に戻る。

『だが、プライドだけで勝負が勝てるとは限らない……。そのことを今ここで感じさせてやる！！』

ラッシュ先輩がまたジュジュ先輩を睨むように見た！

さぁ、続いて１３球目！！

『やっぱりあのボールを投げてやるか！』

ラッシュ先輩が振りかぶって投げた！！

『！……またあのボールか！！バットに当たらないというなら……』

ジュジュ先輩が青白くなったボールをしっぽで“はたいた”！！

……しかし！

シュルルル……スパーン！！
「ストライク！！」
「なっ！！スピードが変化した！？」
「な……なんなんだ……なんなんだあの技は！！？」

スタンドのメンバーが目を疑うような出来事に驚く！

そう、ラッシュ先輩のこの“ライアリール波動弾”は、こうして波動で出来たボールを、自分の波動で自在に操ることが可能なのだ！！

『くっ……何で……！僕の方が野球の技術は上のはずなのに……練習量が上なのに……どうして勝てないんだ！！』

ジュジュ先輩がユックリと立ち上がる……。

しかしもう彼のスタミナ、そして気力は限界なのかフラフラしている。

それでもジュジュ先輩は……、

『……負けられない。……負けたくない。……勝ちたい！』

ユックリと茶色のバットを握る……。

「ジュジュ……」

「ジュジュ先輩……」

そしてまたバットを構えて、素振りをする……そして。

「絶対に僕は負けませんよラッシュ先輩！！」

そう言い放つと右バッターボックスに入った。

さぁ、これで終わるのか！！１４球目！！！

『あと一球！あと一球！！あと一球！！！あと一球！！！！あと一球！！！！！』

スタンドのあと一球コールが大きくなる。

「何言ってるのよ！！ジュジュ先輩は絶対に勝つんだから！！！」

チコっちは顔を真っ赤にして負けじとジュジュ先輩を応援する！！

「終われない！まだ僕は終わるわけにはいかない！！」

ジュジュ先輩がじっとマウンドのラッシュ先輩を見る！

そんなジュジュ先輩にラッシュ先輩が思い切り投げた！！

「オラァァァ！！」

果たして勝負の結果は！？

カーーン！！

「！！！？」

「！！？」

「……」

良い音が響いたとたんに、バッテリーはビクリとした。対してジュジュ先輩はじっとしたままだ。

スタンドでも『あーー！！』とか『打った！！』とかの歓声が包み込む。

打球はライトへと飛んでいく……が……。

『終わったなジュジュ……。残念だがお前の負けだ……』

審判役のキュウコン監督が目をつぶる。

そして……、

「ファール！！バッターアウト！！！ゲームセット！！！」
『ワァァァァァァァァァ！！！！！』

考えられない結末だった。

確かにジュジュ先輩が放った強烈なライナーは外野へと飛んでいったのだが、打球はライトの白線より左側……つまりファールゾーンに落ちたのだ。

この１５球勝負はバッターは、ボールかヒットにしなきゃならないルール。

よってファールはアウトと見なされるのだ。

つまりこの結果で勝負はジュジュ先輩６勝、ラッシュ先輩の８勝となり、ラッシュ先輩の勝利で幕を閉じた。

「すげぇぞ、ラッシュ！！」
「さっすがはバトル部の部長！！」
「最高だぜ！！」

未だに地鳴りのような大歓声が止まない。

「ラッシュが……勝った……。すげぇ！！すげぇよラッシュ！！」

みんなから少し離れた場所に座るヒート先輩が、興奮気味になる。

「やっぱやるわね～♪おめでとラッシュ」

サクラ先輩も小さく拍手をする。

「……サクラ？もしかしてラッシュが勝つって感じていたの？」

レイラ先輩が聞く。すると、

「もちろんよ……、幼なじみだからね……」

「一度は大きくリードされていたのに……ラッシュ先輩……すごい！」

「あぁ、オレもここまですごい展開になるとは夢にも思わなかったぜ！」

「オイラも感激です～！！」

僕とヒイロ先輩とダイル先輩は笑顔を見せる。

「チコっちちゃん、だ……だいじょうぶ？」

「ジュジュ先輩が負けるなんて！！悪夢だわ～！！！」

ピカっちは苦笑いでチコっちを励ます。

「レウト先輩すごいッスねラッシュ先輩は！！」

「あったりめーだろ!!アイツは俺の親友なんだからな!!」
「ラッシュはちょっとやそっとのことで負けないぜ!!」

ラッシー先輩の周りに座るレウト先輩やホムラ先輩もハイテンションだ!!

「すごいな。まさか野球で勝つとは」
「うん、あの波動弾もお見事だったよ」
「さっすがだぜ!!」

モモ先輩、ゴーシュ先輩、ムゲン先輩も惜しみ無く拍手を送る。

「ラグさん!!ラッシュ先輩のバトルはすごいですね!!」
「うん。僕も彼にバトルの方法を色々教わってきたからね。ラッシュを信じてたよ」

ラージキャプテンもラグさんも拍手をする。

大きな拍手が球場全体に響く!!

苦しい展開から見事に逆転をしたラッシュ先輩を讃えるように。

「ううぅぅぅ……。悔しい……負けただなんて……。うぅぅぅ……」

ジュジュ先輩はあの瞬間、呆然と立ち尽くしたままだったが、やがてバットを握ったまま倒れてしまった。

……敗北……。

それはジュジュ先輩が久しく耳にしなかった言葉である。

一度は有利な展開にし、今日も勝利を手に出来ると信じていた。

しかし、今こうして大歓声がラッシュ先輩を讃えているように、結果は彼の敗北。

この事実が彼のプライドを簡単に打ち砕いてしまったのだった。

彼は起き上がれず、ずっと涙を流し続けていた。

……誰にも気が付かれることなく……。

第６６話：「気迫の終盤戦！！そして決着！！」の巻（後書き）

ヒート：「あれがラッシュのバトルなんだ……。気迫が全然違うぜ！」

ラプ：「こんな人が部長だなんて、うちのバカ部員とは大違いね！」

バカ部員（４匹）：（泣）

作者：「さて、次回からもまだまだ合宿編は続きますよ！」

ナイン：『お楽しみに！！』

第６７話：「勝負の世界で大切なこと」の巻（前書き）

ヒート：「やっぱり勝つってのは気持ち良いな！！」

カゲっち：「どうしてラッシュ先輩はここまで勝てるのかな？」

ピカっち：「このお話で明らかになるわよ♪」

ラプ：「第６７話プレイボール！」

第67話：「勝負の世界で大切なこと」の巻

ジュジュ先輩とラッシュ先輩の一歩も譲らない15球勝負!!
結果はバトル部部長のラッシュ先輩の勝利だったけど、すごく良い勝負でしたよ!!

「うぅぅ……悔しい……。どうして負けたんだ……」

ジュジュ先輩は右バッターボックスでずっと立ち上がれない状態でいた。

そんな彼に一つの大きな影が近づく。

「……ジュジュ、大丈夫か？立てるか？」

その影……ラッシュ先輩が優しくジュジュに手を差し延べる。

ジュジュ先輩はその手をつかむと、ユックリと立ち上がった。無言で下を向いたまま……そして顔いっぱいに涙をうかべながら……。

そんな様子を見たラッシュ先輩が話しかける。

「……ジュジュ、お前の実力はなかなかだったと思う。俺もこん

なに激しい勝負が出来て嬉しいぜ……。だが、どうして最終的に敗れたかわかるか？」

ラッシュ先輩は真剣なまなざしでジュジュ先輩に聞く。

「……僕の作戦が通用しなかったから……。同じリザードンのヒートなら通じた僕の作戦が……」

ジュジュ先輩は何度も涙を拭き取りながら答える。
よほど悔しかったのか、涙は拭いても拭いてもあふれてくる。

「そうか。俺の推測だがお前の作戦は、“相手の平常心を無くし、動揺と焦りを誘う”ことだろう？」
「わ……分かっていたんですか！？」

ジュジュ先輩は驚く。

「ああ。おまえがバトル部に来てから、ずっとイヤミっぽく相手と会話をしていてから気になっていたんだ。さらに１５球勝負では挑発的な態度も見せていたからな」

ラッシュ先輩がそのように説明をする。

『もしかして“ちょうはつ”をくりだしていたのかしら？確かにジュジュのあの態度、それに技の効果を考えれば、説明がつくわね……』

ラプ先輩がそのように考える。

「だが、俺にその作戦は通用しないぜ。俺は普段からバトルに関しては色々な特訓を重ねているからな」

ラッシュ先輩がそのように説明をする。

あとでレウト先輩やモモ先輩たちに聞いた話だと、ラッシュ先輩は朝早くから町全体をランニングしたり、滝にうたれたりするなど、他のバトル部のメンバーとは比べものにならないほどの特訓をしているらしい。

「それにバトルに関しては色々な経験を積み重ねているから、それに対しての戦術も考えられるんだ。例えば“ちょうはつ”や“いちゃもん”といった相手のメンタル面を揺るがす技は、常に平常心を保てば良いんだ。今回の勝負でも俺はそれを心掛けていた」

「そ……そんな……。それじゃ僕の技は効いてなかったのか……」

ラッシュ先輩の説明にショックを受けるジュジュ先輩。

さらにスタンドにいたあさポケナインも静まり返る。

『厳しいな……勝負の世界って……。僕も自分のバトルの技術にはかなり自信はあるけど、もしかしたらそれが通用しない相手がいるかも知れないってことだよね……』

僕はラッシュ先輩とジュジュ先輩のやり取りを聞きながら、複雑な心境になる。

「……でもそれだけの理由で負けただなんて納得出来ない！！」

ジュジュ先輩はラッシュ先輩を睨むような表情を見せる。

すると、

「……ジュジュ、勝つことは大事だ。自分が苦しんだり、一生懸命頑張ったことが報われたと実感出来るこの上ない感激の瞬間だからな。……だがお前の場合は違う。勝つことで相手より実力が上だと調子に乗っているんだ」

「！？」

ラッシュ先輩の言葉にジュジュ先輩が固まる。

「それに勝つことに執着し過ぎて、勝つために自分がとった行動を振り返ることもしない。それでは作戦がワンパターンになってもおかしくないんじゃないのか？」

「そ……それは……」

ジュジュ先輩が下を向く。

「それに自分より実力が下の者を見下しているんじゃないのか？今回の１５球勝負のように……」

「……」

ジュジュ先輩は反論出来ない。

「勝負の世界ってのは常に何が起こるかわからないんだ。だから１回勝てたからといって、次勝てるとは限らない。１００回勝っているヤツが１回しか勝っていない相手に勝てるとは限らないんだ」

ラッシュ先輩がそのように言う。

『確かに、野球でもそうだ。僕は打撃練習のときに一回当たらないからって諦めていた。でも最後までやってみたら、最高の結果が生まれたっけ……』

僕はじっとそのように考える。

「大切なのは負けたときの反省じゃない。勝ったときの反省なんだ。例え勝負に勝てたとしても通用しない戦術があるはずだ。それを把握することで自分を高めることが出来るんだ」

ラッシュ先輩が静かに説明した。

「ラッシュくんの言う通りだ。私たちあさポケが勝てない、弱小だと言われる理由も同じなんだ」

「監督……」

キュウコン監督がマウンド左に進み、スタンドのナインに話しはじめた。

「あさポケナインのメンバーの野球の実力は、私が担当してきた野球部のメンバーの中でも良い方だ。でもみんなには“強い気持ち”と“自分を高めようとする努力”が足りないんだ。今君たちが持つバトル技で、他校のライバルたちに通用するとは限らないことをこの１５球勝負で感じたんじゃないか？」

キュウコン監督がこの特別合宿の真意を話す。

「いくら優秀な能力を自分で持っていると感じていても、さらに実力が上の者など数多くいるんだ。それに相手が弱そうだと感じても油断したら絶対に勝てない。野球でも同じだ。一球に対する気持ち、アウト一つに対する気持ちを大切にしないチームが勝ち進むなど決してありえないんだ」

キュウコン監督は強い口調で話す。

「だからもっと自分を高めてくれ。このバトル部の先輩たちと一緒に……チームメイトと一緒に……」

最後にキュウコン監督は寂しそうな声で話して、静かにその場を後にした。

『自分を高める……か。俺はエースとして何をしなきゃいけないんだ？』

『４番としてしなきゃいけないこと……俺は足りないんじゃねぇか？』

『キャプテンとして、チームメイトに出来ることまだまだあるんじゃないのか？』

『最高のキャッチャーを目指さなくちゃ……』　『僕に出来ることを探さなくちゃ！！』

『もっともっと頑張らなくちゃ♪』

キュウコン監督の話の後、ナインは静かにその場に立ち上がった。

その僕たちの真っすぐな視線の先にはただ一つ……。

つかめそうでつかめない“勝利”という言葉だけだった。

『それでこそ、俺の感じたあさポケナインだ。お前らは苦しくても決してひとりぼっちなんかじゃねぇ。誰かが見守ってくれてるんだ。誰かが助けてくれるんだ。それを忘れなければ今以上にすごいチームになれるぜ』

ラッシュ先輩は静かに笑いながら、スタンドを見つめていた。

第６７話：「勝負の世界で大切なこと」の巻（後書き）

ヒート：「そうか。俺たちにはまだまだ足りないことがたくさんあるんだな」

ラプ：「この特別合宿の間に自分をしっかり高めなきゃね！！」

ラッシー：「頑張ろうぜ！！俺たちあさポケナインのパワーを見せてやろうぜ！！」

ナイン：『オーー！』

第６８話：「１５球勝負の後はハチャメチャに探検だ！！？（汗）」の巻（前書き）

ラプ：「……！？（汗）」↑タイトルに口をあんぐり開ける

チコっち：「作者さん、夜通し書いていたから変なテンションなんでしょ？」

作者：「いや、この部分はバトル部視点のときも面白かったからね……。まぁ、気がついたら朝になっちゃったけど」

ピカっち：「一体何があったのかしら？不安だけど第６８話プレイボールです」

第６８話：「１５球勝負の後はハチャメチャに探検だ！！？（汗）」の巻

勝負の世界はどんな状況でも油断することが許されない。
しっかりとそのことを受け止めなきゃ！！

１５球勝負のあと、再びバトル部部室に戻ることになった僕たち。

「だけど何度振り返っても、ラッシュのピッチングは見ててかっこよかったぜ！！マジで野球やれば良いんじゃねぇのか！！」

戻る途中にヒート先輩が興奮が冷めない様子で、ラッシュ先輩に話しかける。

「ワッハハハハ！！そういってもらえるとジュジュに勝負を挑んだ甲斐があったな！！でも俺よりお前の方がもっと熱い勝負ができるんじゃねぇのか？エースだから！」

ラッシュ先輩は、笑い飛ばしながらヒート先輩の背中を勢いよくバン！バン！と叩く。

「わわっ！！あのな、いじるのは良いけど加減を考えてくれよ～！！」
「ワッハハハハ！わりいわりい、つい力が入っちまった！！」

まぁ、そんな感じで2匹のリザードンは楽しそうに歩いていた。

「ラッシュ先輩楽しそうッスね♪」

「あぁ、ヒートに対して自分との共通点を見出だしているんだろうな。何かに対してものすごく熱い感情を持っているその様子をな」

「おまけに自分より年下のリザードンだから、弟分のように接することが出来て嬉しいんだろ？ヒートもラッシュを兄貴分のように慕っている感じが見られるしな！！」

リザードンコンビの後ろを歩くラッシー先輩、ホムラ先輩、レウト先輩はそのように話していた。

でもラッシー先輩もホムラ先輩にレウト先輩を、兄貴分として捉らえはじめていたに違いない。

さらに後ろを歩くラグラージコンビも既にその意識が出始めていた。

「俺もキャプテンとしてチームを助けるような技術を得たいです！！」

「ハハハハ。僕も誰かの力になりたい気持ちは一緒だよ。そういう気持ちをずっと忘れずに持ち続けていくことは大切だよ」

ラグさん、そしてラージキャプテンも、とても今日初対面とは思えないほど仲良くなっていた。

「バトル部って本当にすごい場所ですね、ヒイロ先輩！！」
「ああ！それにラッシュ先輩のバトルって何度見ても熱くなれるよな！」

ラグラージコンビの後ろを歩くヒトカゲコンビもまだ、ラッシュ先輩のそのバトルスタイルに燃え上がる感情を抱いていた。

「カゲっちくんもヒイロ先輩もすっかり仲良くなっちゃったね♪」
「そうね。そばで見ているあたしもうれしくなっちゃうわ♪」
「オイラもすごく……すごく楽しく感じるよ！！」

ヒトカゲコンビのすぐ後ろを歩くピカっち、チック、ダイル先輩もニコニコしていた。

……さてそんな和やかなムードの中、ションボリととぼとぼ歩く2匹がいた。

「ジュジュ先輩……。今回は残念でしたね……」「チコっちちゃん……。君はとても優しいんだね。勝負の間もずっと応援してくれたの気づいたよ。だから本当は勝ちたかったけど……」

ジュジュ先輩とチコっちの2匹だ。

あの勝負のあと、ジュジュ先輩の下へただ一人駆け付けたのがキッカケで、2匹は一緒に歩いていたのだ。

えっ？チコっちがジュジュ先輩のそばにいたら暴走チコリータになるんじゃないのかって？

確かに僕もその心配はあったけど、この時ばかりは暴走することなくチコっちも励ましていたようだ。

チコっちはああ見えても、傷ついたり苦しんでいる人をいたわる気持ちはあるからね。だから植物を優しくたくさん育てることが出来るのも納得できるんだ。

ふとそんなことを考えていた僕だったが、そこへ……、

「く～ッ！！ラッシュのヤツあんなカッコイイところ野球部のかわいこちゃんに見せやがって！ガッチリハートを奪ってるじゃんか！！！」

「……ほぇ？」

ジュジュ先輩たちの後ろを不機嫌な様子で歩く1匹のキノガッサ。僕は彼の言葉を聞いたときに、なぜか拍子抜けした気分になった。

いや、僕だけじゃない。

野球部のかわいこちゃん……つまりピカっちやチコっち、そしてサクラ先輩にレイラ先輩と歩いていたラプ先輩も、目を点にして立ち止まっている。

「あっちゃ～。ラグの仲間の“キノガッサ”が悪いクセを出し始めたか」

ラッシュ先輩が頭を抱える。

実はこのキノガッサはラグさんの仲間らしく、自分を強化するた

めにこのバトル部に来ているらしいのだが……。

「どうも女癖が悪いというか……バトルの実力は中々なのに困ったヤツなんだ」

「ハハ……ハハハ」

ラッシュ先輩の様子を見て苦笑いするヒート先輩。

さて、当の本人はというと……、

「おっ！そこのピカチュウちゃん！オレのカッコイイところ見たいか！？見たいよな～！？」

「えっ？えっ……？」

ピカっちはすごく困った表情をしている。

「ちょっとピカっちが困っているからやめて下さいよ」

僕はてくてくキノガッサさんに近づくが……、

「おっ！そこのチコリータちゃんもオレのパワフルな技を見たいよな！？良いぜ見せてやるよ！！」

「ちょっ……ちょっと何するのよ？」

キノガッサさんはチコっちにも話しかける。

「おいちょっとキノガッサ！前に俺が言ったこと忘れたのか？」

さすがのラッシュ先輩も彼の暴走を止めようとする。

……だがその必要は無かった。

「おっおっ！！そこのラプラスちゃんも良いところ見せてやるぜ！！」

なんとキノガッサさんは野球部で一番恐ろしい存在（彼女の前では絶対言えない言葉だが、あえて言うしかない。そう表現することしか出来ないのはナイン全員承知済み）であるラプ先輩にも声をかける。

「あっ！止めといた方が良いッス！！ダメッスよ！！生きて帰れませんよ！！」

ラッシー先輩が慌ててそのように言うが、時すでに遅し。

「全く……。ダメダメ男はどこの世界にでもいるのね……。あきれちゃうわ。ピカっちちゃん、チコっちちゃん怖かったでしょ？」

ラプ先輩はピカっちとチコっちに話しかけながら、部室へと向かう。

僕たちナインとバトル部メンバーは苦笑いしながら、そのあとを歩くしか無かった。

余談だが、この時ラッシー先輩、それからなぜかヒート先輩もラプ先輩の“お仕置き”の巻き添えにされていた。

さて、場所は変わってここはバトル部部室。

どうやらここで、これからの予定が伝えられるようだ。

「あさポケナインのみんな、バトル部の雰囲気には慣れてきたかな?今日は１５球勝負だけで夕方を向かえてしまったので、特訓は明日からになるぞ!今日はゆっくりと体と心を休めてくれ」

バトル部顧問のガル先生がそのように話す。

「それであさポケナインの宿泊場所だが、今回はバトル部メンバーとの仲を深めるために、メンバーの家に泊まれるようにした!うちのメンバーが名前を呼ぶから、そのメンバーのもとへ集まってくれ!」

『はい!!』

ゼルスコーチの言葉に僕たちナインは元気よく返事をした!

「まずは俺の家に泊まるのは、カゲっち、ピカっち、ラージ、ヒートの４匹だ！」
「マジ！？ラッシュのところだなんて嬉しいぜ！！」
「僕もまさかラッシュ先輩のところだなんて……夢じゃないですよね？」

ラッシュ先輩の言葉に興奮気味のヒート先輩に、感激で涙ぐむ僕。

『良かった……。カゲっちくんと離れ離れにならなくて……。バトル部のみなさんにダメダメなところを見せないかしっかりと見守らきゃいけないけど……、それよりもカゲっちくんと一緒じゃないと……寂しくなりそうだから……少し心配しちゃったわ……』

ピカっちはホッとした表情をする。

「良かったねラージくん。僕もラッシュの家で暮らしているんだ。同じラグラージの君がいると楽しくなりそうだよ」
「ラグさんと一緒……俺も嬉しいです！！！」

ラージキャプテンも満足そうだ。

「次に俺の家に泊まるのは、ラッシーとジュジュだ！」

レウト先輩が発表をする。

「レウト先輩の家ッスか！！すごくワクワクしてラララ～♪とテンション上がってきましたよ」

「僕はそんな気分じゃない……」

呼ばれた2匹の先輩は正反対の反応を見せた。

「次にあたしの家にはラプを招待するわ」

続いてサクラ先輩がそのように言う。

「ありがとうございます。色々と迷惑かけるかも知れませんが、よろしくお願いします」

呼ばれたラプ先輩がぺこりとお辞儀をする。

「最後にあたしのおうちに泊まるのは、チックとチコっち！よろしくね～♪」

最後にリリーちゃんとがばねさんの家に泊まるのは、チックとチコっちとなった。

「やった～♪お泊りお泊り嬉しいなぁ～♪♪」

チックは嬉しそうな笑顔でクルクル回るが、

『ホントはジュジュ先輩と一緒が良かったのに……神様のイジワル！』

チコっちは膨れた顔をしていた。

「これで宿泊場所は決定したな。明日は野球部のみんなのバトルの実力を知るため、練習バトルを行うぞ」

「練習バトル……つまりこのバトル部のメンバーとバトルをするからね。君たちのバトルを見せてくれ」

『はい！！』

ガル先生とイックン先生の話の後、僕たちナインは元気よく返事をした。

『最後に野球部のみんな、それからバトル部のみんな、お互い仲良くするんだぞ！それじゃあ解散だ！！』

ゼルスコーチの言葉で、ナインはそれぞれの宿泊場所に向かった。

「うわぁ～♪こっちの世界の夕焼けもきれいだね♪」

「そうね♪こうして見ていると、ここが異世界だってこと忘れちゃうわ♪」

バトル部部室から外に飛び出してみると、夕焼けに染まった空が僕らを包み込んでいた。

僕とピカっちはその空を見て、なんだか楽しい気分になっていた。

「リザレさん。ラッシュ先輩やラグさんから話を聞いたんですが、体が弱いって本当何ですか？」

「キミは……ラージだったね。うん、その通りなんだ。オレは呼吸系に問題があって、体に負担がかかると色々と大変なんだ」

目付きが穏やかなリザードのリザレ先輩がそのように答えた。

「でも突然なんでそんなことを聞きに来たんだい？」

今度はリザレ先輩がラージキャプテンに質問する。

「それは……ラッシュ先輩たちからその話を聞いたときに、俺に何か出来ることは無いかと思ったからですよ。それでこれからお世話になるので……」

ラージキャプテンが答えながら、リザレ先輩の持つ荷物をヒョイとつかむ。

「野球部キャプテンとして、荷物運びをさせて頂きます！こんな

ことしか出来ない俺を許して下さい！！」
「え、良いのかい？何だか悪いね」

ラージキャプテンが自分の荷物＋僕の荷物＋ピカっちの荷物＋ヒート先輩の荷物＋ラグさんの荷物＋ラッシュ先輩の荷物にリザレ先輩の荷物を持ちながら、そのまま真っすぐダッシュし始めたと思うとそのまま僕らの視界からいなくなるほど遠くへ行ってしまった。

「やれやれ……まったくラージらしいぜ。野球部の練習のときも、ああやって練習道具を一人で運んでいるんだぜ。なんでも“キャプテンとしてチームの荷物運びくらい出来ないのはおかしい！”と感じるんだってよ」
「そ……そうなのか。とてつもなくボランティア精神が強いんだな」

ヒート先輩の説明に、少し驚き気味のラッシュ先輩だった。

「ほら着いたぞ。ここが俺ん家だ」

しばらくして、僕たちはラッシュ先輩の家に着いた。

「うっわぁ～、すごい大きなお家なんですね～♪」

僕は飛び込んできた光景に驚く。

今僕たちの目の前にはとても大きくて立派な黒い門がある。

その門の先にラッシュ先輩の家があると言うのだが……、

「セバスか？俺だ、ラッシュだ」

「ラッシュお坊ちゃま！？お帰りになられたのですか？今門を開けます！！」

ラッシュ先輩が門の横に取り付けられたインターホンでやり取りをする。

まもなくして、黒い門は静かに開きはじめた。

「行くぜ。もうちょっとだけ歩くからな」

ラッシュ先輩がそのように言いながら、門をくぐった。

後に続くように僕たちも中に入っていく。

「すごいや……」

「ホント、なんか森の中をピクニックしているみたい」

門をくぐると、その中はラッシュ先輩の家へと続く一本道が登場したのだが、その周りを森のように木々が囲っている。

僕は興味深くキョロキョロしながら、ピカっちはニコニコしながらその中を歩く。

ヒート先輩やラージキャプテンもワクワクした様子を見せていた。

「ここが俺ん家だ」

「すげぇな、まるで城みたいなでかさだぜ！」

ヒート先輩が驚いた様子で反応する。

本当にラッシュ先輩の家はお城のように大きくて、さらに2つのリザードンの形をした石像が設置されていた。

バトル部部室でヒイロ先輩とお話したときに、ラッシュ先輩がバトル部メンバーのうち、異世界から修業しにきた者を宿泊させているという話を聞いたが、それも納得出来るような広さだった。

ラッシュ先輩の案内で僕たちは早速家の中へと入っていく。

すると、

「お帰りなさいませ、ラッシュお坊ちゃま!!!そしていらっしゃいませ、あさひポケナインのみなさま!!」

一匹のドサイドンがラッシュ先輩と僕たちを出迎えてくれた。

「紹介するぜ。彼はドサイドンの“セバス”。この家で執事として働いているんだ。何かあれば遠慮なく相談に乗ってくれるぜ」

「坊ちゃまからお話は聞いております。私で力になれることがあればどうかよろしくお願い致します」

ラッシュ先輩の紹介のあと、セバスさんが丁寧に頭を下げながらあいさつをする。
僕たちも笑顔で元気よくあいさつをした。

「それにしてもラッシュって大金持ちの家の息子だったんだな。驚いたぜ」
「みんなそうやって言うぜ。でもな、あまり良いことばかりでも無いぜ」

ラッシュ先輩があまり明るい表情を見せないで語りはじめる。

「実は俺の両親は仕事なんかで俺とは離れて暮らしている。今はセバスやみんなのおかげで、両親がいないことにも慣れたが、ちょうどおまえたちと同じ中学校時代は荒れちまった苦い経験があるんだ」
「えっ!?本当ですか!?」

ラッシュ先輩の淡々と話す内容に僕は驚く。

「あぁ、あの時は本当に“自分は一人ぼっちなんじゃねぇのか?”って思い込んじまったほどだ。……でもある人のおかげで……セバスのおかげで立ち直ることが出来た。すごく今でも感謝している……」

ラッシュ先輩が静かに語る。

僕たちはその様子をみて複雑な気持ちになっていた。

『そっかぁ……。僕はお父さんとお母さんと一緒に暮らすことは当たり前だと思っていた。でも、こうして事情があってそれが出来ない人もいるんだ……。だいぶ慣れたとは言っていたけど、心の中では今でも寂しい気持ちかもしれない……。だって大切な家族……それもお父さんとお母さんだもの。本当は親子揃って暮らしたいはずだよね……』

僕は同時にいつも自分を可愛がってくれるお父さんとお母さんに、もっと感謝しなきゃいけないと感じた。

「さてと、セバスにおまえたちの使う部屋を案内させてやるぜ」

「はい、みなさん私に着いてきて下さい」

『は～い！！』

セバスさんの案内のもとラッシュ先輩の家の中を歩く僕たち。

「はいここですよ。カゲっちさんとヒートさんとラージさんのお部屋になります」
「すごい広いぜ！3人どころかもっと大人数で使うような部屋だぜ！！」
「わ～い♪わ～い♪」

あまりの広さに興奮して走り回る僕たち3匹。

でも、ドタバタしすぎて怒られたりしないかな？

ちなみにピカっちは女の子なので、僕たちとは別の部屋に案内された。

「さてと荷物も置いたことだし、ちょっと探検に行ってみようぜ！」
「さんせ～い！！」
「あっ！もう……ラプがいないからヒートが悪ガキ化しているよ」

ラージキャプテンが止めようとするが、僕とヒート先輩はラッシュ先輩の家を探検し始めた。

まるで修学旅行に来た学生が、興味本位で割り当てられた範囲外に遊びに行くような感じだ。

果たしてどんな結果が待っているのだろうか？

ところでバトル部部室で解散した他のメンバーが、どうなったか様子を見ることにしよう。

まずはレウト先輩宅に泊まることになったラッシー先輩から。

「着いたぜ！ここが俺ん家だ」

「へぇ～。ここでレウト先輩とホムラ先輩が暮らしているんスか？何だか良いッスね！！」

ラッシー先輩は仲良くなったレウト先輩とホムラ先輩の家に泊まれるということで、かなりハイテンションになっていた。
ちなみにジュジュ先輩は未だに暗い表情だ。

「今日は俺がラッシーとジュジュを歓迎する意味も込めてウマイ料理を作ってやるからよ、楽しみにしてくれよ！！」
「ホントッスか！！すっげ～楽しみッス！！！」

ラッシー先輩はますますハイテンションだった。

続いてこちらはサクラ先輩宅に泊まることになったラプ先輩。

「ここよラプ♪さぁ上がって上がって」

サクラ先輩の言葉で家の中に入ると……。

「すごくきれいなお部屋ですね♪それにぬいぐるみも置かれてい

て……かわいらしいですね♪」
「そう？まぁぬいぐるみは元から好きだったし、だらしないのってあまり好きじゃないのよね」
「だらしないって言えば、うちの野球部のヒートはいつもボールやグローブは片付けないからグラウンドがぐちゃぐちゃで、ラッシーは遅刻ばっかりするから、いつもお仕置きしなきゃいけないの♪」
「ホントに？どうして男ってだらしないのが多いのかしらね～」

ラプ先輩も考えが一致するサクラ先輩と楽しく会話をしていた。

最後にリリーちゃん&がばねさん宅に泊まることになったチックとチコっちの様子を見てみよう。

「チック～♪チコっち～♪着いたよ。ここがあたしたちのお家だよ～♪」
「ちょっ……何よこれ！？お家と言うよりこれじゃお城じゃない！！」

リリーちゃんの言葉にチコっちは驚きで絶叫していた。

「まぁ、この家は俺の体格に合わせているからな」

ががねさんがそのように話す。

「お城だ～♪お城だ～♪すっごく大きいお家にお泊り出来るなんてうれしいな～～♪♪♪」

チックはいつものようにニコニコしながらクルクル回転する。

「それじゃ中に入ろう♪こっちだよチック♪チコっち♪」
「わ～い♪」
「えっ？あたしまだ状況飲み込めて無いんですけど！！？」

ニコニコ笑顔のチックはともかく、チコっちが騒ぎを起こさないように祈るばかりだ。

さてラッシュ先輩の家を探検していた僕たちは、あのあとどうなったかと言うと……、

「すごいや！洗濯をやってるなんて！！ラッシュ先輩ってなんでも出来るんだ！！う～～！かっこいい！！かっこよすぎるよ！！」

「ああ！！しかも相当な運動量なんだな！！この汗くさいニオイとか、もう努力の量がハンパないってわかるよな！！」

洗濯されていたタオルをみて大騒ぎする僕とヒート先輩。

もう……なんだか2匹とも暴走状態に陥っていた。

「おっ！ここはトレーニングルームじゃねえのか！！？きっとラ

ッシュのヤツここで鍛えてるんだぜ！！！」
「僕もここで練習すれば……もうすごくかっこよすぎて止まらない燃えるリザードンになれるのかな！？だとしたらすごいよ！！」

今きっと僕たちのことをピカっちやラプ先輩たちが見ていたら、
「何言ってるんだか……」とため息をついているに違いない。

「すごく面白かったなカゲっち！！」
「はい！やっぱりラッシュ先輩はカッコイイリザードンでしたね！！」

しばらくして満足したのか、自分達の部屋に戻ってきた僕たち。
すると、

「皆さま、お食事の用意が出来ましたよ」
「あっはい！ありがとうございます」

セバスさんの言葉で僕たちは夕食を食べに向かった。

楽しいこと、ドキドキすること、考えさられることが連続の特別合宿！！

次回もまだまだ続く！！

第６８話：「１５球勝負の後はハチャメチャに探検だ！！？（汗）」の巻（後書

作者：「えっと、バトル部視点のときと読み比べるとわかるかも知れませんが、本作では“申し訳ありませんが、今回はコラボを遠慮させて下さい”といったメッセージの作者さんもいらっしゃったので、出演キャラやセリフの内容や設定も若干変わっています。コラボは協力して頂いている相手方の意見が尊重されなければ成り立たない企画なので、僕もそのあたりを意識しながら執筆しています」

ラプ：「ところで……ヒート？あれは……どういうことなのかしら……？カゲっちくんをまきぞえにするなんて……？（怒）」

ヒート：「いや～。その……つまりカゲっちはまじめ過ぎるからちょっとはじけさ……」

ラプ：「……こっっっの野球バカ道具散らかしヘタレエースリザードン！！！」↑“のしかかり”

ヒート：「フギャ！！」↑ＫＯ状態

ピカっち：「ダメダメカゲっちくんのバカ！！」↑泣きながら思い切りビンタ！！

カゲっち：「……（泣）」↑ほっぺたに手形が残る

ラージ：『だから止めとけば良かったのに……』↑ため息

ラッシー：「ホムラ先輩の作るメシ楽しみだぜ！！」↑お腹ペコペ

コのためワクワク

チコっち：「お城がお家だなんてありえないわ！！何なのよ！！！」
↑また絶叫（汗）

チック：「ルンルンルンルルルルン♪」↑なぜかジョウト地方の自転車のＢＧＭを歌う

ジュジュ：「なんなんだこの個性派集団は……。元気ありすぎるよ」
↑驚きの表情

第６９話：「楽しい楽しい夕食時間♪」の巻（前書き）

ピカっち：「久しぶりの更新ですね♪」

カゲっち：「この日を待っていました！！」

作者：「うん。今回は本当に辛い出来事だったけど、そのおかげで自分にはどんなときにでも待ってくれるたくさんのファンがいることも感じたよ」

ヒート：「ファンがいてこの小説はここまで続いているからな。本当にうれしいよな！」

ラプ：「それじゃ～、作者さんも復活出来たし……張り切っていくわよ！！」

全員：『第６９話プレイボール！！』

第６９話：「楽しい楽しい夕食時間♪」の巻

まさかラッシュ先輩の家に泊まることが出来るなんて……、本当に合宿に来れて良かった！！

セバスさんに呼ばれた僕とヒート先輩、それにピカっちとラージ先輩は夕食場所へと向かった。

その途中、廊下の窓からふと外の景色を見ると、キレイな星空が広がっていた。

『もうすっかり夜になっちゃったんだ……。合宿初日でいろんな出来事もあったせいか、何だか疲れて来ちゃったなぁ……』

不思議なもので、何か行動をしているときはそうでなくても、一通りの行動を終えたときにはじめて自分が疲れているのに気づくものだ。

それにそれを感じているのは僕だけじゃないようだ。他の３匹にも疲れが表情に出ているような感じがする。

しかし僕たちのそんな疲れはいっぺんに吹き飛ぶことになる。

夕食場所であるリビングに近づくにつれて、すごく美味しそうな匂いを感じた僕たち。

と同時に、僕やピカっち、ヒート先輩にラージキャプテンのお腹が一斉に「グゥ～」と音を立てる。

音を聞いた僕たち４匹は一斉にお互いの目を合わせながら、顔を赤くする。そして……、

『お腹すいちゃった～～♪』

そう言いながら、勢いよく僕たちはリビングのドアを開けた。

「ラージくん、それにカゲっちくんたちも……。みんなこっちに座ってよ。もうすぐ夕ご飯が出来るよ」

「本当ですか！？」

一足先にテーブルの周りに置かれているイスに座っていたラグさんの言葉に対して、ラージキャプテンが驚くように言う。

「あぁ、本当だぜ。それにラッシュの料理はすごくうめぇからな！きっと満足するに違いないぜ！！」

と、ラグさんの隣に座っていた人間、“御羅不猟（おらふりょう）”さんが言う。

ラッシュ先輩に話を聞いたところ、御羅不猟さんはとにかくケンカが好きな不良だと言うのだが、まっすぐな性格なので、そんなに悪いように感じることはないらしい。

『それにしても、ラッシュ先輩ってバトルだけじゃなくて、洗濯や料理まで作れるなんて、すごいや……。本当にカッコイイ！！』

御羅不猟さんの話を聞いた僕は、また感激の“オーバーヒート”状態になってしまった。

目がまぶしいくらいにキラキラ輝く様子を見て、ピカっちがため

息をする。

「カゲっちくん？ねぇ、カゲっちくんってば！合宿に来てまでマイワールドに突入しないでよ！しっかりして！！」

「えっ！？あっ！？あっ、ごめんごめん。つい、いつものくせで……」

僕はピカっちの一言で、何とかマイワールド入りを免れた。

「カゲっちって言ったよな？なんかバトル部に来て興奮しすぎて無いか？あまり可愛い彼女を困らせるなよ～？」

僕たちのやり取りを見ていた御羅不猟さんがニヤニヤしながら、僕をいじる。

「そうだそうだ。ピカっちにとってカゲっちは、誰よりも頼れるボーイフレンドなんだぜ？変なことすると嫌われちゃうぞ～ダメダメヒトカゲ～」

ヒート先輩もラージキャプテンもニヤニヤしながら、ツンツンと指で僕をつつく。

「そんなぁ。よして下さいよ～。なんか変なプレッシャーがかか

るじゃないですか～！」

僕は少々焦りながら、ピカっちを見た。すると彼女はかわいい笑顔で、

「良いんですよ♪だってカゲっちくんがダメダメで、泣き虫で、ダマされやすくて、ドジばっかりするのは昔から変わっていないんですもの♪一つでも治っちゃったらカゲっちくんじゃ無くなっちゃいますよ♪」

と、言いきってしまった。

それを聞いたみんなは大笑いしている。

「そんなこと言わないで、ピカっち～～」

僕はわんわん泣きながら、ピカっちに訴えた。

「もう～、泣き虫なんだから♪冗談に決まっているでしょ？」

ピカっちはニコニコ笑いながら、僕の涙をハンカチで拭いていく。

『やれやれ。ホントに変わったヤツだな、このヒトカゲは……』

御羅不猟さんはピカっちの意外な行動に苦笑いしていた。

……と、何とも平和なドタバタを繰り広げていると、ラグさんが首を傾げながら、ふと一言このように言った。

「え？何がどういうことなの？どうして、カゲっちくんがちゃんとしないと、ピカっちちゃんに迷惑かけちゃうの？」

『だぁぁぁぁぁ～～～！！』

ラグさんの思いもよらない言葉に、僕たちはイスごとズッコケてＫＯ状態になってしまった。

……とまぁこんな感じで、すごく楽しくおしゃべりをしていると

ころへ、

「こんばんは～ラッシュ先輩！」
「オイラたちもお泊りに来ました！」

元気よく1匹のヒトカゲと1匹のワニノコが、このリビングに入ってきた。

「え、ヒイロ先輩！？それにダイル先輩まで！！」

僕は思いもしてなかった展開に驚きと嬉しさを感じていた。

「まさか……ヒイロ先輩までラッシュ先輩の家に泊まるだなんて……すごく感激です！！」
「そうか？いや～カゲっちたちがラッシュ先輩の家に泊まるって聞いたら、オレも泊まりたくなってな……」
「オイラもみんなと楽しく過ごしたいって思ったから、ラッシュ先輩にお願いしたんです！！」

ヒイロ先輩とダイル先輩が嬉しそうに教えてくれる。

「そうなんですか……僕、カッコイイラッシュ先輩に憧れのヒート先輩、それにここに来て最初にお話をしていただいた……ヒイロ

先輩が一緒にいるなんて……すごくすごく嬉しいです！！」

僕は夢のような出来事に、またマイワールドに突入しそうになっていた。

「みんな待たせて悪いな、メシ……できたぞ♪」

『待っていましたぁ！！』

ラッシュ先輩の言葉に僕らははじけるような笑顔で喜ぶ。

それに対してラッシュ先輩は、料理ののった皿をテーブルの上に置いていく。

「わぁ～♪ハンバーグだぁ♪」

「それにロールキャベツにあったかそうなコーンスープ、カラフルな野菜サラダですね♪」

僕とピカっちは笑顔になる。

「まぁ、ホントならもっと豪華なメシでもと思ったけど、……ここは自然体でと思ったんだ」

ラッシュ先輩がイスに座りながら、静かに話す。

「すごく良いことだと思います♪あたしのパパがよく言っていました。“初対面の方に対してあまり高級なメニューを出すと、かえってマナーとかで窮屈になってしまうから楽しい食事にはなりにくい。家庭的な雰囲気を出すような温かいメニューの方がすぐに相手もなじむことが出来る”って」

ピカっちがニコニコしながら、ラッシュ先輩に話す。

「そうか。ありがとうな。それじゃメシを食べるとするか……」

ラッシュ先輩が手を合わせる。

『いただきま～す！』

その一言で夕食時間が始まった。

「うっめぇ～！！マジでラッシュ天才じゃねえか！？このハンバーグ、味付けがハンパないぜ！」
「しかもめっちゃでかいし！！店とかでよく出て来るようなタイプだぜ！！」

ヒート先輩とラージキャプテンが、満足そうに食べ進める。

「このロールキャベツも、食べ応えありますね。ホントにラッシュ先輩って料理が上手なんですね」
「オイラもそう思います！」

ヒイロ先輩にダイル先輩も自然と笑顔がこぼれる。

「そうか……、満足してもらって俺も嬉しいぜ」

ラッシュ先輩はみんなの感想を聞いて、すごくうれしそうにしていた。

そんなこんなで、夕食時間はすごく充実したものになった。

ヒート先輩がラッシュ先輩にいじられたり、ラージキャプテンとラグさんが互いの世界のことを話したり……、

僕もヒイロ先輩やダイル先輩と、あさひタウンのことやあさポケ野球部での色々なことをたくさんお話した。

「さて、みんな食べ終わったみたいだな」

僕たちは満足して小さくうなずく。そして、

『ごちそうさまでした！』

そのあと食器を片づけ、それぞれが自分の部屋に戻って行ったのだった。

一方、こちらはラッシー先輩とジュジュ先輩の様子だ。

「ラッシー、それにジュジュ、出来たぜ！ホムラ特製チャーハンに肉じゃが、そして大根ステーキだ！！」

「メチャクチャ美味そうッスね～！！」

「あったりめーよ！！ホムラにメシを作らせたら天才的だからな！！美味すぎてほっぺが落ちるぜ！！」

ホムラ先輩とレウト先輩は相変わらずのハイテンションだったが、ラッシー先輩も負けていないようだ。

『いただっきま～す！！』

その言葉とともに、楽しい食事が始まる。と言うよりすごい勢いで食べ進めている！！

「す……すごいッスね……。でも、ウマイッス！」

ホムラ先輩にレウト先輩の様子を見て唖然としながらも、ラッシー先輩も美味しそうに料理を食べていた。

「はぁ～……。やっぱり悔しい……。どうしてこんなことになったんだろう……」

その盛り上がりの中で、ジュジュ先輩は未だに敗戦のショックを引きずっていた。

「ジュジュ！メシ食えよ～♪メシ食えば嫌なことも忘れられるぜ♪」

ラッシー先輩がそのように言うものの、立ち直るまでにはまだ時間がかかりそうだ。

「そういえば、ラプってどうして野球を始めたの？」

こちらはサクラ先輩の家に泊まったラプ先輩の様子だ。こちらは夕食を終えた後のようで、サクラ先輩がラプ先輩が質問をしていた。

「え、あたしが野球を始めた理由ですか？」

ラプ先輩は突然の質問にやや驚きを見せたが、

「え～っとですね……。色々なスポーツに挑戦して、一番楽しいって感じたからです」

と、そのように答えた。

「スポーツ……って、でもラプの種族なら水泳とか得意なんじゃないの？」

「水泳は得意ですけど、あたしが感じる面白さがあまり無かったんですよ。それで他のスポーツに挑戦してみたいなぁ……って思って」

ラプ先輩が思い出を語る。

始めは友人の紹介で陸上競技や、サッカーのような球技にも挑戦したことを。

「でも、サッカーとかはすごくスピードが必要なスポーツ。ゴールを守るゴールキーパーだって、相手のシュートを必ず止めなきゃいけないから、瞬発力が必要なんです。……だから種族的に鈍足なあたしはみんなについていけませんでした……」

結局そのことがきっかけで、一時は運動嫌いになったこともあっ

たという過去を抱えるラプ先輩。

それぼかりか団体で行動するのも嫌になったという。

「そんなときに出会ったのが野球でした。野球に誘ってくれたのは、ながれぼしタウンに住んでいる友人のランターンの“ランラン”って子なんです」

ラプ先輩が少しずつ笑顔になっていく。

ランランさんはラプ先輩に野球の楽しさを教えてくれた、言わばラプ先輩の“コーチ”。

「彼女はヒートと同じピッチャーで、あたしとキャッチボールをしてくれたり、打撃のことも教えてくれました」

ラプ先輩がキャッチャーを始めた理由もそこにある。

“コーチ”的存在のランランさんのボールをいつでも受け取るこ

とに、うれしさを感じたからだ。

「ランランの言った言葉が今でもずっと焼き付いているんです。“ラプのように足が遅くても、野球は別のことでチャンスをくれるスポーツなんだよ。ラプはすごくボールを捕るのが上手なんだから、最高の守備だってみんなが認めてくれるよ”」

野球選手にも様々なタイプがいる。パワーがあるのに守備が上手くない選手。足が速いけどパワーが無い選手。肩が強く無くても、誰も捕れないようなボールを捕ることの出来る選手。

何か一つ誰にも負けない長所を持っていれば、必ずその長所を活かせる最高のチャンスが与えられるのを知ったラプ先輩は感動したのだと言う。

「今も打撃は下手だし、足だって速く無い。でもこのキャッチの技術でみんなが認めてくれるから、野球をしていると思うんです」

「そうなんだ。でも立派だと思うわ。ヒートもラージもラッシーもジュジュも男の子だけど、その中で女の子の選手がチームを引っ張るなんて」

サクラ先輩が褒めるように言う。

「あ……ありがとうございます」

ラプ先輩は思わず照れる。

「あさひタウンに戻っても、今のようなダメダメ男を引っ張るような姿勢を見せてね。……でも時には相手を褒めたり、なぐさめるのも必要だからね。みんな困ったことがあれば、ラプを頼っているはずだから……」

サクラ先輩は最後に優しくそのように伝えた。

「チック～♪チコっち～♪ご飯できたよ～♪」
「わ～い♪わ～い♪美味しいご飯だ～♪」

こちらはリリーちゃんとがばねさんの家に泊まったチックとチコっちの様子だ。

「家じゃないわよ！お城よお城！！」

チコっちはまだギャーギャー騒いでいる。

「もぐもぐ……うわぁ～♪すごく美味しいや♪」
「ホント！お料理上手なのね！リリーって！！」

チックとチコっちはリリーちゃんの料理の腕に驚く。

「まぁな。リリーの料理の腕は自慢できるからな。メニューだって和食、洋食、中華、デザートまで何でも出来るんだ」
「本当ですか！料理の天才なんですね♪」
「天才だなんて、チックすごく褒めすぎ～♪」

こちらも笑顔があふれていて、なかなかの盛り上がりだった。

『ピカっち、さっきは一体どうしたのかな？突然話があるだなんて……』

楽しい夕食の後、僕は一度家の外に出た。

実はさっきの夕食時間の時に、ピカっちがどこか寂しそうな表情で、僕にこう小さくささやいたのだ。

「カゲっちくん……、ごはん食べた後で良いからちょっと外を散歩しない？どうしても話したいことがあるの……」

『ピカっちに何かあったのかな？妙な胸騒ぎがするなぁ……』

僕が辺りをキョロキョロしながら、そんなことを考えていると……、

「カゲっちくん♪約束守ってくれてありがと♪」

「ピカっち……」

ピカっちはラッシュ先輩の家の門のそばで、僕に笑顔を見せながら小さく手を振る。

「とりあえず散歩しながらお話しましょう♪こんなに星空もキレイだし」

「うん、そうだね」

僕は優しくピカっちの手を握りながら、ゆっくりと歩きだした。

第６９話：「楽しい楽しい夕食時間♪」の巻（後書き）

作者：「今回はＵＭＡ先生の御羅不猟くんにも登場していただきました！！」

カゲっち：「ＵＭＡ先生、今回のコラボに協力ありがとうございます！！」

ヒート：「ところでピカっちはなんでカゲっちを呼んだんだ？」

ラッシー：「もしかしてピカっちに嫌われたんじゃねぇのか？」

カゲっち：「もしそうだったらいやだな～（汗）」

第７０話：「キラキラ輝く星空のもとで……」の巻（前書き）

カゲっち：「一体ピカっちは何のために僕を呼んだんだろう……」

チコっち：「別れ話でもされるんじゃないの？」↑ずいぶんと嫌な笑顔

ヒート：「合宿に来てだいぶ恥ずかしい気持ちだったかもな」

カゲっち：「みんなでそんなふうに言わないで！！（泣）」

ラッシー：「……。（汗）真実が今明らかになるぜ。注目の第７０話プレイボール！」

第７０話：「キラキラ輝く星空のもとで……」の巻

「ここの世界の星たちは何度見てもキレイね。まるで宝石みたい」
「ホント、星ってこんなにキラキラ輝くんだなぁってすごく感じるよね」

ラッシュ先輩の家を出たあと、僕とピカっちは道なりにゆっくりと歩いていた。

空には相変わらず数えきれないほどたくさんの星たちが輝いている。

「……ねぇピカっち？」
「何、カゲっちくん？」

歩き始めて１０分ほどして、僕はピカっちの“どうしても話したいこと”を聞くことにした。

ピカっち本人がなかなかその話を始めないとすると、よほど言いづらいことなのだろう。

「言いたくないかも知れないけどさ……、そろそろ教えてくれないかな？……ここに僕を呼んだ理由を……」
「やっぱり……言わなきゃいけないよね……。ごめんね、紛らわせようとして……」
ピカっちが立ち止まって、先ほどの夕食時間のように少し寂しそうな表情をして話す。
「……実はね。あたし、すごく心配なの……」
「心配……って何が？」
僕はピカっちの言葉に反応する。
「明日……練習バトルがあるってゼルスさんが言っていたでしょ？……あれほどバトルを避けてきたカゲっちくんが耐えられるか心配なの……」
「ピカっち……」
僕はピカっちの悲しそうな表情に、心の中で、自分にかなりいらつき始めていた。

どうしてこうも、自分を誰よりも想ってくれるピカっちに心配をかけてしまうのかと……。

「いや……多分あたしだけじゃないと思う……。きっと同じことを……チコっちちゃんや、チックくん、ヒート先輩たちだって……みんなが感じているに違いないわ……。」

ピカっちが小さい瞳から大きな涙を流しながら、話を続ける。そして、

「ごめんねカゲっちくん。あたしがあの時……ヤルキモノたちに捕まったりして……それさえ無ければ、それさえ無ければ……」

ピカっちは事件の被害者であることにずっと心を痛めて、さらに自分を責め立てていたようだ。

僕はどう返事をすれば良いのかわからなかった。

……だが！！

「……あ……カ……カゲっち……くん？」

気がついたら、僕は彼女のことを抱きしめていた……。

この方法しか、ピカっちを元気に出来る方法は無いと思って……。

……そして、

「……平気って言いたいけど、でも本当はそんなこと言えない……。……それればかりかすごく怖いんだ。……バトルって聞くと、あの事件のことを思い出して……その度に体がガチガチに固まって、頭の中が真っ白になっちゃうんだ」

「カゲっちくん……」

ピカっちは震える僕の様子、そして頭の上に落ちてくる冷たい涙からそれが本当なのだと感じた。

「……でもね、僕はこの怖さには負けない。負けるわけにはいかないんだ！！……だって優しいピカっちがいるから……、ずっと友達でいてくれたチコっちがいるから……、ヒート先輩だってラッシー先輩だって、みんなみんな僕を見守っているから……！その期待に応えなきゃいけないから……！」

「カゲっちくん……カゲっちくん……」

僕もピカっちも涙が止まらない。

「それに約束したでしょ？僕は……ピカっちを守れるくらい強くなるって……。……強くなるためにこんなことで逃げるわけにいかないんだよ……」

そうだ。僕は“あの事件”のせいで、自分の大切な友達を守ることが出来無かったんだ。

同じほのおタイプとして互いにほのお技を磨きあげてきたブースはもちろん、目の前で怖い目にあったせいで心に深いキズを負ってしまったピカっちやチコっち。

それに何よりバトルというものが大好きだった、自分でさえも守ることが出来無かったんだ。

だから僕はこの合宿で、二度ともう大切な友達や仲間を守れないなんてことが無いようにしなきゃいけないんだ。

「ホントは僕、合宿には来たく無かったんだ。恐さに耐えきる自信なんて全くなかったから……。でも、また“あの事件”のような出来事があったときに、君を守れないなんてことはもっと嫌だった……。だから君のおかげなんだよ?……君があの時僕のことを“大好き”って言ってくれたから……、たったその一言で覚悟を決めら

れたんだ。……本当にありがとう……」

僕はもう涙を流していなかった。

いつものように明るい笑顔で、そっとピカっちの手を取り立ち上がる。

「……カゲっちくん……。あたし、信じているからね……。応援しているからね……。……負けないでね……」

「うん……、頑張る。……頑張るしか無いよ。これは僕にとって乗り越えなきゃならない壁だから……」

ピカっちもまたニコニコ笑いながら話す。

互いの本音を話した僕たちは、そのままラッシュ先輩の家に帰る

ことにした。

『カゲっちくん。
あたし……どんなに辛いことがあっても、それに立ち向かうあなたが大好き。……きっとまた昔のように、すごくバトルが強くて無邪気に笑うカゲっちくんになってくれるよね？……信じて応援しているからね』

「ただいま～。あれ、何か音がするね？」
「ホント。一体何の音かしら？」

ラッシュ先輩の家に戻ってきたあと、僕はちょうど自分が割り当てられた部屋からドンとか、騒がしい音がするのに気がついた。

「何かあったのかな？」

僕とピカっちは音のした部屋を開けてみる。

ガチャッ！

ドアを開けると、音の正体がすぐに明らかになった。

「それっ！いくぜラッシュ！！」

「クッ！やるなぁ……さすがピッチャーが本職ってことはあるな！……ッ！？」

「油断大敵ですよ、ラッシュ先輩」

ヒート先輩、ラッシュ先輩、そしてラージキャプテンにラグさん、さらにはヒイロ先輩やダイル先輩までもが、宿泊行事で恒例とも言えるそのバトルを行っていた。

『あっ、そうか～。これで音がしていたんだ』

そう、彼らが行っていたのは、“枕投げ”だったのだ。

「おっ、カゲっち！どこ行ってたんだ？せっかくラッシュと枕投げやっていたんだぜ！！」
「仲間に入れよ！楽しいぜ！！」

ラージキャプテンとヒート先輩が「早く！」と言うような表情で僕を誘う。

「もちろんですよ！！僕だけこんな面白いことをやらないわけにはいきませんからね！」
「そうこなくっちゃ！！それっ！！」

僕が元気よく返事をするとともに、枕が飛んできてぶつかってしまう！

「うわっ！……もう、お返しですよヒイロ先輩！！」
「出来るならやってみろ……ってわ！！！」
「よそ見してると、色んなところから飛んで来るぜ！！」

特にこれといったルールは無いのだが、よーいドン！とともに、枕が四方八方から飛んで来るのがこの遊びだ。

「いきますよ、ラグさん！！」

「うん！それっ！！」
『ダブルラグラージアタック！！』

ラグラージコンビが一斉に枕を投げつける！！

「なんなんだ！その技は！！？」
「ぐっ！！すげぇ威力だ！！」

枕がぶつかったヒート先輩とラッシュ先輩が驚きを見せる。さらに……、

「それじゃこっちは……」
『スモールカルテットアタッーーーク！！！』

僕とピカっちとヒイロ先輩とダイル先輩の体が小さいメンバーも、タイミングよく枕を投げつける！！

「クッ！こっちも負けない威力だなヒート」
「あぁ。油断できないぜ！こっちも奥の手だ！！」
『ストロングファイアーコンビアタック！！』

ダブルリザードンの強力な一撃だ！僕らはしゃがんだりするものの、ぶつかってしまう！！

「すごい衝撃だな……。パワーとスピードが誇りのリザードンらしいぜ」

「負けませんよ～！僕の“れんぞくまくらなげ”ですよ！！」

「カゲっち！？なんか目がマジだぞ！！うわっ！！」

ドカドカドカドカ！

……こうしてギャーギャー騒いでいるうちに、いつの間にか眠気が段々とみんなを襲ってきて……。

「ＺＺＺＺ……」

「ムニャムニャ……」

……静かに静かに出会いの合宿初日が幕を閉じたのであった……。

第７０話：「キラキラ輝く星空のもとで……」の巻（後書き）

ピカっち：「やっぱりカゲっちくんってすごい。あんなに不安な気持ちだったあたしを、優しい言葉で癒してくれるんだから」

カゲっち：「そんなこと無いさ。僕はまだまだ君を、本当に守れるくらい強いとは思わないし。でも、強い決心は出来た！！明日の練習バトル頑張るぞ！！」

ヒート：「次回からは合宿２日目に突入だ！！」

第７１話：「合宿２日目！！熱き練習バトル！！」の巻（前書き）

カゲっち：「いよいよ合宿２日目だね！！」

作者：「バトル部視点のときに一番感動したシーンがあるからね。力が入るよ」

ラッシー：「その始まりを告げる第７１話プレイボールだぜ！！」

第71話：「合宿2日目！！熱き練習バトル！！」の巻

ピカっちがずっと抱いていた想い……。
しっかりと受け止めて、本当に強くなってピカっちを安心させたいなぁ……。

「よし、行くか……」

次の日、リザードンのラッシュ先輩は一言そういうと、静かに家を出た。

外に出ると、まだ完全には明るくなっていないようで、ぼうっとした薄暗さを保っている。
現在の時刻は早朝の5時ちょっと過ぎなのだ。

「俺も一緒に行くぜ」
「誰だ？」

ラッシュ先輩は後ろを振り向いた。
そこには自分と同じリザードン、ヒート先輩の姿があった。

「なんだ、ヒートか……。良いぜ……ついて来いよ」

こうして2匹のリザードンは、ラッシュ先輩の朝の日課となっている、町を一周するランニングを始めた。

「なぁラッシュ？」

「ん、どうしたヒート？」

ランニングを半分ほど終えたところで、少しばかりの休憩を取ることにした2匹。

その時ヒート先輩がラッシュ先輩に質問を始めたのだ。

「昨日の話……本当なのか？中学時代に荒れていたって話は？」

「その話か……。昨日も話したように本当だぜ。もうどうしようも無いくらい荒れていた……」

ラッシュ先輩はどこか寂しそうな表情で静かに語りはじめる。

「俺はひとりぼっちだって思っていた……。バトル大会で優勝しても、何かすごいことをしても誰も俺に構っちゃくれなかったんだ」

改めて自分の過去の出来事を話すラッシュ先輩。

「あの時は色んなヤツに迷惑かけちまったな。モモとケンカしたり、セバスにもサクラにもな」

中学時代、ラッシュ先輩はモモ先輩を始めとした様々な不良と度々ケンカを繰り返していたうちに、“龍炎のラッシュ”と異名がつけられていたらしい。

「でも信じられないぜ。今のラッシュからは、荒れていた様子は感じられないからな」

「そうか？でも、“あの人”と出会わなかったらきっと今でも荒れまくっていただろうな」

ラッシュ先輩が少しスッキリした表情で話す。

「“あの人”って誰だよ？」

ヒート先輩がすかさずラッシュ先輩に聞く。

「ゼルスさんだ。ゼルスさんが俺を立ち直させたんだ。俺は今でもあのことは忘れねぇ」

その時、ゼルスコーチはラッシュ先輩と実際にバトルを行ったらしい。

力と力のぶつかり合いという非常にシンプルなバトルを。

「まぁ、正確に言うと俺の完敗だった。俺の繰り出す技を軽々と避けられたんだから」

その時ラッシュ先輩は涙したという。

“どうして自分の攻撃が当たらないのか。”と……。

「ゼルスさんは強力な技を出さなかった。たった一撃の“リーフブレード”で……、俺の右翼の翼膜を切り付けたんだ」

その時出来た傷は、今でもラッシュ先輩の右翼の翼膜に残っている。

「俺はその一撃でヤケクソになっちまった。ゼルスさんはそんな俺に対して思い切り殴ったんだ」

その時同時にゼルスコーチが言った言葉を、ラッシュ先輩はずっと忘れられないという。

力は友達や大切な仲間を守るためにあるんだ。そしてバトルは楽しくやるものだ……。

「そのあと俺はセバスにも言われたんだ。“私はいつもお坊ちゃまのことを思っています！だから悲しまないで下さい！私はいつでもお坊ちゃまの味方です！！”ってな」

ラッシュ先輩は笑いながらヒート先輩に話す。

ゼルスコーチとセバスさんの言葉。その二つの言葉でラッシュ先輩は目が覚めたのだという。

……自分は独りぼっちじゃない……。

いつでも誰かが見守ってくれている……と。

「だから正直な話、ジュジュに15球勝負を挑んだのもそれが関係しているかもな。アイツを見ていると、昔の自分を見ている感じだったしな」

「ラッシュ……」

ラッシュ先輩が感じていたことに、ヒート先輩は何とも言えない感情になった。

「だってそうだろ？野球も仲間を信じなきゃ、どうにもならないんだから。自分の持つ“力”をチームのみんなのために使うのが大切なんだろ？キュウコン監督が言っていたぜ」

「ああ、その通りだ。野球じゃ“ひとりはみんなのために。みんなはひとりのために”って言葉もあるくらいだからな。ただ、ジュジュにもそのことに気づいているといいんだが……」

ヒート先輩はまだちょっと不安が残っているようだ。

「大丈夫だ。アイツもそこまでひどいヤツじゃねえ。どこかで変わるはずだぜ。それを信じてやれ」

「そうだな！」

ヒート先輩が立ち上がる。

「それじゃ、ランニングの続きやろうぜ！！」

「ああ！」

こうして2匹のリザードンは、少しずつ明るくなろうとしている

町の中を走り始めた。

「よし、みんな集まったようだな。今日は昨日の解散前に伝えたように、練習バトルをやろうと思う」

バトル部の部室内にあるバトルフィールドで、ガル先生が説明を始めた。

「この練習バトルはあさポケナインのみんなのバトルの実力を見るのと、これからの特訓をするための課題点を見つけるのが目的だ。俺が名前を呼んだ者どうし、決して悔いが残るようなことはしないでくれ」

『はい！！』

全力プレーが大切。これは野球でもバトルでも同じだ。

「それじゃあ対戦メンバーを発表するぞ。まず第１回戦はラッシーとモモ！！」

「トップバッターは俺ッスか！！しかも相手は同じほのおタイプ

のモモ先輩!!ワクワクしてきたッス!!」
「お互い良い勝負しようぜ!!」

ガル先生の言葉でハイテンションのラッシー先輩とモモ先輩。

他のメンバーからも「頑張れよ!」といった感じの拍手が起こる。

みんな笑顔な様子を見ると、すっかりあさポケナインがなじんでいるのがわかった。

ただ、僕だけは違った。

やはりバトルに対する恐怖感、そしてトラウマからか、しっぽの炎の燃え方が安定しない。

心臓がバクバクして体も震え出す。

『どうしよう……。本当にバトルしなきゃいけないのかな?嫌だな……』

出来ればこの練習バトルの時間だけ、いつもの何倍もの早さで過ぎてほしいと思った。
それとも僕の番になったら、わざと負けてしまおうかと思った。

「カゲっち、大丈夫？すごく顔色悪いようだけど」
「え？……ハハハ。大丈夫ですよリザレ先輩。ちょっとだけ緊張していただけですから」

リザレ先輩が心配だったのか、僕に一つアドバイスをしてくれた。

「緊張したときは、静かに目を閉じて大きく深呼吸すると良いよ。とにかくリラックスするのが大切だからね」
「ありがとうございます」

その言葉で僕は少しだけ笑顔を見せることが出来た。

「次に第2回戦はラプとレイラだ！」
「レイラ先輩と！？」
「バトル部での練習の成果見せてあげるわ」

ラプ先輩とレイラ先輩がどんなバトルをするか、みんなワクワクするだろう。

「第３回戦はチコっちとリリー！！」
「お互いガンバロ、チコっち！」
「のぞむところだわ！お城がお家だなんて絶対認めないんだから！！」

チコっちの妙な発言にメンバー全員が頭に？マークを浮かべる。

ま、ピンボケしているチコっちは無視して……、

「第４回戦！ジュジュとキノガッサ！！」
「ヨッシャー！！フィールドに集まったカワイこちゃんたちに俺のかっこよさ魅せるぜ！！」
「……」

キノガッサさんのハイテンションに対して、ジュジュ先輩は相変わらず暗い表情だ。

「第５回戦はチックとヒイロ！！」
「オレはチックとか……。お互い全力でぶつかろうぜ！」
「はい♪」

まだまだ発表は続く。

「第６回戦！ピカっちとライト！！」
「オレもバトル出来るのか！！メチャクチャうれしいぜ！！」

名前を呼ばれたピチューの“ライト”くんがおおはしゃぎだ。

それに対してピカっちはやや緊張気味だ。

『ポケモンバトル。あたしはあまりやったこと無いけど……』

ピカっちが隣に座っていた僕をチラっと見る。
すると表情が真剣になった。

『ここで頑張れば、カゲっちくんも何か感じるに違いないわ。自分に出来るだけのことを頑張らなきゃ』

ピカっちは静かに決意を固めたようだ。

「第７回戦はラージとラグ！！」

『僕はラージくんとの勝負なんだ。彼は結構な実力があるかも知れない。気を引き締めていこう』
『ラグさんがどんなバトルをするのかしっかり吸収していこう』

ラグラージコンビは内に秘めた闘志を静かに燃やし始めていた。

「第8回戦！ヒートとラッシュ！！」
「ヒートとか……。しっかりと戦わなきゃな」
「俺のバトルスタイルを見せてやるぜ！！」

ヒート先輩、ラッシュ先輩はすでにバトルモード全開だ！

「最後に第9回戦！カゲっちとダイル！！」
「オイラ、ちゃんと今までの練習の成果を出せるかな？」
「大丈夫だ。ダイルだってここまで頑張ってきたんだ。その一つ一つを思い出して行け」

ダイル先輩にラッシュ先輩がアドバイスを送る。

『はぁ～。やっぱり避けて通れないんだ。すごく不安になってきたよ……』

ダイル先輩、僕ともにかなり不安な様子を見せている。

ちゃんとしたバトルになれば良いけどなぁ……。

改めて対戦するメンバーの組み合わせを確認すると、

第１回戦：ラッシーＶＳモモ

第２回戦：ラプＶＳレイラ

第３回戦：チコっちＶＳリリー

第４回戦：ジュジュＶＳキノガッサ

第５回戦：チックＶＳヒイロ

第６回戦：ピカっちＶＳライト

第７回戦：ラージＶＳラグ

第８回戦：ヒートＶＳラッシュ

第９回戦：カゲっちＶＳダイル

といった感じだ。どの組み合わせも非常に楽しみなバトルになりそうだ。

「それじゃあ早速第1回戦を行うぞ！ラッシーとモモ！フィールドで準備に入れ！！」
「よし来た！！」
「熱くなろうぜ！！」

ガル先生の言葉で静かにバクフーンのラッシー先輩と、ゴウカザルのモモ先輩がフィールドに上がる。

「さぁ、いよいよ注目の第1回戦！始まりが近づいてきたぜ！」
「この練習バトルの様子はおなじみのレウト、そしてホムラのリオレウスコンビが熱く実況していくぜ！バトル部メンバーも、あさポケナインのみんなもよろしくな！」

長いテーブルとイスに座ってマイクを手に、リオレウスコンビがこのように言う。何でもこのコンビは、こうしたバトルの実況はおなじみなのだと言う。

何はともあれ、次回からいよいよ熱き練習バトルが始まる！！

僕も頑張るぞ！！

第７１話：「合宿２日目！！熱き練習バトル！！」の巻（後書き）

作者：「というわけで、守り人先生のライトくんも今回から登場です！！」

ピカっち：「守り人先生、コラボにご協力ありがとうございます！！」

ラッシー：「まずは俺からだな！ハイテンションのすごさ、見せてやるぜ！！」

ヒート：「気合い入れるんだ！！」

第７２話：「練習バトル第１回戦！～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎～？」の巻

ラッシー：「ついに始まるのか……、どんなバトルになるのか楽しみにしてくれ」

作者：「それでは～、ラッシーの勝利を祈って、燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろ！ラッシー！！」

ナイン：『燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろ！燃えろ！ラッシー！！』

作者：「せ～の！」

ナイン：『ラッシーーー！！』

《応援歌》
今こそ燃えろ
勝利を掴め
君の信念込めた
炎は負けない

全員：『燃えろ！燃えろ！ラッシー！！』

ラッシー：「それじゃあ第７２話プレイボール！」

第７２話：「練習バトル第１回戦！～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎～？」の巻

ついに始まった練習バトル！！バトル部のみんなとどれだけ闘えるかわからないけど……、頑張るぞあさポケナイン！！

『フッシュ～……。いざこうしてバトルフィールドに立つと、野球のときとは別の緊張感があるぜ……』

バトルフィールドに立ったかざんポケモンのバクフーン、ラッシー先輩は先ほどとは違ってかなり真剣な目つきになっていた。

例え練習とはいえ、相手はバトルを専門に練習してきたメンバーだ。

きっと油断していると、あっという間にＫＯ状態にされてしまうに違いない。

『それだけは避けてぇよな。どうせ負けるんだったら全力でぶつかりてぇよ……。いや、負けられないぜ！俺たちだってれっきとしたポケモンなんだ。意地でも食らいついてやるぜ！！』

その想いとともに、背中の炎が凄まじい勢いで噴き上がる！

『へへ、やる気は充分だぜ！大事な第１回戦……何としても勝ちにこだわるぜ！！』

このラッシー先輩の“勝利への執念”は必然的にナインも感じていた。

『これはただの練習。でも練習だからって負けるのは悔しいぜ。……俺たちナインの結束力の見せ所だ！』

『バトル部が相手だからって勝ちは譲るわけにはいかないわ。１勝でも多くして、あさポケナインがどれだけ合宿に賭けているか、見せてあげるわ！』

『大切な仲間のためにも、頑張っている姿を見せたいわ！』

ナイン一人一人が“勝利への想い”を抱く。その結果……、

「頑張れよ親友！！情けねぇ姿見せるなよ！！」

同じほのおタイプとして、常に一緒になって頑張ってきたヒート先輩がそのように言うと……、

「あたしたちがバックから応援しているからね！！」

と、ラプ先輩がエールを送れば、

「一人相撲になるなよ！！みんなで勝とうな！！約束だぜ！？」

と、最後に何ともキャプテンらしい励ましをしたラージキャプテン。

『ヒート、ラプ、ラージ……。フッ……みんなありがとうな。その想い……しっかりと受け取ったぜ!!』

ラッシー先輩は静かに笑った後、改めて自分の前に立つゴウカザル、モモ先輩にしっかりと対峙した。

「心の準備は出来たか？昨日見せたお前の元気の良さ、このバトルでもしっかり見せてくれ!!」

モモ先輩も笑顔を見せながら、しかし真剣な表情で同じほのおタイプのラッシー先輩と対峙する。

「それではいいな？お互い全力でぶつかり合うんだ!!バトルスタート!!」

ゼルスコーチが合図を行った!!

練習バトル第1回戦、ラッシー先輩ＶＳモモ先輩……ここに始まった!!

「行くぜラッシー！！ウオォォォォ！！」

モモ先輩はギュッと握った拳に、体全体のパワーを込め、

「たぁぁぁぁぁ！！」

そのまま目に見えないスピードでラッシー先輩に目掛けて行く！！

『あれは……“マッハパンチ”！種族的に見ても、あのパワーのあるモモ先輩の最初の一撃は避けなければ……それなら“まも……！！！？』

ドカッ！！

「グッ！！？」

「ラッシー！？」

「“きゅうしょにあたった”みたいね……」

ラッシー先輩はダメージの衝撃で思わず苦しそうな表情を見せる。

「なんと!!モモの一撃がラッシーにクリーンヒット!!ダメージはでかいぞ!!」

戦いの様子を実況役のホムラ先輩が伝える。

「ニヒッ。“まもる”はその体勢をつくられる前なら効果は発揮されねぇぜ。一瞬の迷いはバトルに影響するぜ?」

「さ……さすがッスねモモ先輩……」

ラッシー先輩は自分の予想が遅れた事に少々笑いを浮かべてしまう。

『だが“まもる”が出来なくて、腹にまともにくらっただけじゃねえな、このダメージは……。モモ先輩の“マッハパンチ”は他のヤツのと違ってめちゃくちゃスピードが速すぎるぜ……』

ラッシー先輩の言うように、ある物体のスピードが速ければ速い

ほど、それがぶつかる一点に対する衝撃は大きくなる。

“でんこうせっか”や“つばめがえし”といったスピードが関係する技は、このことが関係していることが多い。

さらに同じ技でも、トレーニングを重ねることにより、より速く技を繰り出すことが可能なのだ。

だが、モモ先輩の場合は僕たちが予想出来る範囲を、遥かに超えるような威力を持っていたようだ。

『さすがバトル部……やることの次元が違すぎるぜ』

ラッシー先輩はバトル部の実力をいきなり見せつけられたことに、苦笑いの表情を浮かべていた……が！

「でもスピードなら俺も負けないッスよ！！」

ラッシー先輩はキッとした真剣な目つきを見せ、

「“でんこうせっか”！！」

そう言うと、サッサッと目に見えないスピードでモモ先輩に突撃する……さらに！！

「“スーパースターアタァァァック”！！」

「何！？なんだその技は！！」

モモ先輩は驚きを隠せなかった。

なぜなら今自分に突撃するバクフーンの周りに、星状のエネルギーが何個も何個も発生していたからだ！！

「おーっと！！ラッシーの周りに星状のエネルギーが発生したぞ！？これはオリジナル技なのか！？」

実況役のホムラ先輩が身を乗り出すようにして、この状況を伝えている。

「ハッハッハッ！おもしれぇ！それならこっちはそれを打ち砕くだけだ！！」

モモ先輩は防御の姿勢をとらない。

むしろ先ほどのように“マッハパンチ”を繰り出す体勢をとり、
ラッシー先輩に突撃していく！！

「ウォオオオラァァァァ！！！」
「タァァァァ！！」

ズドォォォォン！！

「キャ！！」
「ぐわっ！すごい衝撃だ！！」
「2匹は？……モモたちはどうなった！？」

2匹が衝突したとたんにあたりにものすごい衝撃が伝わる！
どちらも風を斬るような技のせいからだろう。

「あっ！見てみんな！！」

サクラ先輩がフィールドの方を指差す。

「なかなかのパワーじゃねえかラッシー。驚いちまったぜ」

「へへッ、そうッスかね？……でも攻撃が当たらなきゃ意味無いッスよ！！」

フィールドではラッシー先輩の“スーパースターアタック”を弾き返したモモ先輩が余裕の表情を見せ、ラッシー先輩が悔しそうにドスンと強く地面をたたき付けた。

「そんなら……今度は！！これだぁぁぁぁぁぁ！！」

ラッシー先輩は突然雄叫びをあげる！

それに伴って、背中の炎も高く高く柱を作り出しているではないか！！

「おお！何とここでラッシーの様子が変化したぞ！？一体何をするつもりなんだ！？」

「俺のバトルスタイルはとにかくスピードとパワーが要ッスからね！そんな俺の信念を込めた技がこれだぁぁぁ！！！」

ラッシー先輩がさらに叫びだす！

モモ先輩はラッシー先輩の出方をうかがっているようだ。

「いきますよ!!“ふんか”!!」

ラッシー先輩が繰り出したのは、何とほのおタイプの中でも大技の“ふんか”だ!

『“ふんか”だと?確かにバクフーンが覚える技の中でも協力な技だが、あれは体力に左右される技。最初にモモの“マッハパンチ”でかなりのダメージを受けてしまっている今の彼の状態では、思ったほどの効果は得られないぞ?』

戦闘の様子を見守るゼルスコーチがそのように感じる。

「“ふんか”で勝負を賭けようってことか?だが甘いぜ!そんな技俺には通用しないぜ!!」

モモ先輩はそう言いながら、自分に向かって溢れて来る炎を避けていく!

「あっちゃ～。モモ先輩ホント素早いですね～」
「元々ゴウカザルはスピードとパワーに優れた種族だからな。だが、それでも“ふんか”を回避していくなんて普通じゃねぇぜ」

バトルを観戦していた僕とヒート先輩がそのように話す。

『だがラッシー、ここからだぜ。今こそお前の最強伝説が蘇る時だぜ！』

ヒート先輩はバトルを見ながら、自分たちが失った“栄光”について思い出していた。

第７２話：「練習バトル第１回戦！～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎～？」の巻

ラッシー：『やっぱりバトル部だけあって、一筋縄ではいかないな。なんとかして突破口を開かなきゃ』

ラプ：「次回も第１回戦は続くわよ♪」

第７３話：「あん時の俺……～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎？～」の巻（前編）

ラッシー：「ずいぶんと久しぶりの投稿だな？」

作者：「内容を考えるのに時間がかかったからね」

ヒート：「の割にはずいぶんひどい内容だぜ？」

作者：（泣）

ラッシー：「あっ……泣いちまった……。でもいつものことだからほっといて……第７３話プレイボール！！」

第73話：「あん時の俺……～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎？～」の巻

『くっそ～……。やっぱりしばらくポケモンバトルをしていなかったせいか、なかなか思うような効果が得られないぜ……』

練習バトル第1回戦に臨んでいたラッシー先輩は、自信のある“ふんか”を放ちながら、自分がかなり苦しい状況だと言うことを感じていた。

『く……！！あん時はこんなんじゃ無かったのにな……。あん時の俺ならパワーでどんな相手でも蹴散らしていたのによぉ……！』

あん時の俺……。

それは今から5年前のこと……。

ラッシー先輩がヒノアラシだった頃の話である……。

「これで決めるぞ！！必殺“かえんぐるま”！！」
「くっ！それならこっちは“サイコキネシス”で防御する！！」

ここはポケモンカントリーにある町の一つ、“まんげつタウン”。
その町にある“ポケフィールド”と呼ばれるポケモンバトル専用の公園で2匹のポケモンがバトルを行っていた。

「いっけ～“ラーシー”！！“サイコキネシス”の壁なんて突き破っちゃえ！！」
「“リッキー”も負けるなよ！！」

ポケモンバトルを観戦していた2匹の少年が応援をする。

どうやら1匹はヒノアラシ、もう1匹はキリンリキのようだ。

「“サイコキネシス”で防御壁だと!?ずいぶんレベル高いことするんじゃないか!?」

体を丸め、炎をその身にまといながら、ものすごいスピードで転がるヒノアラシがキリンリキの技術に驚く。

なぜなら本来“サイコキネシス”は自分が放つ強い念力で相手を攻撃する技。

その念力を自分に向かって放つなど、高度な技術が必要になるからだ。

「こうでもしないと君のその強力な一撃は耐え切れないからね!!」

そう強い口調で話したキリンリキの周りには、すでに何色もの色を持ちながらユラユラと揺れるガス状のエネルギーが現れた。

これがどうやら“サイコキネシス”の姿のようだ。

「んじゃ僕はそれを吹き飛ばしてみせるさ！！いっくぞ～！！」

ヒノアラシは攻撃をやめようとしない。

「うぉらぁぁぁぁぁぁ！！！！」

ゴォーーーー！！！！

“かえんぐるま”をまとったヒノアラシが移動していくにつれて、周りに炎から発される熱気が伝わる！

「壊してやるぞ！！！！！！」

ドッカーーン！！！

高温の“かえんぐるま”と、“サイコキネシス”の壁がぶつかり合った瞬間、凄まじい音が響き、モクモクと煙と砂ぼこりが上がった。

「ニヒヒッ」

「う〜〜ん……」

それが無くなるとすすで少し黒くなったヒノアラシはピースサイン、そしてキリンリキは目を回してＫＯ状態となっている光景が広がった。

しばらくして近くにあったベンチに座ってバトルを楽しんでいたヒノアラシにキリンリキ、それから観戦していたヘラクロスとガーディーおしゃべりを始めた。

「やっぱりすごいやラーシーの攻撃は……。どんな相手にでもパワーで圧倒しちゃうんだもん」

「へへッ、そうか？」

ガーディーに“ラーシー”と呼ばれたヒノアラシが満面の笑顔を見せる。

このラーシーこそ、今ではあさポケの頼れる４番打者のラッシーなのだ。

「あぁ、参っちゃったよ。あれだけの防御の体勢を作ったのに、

むりやりでもそれを破壊するんだもん」
「何でそんなに一撃必殺系にこだわるんだ？」

キリンリキとヘラクロスが質問する。

「そんなこと決まっているじゃんか。攻めなきゃ勝てないからだよ」

ラーシーが“どうしてそんな質問するんだ？”という表情を見せてそう答えた。

「さっきみたいな防御主体のバトルスタイルは、その耐久性を超える技を受けたときに、通じなくなることがあるだろ？でも攻撃型バトルスタイルは違う。パワーはあげようと思えばどこまでも上げられるんだ。守りだけじゃ相手が倒れることなんてないんじゃないのか？」

と、ラーシーは語る。

「それにどうせ相手に攻撃するんなら、自分の持つフルパワーで攻撃した方が気持ちいいというか、スカッとするんだ！！」

ラーシーは自分のバトルスタイルに自信に満ち溢れた表情で、最

後にそう話した。

「そっか～。んじゃあ僕はそのフルパワーに負けない防御壁を作ってみるよ！！」

「僕はラーシーのスピードに負けないように、特訓だ！！」

「同じほのおタイプとして、君より熱い炎を放てるようにするぞ！！！」

ラーシーの話を聞いた親友たちは、ライバル心をメラメラと燃やし始めていた。

「バーカ。僕はちょっとやそっとで負けはしないよ。だって僕はこの町で開かれる“バトルカントリー”のチャンピオンを目指すんだからね！！」

そう、ラーシーが負けない本当の理由は、彼の心の支えになっている“バトルカントリー”の存在だった。

この大会は、ポケモンバトルが特に盛んな、このまんげつタウンで、毎年開催されているカントリー一のバトル大会だった。

参加するポケモンの年齢により、“イージークラス”、“ノーマルクラス”、“ハードクラス”に分かれているこの大会。

特に小学生から中学生までが参加する“イージークラス”は毎年チャンピオンが入れ代わることで特に有名だった。

『そうさ。僕はバトル大会でチャンピオンになるんだ！どんなポケモンが相手だって勝ち進んで見せる！！ク～！早く大会始まんないかな～！！』

ラーシーは大会開催日まで待ちきれない様子をみせながら、ギュッと手を握った。

「オラオラオラオラ！！特大“だいもんじ”だぜ！！」

「いっくぜ～！！一撃必殺“オーバーヒート”！！」

向かえた大会当日。

1匹のヒノアラシがみせた快進撃に誰もが驚きを隠せなかった。

ヒノアラシといえば、臆病な性格の持ち主が多く体を丸くして身を守ったりするなど、どちらかといえばあまり好戦的とは思えないイメージがするポケモン。

だが注目の的になっているこのヒノアラシことラーシーは、そのイメージを完全に覆すようにガンガンと強力なほのお技で一撃で対戦相手を倒していった。

「なんてヤツだ。あっという間に決勝戦進出を決めやがった」

「みずタイプやいわタイプもかなりぶつかったはずなのに、それをすべて一撃で倒すなんて……」

「一体どんな特訓したらあんな技を繰り出せるんだよ……」

ラーシーの前に敗れた対戦相手が悔しさをにじませながら、そのようにコメントしていた。

「ふぃ～。次はいよいよ決勝戦かぁ……。どんなヤツが相手なんだろうな？」

「どんな相手でも今のラーシーを止めるなんて難しいんじゃないのかな？」
「僕もそう思う」

大会出場者の控室で、次の決勝戦を待ちきれないラーシーと、その仲間がおしゃべりをしている。その時、

「おい！次の決勝の相手が決まったぜ！！僕たちと同じあさひタウンに住む“リード”ってヤツが相手だって！！」

控室の扉を勢い開けて、キリンリキのリッキーが報告をする！

「あさひタウン……？そのリードってヤツの種族は何なんだ？」

ラーシーがリッキーに聞き返す。すると彼は次のように報告した。

「種族はヒトカゲだよ。♂のヒトカゲで僕たちと同じ年齢みたいだよ」
「ヒトカゲ？ってことは僕と同じほのおタイプなんだね？」

この時ラーシーは、『ヒトカゲで決勝戦まで来たってことはかなり腕は良いかもな。今までのように一筋縄じゃいかないかもな……』と少し作戦を考えていた。

《さぁついに始まりました、バトルカントリー、イージークラス決勝戦！！》

『ワァァァァ！！』

それから少し時間が経ち、ラーシーは決勝の舞台へと向かった。

そしてバトルフィールドに立った瞬間、観客たちの熱気に、先ほどまでとは違った雰囲気を感じていた。

「すごいや……僕、本当に決勝戦まで来たんだ……」

ラーシーは一言そうつぶやくと、落ち着かない様子でキョロキョロと辺りを見渡した。

すると……、

「君がラーシーくんだね！僕は君と同じあさひタウンに住む“リード”！お互い良い勝負が出来るように全力で頑張ろうね！！」

と、ラーシーの対戦相手であるヒトカゲ、リードが笑顔で話しかけてきた。

「え！？あ……うん！！もちろんだよ！！」

ラーシーは彼が意外なほど友好的性格なのに驚いたものの、すぐに持ち前の明るさで返事をした。

そしてガッチリと握手をした後、すぐにまた2匹は自分の立つ場所へと戻っていった。

「それでは、バトルカントリー大会イージークラス決勝戦……スタート！！」

こうして審判役のコールで熱き決勝戦が始まったのであった……。

『思えば俺がアイツと出会えたのも、２匹ともポケモンバトルで一番を目指していたおかげなのかもしれねぇな……。全く運命ってヤツはどこまで演出上手なんだ！？』

ラッシー先輩は、モモ先輩から放たれる威力絶大の“ほのおのパンチ”を防御したり、避けたりしながら、自分と“彼”との出逢いについて思い出していた。

スタッ……！

そしてその間、一度体勢を立て直すために自分が最初に立っていた場所へと戻る。

そしてややダメージが多くなったのにも関わらずニカッと笑った。

なぜなら……、

『……ケッ！俺もアイツもバトルのことなんて、すっかり頭の中から消し去ろうとしてるのに……、不思議とこうしてバトルをしていると、その感覚がウズウズしてくるぜ！！やっぱりバトルに燃えているんだな！！』

ラッシー先輩は5年前の“あの日”と似たような感情を抱いていた。

「決勝戦だから色々と作戦を考えたんだ！！それがこの技さ！」

ラーシーは決勝戦開始直後そう言い放つと、背中の炎を激しく燃やしはじめた！！

すると、あまりにも急激に燃えているためかだんだんと黒煙が上りはじめる！！

「バトルはシンプルに……だけど燃えなきゃ楽しくないからね！！“えんまく”！！！」

そう、彼が最初に放った技は“えんまく”！！

黒い煙が濃くなり、だんだんとラーシーの姿が見えなくなる！！

「目くらまし……ってことなのかな？君の戦いっぷりを観察していたけど、はじめて防御系の技を繰り出したね！」

リードが少しニコっと笑っている。なぜなら彼はこの時、ラーシーがここまでとは違った戦法を出したことで、嬉しさを感じていたからだ……。

「それなら僕はこの煙でも惑わされないほどの集中力を見せてあげる！！」

リードはそう言った後、目を閉じてスーっと深呼吸をした……。

『きっとラーシーくんはまだそんなに場所を移動してないはずだ……。煙の流れる方向からすると……』

リードは少し考えたあと、キッとした鋭い目つきで、煙を切り裂くように腕を振り落とした！！

「ここだぁぁぁぁぁ！！“いあいぎり”！！！」

カァァァン！！

まるで金属同士がぶつかるような音が響いた。一体何があったと言うのだろうか？

「あ……ぶなかったぁ……。一瞬何をするかと思ったら“いあいぎり”をするなんて……」

「何ピンチだったみたいな言い方をするのさ？君こそさりげなく“まもる”をしていたじゃん」

ラーシーの言葉に少しだけ不満げな表情を浮かべたリードだったが、またすぐにニコッと笑い始めた。そして、

「僕の自慢の攻撃を見せてあげるよ！！“かえんほうしゃ”！！！」

という言葉と同時に大きく口を開けて、巨大な炎をラーシーに向かって発射した！！

「ハハッ。やっぱりキミもほのおタイプの技に磨きをかけているんだね！！でも僕だって負けないよ！！“かえんほうしゃ”！！」

そう言うとラーシーもリードに負けじと“かえんほうしゃ”で応戦する！！

ゴォォォォ！！

小さな体から発射されているとは、とても思えないほどの巨大な炎がぶつかり合う！！

『やっぱりバトルはこうでなくちゃ！相性とか技の組み合わせとか……なんかセオリーとか関係無しに、自分の持つ最高の技でぶつかるのが良いよね！！』

ラーシーは技を繰り出している間、ワクワクしている……と言うよりは、もう純粋にリードとのバトルを楽しんでいた。

『こんなに本気で楽しいバトルなんていつ以来なんだろ。やっぱり一撃で倒れたらお互い楽しくないよね！ラーシーくん、こんな楽しいバトル……ありがとう！！！』

リードもまた、久しぶりに好敵手と言えるようなラーシーとのぶつかり合いを楽しんでいた。

そのあとしばらくの間、両者の炎のぶつかり合いは全く変化が見られないまま続いた。

どうやら2匹のこの技の威力は互角だったようだ。

……そして、そのままの状態で5分経過したところで攻撃は中断された。なぜなら、

「はぁ……はぁ……全然ダメージが伝わらなかった……。疲

れだけがたまっちゃったよ……」

ラーシーはバタンと大の字になってそのまま倒れてしまったからだ。

いや、ラーシーだけではない。

「ハハハ……。僕の技がこんなに通じない相手……初めてかもしれない……。すごいよラーシーくん……」

リードもまた、その場にバタンと大の字になって倒れてしまった。

本来この状態ならば、この決勝戦は両者戦闘不能状態なので引き分けになるはずだった……。

……だが、彼らは違った。

「はぁ……はぁ……はぁ……。リードくん、本当にキミとバトルが出来て良かったと思う。……ありがとう……」

「それは僕だって同じさ。君のバトルスタイル……すごく対戦していて楽しく感じたよ。……でもなんだろ？おかげで今まで以上に勝ちたいと感じちゃった……」

ラーシー、そしてリードはフラフラした様子だった。そして笑顔にあふれていた。……だが、それでも2匹はぜひ、この素晴らしいバトルを勝利で飾りたいと思った。

「最後は打撃戦で行くよ！！この技でラストにする！して見せる！！たぁぁぁぁぁぁ！！！」

先に走り出したのはリードだ！！

「僕も同じことを考えたよ！この一撃でラストになるかもね！！」

ラーシーも走り出す！！

「たぁぁぁぁぁぁ！！！！これが僕の奥の手だぁぁ！！“すてみタックル”！！！！」

「僕も……僕も“すてみタックル”だぁぁぁ！！」

リードは、燃えるような勢いで体ごと突っ込む！！

ラーシーも風を斬り、そして光を放つような勢いで突っ込む！！

『たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！』

『……ッ！！！そうか！！あん時の俺は、常に自分の繰り出す技一つ一つに全力を賭けていた！！例えうまくいってもそうでなく

ても、その一つ一つが全力だったから後悔しなかったんだ……！！』

ラッシー先輩は回想中に自分が忘れかけていた、バトルスタイルを思い出したようだ。

そしてそのあとニカッと満面の笑みを浮かべたと思うと……、

「ありがとな親友！！！おかげでこのバトルの突破口……開けそうだぜ！！」

と、バトルを見守るヒート先輩に感謝の気持ちを伝えた。

その言葉にみんなは？マークを浮かべていたが、ただ一人ヒート先輩は静かに笑った。

「……そうか。思い出したか？……じゃあこっからおまえと俺の“栄光”を見せてやれよ！！」

「おう！任せてくれ！！」

ラッシー先輩は一言答えたあと、クルっと前を向いた。

その先にはゴウカザルのモモ先輩が立っていた。

「なんか良いこと思い出したようだけど、……でも俺には通用しないぜ！なんせ俺はすでにクライマックスモードなんだからなぁぁぁ！！」

『だぁぁぁぁ！？』

モモ先輩の言葉にあさポケサイド全員がズッコケてしまった。

な……何はともあれ、注目のバトルはこのあとも続く！

第７３話：「あん時の俺……～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎？～」の巻（後

ラッシー：「ふぃ～……。俺にもあんなガキの頃があったんだな～」
↑現在中学２年

ヒート：「次回はいよいよそんなラッシーとモモ先輩のバトルに決着がつくぜ！！」

第７４話：「４番の“信念”……～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎？～」の巻

ラッシー：「モモ先輩の技が強すぎる！！」↑半泣き状態

ヒート：「まだおまえらしくねぇぞ！いつものハイテンション……見せてくれよ！！」

ラッシー：「もちろんだぜ！熱き第７４話プレイボール！！」

第７４話：「４番の“信念”……～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎？～」の巻

白熱する練習バトル第１回戦！！
ラッシー先輩もモモ先輩も放つ技にパワーを感じるや！これから
どうなるんだろう！？

「いくぜラッシー！！クライマックスになった俺の必殺技！！“
オーガフレイド”だ！！」

そう言い放つとモモ先輩、突然炎を全身にまといだした！！
……さらに！！

「オラオラオラオラオラオラァァァァ！！」

強烈なパンチを連続で……ものすごい早さで繰り出した！！それ
もただのパンチではなく、“ほのおのパンチ”として！！

ドカドカドカドカ！！

「ぐ！！くっ！！」

ラッシー先輩は必死に防御体勢をとるものの、あまりの威力に苦悶の表情を浮かべている。

いくらこうかいまひとつの“ほのおのパンチ”とはいえ、最初に受けた“マッハパンチ”のダメージは大きく、少しでも気を抜くとKO状態にされそうだった。

「おーっと！ここでモモが強烈なオリジナル技“オーガフレイド”を繰り出したぞ！！」

「スピード、パワー、それに燃え上がる炎がプラスされたこの技に……もはやラッシーはたちうち出来ないのか！？」

実況役のリオレウスコンビがマイクを使い絶叫する！

「ラッシー！？」

「ラッシー先輩！！！」

いきなり一方的に攻撃をされる状況となってしまった試合展開に、思わず僕とヒート先輩は身を乗り出し叫ぶ！！

『くっ……！！ジョーダンじゃねえよ！！いくら練習バトルだからって……こんな大技を繰り出すなんて……！これじゃ何も出来ないまま負けちまう！！』

ラッシー先輩は攻撃を受けながら、この状況を打開出来ない自分のふがいなさを感じていた。

そして……！！

「ぐわぁぁぁぁ！！！」

ラッシー先輩の必死の防御も限界を向かえてしまい、彼は思い切り吹き飛ばされてしまった！！

「おっと！！ラッシーが吹き飛ばされてしまった！！これは勝負あったか！？」

「パワー、スピード、そして熱き炎が合わさったモモの攻撃に成す術は無いのか！？」

リオレウスコンビの実況にも熱が入る！

「うそ！？ラッシーが負けるのか！？」

「まだモモ先輩にあまりダメージを与えても無いのに……！これ

がバトル部の実力なのか……？」

ジュジュ先輩にラージキャプテンは、あまりの力の差に驚きを隠せないでいる。

「……そんな。彼らがいくらバトルの技術を持っているからと言っても……僕たちと同じポケモンやモンスターなんだ……。こんな手も足も出ないなんて……！！」

僕は自分が観てきたどんなバトルよりもすごく悔しい感情を抱いていた。

確かに彼らはこのバトル部でものすごく特訓を積み重ねているだろうし、ゼルスコーチやガル先生、イックン先生にいろんな技術、心構えを学んでいるに違いない。

でもラッシー先輩だって種族からいえばバクフーン、それも最終進化系だ。

中学校2年生ですでに最終進化系に成長しているということは、

どこかでバトルの経験値を格段に得ているはずなのだ。

そんなポケモンがいくらバトルのエキスパートとはいえ、年上のポケモンとバトルしているなら、これほど一方的な試合にならないはず……！！

「まだまだ俺のクライマックスは続くぜ！！次は必殺技パート２だ！！」

モモ先輩は大声で叫びだす！！

一体何をすると言うんだろうか！？

「これだ！！“おにび”！！」

モモ先輩は小さく燃える炎をいくつも繰り出す！！

「え～！？この状況で補助技の“おにび”！？一体何考えてるの？」

チコっちが少し拍子抜けしたように言う。

『確かに……。もうラッシー先輩の体力はほとんど残ってない。それに“おにび”は相手をやけどじょうたいにする技……。ほのおタイプであるラッシー先輩には効果はないはずなんだけど……』

僕はモモ先輩の狙いを考えていた。

『……何かとてつもなく嫌な予感がする……。ほぼ動きのとれないラッシー先輩に対して一気にケリをつけそうな予感……そして僕たちあさポケメンバーに対して圧倒的な力の差を見せそうな予感が……』

僕はそんな考えを抱きながら、応援を続けることにした。

『あの攻撃的なモモが……補助技……。アイツも修行の成果が現れてきたようだな』

バトル部部長、ラッシュ先輩はモモ先輩の技術の向上を感じていた。

「しっかり目に焼き付けろラッシー！！これが必殺技パート2、“オーガフレア”ダァァァァ！！」

モモ先輩がそう叫ぶと、先ほどまでモモ先輩の周りに浮いていた“おにび”が、ラッシー先輩を目掛けて急降下していく！！！

「まさか！？“おにび”を攻撃技として扱うなんて！！」

「なんてバトルスタイルなんだ！！」

ラージキャプテンとジュジュ先輩が叫ぶ！！

「早くそこから逃げろラッシー！！じゃないとあの攻撃をまともに受けちまう！！」

「ラッシー！！」

続けてヒート先輩とラプ先輩も叫びだす！！

『……モモ先輩は本当に攻撃にこだわりを見せるみたいだ。だから得意技の威力もアップしたんだろうし、補助技までも攻撃技として扱うことが出来たんだ。……すごいやバトル部……』

僕はあらためてバトル部のスケールの大きさを感じた。

「ラッシー！？」

「逃げろラッシー！！」
「早く！！早く！！！」

あさポケメンバーがラッシー先輩に危険を促す。

だが、ラッシー先輩は全く身動きが出来ないほどダメージが蓄積していた。

「勝ったぜ……」

モモ先輩は勝利を確信していた。

『ちきしょう……。何が俺と……アイツの“栄光”を見せるだ……。何が大事な初戦を勝ちに行くだ……。何にも出来なかった……。あの時みたく……。すまねぇ……マジですまねぇヒート……。みんな……』

ラッシー先輩は意識はハッキリしていたようで、自分に向かって来る“おにび”を視界に捕らえていた。

逃げねば、避けねば確実にダメージが蓄積している自分に直撃する……。

でも逃げられないのだ。ダメージが大きすぎて……体が動かなくて……。

何もすることが出来ない自分が悔しくて、情けなくて涙まで流していた。

……このまま終わるんだろうな……。

「ふざけんじゃねぇ……。俺をナメんなよ……！」

「？」

突然ラッシー先輩の口調が変わりだした。

「俺は……俺はこんな簡単に終わんねぇよ！！終わってたまるかぁぁぁぁ！！」

「！！！？」

ラッシー先輩は急に起き出すと、背中から猛烈に炎と煙を噴き出した！！

ゴォォォォォ！

轟音とともに、“おにび”が掻き消された！

「すっげぇ！！一気にピンチ脱出だ！！」

「流れを変えてやれ！」

「なんだ！ラッシーがまだパワーを残していたなんて！？俺の必殺技を消しちまうなんて！！」

モモ先輩はいきなりの状況の変化に驚きをみせる！

「あったりまえだ！！俺はあさひポケ中学野球部の４番だ！！みんなの必死の願いを……その一撃で叶えてやる役目なんだ！！」

「ラッシー……」

「ラッシー先輩……」

ラッシー先輩は４番としての意地をここ一番で発揮した。

野球の試合の中でスタメンに並んだ９匹のうち、最も頼りにされる打順……４番。

この打順は以前の打撃練習にも紹介したように、チームの精神的支柱と言う役目がある。

ラッシー先輩にはそれが出来た。出来ていたのだ。

普段は遅刻も多いし、ラプ先輩に怒られたりしている。

でも彼はバトルや試合となれば、冷静に冷静に戦況を見つめ、何をすべきかわかっていたのだ。

すべてはチームの力となるため、信じてくれる仲間のため……。

「それがアイツの“栄光”なんだ。俺もバトルの腕には自信がある。パワーにも。でもアイツはそれにプラスして“信念”を持っていた。繰り出す技、パワー、そして技術に。だからアイツはいつもフルパワーで闘えたんだ」

ヒート先輩はラッシー先輩と出逢ったあの日のバトルを思い出していた。

まだ互いに本名である、“リード”“ラーシー”で呼び合っていたあの日のことを。

「4番としての意地か……。野球の試合なら、後が無い状況のここ一番で……三振しまくってたヤツが同点アーチを描くような感じだぜ」

「うん。バクフーンのとくせい、“もうか”が導いたドラマだね……」

ラージキャプテンとジュジュ先輩はホッとしたようにつぶやいた。

「なんでこんな一方的なバトルになったのか……わかったぜ！俺は……相手がバトル部だってことに変なプレッシャーを受けちまったんだ！！」

「なんだと？」

ラッシー先輩はビシっと指をモモ先輩に指す！！

「だが、こっからはちげぇよ!!俺の“信念”はこんなヤワなもんじゃねぇ!!どんな優れた相手だろうと、一撃で打ち砕いて……スタンドに……いや、場外まで吹っ飛ばしてやるぜ!!!４番の勝負強さ、よ～く見とくんだな!!」

ラッシー先輩は先ほどまでと気持ちの強さが違っていた。

「おもしれぇ!!だが俺は、それ以上のクライマックスだってことを教えてやるぜ!!」

モモ先輩はラッシー先輩の言葉にさらに激しく闘志を燃やし始めていた。

「すげぇ～!!なんとラッシーがモモの攻撃を特大の“ふんか”で抹殺したぁぁぁぁ!!」

「絶体絶命のピンチを切り抜けたことで、このバトル……ますます熱くなりそうだぁぁぁ!!」

ホムラ先輩や、レウト先輩の実況もより熱くなりはじめた!!

「やるじゃんかあのラッシーってヤツ!!オレに負けねぇようなバトルを演じてるぜ!!!」

「かっけぇとこばかり見せやがって!!かわいコちゃんのハート

を何気に狙い打ちしてるんじゃねぇよ!!」

観戦していたライトくんとキノガッサさんのテンションも、他のみんなを代表するかのようにグングーンと上がりはじめた。

「燃えて、燃えて燃えやがれラッシー!!イケイケドンドンだ!!」

ヒート先輩も応援に熱が入る!!

「トリャー!!反撃の“でんこうせっか”!!」

ラッシー先輩は叫びだすと、快足を飛ばしてモモ先輩の方へ走って行く!!!

「“でんこうせっか”で先手攻撃をとるって言うのか?悪いがそ

んな技じゃ今の俺はとめられないぜ！！」

モモ先輩がラッシー先輩にそのように忠告するが、

「確かに“でんこうせっか”だけならな！……だが、俺の狙いはそんなもんじゃねぇ！！」

ラッシー先輩がそう叫んだ次の瞬間！！！

ゴォォォォォ！！

背中の炎が激しく燃え始めて、ラッシー先輩の体をまるごと飲み込んだ！！！

「これが俺の持つ“信念”だ！！強烈に決めてやるぜ！！！」

ラッシー先輩らしい技だった。

燃え上がる気持ち、自分の“信念”を表すかのように、炎と一体になってモモ先輩へまっしぐらに突入していく！！

「“かえんぐるま”か？……フッ、バクフーンであるおまえらしいが、そんな技で俺のクライマックスを吹き飛ばせるかな！？」

一方のモモ先輩は次なる必殺技を繰り出していた。

「俺の必殺技パート3！“オーガバースト”！！！」

その瞬間モモ先輩の二つの拳が燃え上がる！！

そして他のどの技よりも高音で、パワーが絶大な“ほのおのパンチ”として、ラッシー先輩の“かえんぐるま”に殴り掛かる！！

「テヤァァァ！！！！」

……だが、

「もらったぁぁぁぁぁぁぁぁ！！“ファイナー”！！」

ラッシー先輩はこの時を待っていた！

“かえんぐるま”のじょうたいで彼は地面を蹴り、なんとモモ先輩にヘッドスライディングをしたのだ！！

まるでボールをバットでしっかり捉えた弾丸ライナーのように！！

ドッカーーーン！

「おおっと！ここでまたも爆発だぁぁ！2匹は一体どうなってしまったんだ！！？」

ホムラ先輩が叫びだす！！

『ラッシー！！』
『モモ！！』

観戦していた全ての人たちが思わず声をあげる！！

果たしてこのバトル、どうなるのか！

「へへへ！」

黒煙が晴れたあと、フィールドには勝利のガッツポーズを決めたモモ先輩の姿、

「う～～ん……」

そして持てる全ての姿を出し切って、大の字で目を回しているラッシー先輩の姿があった。

「ラッシー戦闘不能!!よって第1回戦……モモの勝利!!」
『ワァァァァァ!!』

ゼルスコーチの言葉に歓声が響く!!

「すごい結末だ!!まさにラッシーの猛反撃をシャットアウトするかのような結末!!勝者はモモだ!!」
「敗れたラッシー!!それでも彼の見せた絶体絶命からの脱出、そして“信念”の大技は、観客の心を燃え上がらせてくれた!!両者ナイスバトル!!」

実況のコンビの言葉のあと、盛大な拍手と歓声が響いた!!

「やっぱり楽しいッスねバトル!!モモ先輩の大技は誰にも止められないわけッスよ!!」
「でもおまえの“信念”と、仲間を想う姿……良かったぜ!さすがあさポケの4番だな!!」

礼をしたあと、彼らは笑い飛ばしながら、フィールドを後にした。

それはまるで二人の“豪快”さをそのまま現すかのように……。

第７４話：「４番の“信念”……～ラッシーの放つ炎とモモの放つ炎？～」の巻

ラッシー：「ごめん！勝てなかった！！」

ラプ：「罰としてあさひタウンに帰ったら、毎日グラウンド１５７周よ～♪」

ラッシー：「マジで～……」↑フラフラしながらその場にバタリ！！

作者：「でも頑張ったから、もう一回応援歌だ。ドンマイ！ドンマイ！ラッシー！！」

ナイン（ラッシーのぞく）：『ドンマイ！ドンマイ！ラッシー！！ドンマイ！ドンマイ！ラッシー！！ドンマイ！ラッシー！！』

今こそ燃えろ
勝利を掴め
君の信念込めた
炎は負けない

全員：『ドンマイ！ドンマイ！ラッシー！！』

第７５話：「水と大地の大激戦～ラプが起こした最高のミラクル？～」の巻（前編）

ラプ：「次は第2回戦ね！あたしの活躍……ちゃんと見てなさいよ！！」

ピカっち：「相手はレイラ先輩ですね。ポケモンじゃないけどどんなバトルをするのかしら？」

作者：「見所満載だね！ラプに対して応援するよ！！突撃！突撃！突撃！突撃！突撃！突撃！ラープ！！」

ナイン：『突撃！突撃！突撃！突撃！突撃！突撃！ラープ！！』

作者：「せーの！」

ナイン：『ラープ！！』

《応援歌》
君の創る
水と氷が
奏でる歌は
希望を呼ぶ

ラプ：「ありがとうねみんな！それじゃ第７５話プレイボールよ♪」

第７５話：「水と大地の大激戦～ラプが起こした最高のミラクル？～」の巻

練習バトル第１回戦は、ラッシー先輩が負けちゃった。

でもモモ先輩もラッシー先輩も豪快なバトルで燃えちゃった！！

「さぁ～て、次はあたしの番ね。思い切り運動するわよ！」

ラッシー先輩がバトルフィールドから戻ってきた後、ラプ先輩は落ち着いた様子でそのようにつぶやいた。

「ラプ、頑張れよ！！」

「あたしたち、あさポケナインらしい元気の良さ見せてくださいね！！」

「ベストバトル……期待してます！！」

ラプ先輩を後押しするように、ヒート先輩にピカっち、チコっちが声援を送る。

「……もちろんよ！任せなさいよ！！」

ラプ先輩はニコっと笑顔を見せ、それからクルっと視線を自分の相手の方に向けた。

「ラプ、準備はよろしいかしら？」

その視線の先には、リオレイアのレイラ先輩の姿があった。

『あたしのバトルの相手は、ポケモンではないレイラ先輩……。一体どんな技を使えるのかしら。それに、あたしの技はどこまで通用するのかしら？』

ラプ先輩は“れいせい”に相手のバトルスタイルを把握しようとしていた。

それが一番の攻略方法になるかと思ったからだ。

「レイラ〜！普段の特訓の成果、しっかり見せてよね！！」

観客席でサクラ先輩がエールを送る。

「俺、このバトル……結構注目だと思うぜ」

「え？どうしてそう感じるんですか？」

僕は近くに座っていた男の人間の“スバル”さんという人に質問をした。

ちなみに彼は、このポケハン学園に通っている僕らポケモンとは違う異世界のモンスターを狩る“モンスターハンター”と呼ばれる職業をしているらしい。

それゆえに彼はモンスターの知識が豊富ということもあり、僕たちあさポケナインに異世界のモンスターについて詳しく教えてくれた。

「俺たちバトル部で特訓している奴らにとっては、ポケモンについてもある程度はラッシュたちに教えてもらった。だからポケモンへのバトルの仕方はバトル部メンバーのほとんどが把握しているはずだ。だがあさポケナインは違う。今回が異世界のモンスターとの初対戦だ。だからそれが少なからず気持ちへの影響はあるはずだ」

「は……はぁ……」

僕は彼の言葉にちょっと動揺してしまう。

言われてみれば、相手はポケモンではないのだ。

だから自分達の持つ技が果たしてどこまで通用するのかは、全くの未知数だと思う。

『どのようにレイラ先輩を攻めて行こうかしら？作戦は慎重に考えなきゃいけないわね……』

『ラプのバトルの腕前……。すごく楽しみですわ』

バトルフィールドで対峙しあうラプ先輩とレイラ先輩は、色々と思惑を働かせていた。

「二人とも準備は良いな？それでは練習バトル第２回戦……開始！！」

ゼルスコーチがコールをする！！

ポケモンＶＳ異世界のモンスターの注目の一戦が今ここに始まっ

た！！！

「さぁ、いよいよ始まった第２回戦！！ラプ対レイラという両サイドを代表する女の子同士のバトルだ！！」

『わぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』

ホムラ先輩の実況とともに、歓声が沸き上がる！！

「いきますよレイラ先輩！！“れいとうビーム！！”」

先手攻撃をしたのはラプ先輩！

氷で出来たビームがレイラ先輩めがけて発射される！！

「甘いですわ！！“グランドフェンス”！！」

「え！？」

ラプ先輩は驚いた表情をみせた！

レイラ先輩が足で軽く地面を叩くと、そこから土で出来た壁が登場したのだ！！

「あたしの技が打ち消されてしまったわ……。すごい技ね……」

ラプ先輩がつぶやく。

ラプ先輩の言うとおり、“グランドフェンス”は凍りついて、“れいとうビーム”の効果を吸収し、そのまま打ち消してしまった。

「次は私の攻撃ですわ！」

レイラ先輩はそう言うと、バサっと翼を広げ上空へと飛び立つ！！そこから、

「“かえんほうしゃ”！」

「えっ！？“かえんほうしゃ”！？レイラ先輩にも使えるの！？」

ラプ先輩は上空から繰り出される“かえんほうしゃ”を見て驚いてしまう！

「レイラの種族リオレイアは別名“雌火竜”だからな。ああやって炎を操るのは別に不思議なことじゃないぜ」

スバルさんがそのように説明する。

「ラプの攻撃を見事に防いだレイラ！！すかさず反撃に転じたぞ～！！」

「一方のラプ、レイラの攻撃に対してどのように対処するんだ！？」

実況席のレウト先輩、ホムラ先輩がマイクを使って叫ぶ！！

「さっきの1回戦、ラッシーは自分のペースをつかめず敗れたわ！！でもあたしは攻撃が当たらなくても、そんな簡単に動揺したりしないわ！！」

ラプ先輩はキッとした表情で、自分に向かって来る炎に対してこう叫んだ！！

……そして、

ドォーーン！ドォーーン！！

轟音と伴にラプ先輩が黒煙に包まれた。

仮に攻撃が命中していれば、いくら防御能力の高いラプ先輩でもダメージは大きいにしれない。

だが、その心配はどうやら無用だったようだ。

「フフフ……。相手の出方をうかがうのにはちょうど良かったわ！」

黒煙が晴れると、そこには余裕の表情を浮かべたラプ先輩の姿があった。

「う～ん、作戦を考えるのが上手なラプ先輩らしいや。“まもる”で相手の攻撃を避けつつ、技の威力を知るなんて」

僕はラプ先輩のこの作戦に、彼女のバトルの腕は並以上では無いのかと感じた。

「レイラ先輩。次はどんな攻撃で来るんですか？これじゃあたしにはダメージは通用しないかもしれないですよ♪」

「どういう意味ですの？」

ラプ先輩の言葉に上空からレイラ先輩が質問をする。

『おそらくレイラ先輩も“雌火竜”と言う言葉からわかるように一種のドラゴン。ポケモンの世界のドラゴンタイプといえば、色々な技に対してかなりの耐性を持っているけど……唯一の弱点がある！』

ラプ先輩は対レイラ先輩戦を攻略する方法を考えていた。

どんなに強い者でも弱点はある。その弱点を見つけようとしているのだ。

『あたしの勘が当たっていれば、レイラ先輩はこおりタイプの技で攻めてゆけば倒せるはず。現にさっきあたしが“れいとうビーム”を繰り出した途端、すかさず防御体勢をとったから嫌なイメージを持っているはずだわ』

ただここまでの考えはあくまでラプ先輩の予測。

もしかしたら他の技の方が効果的な可能性があるかもしれないのだ。

『あたしの勘が当たっているか確かめる必要があるわね。もう一度“れいとうビーム”で攻めてみようかしら？』

ラプ先輩が攻撃体勢をとる。

……と、その時！

「さっきの言葉が一体どんな意味なのかわからないですけど、私にはラプに勝てる自信がありますわ。それを見せてあげますわ！」

突然レイラ先輩が地上に降りてきて、ラプ先輩にそう話しかける。
そして、

「いきますわよ！“ほのおブレス”！！」

レイラ先輩がラプ先輩に向かって球状の炎を発射した！！

「“ほのおブレス”……。球状の炎を相手に向かって放つリオレイアの攻撃技だな」

スバルさんがあさポケナインに解説をする。

「あっつくるしい炎にはクールな水がベストだわ！“ハイドロポンプ”！！」

自分に向かって来る炎に対してラプ先輩は“ハイドロポンプ”を放った！！

ズドドドドド！！！

大量の水がものすごい勢いで炎を打ち消してしまう！！

「すごいわラプ先輩！！レイラ先輩の技に対して一つ一つ冷静に対処していくなんて！！」

ラプ先輩の活躍を見て、同じ女の子のピカっちが興奮したように言う！

「もしかしたらレイラ先輩を倒せるかもしれない！頑張ってください～い！！」

続けてチコっちも元気よく応援する！！

「おぉぉ……。この第2回戦は第1回戦のときとは違い、一方が繰り出した攻撃技に対して、もう一方が自分の技でそれを防ぐ……そんな攻防が繰り広げられてるぞ！！」

「この試合……どちらがいかに流れを呼び寄せるかがカギとなりそうだ！！ますます目が離せない展開となることに違いない！！！」

実況席の熱気も上がってきた！！

その後一旦両者は攻防を止めたと思うと、最初の位置に戻って行く。

どうやら仕切直しとなるようだ。

『やりますわねラプ……。バトル部で日々特訓している私と、実力は大差無いように思いますわ』

『このままレイラ先輩の攻撃を防ぎつつ、決定的なチャンスが来たら一気にたたみかけるわ！』

レイラ先輩、そしてラプ先輩はお互い充実した表情を浮かべた。

「先手を撃たせてもらいますわ！もう一度、“ほのおブレス”！！」

レイラ先輩はラプ先輩に対してもう一度“ほのおブレス”を繰り出した！！

「もう一度同じ技で攻めて来るなんて、レイラ先輩も意外と単調ですね！！あたしをそんなに甘く見ないで下さい！！」

ラプ先輩は少々不機嫌な様子で、先ほど同様“ハイドロポンプ”で応戦をする！！！

……だが！！

「えっ！？あの技……連続技にもなるの！？」

ラプ先輩はレイラ先輩が3回続けて“ほのおブレス”を繰り出したことに驚いてしまった！！

「その通りよ。リオレイラの攻撃技である“ほのおブレス”は、単発で繰り出すことも可能だけど、今みたく3回連続で放つことも可能なのよ」

「えっ？その話本当なんですか、“プリムラ”さん？」

ピカっちが技の説明をしてくれた“プリムラ”先輩に尋ねる。

「えぇ、本当よ。あのラプって子も“寒さ”を武器にしているんでしょ？私と似ているところがあって親近感があるから、ちょっと心配だわ」

白と水色の鱗に覆われた鳥のような姿が特徴の竜である彼女が心配そうに話す。

スバルさんによると、彼女の種族は“ギアノス”と呼ばれているらしく、主に雪山に生息しているモンスターなのだと言う。

「そのおかげか、彼女は気持ちの熱さや温度の暑さには弱いんだけどね」

と、自分の世界の仲間であるプリムラさんについて、スバルさんはそう話してくれた。

『うかつだったわ！相手を甘く見ていたのはあたしの方だったのね！……と、とにかくあの技を避けなきゃ！！』

ラプ先輩は自分に向かって来る炎に対して、これまで同様に“ハイドロポンプ”を発射しようとしたのだが……、

「この瞬間を待っていましたわ！私の勝利がグッと近づくこの瞬間を！！」

「どういうことなの！？」

ラプ先輩がイライラした表情で、レイラ先輩に叫ぶ！

それに対してレイラ先輩は、

「“グランドロック”！！」

「なっ！？“グランドロック”だと！？」

レイラ先輩が技の名前を叫んだ瞬間、スバルさんも思わず立ち上がってしまう！！

「スバルさん！？“グランドロック”ってどんな技何ですか！？」

「ピカっち、それはだな……っ！？」

不安になったピカっちから説明を求められたスバルさんだったが、
その時観客席全員の視界の中に驚愕の光景が飛び込んだ！！

「きゃぁぁぁぁぁぁ！！」

ラプ先輩は目を閉じ、悲鳴をあげてしまった！

「ラプーー！！」
「ラプ先輩！！」

一体彼女の身に何があったというのか！？

「“グランドロック”……。これは相手の周りに土の壁を作って、
相手の動きを封じる技ですわ」
「くっ……うぅぅ……」

レイラ先輩が土の壁によって、身動きが全くとれなくて苦しんでいるラプ先輩にそう説明した。

「私の種族、リオレイアが先ほどのように炎を扱うことが出来ることは、“雌火竜”の異名からも想像出来ますわね？でもそれ以上に得意としていることがありますのよ？」

「そ……それは一体……？」

苦しむラプ先輩がレイラ先輩に疑問を投げつける。

「それは私たちを支える大地……そう、この母なる大地を力に変えることですわ。なんたって私たちのもう一つの異名は“陸の女王”ですもの」

フフフと笑うレイラ先輩がラプ先輩に語った。

「さて、それでは決着をつけますわ。あなたもずいぶんと健闘されましたけどもね……」

レイラ先輩が再びバサっと飛び立つ！

そして上空から……！！

「“ほのおブレス”！！」

高温の炎を発射したのだった……。

第７５話：「水と大地の大激戦～ラプが起こした最高のミラクル？～」の巻（後

ラプ：「良い感じだったのに、油断してたわ！！」

ピカっち：「大丈夫ですよ！！何とかなるはずです！！」

チコっち：「あたしたちまだまだ諦めて無いですから！！」

ラッシー：「この気になるバトルの続きは、次回までのおたのしみだぜ！」

第７６話：「ラプのありえない脱出劇！～ラプが起こした最高のミラクル？～」

カゲっち：「ついに……ついに本日７月２１日をもって、“野球するよ！”が連載開始１周年を迎えました！！」

ピカっち：「みなさんの応援のおかげでここまで頑張ることが出来ました！本当に感謝の気持ちでいっぱいです！！」

チコっち：「これからもみんなの応援をパワーに変えて、ハラハラドキドキワクワクの野球物語をお届けしますので、応援よろしくお願いします！！」

チック：「それではラプ先輩の注目のバトルの続き、第７６話プレイボール！！」

第７６話：「ラプのありえない脱出劇！～ラプが起こした最高のミラクル？～」

ポケモンと異世界のモンスターという注目の第２回戦！！
これからどんな展開が待っているんだろう！？

「レイラの見事な作戦が光り、試合は一気にレイラ優性となったぞ！！」
「一方のラプ！“グランドロック”によって全く身動きが出来ない状態だ！！そこへレイラの放った“ほのおブレス”が向かっているまさに絶体絶命のピンチだ！！」

実況席のレウト先輩とホムラ先輩が、熱気あふれるコメントをした。

「くっ……あの技を……まともに……受けたら……大ダメージは……避けられないわ……。な……何とか回避する方法を見つけなきゃ……」

身動きを封じされたラプ先輩は、自分に迫って来る炎を苦しそうに見つめ、精一杯の思考を働かせる。

「ラプせんぱ～い！！」

「負けないで！！」

ピカっちとチコっちが祈るような気持ちをこめ、大きな声でラプ先輩に声援を送る！！

いつも同じ女の子として、ラプ先輩から色んなことを学んでいるから、彼女が勝利すれば、自分たちへの励みになると思っているのかも知れない。

『ピカっちちゃん……、チコっちちゃん……。あんなにあたしを応援してくれている……。何とか……何とかこの状況を打開しなきゃ……。でもどうすれば……』

その様子をバトルフィールドから見ていたラプ先輩は、何とか彼女たちの期待に応えようと必死に“グランドロック”からの脱出方法を見出だそうとする。

だが……、

ドォォォォン！！ドォォォォォォン！！ドォォォォォン！！

「キャァァァ！！」

その間に高温の炎は容赦なくラプ先輩に命中した！！！
ラプ先輩はたまらず悲鳴をあげる！！

「ラプ！！！」
「かなりのダメージだぞ！！」
「大丈夫なのか！？」

ラージキャプテン、ヒート先輩、そしてラッシー先輩が見を乗り出して叫ぶ！！

炎が直撃した場所からはもうもうと黒煙が立ち込める。

『コホッ！コホッ！すさまじいパワーだわ……！こんなの何回も受けていたら体力が続かないわ！』

ラプ先輩はすすで少し黒くなりながらも、何とかこの一撃に耐えることが出来た。

「なかなかの気力ですわねラプ。この攻撃をまともに受けて耐えきるなんて予想してませんでしたわ」

レイラ先輩はフッと笑う。

「ですが、あなたが全く身動きが出来ないのは変わりありませんわ。次こそ最後にしますわよ」

レイラ先輩はまた上空から、“ほのおブレス”を繰り出した！！

「やば！！次の攻撃が当たったら、ラプ先輩きっと耐えきれないよ！！」

「土の壁がラプを圧倒的に不利にしてやがる！！あれじゃ全く避けることも反撃することも出来ないぞ！！」

チックとスバルさんも危機的状況に焦りを見せる！！

『レイラ……。あなたとはいつも一緒に特訓してきたけど、これほどまで良いバトルをするなんて思わなかったわ。陸のフィールドを自在に操る……まさに“陸の女王”ね』

バトル部でともに特訓を行ってきたサクラ先輩は、レイラ先輩のバトルを見てそのように感じた。

『ラプのヤツも良い攻防だったが、一瞬のスキが命取りになってしまったな。レイラの作戦勝ちだ』

バトル部部長のラッシュ先輩も腕組みをしながら、このバトルを見つめていた。

「このままあの子が負けるなんて、同じ寒さを武器にしている私もショックに感じるわ」

プリムラさんもちょっと寂しそうにしていた。

果たしてこのままレイラ先輩が勝利してしまうのだろうか！？

「あ～！！もうじれったい！！じれったい！！じれったい！！そもそも何なのよこのバトルの組み合わせ！！！こっちはかわいいポケモンなんだからポケモン同士で戦わせなさいよ！！！」

「ラプ！落ち着け、落ち着けったら！！きっと脱出方法はあるはずだから！！」

全く予想出来ない展開となった。

突然ラプ先輩の我慢が、限界に達したことを意味するわがままが始まったのだ。

あわてて４匹の先輩たちが落ち着くようになだめるのだが。

「うるさい！うるさい！うるさ～い！！どこに脱出方法があるって言うのよ！！バカなこと言わないで！！」

ダメだ……。完全にわがまま状態となっている。

「第一こんな土の壁なんてずるいわよ！！反則よ！！ポケモンが対処出来るわけ無いじゃない！！」

ラプ先輩はムキになって、“じたばた”する！！

その時、あさポケナイン全員が嫌な予感がした。（特に男子部員）

「“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”！！」

やっぱり……。

４匹の先輩たちはあきれてため息をする……が！！

……ピキッ！

……？

……ピキッピキッ！

……え？

……ピキピキピキピキピキ！！

……う……うそ！？

……ピキピキピキ……バゴーーン！！

……げ！！ママママママママ……マジッスか！！！！？？

この衝撃的な脱出劇を目の当たりにした全ての人たちが、開いた口がふさがらないほど驚いている。

「うそ！？土の壁……壊れちゃったわ！！」

ラプ先輩も我にかえって、この状況に驚く。

「“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”って……最強の技なんじゃないのか？“グランドロック”が破壊されちまうなんて……」

「あのラプって子……一体何者なの？」

スバルさんもプリムラさんも、信じられない出来事に、目が点になっていた。

「あんな技を持っていたなんて……ラプのわがままなところが意外にも奇跡を呼んでしまいましたのね……」

レイラ先輩も驚きでどう解釈すれば良いのかわからない。

「なんだぁぁぁぁぁ!?あの常識を覆してしまった技は!!?」

「ミラクルでパワフルでアンビリーバボーな脱出劇!!これは何かが起こる前兆なのか!?」

実況席もここまでで一番の大声となった!

「何が起きたのか正直わからなかったけど、と……とにかく脱出よ!!」

ラプ先輩は再び戦闘態勢をとりながら、そのように話した。

「フフ、よろしいですわ。ここからの勝負を十分楽しみましょうね」

レイラ先輩も再び戦闘態勢をとった。

そして少しシーンと静まり返った後、

「行くわよ！あたしの得意技、“れいとうビーム”！！」

先手をとったのはラプ先輩だった。

氷で出来たビームがレイラ先輩へ放たれた！！

……だが！！

「そのような技は一点にダメージが集中する技ですわ！だから避けるのも容易ですのよ！！」

レイラ先輩は上空へと飛び立つ！！

そのため“れいとうビーム”は結果的に外れる結果になってしまった！

『やっぱり“れいとうビーム”からは防御か回避の行動を見せているわ。それなら……』

ラプ先輩は目をつぶり、大きく深呼吸をする。

そして……！！

「これで一気に決めるわ！“ふぶき”！！」

ラプ先輩から冷たいエネルギーが、バトル部部室全体に放たれた！！！

「ひゃぁ！！さみー！！さみー！！！」
「僕も寒いのニガテ！！」
「なんて威力なんだ！！」

ラッシー先輩、僕、ヒート先輩はそのあまりの威力に驚きを見せた。

「こんな強力な“ふぶき”だったら、レイラもきっと相当なダメージだね、キノガッサ」
「だな！ラプちゃん……かわいい見かけのわりに、なかなかバトルの腕が良いじゃねぇか！」

ラグさんやキノガッサさんも、“ふぶき”のパワーが普通では無いことを感じた。

“ふぶき”はその後しばらくの間、レイラ先輩を襲いつづけた。

『これだけ部屋全体を包む攻撃を続けていたら、レイラ先輩だって無事ではないでしょう。後はあたしの勘が当たっていれば……』

ラプ先輩は少し余裕の笑みを浮かべた。

そしてスゥーッと息を吐いたあと、もう一度レイラ先輩がいた場所を見つめた。

だが、その大きな瞳に写った光景は彼女が全く予想出来ない光景だった。

「えっ！！？そんなはずじゃ！！」

ラプ先輩は思わず動揺した。なぜなら……、

「さすがに危なかったですわ。とっさに翼で防御態勢をとって正解でしたわ」

そこには強烈な“ふぶき”を受けつづけたとは到底考えられない様子を見せている、レイラ先輩の姿があったのだ。

「あ……あんな上空で翼で防御態勢をとっていた……？それじゃ“ふぶき”は当たっていなかったってことなのか！？」

ヒイロ先輩もこの事態に思わず疑問をぶつけた！

「いや、きっとそれだけじゃないぞヒイロ。いくら防御態勢をとっていたとはいえ、ラプの放った“ふぶき”も相当な威力だったはずだ。その証拠に見てみろ」

「あ！！」

ラッシュ先輩の指差した方向を見て、ヒイロ先輩が驚きの声を発した。

レイラ先輩はわずかだったが、凍りついている箇所があったのだ。

『凍りついているってことは“ふぶき”の威力が、ちゃんとレイラ先輩にダメージとして届いている証拠だ。それなのにレイラ先輩が、あんなに元気な様子を見せている理由として考えられるのはきっと……』

僕はラプ先輩とレイラ先輩の駆け引きの様子を見て、色々と分析をしていた。

一方ラプ先輩を強い想いで応援していたピカっちは、

「えっ？リオレイアって姿がドラゴンみたいなのに、弱点がポケモンのときと違うんですか！？」

「そうだ。ポケモンでいうドラゴンタイプってのは、同じドラゴンタイプあるいは、ラプが得意としているこおりタイプなんだろ？でもリオレイアは雷属性や竜属性といったのが弱点なんだ。だからポケモンでいうところの、でんきタイプかドラゴンタイプが弱点に

なるんだ」

スバルさんはピカっちに対して、このようにリオレイアの特徴を説明した。

「それなら説明が出来るな。きっとあのラプって子は自分の持つこおりタイプで、レイラを倒せると解釈していたんだろう。だが、実際にはこおりタイプは弱点じゃなかった。それゆえにあまり大きなダメージを与えるが出来なかったんだろうな」

「レイラ先輩もラプが何度か放った“れいとうビーム”を防御する様子を見せていたから、なおさらそう感じたんだろうな」

スバルさんの説明に御羅不猟（おらふりょう）さんが自分の考えを話す。

ラージキャプテンはそれを聞いて険しい表情をしながら答えた。

『ということは、あたしの読みは外れていたってことみたいね……。それなら攻め方を変えなきゃ……』

ラプ先輩は自分の放った技が、思うような効果を得ることが出来なかったためか焦りの表情を浮かべる。

……そこへ！！

「今度こそは勝負に決着をつけますわ！」

レイラ先輩が上空からラプ先輩目掛けて突撃して来る！

「そ……そうはさせないわ！“まもる”！！」

一方のラプ先輩も、多少態勢が崩れるも“まもる”でこの攻撃を防いだ。

だが、レイラ先輩は攻撃を続けた！

「“サマーソルト”！！」

「！？」

レイラ先輩はそう叫ぶと、自らの脚力を使って後方宙返りをした！！

「ちょっ！？何なのよ！危ないわね！！そういう素早い動きをみせる相手には、“のしかかり”よ！！」

ラプ先輩は攻撃を避けつつ、レイラ先輩に近づく……が！！

「ラプ！！ダメだぁぁぁぁぁ！！レイラの尾に近づくなぁ！！！」

スバルさんが大声で叫んだ……が。

ラプ先輩にその警告が届くことは無かった……。

「うぅぅ……。く……苦しい……」

一瞬の出来事だった。

レイラ先輩の尾がラプ先輩に直撃したと同時に、ラプ先輩はバタリとその場に倒れてしまったのだ。

「苦しい……はずですわ。この“サマーソルト”は遠心力を使って尾を相手にぶつける技。さらに私たちリオレイアの尾は毒を含んでますので、それを相手に与えることも可能なのですから」

「ってことは……あの攻撃は毒を与える技……だったの！？」

フフフと笑うレイラ先輩に対して、まさかの事態に驚くラプ先輩。

「さぁ、私に早く反撃しなければ、あなたは毒によって倒れますわよ。それとも何か毒を無くす方法でもありまして？」

「じょ……冗談じゃないわ」

レイラ先輩がますますラプ先輩の動揺を誘う。

「うっそ～!?リオレイアって炎に加えて毒も操れるの!?」
「信じられないぜ。異世界のモンスターってこんなに戦術が多様なのかよ!!」

観客席では、このまさかの事態にチコっちとラッシーが本音を口にしてしまう。

『このままだと本当にラプ先輩が不利だ。相手はラプラスが自分では会得出来ないでんきタイプかドラゴンタイプが弱点で、ラプラスに無いスピードもある。おまけに地上と上空を使ってラプラスに出来ない立体的なバトルも出来るし、毒で相手を自滅させることも可能だ。……こんな不利な条件が重なっていて、ラプ先輩に勝つ方法なんてあるのかな?』

僕は厳しい表情を浮かべ、バトルフィールドを見つめる。

『ま……まさか毒を使えるなんて……予想出来なかったわ……。このままじゃいくら体力自慢のあたしでも耐え切れない……』

ラプ先輩は苦しそうに呼吸をしながら、“れいとうビーム”や“みずのはどう”といった技でレイラ先輩を攻撃する。

「そんな攻撃じゃ私は倒せませんわ！」

だが、その度にレイラ先輩は上空へと飛び立って、攻撃をあっけなくかわしてしまう。

「“サマーソルト”によって、ラプが毒に侵されてしまったぞ！これでは動きに制限が加わってしまうぞ！！」

「一方のレイラはまだまだ余力が残っているようだ！！ラプはもうスタミナが限界を迎えてしまっているのか！？」

実況席が熱く状況を伝える。

「ハァ……ハァ……ハァ……」

ラプ先輩は時間が経つにつれて顔色が悪くなっていた。

それぱかりか、めまいまで起きてしまい、スタミナ面が限界ギリギリまでに迫っているようだった。

「頑張れー！ラプー！」
「まだまだ諦めるな！！きっとチャンスが巡ってくるはずだ！！」
「ラプせんぱ～い！」

あさポケナインはラプ先輩に声援を送り続ける。

『み……みんな。あんなに応援してくれている……。何とか期待に応えなきゃ……』

ラプ先輩はフラフラしながらも、何とか戦闘態勢をとった。

「残念ですけど、今度の攻撃はもう避けることは出来ませんわよ」

レイラ先輩がまた脚力を使って後方宙返りを始めた！！

『また“サマーソルト”！！……でも避けられない……当たっちゃう……』

ラプ先輩の予想したように、“サマーソルト”は逃げる体力の無い彼女にそのまま直撃した！！！

第７６話：「ラプのありえない脱出劇！～ラプが起こした最高のミラクル？～」

ラプ：「な……何よ！一難去ってまた一難じゃない！！一体何がしたいのよ作者は！！」

作者：「ハラハラドキドキワクワクの物語だよ。すっごい盛り上がりじゃないか」

ヒート：「こっからラプはどう戦うというんだ？次回が気になるぜ！」

第７７話：「ラプの最後の賭け！！～ラプが起こした最高のミラクル？～」の巻

ラプ：「なかなか思うようにダメージが与えられないわ！」

ラッシー：「負けたらお前もランニングだな！」

作者：「何言ってるのさ？ラプが負けたら君の走る量がグラウンド２８８周になるんだよ？」

ラッシー：「げ！ジョーダンじゃねぇ！ラプ、頑張れ！！（汗）」

ヒート：「結果はどうなったのか……第７７話プレイボール！！」

第77話：「ラプの最後の賭け!!~ラプが起こした最高のミラクル?~」の巻

まさかまさかの連続が続く練習バトル第2回戦!!

このバトルの決着……どうなるのか楽しみになってきたぞ!!

「レイラが再び繰り出した“サマーソルト”はラプにクリーンヒットだ!!」

「さっきからの毒の影響でスタミナが限界のラプにとって、この一撃は致命的なダメージとなりそうだぞ!!!」

レイラ先輩の“サマーソルト”がラプ先輩に直撃した瞬間、実況席のホムラ先輩とレウト先輩は思わず叫んだ。

観客席のあさポケナインは悲鳴に似た声で、ラプ先輩を呼んでいた。

バトル部部長のラッシュ先輩と、レイラ先輩の親友であるサクラ先輩は「よくやったな」といった様子だった。

スバルさんやプリムラさんを含めて、このバトルを観ていた全ての人たちが、レイラ先輩の勝利を確信していた。

……だが！

「ふぅ～……。危うくＫＯされるところだったわ……。とっさに“こらえる”準備をしていて正解だったわね……」

ラプ先輩は倒れてはなかった。……まだ負けてはなかった。

「“こらえる”。私が繰り出した技を受けても、必ずわずかな体力を残して耐え切る……正に最後の望みを繋ぐその技でしのぐとは……さすがはここまで死闘を演じたことはありますわね」

レイラ先輩がラプ先輩のとっさの行動をほめた。

「ですが、あなたがピンチに立たされているこの状況を変えることは出来ませんわ！！すでに与えた毒によって力尽きるのはもはや時間の問題ですわよ！！」

レイラ先輩はバサっと翼を広げ、再び上空へと飛び立とうとした！！

それに対して、ラプ先輩は下を向いたまま次の攻撃をしようとしない。そればかりか、

「フフフ……その通りですね……。あたしがいくらレイラ先輩の攻撃を耐えようとも、あたしを苦しめる毒を無くさない限り、勝つことなんて絶望的ですよね……」

と、苦しそうに呼吸をしながら静かに笑いながら、レイラ先輩が上空へ飛び立つのを見ていた。

『ラプはきっと私が繰り出す次の技に対しても、“まもる”や“みきり”や“こらえる”のような技を使うはず。ですがそれを繰り返したところで、毒から逃れることは出来ませんわよ！』

レイラ先輩がラプ先輩へと突撃しようと考えた！

……だが、彼女はここでふとある異変に気づいた。

～♪～～♪～～♪

どこからか聞こえてくる、悲しいメロディー。

まるで絶望から立ち直れないでいる気持ちをそのまま表したようなメロディーだった。

『な、なんですの!?この気持ちが沈んで悲しくなるようなメロディーは!?一体どこから……ッ!!?』

レイラ先輩は気づいた。

この悲しきメロディーの発信源を。

「……気づきましたか、レイラ先輩。この曲は……ポケモンが人間と共存する世界で、あたしと同じラプラスが歌っている歌なんです」

曲を発信していたラプ先輩は、もう力無くこのように語りはじめ

る。

「昔、ある本で読んだことがあるんです。あたしたちラプラスは元々人懐っこい性格だったために、身勝手な人間に大乱獲された時期があって、種族が絶滅寸前に立たされていることに……。そしてそれを知る由もない、その後の世代のラプラスが歌を歌って仲間を探していると言うことを……」

ラプ先輩は別世界の同種族たちが、とんでもない危機にさらされていることにショックを受けたという。

仲間を探して歌う曲……それが、今ラプ先輩が歌った曲なのだという。

その名も……、

「“ほろびのうた”。……この曲を歌った者も、聞いた相手も間もない間に力尽きるという技です……」

ラプ先輩は悲しそうな表情を浮かべながら、こう説明した。

それに対してレイラ先輩は、

「なるほど……。つまりこの勝負あなたが負けない方法が出来たということですのね？お互い倒れると言うのは、そのまま引き分けを意味していますからね。……ですが、それでも毒のダメージを受けつづけているあなたが、私より先に倒れてしまうのは明らかでは無いですか？」

レイラ先輩は動揺したそぶりを見せることなく、ラプ先輩に問いかける。

「確かになぁ。ラプちゃんが負けを避ける最終手段何だろうが、それでも毒のダメージはかなり受け続けていたはず……。いくら“ほろびのうた”で引き分けに持ち込もうとしても、体力的にはもう限界のはずだ……。ラプちゃん……何かいい方法でもあるのか？」

キノガッサさんが緊張した様子でつぶやいた。

すると、

「フフフ……、確かに毒で負ったダメージは予想以上だわ。……それでもあたしにはまだ勝てる方法が残っているわ！！」
「！？」

ラプ先輩が自信に満ちた様子でそう答えた。

「勝てる方法……ってなんですの！？」

レイラ先輩がさらに聞き返す。

「それはあたしの持つ最大の技、“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”を決めること！！一撃必殺の技はいくら防御したってムダよ！！」

ラプ先輩は最後の賭けに出た。

命中率がかなり低い“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”を決めて、体力的にかなり余裕のあるレイラ先輩を倒そうという、神懸かりな賭けに出たのだ。

「“ぜ……ぜったいれいど”で形勢逆転を狙うなんて……、メチャクチャな作戦じゃないか！！」
「いや、その方が確かに勝ち目があるかも知れない」

熱くなるヒイロ先輩に対して、ヒート先輩が冷静につぶやく。

「あいつの“ぜったいれいど”は他のヤツが繰り出すモノと命中率がかなり違うからな」

「野球部でもいつもいつもお仕置き代わりに使ってたし、」

「大丈夫。いつもあの技を受けている俺たちが確信を持っているんだ」

「保証できるよ」

ラプ先輩のことをいつも見ていた４匹の先輩たちは、彼女のその最後の賭けに対して、揺るぎない信頼のまなざしをじっと向けていた。

『あたしに残された体力も時間もほんんどないけど……、今こそあさひポケ野球部の底力みせるわ!!』

ラプ先輩はすかさず攻撃態勢に入る！

繰り出す技はもちろん……、

「“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”！！」

通常とは比べものにならない強烈な寒波が、レイラ先輩を襲う！！

「そんなの空高く飛び立てば、全くの効果を得られませんわ！！」

レイラ先輩はバサっと大きな翼を広げ、上空へと飛び立った！！

結果、ラプ先輩の技は外れてしまったのである。

「やっぱり難しいか！？レイラ先輩は上空へと避難する方法があるから……」

「まだまだ作戦は始まったばかりだ！！試合終了のその時までは、1秒たりとも諦める理由なんてないぜ！！」

ヒイロ先輩の言葉に、ヒート先輩は力強く燃えるように答える。

「ドンマイですラプ先輩！！しっかり決めて下さい！！」

「あたしたちも一緒に戦っていますよ！！」

チコっちとピカっちはますます応援に熱が入る！

「オイラも……ラプさんが勝てるって信じています！！だから…
…最後まで技を当てることに集中して下さい！！」
「かわいいラプちゃんにはカッコイイ俺もついてるぜ！！クール
に決めてくれよな！！」
「僕もラプを信じているよ！」

ダイル先輩、キノガッサさん、ラグさんもエールを送る！！

気がつけば、ラプの最後の賭けから彼女の並々ならぬ想いを感じ
た人たちの声援で、バトル部部室の音量が大幅に上がった！

「うぉぉぉ！！ラプの強い覚悟に対しての応援がすごいことに
なってきた！」
「もはやラプは一人ではない！この声援が奇跡を呼ぶことになる
のか！？」

レウト先輩と、ホムラ先輩も実況の声に緊張感が表れていた。

『みんな……ありがとね。ここまで来たらもう引くことなんてな
いわ！とことん勝負してみせるわ？……ッ！！？』

思いもよらない声援に感激するラプ先輩だったが、その間にも毒は容赦なく彼女の体力を奪っていく。

それでも彼女は屈することなく、攻撃態勢をとる！！

「“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”！！」

先程同様、強烈な寒波が上空にいるレイラ先輩を襲い掛かる！！

「“ほのおブレス”！！」

しかし今度は炎によって、ダメージを与えることが出来なかった。

そればかりか炎がラプ先輩を襲う！

「“ハイドロポンプ”！！」

だが、ラプ先輩は自分の持つ技でそれを封じ込めた！！

「あ……危ねぇな」
「また失敗か……。失敗する回数が増えればラプは不利だな」
「あぁ。体力的なこと、“ほろびのうた”の効果を考えれば、おそらく次の攻防がラストになるな」
「何が何でも決めてくれよ！！」

４匹の先輩が祈るような思いでラプ先輩の立つフィールドを見つめる。

「ラプ先輩……」
「ラプ先輩！！」

ピカっちとチコっちも必死に気持ちを込めて奇跡を祈る！

『昨日の１５球勝負でお前の迷いは消えたはずだ！！お前の優しさをパワーに変えて……奇跡を起こせ！！』

ラッシュ先輩は次の結果でラプ先輩が成長すると感じていた。

さぁ、運命の結果はいかに！！！！

「“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”！！」

ラプ先輩は残された体力の全てを技にぶつけた！！

「“ほのおブレス”」

一方のレイラ先輩も強烈な寒波に対して、強烈な炎をぶつけた！！！

ドォォォォォン！

２つの技がぶつかり合う！

そして……！！

ピキ……ピキピキピキピキ……

「わ……私の負け……ですわ……。作戦も技術も完璧だったはずなのに……。この“陸の女王”を倒したあなたの腕前は……“氷の女王”と呼べそうですわ……」

カキーーーン！

“ほのおブレス”も凍らされ、そのまま“ぜったいれいど”は、レイラ先輩を襲い……、彼女を氷の中に閉じ込めてしまった。

ラプ先輩は最初、その様子を睨みつけるようにして見ていたのだが、氷の範囲が広がるに連れて段々とその表情を和らげていった。

「レイラ戦闘不能！！よって練習バトル第２回戦は……ラプの勝

利！！！」
『ワァァァァァ！！！』

ゼルスコーチのコールで沸き立つ観客席！！

「な……何という結末だ！！ここまで試合を有利に進めていたレイラに対して、決死の覚悟で逆境に挑んだラプが……見事な……ミラクルで逆転勝利を飾ったぁぁぁ！！！」
「まさに“陸の女王”に対して、“氷の女王”と呼べるようなラプの作戦が……奇跡のシナリオを完結させたぁぁぁ！！！」

実況席のコメントで観客席がさらにヒートアップした！！

そして両者を讃えるように拍手の音が、バトル部の部室を包んだのだった！！

「すごい……すごいぜラプ！！ギリギリで決めるなんて！！」
「抜群すぎる集中力だな！！」
「さっすが“きたのくにからスペシャルぜったいれいど”だ！！」
「サイコーだ！！」

４匹の先輩たちも彼女の健闘ぶりを讃えた。

「やったぁ！ラプ先輩が勝った！！！」

「異世界のモンスターを倒すなんて……驚いちゃった！」

チコっちとピカっちが弾けるような笑顔で、この勝利の喜びを体全体で表現していた。

「この結果はさすがに俺も予想出来なかったな……。よく頑張ったなラプ……」

「感激しちゃった……」

スバルさんとプリムラさんも拍手が絶えない。

「ラプちゃんすげぇよ！かわいいだけじゃなくて、クールに技を決めちまうなんてよ！！」

「２回もミラクルが起きるなんて普通じゃ考えられないよね」

キノガッサさんとラグさんもこの迫力のバトルに驚きを見せていた。

「オイラもあんなバトルが出来るかな～？」
「そうだな。色々なバトルがあるけど、ここまで白熱したバトルは早々無いと思うな」

ダイル先輩とヒイロ先輩も、バトルの内容が深いことをこのように振り返っていた。

その後、レイラ先輩は炎を扱えるポケモンやモンスターたちによって、無事氷から脱出することが出来た。

そして、ラプ先輩とお互いの健闘を握手で讃えあって、静かにバトルフィールドを後にしたのだ。

盛り上がる特別合宿2日目の練習バトル！！

このあとも注目のバトルは続く！！

第77話：「ラプの最後の賭け！！～ラプが起こした最高のミラクル？～」の巻

ラッシー：「あっぶねぇ！！何とかペナルティが増えずに済んだぜ……」↑ホッとした様子で座り込む。

キュウコン：「どんな事態に対しても、今回みたく冷静さを保てば、結果は変わってくるからな。いいバトルだったぞ」

ラプ：「いい勉強になったわ」

作者：「それでは、最後にもう一度ラプを讃えて……せ～の、ラープ！！」

ナイン：『ラープ！そ～れラープ！！』

海から受け継いだ　君の一撃
華麗に決まれば
夢叶う流星

作者：「次回はチコっちの出番です！！」

第７８話：「元気な女の子たちの戦い！～練習バトルでもやっぱりチコっち劇場～」

チコっち：「今回からはあたしの出番ね！元気いっぱいの“チコっち劇場”を見せちゃうわ！！」

カゲっち：『面倒なことにならなきゃ良いけど……（汗）』

作者：「それじゃ、応援を始めるよ！続け！続け！チコっち！」

ナイン：『続け！続け！続け！続け！続け！チコっち！！』

作者：「チコっち！」

《応援歌》
解き放て
虹の花咲かすため
君のその夢を
この空へ

チコっち：「それじゃ第７８話プレイボールよ！」

第７８話：「元気な女の子たちの戦い！～練習バトルでもやっぱりチコっち劇場～」

まだまだ続く練習バトル！！次の対決はどうなるのかな！？

「さぁ、ますますヒートアップする練習バトル！！続いての第３回戦は、リリー対チコっちだ！！」

「どちらも活発な性格の女の子というのは共通点だが、果たしてバトルはどのように行うのか……注目だ！！」

『わぁぁぁぁぁ！！』

実況役のレウト先輩とホムラ先輩の言葉に、観客席の熱気が更に高まった！！

「そっか、次はあたしの番なのね！！張り切って、“チコっち劇場”を開幕させるわよ！！」

「頑張ってねチコっちちゃん♪」

「僕も応援するからね！」

「十分楽しんできてね♪」

頭の葉っぱを勢いよくグルグル回して元気の良さを見せるチコっちに対して、ピカっちと僕とチックがエールを送った。

「えぇ、もちろんよ！ラプ先輩もラッシー先輩にも負けないバトル……演出しちゃうわ！！」

チコっちはそういうと、バトルフィールドへと向かった。

「あたしの相手は……チコっちちゃんなんだね！負けないように頑張らなくちゃ！！」

「あさポケナインもなかなかな実力だからな。油断だけはするなよ」

一方、リリーちゃんもがばねさんとお話をしたあと、チコっちに負けないような元気の良さで、バトルフィールドへと向かった。

「それでは練習バトル第３回戦……開始！！」

それから少ししして、ゼルスコーチの言葉を合図にバトルが始まったのだった！！！

「リリーなんて、あたしの“チコっち劇場”で一気に倒しちゃうんだから！！“はっぱカッター”！！」

まず先手を撃ったのはチコっち。

得意の“はっぱカッター”でリリーちゃんを攻撃した！

だが、そんなチコっちに対して観客席から見ていたがばねさんは、

「チコっちはポケモンの種族が、チコリータだってラッシュが言っていたな。そして、植物を味方につけて戦うくさタイプだってことも……。だが、植物を味方につけるのは君だけではないぞ」

と、意味が深いコメントを残した。

その彼の言葉の意味する答えはすぐに表れた。

「これくらいだったらあたしだって避けることが出来るんだから！！」

リリーちゃんはそう言うと、サッとジャンプをして速いスピードで迫りくる“はっぱカッター”を回避したのだ！！

「すごい！！“はっぱカッター”を避けるなんて、普段のポケモンバトルじゃなかなか見られないよ！」

「あたしも見たこと無いわ！」

リリーちゃんの動きに対して、幼なじみの僕とピカっちは驚きの声を出した。

「くっなかなかやるじゃない！！……でもまぐれなんて誰にでもありえることだわ！今はたまたま運が良かっただけね！」

チコっちは自信がある技が命中しなかったものの、強気な態度を

見せている。

それに対してリリーちゃんは、

「そうやって相手を甘く見ていると、痛い目にあうんだからね！！」

と、ややムッとした表情を見せながら、チコっちに忠告をしたのだった。

『でもリリーちゃんってどんな技を使えるんだろう？がばねさんに聞くと、元々はお嬢さまだったと言うけど……』

僕は腕組みをしながら、難しい顔付きで考え事をする。

「それじゃあチコっち……見せてあげるよ！！」

リリーちゃんが少し笑顔を見せながらチコっちに叫ぶと、ある異変が生じた。

それは……、

「おい、なんだあれは……？」

「何かの花……？」

「ゆ……ゆりの花じゃないかしら？」

「でもどうしてだろう？リリーちゃんの技と何か関係するのかな？」

異変に気がついたあさポケナインのメンバーは次々と疑問の言葉をつぶやきはじめた。

そう……僕たちが気がついた“異変”とは、リリーちゃんが立っているその一歩手前の地面から、ゆりの花がにょきにょきと表れたことだったのだ。

そしてさらに、そのままリリーちゃんはその花を引っこ抜いたではないか！

「えっ！！？」

「一体何を考えているんだ！？」

「何かあるかも知れないわよ！チコっちゃん、気をつけて！！」

僕たちあさポケナインは一体この行動をどうやって理解すべきか困るほど、動揺を見せていた。

逆に言えば、それほどリリーちゃんがこれからするバトルスタイルが見切られることも無かったのであった。

「ちょっ……！！あのね……植物をいきなり引っこ抜くなんてどんな神経してるの！！命を粗末にしているってわかっているのあんた！！」

チコっちは植物を乱暴に扱う人が大嫌いな性格だったため、リリーちゃんが起こしたこの行動に対して激しく怒りを覚えた。

そしてその勢いで、

「そういうわからず屋にはお仕置きが必要だわ！！“たいあたり”！！」

と超高速なスピードで、リリーちゃんに“たいあたり”し始めたのだ！！

「たぁぁぁぁぁ！！“ひねりのムチうち（シェイクカット）”！！」

だがリリーちゃんは一切動揺することなく、先ほど引っこ抜いたゆりの花から表れた鋭い剣を、まるでムチのように強く力を入れてしならせ、
その勢いで“たいあたり”してくるチコっちを攻撃したのであった！！

パチーーーン！

バトル部室全体に鋭い音が響き渡る！

それに合わせて一瞬ざわついていた観客席もピタッと静まりかえった。

「うぐぅ～……」

攻撃をまともに頭から受けたチコっちは、顔を真っ赤にして頭をおさえながら、すごく痛がっていた。

と思っていたらすくっと立ち上がり、そしてほっぺたを最大限まで膨らませて、さらにはプシュープシューと頭から湯気を噴射して、

「……ちょっとねぇ！！あんた、かわいいレディーに向かって思い切り頭から攻撃するなんてヒドイじゃない！！頭が割れて死ぬかと思ったじゃない！！！」

と毎度おなじみのようにギャーギャーギャーと騒ぎはじめた。

……と言うよりチコっち？君の今のバトル相手のリリーちゃんだって……女の子なんだからね……？

「だからどうしたって言うのよ！？あんたが勝手に“たいあたり”してきて、あたしの技を受けたんじゃない！それを避けられなかったあんたの鈍さに怒りなさいよ！！」

リリーちゃんはチコっちの態度が気に入らなかったのか、すぐに反撃に出た！

「に……鈍さって、それは言い過ぎじゃない！だいたいそんな武

器反則じゃない！！」

「これは“フラワーウィップ”って言うの！！これを使えば攻撃も防御も完璧なんだから！悔しかったらあんたも植物を味方につけなさいよ！！」

「言ったわね！！これでもあたしはくさタイプよ！！植物を味方につけて戦うなんて、幼稚園児でも出来るわよ！！」

あの～……、お、お二人さん？

な……何かバトルの主旨間違っていません？

これじゃ街中とかでお互いに意地張ってもめている女の子たちと何の変わりもありませんけど……？

それにほら～……。この部室に集まった人たちが、今までに見たこと無いくらい目が点になって、大きな汗まで流しているよ……？

だからお互いの意見をさぁ、口論じゃなくてバトルで決着を……って！！

火花……火花散らして睨み合ってどうするの！！！

その後元気いっぱいの彼女たちの口論は15分ほど続いた。

だががばねさんやジュジュ先輩、それからイックン先生の呼びかけにより、ようやく脱線していたバトルが再開した。

「え……え～。気持ちが熱いリリーとチコっちの口による激しいバトルを経て、ようやくバトルが再開だ！」

「お互いに植物を扱う少女たちの仁義なき戦いはこのあとどうなるのか……注目するしか無いぞ！！」

バトル再開に合わせて、熱烈実況も再開した！

そしてあっけに取られていた観客席のテンションも一気に急上昇し始めた！！

『こういうバトルは、イケイケドンドンで相手を圧倒するのが良いに決まっているわ！！』

バトル再開後、チコっちはリリーちゃんのことをキッと睨みながら作戦を考え、

「“マジカルリーフ”！！」

と、カラフルなはっぱをリリーちゃん目掛けて発射した！！

「“マジカルリーフ”は“はっぱカッター”を必中型にした技！今度こそ避けることなんて出来ないはずよ！！」

チコっちはリリーちゃんを警告するようにそう叫んだ！！

その言葉通りに“マジカルリーフ”は容赦なくリリーちゃんに襲い掛かる！！

「避けられないなら壊すだけ！！“シェイクカット”！！」

それに対してリリーちゃんはもう一度“シェイクカット”で“マジカルリーフ”を破壊にかかる！

それを見たチコっちはすかさず、

「これがチャンスだわ!!!!もう一回“たいあたり”!!」

と、意識が“マジカルリーフ”に集中しているリリーちゃんに対して、思い切り“たいあたり”で突っ込んだ!!

「きゃっ!!」

リリーちゃんはあわててチコっちに反撃をとろうとするも、間に合わずに“マジカルリーフ”と“たいあたり”の両方のダメージを受けてしまった!!

リリーちゃんは衝撃で思わず倒れてしまう。

「リリー?さっき、あなたはあたしに向かって植物を味方につけて……とか言っていたよね?あなたはそういったバトルスタイルなんだろうけど、あたしはそれとは違ったスタイルなのよ」

「一体どういうこと!?」

チコっちは質問を聞いたリリーちゃんに、自信に満ちた表情でこう語りはじめた。

「そうね……。強いて言うならあたしは“植物を大切に守りぬく”バトルスタイル……ってところかしら」

その言葉にリリーちゃんはゴクリと息を飲む。

「“植物を守りぬく”か……。だからさっきから体を張った攻撃を多用しているんだな……」

スバルさんは興味深そうに、チコっちのことを見る。

「きっとあの“チューリップ事件”がきっかけになって、生み出されたバトルスタイルなんだわ……」

ピカっちがどこか悲しげな表情になる。

いつも元気な姿を見せるチコっちと彼女だけが知る、悲しき事件を思い出しながら……。

『チコっちは一見するとわがままな性格が目立ちがちだが、誰かを守りたい……、特に弱い者に対しての思いやりと言うのは人一倍あるように感じるな。このバトルで彼女がどこまで自分の想いを見せられるか、注目だな』

ゼルスコーチはチコっちとリリーちゃんのやり取りを見て、そのように感じていた。

元気いっぱいの少女たちが繰り広げる熱いバトル！！

このあとどんなことが待っているのだろうか！？

第７８話：「元気な女の子たちの戦い！～練習バトルでもやっぱりチコっち劇場

カゲっち：『やっぱり……！こうなるかと思った……』

チコっち：「リリーもあたしと同じ植物を扱う女の子だったのね。驚いちゃったわ」

ピカっち：「頑張ってチコっちちゃん！いつもみたく元気の良さ見せてね」

チコっち「当たり前じゃない！次回も楽しみにしてね！」

第７９話：「植物たちの気持ちを伝えるために～練習バトルでも“チコっち劇場”～」

チコっち：「まさかリリーが植物使いだったなんて、予想外だったわ！！」

ピカっち：「でも頑張ればきっと勝てるはずよ！！頑張って！！」

チコっち：「もちろんよ！それじゃあ早速第７９話プレイボールよ！！」

第７９話：「植物たちの気持ちを伝えるために～練習バトルでも“チコっち劇場”～」

やっぱりチコっちがバトルをするとなると、色々と不安なことが起こっちゃうんだな～……。

このあと無事に第３回戦が終われば良いけど……。

「さてと……。リリーに言いたいこと全て話したことだし、バトルの続き、いくわよ！！」

「そんなの……のぞむところよ！！」

ドタバタと慌ただしく始まったこの第３回戦。

少しの中断を挟んで、今再びその火ぶたが切って落とされた！！

「まずは植物の気持ちを乗せたこの技！“マジカルリーフ”！！」

先手を撃ったのは真剣な表情を見せるチコっち。

七色に変化する“はっぱカッター”をリリーちゃん目掛けて発射したのだ！！

「どうせ、さっきみたく“マジカルリーフ”であたしの注意力を逸らそうって言うんでしょ！！何度も同じ作戦が通じるなんて思わないでよね！！」

“マジカルリーフ”が接近してくる中で、リリーちゃんは強気な態度を見せはじめた！

「“マジカルリーフ”って攻撃される側が破壊しない限り、必ずダメージを受ける技だったよな？リリーは破壊しないで、どうやってあのダメージを避けようって言うんだ？」

「そうだねラージくん。オイラもちょっと予想出来ないよ……」

ラージキャプテンとダイル先輩は、リリーちゃんの作戦がどういうものなのか、わからずに首を傾げている。

「一体何をしようと言うんだリリー？」

がばねさんもリリーちゃんの考えが分からないといった表情だ。

「こうするのよ！“かべんのまもり（フラワーガード）”！！」

リリーちゃんは一瞬強気の笑顔を浮かべたと思うと、自分の周りに大きな花びらを咲かせた!!

ドーン!ドーン!

“マジカルリーフ”はその大きな花びらに当たったため、リリーちゃん本人に直接ダメージが届くことは無かった。

「そっか～……防御という手段があったね」

「さっきの強烈な一撃といい、今の防御技といい、やるなぁ～リリーさん」

僕とヒイロ先輩のダブルヒトカゲは、リリーちゃんの戦法に納得の表情を見せていた。

「……にしてもよ。さっきから見てたらチコっちちゃん、“はっぱカッター”や“マジカルリーフ”を多用し過ぎていないか？」

「確かに……。攻撃のパターンが単調じゃないか心配だわ」

キノガッサさんの言葉に不安そうな気持ちをのぞかせるピカっち。

『チコリータが自分で覚える技って、ラッシー先輩やラプ先輩みたく、相手を一撃で仕留める技を多くは覚えないはず。どっちかと言うと色んな補助技を効果的に組み合わせて戦う方法だったはずだ』

僕はバトルフィールドを静かに見つめながら、このように考える。

『多分チコっちがそのことに気が付いているかどうかで明暗が分かれるかも知れない。リリーちゃんも同じ植物使いだからって、変な意地を見せてなきゃ良いんだけど……』

僕は心配な気持ちを抱きつつ、チコっちのことを応援し始めた。

……だが、彼女はやっぱり“きまぐれ”な性格だった。

「防御技まで披露するなんて、なかなかやるじゃないリリー！」

「アリガトね～♪あたし、これでもバトルは好きな方だからね。いろんな技が使えるように頑張ってきたんだ！」

なんとチコっちは、先ほどの対立関係から一転、今度はリリーちゃんのことを褒めはじめた。

……さらに、

「でもチコっちもすごいよ。最初にあたしが“フラワーウイップ”を使うために、ゆりの花を引っこ抜いたとき……すごく怒ってて……。あそこまで植物のこと大切にする人って初めてみたよ」

と、今度はリリーちゃんが優しい笑顔でチコっちを褒めはじめた。

それに対してチコっちは、

「リリー……。そうね、小さいときから植物たちとあたしたちは“生きている”ってことに何も変わりはないって聞かされていたから、植物に乱暴する人が嫌いだったの……」

と、どこか悲しそうな……それでも優しい表情を浮かべてこのように答えた。

「でもリリーは違う。ちゃんと植物たちの気持ちをわかっている。……そんな気がするの……。だって一つ一つの技から、植物たちの気持ちや想いがちゃんと伝わってきたから」

と、ニコっと笑いながらリリーちゃんのことを再び褒めた。

そして、このあと彼女は誰も予想しなった行動をとったのだ。

「あたし……このバトル……やめるわ……」

『！！！！？』

その言葉に、バトル相手のリリーちゃんはもちろんのこと、バトル部のメンバー……、そしていつも彼女の人一倍元気な姿を見てきたあさポケナイン全員が、驚きの表情を浮かべていた。

そればかりかザワザワとにわかにバトル部部室全体が、騒がしい様子になってきた。

「どうしてやめちゃうの？せっかくあなたの良いところを見せてほしいって思っていたのに」

「ごめんなさいリリー。このままあたしがバトルを続けたところ

であなたに勝てるって思えないの……」

驚きを隠せないリリーちゃんの質問に対して、チコっちはそのように答えた。

「でも……でも、バトルは途中で諦めちゃダメだよ！一生懸命頑張れば何が起こるか分からないんだよ！？」

「リリー、それだけが理由じゃないの……。あたしの繰り出す技の一つ一つは、あなたの技と違ってまだまだ植物の気持ちを伝えられるほど、強くないって……未熟すぎるって思ったの」

リリーちゃんの必死の説得に対して、チコっちはかたくなに答える。

「それに、あたしは植物たちを守れなかった……。どうしたらその植物たちが許してくれるか……答えを探しても全然わからないの」

「チコっち……」

チコっちの言葉にリリーちゃんも悲しい気持ちになってしまった。

『チコっち……。そうだよね……。僕がピカっちや君やブースを守れなかった“あの事件”から悩んでいるように、君も“チューリップ事件”からずっと悩んでいたんだよね……。ずっとずっと元気な姿を見せていたけど、心の中ではずっとずっと悔しい気持ちでいっぱいだったんだよね……』

僕は彼女の話を聞いているうちに、だんだんと悲しい気持ちになって心が痛んでいくのを感じた。

でもチコっちはその何倍もの痛みを感じていたに違いない。

僕や周りの人たちは苦しむ幼なじみに対して、どのような言葉で励ましたら良いのか迷っていた。

だが……！

「だったら……強くならなきゃ！……強くならなきゃダメだよチコっち！」

と、突然強い口調でしょんぼりとしているチコっちに語りかけた

彼女の姿に、皆が驚きの表情を見せた。

「確かにあなたは大切な植物たちのこと……守れなくて、悔しくて悲しい思いをしたかも知れない。でもきっと……その植物たちはそれ以上に、あなたがそうやって悲しい気持ちでいるのを、もっともっと悔やんでいるかも知れないんだよ？」

「えっ……？」

リリーちゃんの言葉に思わずびっくりしたチコっち。

そんな彼女にリリーちゃんが話を続ける。

「だってそうじゃない。あなたは大切な植物を守れなくて悔しかったのかも知れないけど、その植物たちは大切なあなたの笑顔を守れなくて悔しかったはずなんだよ？」

「リリー……」

「リリーちゃん……」

リリーちゃんの言うとおりかも知れない。

植物たちは僕たちのように直接話すことは出来ないけれど、僕たちと同じ……かけがえのない命を持った正真正銘の生き物。

だから僕たちがきれいな植物たちから癒しのパワーをもらっているのと同じように、彼ら植物もまた……僕たちの元気な姿から癒しのパワーをもらっているのかも知れない……。

「だからその植物たちは今でもきっと、あなたに語りかけているはずだよ……？……“僕たちと同じような気持ちを味わうような植物を出さないで欲しい”って……。きっとそれがその子たちの願いでメッセージのはずだよ！！」

「ううぅぅ……」

リリーちゃんの言葉に、今にも涙の滝が溢れ出そうなチコっち。

さらに……、

『似ている……。ピース先輩のメッセージに……』

どこか共感するところがあったのだろう……。ラージキャプテン

もまた、1年前に遭遇したピース先輩の悲劇で、彼が最後に伝えたかったメッセージを思い出していた。

『一度起こしたミスはもうそれ以前の状態に戻せないけれど、二度と同じミスを起こさないようにすることは出来る……。僕がラッシー先輩に言われた、“過去を乗り越えろ”と言うのと同じ意味かも知れない……』

僕もリリーちゃんの言葉に、前に歩み出すことの大切さを改めて感じた。

「だから植物の気持ちをちゃんと伝えられるようにさ……強くなろうよ。もちろんあたしも協力するし、がばねも協力してあげるよ。……あなたはこのバトル部で出会った大切な仲間だから……」

その言葉にチコっちはこみあげる感情を、あふれる涙として表すようにずっと泣いていた。

そんな彼女に対して、

「がんばれよ！」
「応援しているわよ！」
「君なら出来るはずだぜ！！」

と、温かい声援を送った。

君はひとりじゃないと……伝えるために……。

「グスン……。みんな……アリガトね。たくさん特訓して、今よりきっと強くなって見せるからね……。それからリリー？」
「どうしたの？」

まだ涙ぐんではいたものの、少し明るさを取り戻したチコっちは、バトル相手のリリーちゃんを呼ぶ。

……そして、

「大切なこと……思い出させてくれてアリガトね。今は気持ち的にバトルはムリかも知れないけど……、この合宿のどこかでもう一度勝負させてくれない？今度は迷いなんて見せないように、しっかりと臨むつもりだから……」

と、チコっちはリリーちゃんにお願いをした。

「もちろん良いよ！でもこっちだって今度は手加減はしないからね！！」

リリーちゃんはニッコリとした笑顔でこのように答えたのだった！

……え？それで結局バトルはどうなったのかって？

……それは、

「この第３回戦の結果は、バトル部顧問の競技の結果ノーゲーム

……つまり無効試合とされたぞ！！」

「だがそれ以上に、この試合がチコっちにとって、今以上に成長をするためのスタートラインになったのは間違いないはずだ！！これからも彼女の様子に注目だ！！」

という実況役のリオレウスコンビの言葉通り、無効試合となったんだ。

それでもバトルフィールドから下りてきたチコっちに対して、誰も非難するようなことはせず、優しく彼女のことを迎えたんだ。

『僕もチコっちに負けないように、しっかりとバトルのトラウマを乗り越えなきゃ……！！』

と、何かスッキリした表情をしたチコっちを見て、僕はそのようなことをじっと考えていた。

第７９話：「植物たちの気持ちを伝えるために～練習バトルでも“チコっち劇場”～」

カゲっち：「まさかまさかの結末だよ。びっくりしちゃった」

作者：「まぁ、チコっちも君と同じように悩みを抱えてきたってことなんだ。自分の不注意によるミスは、二度とそれ以前の状態に戻せないけど、そのあと同じミスを起こさないようにどうすべきかってこと、ようやくわかったんじゃないのかな？」

チコっち：「バトル部での合宿にしっかりと目標が出来たわ！」

作者：「それじゃあ、彼女が頑張れるように……がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！チコっち！！」

ナイン：『がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！がんばれ！チコっち』

作者：「せ～の！」

ナイン：『チコっち！！』

《応援歌》
解き放て
きれいな花咲かすため
君のその夢を
この空へ

第８０話：「ナインの誓い～パワーファイターＶＳスピードファイター！！？～」

作者：「よ……ようやく更新できた」

カゲっち：「予定の日から5日も遅れちゃったね♪」

チコっち：「だってダメダメ作者だもん♪」

作者：「くっ……言い返したいが、弱みを握られた」↑小声

ヒート：「今回からはジュジュの出番だな！しっかり決めろジュジュ！！」

ナイン：『しっかり決めろ！しっかり決めろ！しっかり決めろ！ジュジュ！！』

ヒート：「せーの！」

ナイン：『ジュジュ！！』

《応援歌》
風のように駆け抜けて
目に見えぬ技決めろ
今世界を切り開け
輝く情熱で

ラージ：「それじゃあ注目の第８０話プレイボール！！」

チコっちが起こした行動にはすごく驚いちゃったけど、それほど植物に対しての想いが強いってことなんだよね。

僕も自分に対して温かく接してくれる人たちの想いを大切にしなきゃいけないな。

「悪いなみんな……集まらせてしまって。バトルに集中しなきゃいけないのに……」

「気にすんなラージ。キャプテンが話をしたいって言うなら、俺たちはいつでも集まるからよ」

第３回戦が終わった後、突然ラージキャプテンは、僕たちあさポケナインを一度集合させたと思うと、そのまま円陣を組むように指示をした。

「でも話って何だ？」

ヒート先輩が僕たちを集めた理由をラージキャプテンに聞く。

するとラージキャプテンは、

「話って言うか、ここまでの3試合を観ていて、感じたことをみんなに伝えたかったんだ」

『感じたこと？』

ラージキャプテンの言葉にナインが首を傾げる。

さらに話は続く。

「あぁ。ここまでの3試合、バトルが専門と言う相手に対して戦術や気持ちで、健闘しているって感じるんだ」

確かに……。第1試合のラッシー先輩はモモ先輩の圧倒的な攻撃に、最後の最後まで自分の持つ信念や意地を見せていたし、第2回戦のラプ先輩は戦術で苦しい状況を打破したし……、僕たちが予想していた状況よりはかなり良い雰囲気かもしれない。

「それで俺はこのあとの第4回戦からも、自分の出しきれるフルパワーでバトルに臨んで欲しいって思うんだ。例え勝つことなんて絶対ムリって相手でも……」

ラージキャプテンの言葉に対して、ナインは真剣な気持ちでうなずく。

「そうすればあさひタウンに戻った後に、もっと言えば“カントリー・リーグ”が開幕した後に、どんな苦しい状況でもチーム一丸で打破出来るような気がするから」

それがおそらくラージキャプテンの本意なのかもしれない。

僕たちナインはこの白熱する練習バトルは、練習であって練習ではないような感じを抱き始めていた。

「俺が言いたいことはこれで終わりだ。みんな何か言いたいことはあるかい？」

ラージキャプテンがナインのみんなに聞く。

……すると、

「ちょっと良いでしょうか？」

と、黄色くて小さい手を挙げてピカっちが答えた。

「ピカっちか？いいぞ、何かみんなに伝えたいことがあるんだな？」
「は、はい！！」

ピカっちは緊張した様子を見せたものの、ラージキャプテンの問いかけにはっきりと応えた。

「あたしが感じたことは、もっと大きな声を出して仲間を応援しなきゃいけないってことですね」
「応援か……。そうだな。闘っているのはバトルをしているヤツだけじゃないよな」

ピカっちの言葉にラージキャプテンが反応する。さらに、

「バトルをしているメンバーが、どんなに苦しくても最後まで……全力で戦うのと同じように、バトルを観ているあたしたちも最後まで仲間を信じて応援しなきゃ、チームプレイって言えないような気がするんです」
「ピカっち……」

僕は正直驚いていた。

ピカっちは“おとなしい”性格だったためか、小さいときからなかなか自分の意見を口にするということが、あまりなかった。

だけど、この野球部に入部してから彼女は変わった。

内に秘めた自分の感情を、素直に相手に伝えることが多くなったような気がするのだ。

僕に対する告白のときも、“１０まんノック”のときにナインがつまづいていたときも……。

その一つ一つの言葉が、相手を後押ししている気がした。

「カゲっちくんもそう思うよね？」
「えっ！？もももももちろんだよ！！」

ピカっちの突然の問いかけに、思わず動揺してしまった僕。その姿にみんなが笑いはじめる。

『いきなりビックリしたよ～。……でもピカっちの笑顔って…
…かわいいよなぁ……。ギュ～ッと抱きしめたくなっちゃうよ』

僕はちょっと赤くなりながら、隣にいたピカっちの姿を見ていた。

「ま、ここから練習バトルも中盤戦だ！しっかり戦って、しっかり応援して、少しでも俺たちらしさを見せてやろうぜ！！」

『オーーーー！』

僕たちの話し合いは気合いの入った掛け声で終了した。

「さて、ますます盛り上がってきました！バトル部ＶＳあさポケナインの練習バトル！！」

「次からは中盤戦だ！！もっと熱い熱いバトルになることを期待したいものだ！！」

リオレウスコンビの実況に、観客席の歓声が響き渡る。

ここまでの3試合だけでも、お互いに一歩も譲らないバトルを見ることが出来たのと同時に、このあとの対戦カードも目が離せない状況だと、観客席もバトルをする僕たちも感じていた。

「さて、その注目の第4回戦!!バトルを行うのは、ジュジュとキノガッサだぁぁぁ!!」

『ワァァァァァ!!』

レウト先輩の言葉に沸き立つ観客席!!

「そっか!!次はオレの出番だったのか!!この観客席に集まったかわいコちゃんたちに、ガッチリと良いところ見せてやるぜ!!」

「頑張ってねキノガッサ!!」

名前を呼ばれたキノガッサさんは、気合い充分と言わんばかりに、勢いよくそのバトルフィールドへと向かった!!

一方のジュジュ先輩はと言うと……、

「……」

なぜか暗い顔をして、ゆっくりとキノガッサさんの待つバトルフィールドへと向かっていた。

どうやら昨日の１５球勝負で、ラッシュ先輩に敗れてしまったことをずっと引きずっているようだ。

その姿に思わずラージキャプテンがため息をついてしまう。そして、

『全く……ジュジュはプライドが高すぎるところがあるからなぁ……。昨日の負け方がよっぽど堪えているようだな……しょうがない。ここは俺が一言励ましにいくかぁ』

と、頭をかきながら難しい表情を浮かべながら、ラージキャプテンがジュジュ先輩の元へ近づく。

「……？」

それに対してジュジュ先輩は、ラージキャプテンが何をしたいのかわからない様子で後ろを振り向いた。

「ジュジュ。おまえもしかして、まだ昨日の負けを引きずっているのか？」

「な……!?いきなり何を言うかと思ったら……そ、そんなことないぞ!!」

ラージキャプテンの言葉に、思わず怒り口調のジュジュ先輩。

そんな彼に対してラージキャプテンは、

「あ、そうなのか?悪いなぁ～、変なこと聞いて。あんまりにも暗い顔をしていたから、もしかしてって思ったんだけど……俺の気のせいだったんだな!」

と、笑顔で笑い飛ばしながらこのように話す。

するとそんな態度を見せられたジュジュ先輩は、いかにも不機嫌そうな様子で、

「心配してくれたのは嬉しいけど。あんなことでへこたれるほど、僕は弱くは無いからね。しっかりと気持ちを切り替えて、この練習バトルに臨むつもりさ!」

と、かなり強気な態度を見せながら、そのままスタスタとキノガッサさんの待つバトルフィールドへと向かったのだった。

『やれやれ……。全く素直なヤツじゃないなぁ。いくら言葉で強気な態度を見せていても、ちょっとしたことですぐに本心は現れるのに……』

ラッシー先輩はいつものことながら、ジュジュ先輩の性格にお手上げ的な気持ちになっていた。

さて、先にバトルフィールドにたどり着いたキノガッサさんはと言うと……、

「サンキュー、バトル部に集まった各地のかわいコちゃんたち！黄色い歓声をこの俺に浴びせてくれるなんて嬉しいぜ！そんな君たちのためにも大活躍してあげるからしっかり見ていてくれよ！！」

と、自分の周りにいる大歓声に手を振って応えていた。

そんな彼に対して、遅れて登場したジュジュ先輩は呆れた表情を浮かべていた。

『な……なんなんだ？キノガッサさんのナンパぐせのことは、ラグさんやラージからも聞いていたけど、ここまですごいのか？』

ジュジュ先輩は、キノガッサさんのこの行動に目が点となってしまった。

その後、キノガッサさんとジュジュ先輩が対峙し始めたのは、それから5分後のことだった。

「それじゃ、両者とも準備は良いな？」

審判役のゼルスコーチが2匹に聞く。

その問いかけに真剣な表情で2匹はユックリと頷いた。

「それでは練習バトル第4回戦……開始！！！」

ゼルスコーチがコールし、今第4回戦が始まった！！

「まずは僕から攻撃させてもらいますよ!!“つばめがえし”!!」

まず先にスピードがウリのジュジュ先輩が、キノガッサさんに向かってスピードを利用した“つばめがえし”をしかける!!

シュタタタ!!

目に見えない速さでキノガッサさんに接近するジュジュ先輩!!

それに対してキノガッサさんはと言うと、

「おまえがスピードで突撃なら俺はパワーしか無いぜ!」

そう叫ぶとキノガッサさんはグッと拳に力を込める!!

……さらに、

『アイツがこっちへ突っ込むその一瞬を使って、この技をぶち込んでやるぜ！！』

と、意識を集中させる！！

「キノガッサの……あの技は一体？」
「相当な集中力を見せてようだが？」

リリーちゃんとがばねさんが、思わず首を傾げる。

「多分だけど……“きあいパンチ”かな？あのグッと拳に力を込めているところを見ると……」

二人の小さな疑問に僕は自分の推測を伝える。

「“きあいパンチ”か……。でも、あの技って途中で他のことに気を取られると、失敗する技じゃなかったか？」
「えっそうなの？それじゃあまり使い勝手が良いとは言えないね？」

スバルさんの言葉に驚きの表情を見せたプリムラさん。

「でもあのキノガッサには、そんな心配は無さそうに見えるぜ？……無心というか、ただまっすぐにバトル相手にぶつかっていこうという意志だけが、俺には感じ取れるぜ！！」

一方スバルさんたちの会話を聞いていた御羅不猟さんは、キノガッサさんのその熱い表情から、彼の意志を何となく感じていた。

さて、そんな観客席のやり取りのなかバトルフィールドでは……、

「たぁぁぁぁぁぁ！！」

今まさにスピードファイターのジュジュ先輩が、パワーファイタ

ーのキノガッサさんに激突しようとしていた！！！

「どんなバトルも先手必勝！“つばめ……がえし”！！」

ジュジュ先輩がしっかりと狙いを定め、キノガッサさんに技をぶつけようとした！！

……が、しかし！！

「そんなもん効くかよ！“きあいパンチ”！！」

「なっ！！？」

キノガッサさんは今まで集中してきた意識を全て解き放つようにし、すさまじい勢いでパンチをジュジュ先輩に放った！！！

「うわぁぁぁぁ！！」

無論、防御をとるタイミングが取れなかったジュジュ先輩は、キノガッサさんの圧倒的なパワーに耐え切れず、吹き飛ばされてしま

った!!

「おーっと!この第4回戦はいきなりキノガッサの破壊力が炸裂したぞ!!」

「一方のジュジュ!立ち上がりの大ダメージから上手く巻き返すことが出来るのか!!?」

このいきなり目が覚める大技に、実況役のリオレウスコンビも思わず驚きのコメントを残す!!

『な……なんてパワーなんだ!?いくらキノガッサの種族自体がパワーファイターとはいえ、こんな威力は見たこと無いぞ!』

キノガッサさんの大技をまともに受けたジュジュ先輩は、痛みを堪えながらゆっくりと立ち上がった。そして、

『でも、だからって僕も弱くはないんだ!ここから流れを変えてみせる!!』

と、もう一度表情を引き締めたのだった。

「ひゃ～。さすがはラグさんの仲間ですね。一撃で相手を圧倒するとは……。迫力が違すぎます！」

「ハハハハ。そんなこと無いよラージくん。キノガッサだって君たちと同じ普通のポケモンなんだから」

目を輝かせるラージキャプテンに対して、ラグさんは謙虚な姿勢を見せる。

「ただ、僕……といっても本物の方の僕やキノガッサは、冒険をしていて悔しい思いを経験しているからね。もっと“強くなりたい！！”って、ただそれだけを目標にこのバトル部で特訓をしてきたから、そのおかげなのかもしれないね」

「ラグさん……」

ラグさんの明るい振る舞いに、ラージキャプテンは思わず考えてしまった。

『ラグさんは本当に明るいよなぁ……。このバトル部に、あさポケナインが来たときからずっと……。本当は俺たちと同じように、必死な気持ちのはず……。それなのにここまで優しく接してくれる

なんて……、本当にすごいなぁ』

ラグさんの様子に、ラージキャプテンは人との接し方を学べるような気がしていた。

『俺もラグさんみたく、どんな人でも温かく接するように心掛けよう……』

ラージキャプテンは、改めてラグさんとの出逢いに感謝の気持ちを抱いていた。

「休んでいるヒマなんて無いぜジュジュ！！続けて“ウッドハンマー”だ！！」

大技をいきなりクリーンヒットさせたキノガッサさんは、さらに強力な技でジュジュ先輩に攻めていく！！

「そ、それならこっちは“たたきつける”！！」

一方のジュジュ先輩も打撃技でキノガッサさんを狙い撃とうとし

始めた！！

ガツン！！ガツン！！

２匹のポケモンが繰り出した打撃技がぶつかる鈍い音が辺りに響き渡る！！

さらに……！！

「くっく……！！」

「くっ……！！」

２匹が体全体に力を込めて、相手から受ける衝撃を押さえ込んでいた！！

『くっ！！一瞬でも力を抜いたら、……あっという間に吹き飛ばされそうなパワーだ！どんな特訓をしたらここまで強くなれるんだ！？』　『俺が予想していた以上のパワーだなこりゃ……。しっぽという一点に集中指せるなんて、並のヤツが出来ることじゃねぇぞ！！』

目一杯の力でお互いの技を封じ込めようと、そして跳ね返そうとするその緊迫した場面に、思わず観客席も手に汗を握っていた！！

と、ここで！！

「跳ね返しちまえジュジュ！！さっきのお返しきっちり決めろよ～！！」
「負けないでジュジュ先輩！！」
「ジュジュ先輩！！」

ピカっちの提案を受けたあさポケナインのメンバーの声援がジュジュ先輩へと送られた！！

「キノガッサも頑張って！！」
「バトル部での特訓の成果を見せつけてやれ！！」
「勝ったらかわいコちゃんたちも喜ぶぜ～！！」

と、キノガッサさんに対しても声援が送られた！！

ワァー！！ワァー！！ワァー！！

「す……すごいことになってきた！！この２匹の激突ぶりに観客席から声援が飛び交って来たぞ！！」

「この声援をパワーに変えて勝利するのは……キノガッサか！！それともジュジュか！！！ますます目が離せないぞ！！」

リオレウスコンビの実況にも熱が入る！！

さぁ、バトルはこのあとどうなってしまうのか！？

第８０話：「ナインの誓い～パワーファイターＶＳスピードファイター！！？～」

ジュジュ：「すごい相手と当たってしまった。でもまだまだ実力はこんなものじゃないはずだ」

チコっち：「頑張って～ジュジュ先輩！！」

ラージ：「このあとの対戦も楽しみになってきたぞ！！」

第８１話：「登場！！キノガッサさんのパートナー！！～パワーファイターＶＳ

ジュジュ：「キノガッサさん……ナンパ癖は驚いたけど、バトルの
実力もすごいな……」

ラージ：「そりゃあラグさんの仲間だもん、バトルの続きの今回も
期待してます！！」

カゲっち：「気になる第８１話プレイボール！！」

第８１話：「登場！！キノガッサさんのパートナー！！～パワーファイターＶＳ

スピードとパワーが大激突の第４回戦！！
一体ここからどんなシナリオが待っているのか楽しみだ！！

『くっ！！このままパワーで押そうとするのは、やっぱり厳しいものがあるか！相手が力自慢のキノガッサさんだからなおさらリスクを感じる！！』

お互いの力技がぶつかり合って数分、ジュジュ先輩は作戦を変更しようと考え始めていた。

自分はあくまでスピードが自慢のポケモン。だから力で相手をねじふせると言うのは、少々ムリを感じたのだ。

一方のキノガッサさんはと言うと、

『ジュジュのヤツのパワーには驚いちまったが、こっから一気にたたみかけてやるぜ！！』

と、余裕を感じさせるような笑みを浮かべはじめた。

「ジュジュ……。おまえの持ち味はスピードだったよな？颯爽と風のように駆け抜けるようなスピードが。……でも俺にもスピードを駆使した技があるんだぜ？」

「何だって！？」

キノガッサさんの言葉に動揺を見せるジュジュ先輩。

「面白い……。それならそのスピードを見せてもらいますよ！」

ジュジュ先輩も笑みを浮かべた。どうやらキノガッサさんのこの言葉で、闘志に火がついたようだ。

「いくぜ！！“マッハパンチ”！！」

シュタタタタタ！！！

目に見えないような速さで無数のパンチがジュジュ先輩を襲い掛

かる！！

……だが、

「“こうそくいどう”！！」

ジュジュ先輩は、自慢の俊足でフィールドを駆け抜ける！！

「そしてそのまま“かげぶんしん”だぁ！！」

ジュジュ先輩が叫ぶ！！彼は無数の残像を作り出したのだ！！

シュパパパパパ！！

「な……なんて早業なんだ！このキノガッサの“マッハパンチ”は！！まさに風を切り裂くような速さだ……！！」

「たが、ほぼ必中技といって良いこの技を、ジュジュも得意のスピードであっという間に回避しているぞ！！これはさすがのキノガッサもヒットさせるのは難しいか！？」

実況役のリオレウスコンビがこの緊迫したバトルを伝える！！

『チッ！！ジュジュのヤツもなかなかやるじゃねぇか！！』
『いいぞ！このままスピードでかきまわして……絶好のチャンスを待つだけだ！！』

キノガッサさんとジュジュ先輩の、自分の最大の長所を活かした一歩も譲らぬ攻防に観客席は目を奪われていた。

「頑張って～！！ジュジュ先輩！！」
「キノガッサもね！！」

時間が経つにつれて二人を後押しする声援も響き渡った！！

「“リーフブレードォォォ！！”」
「“かわらわり”！！」

カーン！カーン！

ジュジュ先輩とキノガッサさんの技が激しくぶつかり合う！！

「へ……へへ！！いい感じに向かってくるじゃねぇか！好きだぜ俺は……こうやってお互いに激しくガンガンとぶつかり合うバトルが！！」

キノガッサさんは額に汗をにじませながら、何か楽しそうにジュジュ先輩に話しかける。

「そうなんですか？僕はどんなバトルも同じようにしか感じませんけど……ね！！」

それに対して強引に“リーフブレード”を振り切り、キノガッサさんにヒットさせたジュジュ先輩も、同じように汗をにじませていた。

でもその表情はとてもではないが、バトルを楽しんでいるようには誰も感じなかった。

「ずいぶんとクールな態度で答えるじゃねぇか。この世界中のカワイコちゃんに、俺のかっこよさをアピールしてやったのに！！」

『な……何を言ってるんだ、こ……この人は？』

キノガッサさんの言葉に思わず唖然としたジュジュ先輩。

「クス、キノガッサらしいや。この緊迫したバトルを本当に楽しいって感じてるんだもん」

「きっとジュジュみたく勝ちや負けにこだわってないから、リラックスした気持ちで相手とバトル出来るんでしょうね」

ラグさんとラージキャプテンに思わず笑みがこぼれる。

「さ～てとそれじゃあ、バトルの続きやろうぜ！！」

「もちろん臨むところですよ！！」

体勢を立て直したキノガッサさんの言葉で、バトルが再開された。

「もう一度“かげぶんしん”！！」

ジュジュ先輩が無数の残像を作り出す！！

「そうきやがったか……。面倒くせぇ！！こうなったら片っ端から“マッハパンチ”をお見舞いしてやるぜ！！」

キノガッサさんはそう宣言すると、残像にアタックしていく！！

しかし、なかなかジュジュ先輩の本体を探し当てることは出来ず、次第に動きが鈍くなっていく！

「ハァ……ハァ……ハァ……なかなか当たりがみつからねぇなぁ！！一体どれが本体なんだ！？」

キノガッサさんが辺りをキョロキョロしながら叫ぶ！！

と……そこへ！！

「“つばめがえし”！！」

背後から絶好のチャンスと見たジュジュ先輩が襲いかかる！！

「な！？そ……そこだったのか！！」

後ろを振り返るも、もう回避出来るような状況ではなかった。

……だが！！

「“インパクト……ジャーーンプ”！！！」

キノガッサさんが叫んだ次の瞬間、彼は高くジャンプしてこのバトル一番のピンチを脱したのだった！！

するとこの素晴らしい技術に部室全体が大歓声で埋め尽くされ、大きな拍手も飛び交った！！

『“インパクトジャンプ”……と言うことは、いよいよキノガッサの本領発揮のようだね。楽しみにしているよ！』

ラグさんはキノガッサさんの使ったトリックを読み取っていたようだ。穏やかながらも何かワクワクした気持ちになっていた。

「あの必中技をほんの一瞬で避けるなんて……キノガッサさんスゴイや！！」

「これで一気に流れはキノガッサさんに傾いたわね」

「落ち着けよジュジュ……じゃねぇとバタバタとやられちまうぞ」

あさポケナインの3匹の先輩も、キノガッサさんの技に驚きを隠せないでいた。

「あ……ありえない！完璧な作戦だったはずなのに！！一体何をしたって言うんだ！？」

「俺が必死になって操れるようになった“ストライクハンマー”のおかげだ」

ジュジュ先輩が動揺しているのを見て、トリックを明かすキノガッサさん。

「“ストライクハンマー”？あのキノガッサさんが持っているハンマーのことですか？」

ラージキャプテンは首を傾げながら、ラグさんに質問する。

「うん、その通りだよラージくん。あれでキノガッサの持つパワーをバトルのときに、最大限に活かせるようになるんだ」

ラグさんがこのように答えた。

「俺はコイツで自分の世界で暴れている“ダーク”化したヤツらを救えるように特訓していたんだ！！一緒になって戦っている“絆”のメンバーの力になれるようにな！！」

キノガッサさんが“ストライクハンマー”を持ち、そのまま走り出した！！

「くっ！！でも僕だって黙って引き下がるわけにはいかない！！“リーフブレード”！！」

ジュジュ先輩もキノガッサさんに突撃していく！！

『たぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！』

なぁ？強い……ってどういうことを言うのかな……？

「だ……だれ？」

バトルを観ていた僕は突然誰かの声が聞こえたような気がした。

思わず辺りをキョロキョロする僕。

相変わらず周りはザワザワとしていたが、様子が変だった。

歓声は聞こえるものの、すごく小さく聞こえるのだ。

まるで自分からは遠く離れた場所に音源があるように。

……やっぱり一つ一つの技が相手よりも強いってことなのかな？

「だれ？誰なの君は？一体誰なのさ！」

僕は声の主に聞く。

……それともバトルに何回も何回も勝てるってことなのかな？

「ねぇ聞いているの！？だから君は一体誰なのさ！？」

僕は苛立ちのせいか、だんだんと声が大きくなってきた。

だがどれだけ大きな声を出しても、声の主は自分の正体を答えてはくれなかった。

……ヘッヘッヘ！！お前は誰も守ることなんて出来ねぇんだよ！！！

「なっ！？今度は誰なの！？」

今度はすごく嫌らしい感じの声が聞こえてきた。

第一ヒトカゲのお前に……みんなを守るなんて一生ムリなんだよ！

「そ、そんなことはないぞ！！僕はバトルは嫌いだけど、みんな

を見捨てるなんてヒドイことは絶対にしない！！」

お前はこれから一人ぼっちなのさ。みんなに置いてかれてずっと泣き虫のままなんだよ。へへへ！笑っちまうぜ！

「で……でたらめばかり言うな！！いい加減にしないといくら僕だって黙っていられないぞ！！」

僕はいよいよ堪忍袋の尾が切れたように、技を放とうとした！

……が、その時！

カゲっちくん！！どうしたの！？どうしたの！？

「え……ピ、ピカっち！？ピカっちなの！？一体どこにいるの！？」

僕は声を思い切り出して、ピカっちに問いかける！！

「カゲっちくん!?カゲっちくんってば!?」
「はっ!ピカっち!?あの不思議な声は!?」

僕は呼吸を短く激しく行いながら、ピカっちに聞いてみた。

「何言ってるの?さっきからずっと変なことばかり……声なんて聞いてないわよ?」
「へ?」

僕は目をパチパチさせる。

確かにピカっちの言う通り、声は聞こえなかった。

それぱかりか歓声がすごく大きく聞こえて、思わず目をつぶってしまった。

「ごめん。僕、どうかしていたみたい。ビックリさせちゃって悪かったね」
「あたしは大丈夫よ。カゲっちくんも何ともなかったみたいで安心したわ」

ピカっちの言葉に赤くなる僕。ちょっとだけ恥ずかしい気持ちになってしまったのかな？

『だけど、さっきの声は一体何だったんだろう……？』

僕は遠くを見ながら、さっき起きたことを振り返ったが、あまり深く考えないようにした。

「たぁぁぁぁぁ！！“ストライクハンマー”！！」

白熱する攻防が続くバトルフィールド！！

そこでまず先手を撃ったのはキノガッサさんだった！！

エネルギーで作られたハンマーを思い切り振り下ろす！！

……すると！！

「“ギガンティックハンマー”！！」
「な！！？」
「うそ～！！？」
「まさか！？」
「ハンマーがしゃべった！！？」

あさポケサイドはにわかには信じ難いこの事実に驚いてしまうばかりだった！！

「ラグさん！？あれは一体どういうことなんですか！！？」
「お、お、お、落ち着いてラージくん！！」

ラージキャプテンが身を乗り出すように聞いてきたため、ラグさんは困惑した表情を見せずにはいられなかった。

「つまり、“ストライクハンマー”はキノガッサと一緒に戦う武器でもあり、パートナーでもあるんだ。キノガッサを全面的にサポートしてくれるからね」
「持ち物がパートナーだなんて、考えそうで考えないことですね

！！感激しました！！」

ラグさんの言葉に思わず感無量になってしまったラージキャプテンだった。

「うわぁぁぁ！！」

キノガッサさんが繰り出した“ギガンティックハンマー”により、突撃していたジュジュ先輩は吹き飛ばされてしまった！！

「この“ギガンティックハンマー”は俺のパワーをこの“ストライクハンマー”に込めてぶつける技だ！俺と“ストライクハンマー”のどちらも欠けてたんじゃ絶対に出来ない技だ！！」

キノガッサさんがキリッと引き締まった表情で、ビシっとかっこよく決めた！！

「これから見せてやる！！俺と“ストライクハンマー”との“絆”、共闘ってやつをな！！」

「くっ！！」

お互いに譲ることの無いこの第４回戦！

次回いよいよ決着を向かえる！！

第８１話：「登場！！キノガッサさんのパートナー！！～パワーファイターＶＳ

カゲっち：「武器がパートナーってすごくカッコイイなぁ……」↑
目がキラキラしている

ラージ：「一つ一つの技のインパクトも迫力満点だぜ！次回も待ち
きれないぜ！！」

第８２話：「信じられない結果～パワーファイターＶＳスピードファイター！！

ラージ：「こりゃあとんでもないことになってきたな！」

ラッシー：「すっげ～、しびれるバトルだぜ！！」

ピカっち：「このあとバトルはどうなるのかしら？第８２話プレイボールよ♪」

第８２話：「信じられない結果～パワーファイターＶＳスピードファイター！！」

すごくカッコイイなぁ……。武器と言う名のパートナーと戦うキノガッサさん……。
このあとどんなバトルを見られるのか、ワクワクしてきちゃった！

「ウラァァァァァ！！一気に決めてやるぜ！！」

キノガッサさんが“ストライクハンマー”をジュジュ先輩に振り下ろす！！

「そんな簡単に負けるものか！！“まもる”！！」

ジュジュ先輩も決死の覚悟で防御の体勢をとった！！

ガーン！！

「チッ！！上手くガードされちまったか！！」

キノガッサさんは一度トンと後ろに軽くジャンプして、体勢を整

えた。

「思ったよりも粘り強さがあるじゃねぇか、ジュジュ？」

「僕だって簡単に負けるわけにはいかないですからね」

やや余裕のキノガッサさんに対して、かなり追い込まれた状況のジュジュ先輩。だが、強気の態度は崩してないようだ。

さらに……、

「それに……僕は昨日からすごく不愉快なんだ……！！１５球勝負で負けてからずっとね！それにこの練習バトルが始まってから、みんな勝つために何の意味も無い“楽しいバトル”や“共闘”という言葉を連呼してる事にもね……！！」

「な……何だと！？」

ジュジュ先輩の言葉に驚きを見せたキノガッサさん。

いや、正確には怒りのようだ。

「ジュジュ、今の言葉は聞き捨てならないな。“楽しいバトル”や“共闘”がどうして意味が無いと思うんだ？」

キノガッサさんがじりっじりっとジュジュ先輩に近づきながら、こう聞いた。

するとジュジュ先輩は、

「バトルはお互いの勝者と敗者を決めるものなんだ。生ぬるい考えなんかで……勝ちを奪うなんて勝負事は甘くないんだ！！」

ジュジュ先輩が自分の考えをこのように答えた。

「そんな甘い考えを持っている相手に僕は絶対負けない！！負けるはずが無いんぁぁぁぁぁぁ！！」

ジュジュ先輩はキノガッサさんに向けて“たねマシンガン”を発射した！！

「うぉ！？あたたたたた！！」

いきなりの攻撃だったために、キノガッサさんはこの奇襲をまともに受けてしまった！！

それでも彼は体勢を崩すこと無く、睨みつけるようにしてジュジ

ュ先輩を見て叫んだ。

「ふざけるな！！バトルはただ白黒ハッキリさせれば良いってもんじゃねぇ！！」

キノガッサさんの感情が一気に爆発したようだ。
わなわなと震えているのがわかる。

「ジュジュ……確かに白が増えりゃ、それはそれで嬉しいけどな……お前の抱く勝利ってのは相手を“見下してる”だけにしか俺には感じねぇんだよ。お前に対して全力でぶつかって来る相手の……必死の努力を踏みにじるような感じにしかな」

「キノガッサ……」

キノガッサさんに何か心打たれたようなラグさん。

きっと彼が自分の世界からバトルの特訓のため、このバトル部のある世界にやって来てから、今まで感じてきた本音を語っているように感じていたのかもしれない。

「でもな、そんなのはハッキリ言って俺たちの世界で暴れ回っている“ダーク化”したヤツらの何にも変わりゃしねぇんだよ！！！

！わかるか！？今のお前は勝つために、己の目的を果たすために心を闇に染めてしまったヤツらと何にも変わりゃしねぇんだよ！！」

「おい、キノガッサ！！それはいくらなんでも言い過ぎだぞ！！」

「そうよ！！いくらジュジュが変なこと言って頭にきたとしても、いくらなんでも傷つくわ！！」

キノガッサさんの大噴火を止めにかかろうとしたラッシュ先輩とサクラ先輩だったが、彼は聞き耳を持たなかった。

「それにジュジュ……お前、一体仲間を何だと思ってるんだ？……お前のことを同じあさポケナインの一員として、観客席から精一杯声援を送ってくれている……共に闘う仲間との“絆”を……何だと思ってやがるんだ！？」

キノガッサさんが指を差してジュジュ先輩に答えを促す。

しかしジュジュ先輩は睨みつけるようにして、無言を貫いたままだった。

「お前はこの練習バトルで仲間が一生懸命に頑張ってついた黒よりも、自分の孤独なプライドを貫いた白の方が大事だっての言うのか！？」

キノガッサさんはジュジュ先輩に訴えかけるように、怒りを表現

していた。

……すると、

「黙れ！黙れ！！黙れ！！！“アイアンテール”！！！」
「ぐわっ！！」

ジュジュ先輩はキノガッサさんの訴えが気に食わなかったのか、自分の持つ強力な技でキノガッサさんを封じようとした！！

……そして、

「これ以上僕のことを説教しようと言うなら、僕も黙っては無いぞ！！」

キノガッサさんに忠告をするジュジュ先輩。

だが、キノガッサさんはそんなジュジュ先輩に対して反撃する様子は見せず、地面に倒されたときの体勢でジュジュ先輩を見た。

「……ってぇ。強力な技を駆使するなんてやるじゃねぇか。こんな技術をどうして仲間のために使わないで、自己満足に利用するヤツらがいるのか俺にはちっともわからねぇよ……」

キノガッサさんは寂しそうにつぶやいた。

「ジュジュ……お前らあさポケナインのバトルっぷり……俺たち“絆”と何にも変わりゃしねえじゃねぇか。……それに出逢ったときからずっとずっと楽しそうに……だけど夢に向かって全力でひたむきに合宿に臨んでいるじゃねぇかよ！！俺すげぇうらやましく感じるぞ、お前らが見せてくれている“絆”の強さを！？」

キノガッサさんは溢れる感情をそのままジュジュ先輩にぶつけていた。

『キノガッサ……。きっとあさポケナインに接しているうちに、本物の僕やアクア、サンダースさん、それにキノさんやハスボー、ポリゴンZとチーム“絆”を結成してからの時間を思い出していたんだね。時には楽しく笑い、時には強敵とぶつかり挫折して……それでもその強敵を倒すために特訓してきた時間のことを……』

ラグさんはキノガッサさんの気持ちを誰よりも理解していた。

共に同じ道を歩んできた仲間の気持ちを。

「お前はそんな仲間のことを誇りに思わないのか!?一緒になって笑ったり、一緒になって走ってくれているこの仲間たちを……誇りに思わないのかよ!!!?」

彼はそう叫ぶと、大きな雄叫びをあげながら、彼に突っ込んでいった!!!

「いちいちうるさい説教をするな!!“ソーラービーム”!!」

一方のジュジュ先輩も最大級の技で迎撃態勢をとった!!

「うぉおおおお!!!“ストライクハンマーァァァ”!!」
「“ギガンティックハンマー”!!!」
「うぉおおおお!!!!!」

ピカァァァ!!
ドォオオオン!!!!
『うわっ!!』
『きゃっ!!』

その数秒後、部室全体はまばゆい光と轟音に包まれた!!

まさに両者の技の一騎打ちとも言える状態だった！！

その後バトルフィールドは黒煙に包まれ、部室はシーンと不気味な静けさが続いた……。

「あっ！！見て見てみんな！！」

チコっちがだんだんと煙が晴れていくフィールドを指さした。

そこには……、

「ハァ……ハァ……ハァ……」
「ゼェ……ゼェ……ゼェ…」

呼吸を激しく行いながら、じっと立ち続けるジュジュ先輩と、キノガッサさんの姿が……どうやら両者ともにあの一騎打ちを耐えきったように、僕は感じた。

しかし……、

「うっ……くっ……！！」
「！！？」
「なっ！？」

全員がこの結果に驚きを隠せなかった。

バタッ！！っと、キノガッサさんが倒れたのだ。

ジュジュ先輩に訴えかけるようにして、“パートナー”である“ストライクハンマー”とともに、“共闘”を身を持って表現してきたキノガッサさんが陥落したのだった……。

「見たか……甘い考えで勝てるほど勝負は甘くない……」

ジュジュ先輩は最後にそう告げた。

「な……なんと言う幕切れだ……。第４回戦は勝利に徹するジュジュの勝利だ……」

「キノガッサの想いも、ジュジュの前でむなしく砕け散ってしまった……。これがバトルの恐さなのか……！？」

実況席のリオレウスコンビも信じられない様子だった。

「キノガッサ？大丈夫？」

ラグさんの声に気づいて、キノガッサさんが「う～ん……」とうなりながら起き上がりそれから、

「……ハハハ。ものの見事に返り討ちにされちまった……。悔しいぜ……」

と、笑顔の中に悔しさを浮かべていた。

そんな彼に対してラグさんは、ニッコリと笑った。

「でもすごくかっこ良かったよ。ジュジュくんに仲間との“絆”を伝えていたときの表情、言葉もみんなかっこ良かったよ！！」

ラグさんは自分の想いをぶつけて健闘した、キノガッサさんの姿に改めて仲間の良さを感じていた。

「そうか！？まぁ、なんたってここにはこんなにたくさんのかわいコちゃんがいるんだぜ！？俺の良さをうまくアピールしなきゃもったいないねぇからな！！」

ラグさんの言葉に元気を取り戻したキノガッサさん。

そのままウキウキ気分でバトルフィールドを後にした。

一方のジュジュ先輩はバトルフィールドを後にし、僕たちのところへ戻ったと思うと、そのまま部室の扉へと向かった。

「あら、ジュジュ？まだ練習バトルは続くのよ？観ないの？」

ラプ先輩に声をかけられると、彼はいかにも不機嫌そうに、

「悪いけど、今はそんな気分じゃない」

と一言残し、そのまま部室から出ていってしまったのだ。

その様子を見ていた僕たちナインは、暗い表情になってしまった。

とても仲間が勝利したとは思えない重苦しい雰囲気になりながら……。

第８２話：「信じられない結果～パワーファイターＶＳスピードファイター！！」

ラージ：「な……なんて結果だ……」

ラッシー：「ジュジュにキノガッサさんの叫びが届かなかった……ってことなのか！？」

ラプ：『ジュジュ……どこまでみんなの気持ちを締め付ければいいの？……いい加減気がついてよ』

カゲっち：「波乱が続く練習バトル……次はチックの登場だよ！！」

第８３話：「ラグさんとラージキャプテンの約束」の巻（前書き）

カゲっち：「前回は本当に驚いちゃったよ。一番ショックだったかもしれないなぁ……」

ラプ：「本当ね……。ジュジュがあんな冷たくて悪い態度を取るなんて……これじゃナインって言えないじゃない……」

ヒート：「そうだな。今回はどうなっちまうのか……第８３話……プレイボール……」

第８３話：「ラグさんとラージキャプテンの約束」の巻

キノガッサさんの仲間を想う心からのメッセージ……ジュジュ先輩に届かなかったのかな……。

すごく後味が悪い結果になっちゃったけど、本当にこれで良いんだろうか……？

「ごめんなさい、ラグさん……キノガッサさん……気分が悪くなるようなことをさせてしまって……」

バトルフィールドから戻ってきたラグさんとキノガッサさんに対して、ラージキャプテンは暗い表情で声をかけた。

「君が謝ることなんてないよ。君やあさポケナインのみんなが、悪いことをしたわけじゃないんだから」

「でもジュジュの一人相撲のような考えをここまで改善できなかったのは、俺たちにも責任があるはず……。もっともっと対話をしておけば……」

ラージキャプテンは、自分のチームメイトに対しての行動に罪悪感を覚え、そして自らを責めていた。

彼だけではない。ヒート先輩や、ラッシー先輩、それからラプ先輩も同じような気持ちでいた。

「アイツがすごく“いじっぱり”な性格なのは、俺もわかっていたはず。素直になれないってことはずっとわかっていたのに……それなのに俺は、キャプテンとして何にも行動しなかった。……そのせいで色んな人たちを傷つけて……」

ラージキャプテンは自分のふがいなさが悔しくてしょうがなかった。

同時に、チームをまとめる“キャプテン”としての責任も感じていた。

そんな落ち込んでいる彼に対してラグさんは、優しくポンッと肩を叩いた。

そして同種族である彼に語りかけるようにして、このように伝えた。

「ラージくん。君があさポケナインみんなを一生懸命まとめようとする姿は、君をいつも見ているみんながよく知っている。だから、そんなに罪悪感を抱くことは一つも無いんだ。今回は君にとってショックだったかも知れない。でも頑張っても報われないことはたくさんあるんだ。だけど、そのときに頑張ることをやめちゃダメなんだ。ダメだったら良い結果が出てくるまでとことん頑張れば良いじゃ無いか。何度だってチャレンジすれば良いだけじゃないか」

「ラグさん……」

ラグさんのその言葉に思わず涙がこぼれそうなラージキャプテン。

「それに君は一人じゃない。いつも見ているみんながいる。みんなが君の頑張りに応えてくれるはずだよ？だから抱え込んだらダメだよ？君が暗いとみんなも暗くなっちゃうから……」

ラグさんの言葉で、ラージキャプテンは後ろを向いた。

そこで彼が目にしたのは……、

『俺たちもちゃんと前を向くぜ』

『キャプテンが立ち直れるようにな』

『大丈夫よ。どんなに辛いことがあっても、みんなで協力すれば何とかなるわよ』
『だから元気出して下さい！』
『あたしたち……ラージキャプテンの暗い表情は見たくありません』
『頑張って……ラージキャプテン！！』
『ラージキャプテン！！』

辛い現実をしっかりと受け止めて、それでも立ち上がろうとするナインの姿があった……。

「みんな……」

ラージキャプテンは勇気をナインから感じていた。

これが団結力……チームの“絆”の力なのだと感じながら……。

「なぁラージ、俺からも一言言わせてもらっても良いか？」

「キノガッサさん……はい、もちろんです！」

ラグさんの話のあと、キノガッサさんがラージキャプテンに声をかけた。

ラージキャプテンは始め、何を言われるか緊張した様子だったが、キノガッサさんの言葉に再び熱くなるものを感じた。

「アイツの……、ジュジュの間違った考えを変えるってのはハッキリ言って簡単じゃねぇと思う。……けどな、だからと言って“無理だって諦めちゃダメだぜ?可能性が少しでもありって言うんだったら、それに賭けてみる”ってのも、大事な方法なんだからな?」

キノガッサさんはキリッとした表情だった。

その言葉にラプ先輩が笑顔で、

「すごくカッコイイ言葉ね。少しの可能性に賭けるって……」

と、しみじみとした様子で話す。すると、キノガッサさんが笑顔になってひとこと、

「それはねラ～プちゃん♪君みたいな美しいレディーや、ピカっちちゃんにチコっちちゃんみたいなかわいコちゃんがいるからだよ～♪」

と、ナンパぐせにスイッチが入ったようだ。

それに対して僕は、

「ダ……ダメですよナンパしようとしても！ピピピピカっちは……僕にとっての大切な……ひひひひ人なんだから！！」

と顔を赤くして両手を広げ、ピカっちの前に立ち、彼女をしっかりガードするが、あまりに慌てたせいか思い切り噛んでしまった。

ピカっちたちはその必死だけどどこか滑稽な僕の姿に、苦笑いしている。

さらに、ラッシー先輩がポンとキノガッサさんの肩を叩き、耳打ちする。

「ダメですよキノガッサさん。ラプに手を出したら命の保証は無いですから。何たってアイツは恐怖の……っ！？」

と、話しかけたところで氷づけになっってしまった。

氷づけしたラプ先輩はすごく怖い笑みを浮かべていた。

「ウフフフ、誰が恐怖なのかしら？巨大火ネズミのラッシーくん？」

いや、誰が見ても怖いッスよラプ先輩。ヒート先輩たちもゾクってなってますし……。

と、いきなりドタバタドタバタとコント風になったおかげか、みんなの顔に明るさが徐々に戻り始めていた。

「ラージくん。実は僕、さっき決心したんだ。聞いてくれる？」

「はい、ラグさんの話なら！！」

ラグさんの表情は本当に真剣だった。

「実は僕、ジュジュくんとバトルしようと思っている。ゼルスさんにお願いしてね。それも君とバトルする予定だった第7回戦でね……」

「え、ラグさんがですか！？」

ラージキャプテンやあさポケナインは驚きの表情だ。

「うん。さっきのジュジュくんのあの仲間を何とも思わない態度がね……すごく気になってしょうがないんだ。なんだかどう考えても調子乗っているってしか思えなかったし、それに……」

ラグさんは一度言葉を詰まらせる。

「それに彼にはわかってほしいんだ。“仲間”ってどれだけ大切なものかってね。“孤立”なんて意味の無いものだってね……。だから僕とバトルをするのが楽しみだったラージくんには申し訳ない気持ちでいっぱいだけど、だけど何としても伝えたいんだ！」

ラグさんの目は本当だった。

その目をじっと見たラージキャプテンは黙ってうなずいた。

「ありがとうラージくん……。この練習バトルの場では君とバトルは出来なくなっちゃったけれど、この合宿のどこかで絶対にバトルするって約束するよ！！それに……ジュジュくんの考えも絶対に変えて見せる！！」

「俺も信じてますラグさん。同じラグラージとして……」

2匹のラグラージは、固い約束を交わした。

『ごめんねラージくん……。僕も本当は君とバトルするのがとても楽しみだった。君が同じラグラージだと言うのもあるけど、君やあさポケナインには大切なことを学んだからね……。だからその大切なことをダメにしたくないんだ……！そのためにも、ジュジュくんとのバトルは僕の全力をぶつけるよ！そして気づかせるよ……大切な仲間との“絆”をね……。そのあとの君とのバトルを本当に“楽しいバトル”にするために』

ラグさんはこの時同時に、キノガッサさんとラージキャプテンの悔しさ、そしてあさポケナインの気持ちも一つにして闘うことを決心した。

さて僕たちがこのような話をしている間、バトル部部室ではどうやら休憩時間だったらしく、多くのモンスターやポケモンたちが自由な行動をとっていた。

そのため僕はピカっちを誘い、一度部室の外へと出て、のんびりと息抜きをすることにした。

「はぁ～……。だけどまさか合宿2日目にこんなスッキリしないことが起こるなんて思わなかったよ……」

「そうね。あたしも、まさかジュジュ先輩があんなに“孤立”を見せちゃうなんて信じられなかったわ……」

僕もピカっちも同じようなことを感じていたようで、だんだんとため息が出るようになっていた。

「でもジュジュ先輩……ホントに気付いてくれるかしら？ラグさんは何としても説得してみせるって言っていたけれど……」

「でも、自分の仲間に対してあんな捨てゼリフを言われたら、誰でも黙っていられないよ。ラグさんはきっと相当な気持ちなはずだよ。だから僕はラグさんを信じるよ」

そう。僕は過去にラグさんと似たような経験をしたことがあるから、余計そういった気持ちになっていた。

ハンデに負けず、ひたむきに一生懸命頑張っていたブースをバカにした、彼らに怒りを覚えた“あの事件”のときのように。

「ところでカゲっちくん？さっきバトルのときに一人で叫んでいなかった？すっごく気になったんだけど……」
「あぁ……あれね……実はさ……」
僕はピカっちに対して“謎の声”のことを話した。すると彼女はうつむき加減で、
「そう……、そんなことがあったの……。でも本当にその声に覚えは無かったの？」
「うん。思い出そうとしても、さっぱりわからないんだ。特に二人目の声はね……」
と、僕も静かに答えた。
「でも一体どういうことなのかしら？“おまえはみんなから置いてきぼりにされちゃう”……って」
「僕もわかんない。ちょっとは気になるけれど、あの嫌らしい声の言っていたことだから、でたらめかも知れないって思いたいんだ」
僕はあの嫌らしい声が、自分の未来を伝えてきたような気がして、気味が悪かった。

「そうね。あたしもなるべく気にしないようにするわ。第一あたしのカゲっちくんは、みんなを守れないほど弱いなんて思ってなんかいないし、それに……」

そこまで話したところで突然彼女の顔が赤くなる。

僕は「ん？」と、その理由がわからず首を傾げた。

すると彼女は真っすぐ僕を見たと思うと……、

ギュッ！！

「わわわ！？ピカっち！？」

突然僕に抱き着いてきたのだ！！

「カゲっちくんは……あたしとの約束を絶対に破らない……困ったときに頼りになって……すごく信用できて……大好きな男の子だから♪」

彼女はニコっと笑顔で小さくつぶやくようにして、気持ちを言葉にしたのだった。

僕は彼女の一言で、スッと気持ちが楽になったのを感じていた。

同時に、僕は一人でもなんでもない……ちゃんと大切な仲間と“絆”で繋がっていることも感じていた。

『ジュジュ先輩にもこの優しくて温かい仲間との“絆”をわかってくれたら……みんな喜ぶんだろうなぁ……。あさひタウンに戻ったときには、そうなってますように……』

僕はピカっちを抱きしめて、ゆっくりと目を閉じながら、小さな祈りをしたのだった。

「さぁ～て！！激闘が続く練習バトルも、いよいよ第５回戦に突入だ！！」

「その第５回戦！！対戦カードは、ヒイロＶＳチックという小柄ながらもセンスあふれる２匹の戦い！！もう目が離せないぞ！！」

『ワァァァァァァ！！！！』

練習バトルが再開となったと同時に、これまでの熱気がすぐさま

バトル部部室内に戻ってきた！！

「そうか……次はアニキの出番なんですね！！オイラ……理由がわからないけどドキドキしてきました！！」

「普段見せているバトルスタイルと、このバトル部で得てきたこと、しっかり見せてやるんだヒイロ！！」

「あたしもちゃ～んと応援しているからね～！！」

「頑張るんだ！！」

バトルフィールドに向かおうとする、その気迫あふれるヒトカゲ、ヒイロ先輩に対して、ダイル先輩、ラッシュ先輩、リリーちゃん、がばねさんが激励で後押しをする。

「ダイル……、ラッシュ先輩……、リリーさん……、がばね先輩……。みんなありがとう……オレ、精一杯頑張って来るよ！！」

ヒイロ先輩はコクっと小さくうなずいたあと、静かにバトルフィールドへ向かった。

一方あさポケサイドでも、

「さ～て次は僕の番だね！！ヒイロ先輩とどんなバトルが出来る

のかワクワクしてきちゃった～♪♪♪」

ニコニコ笑顔のトゲチック、チックが待ってました～！と言わんばかりにウキウキな表情を見せていた。

「頑張ってねチックくん♪いつもみたくニコニコを忘れないでね♪」

「ヒイロ先輩もきっとすごいバトルをすると思うけど、それに負けないバトルをしてね！！応援しているよ！！」

「あさポケパワーをぶつけてよ！！」

チックのことを、いつも仲良しな僕たち幼なじみ3匹組は笑顔で後押しした。

「うん♪僕のニコニコパワーとあさポケパワーで頑張るよ♪そう考えたらすごくワクワクしてきちゃった～♪♪行ってくるね♪♪」

チックはニコニコしながら、スキップするようにバトルフィールドへと向かったのだった。

波乱続きでドキドキしちゃうけど、この練習バトルはまだまだ続く！！

第８３話：「ラグさんとラージキャプテンの約束」の巻（後書き）

ラージ：「ラグさん……本当にあなたは俺にとっての“人生の師匠”と呼べるような存在です……。感謝してもしきれないです。絶対に良いバトルが出来るようにしましょうね……」

作者：「前回の更新後、ラグくんとキノガッサくんの作者さん、探偵コアラさんから話の内容に、いてもたってもいられない状態と言うこともあり、バトルの依頼がありました。ですので、急遽第７回戦の対戦カードをラグＶＳジュジュに変更します」

カゲっち：「さて、次回はチックとヒイロ先輩のバトルが始まるよ！！」

第８４話：「笑顔な天才トゲチックＶＳ電撃ヒトカゲ～努力＋身体能力＋戦術＝

カゲっち：「今回はついに……ヒイロ先輩の登場だ……。きっとカッコイイところ見せてくれるんだろうな……」↑両手を組んで目を輝かす

ピカっち：「それにチックくんの登場ね♪いつもみたくニコニコして欲しいわ♪」

ラプ：「それじゃあ応援よ！ゴーゴーレッツゴー！！チック！！」

ナイン：『ゴーゴーレッツゴー！！ゴーゴーレッツゴー！！ゴーゴーレッツゴー！！チック！！』

ラプ：「せ～の！」

ナイン：『チック！！』

《応援歌》
愉快に踊る
笑顔のチック
みんなのもとへ
幸せ運ぶ

ナイン：『ゴーゴーレッツゴー！チック！！」

カゲっち：「それでは第８４話プレイボールです！」

第８４話：「笑顔な天才トゲチックＶＳ電撃ヒトカゲ～努力＋身体能力＋戦術＝

ラグさんの言葉で、ラージキャプテンも立ち直っていくと良いな。
やっぱり元気なのが一番だからね！！

「よろしくお願いしますヒイロ先輩！！」
「ああ！お互い良いバトルになるように頑張ろうぜ！！」

バトルフィールドに立ったチックの言葉に、対戦相手であるヒイロ先輩が力強く返事をした。

「いよいよか。どんなバトルになるのかワクワクしちまうな」
「そうだな。ヒイロもチックも充実しているような表情に見えるからな。こりゃあ見逃せないな！」

ヒート先輩の言葉に、ラッシー先輩が笑顔で答える。

「頑張って下さいアニキ～～！！」
「ファイト～！ヒイロく～ん！！」

ダイル先輩にリリーちゃんも笑顔で声援を送る。

「どうしよう～？チックにも頑張ってほしいけど、ヒイロ先輩にも頑張ってほしいなぁ～。どっちを応援したら良いのかな？迷っちゃうよ～！」

僕がう～んとかなり迷っていると、

「もう、二人とも応援すれば良いじゃない？チックくんもヒイロ先輩とも仲良しな友達なんだから！」

「そうよ♪勝ち負けなんか関係無いわ♪楽しいバトルになれば良いじゃない♪」

と、チコっちとピカっちが笑顔で僕を誘っていた。

「そっかぁ～！！そうだよね！！勝ち負けなんかどうでも良いよね！！よぉ～し！！フレ～フレ～チック！！がんばれがんばれヒイロせんぱ～い！！！」

僕は大きな声を出して、二人が良いバトルを出来るように応援することにした。

「それでは練習バトル第５回戦……開始！！」

ゼルスコーチのコールで、今ここに注目のバトルが始まった！！！

「いくぞチック！！“かえんほうしゃ”！！」

まず先に攻撃に出たのはヒイロ先輩だった。
命中率もよく威力も強いほのお技の“かえんほうしゃ”で無難にチックを攻める！！

「ムムムムム！それなら僕は“まもる”だよ～～！」

チックはヒイロ先輩の技のダメージを受けまいと、こちらも無難な防御技“まもる”を使う！！

ドォォォォン！

結果、ヒイロ先輩の“かえんほうしゃ”はチックに命中することなく、消えてしまった！！

「ふぅ～危なかったぁ……。こんなに強力だなんてビックリしちゃった♪ヒイロ先輩すごいですね～～」
「へへ、サンキュー！！でもチックもなかなかの好判断だぜ！し

かもタイミングも早くて、良い感じじゃねぇか！」

最初の攻防を終え、手応えを感じたのか笑顔をお互いに見せるチックとヒイロ先輩。

さらにチックはニコニコと明るい笑顔のまま、

「次は僕の攻撃を見せるよ～～♪そ～れ“かわらわり”！！」

と、両手に力を込めてヒイロ先輩にぶつかっていこうとした……が！！！

スカッ！！

「なんだ？」

「攻撃が外れたみたいだぞ？」

まさかの出来事にざわめく観客席。というのも……、

「あれれ～？張り切ってぶつけようとしたのに外れちゃった～。せっかく良い感じだったのに～！」

と、彼の話から推測するにトゲチックの持つ特性、“はりきり”

が発動してしまったのだ。

その悔しさのあまりチックはその場で“じたばた”と騒ぎ出した。

それに対してヒイロ先輩は、

「ドンマイドンマイ、チック!!たまにそういうことだってあるさ!」

と、対戦相手であるチックに励ましの言葉をかけた。

「あ、そうですよね♪よ～し、今度はしっかり技を決めるぞ～!!」

その言葉で再び笑顔になったチック。

「おっと、その前に今度はこっちの番だぜ!!“１０まんボルト”!!」

「えっ!?本当にでんき技が使えるんだ!?」

チックはヒイロ先輩の言葉に驚いた表情をみせた!!

バチッ！！バチバチバチ！！

その間にも、ヒトカゲであるヒイロ先輩の体から電気が発生していく！！

「え～い！こうなったら“ゆびをふる”だ！！」

チックはチョンチョンと、右手の人差し指を左右に揺らす！

ゴォオオオオ！！

次の瞬間、チックの体が炎に包まれた！！そして、そのままヒイロ先輩に突っ込んだ！！

「たぁぁぁぁぁ！！“かえんぐるま”！！」

その結果ヒトカゲのヒイロ先輩が、通常なら扱えないでんき技を

発動すれば、トゲチックのチックも通常なら扱えないほのお技を発動したことになった！

さて、この攻防の結果はどうなるのか！？

バチバチバチ！！
「うわぁぁぁ！！」

チックが思わず叫ぶ。

やはり広範囲に散らばる“１０まんボルト”が優位だったのか、ヒイロ先輩へ直接ダメージを与える前に、この相性の悪い技を受けてしまった！

「チック！？」
「これは厳しかったか！？」

観客席がにわかにざわめく。

それでもチックは、

「イタタタタ。やっぱりでんき技は辛いモノがあるな～。エヘ、これは注意しなきゃ～♪」

と、苦痛の表情を浮かべるところが、ますます笑顔になっていく。

「す……すごいな。これがヒイロの……、“ハイブリッドポケモン”の力なんだな」

「あぁ。母親がライチュウで、父親がリザードンと言う両親から産まれたおかげで、元来ヒトカゲが取得出来る技や身体的な能力に、ピカチュウが取得出来る技と身体的な能力までもが合わさっているらしいからな。ある程度作戦を考えないとバトルするのはきつそうだよな」

ラッシー先輩とヒート先輩は改めて、“ハイブリッドポケモン”の凄さを感じ取るばかりの様子だ。

「やっぱり僕の思った通りにすごくカッコイイ～……。なんか憧れちゃうなぁ……。僕も一度で良いから、誰も覚えられない技を使ってみたいよ～」

一方の僕は目をキラキラキラキラまぶしく輝かせて、ヒイロ先輩に憧れの眼差しを送った。

その様子を隣で見ていたピカっちは、

「また始まっちゃったの～？ホントに呆れちゃうわ、カゲっちくんってば……」

と、頭を抱え込み、呆れたように一つため息をついていた。

「さぁ、バトルはまだまだこれからだチック！！」「もちろんです！！僕だってもっともっと頑張りますからね～♪」

お互いの持つ戦術を見ていくうちに、段々とこれからの展開が楽しみになってきたのか、チックもヒイロ先輩もやる気がどんどん出てきている様子だ。

「こういう接戦のバトルは、いかに自分のペースを作れるかが大切だ！“でんこうせっか”！！」

ヒイロ先輩はそう叫ぶと、バッッ！と目に見えないような素早い動きで、チックに突撃する！

「ムムムム！！それなら僕は“じんつうりき”！！」

するとチックは目をつぶって集中力を高めたと思うと、そのまま強い念力のようなエネルギーを発した！！

「うわっ！！自由に動くことが……出来ない……！」

するとどうだろう。“でんこうせっか”で攻めようとしたヒイロ先輩のスピードが、段々と落ちはじめて来ているではないか！！

ヒイロ先輩はチックの“じんつうりき”を振り払おうと、なんとかして体全体を使って自分の身を動かそうと試みる。

「がんばれ～ヒイロくん！！」
「気合いを見せろ！！」
「アニキーー！！」

そんな必死なヒイロ先輩に対して、リリーちゃんやがばねさん、そしてダイル先輩が後押しするように声援を送る！

「このまま技を決めちゃうぞ～！え～～い！！」

“じんつうりき”を繰り出したチックは、そのエネルギーをヒイロ先輩にぶつけた！！

「うわぁぁぁぁ！！」

その衝撃を受けてしまったヒイロ先輩は思わず叫んだ！！

そしてそのままドカッ！っと大きな音をたてて地面に叩き付けられてしまった！！

「くっ……。なかなかのダメージじゃねぇかこりゃ……。チックも油断出来ないヤツだな……」

それでもヒイロ先輩は静かに立ち上がる。それも、

「へへ……。ニコニコ笑顔でバトルはセンス抜群ってのも結構面白いかも知れないな……。余計ワクワクしてきたぜ！！」

と、充実に満ち溢れたような笑顔を見せて……。

「そういわれると僕もうれしいです♪やっぱりニコニコ楽しいのが一番ですからね♪それに僕もヒイロ先輩とバトルしていると次は

どうなるのかワクワクしちゃいます♪♪」

チックもクルクルと回転しながら、喜びを最高に表現していた。

『さてと……、チックの“じんつうりき”。相当使い慣れているんだろうな。良い威力だったし。それにランダムに技を繰り出すことが出来る“ゆびをふる”でも状況に合わせるように、いきなり威力の高い技を繰り出した。恐らくこれもバトルに慣れている証拠何だろうな……ん、待てよ!!?』

一度体勢を整いていたヒイロ先輩は、何か良いアイデアをひらめいたようだ。

『ってことはチックの戦法は……オレの持つ技に合わせ、ドンドンオレの手の内を見ていくんじゃ!?』

キッと引き締まった表情になるヒイロ先輩。

思えば最初にヒイロ先輩が“かえんほうしゃ”を繰り出したときには、チックは“まもる”を。

ヒイロ先輩が“１０まんボルト”のときは、チックは“かえんぐるま”を。

さらに今ヒイロ先輩が“でんこうせっか”を繰り出したときには、チックは“じんつうりき”を繰り出してと言うように、確実にヒイロ先輩の技を見てから彼は対処していると言うような感じだ。

『逆にアイツが先に攻撃をしかけたときの“かわらわり”は見事に空振った。特性が発動したってのも、可能性としてはある程度考えられるけれど、元々後攻めの方が得意なのだとすれば……』

ヒイロ先輩は考えた末にこう仮定した。

『種族的に考えても、チックより格段と早く行動出来るのはオレ。だからどうしても先攻になってしまうけど、そのときにチックが“これしか対策が考えられない”という技を繰り出せばきっと……』

果たしてヒイロ先輩はこの作戦を上手く実行することが出来るのだろうか！？

『くだらない……！このバトル部に来てから言われることが実にくだらない！！こんなところ来るんじゃなかった！！』

バトル部部室を飛び出し、一人止まらぬ憤りが込み上げているのは第４回戦を終えたジュジュ先輩だ。

彼は今日と昨日、自分に対してにかけられる言葉が気に食わない様子で、何度も何度も地面を蹴るようなしぐさを見せていた。

『何がバトルを楽しめだ！！何が相手に勝って調子にのるなだ！！どうして僕の考えが通用しないんだ！！』

ジュジュ先輩は、どうも自分の持つ“勝負事の理論”が自分と関わる人たちに理解してもらえないことにイライラしているようだ。

『さっきの第４回戦だって、僕はラッシーやラプみたく自分なりの全力をぶつけたというのに……何がみんなと違うって言うんだ！

？こっっの！！！』

ジュジュ先輩は込み上げるイライラを止めることが出来ず、何度も地面を強く踏み付けていた。

と、そこへ一匹のポケモンが現した。

「ジュジュ、こんなところにいたのか。ずいぶんと探し回ったぞ」

「キュウコン……監督。……一体何しに来たのですか？」

ジュジュ先輩は相変わらずいらついた様子で、姿を現したキュウコン監督に問う。

するとキュウコン監督は、

「……さっきのバトル、よく自分の実力をぶつけたな。キノガッサくんも相当な実力者と聞いていたが、あの結末を導くとは、勝利にこだわるおまえらしいな」

と、目をジュジュ先輩に向けて語りかける。

「えぇ、僕は確かに勝った……。確かに勝ちましたよ。でも！！

でも誰も喜んではくれなかった!!それぱかりか悲しそうにしているじゃないですか!!僕だけ勝ったときにどうしていつもいつもあんな表情をされなきゃならないんですか!!」

ジュジュ先輩は全く他のメンバーがとる態度の理由がわからずにモヤモヤとしているようだった。

「勝っても喜んでくれない理由か……。ジュジュ、その答えをを見つけにもう一度だけバトルをしないか?」

「何ですって!?」

キュウコン監督の言葉に驚くジュジュ先輩。

そんな彼をよそにキュウコン監督は、冷静を継続してさらに話を進める。

「実はあのバトルのあと、ゼルスコーチやラッシュくんから通達されたのだ。“キノガッサの仲間であるラグがどうしても勝負をしたいと言っている。なので急遽第7回戦をジュジュ対ラグにする”と」

「ラグさんと……?良いでしょう。敵討ちなのか目的は知りませんがね、僕はどんな相手にだって、ただひたすら勝利をもぎ取るだけですよ……」

ジュジュ先輩は、溜まっている鬱憤を晴らすのにはちょうど良いと考えたのか、ニッと静かに笑顔を見せた。

「よし、それでは決まりだな。ゼルスコーチ、それからラッシュくんに伝えておくからな」

キュウコン監督はそう言い残すと、クルッと体をバトル部部室の方へと向けた。

そのまま歩き出すと思われたのだが、ふと何かを思い出したかのように、もう一度体をジュジュ先輩に向けて、

「それと私からも一つ。あさひポケナインは常に一つの心だ。今みたく自分勝手に行動するのは掟破りだからな」

と、何かジュジュ先輩に警告するように伝えたあと、再び体をバトル部部室へと向けてそのまま歩き出した。

ジュジュ先輩はまだイライラした様子だったが、一つやれやれとため息をついたあと、ゆっくりとそのまま仲間の待つバトル部部室へと向かったのだった。

第８４話：「笑顔な天才トゲチックＶＳ電撃ヒトカゲ～努力＋身体能力＋戦術＝

カゲっち：「やっぱりカッコイイなぁ、ヒイロ先輩！どんな状況でもクールで！僕もあんなふうになりたいなぁ」

ピカっち：「チックくんも良い笑顔ね♪最後まで笑顔でいて欲しいわ♪」

第８５話：「ヒイロのひらめきと“彼”の失踪～努力＋身体能力＋戦術＝天才～」

チック：「やっぱりバトルって楽しいね～♪それにドキドキしちゃう♪」

ヒート：『常に笑顔。本当にバトルが楽しいんだろうな。きっとどんな結果になっても、悔いは残るってことは無いな』

ラッシー：「ところで“彼”って誰のことだ？」

ラージ：「気になるだろ？その辺も含めて第８５話プレイボール！！」

第８５話：「ヒイロのひらめきと“彼”の失踪～努力＋身体能力＋戦術＝天才～」

ヒイロ先輩の繰り出したでんき技も驚いちゃったけど、チックのバトルスタイルも驚かされちゃったなぁ……。
このあともどうなるのか目が離せないよ！！

「この第５回戦、両者ともに小柄ながら、繰り出す技が高度なモノばかりだぞ！！」
「チックもヒイロもどちらかと言うと、しっかりとした戦術を駆使して流れを引き寄せるタイプ。その頭脳戦をどちらが制するのだろうか！？」

実況役のレウト先輩やホムラ先輩が熱いコメントを残した！！

それに伴い、大歓声がバトル部部室を包み込んだ！！

『う～～ん。とりあえず“じんつうりき”でスピードの速いヒイロ先輩を捕らえることが出来たのは良かったけど……』

チックは次なる作戦を考えようと、それまで見せていた笑顔を一

瞬止めて、ヒイロ先輩の表情をジッと見た。

『……あのほのお技の威力、本来絶対に扱えないはずのでんき技をコントロールする姿……。ヒイロ先輩の身体能力の高さや、バトルの経験量がハッキリと反映しているように感じる』

チックはヒイロ先輩との数回のやり取りで、彼の凄みをひしひしと感じ取っていた。

無論、チックはそれに対しての対策法を実践してきたのだが、何かひっかかることも感じていた。

『何でだろう？ヒイロ先輩には、どんな強敵、難敵にでも食らいついて……跳ね返しちゃうような、“余裕”を感じる。持ち技とか戦術とかそれ依然の“余裕”が……』

もちろん今までの状況で、決してチックがガンガン押していたというような感じでは無かったのだが、それでも彼は自分の戦術で思ったような手応えを得られて無いことから、このひっかかりを感じていたのかもしれない。

『もうちょっとだけ様子を見よう。このひっかかりを振り払うためにも……』

と、チックは継続してヒイロ先輩の様子を見ることにした。

「そのためにはまず……“ひかりのかべ”！！」

と、チックは自分の周りに、光でできたガラスのような透明な防御壁を作った。

「“ひかりのかべ”……、それでオレの遠距離型のほのお技やでんき技を防ごうと言うのか」

自分の前に現れた“ひかりのかべ”を見て、ヒイロ先輩がつぶやいた。

確かに、ヒイロ先輩の持ち技で特に強烈な“かえんほうしゃ”や“１０まんボルト”と言うような技は、自分から遠く離れた相手にもダメージを与える技だ。

“ひかりのかべ”はこのような技の威力を弱めてしまう。すなわちその向こうにいるチックまで、ダメージが伝わらなくなってしまうのだ。

「だがそれなら直接打撃で勝負するだけだ！“アイアンテール”

！！」

ヒイロ先輩はこのまま黙っているわけにはいかないと、自分の燃えるしっぽを金属のように固くし、そのままチックに振り落とした！！

「ムムム……それなら“じんつうりき”！！」

だがチックはいたって冷静な好判断を下した。

“じんつうりき”によって、再びヒイロ先輩の動きをコントロールし始めたのだ！！

「くっ！！ダメか！！」

ヒイロ先輩は何とか“じんつうりき”を振り払おうと、エネルギーに逆らうような動きをしたが……、

ドォォォォン！

「ヒイロくん！？」

「ヒイロ先輩！」
「ヒイロ！！」

激しく地面にたたき付けられたヒイロ先輩の姿に、思わずリリーちゃんや僕、ラッシュ先輩が叫ぶ！！

「いっててて……。まさかここまで徹底的なディフェンス型バトルを見せ付けられるとはな……。ニコニコ笑顔とリンクしにくいほど、強いじゃねぇか……」

ヒイロ先輩はゆっくりと立ち上がり、ジッとチックを見た。

「よ～し、いい感じになってきたぞ～♪それじゃあそろそろ勝負を決めちゃうよ～♪」

一方作戦が見事に決まるチックは、相変わらず笑顔を振るまいていた。

そのあと……、

「そ～れ、“げんしのちから”！！」

と、トゲチックの最大の技とも言える“げんしのちから”を発動した!!

「“げ……げんしのちから”……!?オレとの相性も良い技で一気にケリをつけようってのか!!それならそれを一気に破壊して、チックまで貫くまでだ!」

ヒイロ先輩はそう叫ぶと、体全体からバチバチッと、電気による火花を散らす!!そして、

「たぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!“１０まんボルトォォォォォォォォ”!!」

と、何とヒイロ先輩は“ひかりのかべ”によってあまりダメージが届かない遠距離型タイプの“１０まんボルト”をフルパワーで放った!!

これで自分をたたみかけようとする“げんしのちから”を破壊し、さらにはその先にいるチックにまでダメージを与えようと言うのだろうか!!?

いずれにしてもこの気迫あふれる一撃が決まれば、一気に流れは

変わりそうな予感だ！！

バトル部部室の中の多くの視線も、このシーンを逃すまいと一点に集結していた！！

「ヒイロ先輩のでんき技、すごくかっこよかったわねチコっちちゃん♪」

「ホント、まさか本当に電撃を使いこなすなんて、どこかのダメダメヒトカゲとは大違いね！」

その時、ピカっちとチコっちは仲良く楽しそうに話をしていた。

「そんなことないわよ♪カゲっちくんは普段はダメダメでも、いざとなったときはヒイロ先輩に負けないくらいかっこよくて頑張っちゃうんだから♪ねぇ、カゲ……？」

ピカっちはチコっちの言葉に笑いながら、バトル開始から片時も離すことのなかった視線を、僕が座っているであろう左隣の方へ動かした。

だが、そこで彼女の笑顔がなぜかフッと消えた。

「……？どうしたのピカっち？いきなり黙り込んじゃって……」

チコっちはピカっちのこの変化に嫌な予感がしたのか、彼女に声をかける。

するとピカっちは、

「カゲっちくんが……カゲっちくんがいない……」

「え！！？」

チコっちはピカっちの言葉に、少しばかり頭が真っ白になりそうだった。

ピカっちも事実を受け入れることが出来ず、どういう反応を示したら良いのかわからないでいた。

いつの間にいつも泣き虫だけど、明るく元気に自分のそばにいてくれる“彼”はいなくなってしまったのだろうか……？一体どこへ行ってしまったのか……？

ピカっちはずっとそのようなことを頭に浮かべ、ショックのあま

り下を向いてポタポタ涙を落とす。

チコっちは焦りを募らせながら、大声で四方八方に“彼”のニックネームを呼ぶ!!

だがその声は、相変わらず熱気にあふれた歓声が飛び交う部室内で響くことは無かった……。

ドォォォォォン!!

その“悲劇”が始まっている間にも、バトルは続いていた!!

先ほどヒイロ先輩が放った“１０まんボルト”が“げんしのちから”と衝突したせいか、爆発を引き起こしていた!!

「どうだ!?決まったか!!?」

技を放ったヒイロ先輩が、モクモクと上がる煙にそう叫んだ！！

そのうちだんだんと煙は晴れて来ると、その結果は現れた。

「びっくりしちゃった～！“げんしのちから”があっという間に破壊されちゃったよ！やっぱりすごいですねヒイロ先輩！！」

そこには笑顔のチックの姿と、ボロボロと崩れた“げんしのちから”の残骸が残されていた。

「くっ！チックまでダメージを与えきれなかったか！！」

ヒイロ先輩は、思うような結果にならず、悔しそうにしていた。

だが……、

『ッ！？何だあれは！！』

ヒイロ先輩はあることに気づいた。

ピキッピキ……シュン。

それは一瞬にして消えてしまったが、確かに“ひかりのかべ”に出来た、ほんのわずかな亀裂だった。

『あの様子、オレの“１０まんボルト”のすべての衝撃を遮れたわけじゃなかったってことか！……ってことは衝撃を与えつづけるような技をぶつければ……壊れるかもしれねぇ！！』

ヒイロ先輩は始め“かわらわり”で“ひかりのかべ”を破壊しようとしたのだが、それだと直接打撃のため、チックの“じんつうりき”の術中にはまるリスクがあった。

だが今の“１０まんボルト”による、“ひかりのかべ”の様子。

きっと耐え切れるような衝撃に限界があることを示しているに違いない。

『だから連続して衝撃を与えつづけるような技……アレを使えばきっと破壊出来る！！』

だが、ヒイロ先輩にはある懸念があった。それは、

『でもな下手にいきなりアレを使ったらチックのことだ。きっと“ゆびをふる”を上手くコントロールして、あっという間に対処さ

れちまうに違いねぇ』

そうなれば、そのあとチックはさらにディフェンスを堅くするに違いない。

『そんなことされちまったらアウトだ。二度とこんな読みやすい作戦は使えないな……、チャンスは一度っきりってことか……』

さぁ、ヒイロ先輩は上手く作戦を実行できるのだろうか!?

「カゲ～っち～！カゲっちってば～！！」
「どこなの～!?返事してよ～～！」

その頃チコっちとピカっちは、姿の見えない“彼”を探そうと必死だった。

彼女たちは、自分たちの先輩たちにも声をかけ、一緒に探してもらうことにしたあと、彼らとは別の場所を探していた。

だが、それでも“彼”を見つけることは出来ない。

時間が過ぎるに連れて、ピカっちはだんだんと表情が暗くなってゆく。

『もう、あのバカ……何たっていきなりいなくなっちゃうのよ！ピカっちを置いて……！！』

チコっちはだんだんと焦りと憤りを感じ始めていた。
それでも、

「元気だしてピカっち！すぐ見つかるわよ。あの子のことだから、きっとトイレにでも行って迷っているのよ！」

と、ピカっちに何とか元気を出してもらおうと、励ました。

「それなら良いんだけど……」

だが、ピカっちの声は小さいままだった。同時にそれほどショックが大きいことも物語っていた。

「それに“約束”したじゃない。あたしたちが、小学校最後の運

動会で3匹とも辛い目にあったときに……。バラバラで離れ離れになりそうだったけど、その時にあの子が言ったじゃない。“こんな元気が無くてバラバラな僕たちっておかしいよ!!悲しくて悔しいけど、元気出そうよ!僕たち仲良し組なんでしょ!!”って」

特にチコっちにとって、それは思い出したくも無い嫌な思い出だったのだが、逆にその時以来“彼”に対する信頼感と言うものは変わらない。

「だからあたしは泣いたりしないわよ。逆に“ソーラービーム”をぶつけちゃうわ。ピカっちもいつもみたくビンタしちゃいなさい!」

チコっちがピカっちに語りかける。するとピカっちは、

「……そうよね。ここまで信用してるのに、心配かけちゃうダメダメカゲっちくんに思い切りビンタしなきゃ♪」

と、涙を堪えて笑顔を見せはじめた。

ますます目を離せない練習バトル！そして突然の失踪劇……。

果たしてこのあとどうなってしまうのか！？

第８５話：「ヒイロのひらめきと“彼”の失踪～努力＋身体能力＋戦術＝天才？～」

ヒート：「マジかよ……何でカゲっちのヤツが消えちまったんだ？」

ラプ：「とにかく見つけなきゃ。嫌な予感がするわ……」

ラッシー：「ヒイロのひらめきもさすがって感じだよな。ちっきしょー！！バトルの続き、見たかったぜ！！」

ラージ：「次回その第５回戦も完結するぞ！お楽しみに！！」

第８６話：「逆転勝利への方程式～努力＋身体能力＋戦術＝天才？～」の巻（前編）

チック：「いよいよ今回で第５回戦も決着なんだね♪」

ヒート：「そうみたいだな。だけどどんな結果になるのか全く予想出来ないよな」

チック：「気になる内容盛りだくさん！第８６話プレイボール♪」

第８６話：「逆転勝利への方程式～努力＋身体能力＋戦術＝天才？～」の巻

「これはすごいバトルになってきたぞ！！まさに戦術と戦術の激突だ！！」

「チックもヒイロも勝利を手にするカギは、決定的な決め技を見事に決めること！果たしてどちらが先にそれを決めることが出来るのか！？」

ますますヒートアップする練習バトル第５回戦の状況に、実況役のリオレウスコンビも、その実況熱が大きくなってきたようだ！

もちろんバトルを見守る観客席も決定的瞬間を見逃すまいと、視線を彼らに注いでいた！！

「僕の得意な“げんしのちから”をあんなに破壊しちゃうなんて、やっぱりヒイロ先輩……強いですね～♪」

「そんなこと無いぜチック！オレもまさかバトルでここまでワクワクするなんて、全く予想してなかったんだぜ？そこまで楽しませてくれるチックもなかなかの腕前だと思うぞ！」

バトルを続けるヒイロ先輩とチックは、この緊迫感の中の独特のワクワク感を出してくれた自分の対戦相手に、新たな友達が出来たような気がして嬉しい気持ちになっていた。

二人に時折浮かんでくる笑顔がそれを象徴しているかのようだった。

「さ～て、次はどうしようかな～？とりあえず“ゆびをふる”！！」

チックが右手の人差し指を左右に揺らした！！

すると、彼の体の周りにバチッバチ！と電気が溜まりだしたでは無いか！！

「そ～れ！“じゅうでん”してから“ほうでん”だよ♪」

チックはそう叫ぶと、充分に蓄えた強烈な電気をヒイロ先輩に放った！！

「なっ！２つのコンボ技を一度に繰り出せるなんてすげぇな！！それならオレも遠慮なく電気で勝負させてもらうぜ！！“１０まんボルトォォォォォォ”！！」

一方のヒイロ先輩もそう叫ぶと、強烈な電流を自分の体から目一

杯放った！！

バチバチバチバチ！！

次の瞬間、バトル部部室全体へ目も開けるのが難しいほどのまぶしい光が散らばり、両者の放った電撃がぶつかり合った！

バチバチバチバチバチーーン！！

しかしヒイロ先輩の放った電撃の威力が強かったのか、チックの放った電撃は振り切られてしまった！！

「行けぇぇぇ！そのまま壁を貫け！！」

ヒイロ先輩がチックの前に君臨する“ひかりのかべ”を指差した！！

バチバチバチバチーーーン！！

しかし再び強烈なその一撃は壁によって遮られてしまった！！

すでにそのことを予想していたのか、技を振り切られてしまったチックの表情に、動揺した様子は無かった。

「やっぱりダメか～。ヒイロくんのでんき技もかなり強いのに……」

「そうだよな。連続しての“１０まんボルト”に対しても“ひかりのかべ”に影響が全く無いって感じだよな」

観客席でヒイロ先輩を応援するリリーちゃんとがばねさんは、少し心配しているような表情だ。

「でも～何でかな～？ヒイロくんも打撃技を使えば良いのに」

どうしても納得出来ないのだろう。プリムラさんは首を傾げながら、隣に座るスバルさんに聞く。

するとスバルさんは彼女に説明を始めた。

「本当ならヒイロだって“ひかりのかべ”の効果に左右されない打撃技で挑みたいんだろうけど、何せチックにはそのための対策として“じんつうりき”を操つって来るんだ。あの技を使われたら、かえってダメージが増える恐れがある。だからヒイロも慎重に攻め

ざるを得ないんだろう」

スバルさんの説明に、プリムラさんは納得したような表情を見せた。

「それでもオイラはアニキを信じます。アニキなら……絶対に勝ってくれるって。アニキならどんな不利なことにも諦めないで……カッコイイ勝ち方をしてくれるって！！」

そばでスバルさんの説明を聞いていたのだろう。

ダイル先輩には心配したような表情は見られず、じっと揺らぐことなく真っすぐな視線を保っていた。

「それに……アニキは……いじめられっ子で弱かったオイラにはじめて、“自分を変える勇気”を教えてくれた人だから……、バトルが終わるまでは絶対に諦めないはずです！！だからオイラも諦めません！！」

ダイル先輩はヒイロ先輩と初めて出会ったときのこと、その時にかけられた言葉を思い出していた。

「そうだな。あんなにヒイロが頑張っているんだ。きっと何かしてくれるよな」
「そうね。きっとダイルくんの言うように、ヒイロくんなら勝つわよ！」

ダイル先輩の言葉にがばねさんとリリーちゃんに明るさが戻ってきた。

「電撃でダメならこれだぁぁぁぁ！！“だいもんじ”！！」

その多くの視線を浴びているヒイロ先輩は、チックをしっかりと守っている“ひかりのかべ”に対して強烈なほのお技を放った！！

ゴォォォォ！！

轟音とともに炎は“ひかりのかべ”を包んだが、それも一瞬のことで破壊するまでには至らなかった。

『よし。ここまでは僕が描いたシナリオ通りだ。ヒイロ先輩はヒトカゲとは思えないパワーとスピード、そして技のバリエーションがあって、かなりの強さだ。でも“ひかりのかべ”と“じんつうりき”で上手くそれを封じることが出来た。さらに壁を破壊しようと技を繰り出しているうちに、段々と疲れを誘ってゆけば……』

ヒイロ先輩が何とか壁を破壊しようと奮闘する様子を見て、チックはこのように考えていた。

……そして、

「そろそろ勝負を決めちゃうよ～♪そ～れ、“ゆびをふる”！！」

チックは再び指を左右に揺らした！！

そこから……、

「そ～れ、“いわなだれ”！！」

「“いわなだれ”だと！？避けないと致命的な一撃だ！！」

「アニキ！！」

どよめきのような完成の中、多くの巨大な岩がヒイロ先輩の下へ落下していった！！

その頃、そのポケモンはバトル部室からかなり離れた、ポケハン学園のとある一角に姿を現していた。

『どうしよう……。もうすぐ僕の出番が近づいてきているんだ……。これが“夢”なら覚めてほしい……』

そのポケモン……どこにでもいる、とかげポケモンのヒトカゲは今までに感じたことも無いような緊張感と絶望感に包まれていた。

実はこのヒトカゲ、先ほどまで自分の大切な幼なじみである、ピカチュウとチコリータ、さらには多くの仲間とともに白熱するバトルを観戦していたのだが、段々と震えと冷や汗が止まらなくなり、ノドがカラカラになっていたのである。

最初は何とか周囲に笑顔を見せられてはいたものの、時間が経つにつれてそれも出来ないほど、とにかく頭が真っ白になるほどのパニック状態に陥ってしまい、ついにはバトル部部室から黙って抜け出してしまったのである。

『しっかりするんだヒカゲ！ピカっちと約束したじゃないか、絶対にこのトラウマを乗り越えてみせるって！こんな簡単にダウンしてちゃダメじゃないか！！』

必死に彼は自分を奮い立たそうと、自らにゲキを飛ばす……が！！

おまえは誰も守れはしない……！

おまえはこれからもひとりぼっちなんだよ……！

全てを失ってしまえ……！

「ヤ……ヤメローーー！！やめてくれ！！お願いだから邪魔をしないでくれぇぇぇ！！」

彼の苦しみは限度に達していた。

周りに誰もいないはずなのに、聞こえる声に思わず倒れ込み泣き出す“彼”。

本当は“彼”だってこのままじゃいけないのは分かっていた。

しかしナインの奮闘、さらには今自分と同じヒトカゲが戦う姿に、「自分もバトルが出来るのは当然」と、余計な焦りを抱いてしまったのであった。

どうしようも無いこの気持ちを振り払おうと思わず“彼”は、地面を強く拳や彼の種族を象徴している燃え上がるしっぽで激しくたたきつけていた。

その姿は普段の温厚で人一倍努力家の“彼”が見せた苦悩をそのまま表現しているかのようだった……。

……僕は段々と自分の出番が近づくにつれて、ナインが必死に頑張る練習バトルから逃れようとしていた。

理由はいたって単純。自分のメンタル面が弱すぎることだ。

自分を支えてくれているたくさんの“仲間”に、自分の心の傷と闘うと約束したのにも関わらず、そんな簡単な理由で、バトルを始める前からすでに僕は恐怖感に圧倒されてしまい、ついには多くの期待を裏切ろうとしているのである。

『ゴメンピカっち……僕やっぱりダメダメ泣き虫ヒトカゲだよ……。ここを乗り越えなくちゃ、いつまで経っても強くなれないのはわかってるのに……怖くて怖くて体の震えが止まらないんだ……。もしかしたら棄権しちゃうかもしれない……』

僕は自分の情けなさがすごく悔しくて耐え切れなかった。

きっとこのままバトルをしたところで、情けない僕が劇的に変化出来るなんて考えられなかった。

それぱかりか気持ちをコントロール出来ないために、また誰かを傷つけてしまうのでは無いのかと不安な思考を働かせるばかりだった。

その結果、

『やっぱり僕に誰かを守るなんてカッコイイこと……不可能なことだったのかな?』

と、弱気な考えを抱くようになってしまった。

『もうこの場に僕は必要とされてないのかもしれない……。バト

ルもまともに出来ない僕なんて……。あさひタウンに帰りたい……』

僕は特別合宿そのものをリタイアしようかと考えはじめた。

そうすればこんなに苦しい状況に追い込まれることは無かったのにと考えながら……。

そんな絶望しか感じること無かった僕だったがそこへ、

「こんなところにいたのか……ずいぶんと探したぞ」

と、自分の後方から声が聞こえた。

「だ……誰だ!?」

僕は怒り口調で聞き返した!

一体誰が現れたと言うのだろうか?

「ヒイロくん危ない！！」
「早く避けんるんだ！！じゃないとまともに食らっちまうぞ！！」
「アニキ！！」

同じ頃チックが発動した“いわなだれ”は確実にヒイロ先輩を直撃しようとしていた！！

いきなりの危機的状況に観客席はにわかにざわめく。

しかしそんな状況にも関わらず、なぜか当事者であるヒイロ先輩は落下地点から一歩も動かなかった。

「こんなの破壊すれば良いだけだ！“１０まん……”」

ヒイロ先輩が電撃を放とうとし始めた！

どうやら先ほど“げんしのちから”を打ち砕いたときのように、自分の技で“いわなだれ”を破壊しようと言うらしい。

「でもあの“いわなだれ”はスピードもパワーもとても対抗出来るようなものじゃないぞ！」

「無理だけは絶対するなよ、かえってダメージを増やすだけだ！！」

その状況を見てスバルさん、御羅不猟さんがヒイロ先輩に叫んだ！！

「あ！すっかり忘れちゃうところだった～♪またさっきみたく壊されちゃったらマズイからね～♪もう一回“ゆびをふる”！！」

さらにチックもヒイロ先輩の作戦を先に読んだのか、再び指を左右に揺らしはじめた！！

するとどうだろう。突然チックは自分の指から何か光を発したではないか！

「それ～♪“かなしばり”だよ～♪」

その光を技を放とうとしていたため、避けることが出来なかったヒイロ先輩。

『ヤバ！これで全く動けなくなっちまった！！せっかく作戦が思いついたのにこれじゃ意味がねぇよ！！』

正直ここまでは予想出来なかったのだろう。

身動きが全く取れなくなったヒイロ先輩は、とうとう追い詰められてしまった！！

ズガガガガガガ！！

「うわぁぁぁぁぁ！！」
「やった～♪僕ヒイロ先輩に勝っちゃった～♪」
「ヒイロくん！！」
「ヒイロ！！」
「アニキーーー！！」

“いわなだれ”がヒイロ先輩を衝突した瞬間、チックが満面の笑みを浮かべたのに対して、悲鳴のような歓声がバトル部部室を包み込んだ！！

「こ、これはすごい幕切れだ！炎と電撃の二刀流を駆使するヒイロの攻撃を全く受け付けなかったチックのディフェンス！さらには数々のコンボ技！！センスの良さが際立つ一戦だった！！」
「一方のヒイロ。あの手この手でチックの鉄壁を崩そうとするも、

結局最後まで突き破ることが出来なかった。痛すぎる敗戦だ……」

実況役のホムラ先輩とレウト先輩が戦評を語る。

誰もがヒイロ先輩の敗北、そしてチックの勝利を確信していたかに思えた……が！

「残念だなチック！！まだまだバトルは終わっちゃいねぇよ！！」

何と先ほどの“いわなだれ”によって倒れたと思われたヒイロ先輩の声が部室内に響いたのだ！！

当然のことながら、観客席はざわざわとし始めた。

「え！？この声はヒイロ先輩！？まさか……いや、そんなことないよ！だってさっき確実に命中した……あ！！？」

チックは自分が発動した“いわなだれ”の落下地点を見て驚いてしまった。

それはつい先ほどまでそこで倒れていたはずのヒトカゲ……、ヒイロ先輩の姿が消えていたからであった！！

「ま……まさか、どうして！！？あっ！もしかして自分のダミーを作り出す“みがわり”を使ったのか！？」

チックはここに来て、自分の精密な戦術が崩れかかっているのを感じた。

確かに今まで自分のディフェンスしながらの戦い、その一手一手は“ヒイロ先輩”に確実にダメージを与えて、じわじわと自分の勝利へ導いていた。

だが、それはちゃんと“ヒイロ先輩”にヒットしていることが必須条件。でなければ全て空振りで終了してしまう。

「もし仮に、僕を相手にバトルをしていたのがヒイロ先輩そっくりのダミーだったとしたら……、僕は知らず知らずにヒイロ先輩の作戦に、巻き込まれていたってことなのか！？」

チックは一気に動揺を浮かべた。そんな彼に対してヒイロ先輩は、

「その通りだチック！そしてその作戦はすでに実行に移されているんだぜ！“ほのおのうず”！！」

「な！いつの間に！！？」

チックは驚いた。いつの間にかヒイロ先輩は自分をしっかりとガードする“ひかりのかべ”さえもまるごと飲み込むような灼熱の炎を放ったのだから!!

「くっ!!で……でもそんな攻撃で僕の“ひかりのかべ”は壊れませんよ!!」

この大技にチックはさらに焦りを募らすものの、ヒイロ先輩に警告した!

だがヒイロ先輩はそんな彼にフッと余裕の笑みを浮かべた。

そして……!!

「普通に考えればそうだろうな!……だがオレの真の目的はこれだ!!“にほんばれ”!!」

「“にほんばれ”!?ほのお技をパワーアップしようというのか!?」

チックは慌ててそうはさせまいと“じんつうりき”で、ヒイロ先輩の動きをコントロールしようとしたが……、

ピキッピキッピキッピキ……パリーーーン！！

「なっ！？“ひかりのかべ”が……！？」

「そいつは単発的な攻撃には絶対的自信があったらしいが、今みたく継続技には耐え切るのは困難らしいな！まして“にほんばれ”でパワーアップされた今じゃあな！！」

ヒイロ先輩がビシッと指さす！！

“ひかりのかべ”が壊れた今、炎が囲むターゲットはチック本体！！

「まだまだ……僕には脱出出来る！“そらをとぶ”！」

チックはそれでも炎から逃れようと、上空へと飛び立った！！

「この時を待ってたぜ！これで決まりだ！！“でんじは”！！！」

「うわ！！」

ヒイロ先輩が叫んだ！！

次の瞬間、上空に逃れようとしていたチックは、反撃することも回避することも出来ず、“でんじは”によって動きを封じられてし

まった！

「そして……“かみなり”！！！」

見事な逆転劇だった。

本来“ひざしがつよい”この状態だと“かみなり”はターゲットに当てるのは困難なのだが、

ピシャーーン！ピシャーーン！ピシャーーン！！

「うわぁぁぁぁぁ！！」

普段から電撃を使いこなしている証拠なのだろう。

“でんじは”で一瞬動きを奪ったチックに、この大技を鮮やかに決めたのであった……。

パチパチパチパチパチパチ！

「ありがとうございました！すっごく楽しかったです♪」
「ああ、こっちこそ良いバトルをありがとうなチック！！」

激戦を終えたチックとヒイロ先輩は、拍手の中で互いに握手を交わした。

互いに非凡な能力……“天才”という名の持ち主同士のバトル。

だがこのバトルを通じて観客に伝わったのは、この“天才”とは人一倍も二倍も……それ以上の豊富な努力を重ねてきた者だけが得られる感動なのだと言うことだった。

「ナイスバトルだったなヒイロ！」
「ホント、かっこよかったよ！」
「アニキ～～！オイラ感激しました～！」

バトルフィールドからチックとともに戻ってきたヒイロ先輩に、がばねさんやリリーちゃん、そしてダイル先輩が祝福の言葉を送る。

「ああ、みんなが後押ししてくれたおかげさ！……ところであさポケナインの姿が見えないけど？」

ヒイロ先輩は笑顔でそれに応えたが、すぐに異変に気がついた。

「ああ……実はな、言いづらいことなんだが……、ヒイロたちがバトルしていた間に、突然カゲっちが姿を消したらしい」

「え！？カゲっちが！？」

「何でそんないきなり！」

ラッシュ先輩の言葉に驚きを隠せないヒイロ先輩とチック。

『さっきまであんなに楽しそうにしていたのに……一体どうしたって言うんだ！？』

ヒイロ先輩は自分と同種族の“彼”の行動に動揺を隠せない。

「とりあえずキュウコン監督はじめ、あさポケナイン全員でカゲっちを探しに行ったんだけど……」

サクラ先輩が不安そうな表情で話を続けたが、

ダッ！！

「おい、ヒイロ！どこ行くんだ！？」

なんとヒイロ先輩は、突然バトル部部室の扉へ走り出したのだ！！

「オレも探しに行ってきます！いきなり姿を消すなんて尋常じゃないですよ！」

ヒイロ先輩は真剣な表情を浮かべ、ラッシュ先輩に意志を伝える。きっと話を聞いているうちに、行動せざるを得なかったのだろう。一言ラッシュ先輩に言い残すと、そのまま外へと姿を消したのだった。

「僕も！カゲっちは友達だからいてもたってもいられないです！！」

もちろんチックも後を追うように同時に意志を伝えた！

『全く何だって言うんだよカゲっち！！おまえ……あれほどオレのバトルを楽しみにしていたじゃねぇか！！？』

ヒイロ先輩はバトル部部室を飛び出した後、“彼”を探しながら憤りを感じていた。

『何か胸騒ぎがするぜ……。ジュジュの件と言い、アイツの件と言い、まさか……オレの不幸体質がアイツやアイツの仲間に影響し始めたって言うんじゃねぇだろうな……！とにかくまずは何とかして、アイツを見つけ出すまでだ！！』

ヒイロ先輩はどうにか最悪の事態だけは免れて欲しいと願いながら、無我夢中で駆け抜けて行った……。

第８６話：「逆転勝利への方程式～努力＋身体能力＋戦術＝天才？～」の巻（後

チック：「“みがわり”で一瞬だけ僕の気をそらすなんて考えられなかったよ♪でもすっごく楽しかった～♪」

ヒート：「ナイスバトルだったと思うぜ」

ラッシー：「次回はあさポケナインのムードメーカーがバトルをするぜ♪」

第８７話：「ピカっちの……“彼”のための決心」の巻（前書き）

チコっち：「もう！いきなりいなくなるなんて、聞いてないわよそんなシナリオ！！」

ヒート：「とにかく何としても見つけなきゃな！」

ラッシー：「慌ただしくなりそうな第８７話プレイボール！！」

第87話：「ピカっちの……“彼”のための決心」の巻

チックとヒイロ先輩のバトルが終了した頃、ポケハン学園の校舎内では慌ただしく行動するポケモンたちの姿があった。

「どう、ヒート？そっちの教室にカゲっちくん……いた？」

悲しそうな表情をしたラプラス……ラプ先輩が、自分に近づいてきたリザードン……ヒート先輩に話しかける。

「いや、ダメだ。一通り見てきたが、どこにもいねぇよ。ラッシーはどうだ？」

ラプ先輩に話し掛けられたヒート先輩が唇を噛み締めるように報告する。

実は彼らは後輩であるピカっちの恋人が失踪したということを知り、捜索に協力していたのだ。

「ダメだ。ラージと一緒に片っ端から見てきたんだが、見つからなかった……」

ヒート先輩に話し掛けられたバクフーン……ラッシー先輩も明るいとは言い難い表情で力無く答える。

「一体どこ行っちまったんだ？」

彼らとともに、捜索活動を行っているラグラージ……ラージキャプテンもどこかうつむき加減だ。

「とりあえず探そうぜ。こんなところで話し合ってもしょうがないからな」

「それもそうだな」

「そうね」

「ＯＫだ。絶対にみつけような！」

４匹のポケモンはそう言うと、また散らばって捜索活動を再開した。

「カゲっち～！」

「カゲっちく～ん！！どこなの～！？返事してよ～！！」

一方、学園の敷地内を捜索していたのはピカっちとチコっちだった。

きっとすぐに“彼”は見つかる……。

その予想に反してもどかしいほど、2匹は“彼”の姿を見つけることが出来なかった。

やがて元気を無くしてきたのか、ピカっちがうつむいてしゃがみ込んでしまった。

「お願い……。お願いだからカゲっちくん……返事してよ……。お願いだから……」

ポタポタと流れる涙の一粒一粒に、彼女の切なる気持ちが表れているようだった。

「ピカっち……」

ここまでピカっちを励ましてきたチコっちも、どんな言葉をかけたら良いのか迷っていた。

と、そこへ遠方から声が聞こえてきた。

「お～い、ピカっち～！チコっち～！！」

『！？』

ピカっちとチコっちは一瞬笑顔を見せたが、またすぐにしょんぼりしてしまった。

彼女たちの前に現れたのは、カゲっちと同じヒトカゲ……ヒイロ先輩だった。

「良かった。ようやく合流できた……」

「ラッシュ先輩から聞いたよ、カゲっちがいなくなったんだって！？」

ヒイロ先輩の後を追ったチックも現れて、ピカっちたちに状況を聞いた。

「そうなの……。ずっとそばにいたのに、気がついたら……」

ピカっちが言葉を詰まらせながら、ついに泣き出してしまった。

「だ……大丈夫だ！きっとアイツのことだ。ピカっちのことを嫌って起こした行動じゃないはずだ！それにオレも探すの手伝う！その方が早く見つけ出せるかも知れないからな！！だからピカっち泣かないでくれ……」

ヒイロ先輩は多少あたふたしたものの、ピカっちの手を取って彼女に元気を出すように促した。

ピカっちも涙目ながらコクっと小さく頷き、ゆっくり立ち上がった。

「ありがとうございますヒイロ先輩。ピカっちを励ましてピカっち……カゲっちのこと本当に好きだから、何と言うか……カゲっちの様子が少しでも変だと、自分を責めちゃったり、余計な心配をしちゃったりするくせがあるんですよね……」

少しして、チコっちは自分たちと共に行動してくれたヒイロ先輩に感謝の気持ちを伝えた。

「そ～んな暗い顔するなよ。オレは全然気にしてないし、それに困っているヤツをほっとくなんて出来ないからな。自分の手で助け

ることが出来るなら、どんなことでも手助けするぜ？」

ヒイロ先輩が笑顔でチコっちにそう答える。

「そんなことより、とりあえずカゲっちを見つけ出そうぜ？こんな良い友達を心配させるダメダメくんをな！」

と、ヒイロ先輩が元気よく先陣を伐ろうとしたその時である。

《連絡します。あさひポケ中学野球部のピチカさん。練習バトル第６回戦を行いますので、至急バトル部部室まで戻ってください》

「あっそうだったわ。次はあたしの出番だったっけ……。でも、どうしよう……？」

突然の連絡に困った表情になるピカっち。

そんな彼女に対してヒイロ先輩は、

「行って来いよピカっち。色々と不安な気持ちはあるかも知れないけど、ちゃんとバトルはこなした方が良いぜ？」

「でもそれじゃカゲっちくんに会えない……」

ヒイロ先輩の言葉に小さく悲しそうに返事をするピカっち。

するとヒイロ先輩はポンとピカっちの肩を優しく叩いた。

……そして一言、

「ピカっち……。オレは多分カゲっちだって同じ気持ちだと思う。きっと大好きなおまえが一生懸命頑張っている姿を、カゲっちは見たかったハズだぜ？」

「じゃあなんで……、なんでいなくなっちゃったりする必要があったんですか！？」

ヒイロ先輩に泣きながら質問するピカっち。

そんな彼女にヒイロ先輩は話を続けた。

「オレには推測しか言えないけど、アイツは……カゲっちはピカっちの前で、自分の元気が無い姿を見せたくなかったんだと思う。そんな姿を見せたりしてピカっちが不安になったり、心配する姿を見るのが怖かったんだと思うんだ」

ヒイロ先輩の言葉に続くように、チコっちも話を始めた。

「そうね。カゲっちってああ見えて結構自分のことで、あたしやピカっちに迷惑かけたくないって感じているはずよ？……だってバトルが嫌いになっちゃったきっかけだったあの事件のときも、ブースのことで一番自分が辛くて泣きたかったハズなのに、一番最初に明るく振る舞っていて……。早くあたしたちに元気になってほしい

って強がっていて……正直バカじゃないの？って思ったわ……」

チコっちは“彼”の一生懸命過ぎる点に、ひとしお感じるものがあったのかもしれない。

さらにそばでみんなの話を聞いていたチックも続けて、

「そうなんだよね。カゲっちって僕たちに言えないこと、たくさん持っていると思うんだ。言ってしまえば楽になっちゃいそうな辛いことや悲しいこと……。だって僕、彼から楽しかったときの話しか聞いたこと無いもん……」

それはきっと本当は言いたいのだけど、言ってしまうと自分が辛かったように、友達も辛い気持ちになってしまうのが嫌だったのかもしれない。

その“彼”の行動にピカっちは静かに思い出すことがあった。

それは以前クラスメイトのオタチ、オーちゃんの言葉にカゲっちが自分のドジを反省しているときに、彼女自身が彼に伝えたメッセージだった。

完璧なポケモンなんていない……。必ずどんなポケモンにも欠点がある……。でも欠点があるからお互いにカバーしあって生きていく……。

『そうよね。カゲっちくんはあたしがちょっとしたことで、心配したり不安になっちゃう欠点を知っているから、いつも元気な姿しか見せたくないのよね……。楽しいお話をした方が元気でいられるって知っているから……』

次の瞬間、彼女は決意の表情を固めた。

“彼”は見えない呪縛の出口を探し求めて、必死に自分の心と闘っている……。

本当だったら自分も“彼”がその出口を見つけられるように、後押ししてあげたい……。

それが大好きな“彼”のために自分に出来る最善の行動だと思ったから。

『でも、今は違う。カゲっちくんのそばじゃなくたって、カゲっちくんを勇気付けることってたくさんあるはず……。きっと今のあたしにそれが求められている最善策なんだわ……』

ピカっちは目をつぶり、心の中で自分のそばから姿を消してしまった、大好きな“彼”の心に届けるようにして話しかける。

『カゲっちくん……。あたし、すごくバトルって一度も勝ったこと無いから……本当は今、これから自分がどうなるのかすごく不安な気持ちでいっぱいなの。……だからね本当はあなたの声援で、少しでもその不安な気持ちを忘れたかったわ……』

ピカっちは大好きな“彼”がそばにいてくれる。

そばにいて自分を優しく見守っていることをわかっているだけでも、自分の不安な気持ちは無くなると感じていた。

『でもそんなこと言ったら、カゲっちくんはもっと不安なのよね。だってあたしやチコっちちゃん、それからブースくんを守ろうとして……、ポケモンバトルが出来なくなっちゃうほど心がボロボロに

なってしまったのだから……。本当はもっと泣きたいのに、あたしの元気を奪いたくないからずっと我慢しちゃって……。だから今回は、あたしがあなたの力になれるように、一生懸命バトルをするわ。……ちゃんと見ていてね』

ピカっちは今まで“彼”から受け取った勇気に負けないくらいの勇気を、今度は“彼”に送れるように、彼が嫌いになってしまったこの“ポケモンバトル”で最高の結果を残すことを誓った。

彼女はその後息つく間も無いまま、クルッと体をバトル部部室方面へと向けた。

さらに背後にいるヒイロ先輩に、

「ヒイロ先輩、もしカゲっちくんを見つけたら……彼に伝えてください。“あたし……カゲっちくんのこと、大好きだから一人で悩まないで。あなたが苦しいときは、あたしも一緒になって解決するから……。だからそのかわりずっとあたしのそばから離れないで”って……」

この想いを言葉にしている間、彼女は確かに小刻みに震えていた。

そしてそのまま一心不乱に全速力で、自分の行かねばならない場所であるバトル部部室へと駆け出して行ったのだった……！

「わかった。ちゃんとその想い、アイツに伝えてみせる!!だから安心して頑張るんだ……ピカっち!!」

ヒイロ先輩はそうつぶやくと、チコっちとチックとともに再び“彼”の姿を探し始めたのだった。

第87話：「ピカっちの……“彼”のための決心」の巻（後書き）

ピカっち：「見ててねカゲっちくん。あたし、あなたのために頑張るから……。ちゃんと応援してね？」

チコっち：「次回はいよいよ第6回戦の始まりよ！みんな、ピカっちを応援して！！」

第８８話：「苦しみから抜け出すヒント～弱いピカチュウが見せる小さな勇気～」

ピカっち：「今回からはあたしの出番ね。正直バトルは不安だけど……」

チコっち：「あのダメダメくんをシャキっとさせるのはピカっちしかいないわ！全力で戦いなさい！！」

ラプ：「それでは～！ピカっちを後押しするために～ピカっちファンファーレから～！！せ～の！！」

《応援歌》
前奏）時を超えて輝く光

優しい笑顔が光る
朝日のような
小さい勇気を今出して
未来を目指そう

ナイン：『勇気を見せろ！ピカっち！！』

ピカっち：「みんなありがとうございます！それじゃあ第８８話プレイボールよ♪」

第８８話：「苦しみから抜け出すヒント～弱いピカチュウが見せる小さな勇気」

「次は俺の出番かぁ！ようやくって感じだな！激しいバトルばっかり見ていてウズウズしていたんだぜ！！」

練習バトルの第５回戦終了後、青いゴーグルを身につけて、青いスカーフをマントのように巻いているピチュー……ライトくんは、ヒイロ先輩とチックが観客席へと戻ったとほぼ同時に、次の自分の出番に備えるべく、尋常でない速さでバトルフィールドへ姿を現していた。

「でもなぁ、対戦相手の……ピカっちってヤツがまだ来てないみたいだな。あ～！早くバトルしてぇ！！」

そう、実は対戦相手のピカっちがまだこの場にいなかったため、彼の大好きなバトルは全く始める様子を見せなかったのである。

この小さな“異変”に違和感を感じ始めたのだろうか、観客席のざわめきも徐々に大きくなりはじめていた。

「遅いですね……ピカっちちゃん」

「しょうがないと言えばそれまでかも知れないが、カゲっちが姿を消してしまったんだ。正直バトルどころじゃないって感じだよな」

「それじゃあこのあとの練習バトル……中止になっちゃうの！？」

一向に姿を現さないピカっち、それからあさポケナイン、さらにヒイロ先輩を気にかけるダイル先輩とがばねさん、リリーちゃん。

一方、このあさポケナインに走った衝撃にキノガッサさんは、“彼”の女の子に対する態度にいろんな意味で怒っていた。

「ダメだなぁカゲっちも。メチャクチャカワイイピカっちちゃんを心配させるなんて。代わりに俺がピカっちちゃんのそばにいてあげたいくらいだ！」

まぁ、恐らくキノガッサさんの場合はお得意ともいえるナンパぐせが、発動したせいで“彼”に怒っているのが8割を占めているに違いないが。

「まあまあそう言わないでキノガッサ。きっとカゲっちくんだって何か理由があったんだよ。トイレから戻れなくて迷子になったかも知れないし……」

ラグさんはまさか、“彼”のこの行動がピカっちに対しての恋人としての想いが、引き起こしたものだとは思わなかったに違いない。

何せキノガッサさんいわく、“ラグは恋心とは無縁なほど、女の

子の純粋な気持ちがわからない”らしいのだから。

「せめてピカっちちゃんだけでも戻って来てくれたら良いのに……」

「まぁそれだけカゲっちくんを想っているって証拠ですわ。ここはとりあえず様子をみてみましょう」

「それもそうだな。ピカっちはしっかりした感じだし、さっきの連絡放送でちゃんと戻ってきてくれるだろう」

ざわめく観客席の様子をやや心配な表情で見つめながら、話し合いを行っていたラッシュ先輩、サクラ先輩、レイラ先輩。

と、そこへ……！

ガラガラガラ！！

突然勢いよく開いた扉に、何事かと言わんばかりに皆が注目した。

「はぁ……はぁ……。よ、ようやく戻って来られた……」

扉から姿を現したのは、これから行われる練習バトル第６回戦に出場するピカっちだった。

「ピカっちちゃん、戻ってきたんだね！みんな君たちあさポケナインのことを心配していたところだったんだ」
「そうだったんですか……。はぁ……はぁ……本当に……バトル部のみなさんにはたくさん迷惑かけて、すみませんでした……」
自分の元に近づいてきたダイル先輩の言葉に、申し訳なさそうにするピカっち。
「こっちなら大丈夫だ。それよりも……カゲっちは見つかったのか？」
「……いいえ。まだ見つかってません……。本当は一緒になって探したかったのですが、ヒイロ先輩のすすめで、バトルをするために戻ることにしたんです」
ラッシュ先輩の質問に、息を整えながらピカっちが淡々と答える。
「そうなんだ……。本当にカゲっちくん……どこ行っちゃたんだろうね？」
「何も無ければ良いんだがな……」
ピカっちのションボリとした姿に、リリーちゃんとがばねさんも心配そうにする。
「わかりません。……でもあたしは彼を信じています。またあた

しのそばに戻ってきてくれるって……。だからあたしもションボリしたりしないで、今自分のやるべきことを頑張ろうって思うんです」

「ピカっち、よく言ったわ。それだけの気持ちがあれば、きっと彼にも届くハズよ。……さぁ、その気持ちを忘れないうちにバトルフィールドへ向かうと良いわ」

サクラ先輩の言葉に大きく頷いたピカっち。

その表情には、決心と勇気が満ち溢れていた……。

「さぁ、いよいよここから練習バトルも後半戦突入だ！怒涛の嵐が吹き荒れるのは間違いない！！」

「この試合はピカチュウのピカっちと、ピチューのライトという、ともに同進化系同士の顔合わせだ！！どんなバトルを見せてくれるのか楽しみだ！！」

実況席の言葉に待ってましたと言うように、観客席が大きく沸き立った！

そんな大歓声のなか、バトルフィールドでは、

「ヨッシャー!!ようやくバトルが出来るぜ!!ピカっち、ガンガン俺は戦うぜ!!よろしくな!!」
「あたしも精一杯戦うわ。お互い一生懸命頑張りましょうね♪」

と、対戦を行う2匹のポケモンたちが開戦前の握手をしていた。

「それでは両者とも、準備は良いな?これより、練習バトル第6回戦……はじめ!!」

ゼルスコーチの言葉で、ピカっちの様々な想いをぶつけるバトルが始まった!!

「まずは俺から攻撃させてもらうぜ!!そぉぉら、“アイアンテール”!!!」
「えっ!ライトくんって“アイアンテール”が使えるの!?」

まず先手を撃ちに出たのはライトくんだった!!

バトル開始とともに、いきなりピチューとしては難易度の高い“アイアンテール”をピカっちめがけて振り落としたのだった!!

ピカっちはまさかの大技に思わず驚いてしまったのだが、このあとさらに彼は皆を驚かせることが起こした！！

「なんだ！？あのピチュー、今まで見てきたヤツらよりもはるかに素早いぞ！？」

「本当にあの子……ピチューなの！？」

スバルさんとプリムラさんが揃うように驚きの声を発した！

「こういうときどうすれば良かったんだっけ……？えっとえっと……」

ピカっちはオドオドした表情を見せて何とか対処法を見出だそうとしたが、

ドカッッッ！！

「キャァァァッ！！」

その間わずか０．５秒という超早業だった！！

丸腰状態のピカっちは、たまらず地面に強くたたき付けられてしまった！！

「ピカっち、これじゃ一撃で勝負が決まっちまうぜ？ここまで待たされたから今の俺はバトルがしたくてしたくてたまらないんだ！！」

たたき付けられたピカっちを指さして、ライトくんは余裕の表情を見せる。

そう、じつは彼はピチューでありながら、ピチューの種族的な常識を覆すような並外れた能力を持っているのだ。

「逆にピカっちはあまりバトルに慣れているって感じには見えないな。ライトの動きを見抜けなかったとはいえ、オドオドと対処出来てないのは厳しいところがあるぞ」

ピカっちの動きにガル先生が厳しいコメントを残す。

一方、そのピカっちはと言うと、

『やっぱりあたしにバトルは難しいわ。どうしても相手に圧倒されちゃって、頭の中が真っ白になっちゃうわ……。こんなことで、ちゃんとカゲっちくんとの“誓い”を果たせるのかしら？」

と、改めて自分の実力不足に気付かされ、心が折れそうになって

いた。

それでも今の彼女はこのまま引き下がるわけにはいかなかった。

『でも後悔だけはしたくないわ！今自分の出来るベストなことを頑張らなきゃ！！』

ピカっちは不安な気持ちを消し去るように、自分を奮起させようとしていた。そして、

「ライトくん、あたしはすごく弱いかもしれない。でも……このバトルだけは……このバトルだけは今までの自分の経験の中で、一番最高なバトルにする覚悟であなたにぶつかってゆくわ！！」

ピカっちはもう一度自分に言い聞かせるようにして、強敵ライトくんに対しそのように宣言したのだった！

時を同じくして、あさポケナインのみんなから姿を消してしまった僕は、突然自分の前に現したポケモンと相対していた。

「キュ……キュウコン監督！？どうしてここに……？」

僕の前に現れたポケモン……それはあさひポケ中学野球部を率いるキュウコン監督だった。

「練習バトルを行っているときに突然とあさポケナインのメンバーがいなくなったら、簡単に放っておくにはいかないだろう？それとも私がここにいるのが不満なのか？」

「いや、べつにそういうわけじゃありませんけれど……」

フッと静かに笑みを浮かべたキュウコン監督に対して、僕は小さくつぶやいた。

「ところでバトルを観戦していたときから様子が落ち着かないようだが、段々とバトルに恐怖感を思い出してきたのか？」

「は……はい」

さすがはキュウコン監督。すでに僕の失踪するまでに苦しむ理由を見抜いていたようだ。

「そうだろうな。一度味わった悲劇を乗り切っていくのは簡単なことじゃない。それに“がんばりや”な君のことだ。みんなに心配かけまいと、悩みを抱えてしまうのは仕方無いことだと思う」

キュウコン監督が淡々と話を続ける。

それに対して僕は、

「か……監督！教えてください！！僕は……僕はこれからどうすれば良いのですか！？このままじゃ、自分の出番がきたときにみんなを不安にさせてしまう！！」

と、涙をあふれさせながら藁にもすがるような気持ちで、自分のメンタル面の弱さを克服する術をキュウコン監督に求めた。

「カゲっちよ、よく聞くんだ。メンタル面の弱さを克服するには、とにかく“頑張らない”ようにするんだ」

「“頑張らない”ように……？そんなことしたらますます迷惑かけてしまうじゃないですか！？変なこと言わないで下さい！！もういいです！！」

僕はキュウコン監督の言葉にガックリしたのか、大泣きをしてしまう。

だがそれでもキュウコン監督は冷静に、

「まあまあ落ち着くんだカゲっち。君は相手を想いやる気持ちが、人一倍強い方だと思う。それはすごく大切なことなのだが、時にそれが強すぎるがあまり、“頑張りすぎて”自分の行動が出来なくなってしまうこともあるんだ」

キュウコン監督いわく、“自分がこうしなきゃみんなに悪影響が出てしまう。だからもっと頑張らなきゃ！”などと、ただでさえ不安定な自分の心に、もっと良い行動が出来るようにと考えてしまうと、余計に冷静になれず悪い結果へとなってしまうと言うのだ。

「だからなるべく“頑張らない”ようにするんだ。そうすれば今持っている不安な気持ちも消えていくに違いない。そうすれば自分がバトルが出来なくなってしまった本当の理由がわかるかもしれないぞ」

じつはキュウコン監督、野球の練習のときにも不振に苦しむチームメイトにこの言葉を話すことがあるという。

「特に打撃不振のメンバーにな。打撃不振のときには普段は考えないようなことで、頭の中をいっぱいにするのが多くあるんだ。相手の配球を読んだり、ヒットで無くても得点が入るような場面で無理にヒットを求めたり……。それもチームのために自分一人で“頑張りすぎている”のが一因なんだ。打撃が好調のときには、例え自分がアウトでも続く打者が打ってくれると“頑張らない”ように考えるからうまく打てるんだ」

キュウコン監督はジュジュ先輩も“自分一人で決めなければならない”という意識が強すぎるのが、結果的にチームに悪影響を与えているのだという。

「だからカゲっちも一生懸命頑張るのは良いが頑張りすぎるのは禁物だ。やり過ぎはやらないのと同じなのだから」

キュウコン監督の言葉のその言葉を重く受け止めた僕。

『確かに……僕も辛いことが起きたときには、自分一人で何とかしなきゃという気持ちが出てきたっけ……。本当はみんなで頑張れば簡単に乗り切れる苦難を、自分だけで乗り切ろうとして……。もっと周りを見渡さなきゃいけないってことなのかな？』

僕はこの“頑張らない”というのも、一つのチームプレイなのかもしれないと感じていた。

でも僕にはまだわからないことがあった。

「でもキュウコン監督。どうして“頑張らない”ことで、僕がバトルが出来なくなった本当の理由がわかったりするんですか？」

そう、さっきの話から推測するに、キュウコン監督は僕がバトルが出来なくなったのは、ブースを守れなかったことが原因ではないと感じているみたいなのだ。

「それはな、君が先ほどの練習バトルを観戦していたときから、バトルに関しての思考を働かせていたからだ。仮に本当にバトルをしたくないと言うならば、そこまで相手の行動を分析したりすることはそんなにあることでは無かろう。私が思うに、君は大切なものを守れなかった原因であるバトルにトラウマを感じているのではない。きっと、他の全く別の理由にトラウマを感じているのだと思う」

キュウコン監督はハッキリと答えた。

「じゃあその理由って一体!?」

「それを見つけるにはさっきも言ったように練習バトルから逃げずに、ちゃんと向かってゆくことだ。いつまでもここにいては意味は無いぞ」

キュウコン監督は僕にそう言い残すと、またどこかへと歩いていってしまった。

『キュウコン監督……あなたはすごく不思議な人ですね。でもなんだか、力が沸いて来ました。そうですよね、どんな理由でもここでずっと立ち止まっていたら答えなんて見つかるわけが無いんだ……』

キュウコン監督が立ち去ったあと、僕は暗闇から抜け出し、前を向くことが出来たような気がした。

『よし、探しにゆこう……僕を見守っているみんなのために……そして、自分のために……！！』

僕はいつの間にか、忘れかけていた熱い気持ちをようやく取り戻していた。

一方、同じように“決意”を秘めたピカっちのバトルを再び見てみよう。

「あたしだって頑張れば……えい、“でんこうせっか”！！」

バトルにあまり慣れてないピカっちは、得意分野の“速さ”でライトくんに立ち向かう！！

「スピードでかきまわす作戦か！でも俺のこの“アイアンテール”に勝てるかよ！！」

ライトくんは得意技の“アイアンテール”をもう一度ピカっちにぶつけようとした！！

ドカッッッッ！！

「くっ！！」

「キャッッッ！！」

ライトくんはやや体勢を崩されたものの、動じることなくピカっちにクリーンヒットさせることに成功した！！

「あ～あ。なんだか厳しいねピカっちちゃん……。経験の差が思い切り出ているよ……」

「そうだな。力でライトを振り切るのを無理だと方向転換したのは良いと思うが、スピード技なのに動きを完全を読まれてしまって、別の技を決められてしまうのは威力が足りない証拠だ。でもバトルって……こんなに力量差が出来るものなのか？」

リリーちゃんとがばねさんもため息混じりに、この圧倒的な力量差に厳しさを感じていた。

「イタタタタ……。自慢のスピードで負けちゃうなんて……、ピカチュウとして情けないわ。このまま一回も技が決められないまま終わっちゃうかもしれない……」

ピカっちは涙声になりながら、諦めの心を除かせてしまう。

「でもまだまだ諦めたくないわ！！いつもカゲっちくんに勇気をもらってきたから……！だから圧倒的な差で負けても良いわ……一生懸命な姿を見せられたら！！」

そう言うとピカっちは赤い頬から強力な電撃を繰り出した！！

第８８話：「苦しみから抜け出すヒント～弱いピカチュウが見せる小さな勇気～」

カゲっち：「なんだろう。キュウコン監督の言葉って、あっという間に心に響くんだ……。この気持ちで部室に戻ろう」

ピカっち：『苦しんでいるカゲっちくんへ、あたしの想い……伝わると良いわ……』

第８９話：「圧倒的に負けたとしても……～弱いピカチュウが見せる小さな勇気

ピカっち：「守り人先生のキャラ、ライトくんってすごく強いけれど、なんとかして勝てるように頑張らなきゃ」

チコっち：「その心意気よ！みんなも応援してるわよ！」

ピカっち：「ありがとうチコっちちゃん。それじゃ第８９話プレイボール♪」

第８９話：「圧倒的に負けたとしても……～弱いピカチュウが見せる小さな勇気

バチバチバチバチ！！

ピカっちの赤い頬から放たれた電撃は、彼女がバトルに慣れてはいないとはいえ、さすがはピカチュウと思わせるような高い威力を感じさせた。

一方その電撃の目指す標的であるピチューのライトくんは、

「遠距離タイプの“１０まんボルト”ってところか。でも俺には関係ないぜ！！“でんこうせっか”！！」

と、突撃型の技でピカっちへと勢いよく攻撃していく！！

「そして、もう一回“アイアンテール”！！」

「アッ！！」

よほど得意な技なのだろう。ライトくんは“でんこうせっか”で“１０まんボルト”を回避しながらピカっちの懐へと突撃し、そのままグワッ！！としっぽを振り落とした！！！

ピカっちはまばたきした間に起きたこの一瞬の速攻に、成す術も

無くまともに攻撃を受け、またもや倒れてこんでしまった！

『つ……強いわ……。どうして……どうして、あたしの技がうまく当たらないの！？いくらライトくんが素早いからって実力があるといっても……、だけど一回も当たらないなんて……』

ピカっちはこの一方的な試合展開を、どうしようも出来ない自分が歯がゆくて悔しくてしょうがなかった。

「お得意の電撃もダメだったみたいだな。さぁ、次はどうするのかな～？」

ピカっちの前に立ちはだかる巨大な壁、ライトくんはまだまだ余裕たっぷりな笑顔で彼女の次の行動を誘う。

「そ……それなら、しっぽで“たたきつける”わ！！」

対するピカっちは「何とか技を当てたい！」という必死な想いで、不慣れな打撃技を使いライトくんへと立ち向かう！！

……しかし、

「あらよっと！甘い！甘い！それじゃあ一生かかってもヒットし

ないぜ！！」

その必死な想いをあざ笑うかのように、ライトくんは“こうそくいどう”でこの技をヒョイヒョイと避けてゆく！！

この状態が続くこと5分。

「はぁ……はぁ……もう……ダメ……」
「あ！！」
「ピカっちちゃん！！？」

弱々しい声を出した後、慣れないバトルのせいでスタミナが限界を向かえたのか、ピカっちは目を回しながらバタリと、地面へ倒れてしまった。

これを見た観客席は一斉にどよめき始め、さらに審判であるゼルスコーチも、

「ピカっち戦闘不能！！よってこのバトル……ライトの勝利！！」
「ヨッシャーー！！」

と、判定を告げた！！

この結果を受け、ライトくんは喜びの表情を目一杯浮かべた。

「なんてこった……。ピカっちの表情は本気だった。カゲっちに対する想いも乗せて……気持ちは相当だったはずなのに……」

「ほんの一撃も決まらなかったなんて……」

「これが、バトルの世界の厳しさ……なのかな？」

スバルさん、ラグさん、そしてプリムラさんが、残念そうな表情で一言ずつ話した。

大切な“彼”のために、“決意”を秘めてバトルに挑んだピカっち。

だが彼女は結局最大の武器である電撃も、スピード技も、それから打撃技も……すべてにおいて、実力者ライトくん相手に何もすることが出来なかった。

加えて、大好きな“彼”のために“勇気”を届けることが出来ない、自分の力不足に情けなさだけが残ってしまった。

「ピカっちちゃん……悔しいんだね。勝ち負けよりも、自分がカゲっちくんに見せたかった、“勇気”を表現できなった自分が……」

「そうだよな。カゲっちを助けたい気持ちが、一番強いのは間違いなくピカっちだったんだからな。それなのに自分の手で何も出来ずに終わってしまったんだ。ピカっちにとってみれば、これ以上の“敗戦”は無いと思うな」

ラグさんとがばねさんは、ピカっちのこの姿に挫折を感じ取っていた。

その証拠に彼女はバトルフィールドからしばらくの間、起き上がることが出来なかった。

『カゲっちくん……。あたし……いっつもカゲっちくんの力になれなくてごめんね……。あなたの求める笑顔になれなくて……、また心配かけちゃうあたしって、一番ダメなピカチュウよね？あなたを支えるなんて言っちゃったけれど、一回も約束……果たせなくてごめんね……』

ピカっちは自分がふがいなくてしょうがなく、自らを責め立てていた。

そのことを感じていたのだろうか、バトル部部室全体がどこか気まずい空気に包まれかけた……が、その時！！

バターーン！

部室の扉が勢いよく開きだし、一斉に外の光が中へ差し込んできた！

「！！？」
「あっ！？」
「も、もしかして……！！」

扉を開いたそのポケモンの姿に、皆が驚きの声を出した。

そして、誰よりもそのポケモンを愛しているピカっちは、じっと視線をずらすことなく見続けた。

そして一言……。

「カ……カゲっちくん？戻ってきてくれたの……？」

と、突如あさポケナインから……そして大好きなピカっちのもとから姿を消してしまった、ヒトカゲの僕へ聞いたのだった。

「カゲっち！戻って来たんだな、心配したぞ！みんなお前がいなくなったと聞いて、心配になって探しに飛び出していたところだっ

たんだ！」
「とりあえず無事な感じだな！一体どこ行ってたんだ！？」
「ヒイロくんやあさポケナインのみんなとは？みんなとは会わなかったの？」

僕の姿を見るやいなや、ラッシュ先輩とがばねさん、さらにリリーちゃんが嬉しそうに質問攻めをした！

「えっと……みなさんに心配かけて、本当にすみませんでした。じつは……まだヒイロ先輩やヒート先輩には会ってません。僕は連絡の放送を聞いて、ピカっちのバトルを見に戻ってきたんです」

僕はいきなりの質問攻めに困惑したものの、落ち着いた口調でそのように答えた。

「まあ！そうでしたのね。それでしたら早く放送でみなさんに知らせないとなりませんわね」

事実を知ったレイラ先輩は、そう言い残すとポケハン学園全体への連絡放送という形で、未だ僕を探しているたくさんのメンバーに朗報を届けることにした。

「ところで……バトルはどうなったんですか！？」

とりあえず騒動を一区切りすることに成功した僕は、期待の眼差しで、そばにいた御羅不猟さんとスバルさんにピカっちのバトルのことを聞いてみた。

「カゲっち……戻ってきていきなりショックを受けてしまうかも知れないが、よく聞いてくれ」

「こっちの練習バトル第６回戦は……すでに終わっているんだ」

「終わってしまった……んですか？」

僕は二人の言葉に声のトーンを落としてしまった。

「それで……ピカっちは！？ピカっちは勝ったんですか！？」

僕は焦っているような感じで再び二人に質問した。

だが、二人の表情はうつむき加減のままだった。

少しの沈黙のあと、スバルさんがため息を混ぜながら一言僕に呟いた。

「結果は……ピチューのライトの勝利だ。しかも一度もダメージを受けることも無く、超速攻だった」

「うそ……。ということはピカっちは手も足も出なかった……ってことなんですか……」
「そういうことだ……。そしてピカっちはあそこに残ったままなんだ」

スバルさんの言葉に青ざめる僕に、御羅不猟さんは指をさしてピカっちの方向を伝えた。

僕はその先にある光景に更なる衝撃を受けてしまった。

なぜならそこに拡がっていたのは……、うつぶせの状態で所々に傷を作ってバトルフィールドに倒れ込んでいたピカっちの姿だったのだから。

「カゲっち……くん」
「ピカっち!!?」

弱々しく僕の姿を捉えたピカっちに対して、僕は思わず叫んでしまい、そのまま彼女のもとへ駆け出した!!

「ピカっち!ピカっち!大丈夫!?僕がいない間に……辛かっただろう!?」

よほど無我夢中だったのだろう。
僕はバトルフィールドに上ると、サッと彼女の体を起こし、励ましを見せていた。

「そんなこと……ないわ。あたしがバトルでただ……弱かっただけ……だから。それよりもまた……カゲっちくんに会えて……良かったわ……」
「ピカっち……」

僕は彼女の言葉に思わず熱い感情が込み上げてきた。

僕はバトルへのトラウマのせいで、ずっと一緒にいると約束した、ピカっちのもとから消えてしまった。

でも彼女はそんな僕を一度も怒るようなそぶりを見せず、ただ優しくて温かい笑顔で自分を迎えてくれたのである。

それも決して得意とは言えないバトルで、体がボロボロになってしまったのにも関わらず……。

僕はピカっちのその表情から、小さい彼女が本当に一握りだけの“勇気”を目一杯に表現していたに違いないと思った。

例えどんなに辛い苦境に立たされても……、必ず僕たちがそれぞ

れ持っている“勇気”で目一杯自分の形で表現出来たならば……、いつかきっと越えることが出来るのだということを……。

「ピカっち！僕がいなくなったせいですごく不安だったでしょ？それなのに得意じゃないバトルで……しかも、どう考えたって勝ち目が無いってわかるバトルを……こんなに頑張るなんて……すごいよ！！本当に僕、すごく感動したよ！！」

僕は思い切り彼女のことを抱きしめ、堪えきれなかった感情を涙で表現していた。

「ありがとう……カゲっちくん……。ライトくんに……あっけなく負けちゃったけれど……でも……今すごくうれしいわ……。あたしの想いが伝わったってわかったから……」

ピカっちはニッコリ小さく笑顔を見せ、弱々しい声で気持ちをゆっくりと語った。

「なんだか感動的だね」
「そうだな。これでカゲっちも逃げることなく練習バトルに挑んでくれるだろう」
「これこそ愛の力って感じよね～」
「チキショー！！あんなかわいコちゃんに勇気づけられるなんてうらやましいぜカゲっち！！」

その様子を見ていたラッシュ先輩たちは、過去に苦しむ僕がきっとこのあと力強く乗り越えていくに違いないと感じていた。

「どこ行ってたのよカゲっち！散々心配かけて、本当にダメダメなんだから！！」

「まぁまぁそういうなチコっち。何事も無く戻ってきたんだから良かったじゃねぇか」

「そうだね。やっぱりあさポケナインはみんな揃っていないとダメだよね～♪」

そのあとしばらくして、僕を探していたチコっちたちがバトル部部室に戻ってきた。

「心配かけてごめんなさい。でも僕はもう逃げません。ここまで自分を心配してくれる“仲間”がいるから。それに……」

僕は謝りながら自分がどれほど迷惑をかけていたのか感じた。

と同時にたくさんの仲間たちがいるのをうれしく思った。

だけどそれよりも嬉しいことがあった。それは……、

「それに自分のために“小さい勇気”を精一杯見せてくれたピカっちがいますから……だから逃げたりしません！！」
「カゲっちくん……」
「カゲっち……」

そう、一度大きな過ちを犯した僕を心の底から温かく見守っている……優しいピカっちの“勇気”を無駄にしないためにも、僕は逃げるわけにはいかないのだ……。

「その心意気だぜカゲっち。俺もバトルは勝ったけど、ピカっちは俺のどんな攻撃にも逃げなかった。ホントにバトルが苦手なやつなら自分から白旗上げちまう状況になってもな。そんなピカっちの気持ちを無駄にしちまうことがあるんなら俺はおまえを“アイアンテール”でぶったたくからな」
「うん、わかったよライトくん」

ピカっちの対戦相手だったライトくんの言葉に笑顔でうなずいた僕。

「でも本当に大丈夫か？泣いたりしたらダメなんだからな～カレシくん」
「その時はこのナイスイケメンの俺がピカっちちゃんを守るぜ～！」
「御羅不猟さん、キノガッサさん、変なこと言わないで下さいよ

～！！」

僕のこの必死な姿に多くのメンバーが大笑いした。

「それじゃ、次はいよいよ第7回戦だな。ラグ、頑張ってくれよ」

「任せてよキノガッサ。僕はキノガッサの届けたかったメッセージ、それにラージくんたちあさポケナインの分も背負って戦って来るよ！」

キノガッサさんの言葉に静かにうなずいたラグさん。

「頑張って下さいラグさん！俺、どんなときにも信じてますから！！」

ラージキャプテンの激励にもラグさんは静かにうなずいた。

「そっかぁ、次はラグさんが出番なんだ」

「ジュジュ先輩の孤立した考えが少しでも変わるといいわね」

「そうだな。アイツもまたあさポケナインが抱える問題の一つだからな」

バトルフィールドに静かに向かうラグさんの姿に僕やチコっち、ライトくんは厳しい表情となった。

「一体僕に何の用何ですか、ラグさん？」
「それはこれから始まるバトルの中で伝えるよ……ジュジュくん」

波乱に満ちたバトル部特別合宿。

次回いよいよ第７回戦が始まる！！

第８９話：「圧倒的に負けたとしても……～弱いピカチュウが見せる小さな勇気

作者：「うん。なんだか無理矢理な展開だった。もう少しバトルさせれば良かったかも」

ピカっち：「そんなこと無いわ。確かにバトルはすぐに終わっちゃったけど、カゲっちくんに想いが届いたみたいだったし……、何よりあたしが納得してるから……」

カゲっち：『このピカっちの優しさを無駄にしちゃダメだよね……。絶対にトラウマを払拭してみせる！』

ラージ：「次回からいよいよ練習バトルも終盤に突入だな。ここからは大激走するような熱き戦いが始まるぜ！！」

第９０話：「絶対に譲れないバトル！～心を開け、“孤立”のジュジュよ！？～」

ラージ：「ついに来たのか……運命の第７回戦……」

ヒート：「今までには無い熱戦が待ってそうだぜ……」

ラッシー：「確かにそうだよな！ワクワクしちまうぜ！」

ラプ：「そんなあたしたちあさポケナインにとって、ターニングポイントになりそうな第９０話……プレイボールよ！」

第９０話：「絶対に譲れないバトル！～心を開け、“孤立”のジュジュよ！？～」

次に行われる練習バトル第７回戦の対戦者の姿に、観客席が大きくどよめいていた。

「あれ？アイツって第４回戦でキノガッサとバトルしたジュプトルじゃないか？」

「だよな？確か第７回戦ってラグとラージのダブルラグラージがバトルするはず……。こりゃあ一体どういうことなんだ？」

この多くの疑問に対して、熱烈な実況をしているレウト先輩とホムラ先輩が説明を始めた。

「え～。次の練習バトル第７回戦は、当初ラグ対ラージの予定でしたが、急遽ラグの希望もあり、第４回戦にも出場したジュジュがバトルを行うことになりました」

「なお、この変更に対してバトル部の顧問、それから部長のラッシュは容認していますので、ぜひご理解をお願いします」

この説明に観客席は納得したような声をあげていた。

一方別の場所では、

「ついに来たんだな……この時が」
「ああ、きっと今まで俺たちが繰り広げてきたどのバトルよりも、このバトルが持つ意味ってのは大きいんだろうな」

バトルフィールドを見つめながら、ヒート先輩とラッシー先輩は、今までよりもさらに厳しい表情を見せていた。

なぜならこのバトルは、第４回戦でキノガッサさんの敗退の際のジュジュ先輩の態度に、憤りを感じたラグさんが、仲間であるキノガッサさんの伝えたかったメッセージを伝えたい、というわけで急遽行われることになった、特別なバトルなのだから。

「ラグ……頼んだぜ。ジュジュのヤツの心の闇を吹き飛ばしてやってくれ。アイツがあさポケというチームのことを理解できれば、他のメンバーとの違和感も取り除けるはずなんだ。俺は力不足なせいか、それを証明することが出来なかった。あとはラグ……お前しかいない！お前ならその力があるはずだ！」

第４回戦でジュジュ先輩との激突の末、惜しくも敗れてしまったキノガッサさんもやはり厳しい表情だった。

「ファイトだぜラグ！！あっという間に決めてやれ！！」
「あさポケナインのみんなのためにも、絶対負けないで！！」
「信じてますわ！」

ライトくん、サクラ先輩、そしてレイラ先輩が声援を送る！

そんな大声援の中、ゼルスコーチがゆっくりと手を挙げ、

「両者ともに準備は良いな？それではこれより練習バトル第7回戦……開始！！」

……ついに今、お互いの持つプライドが激突を始まろうとしていた！！

「どんな理由で僕と戦いたいのかわからないけど、手加減は一切無用だ！“リーフブレード”！！」

まず先手を撃ったのはスピードで勝るジュジュ先輩だった。

キッと睨みつけるような表情をしたかと思うと、そこから得意技の“リーフブレード”をラグさんの大きな体に放った！！

「悪いけど僕だって引き下がるわけにはいかないよ！“カリバー！！”」

「“ウォーターカリバー”！！」

一方のラグさんは、手に青色の大きな剣を握ったと思うと、そのままジュジュ先輩の懐へと振り落とした!!

「てやぁぁぁぁ!!」
「たぁぁぁぁぁ!」

カンカーン!!

2匹が繰り出した技がお互い譲り合うことなくぶつかり合った!!

しかし、ラグさんはフーっと一息ついたあと、次の技を叫んだ!!

「“ウォーターシュート”!!」

ラグさんがカリバーを振り落とした瞬間、青色のその剣から勢いよく水の衝撃波が発射された!!

「なっ!スピードで勝る僕より先に技を!?ウワッッ!」

ジュジュ先輩には、予想もつかぬ攻撃だったのだろう。瞬く間にこの攻撃に飲み込まれて吹き飛ばされてしまった!!

「ラグのパートナー、“カリバー”の登場か。ラグも生半可な気持ちじゃないようだな」
「“カリバー”って……あの剣のことですか？」
キノガッサさんのつぶやきに疑問を感じたのか、思わず聞き返したラージキャプテン。
するとキノガッサさんは次のように説明をした。
「ああ、その通りだラージ。俺のパートナーとも言える武器が“ストライクハンマー”なら、ラグのパートナーとも言える武器はあの“カリバー”だ。もちろん意志を持っているからしゃべったり、様々なタイプの大技を繰り出すことも可能だぜ？」
「へぇ～……良いなぁラグさん。俺、ますますかっこよく見えてしまいますよ」
ラージキャプテンは、この説明を聞きながら、自分の持たない特殊な力を手にして戦うラグさんに、憧れの眼差しを向けていた。

さて、ラグさんの“ウォーターシュート”を受けたジュジュ先輩はというと、

「まだまだ……たたき付けられた挑戦状には、徹底的にぶつかってやる！！“にほんばれ”！！」

と、突然真夏の強烈な日差しを思わせるようなまぶしい光で、バトルフィールドを包み込んだ！

「……これでラグさんの持つみずタイプの技のパワーが落ちてしまうことになるわね」

「そうねラプ。ジュジュも確実に勝利するために、必要な作戦を常に考えているみたいね。さすがは勝利至上主義ってところよね」

ラプ先輩とサクラ先輩はこの日差しに、ジュジュ先輩の戦術の高度さを垣間見ていた。

「ラグさん。これであなたはかなり不利な状況になったと思いますよ？」

「まぁそうだろうね。僕たちラグラージの属性、みずタイプとじめんタイプは、どちらも君たちジュプトルの属性、くさタイプには弱いからね。それにフットワークもかなわないから、まともに張り合ったら素早い攻撃の餌食になるし……」

ジュジュ先輩の冷たくも余裕の笑顔に対し、ラグさんはこの状況に苦い表情を見せる。

「……さらに今この“にほんばれ”で、あなたのみずタイプの技のパワーは期待できるほどのものじゃなくなりましたよ？つまりはククク……、完全に僕の方が優位だってこと何ですからね？」

ジュジュ先輩はラグさんのことを完全に見下してるような表情だった。

『まぁ、ジュジュの言っていることは正論だろう。普通に考えれば、ラグがいくら実力者だと言っても、この悪条件の中で戦い抜くのは少し厳しいものがあるだろうな……。……まぁ……しかしそれもラグが、本来のラグラージの能力だけだと言うならば成り立つことだけどな』

ガル先生はジュジュの戦術をこのように分析していた。

「くっ。あの“カリバー”も水で生成されたものだから、きっとこの“にほんばれ”の影響を受けているはず。これじゃあ意味が無いじゃないですか！」

「まぁまぁ落ち着けラージ。アイツの真の力ってのは、あんな技で押さえ込めるほどヤワじゃねぇよ」

慌てるそぶりを見せるラージキャプテンに対して、キノガッサさんはチッチッチと指を左右に揺らし、ニカッと余裕に笑う。

「真の力？」

ラージキャプテンがキノガッサさんの方向に振り向いた次の瞬間！！！

ピカッッッッ！

突然先ほどの“にほんばれ”より二段階ほど上の、まぶしい光が部室全体を包み込んだ！！

……さらに！

「“プラズマカリバー”！！」

ラグさんの大声が響きわたった！！

「ラ……ラグさん！？」
「でもなんか様子が変だぞ……！？」
「一体……どういうことなの？」

あさポケナインのメンバーは、いきなりの状況の変化の理由がわかるはずもなく、皆驚きの声をあげるばかりだった。

「へへへ。ここでラグの真の力……“デンラージ”のお出ましってところか？」

この事実を知っているキノガッサさんは、ニヤリとした表情で一言つぶやいた。

『“デンラージ”？』

僕たちあさポケナインは、全員キノガッサさんが発したその単語で頭に“？”マークを浮かべていた。

「わりいわりい俺の説明不足だったな。この“デンラージ”ってのは、簡単に言うとラグの能力が大幅に強化された姿なんだ。まぁ仕組みはちげぇけど、ラグラージという最終形態のラグだけが、さらに“しんか”した姿ってところかな」

キノガッサさんは僕らにこのような詳しい解説をしてくれた。

さらに聞くと、ラグさんの世界の救世主であるという彼の先祖も、この“デンラージ”になることが出来たのだと言う。

「でも……、具体的にどんな風にラグさんの能力が強化されているんですか？」

「お～お～良い質問だぜ、激カワスマイルピカっちちゃ～ん♪よ～し君だけにこのイケメンで天才なキノガッサが教えてあ・げ・る・ぜ♪」

あの～……もしもしキノガッサさん？どうしてそんなに……目の周りにキラキラと星を輝かせて話しているんでしょうか？

さっきまであんなに引き締まって真剣な表情だったのに……。

あまりの変わりっぷりに……ピカっちも苦笑いをしてますけど？それに心なしか……ため息のような音も聞こえてますけど？

も……もしかしてキノガッサさんの思考には……、かわいい女の子＝ナンパぐせという鉄壁の条件反射が整っているのだろうか？

僕……ぶっちゃけ本当にこのあとピカっちを連れていかれないか、ものすごく不安だ……。

と、脱線はここまでにして……キノガッサさんの話によると、“デンラージ”になることでラグさんは、電気を技として扱うことが可能になるらしい。

「つまりはラグはこの時点で、みずとじめんとでんきの3つのタイプでバトルをすることが可能になったってわけだ」

「メチャメチャすげぇ～ぞラグ！！」

「これで一気にジュジュをノックアウトだ！！」

「イケイケ～！！」

別の場所でラグさんの能力を把握したスバルさんと、ライトくんとプリムラさんは自然と気持ちが高ぶっていた。

「ジュジュくん、この姿を見ても僕は不利だって言えるかな？…悪いけどね僕だって今回は絶対に負けたくないし、負けることは許されないって覚悟で臨んでいるんだ！！」

「チッ！」

ジュジュ先輩がラグさんの言葉にイライラしているせいか、舌打ちをした。

「僕は君みたく絶対的な自信があるってわけじゃない。この“デンラージ”になるまででも、ちゃんとパワーをコントロール出来る

か……、不用意に誰かを傷つけないように出来るのか……不安と隣合わせだった」

頭のエラとオビレが伸びて、さらにオビレが尖り、バチバチっとまるででんきタイプのポケモンのように、体の電気を放つラグさんが静かに語る。

実は彼、優しいその口調が示すようにメンタル面にやや弱さがあるせいか、バトルに対してさほど積極的ではなく、むしろ嫌な印象の方が大きかったようだ。

そのためか世界の救世主である先祖が得た力、“デンラージ”を持てる可能性があったにも関わらず、みずからメンタル面の弱さで、その可能性にリミッターをかけてしまったという。

だが苦悩に苛まされていたその時に、力となったのは自分を信じてくれている……固い“絆”で結ばれた仲間たちの“温かさ”あふれる後押しだったという。

「もし、みんながいてくれなかったら……僕はここまでの力を手にすることは出来なかった。みんながいたから苦しいことも乗り越えて来れた……。みんながいるから、僕はどんなことでも闘い抜く勇気が込み上げるんだ！！」

ラグさんはジュジュ先輩にも感じてほしかった。

自分のその体験があるからこそ、“仲間”という他のどんなものに変えることが出来ない大切な“温かさ”の良さを……。

「君は確かにバトルも強いし、野球の腕前だって僕らを引き付けるほどの実力だと思う。でも……だからといって、信じてくれている多くの仲間の“温かさ”に背を向けて良いなんてことはありえないよ！自分の技術は成績のためだけに磨くものじゃないんだ！！僕は……それに気づいてほしい！！」

ラグさんは今回のバトルを通して、ジュジュ先輩に“仲間”の力の大切さを理解してもらえることが、自分に課された任務だと感じた。

自然と放つ言葉ひとつひとつに力が込められていく。

だが、ジュジュ先輩は熱きそのメッセージに耳を傾ける様子を見せることなかった。

「そんなこと知るもんか！勝負の世界で情けは無用だ！！“ソーラービーム！！”」

「ジュジュ！」

「ジュジュ先輩！」

あくまで彼は排他的な考え、行動だった。

「仲間の力がなんだ！絆がなんだ！そんな甘い考えだけで勝てると言うなら大間違いだ！全ては自分の実力、執念！それで決まる！！」

「それは違う！！機械的なものだけでは補えないことだってたくさんあるんだ！“デンインパクト”！！」

ドォォォォォン！

「うわっ！」

「くっっ！！」

互いの強い考えが込められた大技同士は、まるで今の二人の考えが譲り合わないことを象徴するかのように打ち消しあった！！

それでも二人は立ち止まる様子はなく、またしても突撃した！！

「まだまだぁぁぁ！！“つばめがえし”！！」

「“プラズマカリバー”！！」

果たしてこの激戦はどのような結末をむかえるのだろうか！！？

第９０話：「絶対に譲れないバトル！～心を開け、“孤立”のジュジュよ！？～」

ラッシー：「真の力を発揮……やっぱりラグさんも本気なんだな」

ラージ：「当たり前だ！ラグさんは誰よりも“仲間”の強さを知っている人だ！絶対にジュジュに負けるはずは無い！」

ラプ：「ジュジュも早く気づくと嬉しいんだけどね……」

第９１話：「デンラージの魂の一撃～心を開け！“孤立”のジュジュよ！？～」

ラージ：「ラグさん……一体どうやってジュジュを説得しようと言うんだろう？」

ヒート：「わからない。けれど俺たちは黙って見守ることしか出来ないんだ。とにかくラグさんを信じよう……」

ラプ：「そうね。それじゃあ第７回戦の続きよ、第９１話プレイボール！」

第９１話：「デンラージの魂の一撃～心を開け！“孤立”のジュジュよ！？～」

仲間の“温かさ”で強くなれたというラグさん。
彼の強いメッセージがジュジュ先輩の心に届くことはあるのだろうか？

「てやぁぁぁぁ！」
「たぁぁぁぁぁ！」

お互いに交わることの無い考えを持つジュジュ先輩とラグさんのバトルは、ますます激しさを増していた。

それはどちらかが技を放てば、もう一方がそれを防ぐ。
その繰り返しが続いたため、流れが傾く様子が見られなかったためだった。

「“ソーラービーム”！！」

息つく間もなく、ジュジュ先輩が“にほんばれ”で強化されたビームを放つ！！

「効かないよ！！“プラズマソニック”！！」

それに対しラグさんは電気で生成された剣、“プラズマカリバー”から衝撃波を放つ！

ドォォォォン！

「マジかよ……。ジュジュは“にほんばれ”で“ソーラービーム”が連発可能になったから、すばやさで劣るラグさんをガンガン押すことが出来るのはわかるけど……」

「ラグも多彩な技で振り切っている。すばやさなんて関係なく、しかも連発で……。これはどちらかがミスした方がこの勝負に負けるかも知れない」

ラッシー先輩とムゲン先輩は二人の実力の均等さに驚きを感じつつ、このあとの状況を冷静に先読みしていた。

「このままじゃいつまでたっても決着つかない。よし、アレで攻めていこう。良いかいカリバー？」

「もちろんです。ジュジュくんもあの人らしく、勝負の進め方を知っていますからね。共に闘うことがどれほど心強いか教えてあげましょう！」

ラグさんの言葉に、大切なパートナーの“カリバー”が穏やかな口調で答える。

「カリバー！カードリッジロード！！」
「ロードカードリッジ！！」

ラグさんが叫んだ。

すると次の瞬間、カリバーの水や電気などのエネルギーを生成している両端部分についていた“カードリッジ”と呼ばれる部分が、まるで銃の弾丸が動くようにカチャッと音を立てる。

「これがラグさんのカリバーが持っている特殊な能力なんだ……。あの“カードリッジ”によって、ラグさんの持つ様々な技のエネルギーが増幅していくってわけなんですね？」
「ああその通りだ。要するに一振りで相手に与えるダメージそのものが、ラグが普通のラグラージのようにポケモンバトルしているときよりも、二倍も三倍も違うって感じだ。あれこそラグが実感している“共闘”ってやつなんだ」

ラージキャプテンの言葉にキノガッサさんが補足するように説明をした。

そのカードリッジをロードした結果、“デンラージ”になったラグさんの姿に更なる変化が起こった。

「そ……そんな。こんなこと……ありえることなのか？」

その姿に言葉を失ってしまうジュジュ先輩。

それもそのはずだ。“デンラージ”になったラグさんの背中に、光り輝く大きな翼が形成されていたのだから。

「これで僕の種族の大きな欠点、フットワークの悪さは解決出来るよ。どうしてだか説明しなくてもわかるよね？さっきカリバーがレジェンドカードをロードして、この“ライトニングウイング”を発動したからね。そのおかげで空へ飛び立って、立体的な動きが出来るようになれるからだよ！」

さらにこの“ライトニングウイング”の発動で、バトルフィールドに風が吹きはじめた。

『風……？ううん、ただの風じゃないみたい……。電気が含まれているわ』

ピカっちはこの風の正体を見抜いたようだった。不安な表情になり、さらにその赤い電気袋からは、自然にバチバチっと電気が流れていた。

そしてラグさんのあまりの変化にジュジュ先輩はかなり不機嫌な

様子だった。

まさか自分と相性の良いみずタイプとじめんタイプのラグラージに、でんきタイプとひこうタイプという自分と相性の悪いタイプが加わるとは予想出来るはずが無かったためだった。

「これでも勝負を続けるって言う？」

ラグさんは余裕を感じさせる笑顔で、ジュジュ先輩に聞く。

「あ……当たり前だ！どんな強敵だろうと僕が負けることは許されないんだ！！」

一方のジュジュ先輩はムキになってバトルの続行を宣言した。

彼のカリバーにまだ特別な能力が残されていることも知らずに……。

「そうかい……。君がまだ本当に大切なことに気付けないって言うなら……」

ラグさんは半ば怒りを感じさせる表情で、カリバーを鋭く振り落とすと目の前のジュジュ先輩へ宣言するように叫んだ。

「僕も情け無用で君を全力で倒すまでだ！君のその分からず屋な気持ちを粉々に砕くまで！！」

この時ラグさんは心が大爆発しそうな憤りを感じていた。

1年前のピースさんの悲劇に、ラージキャプテンや、ヒート先輩や、ラプ先輩と同じやりきれない悔し涙を流した、同じあさひポケ野球部のチームメイトのはずなのに、彼らの思いやりをただ自分のつまらぬ目的で受け入れようとしないジュジュ先輩を。

結束力が何よりも求められる野球というスポーツで、その結束力の意味を体で教えているラッシュ先輩やキノガッサさんの行動を何一つ理解しようとしないジュジュ先輩を。

『ここまでジュジュくんが冷たい心の持ち主だと思わなかった。彼を気づかせるためには、かわいそうかも知れないけれど、昨日のラッシュのときよりも、ずっと立ち上がれないくらいのショックを与えなきゃならないね。強敵は一人の力じゃどうにもならないってことを身を持って理解させなきゃ』

ラグさんの作戦はこうだ。

ジュジュ先輩と普通にバトルをして勝ったとしても、昨日のとき

のように負けたことに対して、ただイライラするだけだと。

それなら決着がついたあとでも、彼が仲間に助けを求めるまで攻撃を続けようと言うのだ。

例え体が傷だらけでボロボロになっても、大ケガをしたといっても、彼の口からＳＯＳが出るまでずっと……。

『あさポケナインのみんなには悪いけど、彼の手助けはさせない。生ぬるい方法じゃ彼は変われないんだ！』

ラグさんの作戦は果たして成功するのだろうか？

「さぁ、バトルの続きだよジュジュくん！！“プラズマクラッシャー”！！」

ラグさんはカリバーに電気を思い切り溜め込むと、そのままジュジュ先輩目掛けて放った！！

「わけのわからない技ばっかり使ってどうしようって言うんだ！

!?“ソーラービーム”!!」

一方のジュジュ先輩はラグさんの未知なる力に対処法がわかるはずもなく、単調に“ソーラービーム”を繰り出す!!

……しかし、このターンでジュジュ先輩は絶望を感じることになる。

「何と言うことだ!ジュジュのパワーアップした“ソーラービーム”が、跡形も無く粉砕されてしまったぞ!」

「それほどこの試合に懸けるラグの気持ちが強いってことか!?何にせよバトル部で共に過ごしている俺たちにも見たことが無いことが目の前で起きてしまった!!」

実況役のリオレウスコンビも、目を疑うように思わず身を乗り出して絶叫する!!

「な……、バ……バカな……。“ソーラービーム”が吹き飛ばされた……?」

ジュジュ先輩は血の気が失せたように、一歩……また一歩と後ずさりをしてしまう。

完璧にこの状況に威圧されてしまったようだ……。

「あっちゃ～。こりゃすごいことしてしまったなラグ。あんなに強気だったジュジュを一撃で黙らすなんて」

「バトル部のみなさんも見たことが無い威力……気持ちの強さが反映されたようですね」

この事態にキノガッサさんとラージキャプテンもただただ驚くばかりだった。

「どうしたんだいジュジュくん？まさか君のこだわる“機械的な勝利”というのはこの程度だったのかい？」

ラグさんが一歩、また一歩とジュジュ先輩へと近づく。

「僕は君が勝負に必要無いって言っていた、仲間の“絆”の後押しをいつも信じていた」

ラグさんは声を震わせて、今の心境を語りはじめた。

「ときには立ちはだかる壁を相手に気持ちがボロボロになっても、キノガッサやいろんな仲間の“絆”でいつも立ち上がって、その壁

を乗り越えてきた。……わかる？この一つ一つの技には、気持ちの弱い僕を、一生懸命に後押ししてくれている……全ての人たちの……“負けるな”っていうメッセージが込められているんだよ！！」

「ラグ……」

「ラグさん……」

ラグさんはジュジュ先輩に必死な表情で訴えていた。

ついには込み上げる感情がこらえきれなかったのだろう。気がついたときには大粒の涙が溢れてきていた。

そうだ。僕たちの持つ様々な技には……その技を使いこなすまでの間、僕らの頑張りを後押ししてくれた、たくさんの人たちの温かいメッセージがあるんだ。

……思うように使いこなせなくて、どんなに諦めそうになっても……、使いこなせるまでずっと見守ってくれていた人たちのメッセージが……。

「君だって、今じゃすごい強いかも知れないかもしれない！でもその技には君をいつも信じてくれていた人たちのメッセージがあったんじゃないの！！？どうしてポケモンバトルを誰かの心を傷つけるためにするの！？」

ラグさんが強く叫ぶ。

「……軽く言わないでよ！バトルに仲間なんて関係ないなんて！“絆”なんて関係ないなんて！！……ジュジュくんの考えは、君を信じてくれている多くの人たちを、裏切っているんだよ！！？」

「うるさい！またキノガッサさんみたく僕に説教しようと言うのか！？」

どうしてジュジュ先輩はラグさんの心の叫びを受け入れ無いのだろうか？

ジュジュ先輩はラグさんを敵わぬ相手と悟りながらも、また攻撃態勢に移ろうとした！

「ラグ、このままでは危険です！早くこちらも応戦しなければ！」

「大丈夫、その心配は無いよカリバー。僕も次の攻撃であのわからず屋を、一気にＫＯしちゃうつもりだったからね」

カリバーの忠告にラグさんが静かに言い返す。

「ジュジュくん。残念だけど今の君じゃ、いくら頑張っても僕を倒すことなんて出来ないよ。仲間を思う気持ちがどれだけ大切か、

この技で教えてあげる……！！」

ラグさんは翼を羽ばたかせて、ジュジュ先輩が放った渾身の一撃を避けるとそのまま……！！

「これで決まりだ！！“デン……インパクト”！！」

第９１話：「デンラージの魂の一撃～心を開け！“孤立”のジュジュよ！？～」

ラージ：「ラグさん……めちゃくちゃカッコイイぜ！！」

ラッシー：「あの“デンインパクト”も相当だぞ！ジュジュは大丈夫なのか？」

ラプ：「そのあたりも含めて次回もお楽しみにね」

第９２話：「“孤立”の真相とキャプテンのメッセージ～心を開け、“孤立”の

ラッシー：「早く続きが見てぇ！！」

ラージ：「ラグさんの一撃が決まったのか気になるぜ！！」

ラプ：「そう慌てないの、ちゃんと始まるから」

ヒート：「そういうことだ。今回で第７回戦も大詰めだぜ！第９２話プレイボール！！」

第９２話：「“孤立”の真相とキャプテンのメッセージ～心を開け、“孤立”の

ラグさんの言う持ち技に込められたメッセージ。
バトルで強くなるためにはこのメッセージを忘れちゃダメなんだよね。

「“デン……インパクト”！！」

ラグさんは翼を使い上空へ飛び立つと、拳に電気をためながらそれをジュジュ先輩へ放った！！

「くっ！“み……みきり”！！」

一方のジュジュ先輩も必死だ。

いくら敵わない相手だとわかっても、何とか反撃の糸口を見出だそうと、普段はあまり使わない防御技を発動し、ラグさんのこの一撃を回避したのだ！

「お見事だねジュジュくん。“みきり”で僕の技を回避しちゃうなんて。……でも次の一手は無いよ！」

「うるさい！まだまだ勝負はこれからだ！てやぁぁぁぁ！！」

ラグさんの言葉にジュジュ先輩はムキになり、捨て身の覚悟でラグさんの体に突っ込んだ！

「“すてみタックル”ってところかな。じゃあ僕は最後に属性変更しようかな。……カリバー！」

「オーケー、ロードエレメンタルカードリッジ！」

ラグさんは一つ息をついた後、カリバーに指示を行った。

するとカリバーが光輝く黄金から、段々と茶色へと変化していくではないか！

「なっ！またラグさんのカリバーの色が変わった！」

「ああ、あれは“属性変更”だな。さっきはエネルギーの出力部分の両端のカードリッジを動かしただろ？同じように今度はカリバーの持つ部分のカードリッジを動かして、カリバーのタイプをプラズマ……でんきから、じめんタイプへと変えたんだ。あの茶色は巨大で母なる大地の色ってところだな」

ラージキャプテンの反応に、キノガッサさんが説明をする。

「つまりラグは自由自在に自分のタイプを変えることが出来るんだな。確かにラグ一人だけじゃ、あんなこと出来るわけ無いよな…」

「そうだよね。あのカリバーを含めて、ラグと関わった全ての人たちの協力無しじゃここまでパワーアップ出来なかったよね」

「それと仲間を誰よりも思うラグ自身の気持ちも無ければな」

スバルさん、ムゲン先輩、そしてライトくんは感心したように話していた。

その仲間の“絆”を秘め数々の強敵と戦ってきたラグさん。

彼はカリバーが“属性変更”を完了すると、すぐさまバットのように横に強振した！

「これで決める！“グランドエクスクラッシャー”！！」

ラグさんが今日一番の大声が叫んだ次の瞬間！！

ズドドドドドドドド！！！

けたたましい轟音とともに、強烈な衝撃波がジュジュ先輩へと襲い掛かる！！

それはまるで、普段は優しく見守る大地が怒り狂ってるかのように、今の彼の心境をそのままジュジュ先輩へとぶつけたような感じだった！！

「うわぁぁぁぁ！！」

ジュジュ先輩はこの大技を避けることが出来ずに、真っ正面からダメージを受けてしまい、さらには吹き飛ばされてしまった！！

「ジュジュ！！」
「ジュジュ先輩！！」

この出来事にあさポケナインのメンバー、特にチコっちが悲鳴に似た叫びをフィールドに送った。

だが、それでもジュジュ先輩は立ち上がろうとしていた。どこまで執念深いのだろうか。

「ま……まだ……まだまだ……こんなことで……」

息を切らし、ダメージの大きかった左肩を押さえながら、鋭い目つきでラグさんを見つめるジュジュ先輩。

さらに一歩一歩ゆっくりとラグさんの方へと向かう……が！！

バタッ！！
「あっ！」
「ジュジュ！！」
「ジュジュ先輩！！」

4歩目のところでついに彼は力尽きた。目をゆっくり閉じて崩れたように倒れながら……。

「ジュジュ、戦闘不能！よってこの勝負……ラグの……！？」

この結果を見たゼルスコーチがコールを行おうとしたときだった。

彼は次に飛び込んだ光景に言葉を詰まらした！

「ラグ！！」

「ラグさん！！」
「何やってるんだ！もう勝負はついたんだぞ！」

同じくその光景が飛び込んできた僕たち観客席側からも声が飛び交い始めた！！

「この第7回戦。仲間の“絆”とともに戦うラグが、ジュジュを圧倒的に敗ったぞ」
「しかし、彼は戦闘態勢をやめようとしてはいない！これは一体どういうことなんだ！？」

実況役のレウト先輩、ホムラ先輩も予想外のシナリオに驚くばかりだった。

それにしても、一体ラグさんの行動に何があったと言うのだろうか！？

「ジュジュくん。君には悪いけれど、今の僕の心は君に対して怒りに満ちている。最後まで仲間の大切さを認めなかった君にね。だから僕の拳から直接教えるよ……、君がどれほど仲間を大切にしなかったかを……ね」

ラグさんはジュジュ先輩が崩れた後も、その拳からバチッバチと電気による火花を散らしていた。

「これはヒートくんの分だ！“デン……インパクト”！！」

「グワッ！！」

……誰も信じられなかった。

あの心優しくて思いやりのあるラグさんが……無抵抗のジュジュ先輩を思い切り殴ったのだから！

「ジュジュ！！！」

「ラ……ラグさん！もういいです！やめてください！！」

ヒート先輩、ラージキャプテンが慌ててラグさんを止めにかかろうとする！！

しかし、ラグさんは攻撃をやめようとしない！

「これはラッシュの分だ！“デンインパクト！！”」

「ぐっ！！」

ジュジュ先輩はまたも吹き飛ばされる！！

「やめろラグ！おまえ自分で何やってんのかわかっているのか！？」

キノガッサさんもこの度を過ぎた攻撃に激怒する！！

だが、ラグさんはそれでも攻撃をやめようとしない！！

そしてついに我慢の限界が来たのだろう、ラージキャプテンを先頭にラッシー先輩、ヒート先輩が彼のもとへ突撃したのだった！！

『やめろォォォォ！！これ以上俺たちの仲間に手を出すなァァアアア！！！』

３匹の先輩たちは一斉に攻撃を始めるも、

「来ないで！！“ハイドロポンプ”！！」
「うわっ！」
「くっ！」
「ダメか！」

ラグさんはこれに気づいたのだろう。

最大限のパワーで“ハイドロポンプ”を発動し、ラージキャプテンたちを寄せつけなかった!!

「み……みんな……。なんで僕のためなんかに……？これは僕のバトルなのに……」

ジュジュ先輩はこの仲間の姿に驚きを隠せないでいた。

今まで自分は常に仲間から離れた行動をしていたにも関わらず、その仲間が傷ついた自分を助けようとしていたためだった……。

特にナインをまとめるラージキャプテンが必死だった。

「ラグさん、それ以上はダメです!ジュジュはもう戦えないんですよ!?戦えない相手に攻撃するなんて、そんなの“暴力”と変わらない!!」

「近づくな!“ハイドロポンプ”!!」

だが、ラグさんはラージキャプテンの言葉に耳を貸すはずが無く、再び攻撃をしたのだった!!

この異様な光景にどよめきの声に包まれたバトル部部室。

いや、どよめきと言うより皆がラグさんの攻撃を止めようとしているようだった！

『どうしてなんだ。僕は君たちに冷たい態度を続けていたのに……、どうして君たちは僕を助けようとするんだ……！！？』

ジュジュ先輩は、ラージキャプテンがここまで必死に行動する理由がわからず、彼に向かって心の中で何度も問いかける。

「くっそ～……！やめろ！やめてくれ！俺は……俺はラグさんにこんなことして欲しくない！！ただジュジュの心の扉を開いて欲しかっただけなんだ！！」

ラージキャプテンはラグさんの攻撃を何度も受けたせいか、立ち上がるのもやっとの状態になっていた。

それでも大切な仲間のためだと思い、彼は小幅な歩みながら、必死にラグさんの元へと近づいていた。

「……それなのにこんなボロボロになるまで攻撃するなんて……これじゃあ何の意味も無いじゃないか！！心を開くためならどんなことをしても許されるって言うのか！！？」

「ラージ……」

「ラージキャプテン……」

キャプテンの叫びに、僕たちナインはシュンと静まり返っていた。

「もしジュジュをこれ以上攻撃するって言うなら……俺はラグさんを全力で倒す！！！」

ラージキャプテンは鋭い目つきで、ラグさんに攻撃を始めようとしていた。

まさに一触即発の状態だった。

「ちょっと……やめてよラージ。あたし……見たくないわよ……。さっきまであんなに仲が良かったラグさんと殴り合いなんて……」

ラプ先輩は震えていた。まさかここまで事態が急変するなんて予想できなかったのだろう。

ラッシー先輩やヒート先輩、それにラッシュ先輩やサクラ先輩も慌ててこの争いを止めようとする。

……と、その時だった！！

「やめろ！！！」

突然叫び声がバトル部部室に響き渡った！！

観客席全員がその声の持ち主……傷だらけになり涙ながらに叫んだジュジュ先輩の方に視線を向けた。

「もうやめてくれ！！ラージも……ラグさんも！僕のせいで傷付けあうのはよしてくれ！！」

彼は……泣いていた……。

それもその涙は、昨日のラッシュ先輩に敗れたときに、プライドが傷ついたせいで流した悔し涙出はなく……、

素直に……仲間に……無意味な争いを止めてほしいという……悲痛の涙だった。

「もう……僕のせいで大切な人がいなくなるのはごめんだ……。僕は自分の無力のせいで何度も大切な人を傷つけて失ってしまった……。だからみんなのもとから離れて行動した方が良いと思っていたんだ……！」

「ジュジュ……」

「ジュジュ先輩……」

ジュジュ先輩の言葉に誰もが驚いた。

なぜならこの時はじめて彼の本音が、彼の孤立の理由が明かされたのだから。

「僕に誰かのためになるような力なんてないんだ。だから僕のことは……」

「ほって置くわけにはいかねぇよ」

ジュジュ先輩の言葉を先読みしていたのだろう。ラージキャプテンが、彼の言葉を遮るようにしゃべりはじめた。

「確かにおまえ一人じゃ困難なんて砕けないかも知れない。……でもな、俺たちだっておまえ抜きじゃ困難なんて砕けなんか出来ないんだよ」

「ラージ……」

ジュジュ先輩はその言葉に目をウルウルさせる。

「何度も言っただろう？野球は一人で戦えない。同じようにバトルも自分一人の気持ちだけじゃ、いつまで経っても向上しないんだぞ？」

ラージキャプテンが、その巨体でジュジュ先輩をゆっくりと起き上がらせる。

「それに俺たちはおまえを見捨てたりしない。ヒートもラッシーもラプも俺も……みんなおまえと同じ苦しみを味わったんだ。だからみんなで乗り越えていこうぜ？それが俺たちあさポケナインの“絆”ってヤツなんじゃないのか？」

ラージキャプテンはいつの間にかラグさんのような優しい表情へと変わっていた。

「ラージ……。うん、そうだよね。僕はもう一人なんかじゃない。みんなの力になれるように約束するよ……」
「その意気だ……頑張ろうぜ！」

こうしてジュジュ先輩に潜む孤立の心は、ようやく改善の方向へと向かいはじめたのだった。

「ジュジュくん、僕も安心したよ。ようやく仲間の存在に気づいてくれたからさ……」
「ん、ラグ？なんかしゃべったか？」

一方のラグさんはキノガッサさんとともにバトルフィールドを後にしていた。

そしてその表情は充実感に溢れているようだった。

「にしてもカッケーことするよなラグも！拳でジュジュの心を開くなんてな！ラージやジュジュも行動を理解したようだし……さっすがは俺たち“絆”のリーダーだな！！」

「そんなことないよ。結果的にジュジュくんは自ら心を開いたんだ。仲間の力になりたいっていう気持ちでね」

ラグさんは笑いながらキノガッサさんの言葉に反応し、そのまま観客席へと戻っていったのだった。

……それから数分後。

ついにあのポケモンが……その舞台へと足を踏み入れた……。

「さってと……次はいよいよ俺の出番か……しっかり戦って来ないとな！」

「頑張れよヒート。相手はあのラッシュ先輩だ。一撃たりともミスは許されないからな！」

そう、次はあさひポケ野球部のエース、ヒート先輩の出番だ。

そして僕たちはまた感動のドラマを目撃することになる……。

第９２話：「“孤立”の真相とキャプテンのメッセージ～心を開け、“孤立”の

ジュジュ：「ラグさんのあの行動は僕を信用して無かったら出来無かったんだ……。それなのに僕は……」

ラージ：「シナリオはちょっと違ったらしいけどな。なんでもラグさんいわく、“やっぱり誰かを傷つけるのは気持ちが良いものじゃない”らしいからな。すっげー優しい性格だよな」

ヒート：「さてここからも感動のドラマは続くぜ！見逃さないでくれよ！！」

第９３話：「リザードンのプライドを賭けて……～立ち上がれ、炎の勇者！？～」

ヒート：「ついにきたのかこのときが……！」

ラプ：「悔いが残らないようにしっかりと戦いなさい！」

ラッシー：「頼むぜ親友！！」

ラージ：「それじゃあヒートを後押しするぞ！ファイト！ファイト！ヒート！！」

ナイン：『ファイト！ファイト！ヒート！！ファイト！ファイト！ヒート！！ファイト！ファイト！ヒート！！』

《応援歌》
君のその熱き夢
この強い翼と
心の炎で捕らえろ
我らの勇者よ

ナイン：『ファイト！ファイト！ヒート！！』

ヒート：「それじゃあ始めるぜ！第９３話プレイボール！！」

第９３話：「リザードンのプライドを賭けて……～立ち上がれ、炎の勇者！？～」

ジュジュ先輩の孤立は仲間を思う気持ちがそうさせていたようだ。

でもこれからはもうみんなと同じように明るく行動して欲しいな。

だってそれが本来のあさポケナインの姿だから！！

「さぁ、いよいよこの練習バトルも残り少なくなってきた！ここまでの熱戦に我々も手に汗を握るばかりだ！」

「そして次の第８回戦！対戦する組み合わせにはもう期待せずにはいられない！！何たって我がポケハン学園バトル部の部長……ラッシュが登場するのだ！！」

『ワァァァァァァ！！』

リオレウスコンビの実況に、観客席は今までで最高に沸き立った！！

「すっげぇなこの歓声。やっぱラッシュ先輩はこのバトル部の精神的な支柱なんだろうな……」

「そのようね。この歓声でヒートが変に緊張してなきゃ良いけど……」

ラージキャプテンとラプ先輩はこの状況に驚きをしながら、その視線をバトルフィールドへと向けた。

「がんばれ～ラッシュ！！」
「ぜってぇ勝てよ！！」
「ラッシュせんぱ～い！！」
「ラッシューー！！！」

四方八方から飛び交うラッシュ先輩への声援。

その四面楚歌の状態の中でバトルフィールドに立ったヒート先輩は、闘志をたぎらすばかりか意外にも冷静さを保っていた。

『まぁラッシュに対しての声援が大きいのは当然なんだ。問題は俺がこの声援に飲み込まれないことだ……。そうすれば……ラッシュと互角に戦えるハズだ！』

ヒート先輩はバトルフィールドの地面を、まるで野球の試合でマウンドに立ったときのように軽く蹴っていた。

「ヒート。ようやくこのときが来たな。俺……すごく楽しみにしていたぜ。同じリザードンとして、それにあさポケの炎のエースであるおまえと全力にぶつかることにな……」

「俺もだ。おまえはこのバトル部の部長。無敵を誇るリザードンってところだろ？でも今日でその無敗伝説にピリオドを打たせてやるぜ！！」

ラッシュ先輩、ヒート先輩ともに目が本気だった。そして今にも体全体から炎が噴き出しそうな勢いだった。
おそらくこのバトルは互いにリザードンのプライドに賭けて本気でぶつかりあう真剣勝負なのだろう！！

「ヒート先輩！カッコイイところ見せてください！！」
「ファイトですヒート先輩！！」

僕とピカっちは立ち上がって大声援を送った！！

「いよいよだな！こりゃあ最後まで凄まじいことになりそうだな」
「そうだな。ラッシュもヒートも死力を尽くすような気がするぜ！」

スバルさん、キノガッサさんも心が燃えていた。

「あたしこういう熱いのニガテなのよね～」
「そういうこと言わないのプリムラ。ほら始まるよ？」

プリムラさんにリリーちゃんもどこかワクワク感が出始めていた。

「頑張って下さいラッシュ先輩！オレも熱い声援を送ります！」
「ヒートも全力でぶつかっていけよ！！」

「ラッシュ先輩もヒートくんもファイト～！！」

リザレ先輩、ヒイロ先輩、ダイル先輩も今か今かと対戦を待ち望んでいるように感じた。

……だが、熱く盛り上がる観客席のなか、このポケモンだけは険しい表情でバトルフィールドを見つめていた。

『ヒート、ついに始まるんだな……。お前や俺にとって失ってしまった“栄光”を取り戻す戦いが……。相手はあのラッシュ先輩だけど、必ず勝ってくれるって信じているからな……』

そう、第1回戦でモモ先輩に完敗したものの、“４番”の意地……そして強い信念をこのバトル部に示したヒート先輩の大親友ラッシー先輩だった。

『思えばあれから4年経つのか……。無敵を誇った炎のコンビが、苦難のトンネルに入ってしまってからよ……。あのバトルで負けてから……何度闘っても勝ちきれない日々が始まっているんだな』

ラッシー先輩はふとヒート先輩との出会いのことを思い出していた。

「それではこれから練習バトル第8回戦を始める！ラッシュ……それからヒート！準備は良いな？」
「俺はいつでもＯＫですゼルスさん！！」
「俺も準備万端です！！」

ゼルスコーチの言葉に2匹のリザードンは強くうなずいた！

「……それでは試合開始！！」
『ワァァァァ！！』

ゼルスコーチの言葉に再び沸き立つ観客席！

それが合図のように、今ここに熱い炎の龍たちの闘いが始まった！！！

「まずは俺からだ！！受けてみろ、“だいもんじ”！！」

ヒート先輩はバトル開始早々、気持ちが込められた強烈な炎をラッシュ先輩へと放った！！

「なんで!?ほのおタイプ相手にほのおタイプの技なんて、ダメージが無いのは目に見えてるじゃないか!?」

ムゲン先輩はこの作戦に度肝をとられた気分だった。

「甘いなムゲン。アイツの……ヒートにはそんな理屈ってのはカンケーねぇよ。お前には感じないのか?アイツはハートを全面に押し出して闘うタイプなんだよ」

驚くムゲン先輩にゴーシュ先輩がこのように説明する。

「闘う気持ちを全面に押し出し相手を圧倒していくスタイル……。その姿が彼を見る者たちの心に響き渡って、いつしかあさポケの“エース”と言わせるようになったんだろう」

「そうですねがばね先輩。オレもそう思います……。さてとラッシュ先輩はどうするんだろうな?」

がばねさんとヒイロ先輩がバトルの続きを見はじめる。

「いきなりの大技で来たか……、ならば俺はこれだ!!“フレア……ソウル”!!!」

さすがはバトルのエキスパート。ラッシュ先輩は何も動揺することなく冷静だ。

自分に迫ってくる“だいもんじ”に対して彼は小さな火の球を何発も放ったのだ！！

ドォーーン！ドォーーン！ドドォーーン！！

それも高い威力だと言うことが感じられた。“だいもんじ”をいとも簡単に防いでしまったのだから。

「マジかよ。巨大な炎があんな小さな炎に……」

「やはりラッシュの特訓量はハンパないってことか。一発も外すことなく命中させるってところが精度の高さを物語っているよな」

キノガッサさんとモモ先輩は腕組みをしながら、ラッシュ先輩のその実力の高さに改めて納得しているようだった。

一方、いきなりの大技を見事に防がれたヒート先輩。

彼は技が防がれたと同時に、次の技を発動していた！！

「“ドラゴンクロー！！”」

ヒート先輩は今度こそ技を命中させようと、先ほどよりも神経を集中させて、ラッシュ先輩に攻撃をしかける！

「またも大技で来たか！ならば俺も……“ドラゴンクロー”！！」

それでもラッシュ先輩は冷静だ。この息をつく間も無い速攻に自分も同じ技で対抗しにいったのだった。

カーーーン！！

「くっ！また防がれてしまったか！！……！？いやわずかに押されている！……なんて……なんて威力だ！」

「このまま振り切ってやる！タァァァァァァ！！」

自信のある技を防がれて焦りを見せるヒート先輩に対し、ラッシュ先輩はそのまま強引に彼を振り切り吹き飛ばした！！

「うわっ！！」

「ヒート！！」

「ヒート先輩！！」

地面にたたき付けられたヒート先輩の姿にあさポケナインが叫ぶ！！

『ヒートのヤツ……技の威力が全く落ちてないな。４年前にボロボロにされたあの時と……。だが、２度も技が防がれたことで迷いが生じなければ良いんだが……』

熱くなるあさポケナインのなか、ラッシー先輩だけは腕組みをしてじっとそのように考えていた。

《何ということだ！！両者ともに目を回して戦闘不能になってしまったぞ！！……ということはこの瞬間……このバトルカントリーイージークラスの決勝戦は大会史上初の引き分けで終了だ！！！》

『ワァァァァァァ！！』

実況の言葉に大きく沸き立つ観客席。

彼らは皆、２匹のほのおタイプの激闘に心を動かされ感動に包まれていた。

その２匹のほのおタイプのポケモン……、ヒノアラシとヒトカゲはニッコリと笑みを浮かべながらその場に倒れていた。

その姿は言葉に出さずとも、お互いに納得しあい燃え尽きたことを感じさせていた。

それから数日後、熱いバトルを繰り広げた2匹のポケモンは、出身が同じあさひタウンだったということもあり、いつしか固い友情で結ばれていた。

「ラッシー！ちょっと話があるんだけど……良い？」

「もちろんだよヒート！何かあったの？」

にやけるヒノアラシ……ラッシーの姿に、これまたニコニコするヒトカゲ……ヒート。

「実は僕……前からずっと一緒にバトルカントリーのタッグバトルで、コンビを組んでくれる相手を探していたんだ。ほらあのバトルって、一人のときよりも制覇するの難しいって言うじゃないか」

「確かにね。一人対一人なら自分の目の前の相手のことだけを考えれば良いけど、タッグバトルだったらもう一人のことと、パートナーの動きも無視出来ないからね」

ラッシーの言葉に納得した表情のヒート。

「でしょー！それでさ僕考えたんだけどヒートなら息も合いそうだし、一緒になってバトルしてくれないかなぁって思ったんだ！」

「ラッシーとかぁ……何だか面白そうだね！良いよ、一緒にコンビ組もうか！！」

弾けるようにニコニコし、ラッシーの意見に賛成したヒート。

かくして……彼らはともに闘う道を選んだのであった……！

しかしそれが皮肉にも同時に……、彼らにとって今も抜け出せない苦難のトンネルの入り口だったとは、……両者ともに気付くはずもなかった。

第９３話：「リザードンのプライドを賭けて……～立ち上がれ、炎の勇者！？～」

ヒート：「何とか頑張ってみせるぜ。ナインの期待を裏切るわけにはいかないんだ！」

ラッシー：『俺とヒートの苦難って何なのかは次回明らかになるぜ！』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6840m/

DreamBaseball～ポケモンたちが野球するよ！～

2011年11月17日19時59分発行